神宮司廳藏版

古事類苑

泉貨部
稱量部

古事類苑刊行會

古事類苑

泉貨部目錄

泉貨部七

紙幣

古事類苑

泉貨部一

錢上

古事類苑

泉貨部一

錢上

錢ハゼニト云フ、錢ノ字ノ古音ナリ、鵝眼ト云ヒ、青蚨ト云ヒ、鳥目ト云ヒ、青銅ト云ヒ、用途ト云ヒ、用脚ト云ヒ、料足ト云フハ、皆異稱ナリ、此ヲ計フルニ一錢ヲ文ト云ヒ、十錢ヲ匹ト云ヒ、百錢ヲ結ト云ヒ、千錢ヲ貫ト云フ、而シテ文ト貫トハ通常ノ名ニシテ、文ハ貫ノ下ニモ加フルナリ、又錢ヲ貫クニ索ヲ以テシ、收藏ニ便スル者ヲ繦ト云ヒ、又貫ト云ヒ、緡ト云フ、國語ニ古ハツラト云ヒ、後ニサシト云フ、上古ハ無爲ニシテ、事簡易ナリシカバ、交易ニハ互ニ物品ヲ以テシ、貨幣未ダ起ラズ、顯宗天皇二年ノ紀ニ、稻斛銀錢一文ノ文アリ、錢ノ史ニ見ユル是ヲ始ト爲シ、亦銀錢ノ始ト爲ス、天武天皇ノ紀ニハ、銅錢アリ、銀錢アリ、銅錢始テ見ユ、元明天皇元年、武藏國ヨリ和銅ヲ獻ゼシヲ以テ、元ヲ和銅ト改メ、催鑄錢司ヲ置キ、銀錢銅錢ヲ鑄ル、和同開珎是ナリ、是ヲ鑄錢ノ事ノ明ニ史ニ見エタル始ト爲ス、是ヨリ先キ持統文武ノ兩朝ニ、鑄錢司ヲ置キシ事アリシカド、天武ノ朝ノ錢ト共ニ、一モ存セルヲ見ザルノミナラズ、昔日ニ存セシノ迹ヲモ見ズ、顯宗ノ朝ノ錢ト稱スルモノハ之アリ、但シ據ルベキ確徵ヲ得ズ、唯和銅ノ兩錢ハ、今尙ホ往々目擊スル所ナリ、淳仁天皇ノ天平寶字四年、金銀銅ノ三種ノ錢ヲ鑄ル、金ヲ開基勝寶ト云ヒ、銀ヲ太平元寶ト云ヒ、銅ヲ萬年通寶ト云フ、金錢ヲ鑄ル此ニ始マル、新錢ハ舊ノ十ニ當テ、銀ハ新ノ十ニ當テ、金ハ銀ノ十ニ當テ、舊錢ト並ビ行フ、爾後新鑄アル每ニ、多ク此當十ノ制ヲ

用キタリ、原來鑄錢ノ事ハ、支那ニ依リシナレドモ、金銀ヲ以テシテ之ヲ通用ノ貨幣ト爲シシハ、我國ノ發明カ、或ハ別ニ本ヅク所アリシカ詳ナラズ、是ヨリ後、稱德天皇ノ神功開寶、桓武天皇ノ隆平永寶、嵯峨天皇ノ富壽神寶、仁明天皇ノ承和昌寶、淸和天皇ノ饒益神寶、貞觀永寶、宇多天皇ノ寬平大寶、醍醐天皇ノ延喜通寶、村上天皇ノ乾元大寶アリ、皆銅錢ナリ、而シテ承和乾元ニハ、又鉛錢アリ、鉛錢此ニ始マル、其後久シク鑄錢ノ擧ナカリシガ、後醍醐天皇ノ中興ニ至リ、建武元年、乾坤通寶ヲ鑄テ、兼テ紙錢ヲ行フ、是レ我國紙幣ノ始ナリ、事ハ紙幣篇ニ見ユ、而シテ乾坤通寶ノ今日ニ存在セザルハ、其詔勅ヲ下シヽノミニシテ、實ハ未ダ其事ヲ擧グルニ及バザリシカ、又ハ鑄錢ノ數鮮少ニシテ傳ハラザルカ、考フルニ由ナシ、爾後又鑄錢ノ事絕エシガ、後陽成天皇ノ朝、豐臣氏ノ時ニ至リ、天正十五年、天正通寶ヲ鑄、文祿元年、文祿通寶ヲ鑄、同天皇ノ朝、德川氏ノ時、慶長十一年、慶長通寶ヲ鑄、後水尾天皇ノ朝、元和三年、元和通寶ヲ鑄ル世ニ或ハ天正通寶以下ノ四錢ヲ以テ、正用品ニ非ラズト爲ス、明正天皇ノ寬永十三年、德川家光ノ時、寬永通寶ヲ鑄、且ツ諸國ニ令シテ、官鑄ニ倣ヒ之ヲ造ルコトヲ得シム、此ニ於テ、錢遍ク海內ニ行ハレタリ、其後寬文三年ヨリ天和三年ニ至ルマデ、江戶龜戶ニ於テ亦之ヲ鑄ル、是ヲ文錢ト云フ、其形式及ビ錢文、寬永ノ舊ニ據リ、背文ニ文ノ字アリ、因テ之ヲ文錢ト稱ス、此錢ハ老中松平信綱ノ建議ヲ用キ、京都方廣寺ノ銅佛ヲ毀チテ鑄ル所ナリ、是ヨリ後德川ノ一代、常ニ所々ニ於テ鑄錢ノ事アリ、卽チ江戶ノ龜戶、深川十萬坪、淺草橋場、京都ノ七條、大坂ノ高津、山城ノ鳥羽橫大路、伏見、近江ノ膳所、坂本、攝津ノ加島、甲斐ノ飯田、相模ノ藤澤、武藏ノ押上、小梅、猿江、寂光寺、常陸ノ水戶、木崎、下野ノ足尾、陸奧ノ石ノ卷、出羽ノ秋田、佐渡ノ相川、紀伊ノ若山、宇津中ノ島、因幡ノ鳥取、肥前ノ長崎等ノ地是レナリ、德川綱吉ノ時、元祿ノ季ニ、國用匱乏セルヲ以テ、銅ニ和スルニ、鉛錫及磁器ヲ用キ、以テ物價

ノ騰貴ヲ致セリ、家宣ノ時、正德年間、寛永ノ舊ニ傚ヒ、銅質ヲ改メタレド、猶ホ舊物ニ及バザルコト遠シ、其後ニ至テハ精粗一ナラズ、其形モ大小厚薄ノ異アリ、元文元年、江戸深川十萬坪ニ於テ、鐵錢ヲ鑄ル、是ヲ鐵錢ノ始トス、明和五年、銀座ニ於テ、眞鍮ヲ以テ當四錢ヲ鑄、背ニ波文アリ、是ヲ當四錢ノ始ト爲ス、而シテ眞鍮錢ハ是レヨリ先、寛保年間、京都ノ商人、官ニ請ヒテ、元字錢ヲ鑄シヲ以テ始トスレド、官鑄ハ明和ニ始マル、凡テ寛永通寶ハ、鑄造セシ年月ノ久シキト、鑄造セシ所ノ多キトヲ以テ、其種類モ亦夥シ、故ニ背文ヲ以テ稱スルアリ、年號ヲ以テスルアリ、錢質ヲ以テスルアリ、地名ヲ以テスルアリ、人名ヲ以テスルアリ、俗稱ヲ以テスルアリ、文字錢、十字錢、小字錢、川字錢、足字錢、元字錢、長字錢、久字錢、久二錢ハ、背文ヲ以テスルナリ、正德佐字、享保佐字、元文佐字、安永佐字、享保仙字、元文仙字ハ、背文ニ冠スルニ、年號ヲ以テスルナリ、七條錢、深川錢、難波錢、鳥羽錢、猿江錢、若山錢、伏見錢、寂光寺錢、秋田錢、藤澤錢ハ、地名ヲ以テスルナリ、元文龜戸錢ハ、地名ニ冠スルニ、年號ヲ以テスルナリ、鐵錢佐字錢、眞鍮元字錢、伏見鐵錢、千字鐵錢ハ、錢質ヲ以テスルナリ、島屋錢、荻原錢ハ、人名ヲ以テスルナリ、耳白錢、淸水錢、有來錢、之呂女錢ハ、俗稱ヲ以テスルナリ、此餘尙ホ多ケレドモ、今ハ煩ハシク載セズ、寶永五年、當十大錢ヲ鑄ル、文ヲ寶永通寶ト云フ、背ノ輪郭ニ永久世用トアリ、當十錢ハ古今唯是ノミ、天保六年、當百大錢ヲ鑄ル、文ヲ天保通寶ト云フ、背ニ當百ノ字アリ、其形楕圓ナリ、當百モ楕圓モ亦此ヨリ外ニナキ所ナリ、文久三年、當四錢ヲ鑄ル、文ヲ文久永寶ト云フ、背ニ波紋アリ、寛永當四錢ニ傚フ、德川鑄錢ノ擧此ニ止マル、德川氏ニテハ、其間一地方ニノミ、特ニ許シテ鑄錢セシメシ者アリ、仙臺通寶、箱館通寶ノ如シ、仙臺通寶ハ、天明元年ヨリ、仙臺藩ニ於テ、鐵ヲ以テ撫角錢ヲ鑄ノ、之ヲ封內ニ行ヒシ者ナリ、箱館通寶ハ、安政四年、箱館ニテ鼓鑄シ、亦鐵錢ニシテ、其孔ヲ圓ニセリ、

元明天皇ノ朝、和同開珎錢ヲ鑄ルヤ、士民ハ米布等ノ類ヲ用ヰシ舊俗ニ慣ヒ、以テ便ト爲サズ、世上ニ行ハレザリシカバ、朝廷ニテハ蓄錢叙位ノ法ヲ設ケ、或ハ郡領ノ遷任ヲ聽スニ、貯錢ノ多寡ヲ以テシ、田地ヲ賣買スルハ法ノ禁ズル所ナルヲ、錢ヲ以テスル時ハ、特ニ之ヲ聽ス等ノ種々ノ權宜ノ制ヲ設ケ、以テ其途ヲ開キシカバ、錢貨ノ用漸ク廣マリ、鑄錢ノ擧モ屢アリシガ、村上天皇ノ天德以後中絶シ、民間復錢ヲ用ヰルコトヲ喜バズ、華山天皇ノ朝ニハ、錢貨ノ行ハレザルヲ以テ、奉幣使ヲ諸社諸陵ニ發シテ其流用ヲ祈リ、一條天皇ノ朝ニハ、檢非違使ニ勅シテ、錢貨ヲ用ヰザル者ヲ檢責セリ、然レドモ錢ノ世ニ有用ナル、誰カ竟ニ之ヲ覺ラザル、唯久シク鼓鑄セザリシヲ以テ、大ニ外國錢ヲ用ヰルニ至ル、抑、外國錢ヲ用ヰシ事ハ、其始ヲ詳ニセザレドモ、後三條天皇ノ延久四年ニ、交關ニ宋錢ヲ禁ズルノ勅アリ、當時其大ニ行ハレシヲ知ルベシ、爾後外國錢ノ輸入セル者多ク、海内專ラ之ヲ用ヰシガ、後小松天皇ノ應永十年、支那人、相模國三浦ノ海上ニ漂著セシニ由リ、鎌倉ノ足利氏ニテハ、其船ニ載セタル所ノ錢ヲ擧ゲテ之ヲ沒收シ、又足利幕府ニテハ、明ト通信シ、錢ヲ乞ヒテ以テ國用ヲ足シタリ、皆永樂錢ナリ、永樂錢ハ、後ニハ單ニ永錢、又ハ永ト云ヒタリ、是ヨリ後ニモ明ト往來スル事絶エザリシカバ、常ニ彼ノ錢ヲ用ヰシガ、德川幕府ニテ、寛永錢ヲ鑄ルニ至リ、其跡大ニ衰フ、永錢ノ外ニ、京錢ノ稱アリ、鐚錢ニ對シテ云ヘリ、京錢ハ京都、及ビ其以西ノ諸國ノ錢ニシテ、又精錢ト云フ、亦鐚錢ニ對スル稱ナリ、要スルニ京錢ハ、關東ニテ稱スル所ナリ、或ハ云フ京錢ハ即チ鐚錢ナラント、鐚錢ハ薄惡ニシテ、人ノ厭棄スルニ由リ名クルナリ、

錢ニ私鑄ヲ禁ズルハ律ノ制ナリ、元明天皇ノ朝ニハ、其法ノ猶ホ輕キヲ以テ、更ニ其禁ヲ嚴ニシ、其後赦令ノ出ヅル毎ニ、特ニ私鑄ヲシテ寛典ニ沾ハシメズ、嵯峨天皇ノ朝ニハ、終身配役ノ法ヲ立テタリ、而シテ淳仁天皇ノ藤原仲麻呂ニ私鑄ヲ聽シ、德川氏ノ仙臺ニ於ケル、箱

館ニ於ケルガ如キハ特例ナリ、德川氏ニテハ、贋金ヲ造ル者ヲ極刑ニ處シタレド、私鑄錢ノ事ノ聞エザルハ、當時其獲ル所ノ少クシテ、之ヲ作ス者ノ多カラザリシニ由レルナラン、

錢ヲ計スルニ丁錢九六ノ名アリ、丁錢ハ足百ニテ、百文即チ百文ナルヲ、九六ハ九十六文ヲ以テ、百文トスルヲ云フ、德川氏一代九六ヲ以テ百ト爲ス、

錢ニ金銀銅鐵鉛眞鍮アリシ事ハ上ニ言ヘリ、又紙錢アリ、(上ニ云ヘル紙錢ト異ナリ)土錢アリ、紙錢ハ紙ニ錢形ヲ印シタル者ナランカ詳ナラズ、土錢ハ即チ泥錢ナリ、祭祀ノ用ニ供スルナリ、切符割符ハ錢ニ代フルノ證票ニシテ、今ノ爲替切手ノ如シ、又玩弄錢アリ、多クハ繪錢ニシテ、玩弄ニ供スルモノナリ、又厭勝錢アリ、凶災ヲ厭シ吉祥ヲ求ムルニ供スルナリ、

名稱

〔倭名類聚抄 十一 寶貨〕錢　唐韻云、錢(初牙反、與錢同、)錢異名也、漢書志云、鏹(居兩反、訓ニ世邇都良、)

〔類聚名義抄 八 金〕錢(音前ニセニ)

〔古今和歌集 十八 雜〕家をうりてよめる　伊勢

あすか川ふちにもあらぬ我宿もせにかはり行物にぞ有ける

〔藻鹽草 十七 人事雜物〕錢

是は淵の瀬にかはるを錢(セニ)によせたる也、顯昭云、以錢爲直法之故に、せにを瀬々によせて、淵變爲瀬と云也と云々、

〔東雅 七 寶貨〕錢をぜにと云は、其字音の轉じたるなり、

〔倭訓栞 前編 十三 世〕せに　錢の音を轉せし也といへり、○中略 鑄にたねせにあり、母錢とみゆ、○中略 阿堵物を譯せり、

○按ズルニ、錢ヲセニト云フハ、センノ音ノ轉ジタルニアラズ、古音ナリ、丹波ヲタニハト云ヒ、牽牛子ヲケニゴシト云ヒ、蘭ヲラニト云フガ如シ、

〔段注說文解字十四〕錢銚也、古者田器、詩毛傳云、爾見上文銚字下、云古田器者、古謂之錢、今則但謂之銚、謂之臿、不謂之錢、而錢以爲貨泉之名、从金戔聲、詩曰、庤乃錢鎛、周頌臣工文、卽淺切十四部、一曰貨也、大徐無此四字、按貝部下曰、古者貨貝而寶龜、周而有泉、至秦廢貝行錢、檀弓注曰、古者謂錢曰泉布、周禮泉府注、鄭司農云、故書泉或作錢、外府注云、其藏曰泉、其行曰布、取名於水泉、其流行無不遍、周語景王二十一年、將鑄大錢、韋曰、古曰泉、後轉曰錢、玉裁謂、秦漢乃假借錢爲泉、周禮國語早有錢字、是其來已久、錢行而泉廢矣、昨先切、或曰、此不當有一曰貨也四字、貝下當云至秦廢貝行泉、王莽時、錢文尙曰大泉五十、曰貨泉、

〔下學集 中 器財〕鵝眼 鵝瞳四方如錢穴、故云爾、 孔方兄 錢異名也、孔穴也、錢穴四方也、兄尊敬義、 鳥目 青蚨 錢異名也、言此虫能生多子、世俗取此血以塗錢、則其錢多生子、故呼錢祝而云青蚨也、嗚呼世俗人就錢財、何其至子孫錢、子母錢亦此義也、 用途 用脚 青銅 青鳧 以上皆錢異名也

〔運步色葉集 多〕錢 鳥目 孔方兄 鵝眼 阿堵物 青蚨 要脚 青銅 御足 銅鳥 料足 孔方 用途

〔塵添壒囊抄 十〕鳥目事付鵝眼孔方兄青鳧圓等事

錢ヲ鳥目鵝眼ト云ハ何ノ謂ゾ　鳥目鵝眼青鳧ナンド、皆是料足ノ異名也、鳥ノ目ハ圓キ故ニ爾云、鳥ノ大小同ク目ノ圓ナル樣ニ、錢モ其品異ナレドモ、其形共圓キガ故也、鵝ハ瞳四方ニシテ、目ハ亦圓キ事、錢ノ圓形ニシテ、中ノ穴方ナルニ似タリ、因テ名クル也、亦孔方兄共云也、是モ孔ハ穴也、穴四方ナル故ニ孔方ト云、兄ハ唐音尊敬之義也、青鳧ヲモ錢トヨム、三敎指歸ニ、一百ノ青鳧ノ錢、常ニ懸杖頭ト云々、又青蚨共書ク、青蚨ヲバ水虫也ト釋セリ、然ルヲ錢名トスル事ハ、此虫能ク多子ヲ生ム、愛ヲ以テ世俗取テ此虫ヲ塗錢、則其錢多ク生子ト云リ、故祝錢青蚨ト云也、又子母錢共云也、又錢ヲマロ共云也、常ニハ其形ノ以圓云也ト思ヘ共、其由有テ云也、漢書ニ、太公爲周立九府圓法云々、圓法トハ錢ノ事也、又李奇曰、圓ハ則錢也、サレバ其形ニ依テ云耳ナラズ、本說侍ル也、

〔搜神記十三〕南方有蟲名□蠋、一名蟬蠋、又名青蚨、形似蟬而稍大、味辛美可食、生子必依艸葉、大如蠶子、取其子、母卽飛來、不以遠近、雖潛取其子、母必知處、以母血塗錢八十一文、以子血塗錢八十一文、每市物或用母錢、或用子錢、皆復飛歸、輪轉無已、故淮南子術、以之還錢、名曰青蚨、

〔洞冥記四〕帝漢武帝〇升望月臺、時冥望南端、有三青鴨群飛、〇中略化爲三小童、皆著青綺文襦、合握鯨文

大錢五枚、以置帝几前、身止影動、因名曰輕影錢、

〔晉書隱逸六十四〕魯褒字元道、南陽人也、好學多聞、以貧素自立、元康之後、綱紀大壞、褒傷時之貪鄙、乃隱姓名、而著錢神論以刺之、其略曰、錢之爲體、有乾坤之象、内則其方、外則其圓、其積如山、其流如川、動靜有時、行藏有節、市井便易、不患耗折、難折象壽、不匱象道、故能長久、爲世神寶、親之如兄、字曰孔方、失之則貧弱、得之則富昌、無翼而飛、無足而走、解嚴毅之顏、開難發之口、錢多者處前、錢少者居後、處前者爲君長、在後者爲臣僕、君長者豐衍而有餘、臣僕者窮竭而不足、〇下略

〔唐書食貨四十三〕兩京錢、有鵝眼古文綖環之別、每貫重不過三四斤、至翦鐵而緡之、

〔通典食貨九〕孝莊帝〇後魏初私鑄者益更薄小、乃至風飄水浮、〇中略御史中尉高恭之又奏曰、〇中略今錢徒有五銖之文、而無二銖之實、薄甚楡莢、

〔貞丈雜記十五鳥目〕一錢を料足とも要脚とも云、女の詞におあしと云事、料は物の代物の心也、要はかなめとよみて、此物なくてはならぬ心也、足も脚もあしとよむ字、錢の世上をめぐりありく事、足あるがごとし、依之料足要脚など、云也、

〔類聚名物考調度十五寶貨〕用脚　あし

錢を用脚といひ阿之といふも、錢神論の足なくしてよく行といふによれり、

〔徒然草上〕龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民におほせて、水車を作らせられけり、おほくのあしを給て數日にいとなみ出してかけたりけるに、大かためぐらざりければ、とかく直しけれども、つひにまはらでいたづらにたてりけり、

〔伊勢兵庫助注記御産所御道具〕一ゑなのおさめやうは、其つぼの中へ御きぬ一尺、くれなゐに染て入申候、御ふでかた〴〵太平の御あし三十三、つぼのなかへ入申候、大方此分に候、

〔太閤記十六〕醍醐の花見

計錢之名

町屋有、色々の賣物をいだしおき、茶屋にやき餅有しを、御心よげに上りしかば、則おあしをと乞奉る、〇中略茶屋のか丶、廿ばかりなる二三人、兩の御手にすがり、おあし給り候へ、すまさせ給へとて、笑をふくみかけ申せば、秀吉公もことの外打ゑませ給ひつ丶、さらば算用をとげ御すまし有べきとて内へ入給ひしが、〇下略

〔小右記〕天元五年五月十八日己酉、故殿御忌日、身代以壽慶令齋食、巳時許、參東北院令修諷誦、三貫、千疋、

六月十日庚午、今日於室町、左中辨奉爲二親、圖書佛經、請七僧講演、〇中略臨曉令修青鳧十連、

〔空華日工集〕康曆二年三月二日、赴管領點心之請、〇中略令子琢磨殿、贈鞍馬一匹阿堵貳拾緡、蓋管領子息上杉武庫也、

〔戸隱神社考〕古文書　奉納戸隱山大權現神前　粤孔方五十緡爲當社修理、可奉供權現寶前者也、仍如件、　維時元祿元年戊午八月如意日　源晴信敬白

〔寒松日記〕元和元年六月廿四日江戸久兵衞來、孔楡壹緡雙樽、　九年十月廿四日、江雪持鷹繪來、卷而還之、孔楡二緡

〔大館常興日記〕二天文九年二月廿八日、一御大刀持、靑銅三千疋、越前朝倉爲年始御禮進上之、

〔杜工部詩集〕四偪側行

速宜相就飲一斗、恰有三百青銅錢、

〔倭訓栞〕中編安一あをざし〇中略　俗に錢緡を青く染たるを禮とす、よて靑ざしといひて錢の事になれる也、

〔物類稱呼〕四器用せに　畿内にて表の方をもじと云、東國にてかたと云、同く裏のかたを畿内にてぬめと云、東國にてなめと云、

〔日本書紀〕十五顯宗二年十月癸亥、宴群臣、是時天下安平、民無徭役、歲比登稔、百姓殷富、稻斛銀錢一文、牛

馬被野、
〔延喜式一神祇〕園幷韓神三座祭　錢一貫文（中略）祭料○中略已上神錢八百文（中略）所充○中略神祇官錢五百十二文已上釀神酒料
〔延喜式四十三春宮〕凡東宮初立、傾料絹一百五十匹、○中略錢百五十貫文、
〔空穗物語吹上之下〕御はかしとりいで、、大くら史生のいへに、ぜに十五貫がまちにおきにやりて、○下略
〔空穗物語國讓下〕ぜに廿くわん、ひとこにいれて、ものおほひてゆひたり、
〔大鏡序一〕まことのおやにもそひ侍らず、○夏山繁樹こと人のもとにやしなはれて、十二三までそひて侍りしかば、はか〴〵しうも申さず、たゞ我○繁樹養父は子うむわざもえらざりしに、まうの御つかひにいちへまかりしに、又わたくしにもぜに十貫を持て侍りけるに、にくげもなききちごをいだきたる女の、これ人にはなたんとなんおもふ、子を十人までうみて、これは四十たりの子にて、いとゞ五月にさへむまれてむつかしきなりといひ侍りければ、此もちたるぜにかぞへてきにしなりと、

○按ズルニ、錢ニ幾文ト稱スルハ、支那ニテ何ノ世ニ起リシニカ詳ナラズ、琱玉集ニ西施會在市、人欲見者、乃輸金錢一文、方始得見ト云ヒ、琱玉集ハ、其載セタル所ノ事實及ビ引書ニ就キテ考フルニ、南齊以後ノ編集ナルベシ、北魏ノ酈道元ガ水經ノ註ニ、漢劉寵作郡有政績、將解任去、治父老人持百錢出送、寵各受一文ト云ヒテ、劉宋ノ范曄ノ後漢書ニハ、寵各受一文ヲ、寵爲人選一大錢受之ニ作ル、佩文韻府錢字一錢ノ下ニ引ケル西晉ノ司馬彪ノ續漢書モ同ジ、戰國又ハ後漢ノ世ヨリ既ニ文ト云ヒシガ如クナレド、九章算術魏劉徽註孫子算經唐李淳風註張邱建算經北周甄鸞註ノ如キ古代ノ算書ニハ、錢幾千幾百幾十ト云ヒ、或ハ幾千幾百幾十幾錢トノミ云ヒテ、絕エテ幾文ト云フコトナケレバ、琱玉集及ビ水經ノ註ハ、其時ノ俗ニ隨ヒテ書セシモノニテモアルベシ、此ヲ以テ直ニ斷ジテ、戰國又ハ後漢ノ世ノ證トハ爲シ難カルベシ、又錢ニ幾貫ト稱スルハ、上古ハ汎ク

錢貫ヲ以テ一千枚ヲ貫クヲ云ヘルノミニテ、金千兩チ一箱ト云ヘルガ如シ未ダ之ヲ以テ錢ヲ計フル名トハ爲サヾリシガ如シ、故ニ九章算術孫子算經張邱建算經ノ如キモノニハ、千錢或ハ錢幾千幾百幾十等ト云ヒテ貫ノ名ヲ擧ゲズ、夏候陽算經張邱建算經ノ自序ニ此書ノ事アレバ、張邱建算經ヨリハ古キ書ナレド、今ノ本ニハ隋ノ創度ノ事モアリ、後人ノ攙入ナルベシ、五曹算經唐李淳風註ニハ、幾貫幾百幾十幾文等ト云ヒテ、貫ノ名アリ文ノ名アリ、前ノ三書ヨリハ後ニ出デシ書ナルベク、又ハ後人ノ攙入ナルベシ、

〔葉黃記〕寛元四年十一月廿五日庚辰、大祀已無爲事、天下大慶也、粗執申子細、兩行事辨等參入、用途不足事、各申子細、○中略前々各給廿餘萬疋、而今度再三被勘減、

〔吾妻鏡二十二〕建保四年正月廿八日壬午、始安置御本尊於御持佛堂、即有供養之儀、○中略加布施沙金五十兩、仲章朝臣持參之、請僧分口別裹物二、青鳧千疋、

〔廣韻五 五質〕匹俗作疋、譬吉切、

〔徒然草上〕眞乘院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり、いもがしらと云ものをこのみて、おほくくひけり、談義の座にても、大成鉢にうづたかく盛て、膝下に置つゝくひながら文をもよみけり、○中略師匠死にざまに、錢二百貫と、坊ひとつをゆづりたりけるを、坊を百貫にうりて、彼是三萬疋を芋頭のあしとさだめて、京なる人に預置て、十貫づゝ取寄て、芋魁をともしからずめしける程に、又こと用にもちふる事なくて、其あしみなに成にけり、三百貫の物をまづしき身にまうけて、かくはからひける、誠に有難き道心者なりとぞ人申ける、

○按ズルニ、三百貫ヲ三萬疋トスルトキハ、正シク一貫百疋ナリ、

〔相國寺供養記〕明德三年歲次壬申八月廿八日丁丑、今日萬年山相國承天禪寺供養也、○中略翌日被送御布施、

導師

鵝眼三千貫○中略

五山十刹等

各鵝眼五千疋　御馬一疋

但南禪德叟和尚、掛額法事御導師、仍萬疋云々、○下略

〔臥雲日件錄〕文安三年十二月廿一日、此方之人有可慶之事、則橫折一紙、記賀錢數、曰幾疋、凡官人騎馬射狗、以爲禳災之儀、群狗難卒獲、有取十錢捉一疋者、蓋人中最下之種、屠死馬牛爲食者是也、故一緡號百疋、十緡號千疋、此以上可知也、此亦此方俗習耳、

〔奇異雜談集三〕料足を十疋廿疋といふいはれは、犬追物の時、河原者、犬を百疋はなてば一貫文とる、五十疋はなてば五百文とるなり、犬一疋は十錢に當る、故に十錢を一疋といひ、百文を十疋といへり、是犬追物より出たることばなり、

〔貞丈雜記十五鳥目〕一鳥目壹貫文を百疋といひ、百文を十疋といふ事、鎌倉將軍の時代、北條相模入道高時、我まゝにして樣々の奢をきはめける中に、犬を多く集め、かみ合せてたのしみとす、依之近國に申付て、犬を多く求るに、月々の事なれば、後には近國に犬もなくなりしによりて、犬の代りに錢を出させて、遠國より犬を引よせけると也、かの犬の代りに出させたる錢、犬一疋の代十文づゝ出す、十疋の代百文、百疋の代壹貫文也、錢を何疋と云事、是より始るとぞ、

一鳥目幾疋と云事、前に記す如く、或は高時入道、犬を集めしより起るとも云、或は犬追物より始るとも云、按ずるに、東鑑卷三十三、延應二年庚子九月卅日庚寅の記文に云、御家人等中、任官之輩、不勤行役事、依有其恐、召進用途之由今日有評定、所謂左右衛門尉分、人別百疋左右兵衛尉分人別七十疋左右近衛將監分人別三十疋內舍人分人別廿疋等也、不供奉行幸等者、爲每年役可進濟云云、古は金子小判小粒等は無之、用途と云は用脚と云に同じ、鳥目の事也、此時既に百疋三十疋等

の稱あり、延應の年號は、高時入道の代よりは七十年程以前也、是を以て考れば、鳥目幾疋と云事は、高時の犬の事より起たるにはあらず、夫以前よりいひ始たる事也、奇異雜談の說、犬追物より始ると云を正しとすべし、

○按ズルニ、貞丈奇異雜談集ノ說ニ據タレドモ未ダ確ナラズ、恐ラクハ是准絹デ幾疋ト稱セシヨリ出タルコトナラン、

〔運步色葉集〕〔伊〕一結（ユヒ/ケツ）〔錢〕

〔古寫本節用集〕〔伊〕一緡一〆　一結〔百也〕〔セニ〕

○按ズルニ、〆ヲ貫ノ字ニ代用スルコトハ、未ダ古人ノ說ヲ得ズ、其本ヅク所ハ知ルベカラズ、試ニ思フニ、恐クハ封緘ノ〆ヨリ來レルモノカ、封緘ノ〆ハ、古クハ夕ト書ケレバ、封ノ字ノ草文ノ壞體ナルベシ、而シテ之ヲシメト云フハ、亦封緘ノ意ナルベシ、サテ錢數ノ貫モ、千文ノ錢ヲ一條ノ緡ニ貫キテ之ヲ結ブニ由リ、其初メハ一〆ト書キテ一シメト云ヒシガ、其錢ハ卽チ一貫ナルニ由リテ、直ニ一貫ト云ヒシモノカ、

〔易林本節用集〕〔伊〕一貫〔錢數〕

〔書言字考節用集〕〔七數量〕一字〔二分五釐曰二一字一〕　一枝〔又一指同、錢百文曰二一枝一〕　一緡〔錢一貫曰二一緡一〕

〔南浦文集〕〔下〕送ㇾ祝大夫赴二三途川一詩

世有二張三李四之徒一、一朝之忿忘二其身一者、與ㇾ人相鬪而有二少出ㇾ血者一、大夫以爲ㇾ汚二神廟境內一、寡以將ㇾ修ㇾ禊事一、令三其出二孔方一者、或十緡（ビン）二十緡、或五緡三緡、

〔高祖遺書〕〔五〕崇峻天皇御書　又名同地獄抄〔錄內十九〕

白小袖一領、錢一ユイ、

〔沙石集〕〔六上〕强盜之問二法門一事

此法師御房ハ、イミジキ佛法者ニテ御坐ケリトテ、大ニ隨喜シテ、ハコビケル用途十結(ゆひ)ヲバ、御布施ニ奉ルトテ弃テ歸ニケリ、

〔梅園日記　三〕錢若干字

今錢幾文を幾字といふ人あり非なり、僧景三の京華集に、慈得庵主東陽遼公首座、予故人也、壬寅之冬、有書問予安否、又孔方兄八百字、副書見贈、惠意之厚、不知所以裁也、小詩一篇、謝萬一云、兩个青錢雙白璧、一封墨蹟百黃金、曾遊二十年前事、胡蝶夢中千里心とあり、これ兩个青錢とあるは二百文なり、それを八百字といひたれば、一文は四字也、是後世は錢面に必四字あればなり、もろこしにても此定なり、自得語（三十二）云、佛印持二百五十錢示東坡曰、與爾商此一箇謎、東坡思之、少頃謂佛印曰、一錢有四字、二百五十箇錢、乃一千個字、莫是千字文謎乎、佛印笑而不答、七修類藁（二十）云、藥方中（○此下七修類藁、有一大兩、今之三兩也、蓋隋合三兩為一大兩十七字）一字者、即錢文之一字、蓋二分半也とあり、

〔一話一言　一〕賭的矢代の箬掛錢の異名

一ヲ　ハヅ　二ヲ　チ　三ヲ　山　四ヲ　リヤウヂ　五ヲ　梅花ヲカストモ　六ヲ　出
七ヲ　リヤウヂ山　八ヲ　スカヤマ　九ヲ　キワ　十ヲ　クヽリ　十五ヲ　有明十五ヤトモ　廿ヲ　ソウカウ　九十迄ヲ　一トクヽリ二タクヽリト云　百ヲ　一丁　二百ヲ　二丁ト云

〔一時軒隨筆　三〕一かけもの（○楊弓賭物）は、檀紙をも、すぎはらをも、たにざくをももちゆるなり、さて錢のときは、壹錢を餓鬼、二錢を地といひ、三錢を山といひ、五錢を於洲賀とし、十錢をくヽりといひ、二十錢を草冠といふ、百を牛とす、これ古今の世說也、

〔類聚名物考　調度寶貨　十五〕錢を數ふる異稱

所務的（今の矢代的也）に、錢を賭物にする時の辭有、（大和流弓矢に此書別に有、兵庫付矢揃と云、）此詞今も遣こと也、楊弓にてもいへり、

一錢　二錢　三錢　山（山は三の音と通へば云歟）　四錢　羽（はれ禮家に云傳ふるは、蜻蛉結を武器に用る、此虫を將軍虫と云、その羽四ツなる故云にや、出所未詳、）　五錢　梅花（或おすか）（おすか未詳、案に五十箇の轉語なるべし、新撰萬葉集に、五十をいの一言に用られたり、その轉訛なるべし、）　六錢　二山　七錢　七夕（或七騎弓）　八錢　山おすか（或谷）（鎌倉の方言に、谷をやつといふ故に、八の訓にかよへる故也、）　九錢　きは（或九騎打又三山）（きはとは十の際也、今用らるゝはつめと云に同じ、）　十錢　くゝり（括は物のつもり也）　十一錢　括のさし始　十二錢　くゝりの二　十三錢　括の山　十四錢　括の羽　十五錢　有明（十六日以後こそ在明なるに、十五日をいへるはあたらねども、云習はせし成べし、）　十六錢　いざよひ（或括の二山）　十七錢　立待の月（或括の七夕）　十八錢　居待の月（或括の谷）　十九錢　くゝりの際　廿錢　草冠（草冠は廿如此書ば、廿と云字に假たる故也、くわんをかうとのぶるは常の習也、）

此矢代的の鎌倉の時に翫びしと云傳へたるはまことにや、さらば昔の右大將家（○源賴朝）の比にはあらで、足利家京都將軍家の比、鎌倉公方のおはせし比、其後上杉家、扇谷山内に管領とて在し比の事にや有べき、

京都五山の僧、むかしは學問このみ、詩作など、心がけし故、ことに風流をことゝせしが、錢の數をよむに、異名をつけていへりとぞ、

百文　一指　一指は天龍一指揮といふより名付しなり

二百文　黃鸝　黃鸝は兩箇黃鸝鳴翠柳といふ句より名付しなり

三百文　木毬　木毬は雪峯の木毬とて手毱なり、參徒の來れば、木毬を三ッなげ出せしによて名付たり、

五百文　烟景　烟景は五湖烟景有誰爭といふ句より名付しな

壹貫文　圓相　圓相は是一圓相にて一貫なり、まろきによりてかく名付しなり、

〔倭名類聚抄　十一〕寶貨　錢（○中略）　漢書志云、鏹（居兩反、訓世邇都良、）錢貫也、

〔類聚名義抄八金〕銛（緡二正音、是錢貫、）　鏹（居兩反、セニツラ、通鏹字、）

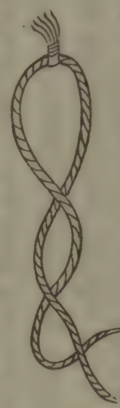
〔伊呂波字類抄世雜物〕鏹（セニノツラ、錢貫也、）　緡（同、錢貫也、）

〔童蒙頌韻眞韻十二〕銀（キン、シロカチ）　緡（ビンノ、セニツナ）　塡（チン、ミツ也）　歷（チント）　鈞（ハカリニ、卅斤也）

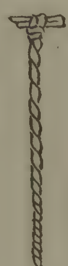
〔倭訓栞前編十三〕せにづら　今ぜにさしといふ、日向につらぬきといふ、

〔和漢三才圖會五十九金類〕繦（せにさし、キヤン、音姜）　鏹（音姜）　緡（音民）　貫（音灌）　和名世邇都良、今云世邇左之、

貫緡



百緡



〔物類稱呼四器用〕ぜに（中略）東國にて、（中略）又錢緡の事を、日向にてつらぬきと云、東國にてつらぬきと云は、出錢の事なり、

〔倭訓栞前編十佐〕さし（中略）錢の索子をいふは、刺の義なり、緡をもよめり、安南にては莉藤(ダツ)を用う、

〔類聚名物考調度十五寶貨〕貫　さし　緡

錢をつらぬく縄を緡といひ、又すなはちそのつらぬくを名として、貫とのみもいふ、錢千文をばまた一貫ともいふ也、（中略）又今俗には、錢一貫文をながくつらぬく緡(サシ)をば、すなはち貫緡ともいふ也、

〔吾妻鏡十七〕建仁二年六月廿五日戊戌、尼御臺所（源賴朝妻平政子）入御左金吾御所、是御鞠會雖爲連日事、依未覽行景已下上足也、（中略）臨昏黑事訖、於東北向御所有勸盃、（中略）酒客皆酣、知康進御前、取銚子勸酒於北條五郎時連、此間酒狂之餘、知康云、北條五郎者、云容儀、云進退、可謂拔群處、實名太下劣也、時連之連字者、貫錢貨儀歟、貫之依爲歌仙、訪其芳躅歟、旁不可然、早可改名之由、將軍直可被仰之云云、

錢始見

〔信長公記十五〕天正十年正月廿六日、森亂御使ニ而、濃州岐阜御土藏ニ、先年鳥目一萬六千貫被入置候、定而繩も腐候はん之間、三位中將信忠より、御奉行を被仰付、繋直し正遷宮〇伊勢大神宮入次第、被成御渡候へと御諚也、

〔日本書紀十五顯宗〕二年十月癸亥、宴群臣、是時天下安平、民無徭役、歲比登稔、百姓殷富、稻斛銀錢一文、

〔和漢三才圖會五十九金〕錢

按本朝錢始、未知何世、或記云、反正天皇二年、木菟宿禰大前宿禰議曰、上古以米買物、今則求玉買物、共無由、仍著文於銅、通穴貫緒用之則安、勅曰、龍能布雨、馬能負物、龍至靈不輙、以馬爲文佳、此時始造此珍、世用大足、百民皆喜、人云龍足、而後勅令定錢高下、以金錢一文買銀錢十文、以銀錢一文買銅錢十文、以銅錢一文買米一升、

〔日本書紀二十九天武〕十二年四月壬申、詔曰、自今以後、必用銅錢、莫用銀錢、　乙亥、詔曰、用銀莫止、

〔本朝寶貨通用事略〕金銀の制の事

一天武白鳳十二年、用銅錢、廢銀錢、

是よりさきの代々には、物を交易する事、米穀絹布を用ひき白鳳三年、我國の銀出しより、銀錢を用ゐられしと見えたり、其十二年に及びて、銅錢を用ゐて銀錢を止められし也、但此頃の銅は外國より來れる處なるべし、

謹按、是我朝にて銀銅を寶貨とせし始歟、

和同開珎

〔續日本紀四元明〕和銅元年五月壬寅、始行銀錢、

〔續日本紀四元明〕和銅元年七月丙辰、令近江國鑄銅錢、　八月己巳、始行銅錢、

〔續日本紀四元明〕和銅元年正月乙巳、武藏國秩父郡獻和銅、

〔歷朝詔詞解一〕和銅は爾伎阿加賀禰と訓べし、伎淸音也、こはいはゆる熟銅なるべし、熟字もに

きと訓り、

〔和事始三貨〕錢

今按ずるに、これより前錢をいさしめ給ふとも、皆異國より來りし銅を用させ給ひしならん、和銅元年には、まさしく日本に銅出來れば、和銅錢は日本の銅にて、いさしめ給ふならん、然れば則是誠に日本の錢の始といふべし、

〔文昌堂錢譜一〕正品和同開珎

右和同開珎、元明天皇和銅中所レ鑄、字文明坦、製作精妙、頗似二唐開元錢一、今世存者甚多、後世鑄レ錢、初必鑄二和同錢一、錢質大異、製作亦粗、比二之古和同一品格甚下云、

按、自レ是以前、相承用二無文錢一、往古以來、承二用漢錢一、以故秦漢以後之錢多存者、

〔泉彙上〕日本錢　凡和同錢ハ、本邦ノ銅ニテ、殊ニ錢文マデモ鑄ルノ始ナレバ、後世錢座免許アリテ始テ錢ヲ鑄ル時、必ズ先ヅコレヲ鑄ルトナリ、故ニ鑄ル所ノモノ多ク、手替リ廿餘品アリ、コレ其始ヲ祝スルノ義ナルベシ、

〔中外錢史二〕按史氏未レ書二錢文爲一レ何、然和同開珎錢、世間頗多、亦未レ聞二何時鑄一、而世久以爲二和銅年製一者、今姑從焉、其和同字義未レ詳レ之、蓋國語周語曰、財用不レ乏、民以和同、恐採二文於此一、且似下假以爲二和銅之通音上矣、或人謂和銅字省レ金者、周禮春官典同掌二六律六同之和一、鄭注云、陽律以レ竹爲レ管、陰律以レ銅爲レ管、竹陽銅陰也、引レ之以爲二省畫之例證一焉、然次下六七錢文未二必繫一二年號一、且無二一省畫者一、以知二其推按之不一レ審、

○按ズルニ、和同開珎錢ノ和同ハ、卽チ和銅ニテ、當時和銅ヲ或ハ和同ニ作リシナラン、經國集ニ、四年三月五日ノ對策ヲ載セ、僧尼令集解ニ、元年正月廿二日ノ太政官處分ヲ載セテ、並ニ和同ニ作レルニテ知ルベシ、狩谷掖齋ノ說ニ、開珎ノ珎ヲ寳ノ字ノ省字ナリト云ヘドモ、珎ハ卽

萬年通寶
太平元寶
開基勝寶

チ寶ナレバ、必ズシモ寶ノ省字ト爲スヲ要セザルニ似タリ、且ツ古來寶ヲ珤ニ作レルモノハアレド、寶ヲ珎ニ作レルコトナシ、

〔泉貨鑑 五 諸國錢〕和同開珎錢　按ズルニ、此錢徑リ八分、重サ一錢一分、面文循讀、和同開珎ト云、文字製作、唐ノ開元錢ニナラフ、今世在コト最モ多シ、

〔泉彙 上〕書錢文人名、(正史ニ載セズトイヘドモ、云傳ル所ノモノアリ、猥ニコレヲシルスニアラズ、○中略)和同開珎(藤原魚養、或云粟田眞人、後鑄ニ小野道風ノ書ト云傳ルアリ、)

○按ズルニ、以下諸錢ノ筆者ヲ擧グ徵證ナシ、信ズルニ足ラズ、

〔續日本紀 二十二 淳仁〕天平寶字四年三月丁丑、勅、錢之爲用、行之已久、公私要便、莫甚於斯、頃者私鑄稍多、僞濫既半、頓將禁斷、恐有騷擾、宜造新樣與舊並行、庶使無損於民有益於國、其新錢文曰萬年通寶、以一當舊錢之十、銀錢文曰大平元寶、以一當新錢之十、金錢文曰開基勝寶、以一當銀錢之十、

〔本朝寶貨通用事略〕金銀の制の事

一廢帝天平寶字四年、鑄新錢、○中略

謹按るに、本朝黃金を以て、寶貨として通用する事の始歟、

〔瑯玉集 十四 美人〕西施、周時越之美女也、越王勾踐以獻吳王、吳王夫差甚愛幸之、西施曾在市、人欲見者乃輸金錢一文、方始得見、出吳越春秋及史記、○又見孟子疏

〔唐書 四十三 食貨〕肅宗乾元元年、經費不給、鑄錢使第五琦、鑄乾元重寶錢、徑一寸、每緡重十斤、與開元通寶參用、以一當十、亦號乾元十當錢、

〔泉貨鑑 五 諸國錢〕萬年通寶錢　按ズルニ、此錢大ナル者ハ徑リ九分強、重サ一錢五分、小ナル者ハ徑リ八分、重サ八分、輪郭渾重、文字明坦、面文三樣アリ、年字ノ點竪ナル者、圓ナル者、横ナル者アリ、横ナル者ハ通字少シク異ナリ、銅色或ハ紫赤、或ハ白銅ノモノアリ、皆今世尙多シ、

神功開寶

〔續日本紀（稱德）二十六〕天平神護元年九月丁酉、更鑄新錢、文曰神功開寶、與前新錢並行於世、

〔泉貨鑑（諸國錢）五〕神功開寶錢　按ズルニ、此錢大小一樣ナラズ、大ナル者徑リ九分一厘、重サ一錢三分、文字明坦、製作モツトモ精シ、銅色紫赤、或ハ白銅ノ者アリ、面文開字ノ上ノ一畫ハナレタル者アリ、附タル者アリ、功字ノツクリ、力ニナリタル者アリ、小ナル者ハ徑リ七分、重七分、銅色黑濁、製作至テ陋惡ナリ、又背文爪痕アルモノアリ、皆今世モツトモ多シ、只徑リ九分以上ノモノ頗ルコレヲ得ガタシ、又一種世俗ニ島錢トセウスル者アリ、

隆平永寶

〔日本後紀（桓武）五〕延曆十五年十一月乙未、詔曰、（中略）○頃者私鑄滋起、奸鑄紛然、施之交關、既爲輕賤、宛之貯蓄、不堪寶用、卽欲禁止、卒難懲淸、事須平量、以救流弊、是以更制新錢、仍增其直、文曰隆平永寶、宜以新錢一當舊錢十、新舊兩色、兼使行用、但舊錢者始自來歲、限以四年、然後停廢、

〔泉貨鑑（諸國錢）五〕隆平永寶錢　按ズルニ、此錢大小一樣ナラズ、大ナル者ハ徑リ九分、重サ一錢三分、小ナル者ハ徑リ七分五厘、重サ七分、面文三樣アリ、平字長キ者、短キ者アリ、永字二水ナル者アリ、共ニ字畫細少ニシテ、濶緣細緣ノ二樣アリ、皆今世最モ多シ、只永字二水ナル者、頗ル得ガタキノミ、

富壽神寶

〔日本後紀（平城）十七〕大同三年五月己丑、勅、去年□用□□□百姓之間、新錢未多、宜新舊列用、暫濟民乏、

〔日本紀略（嵯峨）〕弘仁九年十一月辛巳朔、詔曰云々、改錢文曰富壽神寶、

〔泉貨鑑（諸國錢）五〕富壽神寶錢　按ズルニ、此錢大ナル者ハ徑リ九分、重サ一錢三分、面文二樣アリ、富字ノ上ノ點、並ニ口ノ上ノ一畫ナキモノアリ、壽字上ヨリ竪ニ引通シタル者アリ、小ナル者ハ徑リ七分七厘、重サ七分、面文又二樣アリ、富字ノ田ノ內、左右ヘ附タル者ト、ハナレタル者アリ、共ニ今世尙多シ、只大形ナル者、少シクコレヲ得ガタシ、

承和昌寶

〔續日本後紀（仁明）四〕承和二年正月戊辰、令鑄新錢、下詔曰、懋遷之執、標自昌言、交易而退、取諸噬嗑、則知

長年大寶

饒益神寶

鑄文入幣、興於曠時、燭影栖緡、彰於舊術、姬王圜法、有無以之化居、漢室泉刀、歛散由斯不匱、斯固邦家所要、配地馬而无彊、公私攸宜、擬天龍而自遠、然而權輕作重、沿世或愆、子去母隨、適時開務、況年祀浸久、貧幣已賤、不有平量、何救流弊、是以今制新錢、以叶通變、文曰承。和。昌。寶。以新錢之一、當舊錢之十、新之與舊、宜令並用、

〔泉貨鑑五諸國錢〕承和昌寶錢　按ズルニ、此錢大小二樣アリ、大ナル者ハ徑リ八分、重サ九分、輪郭渾重、文字明坦、製作モツトモ精シ、小ナル者ハ徑リ六分五六厘、重サ六分餘、細線薄小ニシテ、文字モマタ狹小ナリ、皆今世尙多シ、徑リ八分ナル者、コレヲ得ガタシ、又鉛錢アリ、

〔續日本後紀十八仁明〕嘉祥元年九月乙亥、令鑄新錢、下詔曰、觀夫洞入達三、重規疊矩、莫不交易以强國、轉遷以利民、故鷹楊神文、立九府之圜經、龍相天人、施五銖之異制、象乾坤之方圓、同川岳而流積、無遠不往、無深不臻、便用輕通、家國同利、但輕重有異、子母相通、影入星榆、形圖水荇、用捨之端無定、小大之變隨時、今者天賜嘉祥、曆改年號、若使銖文貨制、仍舊不改、恐乖變通之規、或罹流弊之咎、宜改舊貫於皃鑷、磨新彩於金刀、文曰長。年。大。寶。一以當舊之十、新之與舊、並用雜行、將令用而不倦、旣富之而敎之、

〔泉貨鑑五諸國錢〕長年大寶錢　按ズルニ、此錢大小二樣アリ、大ナル者ハ徑リ七分、重サ六分八厘、小ナル者ハ徑リ六分五厘、重サ五分五厘、皆今世モツトモ多シ、

〔三代實錄二淸和〕貞觀元年四月廿八日癸丑、詔曰、書稱科斗、篆籀之訓斯彰、簡號韋編、交易之方日遠、是以姜公通市井之貨、齊國大彊、鴟夷善發歛之居、陶業〈業原作𥹶今改〉爰盛、遠則赤側白金、近則鵝眼綖環、順世而異名、逐時而興利、但權輕作重、子去母隨、誠是歷年之漸深、遂知行用之彌賤、宜改舊弊更鑄新錢、勒此變通救彼流弊、文曰饒。益。神。寶。一以當舊之十、卽舊之與新、並令雜用、

〔泉貨鑑五諸國錢〕饒益神寶錢　按ズルニ、此錢大小二樣アリ、大ナル者ハ徑リ六分八厘、重サ六分、小ナル者ハ徑リ六分五厘、重サ五分五厘、皆今世尙多シ、

貞觀永寶

〔三代實錄 十七清和〕貞觀十二年正月廿五日戊寅、詔曰、夫古先哲王、所以立錢官設圜法者、以其能權斂散、通有無、遠近同施、公私共利也、但始終難一、興廢有時、非因變通、何激風化、是以輕重不定、小大无常、沿世而分形、適時而異稱、朕宣政令之簡要、嫌貨（恐）〇貨字上下有脫字之頻改、歲序雖積、錢文不新、今聞流弊尤甚、交貨多妨、蓄裏貯而難資、杖頭懸而乏用、既非泉流之喩、還作筭計之煩、宜變舊色於青蚨、驚新聽於黔首、文曰貞觀永寶、一以當舊之十、母子相隨、並共通用、庶俾下民之得宜、將招上天之冥祐、

〔泉貨鑑 五諸國錢〕貞觀永寶錢　按ズルニ、此錢徑リ六分五厘、重サ七分、面文二樣アリ、今世最多シ、

寛平大寶

〔拾芥抄 下末錢文〕寛平大寶 寛平二年五月件錢自今年至延喜六年、經十七年、

〔泉貨鑑 五諸國錢〕寛平大寶錢　按ズルニ、此錢徑リ六分五厘、重サ九分、或ハ一錢一分ノ者アリ、錢質至テ厚キモノアリ、又面文三樣アリ、皆今世尙多シ、

延喜通寶

〔日本紀略 一醍醐〕延喜七年十一月三日、詔改寛平大寶錢貨、爲延喜通寶、一以當舊之十、新與舊並令通用之、

〔泉貨鑑 五諸國錢〕延喜通寶錢　按ズルニ、此錢徑リ六分五厘、重サ七分、今世甚多シ、又鉛錢アリ、

乾元大寶

〔日本紀略 四村上〕天德二年三月廿五日、改錢貨文延喜通寶、爲乾元大寶、

〔九曆〕天德二年三月廿五日、改錢詔書奏聞、大内記俊生朝臣作之、錢文云乾元大寶、參議維時卿勘申、詔書奏聞、後給中務丞維慶、　廿八日、可新錢鑄進數並鉛錢、宜可申者、而依公卿不參不能定奏、　四月十二日、給鑄錢司改錢官符事、

〔泉貨鑑 五諸國錢〕乾元大寶錢　按ズルニ、此錢徑リ六分五厘、重サ六分、濶緣細緣二樣アリ、又鉛錢アリ、饒益錢ヨリ以下五錢、皆文字昏暗、製作精シカラズ、背文亦夷漫シテ正シカラズ、

〔九曆〕天德二年四月八日、御灌佛了後、著陣座、召因幡介長連廣業、圖書允阿保懷之、令書錢文奏聞、當時能書者、道風朝臣文正等也、道風稱目暗由、文正觸穢、仍定件兩人奏聞、以懷之爲勝、

乾坤通寶　天正通寶　文祿通寶

〔日本紀略村上四〕天德二年四月八日己未、今日右大臣〇藤原師輔於仗座仰外記、令內蠙介廣兼、圖書允阿保懷之書新錢文、但被用懷之字樣、抑當時能書、木工頭道風朝臣、大內記藤原文正也、道風眼暗不堪細字、文正觸穢、仍懷之書錢文、

〔建武年間記〕改錢事、建武元年三月廿八日有御沙汰云々、

詔居聖人之大寶、理究變通、天地之洪規事沿革、察時制法、爭拘一途、國家有錢、其來尙矣、周武闢基、九府之圜法肇興、漢文隆業、四銖之形製更彰、金鐵之品、龜龍之類、象物雖區、同歸節用、本朝垂範上世以來、屢改官文、載傳簡牘、所謂自天平寶字至于天德十有餘度、綿歷最詳、降及近古、求之外國、擯散俗間、官法如忘、頗逆彝典、復枉政令、今以新化、爲除舊弊、始造官錢、須頒天下、濟世便民、孰謂不爾、仍文曰乾坤通寶、銅楮並行、交易莫滯、仁義所原、定樂其成、告以宸衷、若稽天理主者施行、

建武元年三月日

〔中外錢史二〕右建武二〇恐元二年記所載詔書如此、而其錢成否無所據考、意是不成而歟、

〔泉彙上〕天正通寶

後陽成天皇天正十五年、豐臣秀吉治世ニ鑄、宸筆ノモノアリ、文字少シ細シ、

〔泉貨鑑十五近代和錢〕天正通寶錢　按ズルニ、此錢徑リ八分、重サ一錢一分、而文二樣アリ、又銀錢アリ、徑リ八分、重サ一錢二分、共ニ後陽成帝天正年中ニ鑄トコロト云、然レドモ今見ルトコロ樂錢ノミ多ク、座錢ト見ユルモノナシ、

〔泉彙上〕文祿通寶　同御字〇後陽成文祿元年鑄

〔泉貨鑑十五近代和錢〕文祿通寶錢　按ズルニ、此錢徑リ七分九厘、重サ一錢一分、銀錢銅錢二樣アリ、共ニ後陽成帝文祿年中ニ鑄トコロト云、今見トコロ天正錢ト同ジク、樂錢ノミ多ク、座錢ト見ユルモノナシ、

慶長通寶　元和通寶　寛永通寶

〔貨幣通考〕慶長十一年、慶長通寶を鑄る、〇中略

按るに、是頃用ゐし所の錢二品なり、永樂錢及所謂鐚錢なり、其鐚なるものは、唐宋の諸錢を本とし、過半は私鑄輕薄無文のものを雜へしもの也、故に古文書中に、鐚錢五十貫、金一兩に當ると云こと見ゆ、而して永樂錢は、一兩に一貫文を替ふ由なれば、鐚五十は正に永樂一文に當る、其薄惡推して知べし、慶長通寶は造る所多からずして、未だ全く古錢を止るには至らざりしと見ゆ、寛永の新鑄迄永樂は行れたり、蓋し永樂に雜へ行ひしならん、

〔泉貨鑑近代和錢十五〕慶長通寶錢　按ズルニ、此錢大小二樣アリ、大ナル者ハ徑リ八分、重サ一錢一分、小ナル者ハ徑リ七分五厘、重サ八分、計ルニ當時鑄トコロ、今ノ世尙多クコレアリ、

〔泉彙上〕元和通寶　後水尾天皇御宇、東照神君御治世、元和元年、

〔泉貨鑑近代和錢十五〕元和通寶錢　按ズルニ、此錢徑リ八分、重サ一錢一分、背穿ノ下、一ノ字アリ、又銀錢アリ、徑リ八分、重サ一錢二分、〇中略共ニ後水尾帝元和年中ニ鑄トコロト云、今ノ世見ルニ、樂錢ノミ多ク座錢ハ少シ、

〔大猷院殿御實紀附錄三〕本邦中古以來、みな唐山の泉貨のみを通用し、たま〳〵新鑄の事ありても、たゞ異號をのみ冒鑄し、殊に明の永樂錢は、遍く海內に流行せしゆゑ、ふるく人に田地與ふるにも、永樂錢何貫の地などいひ、果には永とさへいへば、卽ち錢の事になり來りしは、誠に騷亂打續き、典章制度、敗壞きはまりしが致す所なり、當代かゝる舊弊を改め給はんとの盛慮にや、新に芝繩手に於て鑄所を建られ、土井大炊頭利勝をもて、總督とせられ、新幣を鑄造せられぬ、其款も舊套を改めて、寛永通寶と題せられしより、はじめて唐船の持來るをまたず、はた異國の年號を鑄付し宿習もやみて、おのづから皇國の錢といふもの出來て、いにしへの和銅延喜等にならびて、百世の後に至りても廣く四海に通行して、天下の人みな其利澤を蒙らざる者なきは、全く英

偉の御識量、萬事にわたらせらるゝがいたす所なるべし、

〔知例略要集〕日本にて錢鑄年序幷寛永通寶の筆者

寛永十三年始て今の錢を鑄せしめらる、是は慶長以後、東照宮様、台徳院様の御趣意の由なり、銅拾貫目、錫六貫目、鉛四百目之割合と云、銘文の四字は、烏丸大納言光廣卿の筆、是は異國の錢には天子の筆もあれはなり、

〔農政座右四貨〕寛永通寶

〇小宮山昌秀按ニ、水戸町人佐藤氏家記曰、祖父佐藤新助、元和中ヨリ勘辨ヲ以テ、寛永二年、新錢鑄立、願江戸相濟、錢座取立、無間死ス、父庄兵衞十四歳故、姑相止、十二年又相願、江戸町人三久保屋甚右衞門ト、寛永ノ新錢元祖ノ旨願濟、水戸ニテ新錢大分造リ出シタリ、以後駿州其外四箇國ヨリ錢座願免サレ、庄兵衞及甚右衞門總座頭ニ仰付ラル所、カルメノ爲似錢所々ヨリ鑄出ニ付、寛永十七年辰八月、江戸共ニ七箇國ノ錢座御停止ニ仰付ラルトアリ、秀嘗テ郡奉行寛永ノ舊記ヲ閲セシニコノ鑄錢ノ事ハ見エタリシナリ、

〔貨幣秘錄〕通用錢之事

寛永十三年丙子六月、銀座役人秋田宗古に命せられ、芝濱手及び江州坂本に於て、新に錢座を立、始て銅錢を鑄る、是を寛永通寶といふ、

或書曰、六月朔日より通用被仰出、石谷十藏監之、一說に、此時天海僧正の吹擧に依て、鳴見兵庫賢信といふ者に、鑄錢の事を命せらる、賢信頓て芝縄手に錢座を立て、(今の新錢座なり)初て鑄錢百貫文を鑄て奉る、其賞として金二十五兩賜はれり、則寛永通寶是なり、(天海僧正吹擧に依て鑄る錢は、寛永通寶にはあらざるべし、慶長十三年、永樂通寶京錢、取交通用すべきの令ありし時、慶長通寶、元和五年に、元和通寶鑄立し事あり、今稀に世に存す、)

〔貨幣通考〕寛永十三年六月朔日、始行寛永通寶錢、

按るに、慶長以來、金銀は連年造り增されたれども、鑄錢の事なし、古錢を用ひしものと見ゆ、是時は江戶と江州坂本と二局を置き、石谷十藏と云ものに監造せしむと云、其錢は今所謂耳白の中、背に文字なきものなり、重さは概ね一匁あり、是頃は金壹兩に四貫文たる由なり、是より鐚錢永樂の諸錢は廢せし也、

〔類聚名物考 錢貨 調度十五〕寛永通寶錢　古へ永樂錢の外びたとて、雜の古錢の渡りしを通用したるに、日にそひてうせ行少くなりければ官より命有て、この錢を寛永年中に始て鑄られし也、その比天海僧正の筆迹を鑄形にうつして鑄始しとかや、是を種錢(タネセン)といふ也、今はこの錢甚すくなし、其後に不舊といへる人の筆迹をうつして鑄たり、此字甚楷正にして甚見事なり、其後また佐々木志津摩が筆迹、又南都僧のその筆迹をうつしたるもまた多しとかや、

○按ズルニ、海錄及ビ諸錢譜ニ、寛永錢ノ文字ハ、烏丸光廣ノ筆ナリトアレド明證ナシ、名物考ノ說モ亦然リ、又不舊ハ長崎屋忠七トテ、元祿中ノ人ナリ、

〔垂加草附錄上考〕本朝改元考

古錢之流落於世間、形弊文滅、完全者尠矣、今行寛永通寶、體質堅厚、輪郭周正、孔顗所謂不惜銅、不愛工者也、

〔中山傳信錄六〕市中交易、用錢無銀、○中略 其平日皆行寛永通寶錢、錢背無字、或有一文字、按日本寛永元年、爲前明天啓二年、歲在壬戌、此日本舊錢也、淺樸大小、亦與前明萬曆錢相埒、錢質皆赤銅、每百値國銀一錢二分、國朝典彙云、琉球市用日本錢、以十當一、爲近是、

〔貨幣秘錄〕寛文三年辛丑、京都方廣寺の銅佛を毀ちて新錢を鑄る、裏に文ノ字を記す、世に是を文。錢。といふ、

〔貨幣通考〕寛文中、寛永錢の吹繼あり、　按るに、京師の大佛を毀ちて鑄る所なり、故に俗に大。佛。錢。と云、其品寛永初鑄のものに同く、或は之に過ぐ、是時の錢背に文。の一字を鑄る、是寛永の吹繼な

れども、其鑄る時の驗に、面に寛の字を析き用ひ、文の一字を付して、寛文中の製なることを表す、

〔折たく柴の記下〕寛文の時、凡十六年の間、百九十七萬貫の錢を鑄出せり、其代には諸物の價賤しかりしだに、其費用に堪ずして、鑄る事を停められき、

〔吹塵錄十二〕後藤庄三郎役人手覺書付

一寛文元丑年、龜戸ニ於て、呉服所之內、重立候者六人、鑄錢引請、拾三箇年間、文錢吹立有レ之、

〔鑄錢考〕文錢

寛文八戊申年ヨリ、天和三癸亥年迄十六箇年、江戸龜戸村にて鑄レ之、呉服師加役、

後藤縫殿助　茶屋四郎二郎
龜屋源太郎　三島吉之進
上柳平左衛門　茶屋長曾

〔駿臺雜話四〕大佛の錢

寛文の比かとよ、松平故伊豆守信綱執政の時、○中略京の大佛を鑄て錢とし、天下を利益せられしこそ、先にも跡にもきかざる事なれ、其卓識誠に古今に傑出すともいふべし、御當家創業以後、文明日に開けし故に、かくのごとき人も出るぞかし、

〔類聚名物考調度十五貨貨〕大佛錢　此錢比叡山の坂本にても鑄たりし故、坂本錢ともいへりとぞ、今寛永錢の裏に、文字有をも大佛錢と云は誤にて、是は紀伊國屋文左衛門と云者有て、龜戸の錢座にて鑄たる錢なり、

〔泉貨鑑十五近代和錢〕跋寛永錢　或說ニ曰、寛文ノ頃、ヒソカニ盜ミ鑄ノ錢ナリ、後ニ其錢ヲ鑄シ人、事アラハレテ刑罰セラレタリ、享保初年ノ頃ニ至テ、其孫タル者、祖父追福ノ爲ニ、此錢ヲアマネク四方ニ需テ、一錢ヲ二文三文ニ買收、コレヲ以テ佛像ヲ鑄テ寺院ニ納メタリ、其後此錢世ニ少ン、

○中略世俗此錢ヲ以テ大佛錢ト云ハ非ナリ、其子孫タルモノ買取テ、佛ヲ鑄シ故ニ誤リタルモノナルベシ、

〔五代史十二周本紀〕世宗睿武孝文皇帝、○中略其爲人明達英果、議論偉然、卽位之明年、廢天下佛寺三千三百三十六、是時中國乏錢、乃詔悉毀天下銅佛像以鑄錢、嘗曰、吾聞佛說、以身世爲妄、而以利人爲急、使其眞身尚在、苟利於世、猶欲割截、况此銅像、豈有所惜哉、由是群臣皆不敢言、

〔昆陽漫錄四〕南宋南平王偉が傳に、武帝軍東下、用度不足、偉取襄陽寺銅佛、毀爲錢とあり、これ權時の良策なり、

〔泉貨鑑十五近代和銭〕鐚錢　太平記ニ云、山名氏京都ヘ亂入ノ時、寺院ノ銅佛ヲ毀テ、錢ヲ鑄ルトコレアリ、其錢文イマダコレヲ聞ズ、疑ラクハ是鐚ノ類ナルベシ、

○按ズルニ、今ノ太平記ニハ此文ナシ、姑ク附記シテ後考ヲ俟ツ、

〔吹塵錄十五〕寛文十戌年六月廿八日

寛永新錢之内江戸古錢を交、諸色不可賣買之、勿論錢屋兩替屋新錢ニ古錢を交、商賣仕間敷候、右之趣於相背は、急度可爲曲事者也、

戌六月

○按ズルニ、是ヨリ古錢ハ自然廢セシナルベシ、古錢ハ永樂錢京錢ノ類ナラン、

〔三王外記憲王〕鑄銅錢、和銅以鉛錫、及搗敗陶器爲末以糅之、文依猷王○德川家光寛永中所鑄錢、曰寛永通寶、而形小焉、重六分强、與寛永錢並行、列相或言、錢薄小且惡、重秀曰、幣者國家所造、雖以瓦礫代之而且可行、今所鑄銅錢雖惡薄、尚勝於紙鈔可遂行之、在朝莫敢難之、自有銅錢以來、未有若是之惡者云、

〔月堂見聞集〕正德四年九月、御殿中ニテ、御老中御列座被仰渡候趣、

今度寛永之錢之法ヲ以テ、新錢鑄立候樣ニ被仰出候ニ付、寛文之例ニ任セラレ、六人之呉服師共へ被仰付候間、右御用掛之面々被仰渡候指圖ヲ請、相勤可申者也、

午九月廿二日

後藤縫殿助　茶屋四郎次郎
龜屋源太郎　三島吉之進
上柳平次郎　茶屋長增

〔貨幣通考〕正德四年十二月、官より新錢貨渡せし價、兩に二〆八百八十文と云事、官庫新錢貨渡帳と云ものに見ゆ、同五年十一月、前同文に曰、兩に三〆四百二十五文、

○按ズルニ、此錢龜戸ニテ鑄ル所ナリ、

〔享保集成絲綸錄三十三〕元文元辰年五月

覺

一錢高直ニ付、鑄錢被仰下候間、可存其旨候事、

五月

〔泉彙上〕寛永通寳（面文手替數品アリ、中ニモ東山長壽千、藤木甲斐守、佐々木志頭摩ノ三筆アリ、又江戸芝新錢座ニテ鑄ル所ハ、南光坊天海ノ書ト云、文錢ハ林家ノ門人辻春達、寳永ノ大錢ハ、志頭摩門人京師人長崎屋不啻筆ナリ、又享保ノ初年、京師七條河原ニテ鑄ル所ノ新錢モ同筆ナリ、其後江戸深川ノ新錢、城州島羽、相州藤澤、攝州加島等ニテ鑄ル所ノ新錢モ、亦皆同筆ノ様範ヲ用フ、又背文一字錢ハ、奥御右筆蜷川八右衞門ノ筆ナリ、後此様範ヲ用ルハ、龜井戸村、及城州伏見ノ鐵錢等ナリ、又長崎ニテ鑄メル背文長字錢ハ、唐人通事高尾嘉左衞門筆ナリ、其外念佛錢ニ、遊行又靈岩寺松風上人書ト云アリ、又繪錢ニモ傳數弘法ノ大黑、探幽ノ叢銘畫、云傳ルモノ獨少カラズトイヘドモ、事附會ニ假タレバ、コレヲ略セリ、）

〔人見雜記〕錢の裏に文の字ある寛永通寳は、辻春達書するよし先考博士の物語なり、春達は辻伯書守といへる樂人の子にて狛庸と名し、御日記方勤し人なり、

〔新寛永錢譜〕文字錢　高庸書文字附、寛文三年至天和三年、江戸龜井戸所鑄、此錢毀平安方廣寺銅佛鑄之、源信綱建議也、此錢字文結體有肥瘦、肥者五種、瘦者一樣、而肥者有濶緣者細緣者二種、並背

文字在穿上、銅質精煉、黃白在二品、白色者至尠、徑八分、重一匁、又背左右、倒置取濟二字者、此天和三年冶鑄擧日所鑄云、又大樣者有二樣、徑八分五厘、重一匁餘、字文結體有肥瘦、

島屋錢　正德ノ初、京都ニテ島屋何某ト云者鑄之、或說ニ曰、寬文錢ノ初、背ノ文ノ字ナシニ鑄タル者ノ由、希ニ文字ノコレアル者アリ至テ少シ、此錢銅色、文字寬文錢ト異リ、同時鑄タル者ニ非ズ、世ニ是ヲ島屋錢ト云ヘリ、

荻原錢　元祿十二年、平安七條、及江戶龜井戶所鑄、銅色白色、徑八分、重八分、小者徑七分五厘、俗曰荻原錢、凡六種、薄肉三種、厚肉三種、

丸屋錢　寶永五年至正德四年、江戶龜井戶所鑄、銅質黃色、徑八分强、重一匁、俗曰丸屋錢、

文刮去　正德初、江戶龜井戶所鑄、刮去文字、錢幕文爲傺字、文在肥瘦二種、徑八分、重一匁、

耳白錢　正德四年至享保三年、江戶龜井戶所鑄、銅質黃色、製作精好、其鎔同文字錢濶緣者、但無幕文、徑八分强、重一匁、俗曰耳白錢、或曰、此錢一種在帶白色者疑非矣、

正德佐字　正德四年至五年、佐渡相川所鑄、背文佐字在穿上、銅色紅褐、徑八分、重九分、

享保佐字　享保十年、佐渡相川所鑄、其鎔幕文文字、錢背文佐字在穿上、銅質黃色、徑八分强、重八分、

此錢背文結體有數種、

元文佐字　元文年中、佐渡相川所鑄、徑八分强、重九分、幕文佐字在穿上、一種有幕文結體異者、

安永佐字　安永年中、佐渡相川所鑄、幕文佐字在穿上、徑八分、重八分、銅質麁惡、製作不精、又有無幕文者、

鐵錢佐字　佐渡相川所鑄、鼓鑄年未詳、徑八分、重八分、一種有無幕文者、按此錢並今存者尠矣、

佐無背錢　佐渡相川所鑄、鼓鑄年未詳、徑八分弱、重七分五厘、小者徑七分、重六分、銅質製作不精、

七條錢　享保十一年、（或曰、元祿十二年、疑非、）平安七條所鑄、銅色淡黃、徑八分五厘、重一匁、輕小者銅色紫褐、徑

八分弱、重八分、

深川錢　享保十一年至二十七年一、江戶深川所レ鑄、凡二種、銅色紫褐、徑八分强、重八分、此錢銅色純黃者至尠矣、

難波錢　享保十三年至二十五年一、攝津國難波村所レ鑄、此錢大小二種並銅色紫褐、徑九分、重一匁、小者徑八分七厘、

享保仙字　享保十三年至二十七年一、陸奧國仙臺石卷所レ鑄、銅質有二紅褐紫褐二品一、徑八分五厘、重一匁、小者徑八分、幕文仙字在二穿上一、結字大小二種、此錢非二皆有一レ幕文一、鑄所初発時、一緡百錢兩端一錢、各置二幕文仙字一者、按一種有二銅色純者一、

元文仙字　元文二年、陸奧國仙臺石卷所レ鑄、七種幕文、一種在二此中一、銅質紫褐淡黃白三品、徑八分、幕文仙字在二穿上一、說見二享保十三年所レ鑄錢一、

十字錢　元文元年五月、江戶深川十萬坪所レ鑄、銅色黃白、幕文十字在二穿上一、後止二幕文十字一、於二肉郭一如二鑿記一、不レ常二其處一、徑八分、重八分、輕小者徑七分、又有下無二幕文及肉郭之十字一者上、又此錢有二鐵錢一、摸狀同二銅錢一、

淸水錢　元文元年、山城國鳥羽橫大路所レ鑄、俗曰二淸水錢一、銅色黃濁、徑八分、重八分、稀有二白色者一、

有來錢　元文元年、山城國鳥羽橫大路所レ鑄、銅色黑濁、徑八分、重七分、製作不レ精、俗曰二有來錢一、

鳥羽錢　元文元年、山城國鳥羽橫大路所レ鑄、銅色淡黃、又白色、徑八分五厘、重一匁、小者八分、凡二種、

小字錢　元文元年、下總國小梅村所レ鑄、背文小字在二穿上一、銅色紫褐、徑八分、重八分、小者七分五厘、重不レ過二五分一、又有二一種廣穿者一、徑八分弱、重八分、此錢有二銅鐵各二種一、

猿江錢　元文元年、下總國猿江所レ鑄、徑八分、重八分、此錢二種、一銅色紅黃、一銅色淡黃帶二白色一、

若山錢　元文元年、紀州若山所レ鑄、徑八分、重七分、銅色黑濁、製作不レ佳、

宇津中島錢　元文元年、紀州宇津中ノ島所鑄、有二樣、一徑八分五厘、重九分、一徑八分強、按此錢徑八分強者、樣錢多矣、

伏見錢　元文元年、山城國伏見所鑄、銅質白色、製作不精、徑八分、重八分、一種有背濶緣者、

元文龜井戸錢　元文二年、江戸龜井戸村所鑄、有二樣、徑八分、重八分、銅質黃褐、一種白色、

寂光寺錢　元文二年、下總國寂光寺所鑄、銅色黑濁、製作不精、徑八分弱、重七分、

秋田錢　元文二年、出羽國秋田所鑄、銅色紫褐、或黑濁、其樣凡五種、徑八分、重八分、輕小者徑七分五厘、

膳所錢　元文元年、山城國膳所ニテ鑄之、

藤澤錢　元文二年、相模國足柄郡藤澤所鑄、銅色紫褐、徑八分強、重八分、

川字錢　元文二年、江戸深川小那岐川所鑄、銅色淡黃、徑八分、重九分、幕文川字在穿上、按此錢京官樣錢矣、又肉郭有川字者、如鑒記、或二、不常其處、徑八分、重八分、又一種有不置川字者、徑重並同、

加島錢　元文三年至六年、攝津國加島所鑄、徑八分、重八分、有二種、

之呂女錢　元文四年、江戸深川所鑄、俗曰之呂女錢、銅色似以鉛鐵和樸、徑八分、重八分、有二樣、此錢初免時、以一千二百當銀六十錢、一種有帶黃色者、至尠矣、

押上錢　元文四年、下總國押上所鑄、徑八分、重八分、

平井新田錢　元文四年、武州深川平井新田所鑄、銅鐵二品、

元字錢　寬保二年攝津國高津新地所鑄、銅質黃白二品模狀四種、徑八分五厘、重一分、小者徑七分半、幕文元字在穿上、

異縊元字錢　寬保初、京師商人請鑄之、一文當時行錢之三當、或曰五當疑非矣、以通用天下樣錢也、徑八分弱、重八分、幕文元字在穿上、其樣二種二樣、同寬保元年、攝津國高津新地所鑄元字錢、

足字錢　寛保二年、下野國梁田郡足尾村所鑄、凡二種、幕文足字在穿上、銅質紫褐、徑八分半弱、重一匁、小者徑七分半、

因幡錢　延享元年、因幡國鳥取所鑄、

龜井戸鐵錢　明和二年至四年冬、江戸龜井戸所鑄、徑八分半、重一匁、小者徑八分强、大樣二種、小樣二種、

長字錢　明和二年、肥前國長崎所鑄、凡二種、背文長字在穿上、銅質麁惡、製作不精、徑八分弱、重八分、

飯田鐵錢　明和二年至五年、甲斐國飯田所鑄、徑八分、重一匁、有二種、

伏見鐵錢　明和四年至六年、山城國伏見所鑄、徑八分半弱、重一匁、

四當錢　明和五年、江戸龜井戸所鑄、六月十一日初発、此錢二樣、而各二種、一徑九分强、重一匁四分、一徑九分半、重一匁四分、幕文面平地、有水波紋、一種徑一寸强者、疑京官樣錢、

同六年秋ヨリ、波數ヲヘラシテ十一波トス、

四年錢　明和五年、江戸龜井戸止鐵錢所鑄也、凡三種、徑八分弱重七分五厘、小者徑七分、

久字幷久二錢　明和六年至八年、常陸國久慈郡木崎村所鑄、徑八分、背文久字在穿上、二種又有久二二字、在穿上下者二種、明和九年以後所鑄、

千字鐵錢　明和七年、陸奥國仙臺石卷所鑄、背文千字在穿上、徑八分、重八分、又有無背文者、天明四年六月、同處所鑄、其鎔刮去千字幕文用之、徑重同千字錢、

一字錢　元文寛保ノ間ニ出、或曰紀州一ノ瀨所鑄トモ、

〔草茅危言　三〕錢幣之事

一當四ノ鍮錢ヘ、便ニシテ東土ニ遍ク行ハレテ、西ハ京ニ至テヤム、大坂ニハ初ヨリ決シテ用ヌ故、西三十三國ニハ行ハレズ、初鑄ノ明和丁亥ヨリ二十五箇年以來、既ニ此ノ如クナレバ、此後ト

テモ知ベキ耳、何故ナレバ、少シ量ニ中ラザルニ依テ也東土ハ量ニ中ヌハ知レドモ、便ナルヲ悦ビ、大坂ハ便ナルハ知レドモ、量ニ中ラザルヲ厭フ也、斯ル御治世ニ、天下ノ半ヲ分テ、用不用アルハ、甚ダ偏寳ニテ通寳ニハ非ズ、サテ細工モ磨モ甚荒コマシク、錢背ハ波文モ段々減ジテ、大ニ見苦キハ、今ノ當四トナリテ、スム程ノコト故其害ナルベシ、若ヤ良錢行レバ、鍮錢ハ民間ノ相場當三トモ下ルベシ、夫ヲ推テ當四トセバ、良錢ノ相場ノ下ルベク、彼是ト六ツカシカルベシ、故ニ良錢行ハレバ、鍮錢改鑄有テ、鍮ノ位宜カラヌハ宜キニ從ヒ、徑リ重サモ今少シ厚大ニシ、細工ニ念ヲ入レ、磨ヲヨクシ、打見ニモサテ〳〵見事ナル錢ト、人皆云程ニ仕立テ、良錢ノ當四トスベシ、官ニ費ス所アレドモ、是ニテハ億兆ノ民允當ヲ稱シテ、西國ノ裔マデ殘ラズ行ハルベシ、是即チ大ナル國益也、夫トモ度支ノ有司ニテ、苛又イナミアラバ、是モ諸侯ノ助役ヲ命ゼラレ、チウ財ヲ官ヨリ給出アラバ容易カルベシ、

〔享保集成絲綸錄三十三〕寳永五年閏正月

一今度京都錢座ニテ大錢出來候、世間通用自由之ために候間、諸國何方によらず、賣買請取方渡方無滯、只今迄之新錢にまじへ通用可申候、但大錢一錢ハ、只今迄之十錢に相おたり候積ニ候事、

一只今迄之新錢相場、金壹兩ニ錢三貫九百文より四貫文迄之積ニ定、それより高下無之樣ニ相守、大錢をさしまじへ通用可仕候事、

附大錢當四月より通用可仕候事

一大錢外ニ而似せ拵候者於有之ハ、曲事たるべき事、

以上

閏正月

〔國朝舊章錄十〕寶永五年戊子、寶永通寶の大錢を鑄させらる、一錢十錢に當る、此錢の表に寶永通寶、裏に永世久用の文字は、大久保加賀守家人にて、林大學頭門弟樋口彌門書す、錢座より謝禮として、彌門へ黃金壹枚を遣す、寬文年中、新錢鑄らるゝ時、錢の裏に文の字を弘文院林春齋門弟辻春達書して、錢座より黃金壹枚を春達へ遣せし先例有に依て也、若年寄稻垣對馬守差圖に因て也、

〔泉貨鑑近代和錢十五〕寶永通寶錢　按ズルニ、此錢徑リ一寸二分五厘、重サ二錢五分、文字狹少ニシテ、輪郭平濶ナリ、背ノ外輪ニ、永世久用ノ四字ヲ極印ニテ打タリ、又小サキ珍ノ字ノ極印ヲ添タリ、又一種徑リ一寸三分、重サ三錢二分、背ノ小サキ珍ノ字ノ極印ナキモノナリ、

〔三王外記憲王〕寶永四年〇中略荻原直秀、請鑄大錢、徑一寸二分、重當寬永二錢二分、文曰寶永通寶、背郭有四圓川、內款永世久用四字、一錢直寬永十錢、寶永五年錢成、民甚不便、商賈不取、王〇德川綱吉詔、有司、不便大錢者抵罪、商賈不取者人得告官、三令五申、民愈益不便、人亦莫敢告官、錢益不行、以終王世、文王〇德川家宣立而大錢遂廢、

〔正寶事錄〕寶永六年正月十七日
大錢通用之義、差支候義有之下々迷惑仕候由被聞召候、依之向後可相止旨被仰出候、只今迄御藏より相渡候大錢は、達々引替可申候、

〔折たく柴の記上〕同〇寶永五年閏正月廿一日、當十の大錢鑄らるゝ事を仰下さる、〇中略九月の末つかたには、重て大錢通用の事仰下され、十月に至て、〇中略商人共の大錢通じ行ふ事を難ずる由聞えて、富るも貧しきも、老少男女一人ものこらず、大錢用ふべき由の證狀を參らすべき由とて、日々に其催促あるなど云ふ程に年もくれて、〇下略

天保通寶

〔近世見聞集〕一享保八卯年、以前寶永五戊年、大錢通用之儀被仰出候得共、世間ニ不用候に付、此度御公儀樣より、大錢壹文を常之錢七文に而、御買上被成候、諸人七分ニ而御濟し難有承候よし、

〔壺箸錄（紀二實）〕寶永五年戊子、新鑄當十大錢、重二錢四分、徑一寸二分五厘、郭濶一分半、好徑三分、文曰寶永通寶、背面郭上、上下左右、凡款四圈、圈徑一分半、圈中印起永世久用四字、自上而左、旋而可讀、又有小記印珍字、識于圈旁、凡一錢當小錢十、自去年命長崎互市一行商人、七條河原設廠鑄造、許京師自今年四月朔日使用、明年己丑、新政首罷之、正月某日、令到京師、群下大悦、

〔御書付留（五）〕此度爲世上通用、新規百文錢吹方被仰付候、右百文錢壹ツを以、並錢百文代ニ相用、國國ニ至迄、有來通用錢に取交、無差支樣可令通用候也、

右之趣可被相觸候

天保六未年九月

〔貨幣秘錄〕當百錢之事

天保六年乙未九月、金座に於て當百錢を鑄る、壹枚を以、並錢百文に換ふ、世に是を百文錢といふ、（重サ五匁五分、銅七割八分、錫一割、鉛一割二分、）同十二年辛丑迄、總吹高三百九十七萬三千二百二十貫文、

〔泰平年表（大御所）〕天保六年十月一日、百文錢通用、（天○保○通○寶○）

〔貨幣通考〕天保六未年十月朔日、當百錢通用始る、

按るに、此錢重五匁七分許、橢形小判の如く、輪郭内孔は錢なり、其文天保通寶と橢形に隨而直書す、孔上天保、孔下通寶なり、背は孔上當百の二字、孔下小判の背に鑄る所、金工の花押を鑄る、省陌定陌の別なく通ず、初めは其量の當らざるを以て、鐵錢入の小錢に等く、當四よりは價安し、後には便用に馴れ當四と價を同す、

文久永寶

〔御觸留〕文久三亥年二月

此度世上通用之ため、銅四文錢吹方被仰付候間、右四文錢壹ッを以て、並錢四文錢之代りに相用、國々に至迄、在來の通用錢に取交無差支可令通用もの也、

右之通可被相觸候

二月

〔吹塵錄九〕文久錢の記

文久錢は、文久三年二月の發行にして、壹枚四文の通用と令せり、脣銅製なりといへども、其質甚だ粗惡なり、直徑曲尺八分七厘より八分八厘まで、孔徑曲尺、貳分貳厘より貳分四厘まで、重量平均壹匁、文を文久永寶といふ、裏面の波文眞鍮錢に同じ、筆者三人、書體同じからず、〇中略

筆者松平春嶽慶永　筆者板倉周防守勝靜號松叟　筆者小笠原圖書頭長行

仙臺通寶

〔天明集成絲綸錄四十四〕天明四辰年十一月

松平陸奥守領分限、通用之鑄錢形ヲ撫角、文字者、仙臺通寶といたし、右於領內當辰ゟ、五箇年之間鑄錢有之候、右者陸奥守領分ニ限、通用之筈候處、若心得違、外々ニ而通用致候者有之候はゞ、御料者最寄御代官陣屋、私領之分者、公事方御勘定奉行月番宅江可訴出候、隱置外ゟ於相知者、吟味之上急度可申付候、

右之趣御料者御代官、私領者領主地頭より可被相觸候、

十一月

右之通可被相觸候

〔東遊記七〕天明五年の比より、仙臺侯格別の台命を蒙り、錢を鑄ることをゆるさる、その形四角にして仙臺通寶の文字をすえたり、誠に規模の事と云べし、余が彼地に遊びし比は、國中に又

角錢みち〳〵て、錢の直段殊の外に賤し、日本總體通用する所の寛永通寶を、彼地にては丸錢と稱して甚稀なり、余も仙臺には、しばらくの間の逗留なりしに、初には金壹分に角錢貳貫七百八百九百にも及べり、其勢半月一月の間には三貫文より四貫文にも及ぶべき樣子なりき、〇中略此故に錢の價、日々下直になり下ることとなり、諸物はこれに應じて高直になり、何となく人の心、他國にも異也、余抔がごとき草莽の士のこゝろにては、家の御規模にして、殊にその國の寶貨なれば、後世に傳へて面目ともいふべく、別して國を富すの事なれば、寛永通寶よりも一きは宜敷造らば、錢の價も日々貴くなり、自然に通用も廣かるべしと思へども、畢竟これは机上の論なれば、又直に政をとる人の上にては、かくのごとくならざれば不叶道理もあるにや、

〔東遊雜記 四〕仙臺領に入りしより、世に通用せる錢は御法度となし、石卷にて鑄る仙臺通寶の角錢のみにて、夫も次第々々惡しくなりて、國民大に忌みきらへども、御領主の被仰付なれば、是非なく用る事なれども、相場賤しく、金壹歩に角錢四貫九百文餘にかゆる事也、夫故に仙臺領に入りしより、物の價錢にて買ふ處、右の割合故に、きのふまで七八文にて調へし草鞋も、今日は二十四五文せしなり、至て惡錢ゆゑに、百文遣ふ間には、二三錢も碎けて捨りし、角の有る故に、財布に入て、一日もかつぎ歩行ば、財布忽に破るゝと云ふ、右の通りの惡錢ゆゑ、仙臺領を離れては一錢も通用なし、是によりて仙臺領の者は、他國に出るにこまる事にて、丸錢は一錢にても惜し置て、他國へ出る時の用とす、

〔天保集成絲綸錄 九十〕文化三寅年六月

兩替屋三組
行事共

同貳番組ゟ貳拾七番組迄
行事共

仙臺通寶錢之儀者、松平政千代領分ニ限り通用之儀ニ付、餘國ニ而取遣り致間敷段、度々相觸置候處、今以寛永錢ニ取交通用致し候趣相聞、不埒之儀ニ付、此度急度可及沙汰處、右仙臺通寶錢之儀ニ付、此者共ゟ願出候趣も有之、旁左之通申渡候間、以來入念可取計候、

同番外
行事共

一部而兩替致し遣し候錢之儀、百文宛一緡限ニ、仙臺錢之有無相撰取遣致し、萬一改落し等も有之候ハヾ、相互ニ買受候もの方ニ而改出し、差戻候樣申合錢渡遣シ、尤差戻候節者、通用錢と引替可遣、是迄撰除ケ置候分ハ、願之通此節番所江可相納、以後撰出候分者、壹箇月限、其組々ニ行事共方江取集、月番之番所江納候樣可致候、且素人ゟ之拂錢、兩替屋共江買受候節、撰方之儀も前書同樣ニ致し、撰出し候仙臺錢者、此者共方江取上ゲ、右員數程者引去、代銀相渡、取上候仙臺錢者、是又組々行事共方江取集、月番之番所江相納、外商人共ゟ仙臺錢兩替屋共方江取上ゲ相納候儀、若滯儀も有之者、名前幷仙臺錢之員數等相認、其兩替屋ゟ早速可訴出候、

深川伊勢崎町久兵衛店
廻船問屋　源兵衞
外一人
船問屋　行事共

仙臺表廻船方之もの共、御當地ニ而、仙臺錢取交調物等致し候趣相聞、不屆之至ニ候間、以來船方之もの共、仙臺御當地江持出し候を見受候はヾ、右錢取上ゲ、其者召連可訴出候、

右之通申渡候間、一同急度相守可申候、以來奉行所ゟも改之もの差出穿鑿致、若等閑之取計も相聞ニおいては、急度咎可申付條其旨可存候、

〔貨幣通考〕文化三寅年四月に至り、近年他國に於て、仙臺通用錢を交へ行ふ所あり、不埒之事也、依之改のもの相廻し、其以其緡限り取上、急度申付らる、の令あり、是其錢賤く、領内に而賤く

箱館通寶

買ひ、他に於て並錢に交へ賣れば、稍利あるを以て濫に至りし也、余幼なる時、天保の初迄は頗る交り、江戸にても小錢百文之中には、必二三文宛ありしが、逐々其禁行屆、兌舗に而擇び出し、彼邸吏に附し、並錢と引替せしめしと云、其故か嘉永安政之頃は餘り多く見ず、四五千の中、一二文を見る、

〔草茅危言 三〕錢幣之事

一仙臺ニテ濫惡ノ方錢ヲ鑄出ス事願ハレ、官許有シヨリ、其藩中士大夫平民迄、大ニ疾苦ノ事ト成シ由、困窮スルヨリ目前ノ急ヲ救ントテノ計成ベケレドモ、必竟ハ其國ノ長策ニ非ズカシ、

〔慶政座右 四〕撫角錢、天明四年、仙臺石卷所鑄、鐵錢仙臺通寶 秀按、是ハ仙臺領中ノミ通用ナリ、民便トセズ、通用錢一文ノ代リニ、三錢ヲ直セシトナリ、

〔明慶錄〕安政四巳年閏五月四日

此度箱館表に於て、鐵錢鑄立被仰付、右之文字ハ、則箱館通寶と相記し、箱館蝦夷松前に限り、此節ゟ通用之筈に候、尤三箇所の外、通用難相成ハ、勿論之事に付、心得違之もの無之樣可致候、

右之趣御料ハ御代官、私領ハ領主地頭ゟ可被相觸候、

閏五月

〔貨幣通考〕安政四年丁巳閏五月六日、令於箱館府鑄鐵錢、以行本府及松前蝦夷地、文曰箱館通寶、固非以行內地、上下一體知悉、勿誤用犯禁、此錢圓孔、以別內地物、錢之圓孔、倭漢所未有也、

〔奧州會津四家合考 十二 附錄〕慶長十五年庚戌九月十日、捨永樂通寶錢用京錢、京錢者歷代之雜錢也、

〔本朝寶貨通用事略〕京錢とは、〇中略異朝代々の古錢のことなり、

〔經濟纂要前集 五 錢〕京錢、西土歷代之錢也、

〔中古治亂記七〕永樂錢渡二于日本一事

自レ爾後ハ、〇天文年間東八州ノ輩ハ、市町每ニ永樂一錢ヲ用キシカバ、近國遠國ノ者マデモ、錢ノ中ヨリ永樂ヲ撰出シ惡錢ヲ除シカバ、自錏ハ廢リテ上方ヘノミ上リテ、永樂ノ一錢計リ關東ニハ留リケル、此時ヨリシテ、錏ヲ名ケ京錢トハ云シトカヤ、

〔東武實錄三〕元和三年九月廿日、酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝、安藤對馬守重信等、東海道領主ノ輩ニ、連署ヲ以テ觸遣ハスノ趣、

急度令二啓上一候、路次筋木錢之儀、一人京。錢。四文、馬一疋八文之積、宿賃相濟すべし、其通諸宿々へ可二申觸一候、次旅人自分之薪を燒候付ては、木錢ともに右半分可レ出レ之、就レ中先年如レ被二仰出一候、料足えらび不レ申樣、堅く可レ被二申付一候、謹言、

元和三年九月廿日

安藤對馬守

土井大炊頭

酒井雅樂頭

〔香取大禰宜上給勘定目錄〕米百三拾俵壹斗四升三合但三斗七升入

此金貳拾貳兩三分京。九百文、但壹兩ニ付、貳石壹斗かい、

寛永八年未十月廿日

〔昆陽漫錄四〕京錢

萬治元年、下總國布川村、川論の繪圖の裏書に、金一兩二分、京。錢。二百五十文とあれば、關東にては、此比まで京錢と云ふとみえたり、

〔安齋隨筆二十四〕知行幾貫

室町家に至て、大明國と通商して、大明の永樂錢多く渡り來て、此方にて通用しける故、所領の高

も永樂錢にて、永幾十貫幾百貫と云、永とは永樂錢の事也、此方の錢をビタといふ、永樂錢よりは惡き錢なるに依て、金偏に惡の字を書て、鐚の字を作り出して、ビタといふ字に用たり、ビタ四文は永樂一文に當る也、今も農家の年貢帳に、永。幾貫文、鐚。幾貫文と書也、

〔泉貨鑑 十五 近代和錢〕鐚錢　按ズルニ、鐚錢ノ說區々ナリトイヘドモ、鐚錢ハ多クハ足利家治世ノ時ヨリ起レリ、其頃ハ皆唐宋ノ錢ヲ渡來シテ通用セリ、故ニ民俗、私ニ其錢文ヲ擬鑄テコレヲ挾モノアリ、皆銅色鈍赤、文字夷漫シテ、錢質至テ惡薄、今見トコロ四五品ヲ圖ス、○圖略 其餘猶多カルベシ、

○按ズルニ、鐚錢ハ永正ノ頃ヨリ、諸人ノ忌ミ嫌ヘル惡錢ト云モノニテ、大ワレ、カタナシ、コロ錢、新惡錢、鉛錢ノ類是ナリ、

〔天正十三年御遷宮記〕先年、上樣信長、三千貫文兩宮正遷宮料、びた。せん。被進之候、其口注文進上可然之由、從兩使とて、上部より其屆あり、頓則に認之、

〔徵古文書 乙集 遠江國〕遠州新居町文書 敷知郡新居 町役場藏

路次駄賃定書

定路次中駄賃之覺

一びた錢は永樂に六文立に取引可被成事

右之條々御奉行所より被仰付候間、如此書付置申候者也、如件、

慶長七年六月十日　ならや 市右衛門 花押
樽や 三四郎 花押

新井町中

〔甲斐國志 二 國法〕錢ノ通用ハ、精錢鐚錢ノ二品アリ、○中略 天正慶長ノ比、民間ニ鉛錢ヲ鑄ルト聞ケリ、

永樂錢

鐵葉皮紙ト云如ク惡物ヲ綰ス、壹文遣ニハ不レ成錢ヲ鐚ト名付ク、民間擇レ之故ニ、爭論シテ不レ穩ニ依リ、慶長中關東ノ永樂錢通用ヲ停ラレ、寛永錢被二仰付一シ以來、國用足リテ物得二其平一タリト云、本州文書ニハ、惡錢ト記セリ、勝山神主藏ムル武田ノ文書ニ、鐵炮玉ノ御用ニ候、惡錢有レ之儘、可レ被レ納候黃金成共、郡內ノ棟別成共、望次第可レ被二下置一者也、又川口御師ノ藏ムル永祿二年小山田ノ印書ニ、甲州惡錢法度並ニ新錢等ノ儀ハ一切被二停止一、中略富士參詣ノ導者、惡錢ヲ持來リ、爲二最花一神前へ投入レ候云々、從二當年一爲レ改二新錢一、參詣ノ口々へ可二居置一奉行トアリ、

〔中古治亂記 七〕永樂錢渡二于日本一事

應永十年八月、大風吹テ、堂社佛閣民家等悉顚倒シ、無異ナルハ希ナリケリ、二日ノ未刻ヨリ吹立テ、翌三日ノ巳刻マデ夥シク吹ケルニ、其日ノ亥刻ニ、唐船一艘、相州三浦崎へ漂著シタリ、于レ時鎌倉ノ公方足利左兵衛督滿兼下知シテ、印東二郎右衛門尉梶原能登守景宗三浦備前守義高ヲ奉行トシテ、被レ遂二僉議一處ニ、被レ放二惡風一著岸仕ルヨシ陳述ス、故ニ船中ノ贓物以下悉ク實檢ス、然ルニ唐朝ノ永樂錢數百萬貫ヲ積乘タリ、則彼唐船ヲ抑留シ、使者ヲ京都ニ差上セ、前將軍義滿入道道義、新將軍義持ノ方へ巨細ヲ被レ告ケルニ、唐船關東ニ著岸スル上ハ、是滿兼ノ德分タルベシト被二仰下一シカバ、船中ノ財寶共ハ不レ殘是ヲ抑留シ、唐人ニハ歸唐スベキ日數ヲ積リ、其餘分ヲ勘テ賜二兵糧、鹽味噌薪等ヲ施シテ、唐朝へ被二追歸一ケリ、其後滿兼評議シテ、若干ノ永樂錢ヲ徒ニ非レ可レ弊、於二關東一ハ、此錢ヲ以テ賣買致スベシトテ、頓テ法ヲ定メ、永樂錢ヲ用ラレケリ、然ルニ遙年ヲ經ノ後、天文十九年ノ比ハ、關東ノ諸民共、永樂錢ニ鐚ト云ヘル惡錢ヲ取雜テ、同直段ニ用キシカバ、賣買ノ輩共、在々所々ノ市町ニテ、彼惡錢ヲ撰論シ、鬪諍ヲ引出シテ、互ニ打合打擲シ、喧スカリシ形勢ナリ、天文ノ比ハ、北條左京大夫平氏康、東八州ヲ打隨へ、諸士悉ク彼ノ下知ヲ守リシカバ、氏康ノ家臣山角信濃守定信、笠原越前守康朝、其外奉行頭人等ヲ招集シ、氏康評定セラレケルハ、夫鳥目

ニハ品々ノ替リアレドモ永樂ニハ不若、自今以後、關東ニテ永樂一錢ヲ用キ遣ヒ、他錢ヲ不用樣ニ下知スベシト思フ也、一ニハ錢ノ善惡、日ヲ同シテ不可謂之、二ニハ民ノ鬪諍ヲ止ンガ爲、三ニハ賣買ノ隙ヲ不弊ガ爲也、如何思フト相談シケルニ、一座ノ輩、皆尤トゾ同ジケル、

〔北條五代記〕二關東永樂錢すたる事

見しは今、錢は唐國のたからなるを、いつの世よりか我朝へわたり、日本の寶とす、錢はめでたき子細樣々有により異名おほし、〇中略唐國の作法は、年號改元には錢をあらため、錢の中の文字、開元天德政和元祐永樂など、年號を注せり、されば錢品々有中に、取わけ永樂を關東にて重寶する事不審なり、然に唐の年代記を見るに、永樂は明朝の御代三十六年に當てはじまる、此年日本は應永十癸未の年に當る、此年八月三日唐船わがてうへ來る、扨又同き年中、日本へ御つぎものを納たると、是も年代記にあり、此舟共に彼永樂をつみ來りけるが、慶長十一丙午の年迄は二百九年になりぬ、年寄たる人いふやう、近き年迄、關東にびた永樂取まじへ、おなじねにつかひしが、在々所々において、善惡をあらそひ、ことわり止事なし、其比東八箇國のしゆご北條氏康公仰けるは、錢はしな〴〵有といへども、永樂にますはあらじ、自今以後、くわんとうにて永樂一錢をつかふべしと、天文十九戌の年高札を立られければ、關八州の市町にて永樂を用る、此義近國他國へ聞え、びたの内より永樂をえり出し用るゆゑ、びたはいつとなくかみがたへ上り、關西にてつかひ、永樂は關東にとゞまつて用る、然るに今は天下一統の世となり、東西南北にて此二錢をつかふ、され共永樂一錢のかはりに、びた四錢五錢つかふ、是により善惡をえらび萬民やすからず、此よし公方に聞召、びた一錢を用ゆべし、永樂禁制と、慶長十一年の年極月八日、武州江戸日本橋に高札たつ、それより永樂すたる、故に永樂をはかりめにかけ、鑄物師買取て萬の道具につかふ、

〔東大寺文書〕定

撰錢○中略
一地せにの內、よき永樂五文大觀嘉定、以上うらに文字のあるせに、よき錢の內たるべし、○中略
永正九年八月卅日
○按ズルニ、地錢ハ畿內邊ノ私鑄ナルベシ、其內ニ永樂アリ、

〔深谷記〕亥年
田島助十郞と申者は、甲州一本鎗小山田彌三郞と申者の首とり、其時の御褒美に、次郞兵衞に已來永。拾。貫。文。之處被下候事、
寅年
秋元上野守殿御城留主居し來候か、則五六拾已前につら役と名付、永。錢。壹文ヅヽ、三拾三鄕御取被成、御兩人樣へ御目見、已來御城御かほひ被成候、

〔貞丈雜記十五鳥目〕一知行高百石を永拾貫文と古定めし也、此永と云は永樂錢也、永樂通寶の錢なり、永樂錢は、大明の二代めの天子太宗皇帝の代、永樂九年に鑄られたる錢也、日本後小松院御代、應永十八年に當る也、將軍は義持公の代也、右の永樂錢日本に渡り來て專ら通用し、後には日本にて永樂錢を鑄て通用しける也、秀吉の代に至ても、永樂錢を鑄たりしとぞ、近き代迄、上錢中錢下錢とて三段ありしとぞ、上錢と云は上古より傳る錢、中錢といふは大明より渡りたる錢、下錢とは此方にて鑄たる錢の事なり云が、慥ならず、

〔東江書話〕京都將軍足利義滿公の時、明朝へ度々使僧を遣し、永樂錢を持來、此錢を格として、此邦にても鑄させらる、信長公太閤を歷て、國初○德川氏までも通用せり、

〔和漢三才圖會五十九金類〕相國寺中正藏主、入大明、尤善楷書、明人曰書法第一、乃令書永樂通寶錢文、○永樂元年、當我應永十年、呼永樂錢俗曰比太(ビタ)、

〔補庵京華集〕書江山小隱圖詩後

江山小隱圖詩、我養源老漁作之、蕉堅師添寫之、書乃普光仲方老人之眞跡也、可謂三絕矣、相國心月藏主者、老人寧馨也、秘之篋笥久矣、甲午載、心月適得江山圖、仍副此詩於其上、以爲一軸、裝褙完好可觀也、〇中略靈石曾謂中岩曰、汝鄉風俗不欲成人、是憲言也、老人一代僧望四朝遺老也、豈可與淇蠓湮沒無聞也哉、余雖不敏、請學其梗槩以解鄉不成人之嘲也、老人始從養源而學、此詩想此時所筆也、後遊蕉堅之門、凡所聞之道、不得於養源者、得之蕉堅也、探頤百家、游刃諸藝、其書法也當世第一、異草彙備、自成一家、求其書者戶外之屨常滿矣、夫佛廬官舍之恭布天下也、或榜殿門、或題柱壁者、盡出於老人一手、寔希世至寶也、鹿苑相公〇足利義滿丞聞其名、徵而見之、自此出入蓮府、獻納無虛日矣、應永辛巳從國信使而南遊、蓋奉鈞命也、時大明永樂紀元也、於是乎我使者不通華言、以牘奏對、天子以老人善於筆札、試於書院、遂命老人書永樂通寶四字、鑄之銅錢、書相國承天禪寺六字、綉之法被、以贈我國、國人到今榮焉、〇中略文明六年立秋後一日、萬年村僧橫川景三書、

〔本朝名僧傳〕仲方諱中正、相國寺、尤善楷書、入唐、唐人曰、書本朝第一、在唐書相國承天禪寺六字、繡于相國法被贈之、又書永樂通寶四字、鑄之錢、鹿苑、勝定、普廣之始、仕三相公、蔭涼之號、始于中正藏主、書法曰正藏主樣、

〔鳴海平藏由緒書〕覺

元祖 鳴海刑部賢勝

應永年中、足利公方勝定院義持公御代、朝鮮國より永樂錢三千貫文奉貢、是珍寶成迚、日本ニ而賞翫す、金銀との取替高直ニ而、壹貫文者金壹兩ゟ八分四ト定ムル、然れ共員數纔三千貫文ニ而、通用不足故、我朝ニ而其後永樂錢鑄足被仰付候、此節於京都錢奉行職仕候、

〔類聚名物考〕調度十五資貨 永樂通寶錢

太閤豐臣秀吉公の比、京都猥谷にて、此錢をうつして鑄られし事有といふ、其後にまた東照宮

外國錢

の御世にも、一度摸寫して鑄られし事有とかやいへども、其事實明かならず、重て可考、錢文高く、傍輪の細きが明朝の錢にて、此方にてうつせしは、字淺く輪も太しといへり、

〔法曹至要抄中〕一錢貨出擧以米辨時一倍利事

延久〇延久原作建久、今據一本改、四年七月四日宣旨云、應自今以後永從停止宋朝錢貨事、右左大臣〇藤原師實宣、奉勅云々、自非止錢貨之交關者、爭得定直法於和市哉、仍仰檢非違使并京職、自今以後、永從停止者、

〔玉海〕治承三年七月廿六日壬午、今日召檢非違使基廣、明法博士召問沽價之間事、　廿七日癸未、基廣注申錢賣買之間事、近代渡唐土之錢、於此朝恣賣買云々、私鑄錢者處八虐、縱私雖不鑄、所行旨同私鑄錢、尤可被停止事歟、而如先日職事御教書、不可被停止之趣歟、尤無其謂事歟、基廣勘注之旨叶恐存丁、又尋見年々沽價法、天曆應和寬和延久等也此中延久尤委細、叶近世之法歟、但尙召市人可被行中沽之法歟、謂中沽之法者、賣人者口高直、買人者好減直、折中而有裁斷、謂之中沽之法也、

〔元史二百八日本〕十四年、〇至元、當我建治三年、日本遣商人持金來、易銅錢、許之、

〔武備志二百三十一四夷〕日本考

古文錢倭不自鑄、但用中國古錢而已、每一千文價銀四兩、若福建私新錢、每千價銀一兩二錢、惟不用永樂開元二種、

〔建武年間記〕改錢事　建武元年三月廿八日、有御沙汰云々、

詔、〇中略國家有錢其來尙矣、〇中略降及近古、求之外國、擅敷俗間、官法如忘、頗違彝典、復狂政令、〇下略

〔善隣國寶記下〕咨、宣德日字號勘合底簿一扇、本字號勘合八十四道、齎繳還納、書籍銅錢、仰之上國、其來久矣、今求二物、伏希奏達、以滿所欲、書目見于左方、永樂年間、多給銅錢、近無此擧、故公庫索然、何以利民、欽待周急、〇中略右咨禮部、

天順捌年捌月十三日〇寬正五年

〔善隣國寶記中〕成化五年、伏奉制書、特頒今塡勘合幷底簿等物、聖恩至重、手足失措、感戴感戴、然而弊

邑搶攘、所謂給賜等件件、皆爲盜賊所剽奪、只得使者生還而已、爰有景泰年間所頒未塡舊勘合、請以此爲照驗也、今後濫行今塡勘合者、必賊徒也、罪當誅死、抑銅錢經亂散失、公庫索然、土瘠民貧、何以賑施、永樂年間、多有此賜、記之、又書籍焚于兵火、蓋一秦也、弊邑所須、二物爲急、謹錄奏上、伏望兪容、〇中略

成化拾壹年捌月廿八日〇文明七年　　日本國

〔善隣國寶記下〕成化十四年制書幷給賜等物、一々拜納、無堪感荷之至、抑弊邑久承焚蕩之餘、銅錢掃地而盡、官庫空虛、何以利民、今差使者人朝、所求在此耳、聖恩廣大、願得壹拾萬貫、以滿其所求、則賜莫大焉、謹錄奏上、兪容惟望、　右咨禮部、

成化拾玖年癸卯春三月日〇文明十五年　　日本國臣源義政

〔奧州會津四家合考附錄十二〕永正元年甲子

天下飢饉、會津米價一升百錢、按此時錢、大觀通寶之錢也、

〔看聞日記〕永享三年七月廿八日、自高麗公方へ進物到來、鵞眼千貫、唐物重寶、濟々進云々、　六年六月一日、聞唐人今夕入洛、官人五人、乘輿騎馬雜千二三百人云々、方々道場、宿々被點被置云々、兵庫にも猶相殘云々、　五日、唐使室町殿參入之儀嚴重、申刻參、官人五人乘輿騎馬雜人等六七百人、進物辛櫃五十合、鳥籠十籠、鵞眼卅萬貫云々、樋口大宮道場爲宿、自其參入、道すがら奏樂、於馬上吹樂見物雜人群集數萬人、希代之見物也云々、委細事未聞、入江殿御所に、御喝食東御方御乳人室町殿、於御棧敷見物云々、

〔齋藤親基日記〕文正元年七月廿八日、琉球人參洛、〇中略

一進物料足一千貫、其外如先々、

〔應仁二年戊子入明記成化四年〕渡唐御荷物色々御要脚

一御鎧　一領淺黃絲

一御大刀　百振黑大面作　代百伍拾貫文
一御長刀　百枝黑漆色繪朱　代百漆拾貫文
一御鑓　百挺朱塗滅金　代百伍拾貫文
一御屏風　參雙四季草木　代百伍拾貫文
一龍御大刀　二振御鞘梨地御紋雲□□□白滅金御帶取紫□箱朱　代伍拾三貫七百文
一御硯箱　一梨地御紋月水水入岩白カ子小刀黑柄御海水　代廿四貫四百五十文
一御扇箱　一黑地上ニ龍蒔繪御扇百本入皆エリホ子　代廿三貫八百五十文
一御書箱　一朱塗御紋龍蒔畫同御書臺紗御料紙五枚　代八貫三百八十文
一御籏　一流　代一貫六百文御紋繝畫加之
一御幞　二帖　代八貫文
一馬腦　數大小貳拾
一硫磺　壹萬斤古御所之御時ハ島津エ時定院勤之部寺上使下向
一御馬　貳拾疋古御所之御時同上

已上六百九十四貫九百八十文

○按ズルニ、右ニ擧ル所ハ、足利氏ノ世ニ所謂天龍寺船ヲ差シ、明國ニ至テ交易シタル其一節ナリ、鎰以下物件ノ代價ハ、其原價ナレバ、之ヲ下文日件錄ニ照シテ、明錢ノ我邦ニ入リシハ鉅萬ノ數ナリシ事ヲ知ルベシ、享德中、專使允澎ガ入唐記ノ中ニ、太監出給價新錢三千萬宣德ト分見エ、又給價銅錢、從杭至此、計三萬貫ナド云フコトモ見エタリ、

〔臥雲日件錄〕長祿二年正月八日、等持寺首座訴、笑雲來曰、某渡唐時、持齋四扇去、一扇以代輸墨全書一部云々、日本大刀價八百、或一貫者、在彼方則一刀五貫、蓋定價也、先是自大明得六萬貫就中

五萬貫、蓋大刀之報也、一萬貫硫黃之報也、大刀惟朝廷收之、非餘人所賣買、

〔昆陽漫錄四〕物價

室町殿の比より、西土歷代の錢を精錢と云ふ、（惡錢あるによりて精錢と云へり）關東にてはこれを京錢と云へり、京室町頭に藏むる、織田殿の書物に精錢とあり、天正二十年、豐臣秀次の次船の朱印にも、一文遣の精錢とあり、成賓錄に云く、日本用中國古錢、千文價銀四兩と、これにて我國、西土の錢を使ひしこと明なれども、弘長の頃の官錢は、我國の古錢と、唐の開元通寶錢なるべし、東鑑に、弘長三年、用切錢事、可停止之事あれば、建長の比も惡錢ありて、官錢は甚だ貴きこと知るべし、憶ふに正銀一分に、官錢百文に過ざるべし、

古事類苑

泉貨部二

錢中

古事類苑

泉貨部二

錢中

〔倭名類聚抄 五職官〕鑄錢司 乃樹司漸

〔伊呂波字類抄 官職志〕鑄錢司 天武天皇六年丁丑十二月、始置此官、卽以中納言中臣意美麻呂爲長官、

〔日本書紀 三十持統〕八年三月乙酉、以直廣肆大宅朝臣麻呂、勤大貳臺忌寸八島、黃書連本實等、拜鑄錢司、

〔續日本紀 一文武〕三年十二月庚子、始置鑄錢司、以直大肆中臣朝臣意美麻呂爲長官、

〔職官志 四〕鑄錢司　自古臨時置、非恒官、持統帝八年三月、以直廣肆大宅麻呂、勤大貳臺八島、黃書本實、拜鑄錢司、此總皆云司、未分長官次官目、文武帝三年十二月、始置鑄錢司、以直大肆中臣意美麻呂爲長官、有長官則其次官等亦當有之、所謂始置者、蓋謂定員、

〔續日本紀 四元明〕和銅元年二月甲戌、始置催鑄錢司、以從五位上多治比眞人三宅麻呂任之、　七月丙辰、令近江國鑄銅錢、　二年八月乙酉、太政官處分、河內鑄錢司官屬賜祿考選、一准寮焉、

〔續日本紀 十二聖武〕天平七年閏十一月庚子、更置鑄錢司、

〔職官志 四〕鑄錢司　天平七年閏十一月復置、在其前廢也、

〔續日本紀 十二聖武〕天平九年十一月甲戌、加置鑄錢司史生六員、通前十六員、

〔續日本紀 二十八孝謙〕神護景雲元年十二月乙酉、從五位上阿部朝臣三縣、爲田原鑄錢長官、刑部大輔如故、

〔續日本紀 二十九 孝謙〕神護景雲三年三月戊寅、右中辨從五位上阿倍朝臣淸成、爲兼田原鑄錢長官、

〔中外錢史 二〕田原鑄錢司興廢未考、其地亦有類名難辨知、山城國宇治田原者、未得考索之緣、大和國添上郡田原者、在于奈良京東南山中三里許、而距山城國岡田銅山之正南三里矣、恐當此處歟、令辨官或刑部大輔兼之、則以足知非遠所、

〔續日本紀 三十七 桓武〕延曆元年四月癸亥、是日詔曰、朕君臨區宇、撫育生民、公私彫弊、情實憂之、方欲屛此興作務茲稼穡、政遵儉約、財盈倉廩、今者宮室堪居、服翫足用、佛廟云畢、錢價既賤、宜且罷造宮勅旨二省法花鑄錢兩司、以充府庫之寶、以崇簡易之化、

〔續日本紀 四十 桓武〕延曆九年十月甲午、復置鑄錢司、

〔中外錢史 二〕按近江河内兩鑪、次曰長門鑄錢、次曰押勝別鑪、皆係和同錢也、至神功錢而始有田原鑄錢之稱、然其名不久、若彼岡田錢司雖未決建置、恐和同錢晩鑄已來、兼萬年神功、殆及隆平錢者歟、其長門鑄錢亦未決起源、又錢司延曆元年之廢、九年之興、其地新舊未得辨定、

〔類聚國史 百七 職官〕延曆十七年十二月乙未、加鑄錢司史生二員、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

鑄錢司史生十員事 見任八員　入加二員

右被右大臣宣偁、奉勅依件員補之、

延曆十七年十二月廿日

〔日本後紀 二十 嵯峨〕弘仁元年十二月丙戌、鑄錢司用乘銅鑄進新錢一千卌貫、因茲鑄錢長官從五位上三島眞人年嗣授正五位下、次官從五位下大枝朝臣繼吉從五位上、自餘六位已下客作兒已上、叙位賜祿有差、

〔類聚國史 百七 職官〕弘仁四年八月丁酉、賜鑄錢官人祿有差、以進利錢也、　七年七月戊寅、廢鑄錢司、

〔中外錢史 二〕爰曰廢之者、前延暦九年所置之司、而其地未審、意是所謂岡田錢司歟、

〔類聚國史 百七職官〕弘仁九年三月庚寅、改長門國司、爲鑄錢使、定長官一員、次官一員、判官二員、主典三員、鑄錢師二員、造錢型師一員、史生五員、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

定新置鑄錢使官員事

長官一人　次官一人　判官一人　主典三人　鑄錢師二員　造錢形師一員　史生五員

右中納言兼左近衞大將從三位行春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅如右、其官位者、相准廢鑄錢司、秩限者、一同國司之法、

弘仁九年四月十五日

〔類聚國史 百七職官〕弘仁十一年二月丙戌、〇三十日省鑄錢使判官一員主典一員、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

應增加鑄錢使官員事

判官一員　主典一員

右太政官去二月十五日、〇恐去年二月十三日誤下式部省符偁、太政官去弘仁九年四月十五日騰勅符偁、件使官員、定長官一員、次官一員、判官二員、主典三員者、大納言正三位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅前件二員、宜從廢省者、今得使解偁、所行之事、非啻鑄錢、局內雜務、觸類多端、差科無人、庶事有闕、望請猶復本員者、右大臣宣、奉勅依請、

弘仁十二年七月十日

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

應省史生一員置醫師事

右得鑄錢司解偁、檢案內、此司在岡田之日、典藥醫師一人、別置司家、今醫師停罷、療治無方、望請省史生置醫師、謹請官裁者、中納言兼左近衞大將從三位行民部卿淸原眞人夏野宣、奉勅依請、

天長四年七月三日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應鑄錢司判官復舊事

右得彼司解偁、司家本判官二員、依太政官去天長二年十二月廿三日騰勅符、被減次官一員、判官一員、史生五員、而今年料之鑄、倍於前年、鑄作之事、分配人少、望請依舊加判官一員者、中納言兼左近衞大將從三位行民部卿淸原眞人夏野宣、奉勅依請、

天長五年二月十七日

〔類聚國史百七職官〕天長八年三月癸卯、鑄錢司秩期、一准諸國、

〔類聚三代格五〕太政官符

應鑄錢司秩限定六年事

右太政官去天長八年三月五日下式部省符偁、大納言正三位兼行左近衞大將民部卿淸原眞人夏野宣、奉勅件司遠置周防、赴任之吏不異國司、自今以後、秩滿解任、一准國司、但鑄錢師等非此限者、今被右大臣宣偁、奉勅鑄錢司職、此異國司、四年爲限、多累交替、宜改前符更定六年、

承和二年三月十五日

〔中外錢史二〕司遷於周防始、未審也、周防之西極、去古府三里程、吉敷郡潟上庄內有山、名鑄錢嶽、嶽下之邑、今仍傳鑄錢司村、蓋音便如須延慈、其地在官道之左、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應補雜工十二人事

鑄手五人　造錢形生四人　鐵工二人　木工一人

右得鑄錢司解偁、檢案內、造年料錢三千五百貫文之日、被給雜工八人、而今加作錢七千五百貫文、總一萬一千貫文、因玆雜工苦備、公事闕怠、望請依件加增、通前爲廿人、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、若有死闕、隨卽補之、不得輙補他色、

承和四年四月一日

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年二月乙未、周防國鑄錢司言、遷立司家東方瀉上山者許之、遂伐樹木也、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年四月癸卯、周防守從五位下丹墀眞人弟梶爲兼鑄錢使長官、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應減定官員事

主典三員（減一員、定二員、）史生四員（減一員、定三員、）長上三員（鑄錢長上二員、造錢形長上一員、）減一員（鑄錢長上、）定二員（鑄錢長上一員、造錢形長上一員、）

右得鑄錢司解偁、官人多數、充用少事、望請依件減定、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

仁壽元年八月十五日（〇文德實錄作庚子朔癸丑、）

〔類聚三代格五〕太政官符

應才長上秩六年爲限事

鑄錢師一人　作錢形師一人

右得鑄錢司解偁、件長上是終身之任、无有秩限、任此職者、亦無他望、今作鑄之生、望在長上、守待終身闕、恨無所進、望請以六年爲秩限、以勸後生、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

齊衡二年九月十九日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應依舊加置史生一員事

右得鑄錢司解偁、件史生一員、依太政官仁壽元年八月十五日符減除、今檢案內、一年作貢新錢一萬一千貫文、載船九艘、史生以上差使進上、自此之外、司中公文、觸類數多、無人繕寫、而前司不熟物情、偏稱公平、申省件員、望請依舊加置件員、勤濟公事、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

齊衡二年十一月一日

〔三代實錄清和十一〕貞觀七年九月廿六日甲辰、勅木工寮、採銅於山城國相樂郡岡田鄉舊鑄錢司止、〇止恐趾誤

十一月廿六日癸卯、勅以山城國相樂郡舊鑄錢司地二十餘町、爲採銅之地、

〔三代實錄清和十四〕貞觀九年六月九日丙子、勅山城國相樂郡舊鑄錢司地二十町、貞觀七年爲採銅地、今返賜左大臣源朝臣信、但採銅之事、依舊行之、

〔類聚三代格五〕太政官符

應周防國守兼任鑄錢司長官者四年爲秩限事

右撰格所起請偁、太政官承和二年三月十五日符偁、件司遠置周防、秩歷之期、宜定六年者、如今國守爲例兼任彼司長官、於是國守秩限四年、長官歷期六年、然則國守秩滿、長官亦停、格文與事、誠有相違、伏望令國守帶長官者、以四年爲限者、中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔三代實錄清和二十二〕貞觀十四年九月廿五日壬辰、新鑄貞觀錢文字破滅、輪郭無全、凡在賣買、嫌弃大半、譴責鑄錢司、令分明鑄作、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應減定鑄錢司工夫等事

本數八十人　今定卌八人

將領八人　造錢形生三人　鑄手三人　鐵工二人　木工二人　夫卅人

右得彼司解偁、謹案舊例、弘仁以往、以三千五百貫文爲年料、工夫之數、惱無所見、天長年中、以一萬一千貫文爲年料、承和相承、不改此數、今檢案內、太政官去承和元年十二月三日、下司符偁、得司解偁、見任將領廿人、雜工廿人、夫卅人、總八十人、而去天長九十兩年所請舊鐵、去年改鑄旣畢、然則無作物開、須停衣粮、而件等人、身直司家、遠離鄕里、停其資給、愁吟尤切、若爲處置、謹請官裁者、右大臣宣、宜給之者、今依此符、全給衣粮、論之公途、甚多其費、何者八十人工夫者、是一萬一千貫文之支度也、今以三千五百貫文爲年料、凡厥用度隨卽可減、但鑄錢之道、薪炭爲本、而樵路漸嶮、炭竈更遠、前年一日之單、當今數日之功、仍彼此折中、所定如件、望請官裁、依件減定者、左大臣宣、奉勅依請、

昌泰二年五月廿八日

〔延喜式式部十八〕凡不得周防國人任鑄錢司官人、

凡採鑄錢料銅所雜色人四人、太宰府染生一人、並預勘籍例、

凡鑄錢司考文附周防國朝集使、

〔延喜式民部二十三〕凡備中長門豐前等國、送鑄錢司銅鉛返抄者、副稅帳進之、

〔延喜式主計二十五〕凡鑄錢年料銅鉛者、備中長門豐前等國、每年採送鑄錢司、卽以司返抄勘會調庸抄帳、

銅鉛數見主稅式、

凡鑄錢司所進年料錢、隨所進數、且附綱丁收收文、至于年終令進總帳、勘會已訖、乃與返抄、

〔延喜式主稅二十六〕備後國正稅、中略○鑄錢司俸料二萬八千束、

周防國正稅、中略○鑄錢司俸料二萬八千束、

凡鑄錢司鎭守府官人已下到任之日、准國司給四分之一借貸、

〔日本紀略朱雀二〕天慶三年十一月七日戊辰、周防國飛驛、言鑄錢司爲賊被燒之由、

錢座
鑄錢地

〔職原抄下〕鑄錢司　近代常不レ任之、可レ任者官外記諸道中、當ニ其仁一歟、

長官　次官　判官　主典

〔鳴海平藏由緒書〕

治部一子六代目
鳴海兵庫賢信

浪々に而水戸ニ罷在候處、大僧正樣〇僧天海より出府仕候樣に被ニ仰遣一、治部ハ老衰仕候に付、兵庫出府仕候得バ、先祖代々錢奉行職相勤候前功に而、錢造樣可レ爲ニ鍛錬一と被レ爲ニ思召附一、寛永年中、於ニ芝網繩手一、新錢御用被ニ仰付一候由來之儀者、大猷院樣〇德川家光御瑞夢被レ遊ニ御覽一候、御夢中之次第ハ、御城より南に當て御居城替る、此所江御歩行に而被レ爲レ往との御夢、甚被レ爲レ掛ニ御氣一、春日局を以、上野天海大僧正江御考判被ニ仰遣一、大僧正御判釋の次第ハ、

御城替るハ、代(シロ)カハル也、

御歩行ハ、御兩足ニ而被レ爲レ往也、

右御夢中之御儀ニ無レ之、萬物を調候代物と申御儀也、代物ハ錢也、錢を兩足と申也國中を能走廻ると云儀を以名付也、女詞ニ御足ト申故實も此故也、又足袋を何すと不レ云、何文と申も此故なり、御夢之總體、全ク錢也、新錢を被ニ仰付一候得バ、治世之御代益泰平樂に而御子孫可レ爲ニ御繁榮一御吉事と云々、

月日　大僧正　天海

春日御局御披露

右御判釋之次第を被レ爲ニ聞召一、大ニ御感悅、御機嫌之餘りに、土井大炊頭樣へ被ニ仰遣一、重而新錢之證字、將又吹座之場所、錢造鑄物師等、大僧正可レ爲ニ御心儘一と也、右之上意を御請、東叡山之寺號と云ヒ、當時之年號と云、寛永通寶末代不レ改之錢可レ然、吹座之儀は、御瑞夢之任、方角從ニ御城一南之方ニ當テ場所御見立、芝網繩手吹座今新錢座古名也此節土井大炊頭樣へ被ニ召出一、錢座頭本人ニ被ニ仰付一、則試錢有

貫文鑄立奉差上候處、被備上覽御機嫌宜、爲御褒美御椊肴御時服幷金貳拾五兩拜領仕候、此節被下置候貳拾五兩は、錢百貫文之積ニ而、四貫文ニ金壹兩之兩替被仰付候、其上諸國錢座爲司、寬永天下平等通用、重サ壹錢八分五厘、焙出喰長錢壹貫文ニ八百五拾目ニ鑄廣メ可申旨、尤其節古錢御停止被仰付候段被仰渡候、

〔貨幣秘錄〕寬永十三年丙子六月、銀座役人秋田宗古に命せられ、芝濱手及び江州坂本に於て、新に錢座を立、始て銅錢を鑄る、是を寬永通寶といふ、○中略此後元文に新金銀を改め鑄られしより、金銀の數多く、錢相場高直に成しより、江戸、大坂、長崎、仙臺、秋田、其外所々に鑄錢座を立られ、專ら新錢を鑄られしが、延享二年乙丑に至りて、悉く錢座を廢せられき、

按に、此內大坂鑄錢座は、寬保元年辛酉五月より延享二年乙丑に至り、凡五年にして廢し、仙臺鑄錢座は、元文二年丁巳五月より延享二年乙丑五月に至り、凡九年にして止む、江戸鑄錢座は、元文元年丙辰五月より延享元年甲子に至り、凡九年にして廢せられき、

明和二年乙酉七月、後藤庄三郎に命せられ、龜井戸村にて六千四百坪の地所を賜ひ、鑄錢定座を立られ、○中略安永三年丙午九月に至りて、鑄錢座を廢せらる、凡十年、

明和九年壬辰九月、向後金銀座之外、新規錢座難成旨令せらる、

〔奉使小錄〕同郡○信濃國筑摩ヨリ出セル定書ニテミレバ、寬永中、信州松本ニテモ錢ヲ鑄シトミエタリ、其文左ノ如シ、是ハ人ノ知ザル事ナリ、

定

於信州松本、新錢座望申ニ付而、從其方書付乞取申付候、無相違急度用意候而可被鑄立候、此口者餘人望申共、一口之外申付間敷候、兵粮之儀は、相場次第以相對可申付候、炭薪未進有之候はゞ、催

促人共へかし可申候以上、

寛永拾三丙子極月廿七日　梅半右衛門

香西茂左衛門

乙部九郎兵衛〇已下四人略

今井勘右衛門殿

〔三貨圖彙錢四〕奉使小錄ニ云、〇中略按ニ右連判ノ七人ハ、皆雲州侯ノ家老ナリ、元祖直政君ハ、中納言秀康卿ノ四男ニシテ、寛永十五年今ノ所ヘ遷ラル、其已前ハ信州松本ノ城主也、其砌願ハレ領國ニテ新錢ヲ鑄ラレシヤ、又公儀ヨリ仰付ラレシニヤ不詳、

〔鑄錢考〕寛永通寶　寛永十三丙子年五月始テ鑄之

江戸淺草橋場　秋田屋小左衛門　末吉與右衛門　丸田屋文右衛門

江戸芝新錢座　鈇屋又右衛門　郡司兵右衛門

〔教令類纂初集錢六十六〕寛永十四丁丑年八月

錢鑄所

水戸　仙臺　吉田　松本　高田　長門　備前　豐後　中川内膳領内

一只今迄被仰付候分に而は、諸方へ弘り兼候之間、代物澤山鑄させ、其國は勿論、他國江も御定之如く、金壹兩に四貫文、壹分に壹貫文宛、拂候樣に可申付候、

一寛永之新錢、本を越候而如此いさせ可申事、

一錢鑄申候者聞立、領內勝手克所々に而、可被申付候事、

寛永十四年丑八月

〔水戸紀年一〕寛永十二年乙亥、今年寛永通寶ヲ鑄ル、向井町片町烟草町ノ裏町〇今ニ錢屋ト云鑄錢座ニ

ナル、

寛永十四年丁丑、水戸ニテ錢ヲ鑄ル、錢文寛永通寳、世コレヲ水戸手ト云フ、

寛永十六年己卯、新錢ヲ鑄ル、下町八丁目裏ニ一箇所、上町ニ一箇所、此二箇所ニテ鑄ル、

寛永十七年庚辰、鑄錢上町下町等ト數、大抵毎月二三百石ホドナリ、

〔桃蹊雜話三下〕錢屋ノ鑄錢ノコト、寛永十二年ヨリ同十七年マデ鑄ル、佐藤庄兵衞ト云商人ナリ、寛永錢ヲ鑄シハ是ヲ始トス、

〔吹塵錄十二〕手覺之儘奉入御覽候書付

一寛文元丑年、龜戸ニ於て、呉服所之内、重立候者六人、鑄錢引請、拾三箇年間、文錢吹立有之、

一元祿十四午年、紀伊國屋文右衞門鑄錢引請、寳永通寳裏ニ、世用永久之文字有之、拾文之大錢、龜戸前同所ニ於テ吹立有之、又寳永五子年、丸屋三郎左衞門、樋口善兵衞引請、鑄錢有之、

一正德四午年、龜戸同所ニ於テ、呉服所六人之者引請、鑄錢有之、

一享保年中、深川拾萬坪鑄錢有之、同年大坂幷仙臺南部ニ而も鑄錢有之由、引請之もの不相知、

一元文年中、左之通鑄錢有之、

龜戸　三木彥左衞門

拾萬坪　井筒屋五郎左衞門
　橋本平七
　千田庄兵衞
　丹波屋五郎兵衞

小梅　野島屋
　南部屋但名不相知

三十三間堂　鼠　屋 但同断

京都地所不相知 長島屋忠七

橋本平七

野州足尾　千田庄兵衛

丹波屋五郎兵衛

大坂高津浦口　紀州　秋田　日光　甲州　佐州

但此分引請等不相知

後藤庄三郎役人
山本運八郎

右之通御座候以上

申五月

〔享保集成絲綸錄 三十三〕元文三午年八月

一鑄錢座相願候もの在之においてハ、銅山之出銅、銅座江差出候而、銅出方等吟味を請、其趣を銅座より奉行所江相達候上、鑄錢可致由之願ニ候ハヽ可遂吟味候、右之通ニ無之願ハ、一切取上不申事、

八月

右之通町中江相觸可申候

〔金銀御吹替次第御觸御書付十二〕元文四未年三月、此度柳島ニ而新錢座、左之面々へ被仰付候事、

後藤源兵衛　山田忠右衛門
永瀬權右衛門　中島兵左衛門
池田茂兵衛　上島七郎兵衛

〔享保集成絲綸錄 三十三〕元文四未年五月

一近頃鑄錢相願候者、手本錢拵、錢座之儀相願候、向後鑄錢相願候共、手本錢拵不ㇾ申可ㇾ願出候、吟味之上、手本錢差出させ候儀も候ハヽ、此方より可ㇾ申付候、若猥ニ手本錢等拵候儀相知候ハヽ、其所之名主五人組可ㇾ爲ㇾ越度候間、自分ニ而鑄錢不ㇾ仕候樣可ㇾ相改候事、

五月

右之條々町中可ㇾ相觸候

〔正寶事錄〕元文四年十二月六日

此度錢座一箇所、明迹有ㇾ之候に付、鑄錢望之ものハ、來る廿五日まで之內、石河土佐守樣〇町奉行神尾若狹守樣〇勘定奉行御役宅へ、書付可ㇾ持參候、右日限後申出候分ハ取上不ㇾ申事、

一請負人幷金元證人共、願書致ㇾ印形ㇾ可ㇾ持參事、

一出銅有ㇾ之新規見ㇾ立銅山、御用銅に當置不ㇾ申山を申立相願可ㇾ申候、且又銅座より、地銅買入可ㇾ申分も書上可ㇾ申事、

右之通相心得、銅錢成とも、づく錢成とも、請負可ㇾ申出候、但一箇年吹高、幷請負年季、御用錢兩替等之義も書記可ㇾ差出候、此度逐一吟味之慥に相續可ㇾ致ものへ可ㇾ申付候、前後之願差別可ㇾ申出候、

十二月六日

〔金銀御吹替次第十二御觸御書付〕明和二酉年九月

申渡

當時世上錢拂底ニ而、末々難儀之趣ニ付、此度金座へ鑄錢定座被ㇾ仰付、於ㇾ本所龜戶村、當年より錢吹立候樣被ㇾ仰渡候間、爲ㇾ心得ㇾ被ㇾ仰聞候旨、御奉行所より被ㇾ仰渡候、

右之通被ㇾ仰渡候間、町中不ㇾ殘入ㇾ念被ㇾ申聞置候、

八月

右町年寄樽屋へ、年番名主被召呼、被申渡候寫、

〔天明集成絲綸錄 四十四〕明和五子年四月

御勘定奉行江

水戸殿御領分、打續田畑不熟、其上度々之火災損毛等ニ而、農民扶助之御手當、行屆兼候ニ付、御領分之產砂銕を以、農民扶助として、鑄錢御申付被成度由、右無據御事ニ付、壹箇年吹高拾萬貫文を限り、三箇年之間、於御領分江戸定座差配ニ而、鑄錢御申付被成候樣可被申上候、尤小澤九郎兵衞と申者、當時江戸表江呼出被置候由候間、諸事仕方之儀、金座人江致對談候樣可被致候且公儀江上納之御益金之儀も、右對談相濟候上、員數等取極可被申聞候、

四月

右之通水戸殿家老江相達候間、可被得其意候、尤後藤庄三郎江も可被申渡候、

〔敎令類纂 錢 六十六〕安永元壬辰年九月廿八日

鑄錢之義、去る酉年、後藤庄三郎支配定座、其後眞鍮座銀座江被仰付候處、近頃猥に是迄之銀山、或ハ銅山稼方助成等に事寄、其外御益筋等を申立いたし、鑄錢之儀相願候もの共多有之段相聞候、右兩座之外、鑄錢難成事候間、向後堅く願出間敷候、若於願出ハ吟味之上急度可申付候、

右之趣御料私領幷江戸町々江可觸知者也、

九月

〔天明集成絲綸錄 四十四〕明和九辰年〇安永元年十月

御勘定奉行江

水戸殿御領分鑄錢之儀、農民扶助として、去子年御願之通被仰付、御益金も上納有之候得ども、江戸表錢相場ニ響相障候間、年季中ニハ候得共、御領分鑄錢、先被差止候樣可被致、尤當年分御益金

之儀ハ、是迄之月割を以、上納之積可被相心得候、

十月

右之通水戸殿家老江相達候間、可被得其意候、

明和九辰年十月

御勘定奉行江

其方領内鑄錢之儀、去子年錢拂底ニ而、四民難儀之由ニ付、願之通御免被仰付、爲運上、吹高十分一上納有之候得共、江戸表錢相場ニ相障候間、年季中ニハ候得共、領内鑄錢、先相止候樣可被致候、尤運上之儀ハ、月割を以、當年是迄之吹高十分一之積、可被相納候、尤御勘定奉行可被談候、

十月

右之通松平陸奥守江相達候間、可被得其意候、

安永三午年九月

御勘定奉行江

當時錢相場、追々下直ニ相成、世上難儀之由相聞候ニ付、公儀鑄錢之分、吹方被相止、尤眞鍮錢之儀ハ、吹方半減之積相成候ニ付、水戸殿御領分、鑄錢之儀も差留可被仰付候得共、去巳年、格別之御願之上、再吹被仰出候儀ニも候間、御領分鑄錢之儀ハ、其御沙汰ニ不被及候間、其段可被申上候、且吹立錢之分、不殘金壹兩ニ付、五貫四百文替之相場を以、御買上被仰付候、尤年限中、世上錢相場高下不拘、五貫四百文替之定相場を以、御買上相成候間、此旨可被相心得候、委細之儀ハ、御勘定奉行江可被承合候、

九月

右之通水戸殿家老江相達候間、可被得其意候、

鑄錢

安永三午年九月
鑄錢定座、幷伏見鑄錢共、吹方年數ニも相成、尤去巳年、吹高減少も有之候得共、今以錢相場格別下直ニ而、諸色直段者引上、米穀者下直相成、世上難儀之趣も相聞候ニ付、此度當表幷伏見とも、鑄錢吹高不殘差止、眞鍮錢之儀ハ、吹高半減申渡候間、錢相場も引上可申ニ付、諸色直段、錢相場ニ釣合候樣引下賣買可致候、若錢相場而已不相當引上、諸色ハ高直之趣相聞候ハヽ、吟味之上急度可申付者也、
右之通町々江相觸候間、其旨可相心得候、
安永六酉年六月
鑄錢之儀、後藤庄三郎支配定座、幷於銀座眞鍮錢吹方致候、兩座之外鑄錢難成事候間、願出間敷旨、去辰年相觸候處、手寄を以、寺社等より之願ニ致候も有之趣相聞候、以來右體之願有之候はヽ吟味之上急度咎可申付候、尤右願等申立候寺社之儀も、可及御沙汰候條、兼而其旨を可存候、
右之趣御料私領寺社領在町とも可觸知もの也
六月
右之通可被相觸候

〔續日本紀四元明〕和銅元年正月乙巳、武藏國秩父郡獻和銅、　七月丙辰、令近江國鑄銅錢、　八月己巳、始行銅錢、

〔續昆陽漫錄〕按するに、國家寛永中令近江國鑄寛永通寶錢、古銅錢を鑄たる國ゆゑにや、

〔拾芥抄下末錢文〕錢文
開基勝寶天平寶字四年正月
太平元寶天平寶字四年

萬年通寶（天平寶字四年）

神功開寶（天平神護元年）

隆平永寶（延暦十五年十一月八日、件錢自今年至弘仁八年經廿二箇年、）〇中略

承和昌寶（承和二年三月廿二日、件錢自今年至同十四年、經十三年、）

長年大寶（嘉祥元年九月十九日、件錢自今年至天安二年、經十一年、）

饒益神寶（貞觀元年四月廿八日、件錢自今年至十一年、經十一年、）

貞觀永寶（貞觀十二年正月日、件錢自今年至寛平元年、經廿年、）

寛平大寶（寛平二年五月、件錢自今年至延喜六年、經十七年、）

延喜通寶（延喜七年十一月三日、件錢自今年迄天德元年、經五十一年、）

乾元大寶（天德二年三月廿五日、件錢自今年至應和三年七月五日、）

〔吹塵錄十二〕御內密申上候書付

後藤庄三郎

合

鐵錢五百七萬四千貫文程

銅錢四拾三萬千三百三拾貫文程

外ニ仙臺領限通用

（雁角）鐵錢三拾萬八千貫文

內

鐵錢貳百貳拾六萬貳千五百八拾九貫文餘

是者明和二酉年、私支配金座（江）鑄錢定座兼帶被仰付、本所龜戸ニ於テ、同年九月ゟ安永三午年七月迄吹立申候、

銅錢貳拾萬三百貳拾九貫八百文餘

是者前同所ニおいて、明和五子年吹立被仰付候處、御入用多分相掛候ニ付、安永元辰年より吹方相休申候、

鐵錢百四拾貳萬貳千七百八拾貳貫文餘

是者明和四亥年、猶又私支配京都金座江鑄錢定座兼帶被仰付、伏見ニおいて、同年七月ゟ安永三午年七月迄吹立申候、

鐵錢凡六拾九萬五百貫文

是者明和六丑年、水戸殿御領ニ於テ、一箇年鐵錢拾萬貫文ヅヽ、七箇年之間吹立之積、御領之者引請候而、三箇年餘吹立、猶又安永三午年ゟ同七酉年七月迄、三箇年餘吹立有之候、右鑄錢場之儀は、定座差配は被仰付候得共、伺之上仕法傳達、幷拾萬貫文吹場所相當見屆、御益上納取扱候迄ニ而、吹高之儀は差綺ヒ不申候、尤年限中、私方役人幷支配之もの、彼地へ見分爲御用被差遣候、

鐵錢凡五拾萬貫文程

是者明和五子年、松平陸奧守領分ニ於而、一箇年拾萬貫文ヅヽ、領分之者引請、同年十二月ゟ安永元辰年十月迄、凡四箇年吹立、其後淺吹と申候而、猶又吹方有之候由、定座差配ニ付、伺之上吹場所傳達、御益納取扱候迄ニ而、場所見分罷越不申候、

四角鐵錢凡三拾萬八千貫文

是者前同所ニ於テ、領分限通用錢、一箇年拾萬貫文ヅヽ、天明四辰年七月ゟ同八申年迄、三ヶ箇年限吹立有之候、尤吹方之儀差綺不申、拾萬貫文之場所相當見分として、初年私方役人被差遣、彼地役人江定座之者引合セ歸府仕、其後は年々定座交代見分被差遣候、

銅錢凡貳拾三萬千貫文

是者明和四亥年、長崎ニ於而、會所調役幷町年寄引請、一箇年三萬三千貫文ヅヽ、安永二巳年迄七箇年限吹立、御益金之儀は、定座江可相納旨被仰渡、彼地江見分等罷越不申候、

右之外明和七寅年、佐州ニ於テ、銅錢吹方被仰付候段、御沙汰は御座候得共、間もなく相止候よし御座候、且文錢類之古錢、數々相見候得共、出來高幷吹場所等之儀、及承不申候、此段御尋ニ付申上候以上、

申二月　後藤庄三郎

〔坂家日記〕萬治二年七月十四日、於長崎、如古錢新規ニ鳥目鑄之、異國船來朝之時、賣買可仕、寛永年號之文字、堅可爲制禁之旨、彼地奉行被仰付之、是彼處ノ者依奉願也、

〔貨幣通考〕崎陽群談曰、萬治二年、市長請鑄古漢錢、以賣於海舶、官許之、明年置鑄錢局而鑄古錢、是由和蘭人請也、遂又賣於唐商、是時鄭氏據臺灣、不與中國通、錢頗匱乏、故唐商自南國來者、皆喜載錢而還、寛文八年禁出銅、然古錢特不禁、至貞享二年、唐蘭皆不求錢、遂止鑄錢、自萬治二年至玆二十有五年也、蓋鄭氏亡、南方亦皆用中國錢也、

正見按、元祐皇宋元豐等唐宋諸錢、今雜文於通行錢中者、書法拙劣絶無古色、是此長崎府所鑄者也、

〔佐渡志一食貨〕錢

此國モト銀ヲ以テ日用ニアテシコト、前ニイヘルガ如シ、萬治元年戊戌、初メテ錢ヲ以テ、金銀ニ並ベ行フコトニナリタレドモ、元ヨリ國中ニ錢ナケレバ、唯他ノ國ヨリ來ル商人ラノ物ノ價ニ置キ、又ハ金銀ニ換ヘナドスルノミニテ、印銀ノミゾ專ラ行ハレケル、其後年ヲ經ルニ從ヒ、稍錢モ聚リシガ、猶國中ニ行ハルヽ迄ニハ至ラズ、其頃ハ滿百ノ錢ヲ用ヒケルニ、正德三年癸巳ノ夏、

今ヨリ後九拾六文ヲ以テ百錢トシ用ユベキノ命アリ、又此年新タニ錢鑄サシメラルベキ旨ニテ、明ル四年甲午三月廿九日、江戸ノ商人絲屋八左衛門ナド云フモノ四拾餘人來リ、鑄錢座ヲ下戸炭屋濱町ニ建テ、六月朔日ヨリ鑄始メタレドモ、事大ニシテ財用繼ズ、其鑄タル錢モマタ思フ儘ナラヌナレバ、明ル年ノ五月其事ヲ止ム、サレドモ此時鶴子山ノ銅、一年ニ出ル所、七千貫目ニ及ブナレバ、重テ議セラルヽコトヾモアリテ、享保二年丁酉ノ春、又關東ノ命下リ、遂ニ官局ヲ相川壹丁目濱町ニ建、其事ニカヽレルモノ多ク、田島與兵衛、天野傳右衛門ト云フモノヲシテ、コレヲ總べシメ、此年六月ヨリ始テ鑄出ス所、オホヨソ一年ニ壹萬貫文ニ及ブ、其鑄法ハ銅壹萬貫目ニ、上錫千貫目、白錫三百貫目、鉛二千八百貫目ヲアハセテ、一錢ノ重キコト壹匁、大キサハ文錢ニ似テ、背ニ佐文字アリ、前ニ甲午ノ年鑄ル所ノ錢モ、背文佐ノ字ヲ用ヒタレバ、此度ハ字樣ヲカヘテ、佐佐ノタガヒアルナリ、同十九年甲寅關東ニ申シテ、明ル乙卯ノ年ヨリ、請負トイフ事ニナレリ、コレ運上ヲメサレムガタメナリトゾ、相川ノ町人宗兵衛トイフモノ請負ヘリ、元文五年庚申三月ヨリ鑄來レル銅錢ノ外ニ、鐵錢ヲモ並べ鑄ル事ヲ許サル、寛保元年辛酉、彼運上ヲ增べキ爲ニ、銅錢ノ重サヲ減ジテ八分ニセラレケルガ、程ナク其年ノ内ニ、銅鐵ノ錢トモニ鑄ルコト止ミタリ、ソノ後明和中ニ至リ、又國中ニ錢乏シカリケレバ、關東ニ申スコトドモアリテ、七年庚寅、銅錢ヲ鑄ルコトヲ許サレ、此國ノ銅足ラザルトキハ、大坂ノ銅座ヨリ買加フベキニ定リ、明ル八年辛卯ノ二月ヨリ鑄ハジメヌ、此時モ請負ニテ運上ヲサヽグ、相川ノ町人濟八、安四郎、佐左衛門、忠兵衛、善兵衛ナドイフモノドモ請負ヘリ、此度ハ重サ七分ナレバ、形甚小サクシテ、正德享保ノ錢ニハ似ルベクモアラズ、背文ニハコレモ佐ノ字ヲ用ユ、天明元年辛丑二月迄ニ鑄ルトコロ、僅ニ五萬八千貫文餘ニシテ止ミ、又コトシ鐵錢鑄ツベキコトヲ願ヒタレドモ許サレザリケリ、其後文化中ニ及ビテ、四文錢通用ヲ許サレタレドモ、未ダ國ノ内ニ多カラズトイヘリ、

〔草茅危言 三〕錢幣之事

一先年已來、何人ノ建議ニヤ、濫惡ノ錢盛ニ行ハレ、物價涌騰シ、下民一統ノ難儀ト成リシ、元ヨリ溢濫苦極ノ陶瓦ナドヲ末トシ、麁鐵ニ雜ヘタル者故、手ニ隨テ破碎シ、モハヤ大方毀盡シタレドモ、下リ來リタル錢價故、カツテ舊ニ復セズ、○中略

一仙臺ニテ濫惡ノ方錢ヲ鑄出スコトヲ願ハレ、官許有シヨリ、其藩中士大夫平民マデ、大ニ疾苦ノコトヽ成シヨシ、國窮スルヨリ目前ノ急ヲ救ハントテノ計ナルベケレドモ、必竟ハ其國ノ長策ニ非ズカシ、其上泉幣ハ天下ノ公器ナルヲバ、私鑄シテ用ユルコト、漢ノ鄧通ガ錢ノ類ニテ、有マジキ筈ノ事也、夫故初ヨリ一領切ノ約ニテ、他領ヘ出スコトハ、官ヨリ監吏ヲ置テ嚴禁アリト聞ク、サアレバ領内ヘ官錢ハ固ク拒テ入ザルベシ、大藩ノコト故、此一領ニ官錢ノ通ゼヌ許モ大ナル國家ノ御益ナリ、一擧シテ彼此トモ病ニ至ル、アヽ此計ヲスルヤ、速ニ令ヲ傳ヘ禁止有テ、止ムコトヲ得ズバ、銀札トシテ、方泉ハ毀滅アリタキ者カ、

一錢ハ年々ニ破碎シ、又ハ水火ノ變ニ消滅シ、又候國ヘモ散ジ、人手ニ破碎スレバ、價モ次第ニ高クナルベク又減少ノマヽニテ捨置ケバ、民用ヲモ缺ベシ、隨分追々鑄出サヾレバ協ハザルベシ、サレドモ今迄ノ如ニテハ、錢ノ勢終ニ宜クナルベカラズ、是ハ一旦ノ官費ヲ顧ミズ格別ノ良ゼニヲ鑄出シテ、大ニ民情ヲ鳩集スル樣ニ有セラレタシ、總ジテ錢ハ水火ノ災ハ是非ニ及ザル事、唯人手ニ破碎スル程、國家ノ費成事ナシ、古來ノ良錢ノ分ハ、今ニ依然トシテ替ルコトナシ、纔ニ數十年來ノ惡錢ハ、今存スル者殆ド希也、此妄費ハイカ計ノ事ナラン、上下萬民、誰一人ノ益ニモナラズ、是ヲ名テ萬世不償ノ費ト云ベシ、今日良錢ノ新鑄アリナバ、萬世不易ノ大寶トナルベキ故、其國益タルヤ大ナリ、豈目前ノ一費ニ拘テ、擬議ヲ容ベケンヤ、

一濫錢吹替ハ、何分大造ナルコトユヘ、費ス所モ廣大ナルベケレドモ、是ヲ容易ニ辨ズベキ一方アリ、大諸侯ノ内、土木ノ助役仰付ラルベキ年限ニ廻リタルヲ撰ミ、其一役ヲ御免有テ、其代リニ

鑄錢司ヲ命ゼラルベシ、總ジテ大藩ノ助役ハ、廣大ノツヒエ有コト成バ、其代リト有バ、欣然トシテ命ヲ受ケ、土木助役ノ料ニ比シテハ心易ク辨ズベシ、官ヨリ都下ノ地ヲ區シテ、鑄錢局ヲ開キ、銅材ヲ給シ、清廉ノ官吏ヲシテ監臨セシメ、務テ奸僞ヲ制シ、通例ノ鑄錢ハ、其新錢ノ利潤ヲ考ヘ、鑄錢ノツヒエハ、一切其利ジユンヲ辨ジテ尙又上ニモ其職司ニモ、共ニ餘利有樣ニ圖ルコト故、新錢ニ色々術ヲ設ケ、次第ニ濫惡ニ成モ其筈ノコト也、今コノ鑄費ハ大藩ノ公役ニテ是ヲ辨ジ、錢ハ吹立次第ニ官ニ上納シ、何モ新センニ利スル所無レバ、イカ程ノ良錢ニテモ十分ニ吹出サル可コト也、尤新ゼニ一度ニテ、役ハ免ゼラレ、鑄局ハ官ニ歸シ、其後折々ノ追吹ハ、官ヨリ辨ゼラレンカ、○中略　又前ノ如ク一藩ノ助役ヲ命ゼラルベシ、錢背ニハ其藩邦地名ノ一字、又花號從テ目印シヲ勸スル事ヲ許サルベキカ、是鑄司ノ規模ト成ベシ、

一錢ノ文字ハ華城○支那ノ古代ハ、半兩五銖ナド丶有リ、又ハ唐ノ始ニハ開元通寶ナド丶、別ニ錢ノ名ヲ命ジ、我邦ノ古モ、萬年通寶、神功開寶抔、別ニ錢ノ名ヲ命ゼラレシコト有タレドモ、其後ハ始鑄ノ時ノ年號ヲ用ヒラル丶、和漢同例也、御治世以來、寛永ノ新鑄モ是ナリ、寛永ノ文字ヲ萬代改ムベカラザルニハ非ズカシ、寛文ノ文錢、元文ノ元錢ハ吹足シナレバ、舊ヲ襲テ苦シカラズ、夫故背ニ文ノ字元ノ字有テ、其年號ヲ記セラレタリ、其故前後ニ追々鑄造アレドモ、背ハ何モナク、或ハ小ノ字佐ノ字水ノ字等アルハ、其鑄出ノ地名ニ掛リタルマデニテ、其面ハ舊號ノマ丶ナレバ、數百年ノ後ハ、皆々寛永中鑄出トノミ心得ベシ、是ハ號ヲ改ムレバ、改替ニ目立ヤウニナルト有司ノ堅ク心得ラレシニヤ、號ハ幾度改リテモ、舊錢ト並ベ行フノ令ニテスムコト也、寛永新鑄ノ時、永樂通寶ト並ベ行レシ類也、故實ハ新錢ノ度每ニ、其年號ヲ用テ、舊錢ト並ベ行フベキコト也、寶永中ノ當十錢ハ量ニ中ラザリシ故、ヤガテ廢シタレドモ、新規ニ吹出シノコト故、寶永通寶ノ文ハ正ヲ得タリ、夫ニ付テ怪キハ見行ノ當四錢也、是ハ今迄曾テ無リシヲ、明和中始鑄ナレバ、

鑄錢料

其年號ヲ用ヒラルベキニ、ヤハリ寛永也、イカナルワケニヤ解シ得ズ、大ニ後人ヲ惑ハスコトニアラン、故ニモシヤ右ノ新錢改鑄ノコトアラバ、文ハ何トゾ寛政元寶ナド有テ、面目ヲ革ムベシ、サテ文錢ト並ベ行フベシトアルニ、何ノ碍ルコトノアルベキヤ、

〔吹塵錄十〕乍恐貨幣之儀ニ付再三奉言上候書付〇中略

辰十月　　後藤三右衛門

銅錢吹增被仰付候ハヾ、國用相足リ可申、上野大佛木像ニ被爲易候共、南都鎌倉兩所は、いまだ銅像其儘有之候得ば、古代之姿は可相遺候、銅錢段々如此相改候上ハ、異國脫散之御取締、及民間死人、棺中ニ入候六道錢之儀は、嚴禁ニ相成度もの也、或人之異說ニ、銅錢は異國人是を好み持行候ニ付、矢張撫錢之惡幣、多分交候方宜敷なぞ申もの有之候得共、此論議ニ及候時は、特リ錢而已ニは限るべからず、金銀之上品は猶更相好、異邦江持渡リ可申候、此難を恐て、金銀錢三品共、無類之惡幣ニ相成候而者、異域は勿論、和朝之人も亦嫌之、永久天下之至寶とは難申、古今之僻論、取ニ足ざる儀と奉存候、異國脫散之憂は、西國筋海岸之ものゝ奸曲ニ有る事なれバ、右海濱之御取締嚴重ニ行屆候ハヾ、御差支之儀も有之間敷儀と奉存候、

但銅鐵錢御改革相成候上ハ、四文錢百文錢共、釣合不相當相成可申候得共、一時ニ吹潰しも難相成候得ば、此儀は追而取調可奉申上事、

〔泉彙上〕錢質　金　銀　銅　鐵　錫　鉛　沙利　赤銅（金銀各二分ニ、銅六分ヲ合ス）、四分一（銀四分ニ、銅六分ヲ合ス）、黃唐金（此銅錢第一ノ瓦質ナリ、其色黃ナルヲ云）、紫黒銅（銅色ノ赤黒キナリ）、唐金（銅ニ鐵ヲ合スヲ云）、鎮鍮（銅ニトタンヲ合ス）、白金（唐金ニトタン過テ、其色シラケシヲ云）、油金（金色地合ヨクツヤアルヲ云）、紅金（唐金古クナリテ、其色赤クナルナリ）、琉金（紅毛眞鍮ナリ、其ツヤヨシ）、銑（已上不拘正字、通用ノ字ヲ以テ記ス）、

〔續日本紀十二聖武〕天平二年三月丁酉、周防國熊毛郡牛島西汀吉敷郡達理山所出銅、試加冶錬、並堪爲用、便令當國採冶、以充長門鑄錢、

〔類聚國史百七職官〕弘仁九年八月戊午、勅長門國部內、不要驛家十一所、馬五十五匹、朝使無往還之要、公民有守飼之費、宜每驛置□匹、自餘充鑄錢料鉛馱、

〔類聚三代格八〕太政官符

應依一萬一千貫文支度鑄作年料錢事

右得鑄錢司解偁、檢案內鑄錢支度、有先後二卷、一卷自弘仁十三年迄天長五年、作三千五百貫文、一卷自天長六年迄今年、作一萬一千貫文、今被太政官去六月廿三日符偁、太政官同月廿二日下長門國符偁、司解偁、舊錢既盡、無銅可鑄、仍言上者、左大臣宣、依舊充之者、支度有先後、未知所准據、謹請處分者、同宣奉勅依件作之、

承和元年十月九日

〔類聚三代格八〕太政官符

定採送鑄錢司年料銅鉛數事

銅一萬六千三百卅三斤五兩一分二銖　鉛八千一百六十六斤十兩二分四銖

右得長門國解偁、檢案內太政官去承和元年六月廿二日符偁、去天長三年九月廿一日下民部省符偁、相博舊錢鑄送新錢之間、宜停鑄錢料銅令進年料熟銅千斤者、今得鑄錢司解偁、舊錢既盡無銅可鑄者、右大臣宣、宜依舊充行者、宜待司支度依件採送者、當時之吏移彼司請支度、而報云、年料可造錢一萬一千貫文、料銅五萬一千三百卅三斤、鉛二萬五千六百六十六斤十兩二分四銖者、今案民部省去弘仁十二年七月廿八日符偁、被太政官今月十六日符偁、得鑄錢使解偁、依去弘仁九年六月十一日申官支度帳、件錢每年鑄作可進、而始自九年至于今年、堀採之銅乏少、作物之數有缺、望請五千六百七十貫文之內、減定三千貫文、每年作貢、但豐銅之年、隨即倍作、不必限以此數者、右大臣宣、奉勅爲定三千五百貫文者、仍可採送年料銅一萬六千三百卅三斤五兩一分二朱、鉛八千一百六十六斤十

兩二分四朱、雖然當于其時未有採足、而彼鑄錢司、自去承和元年以來、一萬一千貫文用度、令送銅七萬七千斤、今覆舊例、銅七萬七千斤、是鑄送古錢之用度、非堀採新銅、所以爲自非神力何及件數、望請銅鉛各萬斤、定爲年料者、右大臣宣、奉勅宜依三千五百五貫文用度令採送之、

承和八年閏九月廿九日

〔類聚三代格八〕太政官符

應沒不送造錢料物諸國司公廨事

右得鑄錢司解偁、諸國所送年料雜物、或多時乃送、或逾年纔來、由此一年作物、經年不成、四季料錢、闕時不貢、謹案延曆十四年七月廿七日格偁、寶龜四年閏十一月廿三日下民部省符偁、去元年五月十五日符偁、舂米掾領已上專當其事、史生已上差充綱領、若舂運違限、解見任者、而猶不塡、〇而以下四字、交替式延曆十四年、作而猶不愼、愈致怠闕、右大臣宣、奉勅自今以後、若有雜米未進、無問多少、國司史生已上、皆奪公廨、沒爲官物者、而不愼格旨、常致延引、若不張必行之制、何濟要作之事、望請諸國所採送雜物、每年二月廿日以前令送畢、若有未進、准其數依格沒公廨、事須司詳錄載其色相當物數專使言上、然則人情有畏、國用無闕、謹請官裁者、左大臣宣、依請、

承和十四年二月廿九日

〔類聚三代格八〕太政官符

應依銅鉛幷鐵未進不沒公廨事

右得長門國解偁、民部省去年四月十日符偁、被太政官去三月廿九日符偁、鑄錢之道、最依料物、而諸國解慢、常致未進、作事之怠、概斯由也、望請准未進數沒其公廨、謹請官裁者、左大臣〇常源宣、依請者、須隨符旨依數堀送、而物在土下、堀得無定、望請依件未進停沒公廨、謹請官裁者、同宣、依請、

承和十五年二月廿八日

〔類聚三代格 八〕太政官符

應停納官便送納鑄錢司庸米一百廿斛事

右得周防國解偁、被太政官去承和十四年十二月廿一日符偁、得彼國解偁、鑄錢司年中所請造錢料物、觸色有數、從被行當國之外、更請他國、其太宰管內長門等國、送司有便、彼備中國近於京都、去司遙遠、此國庸米、遙涉滄海、每年進京、民疲運漕、物恐漂沒、望請停備中國一年送司米三百斛內百廿斛、始從今年、永令進京庫、其代便以此國庸米充行、所殘百八十斛、依舊令送司家者、右大臣宣依請、備中國米百廿斛、永令進京庫、

嘉祥二年十月一日

〔類聚三代格 八〕太政官符

一應停止鑄造銅器交易民間事

右得採長門國銅使鑄錢司判官弓削秋佐解狀偁、國須採得部內之銅全送納鑄錢司、而檢校疎略、無勤送納、於是百姓任意私採、鑄造雜器、只事商賈、積習爲常、難輙可改、例進欠少、職此之由、望請殊下嚴制、將從停止、若有奸犯之輩者、國司注名言上、郡司幷百姓浪人等、隨所犯多少、決杖以下罪、

一應採銅料物充行當郡事

右同前解狀偁、使民之道、功食爲先、而件料物、不充當郡、下行他郡、因玆百姓爭遁、不赴役所、預長愁吟、作事既倦、望請採銅之郡、除例用之外、不行國司公廨幷雜用、將充採銅之料、然則預事易濟、詛論自絕、

以前條事、謹請官裁者、左大臣宣、依請、

貞觀十八年三月廿七日

〔類聚三代格 八〕太政官符

應便割周防國田租穀充鑄錢料雜物直事

右參議從四位下守右大辨兼行侍從播磨守源朝臣希奏狀偁、謹檢案內、鑄錢料物者、備後周防長門伊與筑前豐前肥後等國所備送也、其用途支度、前後有二、自弘仁十三年至于天長五年、年別以三千五百貫爲限、自天長六年至于承和元年、以一萬一千貫爲限、定此數之日、支度用物、課所出國令交易進、其後依銅鉛難採、減省前後數、以三千五百貫定爲年料、須隨其程減定用途、而只減錢數、不省料物、然而諸國牧宰、動致闕怠、猶無究納、年料之錢、不由鑄備、因茲年來之貢、不過五六百貫、是則纔以周防一國所送之物所鑄造也、伏望者自今以後、停止件七箇國交易、割彼國納官租穀六千九百九斛九斗二升內、爲鑄錢料雜物直、其應用白米黑米舂鹽蒜絹庸布商布調綿庸綿鹿皮牛革油鐵鍬砥採藥紙墨筆薦苫稻等之雜物直、准穎二萬六千九百七十九束四分二毫、相折猶遺穀四千二百十二斛二升五合、然則雖有損年、猶可以足矣、况無損年寧無餘剩乎、但彼諸國交易雜物直稻、除銅鉛料之外、每年爲糙附帳言上者、大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依奏、

寬平八年三月四日

〔延喜式二十六主稅〕凡鑄錢年料銅鉛者、備中國銅八百斤、長門國銅二千五百十六斤十兩二分四銖、鉛千五百十六斤十兩二分四銖、豐前國銅二千五百十六斤十兩二分四銖、鉛千四百斤、每年採送、即以鑄錢司收文進官、下所司令勘會稅帳、

凡備中長門豐前等國、採銅鉛料稻、斤別充三束九把六分五毫七釐、

〔延喜式五十雜〕凡遣鑄錢司舊錢、路次國差加勇幹健兒遞送、若致亡失者、令當國司塡納、

〔吹塵錄九〕後藤三右衞門光亨隨筆抄

一四文錢壹萬貫文ニ付、右吹方入用、銀座受負高金千三百九拾四兩壹分餘、但拾貫文ニ付、壹兩壹

分貳朱餘ニ當ル、

一、銀座取扱、古法眞鍮錢割合之法、銅六割八分、鉒丹二割四分、白蠟八分、

一同所ニ而、文政度吹立候法ハ、銅七割五分、トタン一割五分、鉛一割、

一四文錢壹文、目方壹匁四分ヅヽ、同斷吹減一割八分、終日吹立高一火土（ホド）ニ付、凡四貫文程之由、

一安永度銅錢割合、丁銅三割五分、白蠟四割五分、鉛二割、

一右同時之銅錢、壹文ニ付、目方六分五厘ヅヽ、鐵錢ハ八分五厘形也、右二口共、吹減は三割ヅヽ、

一明和度銅鉛代左之通

荒銅壹兩ニ付六貫四百目替

丁銅壹兩ニ付四貫目替

鉛壹兩ニ付五貫五百目替

白蠟壹兩ニ付拾六貫目替

銑鐵同斷ニ付貳拾九貫貳百目替

鑄錢具

〔倭名類聚抄〕（十一寶貨）錢（中略）○　音義云、鎔（音容、和名世豆乃波太毛能、）錢模也、

〔金石粹編〕（五漢一）大泉五十笵

按錢笵之稱、不見于古、舊唐書作錢模、與笵同義、說文笵法也、通俗文云、規模曰笵、

〔三代實錄〕（四十八光孝）仁和元年十月十一日壬戌、令鑄錢司作錢機百五具、其五十二具牢新作、五十二具牢、修理舊機、

鑄錢法

〔毛吹草〕（四）從諸國出、古今名物、聞觸見及類載之、但庭訓用分分除之、

近江國錢鑄形土

〔翁草〕（百五十三）通用金の事　吾朝ハ、元明帝和銅年中に、和同開珎の錢を鑄てしより、今寛政元年

に至、千百有餘年に向たり、金銀は最上の至寶なれども、其製嚴重ならず、就中銀は掛目形に定りなければ、杓にて銀湯を流して己なりに塊に極印して通用す、錢の製は之に反して、甚精密なる物也、京師にても、寶永中、糸割符年寄長崎屋忠七、其外組合之者共願ひにて、七條の南、加茂川端にて地所相渡、此所にて新錢を鑄る、其後中絶して、元文中、同糸割符年寄有來新兵衛、清水清右衛門、願ひに仍、横大路村に於て地所相渡、錢を造、其頭予も右の吟味懸り故、一箇月の内、不時に兩三度も場所へ立越、吹方見分せり、先大吹と號して、地銅を吹、此掛目、銅、鐵、トタン、白目、錫、鉛等を合せて、十四貫目を一ト吹とす、大吹の棟梁を吹屋大工と云、手傳ひ相副て、鞴にてこれを沸す、暫吹去ると五色の焔出て火勢甚熾也、夫より段々火勢鎮りぬる時、鞴を止て熱湯の勢を醒す、鞴の横に湯口有て、其側に疊一坪程なる四方に縁有、敲土の臺有、加減よき時分、長き柄の道具を以其口を拔と否、紅の熱湯、彼臺へ颯と馳込、其勢雷光の如く流れ出ると直に塊て、鼠色の地板となる、火の子濆りて側へ寄がたし、棟梁長き柄の鐵棒を以これを碎けば、厚氷を割たる如くになる、扨大半切に水を湛て、長き柄の鋏にてはさみ、割銅を一ツ宛水中へ入るゝに其音迅雷の如し、此加減功者に非れば爲す事不克、程よく醒ざれば、水中へ入と水火擊して濆り飛び、近所大に怪我をする也、醒過れば水中へ入音遠雷の如く、地銅の勢なまり弱りて惡し、其醒鹽梅肝要也とかや、偖其地銅を五百匁宛掛分て、錢吹小屋へ夫々に配當す、吹屋の棟梁（此棟梁を錢頭と云、手傳一人宛有、）請取之、鞴にて手傳ひに沸させ、錢頭は疊一帖計の槻板の厚縁有ものを二枚並べ、夫へ黒ぼこの最上なる土を詰て、升掻にて平かに均して、夫へ種錢を蒔く、（種錢は上錢也、時の能書に、寛永通寶の文字を書せ、之を鑄て種錢とす、）五百文を行儀能く並べ、一枚の板を是に覆ひて、細引にて〆上げ、而して開けば右の土板に種錢の形鮮かに殘り、種錢は蓋に付上る、其種錢を拂ひ落して、其錢形の間々へ楊枝の樣なる物にて、竪横に湯道を付る、畢て又蓋板を合せて〆上る、此栫の間に地銅沸く、則瑠壺の樣なるものへ地銅をうつし、右合せ板に湯口

有、それへ流し込む、小雷の如く音す、暫く猶豫して合板をほどけば、錢の簾の如くなるもの出來る、其錢のつなぎを、もぎ放して一錢とす、吹加減宜時は、一板にて四百文餘出來る、吹損ずれば三百文の内外也、則是を次へ送る、請取之て、もぎ放したる錢の耳をむしり均して次へ渡す、其次は古墨と油にて煮る、煮上て眞黒なる錢を次へ廻すと、之を砥に掛て錢の耳を研ぐ、是を耳研といふ、畢て次へ渡せば錢の平を研、研上れば地板計黒く、文字と縁の輪は銅色になる、如此せんぐりに順を立て、精密に錢を仕立る事廿餘遍、錢の掛目八分ゟ輕ければ之を鑄直す、尤疵われ等は一除之、而して通用錢となる、金銀の仕立より甚六箇敷事斯の如し、夫だに其頃の京所司代土岐丹後守は、政事に無怠良將なれば、此新錢を外ゟ手を廻して買調、改らるゝ折には、麁抹成錢相交りければ其分をあつめて町奉行へ渡され、如此の新錢通用に出來ぬ、錢座の者共へ急度申渡さるべしと下知有に仍、其度々に錢座へ急度申渡、嚴密の穿議に及ばる、是故に聊も錢座に私なく、其頃の吹出錢は、文錢の位に等しかりき、元文元年に鑄始、同六年に畢ぬ、然るに近年、伏見幷諸國にて吹出す處の錢を見れば、以前の新錢とは懸隔して、鍋鐵を以製し、錢の仕立もなく、吹出しの儘にて通用せり、故に破るゝ事速にて、國の費幾ばくぞや、都て田沼氏の下知せられし新規事は皆斯の如し、寔に不臣の長たるべし、

〇按ズルニ、右ノ鑄造法ハ、大率明國ノ法ニ相似タリ、今參考ノ爲、其法ヲ下ニ揭グ、

〔天工開物中錢〕凡鑄銅爲錢、以利民用、一面刊國號通寶四字、〇中略凡鑄錢每十斤、紅銅居六七、倭鉛(京中名水錫)居四三、此等分大略、倭鉛每見烈火、必耗四分之一、我朝行用錢高色者、唯北京寶源局黃錢、與廣東高州爐青錢、其價一文、敵南直江浙等二文、黃錢又分二等、四火銅所鑄曰金背錢、二火銅所鑄曰火漆錢、凡鑄錢鎔銅之礶、以絕細土末(打碎乾土磚妙)和炭末爲之、礶料十兩、土居七而炭居三、以炭灰性煖、佐土使易化物也、礶長八寸、口徑二寸五分、一礶約載銅鉛十斤、銅先入化、然後投鉛、洪爐扇合傾

入模內、凡鑄錢模、以木四條爲空匡、(木長一尺二寸、濶一寸二分、)土炭末篩令極細、塡實匡中、微灑杉木炭灰、或柳木炭灰于其面上、或熏模則用松香與清油、然後以母錢百文、(用錫雕成、)或字或背、布置其上、又用一匡、如前法塡實合蓋之、既合之後、已成面背、兩匡隨手轉覆、則母錢盡落後匡之上、又用一匡塡實、合上後匡、如是轉覆、唯合十餘匡、然後以繩細定、其木匡上弦、原留入銅眼孔、鑄工用鷹嘴鉗、洪爐提出鎔罐、一人以別鉗扶抬罐底相助、逐一傾入孔中、冷定解繩開匡、則磊落百文、如花果附枝、模中原印、空梗走銅、如樹枝樣、挾出、逐一摘斷、以待磨鎈成錢、凡錢先鎈邊沿、以竹木條直貫數百文受鎈、後鎈平面、則逐一爲之、凡錢高低、以鉛多寡分、其厚重與薄削、則昭然易見、鉛賤銅貴、私鑄者至對半爲之、以之擲堦石上、聲如木石者、此低錢也、若高錢銅九鉛一、則擲地作金聲矣、凡將成器廢銅鑄錢者、每火十耗其一、蓋鉛質先走、其銅色漸高、勝于新銅初化者、若琉球諸國銀錢、其模卽鑿鍥鐵鉗頭上、銀化之時入鍋、夾取淬于冷水之中、卽落一錢其內、

〔經濟纂要前集五〕敎書按、今鑄錢與此法無異也、倭鉛蓋今自舶上來阿鉛卽是也、倭鉛雜鑄黃錢卽明清通行碖錢也、

〔草茅危言三〕錢幣之事

一見行ノ文錢ハ、甚ダ見事ナル製ニシテ、誠ニ天下ノ通寶トモ云ベキ者也、〇中略總ジテ新錢ヲ鑄ニ獻樣ト云コト有、樣ハ形也、此度此位ニ鑄立ルト云、形ノ錢ヲ官ニ獻ズル也、蠟形ニテ獻ジタルコトモ華域ノ書ニ見ユ、先年文錢ノ獻樣ヲ四五文許見タリ、輪郭ハ少シ大振ニテ、其細工ト云ヒ、磨ト云ヒ、格別又見事ナルコトナリシ、今日モシ新鑄有ンニハ、右獻樣程ニハ無トモ、見行ノ文錢ト輪郭形狀ヲソロヘ、細工ハ今一キハ念ヲ入テ、見コトナル程ニ仕立ベシ、或人曰、右ノ錢ヲ獻樣ト云ハ非也、是ハ胎錢迚、新タニゼニヲ鑄ント欲スル時、模範ヲ製スル爲ニ、別ニ良錢ヲ數十百文作リ、泥ニ印シテ其ドロヲ乾カシ、本鑄ヲ鑄込ノ模トスル也、ドロ乾ケバシマリテ、少ハ小ク成故、

胎錢ハ少シ大振ニコシラヘ、磨鐫文書、尤念ヲ入ルコト也ト、果シテ然リヤ、何レニモ此ゼニハ、今以テ官庫ニ存シテ、其ワケ明白成ベシ、

鑄錢雜事

〔西宮記臨時一〕改錢

大臣奉勅、仰博士令勘錢文、奏定畢、擇吉日、召能書者於陣頭、令書字樣奏聞、賜作物所彫定、副官符下鑄錢司、鑄錢司進新錢、奏解文之後、先被奉神社佛寺、勘定例賜諸司所々、又勘御料院宮親王女御更衣女官賜法、次定吉日、下宣旨於大藏省、當日大藏省、運置錢於南殿櫻樹東頭、任見參王卿立陣頭、一一進出就膝突、取手祿錢一貫、一拜出自宣仁門、賜從者、諸大夫入自日華門、隨召就膝突、取錢一拜出、可尋入也

〔貞信公記〕延喜八年十一月廿六日甲午、有新錢見參事、

〔西宮記臨時一裏書〕延喜八年十一月廿六日、左大臣令奏鑄錢司所進新錢、依例可班佛神事云々、奉仁和寺陽成院各五萬、以左右近少將給東宮二萬、親王以下外五位以上取見參、左近陣頭給之、未得解由者預之、殿上及女官、在宮中諸司所々諸陣、取見參後日給、諸陣遣左右少將、諸司所々遣藏人、〇中略廿八日、左大臣令申前后寢殿可授奉二萬、又一日承僧綱可給錢狀、僧都一人、律師一人、僧都准四位、律師准五位、仰丞依請、依仁和寺御消息所給也十二月十一日、奉諸社新錢、伊勢料付月次祭使、自餘差大中氏人奉之、中納言堪朝臣奉宣命、此錢去月廿六日取其料、卽神祇官以此日奉之、前例奉伊勢時、或付月次使、或□□宮參向時使云々、十三日、班新錢七大寺云々、十四日、給僧正聖寶、仰云、廿七日、以藏人所新錢給童親王等、男女合十一人、各四千文、又差藏人所雜色□給大學勸學奬學院等、大學二千、勸學奬學院各一千文、此依前例、九日、左少辨□善、奏去十三日諸寺新錢、

〔日本後紀五桓武〕延曆十五年十一月辛丑、始用新錢、奉伊勢神宮、加茂上下二社、松尾社、亦施七大寺及野寺、賜皇太子親王已下、職事正六位已上、僧都律師等、各有差、

〔日本紀略桓武〕延暦十八年正月甲寅、賜五位已上新錢、三位三千文、四位二千文、五位一千文、

〔三代實錄清和〕貞觀元年十月廿八日庚戌、是日鑄錢司進鑄錢、奉諸名神社幷諸山陵、及頒賜親王已下各有差、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年八月五日乙酉、是日鑄錢司進新鑄貞觀錢一千一百十貫文、勅進獻太皇太后宮及淳和院、各五十貫文、賜東宮二十貫文、頒賜親王已下五位已上見參者各有差、自諸司六位官人、迄諸衞府駕輿丁衞士、皆預恩賚焉、　十一月十七日乙丑、是日分遣使者諸社、奉鑄錢司及葛野鑄錢所新鑄錢、賀茂御祖別雷兩社使前安藝介從五位下大中臣朝臣是直、松尾社使神祇權大佑正六位上齋部宿禰高善、稻荷社使神祇大佑正六位上大中臣朝臣常道、石淸水社使主水佑正六位上大中臣朝臣坂田麻呂、平野社使神祇少副正六位上大中臣朝臣有本、梅宮社使大監物從五位下橘朝臣茂生、春日社使雅樂少允從七位上大中臣朝臣冬名、大原野社使主水正正六位上大中臣朝臣鹿主、又近於葛野鑄錢所、宗像、櫟谷、淸水、堰、小社五神、奉鑄錢所新鑄錢、告文曰、天皇我詔旨止、宗像神乃前爾申賜倍止申久、依年序漸積、貨幣已賤天、改鐃益神寶、爲貞觀永寶、常乃鑄錢司、路遠妨多爾依天、加太部之於山城國葛野郡天、令鑄作、今神社件鑄錢所爾近久坐須、仍所鑄作之早穗二十文乎、左馬助從五位下多治眞人藤吉乎差使天、令捧持天奉出賜布、此狀乎聞食天、國家平安天志、貨幣豐足米之賜倍止申賜止波久申、又曰、天皇我詔旨止、堰神乃前爾申賜倍止申久、依年序漸積、貨幣已賤天、改鐃益神寶、爲貞觀永寶、常乃鑄錢司、路遠妨多爾加太部之於山城國葛野郡天、令鑄作、今神社件鑄錢所爾近久坐須、仍所鑄作之早穗十五文乎、左馬助從五位下多治眞人藤吉乎差使天奉出賜布、此狀乎聞食天、國家平安天志、貨幣豐足米之賜倍止申賜止波久申、櫟谷、淸水、小社神告文准此、

〔日本紀略四村上〕天德三年四月五日庚辰、賜新錢於親王以下諸司官人以上、天皇幷中宮東宮奉之、親王以下、於軒廊南給之、　七日壬午、奉新錢於諸社諸寺、使可差進之由仰神祇官中務省、　十七日壬

辰、奉新錢於伊勢大神宮以下十一社、以神祇官人爲使、

〔享保集成絲綸錄三十三〕正德四午年十二月

新錢出來候間、來ル廿二日ゟ、吳服町壹丁目吳服師會所ニ而賣出べく候、武家幷町方、望次第賣渡候筈ニ候、但當年無餘日、錢數多ク出來合不申候ニ付、小形金壹分ゟ壹兩迄之內を賣渡すべく候、金の事ハ、新金又ハ小形金、勝手次第用ひらるべく候者也、

十二月

享保元申年十二月

新錢可賣渡覺

千石以上　壹人前金高五兩迄

千石以下　壹人前金高貳兩迄

右は御側衆、諸番頭、諸物頭、御役人、御番衆、醫者、小役人迄、但萬石以上幷寄合小普請ハ除之、

金壹兩迄　但與力幷御徒壹人前

金貳分迄　坊主衆同心以下壹人前

右之通新錢座吳服師共、吳服町會所ニ而可賣渡候、一度ニハ込合候ニ付、日割を以賣渡申筈ニ候、當極月中賣初メ、相殘分ハ、來二月中ゟ可賣渡候事、

一賣日之刻限期、五ツ時ゟ八時迄ニ可相渡候、且又御勘定所ゟ差出候印鑑を以、錢賣渡筈ニ候間、錢調度面々ハ、勝手次第、右判鑑請取差遣可申候事、

一極月中錢賣渡候日限は、別紙在之候、來二月中ニ日限ハ追而可相達候事、

以上

十二月

私鑄錢

〔續百一錄〕元文二年二月十七日

錢賣渡候量書

千石より二千石迄　金貳兩　　五百石より九百石迄　金壹兩　　百石より四百石迄　金三歩

五十石より九十石迄　金貳歩　　拾石より四拾石迄　金壹歩

但町方錢賣相場、壹貫文拾七匁ニ相成候迄は、金子壹兩ニ付四拾八文、金壹歩ニ付十二文ヅヽ之增賣有之候事、

賣錢日割書御所方十五日公家衆十八日地下役人

但每月右之日割ニ而、切手を以賣出させ候間、調ニ參候もの、右向々日割之前日、四ッ時より八ッ時迄之內、伊賀守御役所へ、切手受取可被差越候事、

錢賣所柳馬場三條上ル町

有來新兵衛

同　清助

此所ニ而、九ッ時より七ッ時迄、錢賣渡候事、

巳二月

〔令義解捕亡九〕凡糺捉盜賊者、所徵倍贓、皆賞糺捉之人、家貧無財可徵、及依法不合徵倍贓者、並計所得正贓、准爲五分、以二分賞糺捉人、卽官人非因檢按、而別糺捉、謂官司於其所部、非因檢按、而別自糺捉者、擒捕鑄錢、仍得盜贓者、其事相因、不合與賞、其非所部官司者、一同凡人之例、不依官司之法、幷共盜及知情主人首告者、亦依賞例、

〔律疏名例〕凡彼此俱罪之贓、謂計贓爲罪者及犯禁之物則沒官、若盜人所盜之物、倍贓、亦沒官、假有乙盜甲物、景轉盜之、彼此各有倍贓、依法並應還主、甲既取乙倍備、不合更得景贓、乙卽元是盜人、不可以贓助盜、故倍贓亦沒官、若有糺告之人應賞者、依令與賞、若私鑄錢事發、所獲作具及錢銅、或違法殺馬牛等肉、如此之類、律令無文者、其肉及錢、私家合有、准如律令、不合沒官、作具及錢不得仍用、毀訖付主、罪依法科、

〔唐律疏議 一十六〕諸私鑄錢者流三千里、作具已備未鑄者徒二年、作具未備者杖一百、○疏略 若磨錯成錢令薄小、取銅以求利者徒一年、

〔金玉掌中抄〕赦書狀

非常赦

大辟以下八虐、故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、皆咸赦除、○又見拾芥抄

〔續日本紀 四元明〕和銅二年正月壬午、詔國家爲政、兼濟居先、去虛就實、其理然矣、向者頒銀錢以代前錢、又銅錢並行、比姧盜逐利、私作濫鑄、紛亂公錢、自今以後、私鑄銀錢者、其身沒官、財入告人、行濫逐利者、加杖二百、加役常徒、知情不告者、各與同罪、

〔續日本紀 五元明〕和銅四年十月甲子、太政官議奏、令出蓄錢、勅有進位階、家存蓄錢之心、人成逐○逐恐遂字誤錙之趣、恐望利百姓、或多盜鑄、於律私鑄猶輕罪法、故權立重刑、禁斷未然、凡私鑄錢者斬、從者沒官、家口皆流、五保知而不告者與同罪、不知情者減五等罪之、其錢雖用、悔過自首減罪一等、或未用自首免罪、雖容隱人、知之不告者與同罪、或告者同前首法、　五年九月己巳、詔曰、○中略 宜大赦天下、其強竊二盜、常赦所不免者、並不在赦限、但私鑄錢者降罪一等、

〔續日本紀 六元明〕和銅七年六月庚辰、皇太子加元服、　癸未、大赦天下、自和銅七年六月二十八日午時已前、大辟罪以下、無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、沒爲奴婢、及犯八虐、常赦所不免者、咸赦除之、其私鑄錢、及竊盜強盜、並不在赦限、但鑄盜之徒、合死座降罪一等、

〔續日本紀 七元正〕和銅八年九月庚辰、受禪卽位于大極殿、詔曰、朕欽承禪命、不敢推讓、履祚登極、欲保社稷、專得左京職所貢瑞龜、臨位之初、天表嘉瑞、天地眖施、不可不酬、其改和銅八年爲靈龜元年、大辟罪已下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、咸從赦除、但謀殺殺訖私鑄錢、強竊二盜、及常赦所不原者、並不在赦限、

靈龜二年五月丙申、勅太宰府佰姓、家有藏白鑞、先加禁斷、然不遵奉、隱藏貿買、是以鑄錢惡黨、多肆姧詐、連及之徒陷罪不少、宜嚴加禁制、無更使然、若有白鑞、搜求納於官司、

〔續日本紀 八 元正〕養老四年八月辛巳朔、詔曰、右大臣正二位藤原朝臣不比等疹疾漸留、寢膳不安、朕見疲勞、惻隱於心、思其平復、計無所出、宜大赦天下、以救所患、養老四年八月一日午時以前、大辟罪已下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、私鑄錢、及盜人幷八虐、常赦所不免、咸悉赦除、其癈疾之徒、不能自存者、量加賑恤、

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十二年六月庚午、勅曰、朕君臨八荒、奄有萬姓、履薄馭朽、情深覆育、求衣忘寢、思切納隍、恒念何答上玄、人民有休平之樂、能稱明命、國家致寧泰之榮者、信是被於寬仁、挂網之徒、保身命而得壽、布於鴻恩、窮乏之類、脫寒微而有息、宜大赦天下、自天平十二年六月十五日戌時以前、大辟以下、咸赦除之、兼天平十一年以前、公私所負之稻、悉皆原免、其監臨主守自盜、盜所監臨、故殺人謀殺人殺訖、私鑄錢作具既備、强盜竊盜姧他妻、及中衛舍人、左右兵衛、左右衛士、衛門府衛士門部主帥使部等、不在赦限、

〔續日本紀 十六 聖武〕天平十七年四月甲寅、詔依巡察使上奏、原免天下諸國去年田租、又緣有所念、大赦天下、其自天平十七年四月二十四日昧爽以前、大辟罪已下無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、咸悉赦除、但犯八虐罪死者、免死長禁、私鑄錢及從者、著駄長役、鑄錢司、强盜竊盜、常赦所不免、不在赦限、其流人到配所者、准此簡擇、特令會恩、

〔日本靈異記 中〕觀音銅像反化鷺形示奇表緣第十七

大倭國平群郡鵤村岡本尼寺、觀音銅像有十二體、聖武天皇世、彼銅像六體、盜人所取、尋求无得、經數日月、平群驛西方有小池、夏六月、彼邊有牧牛童男等見之、池中有聊木頭、頭上居鷺、牧牛見彼居鷺、拾集礫塊、以之擲打、不避猶居、擲拍疲懈、下池取鷺、垂將捕之、卽入於水、見所居木、有金之指、取牽上見、觀

音銅像、顚觀音像、名菩薩池、牧牛童男、告知諸人、諸人轉聞、告知寺尼、尼等聞來見、實其像也、塗金褫落、尼衆銜繞彼像而悲哭云、我失尊像、日夜奉戀、今邂逅而逢、我諸大師、何有罪過、蒙斯賊難、然殿辭安像、以奉請寺、道俗集言、鑄錢盜取用无便、思煩而棄、定知彼見驚者、非現實歟、觀音變化更莫疑也、

〔續日本紀 二十二 淳仁〕天平寶字四年三月丁丑、勅、錢之爲用、行之已久、公私要便莫甚於斯、頃者私鑄稍多、僞濫既半、頓將禁斷、恐有騷擾、宜造新樣與舊並行、庶使無損於民有益於國、

〔續日本紀 二十七 稱德〕天平神護二年、是年民私鑄錢者、先後相尋、配鑄錢司駈役、並皆著鈴於其鈦、以備逃走、聽鳴追捕焉、

〔續日本紀 二十八 稱德〕神護景雲元年十一月丙寅、私鑄錢人王淸麻呂等四十人、賜姓鑄錢部、流出羽國、

〔類聚三代格 八〕太政官符

定私鑄錢首從并家口罪名事

首處遠流、從處徒三年、家口處徒二年半、

以前得明法曹司解偁、被右大辨官宣偁、刑部省解偁、和銅四年格云、私鑄錢者斬、從者沒官、家口皆流者、天平勝寶五年官符偁、奉勅私鑄錢人、罪致斬刑、自今以後、降一等處遠流者、今首已會降、從并家口、猶居本座、首從之法、罪各合減降、輕重相倒、理不可然、謹請官裁者、宜定罪法申上者、謹案賊盜律云、謀反者皆斬、父子沒官、祖孫兄弟遠流、名例律云、共犯罪者、以造意爲首、隨從減一等者、又云、二死三流、各同爲一減者、今比校輕重、仍從者減首一等、處徒三年、家口減從一等、處徒二年半、

寶龜十一年十一月二日（〇又見續日本紀）

〔日本後紀 二十四 嵯峨〕弘仁五年八月甲子、免四人日下部土方、補木工長上、土方者、攝津國武庫郡人、以私鑄錢著鉗、役於堀河、頗善土巧、仍弃瑕取才、

〔類聚三代格 十二〕太政官符

應定罪人配役年限事

右檢非違使解偁、○中略 右大臣宣、奉勅夫配徒之輩、既有年限、至於役使、豈期終身、靜而言之、事涉深刻、○中略 其私鑄錢、不論首從、令鑄錢使終身役之、

弘仁十三年二月七日

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年四月癸丑、遣右近衛將監正六位上坂上大宿禰當宗、近衛及俘夷等於伊賀國、索捕名張郡山中私鑄錢群盜凡十七人、進鑄錢作具及錢等、

〔類聚三代格 八〕太政官符

應沒私鑄錢者田宅資財事

右檢非違使起請偁、謹案法條、無可沒入私鑄錢者財物、而使等或必沒其舍宅資財、雖非法意、行來成例、望請編之朝章、嚴遏其奸者、右大臣宣、奉勅依請、

貞觀十六年十二月廿六日　○又見三代實錄

〔三代實錄 二十七清和〕貞觀十七年十二月庚戌朔、大和國私鑄錢者往往而在、令國宰追捕、

〔延喜式 二十九刑部〕凡私鑄錢、其作具幷錢銅等物皆沒官、

〔本朝文粹 二意見封事〕意見十二箇條　善相公清行 ○中略

一請禁諸國僧徒濫惡及宿衞人凶暴事

右臣伏見、去延喜元年官符、已禁權貴之規錮山川、勢家之侵奪田地、芟州郡之枳棘、除兆庶之蟊賊、吏治易施、民居得安、但猶凶暴邪惡者、惡僧與宿衞也、伏以諸寺年分及臨時得度者、一年之內、或及二三百人也、就中半分以上、皆是邪濫之輩也、又諸國百姓逃課役、逋租調者、私自落髮、猥著法服、如此之輩、積年漸多、天下人民三分之二、皆是禿首者也、此皆家蓄妻子、口啖腥膻、形似沙門、心如屠兒、况其尤甚者、聚爲群盜、竊鑄錢貨、不畏天刑、不顧佛律、○中略

延喜十四年四月廿八日　　從四位上行式部大輔臣三善朝臣淸行上封事

〔敎令類纂初集六十六錢〕寬永二十癸未年二月二日

覺

一諸國在々所々において、新錢鑄候事、堅御制禁也、若相隱鑄出候族有之ば可申出、縱雖爲同類、其科をゆるし、御褒美可被下之、自然脇より訴人於有之は、本人は不及申、五人組可行死罪、並其所之者迄可爲曲事もの也、

〔武家嚴制錄二十七〕雜事高札

條々○中略

一新錢之儀、何れの國にても、御免なくして一圓に不可鑄出之、若違犯之輩有之ば、可爲罪科事、

附惡錢、似せ錢、古錢、此外撰むべからざる事、○中略

天和二年五月日　　奉行

〔類聚名物考調度十五寶貨〕寬永通寶錢

文錢といふは裏に文字有、これは松平伊豆守、奈良の大佛を鑄つぶして作りたる錢也、○中略この後に京師比叡山の坂本にて鑄たる錢有、南都の僧□□といふ者の筆跡にて、永字の下の前を上へはねたり、世には是を大佛鑄たりし錢也とて、僧徒は是を見てはとりあつめて、又佛に鑄直す事有は僻事也、是は私鑄錢にて有しとて、そのともがら皆刑罰にあひたりとかや、よて此錢をば刑罰錢ともいへりし事あり、

〔泉貨鑑十五近代和錢〕貞享通寶錢　靈元帝貞享年中ニ鑄、銀錢銅錢二樣アリ、背穿ノ上下甲子ノ二字アリ、按ズルニ、此錢徑リ八分、重サ一錢、今見ルトコロ皆樂錢ニシテ、座錢ト見ユルモノナシ、

銀代通寶錢　東山帝元祿十六癸未年正月、伊勢屋道喜ト云ヘル者、銀代錢ヲ鑄ント官ニ願ヲ上

タリ、故アッテ免許ハナカリシガ、內々ニテハヤ鑄タルモノ今ノ世ニ殘レリ、或說ニ曰、此錢徑リ九分五厘、重サ一錢六分、銀一分五厘ノ通用、吹高ハ百二十萬貫文ノ願ニテ、製作極上ノ銅ニ金ヲ和シ、永永損ゼズ破レズ朽ザルヤウニ調合鍛錬シタリ、百文ハ金一分ニ當リ、銀十五錢目ニ當ル、百疋百文、千疋一貫ノ定メナリ、按ズルニ此錢今ノ世尚コレアリ、大小輕重前ニ說トコロノ如シ、

〔鑄錢考〕銀代通寶　或說ニ、神善四郎、守隨彥太郎、銀代錢通用被仰付候テハ、秤座退轉ニ及候ヨシ歎訴申ニヨリ、不被仰付ト云傳フ、鹽川氏ノ說ニハ、願人大坂上町相模屋利兵衞、當時四ツ寶銀通用ニテ、世上小玉銀ノ小キ拂底ニ付、寶永四丁亥年、銀代通寶ノ願ヲ上ルト是アリ、

〔泉貨鑑 十五 近代和錢〕寶永錢　東山帝寶永四丁亥年、始メテ大錢通行ノ願ヲ上タリ、此錢徑リ一寸二分五厘、重サ二錢五分、面文左右ニ寶永ノ二字ヲ付、貨ノ外郭ニ萬代通用ノ四字ヲ極印ニテ打タリ、故アッテ寶永通寶ト改ムベキ由下知アリシトナリ、按ズルニ此錢免許ハナカリシカドモ、ハヤ內々ニテ鑄タル錢、今ノ世尚殘レリ、大小輕重前ニ說トコロノ如クニシテ、文字製作、銅色錢質、銀代通寶錢ト少シモ異ナラズ、背ノ萬代通用ノ四字見エザルモノ多シ、此錢モマタ其名ヲ追テ僞リ造ル者アリ、然レドモ皆樂錢ニシテ座錢ニアラズ、

〔筑前國續風土記 十四 遠賀郡〕錢屋圖　熊手村にあり、いつの比の事にや、昔此所にて錢を鑄けるといふ、其錢の銘は、元通國吉と有しとかや、

〔御書付留 五〕奥州筋深山之內ニ而、通用錢致隱吹候もの有之趣相聞、不屆ニ候、右體所業之者於有之者、御料は最寄御代官陣屋、私領之分は公事方御勘定奉行月番宅へ可訴出候、若隱置、外より於相知者、吟味之上急度可申付候、
右之趣御料は御代官、私領は領主地頭より可被相觸候、尤御代官幷領主地頭より、嚴密ニ遂吟味、可被申候、外より於相知は可爲越度候、

文化三寅年四月

〔明慶錄〕文政九年十月十八日

近來通用之鐵錢之內、紛敷惡錢相交候を見當、去ル七月中、右錢持參、兩替屋行事共訴出候間、右錢出所、遂㆓吟味㆒候得共、今以相分り不㆓申候㆒、依㆑之此後改方之義ハ、兩替屋共銘々心付、紛敷惡錢見當候はゞ削除置、其組行事共江取集、一箇月限、月番之番所へ相納可㆑申候、

十月十八日

〔天保集成絲綸錄九十一〕天保七申年八月

世上通用小錢之內、紛敷鐵錢入交有㆑之、右者贋錢ニ付、以來者仙臺錢同樣撰出置、毎月月番之番所江相納可㆑申旨、去ル文政九戌年十月中、申渡置候處、此度吹方被㆓仰付㆒候、新鐵錢形似寄ニ付、善惡難㆓見分㆒段申出候間、相糺候處、此度吹方被㆓仰付㆒候、新鐵錢之儀者別紙之通、古形とは字體も變り居、見分ヶ出來、相紛候儀も無㆑之候間、去ル戌年中、申渡置候通、贋錢者是迄之通撰出し置、月番之番所江相屆可㆑申候、

申八月

明和之度字體

寬。永通寶

此度之字體

寬。永通寶

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年八月甲子、以㆓紫微內相藤原朝臣仲麻呂㆒任㆓大保㆒、勅曰、褒㆑善懲㆑惡、聖主格言、賞㆑績酬㆑勞、明主彝則、其藤原朝臣仲麻呂者、晨昏不㆑怠、恪勤守㆑職、事㆑君忠赤、施㆑務無㆑私、〇中略因㆑此論之、准㆑古無㆑匹、汎惠之美、莫㆑美㆓於斯㆒、自㆑今以後、宜㆘姓中加㆓惠美二字㆒、禁㆑暴勝㆑強、止㆑戈靜㆑亂、故名曰㆗押勝㆖、朕舅

之中、汝卿良尙、故字稱尙舅、更給功封三千戶功田一百町、永爲傳世之賜、以表不常之勳、別聽鑄錢。擧稻、及用惠美家印、

古事類苑

泉貨部三

錢下

古事類苑

泉貨部三

錢下

錢直

〔續日本紀 八 元正〕養老五年正月丙子、令天下百姓、以銀錢一當銅錢二十五、以銀一兩當一百錢、行用之、

〔續日本紀 九 元正〕養老六年二月戊戌、詔曰、市頭交易、元來定價、比日以後、多不如法、因茲本源欲斷、則有廢業之家、末流無禁、則有奸非之侶、更量用錢之便宜、欲得百姓之潤利、其用二百錢當一兩銀、仍買物貴賤、價錢多少、隨時平章、永爲恒式、

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜三年八月庚申、太政官奏、去天平寶字四年三月十六日、始造新錢、與舊並行、以新錢之一、當舊錢之十、但以年序稍積、新錢已賤、限以格時、良未安穩、加以百姓之間、償宿債者、以賤日新錢一貫、當貴時舊錢十貫、依法雖相當、計價有懸隔、因茲物情擾亂、多致諠訴、望請新舊兩錢、同價施行、奏可、

〔續日本紀 三十五 光仁〕寶龜十年八月壬子、勅、去寶龜三年八月十二日、〇庚申太政官奏、永止舊錢、全用新錢、今聞百姓、徒蓄古錢、還憂無施、宜聽新舊同價並行、

〔中外錢史 二〕按三年〇寶龜八月官奏、無止舊用新之語、且新舊同價並行、既制可矣、然則今度勅定文義不可會也、後識者宜辨之、

〔小田原陣文書 古文書抄所引〕條々

一永樂錢事、金子壹枚に貳拾貫宛、びた錢ハ、永樂壹錢に三文たるべき事、〇中略

已上

天正十八年八月日　印（○豐臣秀吉）

宇都宮彌三郎殿

〔武備志（日本考）二百三十一〕錢鑄天順永樂洪武、（錄自琉球高麗得之）銀一兩換三百三十三文零、用三文抵一分、總錢千稱一貫、每米一石常價一兩、中國斛可三石、

○按ズルニ、是ハ博多互市場ノ事ヲ云フナリ、此書ハ明國嘉靖四十年ノ撰ニシテ、我永祿四年ニ當レリ、

〔日本風土記一〕古文錢（倭不自鑄、但用中國古錢而已、每一千文價銀四兩、若福建私新錢、每千價銀一兩二錢、惟不用永樂開元二種、）

○按ズルニ、日本風土記ハ、全浙兵制考ニ附セルモノナリ、兵制考ハ、明ノ侯繼高ガ、豐臣秀吉ノ征韓ノ役ニ就キテノ撰ナレバ、風土記モ同時ノ撰ナルベシ、

〔御條目上〕定

一金子壹兩ニ永錢壹貫文たるべき事

一金子壹兩ニ京錢可爲四貫文、但鉛錢、形なし、大割、新錢、へいら錢、此五錢之外、一切撰まじき事、○中略

右之旨ヲ以、御年貢幷諸商賣ともに取あつかふべきもの也、仍所被定置如件、

慶長十四年酉七月十九日　無判

〔御條目上〕覺○中略

一最前如御定、金子壹兩ニ四貫文之賣買いたすべし、若背御法度、致高下賣買者有之ば、其賣買の錢金過料として、從雙方可出候事、

右條々於相背輩は、其町壹町より過料として、家一軒に百文宛可出之、幷其所ノ代官過料として、

五貫文可ㇾ出候、堅可ㇾ申ㇾ附候也、

元和四年戊午二月十二日

對馬守
大炊介
上野介
備後守

〔御當家令條二十九〕定

一錢之賣買、金壹兩四貫文御定之上は、勿論壹分に壹貫文たるべき事、

此旨を相背、高下之賣買仕に於ては、御定之通、違背之方より、うりかふ錢金一倍可ㇾ出事、〇中略

右可ㇾ相ニ守此旨一、若違濫之輩於ㇾ有ㇾ之は、其在々所々、代官庄屋、至ニ町中一は年寄迄、爲ニ過料一五貫文、其外は家壹軒より百文宛可ㇾ出ㇾ之、見出す者には、右之過料錢、不ㇾ殘可ㇾ被ㇾ下之者也、仍如ㇾ件、

寛永二年丑八月廿七日

〔吹塵錄十五〕明暦元未年十二月

一町中に而、錢取引之儀、時々之相場次第、相對に而賣買可ㇾ仕事、

一御定之直段之如く、金子壹兩に四貫文、同壹分壹貫文に買可ㇾ申と申輩於ㇾ有ㇾ之ハ、買候者之主人江右御作法之段能々申候得と可ニ相斷一候、其上にも違而御定直段に買可ㇾ申と申者には、兩御番所江御斷可ㇾ申上候事、

一最前も如ㇾ申觸候、錢買〆致し、〆め賣仕事、堅可ㇾ爲ニ停止一事、

十二月

〔享保集成絲綸錄三十二〕元祿十三辰年十一月

覺〇中略

一錢之儀も、御藏元拂金子壹兩ニ四貫文替之積ニ候間、世間准レ之金子壹兩ニ錢四貫文替之積可二相心得一候、是又兩替屋とも差引利潤可レ有レ之候間、當年ゟ來年十二月迄、金子壹兩ニ錢三貫九百文ゟ高直ニ仕間敷候事、

十一月

〔地方凡例錄十一〕正德二壬辰年、文廟〇德川家宣薨御之砌、元祿金を止め、慶長金に可レ復旨御遺命に依て、乾金彌賤く成、一兩錢貳貫五六百文に成、

〔貨幣通考〕頭書正德四年十二月、官より新錢賣渡せし價、兩に二貫八百八十文と云事、官庫新錢賣渡帳と云ものに見ゆ、〇中略

同正德五年十一月、前同文に曰、兩に三貫四百二十五文、〇中略

同享保二年八月、官庫新錢賣渡帳云、兩に二貫六百八十八文、

〔正寶事錄〕享保七年三月

此頃相場、銀壹匁に錢七十五文、

〔正寶事錄〕享保九年十一月

一頃日故もなく、追日錢相場高直に相成候儀、利潤之爲、買置〆賣仕候者有レ之と相見、不屆に候、錢屋仲間之儀ハ不レ及レ申、諸商賣之者、其外に而も右體之族有レ之ば、及レ聞及レ見次第、錢屋共より可レ申出一候、急度可レ遂二吟味一候、若右之儀不レ申出一故もなく只今之通、錢相場高直に有レ之ば錢屋共申合候儀と被レ存候間、曲事に可レ申付一候、

一切賃之事も、頃日故なく高直に仕候、如何樣之子細に候哉、切賃押下げ、みだりに高直に仕べからず候、相背候兩替屋ハ、曲事に可レ申付一候、

一右之通相觸候、以後錢買候者有レ之時、小判小粒切候者有レ之節、當分無レ之由を申、賣買不レ仕兩替屋

錢屋有之ば、早速何方より成とも、月番之番所江可申出候、急度曲事に可申付候、

〔吹塵錄十六〕元文元辰年十二月三日

一錢之儀、江戸ゟ諸物之價に在方江取之、又江戸江も錢差出相拂令通用候處、金銀吹直被仰付候以後、別而在方錢相場、江戸ゟ高直に仕、江戸江差出相拂不申、在方江錢持參仕候樣に仕、或は賣溜錢等貯置候ものも有之由相聞、不屆之至に候、向後は前々之通、江戸江出候樣可仕候、萬一此已後貯置候者有之候はゞ、吟味之上、急度可申付候、尤錢相場高直に仕間敷事、

右之趣、關八州伊豆甲斐、御料は御代官、私領は地頭ゟ、可相觸旨可被達候、

十二月

〔鑄錢考〕攝州加島村錢座、元文三午年ヨリ銅錢ヲ鑄ル、翌四未年ヨリ鐵錢ヲ鑄、同五申年正月廿日ヨリ、賣出ス時ノ相庭ヨリ、金壹兩ニ八十文下ゲ也、

江戸本所押上村錢座、元文四未年六月ヨリ鑄ル、白目錢金一兩ニ四貫文、鐵錢同四貫貳百文、

〔正寶事錄〕寬保三年閏三月

文字金御吹替已後、鳥目兩に貳貫四百文、此節兩に四貫文餘、

〔續正寶事錄〕寶曆十四申年十二月十四日

錢高直に付、元文元辰年振合を以、商人共藏穴藏等迄改之儀、申出之條覺書、

此節錢相場、金壹兩に貳貫八九百文位にて、錢拂底故賣買無之、翌酉年豐前守樣〇町奉行依田御番所にて、錢屋一番組ゟ廿七番組迄、人數五百九十三人不殘御吟味有之、同年五月廿一日、錢屋共壹軒より過料錢拾貫文、此金貳兩貳分、金納被仰付、　但室町一丁目永良と申錢屋、錢四百貫文餘所持致、過料金三拾兩被仰付候由、

〔貨幣通考〕頭書明和四亥年十月、御切米御金渡り之內、步通りを以鐵鑄錢にて渡る、

同明和五子年二月叉錢渡り、此時世間相場四貫貳百五六十文也、御渡り相場四貫三百文たり、

〔牧民金鑑 十五 通用金銀〕安永元辰年十一月

水戸幷仙臺之鑄錢、去る子年より御免有之、尤江戸廻無之筈に候處、田舍錢等相廻候風聞有之由に而、錢相場次第に引下、夫に付商人共諸色直段を引上、末々難義に相成候趣相聞候に付、右水戸仙臺之鑄錢、年季內には候得共、此度相止候間、其故を以此節錢相場追日引上候趣相聞候、左候得ば諸色直段も相應に引下可申義に候間、是迄之通、諸品高直に賣買不致樣勘辨いたし、町中江可被申渡候、

右之通、町奉行江申渡候間、可被得其意候、

〔憲法部類 八金銀〕安永三午年九月八日

鑄錢定座幷伏見鑄錢とも、吹方年數にも相成、尤去巳年、吹方減少も有之候得共、今以錢相場格別下直に而、諸色直段ハ引上、米穀ハ下直に相成、世上難儀之趣相聞候に付、此度當表幷伏見とも、鐵錢吹高不殘差止、眞鍮錢之義ハ、吹高半減に申渡候間、錢相場も引上可申に付、諸色直段、錢相場に釣合候樣引下、賣買可致候、若錢相場而已不相當に引上、諸色は高直之趣相聞候はゞ、吟味之上、急度可申付者也、

右之通町々江相觸候間、其旨可被相心得候、

九月

〔天明集成絲綸錄 四十四〕安永三午年九月

御勘定奉行江

當時錢相場、追々下直ニ相成、世上難儀之由相聞候ニ付、公儀鑄錢之分、吹方被相止、尤眞鍮錢之儀者、吹方半減之積相成候ニ付、水戸殿御領分鑄錢之儀も、差留可被仰出候得共、去巳年格別之御願

之上、再吹被仰出候儀ニも候間、御領分鑄錢之儀者、其御沙汰ニ不被及候間、其段可被申上候、且吹立錢之分、不殘金壹兩ニ付、五貫四百文替之相場を以、御買上被仰付候、尤年限中、世上錢相場高下ニ不拘、五貫、四百文替之定相場を以、御買上ニ相成候間、此旨可被相心得候、委細之儀者、御勘定奉行江可被承合候、

九月

右之通、水戸殿家老江相達候間、可被得其意候、

〔吹塵錄十二〕御內密錢相場等取調ニ付添而申上候書付

後藤庄三郎

錢相場引上ゲ方、其外御內密伺候儀ニ付、正德年中ゟ、御金吹替之時々、錢相場高下手覺之趣申上候、

新金壹兩　但金位五拾目七分
小判壹兩之目方四匁七分六厘

此錢相場四貫六百文餘替

是者正德年中、吹立被仰付、文字金吹替迄之錢相場、凡右之釣合ニ相見申候、尤新金之儀者、當時六割半之增步を以、文字金ニ御引替有之候古金ニ御座候、

文字金壹兩　但金位六拾六匁九分五厘六毛五糸
小判壹兩之目方三匁五分

此錢相場

元文元辰年吹替初年

三貫百文ゟ三貫貳三百文位迄

同二巳年ゟ明和二酉年迄

貳貫八百文ゟ三貫百文位迄

又

三貫九百五拾文位ゟ四貫文迄ニ、相場引下ゲ候儀も御座候、

是者元文年中吹立被仰付、當時迄通用凡六拾五年ニ相成申候、

凡四貫百文ゟ四貫百五拾文位（明和二酉年鐵錢吹立被仰付、兩三年之內錢相場、）

凡四貫貳百文ゟ四貫三百文位（明和四亥年眞鍮錢吹立被仰付、兩三年之內錢相場、）

凡五貫五百文ゟ五貫六百文位（明和七丑年頃ゟ同九辰年迄之內）

凡五貫三百文ゟ五貫六百文位（明和九辰年貳朱判吹立被仰付、兩三年之內、）

右之通御座候處、當時錢相場、金壹兩ニ付六貫五六百文替ニ引下候儀、私領鑄錢願等、無據通用錢相嵩み、幷貳朱判之遣方利辨ニ相成、自ら錢兩替少く、諸商人共取集候錢は、相互ニ讓り合候形ニ而、道理之外、諸色之直段ニ相響候筋も可有御座儀、且數年來之文字金、追年理輕目も生候ニ隨ひ、世上取遣差支候趣等、旁考合候處、何れニも先銑錢之遣ヒ方被減、諸色治定之相場、相立候樣仕度奉存候、見越候儀ニは御座候得共、別紙御見合奉申上候、猶又御差圖次第、積り立等可申上候、

申閏四月　十〇二寛政年　後藤庄三郎

〔市中取締類集〕天保七年十二月九日町年寄申渡

本兩替屋行事　三組兩替屋行事　番組兩替屋行事

米穀其外諸色、格外高直之折柄、錢相場下直にて、輕きもの共、取續難澁之趣相聞候に付、御救旁、今

度錢御買上被仰出、且相場之儀も當分之内金壹兩に五貫七百文より六貫文迄、御定被成下候に付ては、今度書上候所持錢有之ものは、眼前金壹兩に七百三拾貳文程之拔きに相成、其儘被差置候ては、兩替屋に於て、不時過分之利德に相成、御救旁平等之御趣意にも相振候に付、右相場違過錢之分、八歩通は上納切に可致、其餘利德は、兩替屋共へ被下候事、

右相納候過錢之儀は、夫々御救方之内へ御加に相成候へば、全平等之御仁惠與難有可奉存候、其段心得違無之樣可致候、

右御奉行所依御差圖申渡

錢壹萬千七百七十六貫七百四十五文　過錢納高

此金貳千拾三兩餘

金壹兩に錢五貫八百四十八文替之積

〔市中取締書留〕天保十四年卯年正月十七日

錢相場之儀、金壹兩に付錢六貫五百文換之積たるべき旨觸置候處、口錢之定無之候錢屋共打。錢。と唱、錢請取候得共、不同有之、此節追々錢拂底相成候に付、少分之兩替致候錢屋共ハ、利潤薄、渡世相休候者も有之候哉に相聞候間、當分之内、素人より錢買請候節、當百眞鍮錢ハ、金壹兩に付四拾八文迄、小錢ハ同六拾四文迄之打錢請取、同渡世之者共ハ、右に准ジ相應之打錢差遣、無滯取引可致候、舊臘申付置候通、彌相心得、無差支取引可致候、且他國より錢相廻候儀、差止置候得共此節錢拂底に付、追而可及沙汰候迄、仙臺角錢石卷錢之外ハ、他國より相廻候儀勝手次第致、聊も錢不貯置、早々賣渡候樣可致候、若利潤を貪り、隱置不賣渡者有之候はゞ、吟味之上、當人ハ勿論、町役人共迄可為越度候、

右之趣、町中可觸知もの也、

卯正月

〔辻氏御觸留〕嘉永二酉年十二月町觸

一此節市中錢拂底に而、兩替屋共賣錢差支候趣相聞候に付、金壹兩ニ付錢六貫五百文之定相場立置候儀には候得共、當分之內、天然之相場に復し、打錢之義も以前之通相心得、錢賣買可致候、尤當時有來兩替屋之外にて、錢賣買令停止候、然上は兩替屋共利德に迷ひ、一時に相場格別引立候樣之儀は、決而致間敷、早々御府內は勿論、在方迄も錢買集、潤澤致候樣、厚相心得、正路に渡世可致候、且相場之儀も、日々月番之番所へ可相屆候、若相背、兩替屋共利潤に拘り、高下共不當之相場相立候はゞ、嚴重之咎可申付候、

右之趣、町中不洩樣可觸知者也、

酉十二月廿四日

〔聞のまに〳〵〕嘉永二年己酉十二月九日、去年の秋比より賣錢拂底也、此節に至ては、少々の買物は、つり錢相斷候て不賣、甚不自由也、商家大方店に書付出し、金子差引一切御斷申上候と有、廿五日、市中錢相場、是迄金貳朱には八百拾貳文にて增減なかりしが、世間錢拂底に成、依之兩替屋共相場相直候樣被仰付、廿六日、金貳朱に錢七百五十貳文に成、

〔明慶錄〕嘉永四年十二月八日町々兩替屋へ

錢相場之儀、去る寅年、壹兩に付錢六貫五百文に定相場相立候處、相場高下之活用無之故、兩替屋共利潤薄く、自然氣配之勵み無之、漸々賣買差支候趣相聞候に付、去る酉年、天然之相場に復シ、打錢之義も以前之通相心得、當時有來兩替屋之外、錢賣買令停止候旨、其外品々觸示し置、度度御拂錢等も有之上は、右定相場內外にて上下致、格別に相場引上候儀は致間敷處、其後も更に下落之儀無之、六貫三百文以下にて、年々十月下旬より、追々高直に相成、就中暮に至候而は格

別に引上げ、處により候ては金貳朱を限り、其餘難賣渡抔、相斷候兩替屋共も有之哉に相聞候、必竟定相場相立候は、其頃錢相場下落致、物價に相響候故を以、被仰出候儀之處、其後俄に拂底可相成謂無之、右は全兩替屋共儀、定相場に而は渡世之利潤薄、其上問屋組合停止に相成、素人にても錢賣買、勝手次第致候儀に付、渡世之氣配薄く、入用之時節に、別段出精買入方も不致候に付、手元に有錢少く不賣渡故、世上之差支にも相成、右に付、外工商を始、武家寺院等に至迄、日用之差支を厭ひ、一般に貯置候人氣に傾き自然融通滯り候儀與相聞候、然る處前々之如く、天然之相場に復、殊更組合再興相成候上は、旁冥加を存、實直に相場相立、渡世可致處、右惡弊に泥み、拂底を唱、相場相進候樣いたし候は、以之外不埒之至候、〇下略

子年　錢掛名主共

錢相場書上

（市中取締續類集錢相場）嘉永五子年十一月

十一月十四日夜

一金壹兩に付　當月六日書上より拾六文下直に御座候

眞鍮錢	六貫貳百三拾貳文	賣上
百文錢	六貫貳百八拾文	買下

金貳朱に付

錢七百七拾六文

一金壹兩に付　右同日書上と同事に御座候

小錢

六貫三百拾六文	賣上
六貫三百八拾文	買下

金貳朱に付
小錢七百八拾六文
右の通御座候以上
子十一月十五日
錢掛名主共

〔貨幣通考〕安政三辰年兌舖之稟狀〇中略
當百錢　以二一分銀一　實六貫六百八十文
當四錢　以二一分銀一　實六貫七百三十二文
小錢　以二一分銀一　賤二于大錢一每兩三十二文
以上
七月廿二日
中井新右衞門
羽田樣御役所

〔明慶錄〕萬延元年七月十九日錢相場
當百錢　金壹兩に付六貫七百四十八文
金貳朱に付八百四十二文
眞鍮錢　金壹兩に付六貫六百文
金貳朱に付八百貳十四文

〔吹塵錄十八〕慶應元丑年閏五月九日、水野和泉守殿御渡
近年諸國共、錢拂底差支候由、古銅直段高直に相成、銅錢釣合不ㇾ宜故と相聞候間、眞鍮錢小錢共、夫夫天然の相場に任せ、壹枚に付相應之步增通用可ㇾ致候、百文錢鐵錢の儀は、是迄之通に而、何れも無二差支一通用可ㇾ致候、右は世上融通之御趣意に候條、其旨可二相心得一、萬一兩替屋共、利德之爲、不都合之取引致すに於ては、可ㇾ爲二曲事一候、

但銅小錢之内、耳白錢引替可レ相成レ間、兩替屋方江可レ差出レ代り之義は、相場を以可レ相渡レ不レ貯置レ差出可レ申候、

右之通、御料は御代官、私領は領主地頭ゟ、不レ洩樣早々可レ被レ相觸レ候、

閏五月

〔嘉永明治年間錄十四〕慶應元年乙丑閏五月十二日江戸市中兩替屋ニ於テ錢歩增ノ張札ス

寛永通寶文錢幷に耳白錢一枚に付六文　同銅錢一枚に付四文

同四文錢一枚に付十二文　文久永寶四文錢一枚に付八文

右に付、耳白銅錢、青四文錢、兩三日中、兩替屋江集る事山の如し、兩替屋是を賣捌んとするに、一人も買ふ者なし、依レ之無レ據、右三品は兩替屋受取ず、追々不通となれり、

巻說、最初兩替屋へ御達の儀も、前書武家江御達書の通り、相當の歩增を以て通用致さすべく趣の由、然る處兩替屋共より、何錢は何程、此錢は何程と、私共より銘を打ち、候事は仕兼候に付、上より名目を御付、御達可レ被レ下旨相伺ひし處、當時の銅からかねの相場に引合せ、歩增可レ致旨被レ仰付、依レ之兩替屋一統衆評之上、かな物屋を相談に組入、銅からかね相場江引合せ相談せし處、青四文錢一枚に付、八文位の價有レ之趣申立候處、青四文錢の儀は、世の中に餘程隱れ居候哉と被レ存候得共、八文に致候はゞ、不レ殘出來り可レ申哉の御尋に付、其儀は何共難レ差定レ旨申上し處、然る上は格別高直に致候はゞ、出で來り可レ申哉に付、格外高直に可レ致旨被レ申渡レ候に付、猶又衆評の上、八文の上、高直に致し候はゞ十文なれ共、九六通用に付、十文は差支の趣申立し處、然る上は一段高價可レ致旨御達に付、無レ據一枚拾二文と伺ひ濟し由、併右内證内評は知らざれ共、自然格外の高直の錢と人々思ひしと見え、賣人有れ共買人なし、無レ據中絶す、文久四文錢計りは、八文に付無レ滯通用せり、然る處在々江出ては、文久四文錢も暫く通用無レ之、百文錢鐵錢計り通

用し、大に差支の趣、翌寅年に成て、漸く文久四文も、八文の通用始りし處も有し由、

〔貨幣通考〕錢之直、其始毎兩四貫、元祿正德元文改幣之際、一時低昂不定、必鑄錢以權其輕重、漸復舊古、不甚出、毎兩四貫額、明和以還、鐵錢行而其品下、當四行而其量輕、且海內之錢大增、其數二朱一朱之幣行而錢之用止于數百、錢日輕至毎兩六貫六七百文、其始細民非不苦、然久之傭直脚賃亦漸貴、錢之賤爲常、人亦不患之、往日天保、日光之時、慮價昂貴、立定額、爲毎兩六貫五百文、久之錢買患其乏利少、籠絡蔽塞、世之錢乏如不足用、嘉永二年、止定價、一時騰貴、至六貫以內、後復漸降、安政二三年之際、毎兩直六貫七百餘、錢之降今古未之有也、

〔佐渡志 食貨一〕金錢ヲ換ル相場トイフコト、此國ノ古キ日記ナドヲ見ルニ、元ハ江戶ノ相場ヲ聞テ進退セシト見エ、正德四年甲午ノ夏、金銀ノ令下リシ後、一兩ノ金ヲ錢四貫三百三拾貳文ニ易ヘシメラレ、元文三年戊午ヨリ、文字金一兩ヲ三貫文ニ換ヘシメラレシナドモ、皆此國ニテ定メタルニハアラズ、後ニ金ノ直ノボリテ、一兩ヲ錢四貫四百四拾八文迄ニ換ヘケルニ、寶曆十年庚辰ヨリ、一兩四貫二百文ヲ以テ、官庫出納ノ定直ニゾセラレケル、サレドモ國中年々ニ、金貴ク錢賤シクナリシ故、天明三年癸卯、關東ニ申シテ、明ル四年甲辰ヨリ、相川市中、及ビ雜太郡河原田町、加茂郡夷町、羽茂郡小木町、四箇所ニ、越後ノ出雲崎新潟ヲ加ヘテ、都テ六箇所ノ相場ヲ平均シ、一年ニ四度 二月五月 八月十一月 改ラルヽコトニナレリ、其後年經ルニ從ヒ、金貴ク錢賤クナリテ、文化改元ノ年ヨリ金一兩ノ直七貫文ニ下ルコトナシ、

按ズルニ、佐渡ノ國、三都會ノ地ヲ去ルコト甚ダ遠ク、其餘ノ國々トイヘドモ、通商スベキ地ハ皆近カラネバ、何等ノ賣買交易モ、運送ノ費アルヲ以テ、他方ニ向ヒテハ多ク金ノミ用キテ錢ヲ用キズ、サレバ此國ノ貨、他ノ國ニ去テ、國ノ內貧シキ時ハ、金先ヅ乏シクナリ、錢ハ後レテ殘ル故ニ、自ラ金ノ直貴クナルナリ、又他ノ國ノ貨、此國ニ入ルコト多クシテ、國ノ內富ル時ハ、金

先ヅ多クナリテ、イツトナク錢ノ直貴カルベシ、

〔政談二〕錢ノ直段ノコト、慶長ノ頃ハ、一兩ニ四貫文也ト承ル、其錢國々ヘ行渡テ、段々不足スル故、松平伊豆守、大佛ヲ鑄潰シテ錢トスルヨリ、錢ノ員數殖テ、此三四十年以前ハ、一兩ニ五貫文シタリ、元祿ノ比ヨリ、復四貫文ニ成、正德ノ末ニ、一歩ニ六七百文シタルハ、乾金ノ鑄直ルベキコトヲ知テ、損ヲ爲間敷爲ニ、急ニ上タルコト成レバ、商人ノ私曲ニテ、錢ノ員數ニ依テノコトニテハ無也、今亦一兩ニ四貫文ノ內外ニ成テ、夫ヨリ下ヘ下ラヌコト、是錢ノ減少シタルコト、其道理二ツ有、一ツニハ錢ノ員數少カラズトモ、元祿以後、取分テ商人、田舍ノ末々、山ノ奧迄モ行渡ニ依テ、金銀錢トモ、田舍ニ多ク行タル也、金銀ハ旅ニ自由ニ持ルヽ故、遠方ヨリモ早ク歸コト成ドモ、錢ハ重キ物ニテ、旅ヲ所持スルニ不便利成物ナル上ニ、田舍迄モ商人行渡テ、田舍ノ者ドモ、今ハ物ヲ買コトヲ知タレバ、不斷ノ小用ハ錢ニテ出スコト成故、錢ハ皆其所々ヨリ御城下ヘハ歸兼ルコト也、依之錢ノ員數減少セズトモ、商人ノ廣ク行渡ル程、錢引張足ラヌ道理ニテ不足スルコト也、二ツニハ實ニ減少シタルコト有、松平伊豆守、佛ノ大慈大悲ヲ能會得シテ、大佛ヲ鑄潰シテ錢ニ吹タルヲ、後生願ノ者共、勿體無コト也迚、其錢ヲ見當リ次第拾ヒ聚テ、佛像ヲ鑄、或ハ鐘ヲ鑄ルタグラノ內ヘ入テ、今ハ大形無成タリ、件ノ大佛錢ハ、點畫ニ易リ有テ、見分ノ成故也、其外火事ニモ燒、亦湯殿山ノ水中ヘモ投入、淺間山ノ火中ヘモ投入、六道錢トテ、地中ニモ埋積リ〳〵テ莫大成ベケレバ、實ニ減少シタル成ベシ、

〔經濟錄五食貨〕正德ノ末、章廟〇德川家繼ノ時ニ及デ、又新錢ヲ鑄セシメラル、寬永以來ノ錢ヲ法トシテ、文ニモ寬文通寶ト書ケリ、〇中略其後民間ノ錢又少クナリテ、價貴キニ因テ、享保中ニ又新錢ヲ鑄セシメラル、正德中ノ錢ト同品ナリ、此錢行ハレテ、民間ニ錢又多クナレリ、錢少ケレバ價貴クナリ、多ケレバ賤クナル、他ノ貨物ノゴトシ、凡錢ノ直ハ、寬永ノ錢ヨリ、金一兩ニ四貫文ヲ以テ定ト

ス、上ヨリ賜ハリ下ヨリ納ムルニ、皆此直ニ用フ、然レドモ民間ニテハ、金一兩ニ四貫八百文以上ナリ、少キ時ハ四貫文ニ及バザルコトアリ、多キ時ハ五貫文ニ至ル、士人ハ錢ノ賤シキヲ利トシ、民ハ錢ノ貴キヲ利トス、錢ノ貴キハ金ノ賤キナリ、錢ノ賤ハ金ノ貴キナリ、商賈ハ錢ノ貴ヲ利トストイヘドモ、錢賤キニモ取ルベキ利ヲバ失ハズ、只士人ハ米ヲ賣テ金ヲ取リ、金ヲ以テ錢ヲ買ヒ、錢ヲ以テ萬事ニ用ヲ辨ズル故ニ、金錢ヲ鍥貴ケレバ用足ラズ、商賈ノ錢賤クテモ、利ヲ失ハザルモノト同カラズ、サレバ今ノ政ハ錢ヲ豐饒ニシテ、價ヲ賤クスルニシクハナシ、

〔人見雜記〕余[illegible]〇ト十歲の頃まで、古金通用なり、古金壹分に錢壹貫貳百文の左右なり、元文年中ふきかへ有て、今の文金になりたり、其頃は文金壹分に錢七百文ほどかへたり、上下共に文金をいとひ、諸物の直段、奉公人の給金まで俄に高くなり、人々苦しめり、然るに其後段々に錢を多く鑄出しければ、漸く金の位上り、寬保寬延の頃は、壹分に錢壹貫五六十文かへたり、是を文金の位至極したると人々おもへり、其後又錢の數へりしにや、錢次第にたかくなり、寶曆九年の頃ゟ、近頃まで壹分壹貫文、或は壹貫に足らず、九百文程もしたりしに、去年明和五子年、大分鐵錢を鑄出し、水戶仙臺にても多く造り出しける故に、錢俄に賤くなり、壹分に壹貫貳百貳三十文までうりけるは、文金の位、古金に勝れるがごとし、僅の年歷にて、物價の直、大に高下出來る事如此、いにしへの事跡、今にあてがたきこと押はかるべし、

或人附記、此後錢價いよ〳〵賤く、當文政八酉年は、壹分に壹貫六百廿四文がへなり、是は南鐐通用以來、下落せし如くにおもへり、

〔河方記〕正德四年九月、鐚壹分に七百四五十、二三十文、鐚調候儀、町人鐚無之由に而、御町戶〇木にてうり不申、人々難儀仕候、江戶の金鐚調不自由之由七百四五十、二三十文仕候由、

享保三年戌閏十月、當月中比ゟ、乾字金一分に、鐚五百八十文內外うりかひ仕候、

當月錢新金壹分に壹貫六十文、新金、銀五十八九匁替仕候由、
四年亥七月過ヶ、新金壹分に鐚壹貫二百八十文、乾字金も六百四十文、
十二月、一兩鐚、新金壹分に壹貫二百六十文、四十八文、

〔三貨圖彙錢五〕錢相場ノ事、其大概ヲ記ス、天正年ノ頃ハ、切遣銀ヲ以テ、錢一貫文ニ、凡銀八匁四五分ヨリ十六七匁ニ及ビ、時々其代銀、相對ヲ以テ賣買有シカバ、一概ニハ論ジガタシ、尤今ヲ以テ推時ハ、高直ニ當レリ、然レドモ其頃ハ鑄錢ノ沙汰ナク、拂底ニテ精錢ノ直段ナリ、又鐚一貫文ニハ、凡銀三匁六七分ヨリ五六匁位ナリ、鐚ハ惡錢ニテ、市民撰嫌ヒシ故、直段下直也、慶長年ノ頃、慶長銀ヲ以テ錢ヲ買フニ、精錢一貫文代銀十三匁位、鐚一貫文代銀三匁七分位ナリ、文祿ノ初年、武藏小判ヲ吹カレ、慶長五六年ノ頃、慶長金ヲ吹カル、此時金一兩ヲ以テ、永樂精錢一貫文ニ當テ交易ス、金一兩ハ大抵銀六十目ニ當ル、但シ柳營秘鑑ニ、十二兩替ノ凡積リトアリ、然レバ銀十五匁ニ精錢二百五十文、其後慶長十三年ノ頃ヨリ、追々精鐚兩錢ノ撰嫌ヲ停止セラレ、元和年ヨリ寛永二年ニ至リ、慶長金一兩ヲ以テ、錢四貫文ニ定メフレ、金一歩ニ錢一貫文、則代銀十五匁ナリ、其後寛永十三年、今ノ寛永通寶ヲ鑄ラレ、惡錢取交遣フ事ハ、嚴敷停止セラル、永樂ヲ始メ、古精錢ハ、構ヒナク取交通用セラル、此時モ舊例ノ如ク、金一兩ヲ以テ、錢四貫文ニ當ラル、其後元祿八年、元祿金銀ヲ吹カル、此時モ金一兩ヲ代銀六十目ト立ラレ、金一兩ニ錢四貫文ノ定メ也、然レバ銀一貫文代銀十五匁ナリ、但シ兩替屋共、利潤モコレアルニ付、金一兩ニ錢三貫九百文ヨリ高直ニ致ス間敷趣相觸ラル、然ルニ其頃ヨリ、世上金銀不融通ニ相ナリ、錢ニテノ交易多シ、依テ錢相場次第ニ高直ニ相ナリ、元祿十二三年ノ頃ハ、金一兩代銀六十目前後慶長元祿ノ金ナリ錢三貫五百文ヨリ二百文位ニテ、追々錢ノ位貴ク、上ミ方ハ一貫文ニ付、十七匁餘十八匁位ナリ、銀モ亦拂底ナリ、其後寶永三年ヨリ正德元年迄四度增吹ノ銀出ルトイヘドモ悉ク位劣レリ、市民銀ヲ土芥ノ如ク賤シミ、錢ヲ貴ビ、錢ニテノ交易多シ、依テ寶永銀ニテハ、錢一貫文代二十

四五匁ナリ、其後正德四年、又新金銀ヲ吹カル、(今ノ古金銀ニテ慶長ニ同ジ)此金銀慶長ノ古製ニ復セラレ、良金銀ニテ市民歸服スレドモ、其頃吹方容易ニ出來ガタシ、コレニ依テ古金銀取交通用アリテ、金銀多品ニ付紛ラハシ、其通用銀ト云ハ、永中三ツ寶四ツ寶銀ナリ、コレヲ以テ諸品相場ノ表トシテ交易ス、是等ノ事知ル者希ニシテ、大抵ハ今ニ引當テ、高下ヲ考フル故、齟齬スル事多シ、正德二三年ノ頃ハ、錢一貫文ニ付、右通用銀ニテ、凡廿三四匁前後、同四年ニ至リ、益々高直ニ相ナル、コレニ依テ制令ヲ出サル、右ノ通制令度々出サル、シカレドモ錢拂底ニテ、止事ヲエズ制令ヲ用キズ、正德四年ノ頃ハ、私ノ賣買錢一貫文代銀三十五匁前後也、此三十五匁ハ、永中三ツ寶四ツ寶銀(此三品ナ通用銀ト云フ)ノ相場也、正德四年年五月ニ、新古金銀割合通用仰出サル、此割合通用ニテ、右三十五匁ノ割合ヲ考フレバ、

慶長幷新銀(正德四年鑄之)ニテハ、錢一貫文代十七匁五分ニ當ル、

但シ此時慶新兩銀ニ通用銀ハ十割增也

元祿銀(元祿八年鑄之)ニテハ、錢一貫文代廿一匁八分七厘ニ當ル、

但シ此時元祿銀ニ通用銀ハ六割增也

寶字銀(寶永三年鑄之)ニテハ、錢一貫文代二十六匁九分二厘ニ當ル、

但シ此時寶ノ字銀ニ通用銀ハ三割增也

右通用三品ノ銀ハ、至テ位宜シカラズ、コレニ依テ割合通用モ右ノ通リナリ、此後享保三戊年閏十月改テ通用制令遣ヒノ制令ヲ出サル、又金小判ノ切賃高直ナル故ハ、元祿已下、寶永銀ニ至ル迄、小玉銀拂底ニテ、市民迷惑ニ及ビ、小銀ノ分ハ、專ラ錢ヲ用ユ、コレニ依テ小判ノ切賃小玉銀ノ替リニ錢ヲ用ユ、仍テ自ラ切賃モ高直ニ相ナル、右ノ後正德ノ新銀ニナリ、位好ク又小玉銀モ數多ク吹カルヽ故追々相場引下ゲ、享保二酉年ヨリ、新銀相場ニタテ替リ、(今云フ古銀ニテ慶長銀ト同色也)錢一貫

文ニ付、代銀九匁前後、其巳後享保二十年ノ頃迄、時々高下アリテ、十二三匁前後ナリシヲ、同二十一年元文ト改元アリテ、又今ノ文銀ニ吹替リ、古銀五割増シ歩ニ凡引合セ、一貫文代銀十八匁前後ナリ、然ルニ元文二巳年ニ至リ、益々錢高直ニナリ、十一二月ノ頃ハ、十九匁四五分ヨリ、私賣リハ二十五六匁ナリ、江戸ハ文金一兩ニ錢二貫七八百文、コレニ依テ高直ニ致スマジキ旨、度々嚴令アリテ、兩替ノ者共糺サレシカバ、大坂表ハ錢入津少キ處、當秋以來、西國北國ヨリ積登ル米綿初メ諸色トモ、多分代錢ニテ持下リ、市中愈錢乏ク困窮ス、コレニ依テ他國へ錢ヲ積出ス事停止セラル、(御觸略ス)元文三午年、二十目七八分ヨリ五六匁ニ至リ、國々へハ密ニ私ノ相對ヲ以テ、二十八匁ヨリ三十目ニシテ交易ス、コヽニ於テ隱シ賣リ買シメ等穿鑿ヲ遂ラレ、咎ヲ受ル者少ナカラズ、此上錢高直ニ成ザル樣ト種々糺明ヲ遂ラレ、古來ヨリ銀ニテ賣來リ候諸品、錢ニテ賣申儀コレアル間敷、前々ヨリ銀直段ノ品類ハ、銀ニテウリ、錢ニテハ交易致スマジキ旨相觸ラル、其制令ヲ用キズ、錢ニテ賣買致ス者、追々糺明セラレ、彌他國へ錢遣シ候事ヲ嚴敷停止セラル、是迄錢極メノ物モ、他國へハ銀ニテ遣スベク、相背クモノハ過料出事仰付ラレ、市中甚喧シク騷動セシナリ、右ハ其頃錢拂底ノ上、改鑄ノ文金銀位宜カラズ、市民歸服セズ、又諸國共、新文金銀行ハレズ、眞僞ノ疑惑コレアリ、依テ諸品代錢ニテ積下スベキ樣、國々ヨリ注文コレアリ、其上文ノ字銀小玉少ク、小銀ノ受拂是非ナク、代銀ニテ取扱フ故、愈錢乏シク高直トナリ、コレニ依テ其後追々文銀小玉露銀等ヲ鑄フル、元文三午年十一月、江戸錢一貫文ニ付二十一匁餘、京大坂二十二三匁ナリ、又他國ノ者、大坂ニテノ遣ヒ錢望ミ候時ハ、代三十目迄ノ賣渡ハ勝手次第、ソレ以上ニハ賣間敷、又三十目程ヅヽ、所々ニテ錢買集メ候者見及ビ候ハヾ、早々訴へ出ベシ、決テ過分ノ錢、他國ノ者へ賣申間敷、此上高直ニナラザル樣、度々御觸アリ、元文四未年四月、江戸ハ金一兩ニ錢二貫八百六十文、但シ銀相場五十七匁二分、是ヲ錢相場ニ直シ、一貫文ニ凡二十目、京ハ二十一匁七分二

准錢

厘、大坂ハ二十一匁四分也、但シ古銀ノ時錢一貫文、享保年ノ平均、凡十二匁トシテ、是ヲ五割增歩ニシテ、文銀ノ積リ、錢一貫文凡十八匁ノ當リナリ、然ルニ二十一二匁ヨリ三十目ニ至ル事、甚以テ高直ナリ、コレニ依テ元文年中、所々ニテ錢ヲ鑄サセラル、是相場下直ニモ相ナルベキ様ニトノ御趣意ナリ、其後段々引下ゲ、寳暦年中ヨリ明和ノ始迄ハ、凡一貫文ニ付銀十五匁位迄ヲ常トス、然ルニ明和二年ノ頃ヨリ、頻リニ鑄錢仰付ラレ、江戸龜戶、奥州石ノ卷、城州伏見、或ハ常州水戶、肥前長崎等ニテ夥シク鑄ラル、其上明和子年ニ至リ、本邦始テ眞鍮ノ四文錢ヲ鑄ラル、コレニ依テ同七年三四月ノ頃ヨリ、一貫文ニ付十二三匁ノ前後ニ相ナリ、安永八亥年ノ頃ヨリ、十匁ノ内ヘ入、天明六午年ノ頃ハ、既ニ一貫ニ付八匁六七分ナリ、其後文化年ニ至リ、九匁ヨリ三四分迄ヲ常トス、故ニ元文年ノ頃トハ事替リ、錢ヲ以デ賣買スル品類モ、今皆銀直段トナリ、前々ヨリ錢極メノ物、或ハ賃銀ヲ以テ今日ヲ送ル傭夫ノ者共ハ、錢下直ニ付甚困メリ、

〔東大寺小櫃文書〕上總國雜掌解　申進上東大寺御封手作布事

合

長久三年料百五十烟　代口六十二貫七百廿文

調細布百七段二丈一尺五寸　代八貫六百文

望陀布五十段　代三貫五百文

庸布八十七段七尺　代四貫三百六十文

租穀六百石　代十九貫八百文

中男作物荏油八斗三升　代八貫三百文

御封丁六人　代十八貫百六十文

同四年料同前

幷准錢百廿五貫四百卅文代上品手作布卅一段三丈

右件代進濟如件以解

永承元年五月九日　雜掌調成安

下常孝　前近江守藤原朝臣

右東大寺長久三四年御封代准錢百廿五貫四百卅文代所下如件

可下上品手作布肆拾壹端口丈事

永承元年五月九日

〔續日本紀 五元明〕和銅五年閏十二月辛丑、制、〇中略諸國所送調庸等物、以錢換、宜以錢五文准布一常、

〔令義解 三賦役〕布一丈三尺、是爲一常、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年八月一日甲申、今日止准布可用銅錢之由被仰下、武州殊令沙汰申給云云、

〔類聚大補任 後堀河〕嘉祿二年丙戌絁布被停止畢、諸國一同稱眼流布之故也、今年八月ヨリ被定畢、

〔吾妻鏡 三十三〕曆仁二年正月十一日壬午、今日陸奥國郡鄉所當事有沙汰、是准布之例、沙汰人百姓等、私忘本進之備、好錢貨所濟乃貢追年不法之由、依有其聞、白河關以東者、於下向輩所持者、不及禁制、又絹布麤惡甚無謂、本樣可令辨濟之旨被定、以匠作奉書被觸仰前武州、

〔葉黃記〕寬元五年三月十一日甲子、賀茂祭調進物、〇中略

諸國所濟不足之間、賜任官功、年々功程、

建久九年准絹七千二百疋　正治元年同　三千疋

同　二年同　九千疋　建仁元年同　九千疋

嘉禎年中、賜任官功、准絹五萬疋、此間賜十三萬疋云々、纔十許年之間、功程增加如此、暫止任官功、於調進物者、可被定宛諸國歟、〇下略

省錢

〔東大寺小櫃文書〕稅所

注進東大寺庄出作公田官物未進事

合

三斗米　五百五十二石八斗五升六合（除御封定）

准米　四百八十一石九斗五升九合

穎　六千二百卅六束二把五分

黑田庄出作　名張郡公田內

三斗米　四百九十四[illegible]斗四升八合

准米　三百七十二石九斗五升二合

穎　五千四百廿五束

鞆田五瀧兩庄出作　柘殖河合兩鄕公田內

三斗米　五十八石五斗八合

准米　百九石一斗三合

穎　八百廿一束二把

右件未進使補東大寺御封米三百六十餘石之殘所注進如件

保安三年二月廿八日　散位源朝臣花押（以下九人署名略）

〔和事始三寶貨〕錢九十六文を以て百文とする事は、上杉憲政の家老長尾意玄、制を立しより始る、長尾が云、敵國に入、町人地下人逃散、其所に居らざるには、小身の中間、少の物をも買べきやうなし、然ればば取ゑづめて豐ならねば、代物はつかはれざるもの也、ゆたかなる世には、闕滿有事、長久の政なればば、代物を九十六文にして、四文づゝかけみち然るべし、其上卅二文づゝ三に分、又卅二文

を四に分れば八文になる也、かくては錢のつかひやうもよしとて、九十六文を以て百文とし、九百六十文を一貫文と定たり、(上杉憲政は天文の比の人也○又見和爾雅)

〔和漢三才圖會 五十九 金石〕緡(ゼニサシ)

按本朝亦古者丁百爲陌、中古以來以九十六文爲陌、相傳昔山崎(城州攝州之堺)大津(城州江州之堺)置關、京師往來商賈、百錢中二文、以爲役用、出入各取四錢也、在外國用其不足錢通用、故九十六文爲百、(未知其時代)嗚呼苛政之痕、遺後世者乎、如今亦奥州有用丁陌地、

〔奥州會津四家合考 六〕義親謀叛虛說之事

白川ハ奥州ノ大關ナレバ、往還ノ旅賈ヨリ役錢ヲトル、百文ヲ四錢省キ九十六文ヲ以テ百文ノ數ニ用ユ、中頃永樂錢、異朝ヨリ渡リ、帝都ヘ駄上スル時、門司赤間ノ關ニテ、百文ノ內、四錢ヲ役儀ニ押取リ、九十六文ヲ以テ帝都ノ百文ニ用ヒタル例ニテ如此、

〔關八州古戰錄 二十〕小田小山成田等始末事

秀吉公、關東八州ヲ大神君ヘ進セラレシ時、(中略)房州ハ家康ノ領知子細有ベカラズ、其趣里見ニモ申含ルノヨシ被仰渡、依之本多中務大輔、酒井宮內少輔、鳥居彥右衞門、平岩主計頭ニ、五千餘騎ヲ相添、上總下總ヘ差向ラレ、伊北、伊南、勝浦、根小屋、一宮、小濱、佐貫、守谷、筒戶、笠間、土浦ヲ始トシテ、攻ル所降參シ、或ハ落失テ、枝城四十八ケ所、不日ニ大神君ノ御圍下ニ從ヒケレバ、八州ノ俚諺相謂テ、德川殿ノ鉾先ニテハ、五十ノ城々、唯一日ニ落ヌルト茶物語ニ仕タリケル、是ハ其比關東ニテ、料。足。四。十。八。錢。ヲ。バ。五。十。ト。云。ケ。ル。故、斯ハ申セシ事成トゾ、

〔田園類說〕或書云、九十六文を以、百文とする事を始しは、鎌倉上杉の家臣、領分へ他國の商人入込て領分の錢を他國へ持行とて、百文の所へ、四文宛はぶいて渡せしより始りたるとあり、又或書付に、甲州信玄の家臣、不算の人の爲に始しなど、いへども、異國よりも有事にて、元は世俗に云、

仕かけ相場といふ樣なるものにて、百文に直段せし物を九十六文にて拂より出來たるものなり、尤諸國一統の事にてもなし、東國北國筋の內、今以調百錢を通用す、本文の內、口永納壹貫文に三拾文御法なり、中頃壹貫文を九六に割、寬永新錢之頃歟とあり、又云、古來調錢四貫文に長鐚百貳拾文取、其後九六之錢になる、四文之出目有之とあれば、上杉の家臣、信玄の家臣始たるとは、附會の說にて、寬永新錢の頃より、九六錢になりたると見えたり、

〔地方凡例錄十一〕或說に、慶長之頃、永樂錢を鐚四文の通用に被爲命時、永樂錢と交易するに、永樂錢百文と鐚四百文取替とき、永樂錢百錢之內、壹錢づゝ商家口錢に除て渡したる由、其遺風鐚にも移り、百文の內、永樂一錢の價、鐚四錢を除き、九十六文を以、百文の勘定に通用すと云說も有り、今遠國九六を不用、調百たるを見ては、此說にもあるべきや、

〔地方落穗集一〕鐚錢之意味幷九六目拔之事

古は丁百を以通用す、今に遠國には其實殘り、丁百を以通用する處あり、此丁錢を鐚錢と謂、中古九拾六文を以通用す、此を銕陌〇銕恐錢誤とす、〇中略金錢を九十六文に直し通用する事、丁錢の百文を六ッ八ッ拾二拾六ニ割附、何れも端分出る、然ル時は通用自由ならず、又丁錢は數詰たる故、是又壹文欠ても可然なれども、是又通用ニ不可然、九十六文とする時は、前書數ニ割はし不出、通用宜敷を以、算用の通よし、是より數を九六にする也、

〔貨幣通考〕寬永十三年六月朔日、始行寬永通寶錢、〇中略

其錢は今所謂耳白の中、背に文字なきものなり、重さは概ね一匁あり、是頃は金壹兩に四貫文たる由なり、是より鐚錢永樂の諸錢は廢せし也、省陌も是時より始ると云、鑄錢局より賣渡す時、百文に付四文づゝ、局費を去りて渡せし故、其儘通用せしなりと、實に然るや未だ審にせず、

〔貞丈雜記十五烏目〕一錢百文、古は丁百也、近代九拾六文を百文とする也、寬永年中、寬永通寶を鑄られ

し頃より始る歟、(丁百は、いくつにも細に分る時は、はした出來て、細にわけられず、九十六文の時は、いくつにこまかにわけてつかふにも、はした出來ずして、こまかにわけてつかふに立數ゆゑ、九十六文を百と定たる也、)

〔倭訓栞 前編十三 世〕せにづら　土佐には八十文を百とし、伊豫には七十五文を百とす、奧羽にては重百をつかふ、九州にても玄かり、

〔青蚨秘錄〕永壹貫文を金壹兩と云、二百五十文を金壹分と立る也、其頃金に換る時は、百錢の內、壹錢づヽ除きて口錢とす、今以所々に永納の年貢有り、此遺風なり、鐚百文に是をうつし、永壹錢の價を除て、九十六錢を以通用すと云へり、守重云、今通用する所長錢あり、九六あり、八丸あり、關東上方は備後迄、北國は九六錢有り、長門は八丸と唱て、百文分八十文也、伊豫は百文分七十二文なり、津輕は銀壹匁定直段六十文にて、百文と云は、二匁つなぎにて百二十文也、

〔技擾錄 二〕短錢

防長之間、錢以八十爲陌、按漢(○五代後漢)隱帝時、王章爲三司使、聚斂刻急、舊制錢出入皆以八十爲百、章始令入者八十、出者七十七、謂之省陌、(○中略)蓋代有此例、不獨吾防長之間也、

〔梁書 三 武帝〕中大同元年七月丙寅、詔曰、(○中略)頃聞外間多用九陌錢、陌減則物貴、陌足則物賤、非物有貴賤、是心有顚倒、至於遠方、日更滋甚、豈直國有異政、乃至家有殊俗、徒亂王政、無益民財、自今可通用足陌錢、令書行後、百日爲期、若猶有犯、男子謫運、女子質作、並三年、

〔事物紀原 十 錢陌〕自古用錢貫、皆以千百、皆以足、梁武帝時、自破嶺以東、八十爲陌、名東錢、江郢以上七十、名西錢、京師九十、名長錢、大同元年、詔通用足、而人不從、錢陌益少、末年遂以三十五爲陌、錢以八十爲陌、蓋自梁始也、其事見通典、唐昭宗時、京師用錢八百五十爲貫、河南府以八百爲貫、筆談曰、漢隱帝時、三司使王章、每出官錢、以七十七爲陌、爲之省陌、蓋自五代漢始也、

〔續日本紀 六 元明〕和銅七年九月甲辰、制自今以後、不得擇錢、若有知官錢輙嫌擇者、勅使杖一百、其濫

錢者、主客相對破之、卽送市司、

〔三代實錄 十一 淸和〕貞觀七年六月十日己未、禁京畿及近江國賣買之輩擇弃惡錢、曰、弘仁十一年六月九日、下知大藏省曰、鑄錢司所進新錢雖文字頗不明、而不失體勢、亦有小瑕、行用無妨、宜猶檢納、而間愚者不悟此旨、專任己心、擇弃不受、或稱文字不全、計十嫌二三、或號輪郭有缺、擧百欠八九、是以要升米者、飢口難餬、買屯綿者、寒身不暖、宜牓于路頭嚴加禁止、若有乖違、隨卽決笞、

〔日本紀略 八 花山〕永觀二年十一月廿八日甲戌、被定嫌破錢、幷停止格後庄園、

〔延喜式 四十二 左右京〕凡錢文以一字明者、令通用、若有擇弃者、隨狀科責、

〔建武以來式目追加〕定

一セイセン〇精錢ノギ、京錢ウチヒラメヲノゾク、其外ノトタウ〇渡唐錢、エイラク〇永樂、コウブ〇洪武、センドク〇宣德、ワレ錢（但ワレトチラザル錢）以下トリ合テ、百文ニ三十二錢、（ケリヤウ〈假令〉三分一可在之）於向後トリワタスベキ事、

一アク錢賣買儀、一切可停止事、

右條々堅被制止訖、若背此旨族アラバ、權門勢家ノヒクワン〇被官ヲイハズ、於其身者處嚴科、至私宅者闕所ニヲコナハルベキ由所被仰下也、仍下知如件、

永正五八七　　沙彌信訴

近江守三善朝臣貞運

〔建武以來式目追加〕商賣輩以下撰錢事（明應九十）

一近年恣撰錢之段、太不可然、所詮於日本新撰料足者堅可撰之、至根本渡唐錢（永樂洪武宣德）等者、向後可取渡之、（但如自餘之錢可相交）若有違背之族者、速可被處嚴科矣、

松田丹後守長秀

〔東寺文書〕定

撰錢事

一百文內、口ざしの分ふるせに、十文洪武、二文宣德、二文永樂、六文已上廿文なり、

一地せにの內、よき永樂五文大觀嘉定、以上うらに文字のあるせに、よき錢の內たるべし、

一少分づゝも、これをおふて用べし、

一日本せに、われせにをのぞく、但少かけたるはよき錢の內たるべし、

一口ざしの程、うりものをかふぢきになす事あらば、罪科同レ右、

右條々堅被二定置一訖、若有二違犯之輩一者、男は頸をきり、女はゆびをきるべきなり、恣にえり、又えらする輩あらば、町人として注進せしむべし、見かくさば同罪たるべし、私けんだん同爲二町人一可レ致二注進一之由所レ被二仰下一也、仍下知如レ件、

永正九年八月卅日

對馬守平朝臣
散位神朝臣
近江守三善朝臣
美濃守藤原朝臣

〔徵古文書甲集山城國〕東福寺文書

東福寺中通用錢條目

本寺出錢貢錢幷常樂祠堂錢可レ撰條々

一永樂一枝仁十錢可レ取レ之、於二麁永樂一可レ撰

一新錢磨惠明、洪武、宣德、破欠等可レ撰レ之、

一古錢可レ納レ之、但別而於二惡物一者可レ撰事、

天文十四乙巳年十二月十三日　西堂光瑛花押〇以下四人署名略

〔妙法寺記下〕天文廿四乙卯此年錢南京ト云錢出來候而、代ヲエルコト無限、

〔信玄家法上〕一惡錢之事、立市中之外不可撰之事、〇中略

永祿元年戊午卯月吉日

〔相州文書〕淘綾郡小里村百姓庄左衛門藏三通之内

去年己未、被定置代物法度、并於諸商賣も、如此可致取引、

壹貫文　此内　七百文　精錢、但奉行前ニ本有、
　　　　　　　三百文　地惡錢、但中錢、同本有、

百文　此内　六十七文　精錢
　　　　　　卅文　地惡錢

五拾文　此内　卅四文　精錢
　　　　　　　十五文　地惡錢

十文　此内　七文　精錢
　　　　　　三文　地惡錢

三文　此内　二文　精錢
　　　　　　一文　地惡錢

以上

右去年未歲、代物法度、諸年貢納方被定置處、宿中商賣金錢撰勝儀、萬民苦勞、誠以曲事也、向後奉行人ニ言上、賣手買手立逢、代物を見計、如此可為致商賣、猶本を被遣候、若兎角申者有之者、公方之御小者中間ニ候者則搦捕、御庭可為引、聊も於横地監物小路、無沙汰儀有之者、奉行人可被處同科者

也、仍所定如件、

永祿三年庚申六月二日　　横地監物小路奉行

久保總兵衛

横地代

八木

○按ズルニ、永正精錢ノ定ハ、百文ノ中、四文ヲ減ジ、北條氏永祿ノ令ハ、百文ノ中、三文ヲ減ズルモノナレバ、是等乃チ省百ノ由テ始ル所ナルベシ、

〔多聞院日記略〕永祿八年十二月廿五日、近般以之外精錢之間、制札分卅三定之、

一新錢　　一ワレカケ

一コマ〳〵　　一宣德

一ウラニ字ノアル　　一文字不見

以上六錢、本ヲ札ニ出之、被打置了、依之總別之賣買一向不成、又少々は心安

〔徵古文書甲集大和國〕法隆寺文書

實圓書狀永祿九年カ

尚々於惡錢者、幾度も精錢可有之、御通之條、兎角手間入候ても、不可有其詮候間、以御分別御馳走、併可為喜悅之旨候、

先日者、御公用貳百疋御運上之處、一向惡錢之間、致精錢五十疋御運上之通候以外惡錢之儀、從前前無之儀候、近比無勿體候、壹貫五百文之惡錢替と相殘候、御公用と早々被仰付、御運上可為御祝著候、能々被成精撰被上置候者可目出候、為其定使被差越候、不可有御無沙汰之旨仰候也、恐々謹言、

十月廿日　　實圓花押

〔徵古文書甲集攝津國〕四天王寺文書東成郡天王寺村

織田信長精錢條々

定精選條々　　四天王寺境内

一ほろ　せんとく　やけ錢　下々の古錢以二一倍一用レ之

一ゑみやう　おほかけ　われ　すり以二五増倍一用レ之

一うちひらめ　なんきん以二十増倍一用レ之

此外不レ可レ撰事

一段錢地子錢公事錢、并金銀唐物絹布質物五穀以下、此外諸商買、如二有來時の一相場をもて、定の代とりかはすべし、付こきな精錢によせ、諸商買物、高直になすべからざる事、

一諸事のとりかはし、精錢と增錢と半分宛たるべし、

此外は其者の挨拶にまかすべき事

一惡錢賣買かたく停止事

一精選未決の間に、其場へ押入於二狼藉一者、其所の人として相支可レ令二注進一、若見除の輩に至ては、可レ爲二同罪一事、

右條々若有二違犯之輩一者、速可レ被レ處二嚴科一之由候也、仍所レ被二定置一如レ件、

永祿十二年三月一日

彈正忠在判

掃部助花押

日乘花押

〔御當家令條二十九〕定

下總國佐倉より東において、しかみ錢取遣仕べし、但われ錢かけ錢新錢はえらび可レ申事、

右依相望之、如先規申付訖、若此旨於違背ハ、可處嚴科者也、仍如件、

慶長十一年七月廿三日

對馬守判
大炊助判
備前守判

○按ズルニ、是ハ商人ノ願ニ由テ定メタルモノナリト云フ、奥州南部相馬邊ヨリ鑄出セシ鐚錢數多アリテ、物價平準シガタキガ故ナリトゾ、又シカミ錢ハ、粗惡ノ錢ノ謂ナルベシ、

〔敎令類纂初集錢六十六〕覺

一永樂壹貫文に鐚錢四貫文づゝの積たるべし、但向後永樂錢は一切取扱ふべからす、金銀鐚錢を以て可取引事、

一金子壹兩に鐚錢四貫文取引べき事

一鐚錢濫に撰ぶべからず、但なまり錢、大われ錢、かたなし、新錢、へいら錢、此外は無異義取引べき事、

右條々於相背者、可爲曲事者也、

慶長十三年十二月八日

備前
對馬
大炊

〔御當家令條二十九〕慶長十四年己酉年七月十九日

定

一金壹兩に付永樂錢壹貫文たるべき事

一金子壹兩に京錢可爲四貫文、但なまり錢、かたなし、大われ、新錢、へいら錢、此五錢之外は、撰間敷

事、

一金子壹兩に銀五十目たるべき事

右之旨を以、御年貢幷諸商賣供に取扱ふべき者也、仍而所被定置如件、

〔東武實錄一〕元和二年五月十一日、鳥目ノ制法ヲ諸國ニ相觸ラル、

定

一大かけ　一われ錢　一かたなし

一ころ錢　一新惡錢　一なまり錢

右六錢之外は、御藏へも納候間えらぶべからず、金子壹歩に壹貫文之賣買たるべし、若彼六錢之外撰もの、幷押てつかふもの在之ば、糺明之上、其面に火印をおすべき者也、仍所定如件、

元和二年五月十一日

〔東武實錄八〕元和八年二月十日、是日仰出サル、御制法、〇中略

定

一大かけ　一われ錢　一かたなし

一ころ錢　一新惡錢　一なまり錢

右六錢之外えらぶべからず、若えらぶもの、おしてつかふもの在之ば、其町過錢として、年寄五貫文、其外一軒より百文づゝ、可出之、然ば金子壹兩四貫文賣買たるべし、自然背御定之旨、高下之賣買仕もの有之ば、其賣買錢金雙方より可出之、其上過料金、右同斷たるべき事、

元和八年戌二月日

〔御當家令條二十九〕定〇中略

一大かけ　一われ錢　一かたなし

一ころ錢　一新錢　一なまり錢

此六錢之外撰べからず、若撰候もの、又は六錢を押而つかふものあらば、其面に火印を可捺事、

右可相守此旨、若濫之輩於有之は、其在々所々代官庄屋、至町中は年寄迄爲過料五貫文、其外は家壹軒より百文宛可出之、見出す者には、右之過料錢不殘可被下之者也、仍如件、

寛永二年丑八月廿七日

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年九月十日丁亥、切錢事有其沙汰、近年多以出來之由有其聞、自今以後者、用切錢事可停止之、存此旨普可令下知之由、被仰左典厩等云云、其狀云、

切錢事

右近年多出來之由有其聞、於自今以後者、用切錢事可停止之、存此旨普可令下知之狀、依仰執達如件、

弘長三年九月十日　　武藏守
　　　　　　　　　　相模守

加賀前司殿

〔昆陽漫錄三〕寛字銀

東鑑に、切錢と云ふことありて解せず、これにて見れば、弘長の比、民間にて、ひそかに銅を薄く長く吹きて、切りて錢となして通用せしにや、〇中略さて唐書に云く、兩京錢有鵝眼古文綖錢之別、每貫不過三四斤、至翦鐵而緡之と、切錢も此類なるべし、又同書に云く、鐵葉皮紙皆以爲錢と、今のきせるのがんくびの古きを錢へ雜ふるもこの類なり、

〔大日本史食貨志十五〕按、近世有寛字榮字等銀、行于北陸、不知何時所造、厚二分許、長短不一、用之者、大小任意、翦而行之、俗稱鉈切銀、後禁之、本書〇吾妻鏡所謂切錢、或亦此類乎、

錢貨不行

〔吾妻鏡要目集成下〕切錢之事　文面ハ通用ノ錢ニ、切レアルコトノ樣ニ見ユレドモ、切レ小判ト云アルト違ヒ、切レ錢ト云コトアルベカラズ、然レバ銅ヲ切テ錢ニ准ジ、切錢ト唱ヘ、漫ニ通用セシヤ、難レ慮又難レ解、

〔日根文書〕八上郡黑山之內淨福寺領家分、丹北郡由上村內半桝分、長原內太井入地重時名、小山之內國府名、但除二諸課役一並關錢之內拾貫文、切。錢。拾貫文進レ之候、恐々謹言、

永祿四　八月廿六日　あわのみよしどの　實（花押）

日根野孫七郞殿

○按ズルニ、切錢ハ書冊上ニ於テ、纔ニ一見スルノミナレバ其狀ノ詳細ヲ知ルニ由ナシ、古來舊說アレドモ未ダ其妥當ナルヲ覺エズ、或ハ切リ錢ニシテ、唐ノ雜律ノ私鑄錢ノ條ニ、磨錯成錢令二薄小一取レ銅以求レ利ト云ヘル類ニテモアルベシ、日根文書ニ又切錢ノ名アリ、別ニ自ラ一種ナレドモ、其名ノ同ジキヲ以テ錄シテ參攷ニ備フ、然レドモ或ハ功錢ノ誤ナランモ知ルベカラズ、

〔續日本紀五元明〕和銅四年十月甲子、詔曰、夫錢之爲レ用、所三以通二財貨一易二有无一也、當今百姓、尙迷二習俗一未レ解二其理一、僅雖二賣買一、猶無二蓄錢者一、隨二其多少一、節級授レ位、其從六位以下、蓄レ錢有二一十貫以上一者、進二位一階一叙、二十貫以上進二二階一叙、初位以下、每レ有二五貫一進二一階一叙、大初位上若初位、進入從八位下、以二一十貫一爲二入限一、其五位以上及正六位、有二十貫以上一者、臨時聽レ勅、或借二他錢一、而欺爲レ官者、其錢沒レ官、身徒一年、與者同罪、夫申二蓄錢狀一者、今年十二月內、錄レ狀并錢申送訖、　十一月甲戌、蓄錢人等始叙レ位焉、　十二月庚申、又制、蓄錢叙位之法、无位七貫、白丁十貫、並爲二入限一、以外如レ前、　五年十月乙丑、詔曰、諸國役夫及運脚者、還レ鄕之日、粮食乏少、無レ由レ得レ達、宜下割二郡稻一別貯二便地一、隨二役夫到一任令中交易上、又令下行旅人必齎二錢爲レ資、因息二重擔之勞一、亦知中用レ錢之便上、

埋錢

〔續日本紀 元明 六〕和銅六年三月壬子、詔曰、任郡司少領以上者、性識淸廉、雖堪時務、而蓄錢乏少、不滿六貫、自今以後、不得遷任、又詔、諸國之地、江山遐阻、負擔之輩、久苦行役、具備資粮、闕納貢之恒數、減損重負、恐饉路之不少、宜各持一嚢錢、作當爐給、永省勞費、往還得便、宜國郡司等、募豪富家、置米路側、任其賣買、一年之內、賣米一百斛以上者、以名奏聞、又買賣田、以錢爲價、若以他物爲價田幷其物共爲沒官、或有糺告者、則給告人賣及買人、並科違勅罪、郡司不加檢校、違十事以上、卽解其任、九事以下、量降考第、國司者、式部監察、計違附考、或雖非用錢、而情願通商者聽之、

〔日本紀略 花山 八〕永觀二年十一月六日壬子、近來世間、錢嫌尤甚、適所取錢號二寸半、銅錢原直也、又鹽直一籠一貫六七百文、升別五六十文也、有童謠、

○按ズルニ、本書印本首書ニ、色川三中曰、寸恐勺之誤、蓋謂以二勺半米替一錢、以二合半米替十錢也、當時賤於錢貨之極、至于此矣トアリ、

〔本朝世紀〕寬和二年六月十六日癸丑、午後左大臣〇源雅信、右大臣〇藤原兼家、中納言藤原文範卿、源保光卿、參議左大辨大江齊光卿、源伊陟卿、參著左仗座、今日被定可被奉遣臨時奉幣幷諸陵使等事、是則從去年九月中至于今、一切世俗錢不用、交關之間不通、人民無不嗟歎、因茲件錢、如例爲令用、神明可被祈禱也、仍陰陽助秦忠茂、令擇申日時勘文、但諸社奉幣使來廿三日、諸陵使同廿七日、又諸卿一處被會集、相共可被祈禱錢之事、至七月一日勘申畢、

〔日本紀略 一條 九〕永延元年十一月二日辛酉、仰檢非違使、加制止上下人々不用錢貨事、　廿七日丙戌、諸卿定申、於十五大寺、七箇日間、每寺令八十口僧祈錢可用之由、又有驗寺々如此、

〔日本紀略 一條 九〕永延元年三月十六日戊寅、右大臣〇藤原爲光以下參仗座、定申賀茂上社禰宜賀茂在實於社頭鳥居側、掘往古錢七百八十二文、獻公家、其文有三、和同開珎、萬年通寶、神功開寶、召神祇官陰陽寮、令占卜之可通用否事、又令下諸道勘申之、

〔慶長見聞集 一〕江戸の川橋にいはれ有事
町には舟町と四日市のあひに、ちひさき橋只一ッ有、是は往復の橋也、文祿四年の夏の比、此橋もとにて錢がめを堀出す、永樂京錢打まじりて有しを、四日市の者共、此錢がめを町の兩御代官板倉四郎右衞門殿、彥坂小刑部殿へさゝげ申たり、夫より此橋を錢がめ橋と名付たり、

〔新編江戸志 一〕錢瓶橋
江戸砂子云、むかし橋かけはじめの時、錢の入たる壺をほり出したるゆゑの名と云ふ、
貞雄云、江戸砂子に、一說、むかしは橋の邊にて、永樂錢の引替ありて、錢替ばしと云けるとあり、予聞傳へしは、錢を商ふ者、此所に集り居たりし故名とすと云へり、さるは錢買ばし也、明暦の比は、錢かひ橋と云しは疑ひなし、明暦年中、中川喜雲と云し宗匠の句に、錢かひばしを玉霰ぬけ、と云句あり、

〔新安手簡 四〕當地增井村正宗寺ト申ス禪院、城下ヨリ五六里隔テ、久慈郡〇常陸ノ内ニテ、夢想開基古跡ニテ御座候、舊ハ勝樂寺ト申候、今以テ二名並存シ候、義堂鎌倉圓光寺住職ノ時、佐竹氏招待ニテ、暫ク住セラレ候事之レ有リ、勝樂除夜ノ詩、空華集ニ載セ申候、十年前正德二年、正宗寺佛殿修造ノ時、椽ノ下ヨリ色々ノ古錢多ク出テ申候、住持ヨリ源嵩殿ヘ獻ジ申候、今以テ府庫ニ之レ有ルベク候、其節ノ目錄謄キ候間、御覽ニ入レ候、〇中略

正宗寺ヨリ出テ候古錢目錄

開通元寶　十九貫六百文　　唐國通寶　二百文　　乾元通寶　八百文
皇宋通寶　三十一貫八百文　　聖宋通寶　八貫八百文　　宋元通寶　八百文
太平通寶　一貫八百文　　淳化通寶　二貫百文　　至道元寶　三貫九百文
咸平元寶　四貫四百文　　景德元寶　五貫三百文　　祥符通寶　十貫文

天禧通寶　五貫二百文　天聖元寶　五貫二百文　明道元寶　九百文
景祐元寶　二貫百文　至和元寶　三貫八百文　嘉祐元寶　四貫七百文
治平通寶　五貫六百文　熙寧元寶　二十九貫文　元寶通寶　二十九貫文
元祐通寶　一十貫九百文　紹聖元寶　十貫七百文　元符通寶　三貫百文
大觀通寶　二貫七百文　政和通寶　九貫三百文　宣和通寶　六百文
淳熙元寶　二百文　慶元通寶　五百文　嘉泰通寶　三百文
開禧通寶　一百文　嘉定通寶　五百文　紹定通寶　三百文
淳祐元寶　二百文　景定元寶　二百文　咸淳元寶　一百文
景祐通寶　一貫四百文　嘉祐通寶　二貫五百文　正隆元寶　二百文
文字不明錢二貫六百文
合四十二品、何レモ三五錢數餘之レ有リ候、總計二百三十四貫七百文
太宋元寶　二十文　建炎通寶　二十五文　紹興通寶　十文
端平元寶　六文　嘉熙通寶　五十文　開慶通寶　五文
至大通寶　五文
七品、百二十五文、
東國重寶　海東通寶　富貴神寶　周元通寶　漢元通寶　神功開寶　成康通寶　唐國通寶
朝鮮通寶　崇寧通寶　太定通寶
合十一品、十一文、
古錢四十二品　百文以上二百三十五貫
七品五十文以上百二十五文

十一品、一文ヅヽ

辰八月改之

〔萩原隨筆〕播州佐用郡ノ山中ニ、昔錢瓶ヲ埋タルト云所アリ、今土俗其所ヲ錢瓶ト云、山水ノ出ルニ隨テ、二三錢ヅヽ流出ル古錢、一年ニ拾得ル所、凡一貫文餘ト云ヘリ、太平通寶、祥符元寶等、ヒ々古錢アリ、

〔吹塵錄九〕元文四年堀出古錢の記　常州增井正宗寺

元文四未年九月、牛込禪宗濟松寺といへる寺の境內に於て、古錢あまた堀出、南の方町屋の裏、木の枝おろし候砌、小笹堀取候處、一所に錢三貫六百文堀出、又翌日、昨日之處より三四尺程西の方を堀候處、五貫文程有ㇾ之、箱に入有ㇾ之と相見候由、

一永樂通寶　壹貫六百七十壹文　一元豐通寶　壹貫百壹文　一洪武通寶　五百文
一皇宋通寶　五百三十壹文　一開元通寶　五百四十壹文　一昭寧元寶　貳百五十八文
一至元通寶　百五十文　一祥符元寶　貳百四十四文　一大觀通寶　八十貳文
一紹順元寶　百五十四文　一聖宋元寶　百九文　一咸平元寶　百三十四文
一政和通寶　貳百五十八文　一天聖元寶　三百壹文　一景德元寶　貳百四十八文
一嘉祐元寶通寶　六十九文　一天禧通寶　九十三文　一淳和通寶　五十九文
一宣德通寶　八十八文　一正隆元寶　十貳文　一淳熙元寶　三十七文
一朝鮮通寶　三十文　一宗元通寶　貳十文　一紹定通寶　十九文
一太平通寶　三十七文　一宣和通寶　十八文　一大定通寶　四文内一文裏ニ申ノ字有
一乾元重寶　七文　一大中通寶　三百文　一嘉定通寶　十八文
一慶元通寶　壹文　一端平通寶　貳文　一大宋元寶　壹文

一淳祐元寳　五文

右之外、古文字不見分錢、種々有之候、

右之通、寺社奉行大岡越前守江差出之、右享保記

〔中外錢史二〕銀錢〇太平元寳隱沒年久、未降人間、故設空圈而待出見焉、金錢〇開基勝寳亦隱沒、近年露見矣、大和國西大寺所藏一枚是也、書其匣曰、天平神護元乙巳年、當寺本願稱德天皇御建立大伽藍之內西塔跡土中ヨリ南ヨリ金錢出、開基勝寳、但重四文目八分、北ヨリ銅錢出、萬年通寳、神功開寳、地鎭埋、平地ヨリ凡七尺餘下、土中ニ在ルコト千貳拾九年也、于時寛政六甲寅年四月十九日午刻云々、〇中略

傳謂元祿十五年、大坂市中更通一渠、名曰堀江、地底獲隆平錢二千三百許枚矣、架橋於其處、名曰隆平橋焉、

〔一話一言二〕金印古錢〇中略

太宰府より、古錢一壺をほり出せり、その錢、

半兩　五銖　貨泉　大唐通寳　海東通寳　天興通寳　三韓通寳　崇寧通寳　天漢元寳

大德重寳なり

ともに天明四年甲辰三四月の頃の事なりといふ

〔一話一言三〕古錢

同年〇天明五年十一月十三日、黒田大和守殿領分、武州榛澤郡岡村禪宗普正寺と申す寺の境內廟所より、一つの瓶をほり出せり、瓶の深さ六尺餘、古錢を多く藏めおけり、その日人夫等、多くぬすみとりて其數しれず、當時寺に殘り候分、猶三百貫餘ありといふ、その錢多くは祥符元寳、至道元寳、元和通寳等なりと、榊原男依、その書付をみせ給ひしをこゝにしるし置ぬ、

〔一話一言二十六〕伊丹古錢

一文化元年甲子四月十七日、近衞殿御家領、攝州河邊郡御園庄有岡鄉伊丹外崎村百姓五郎兵衞所持之古城と申田中より、家普請之土堀取申、六尺計下より古錢出、數貳萬八千五百疋餘堀出板厚一寸程之杉桶に入在レ之、

一同二年乙丑三月廿四日、同所より再度古錢貳萬三千七百五十疋餘堀出、此度ハ南蠻燒之大壺に入有レ之、右者石灰を以相納候と相見え、錢面白く、毛頭腐損之錢無レ之、尤兩度共、書付類一切不二相見一候に付、段々相考候處、右兩年共、洪武永樂錢一錢も無レ之、仍而其以前に所レ貯にて、土中に有所、四百四五十年より五百年にも可二相及一申候哉、古錢は不レ殘、近衞殿御寶庫へ相納り、地主堀人へは當錢を以、員數高に割賦被レ下置候、

〔兎園小說十〕阿比酒麻村の瘞錢

松前領エサシの近鄉、アヒノマ村の民、立之助が母は質樸慈善のものなり、○中略又立之助が妻の名をよすといひけり、こも又樸素寡欲のものとぞ聞えし、かくて文政六年夏六月のころ、件のよすは、畑を打たんとて、ひとり田野に出でたるに、この日畑のめぐりなりける土手の下にて、思はず古錢を堀り出だしけり、○中略むかしアヒノマのほとりに、數千貫の錢を埋めたるものありしよし、故老の口碑に傳へたり、

〔嘉永明治年間錄九〕萬延元年七月廿五日、信州杉町村ニ於テ、古錢ヲ堀リ得ニ就キ、內藤駿河守ヨリ伺書、幷ニ指令、

內藤駿河守伺書　私領分信州伊奈郡杉町村百姓次郎右衞門悴新作と申者、當六月廿六日、同村地內字淺間矢場と申所にて、土手草刈取の節、古文錢出候間、猶又堀見候處、別紙之通、古錢八十六貫五百六十八文堀出候段訴出候に付、見分の者差遣し相改候處、土中に年久敷埋有レ之候

體にて、外子細も無之候旨、在所家來共より申越候、右錢如何可仕候哉、此段奉伺候、以上、

別紙古錢の覺

天漢通寶一文　開元通寶一貫五百十一文　元豐通寶八貫百二十九文　天聖元寶三貫二百七十八文　大觀通寶七百八十四文　紹聖元寶一貫二百五十一文　天禧通寶一貫八百四十六文　聖宋元寶二貫八百三十八文　景德元寶一貫六百九十一文　景祐元寶一貫百五十七文　元符通寶八百五十二文　正隆元寶九十七文　景定元寶七十七文　宣和通寶二百四十文　紹定通寶百二文　咸淳元寶六十文　開禧通寶百文　政和通寶二貫二十一文　元祐通寶六貫四百卅三文　皇宋通寶同斷　同元寶八貫六百九十一文　熙寧元寶六貫二百三十六文　祥符通寶同斷　同元寶二貫六百八文　咸平元寶一貫五十九文　嘉祐通寶同元寶一貫七百九十一文　至道元寶一貫四十三文　太平通寶七百二文　治平通寶同上　同元寶一貫七百五十七文　至和通寶同元寶五百卅八文　淳熙元寶五百十六文　唐國通寶六十文　乾元重寶二百七十八文　淳化元寶六百四十文　嘉泰通寶百廿九文　嘉定通寶三百五十三文　嘉熙通寶十六文　紹熙元寶百七十八文　慶元通寶五文　至大通寶十二文　五珠通寶八文　乾德元寶一文　端平元寶五文　光天元寶一文　大宋元寶一文　周元通寶六文　紹鑑元寶一文　東國通寶一文　富壽神寶一文　半兩一文　字不明錢十八貫二百卅八文

右之通御座候以上

　御附札　書面古錢出候處、持主無之候はゞ、右錢は新作へ爲取候樣可被致候、

〔日本書紀 十五 顯宗〕二年十月、是時天下安平、民無徭役、歲比登稔、百姓殷富、稻斛銀。錢一文、

〔泉彙 上〕日本錢歷代 年曆天明元年迄

無文銀錢 極印アレドモ辨ジ難シ　顯宗天皇二年、天下安平、歲比登稔、百姓殷富、稻斛一文、日本書紀十五 重二文目

入分、此時始テ錢ノ事見ユ、凡千二百九十六年、

寶暦十一年辛巳十月七日、攝津天王寺村南平野村粽(ハヽキ)屋某ガ田地、字眞寶院ト稱スル畠ノ中ヨリ堀出ス、無文銀錢、凡百枚許ヲ得テ官ニ納ムト、卽是ナリ、

〔日本書紀　二十九天武〕十二年四月壬申、詔曰、自今以後、必用銅錢、莫用銀錢、乙亥詔曰、用銀莫止、

〔續日本紀　四元明〕和銅元年五月壬寅、始行銀錢、　二年三月甲申、制凡交關雜物、其物價銀錢四文已上卽用銀錢、其價三文已下、皆用銅錢、　八月乙酉、廢銀錢、一行銅錢、

〔續日本紀　五元明〕和銅三年九月乙丑、禁天下銀錢、

〔續日本紀　八元正〕養老五年正月丙子、令天下百姓以銀錢一當銅錢二十五、以銀一兩當一百錢、行用之、

〔續日本紀　九元正〕養老六年二月戊戌、詔曰、(○中略)更量用錢之便宜、欲得百姓之潤利、其用二百錢當一兩銀、仍買物貴賤、價錢多少、隨時平章、永以爲恒式、

〔續日本紀　二十三淳仁〕天平寶字四年三月丁丑、勅、錢之爲用、行之已久、公私要便、莫甚於斯、頃者私鑄稍多、僞濫既半、頓將禁斷、恐有騷擾、宜造新樣與舊並行、庶使無損於民有益於國、其新錢文曰萬年通寶、以一當舊錢之十、銀錢文曰太平元寶、以一當新錢之十、金錢文曰開基勝寶、以一當銀錢之十、

〔朝野群載　三文筆〕護上　泰山府君都狀

南閻浮州大日本國天子(御筆)　親仁(○後冷泉)年廿六

獻上　冥道諸神一十二座

銀錢二百四十貫文　白絹一百二十疋　鞍馬十二疋　勇奴三十六人

右親仁、謹啓泰山府君冥道諸神等、□御踐祚之後、未經幾年、而頃日蒼天爲變、黃地致妖、物恠數々、夢想紛々、司天陰陽勘奏不輕、其徵尤重、若非蒙冥道之恩助、何攘人間之凶厄哉、仍爲攘禍胎於未萌、保寶祚於將來、敬設禮奠、謹獻諸神、(○中略)

永承五年十月十八日　天子親仁　謹狀〇本書多誤、今以一本校訂、

〔朝野群載十五陰陽道〕謹上閻羅天子

銀錢二十貫　絹十疋　鞍馬一疋　奴三人

右爲延年益算、送上謹狀、

永久二年十一月廿三日　従四位上行右中辨兼備中介藤原朝臣　謹狀

〔空穗物語藏開上〕左大將のおとゞ、あはれいかにして侍らんは、宮こそはしだひし給つらめ、いともきよらに心おはせし人ぞかしとみ給、かくてきばみたる一かさねに、ごがねのぜに一つゝみつゝみ、しろきしきしに、白がねのぜに一つゝみつゝみ、しろきしきしをば、ことにうるはしくいださせ給、きばみたるをばおとなしく御せんともにまいり給つ、ごすぐろくはまゐりたる、あるじのおとゞ、いをとりこゝにはさらになしとの給へば、みすのうちへさしいれ給つ、

〔空穗物語藏開下〕しきしをひきちがへつゝ、ごておほくつゝみて、御まへことにまいれり、大將君のたからは、みなこよひうちとりてむとて、ごうち給へば、中納言まけ給ぬとて、うち給はずゐ給へば、むすび袋にいれていだしたり、一たびにいとおほくおしたてゝ、うちいれつ、大將しぶくろにひとへふたつをきつゝみて、ふたつゝみも給へり、まけたる人あつまりてこへば、またこそまけたらんときつかはむとてとらせず、これらは、こがねのぜにになり、

〔山槐記〕治承二年十一月十二日辛未、未二點皇子〇安德降誕、令奉著御替帶給云々、内大臣、誦祝詞三反、以天爲父、以地爲母、頂金錢九十九文令呪命、被置錢於皇子御帳御枕上、件錢九十九文、納方三寸許白生絹袋也、以白糸爲括、御產以前、自禪門被獻之、大夫取之被傳内府、皇子渡御以前、被置白御帳内也、

〔源平盛衰記十〕中宮御產事

治承二年十一月十二日、寅時ヨリ中宮御產ノ氣御坐ト聞ケリ、〇中略頭中將重衡朝臣、其時ハ中宮

亮ニテ御坐ケルガ、簾中ヨリ出給テ、御產平安、皇子〇安德御誕生ト高ラカニ申サレタリケレバ、〇中略小松大臣ハ、蒔繪ノ細大刀隱尻ニ佩給、金錢九十九文、御枕ノ上ニ置テ、天ヲ以テ父トシ、地ヲ以テ母トスト奉祈ケリ、即チ御臍ノ緒ヲ奉切テ園碁手ニ錢被出タリ、辨靭負佐是ヲウツ、是又例アル事ニヤ、

〇按ズルニ、金錢二字、長門本平家物語ニハ、金吉文字ニ作ル、

〔花園院御記〕文保三年〇元應元年四月廿一日、入夜有院御書、聊有御氣分、但不及披露云々、有頃又有御書、可參云々、即著直衣參、已御裝束了、御驗者諸壇阿闍梨來祗候、御加持程也、暫降誕之由、予時在中也內女房告之、〇中略有頃朕參御几帳邊、女房抱兒、予唱祝詞、其詞云、以天爲父、以地爲母、金錢九十九文、令呪壽、三返唱入兒左耳、即取金錢置御帳中枕方、南候、

〔川角太閤記〕三一夫より東海道へ御馬を立乘出候、御意には、今日は金錢までを持せよ、銀錢無用なりと被仰置候事、〇中略

一城攻の體御覽候へば、城の堀へ寄手はや程近付申候處へ、御使番衆被遣候、其樣子は、早々終夜辛勞仕候、定て勞れにおよび可申なり、此上は御手廻り小姓等にて攻さすべき也、はや〳〵御入替可被成と御使なり、此御使は入替に可被成とて、先手さらば入替可申とは申まじかりしかども、此御使被立候はゞ、攻者共、猶攻口御いそがせ可被成ための御使と聞え申候、如案はやひたひたと塀に手を掛申候を御覽じ被及、御插箱を御取寄被成、其ふた〳〵に金錢をきりみだし、ふたごとに移しかけ申候、其分別は早く頸可參なり、御褒美の爲め金錢御用意なり、

一塀をはや乘よと御覽じ、御馬の上にて御馬印を手づからふりたて〳〵はや貝をふけよと御意なり、夫より程なくひた〳〵と乘入候とひとしくはや頸參り候、御馬より御下り被成、金錢御つかみ候て御自身に被遣候、二三十人には御自身御手づから被遣候、夫より頸數四方八面より

寄せ申候故御意には皆々見可申ものなり、此金錢に我手の不掛はなきぞと御意にて、總の金錢を御手づから御つかみたて被成、其後は御小姓衆二三人に被仰付、御小姓衆の手より頸取申者請取申候、其時金錢に秀吉手の不掛は一錢も有間敷と御意折々相聞申候事、

〔永祿已來出來初事〕秀吉公御代之事

一金錢　銀錢　是は於戰場御褒美之爲也

〔明治新撰泉譜〕天正文祿ノ銀錢ハ、座錢ニ非ズト謂フ者アリ、然レドモ華族木下氏ニ傳フル所ノ、豐太閤賜與ノモノヲ觀レバ、其正用品タリシコト明白ナリ、

○按ズルニ、泉彙ニ、豐臣太閤鑄ル所ノ金錢ヲ載ス、其文永樂通寶トアリテ、背ニ桐紋ヲ出セリ、銀錢モ之ニ同ジカルベシ、又文昌堂錢譜、正品ノ內ヘ永樂ヲ出シテ、右永樂銀錢、文祿慶長間、豐臣秀吉鑄、以一當百トアリ、

〔室町殿日記九〕施行をひかるゝ事

大政所（○豐臣秀吉母）の御追善として、四十九日にあたる日は、兩日があひだ、乞食貧人に施行をひかせたまふ、からかね錢のうちに、金錢銀錢をあひまじへひかせたまふに、請ぬる非人のうちに、許多の得失ありて、われらごときの一錢なしの貧人と成ても、貧福のさかひはありけるものかなとて打わらひ、たうとくありがたきためしとていさみにける、

〔常山紀談八〕巖石城合戰坂小坂先登の事

秀吉島津を伐るゝ時、蒲生氏鄕、前田利家、巖石の城を攻らるゝに、氏鄕の先陣蒲生源左衛門、此頃は坂小坂といひけるが、眞先に進て、かなにていちばんと墨黑に書たる、白き吹貫を門の眞中に押立、おめきさけんで相戰ふ、（○中略）終に城を攻落して、首四百餘打取たり、秀吉氏鄕に感狀を與へられ、坂小坂に金錢十匹羽織を賜りぬ、

〔明良洪範四〕池田勝入生立幷長久手にて討死の事

池田紀伊守入道勝入には、信長公と同年なりし、元は近江の國の人也、其父はいかゞ成けん、母勝入を懷に入れて流浪し、尾州清洲の町に知る人有て來る故、信長の乳母に出す、勝入は信長の遊び相手と成、〇中略其後勝入小姓仲間と口論し、相手を切殺したる故、其處に居がたく難儀せし時に、森寺藤右衛門といふ者、所緣有し故、同道して立退き、赤堀といふ處にかくれ居る事五年なりし、其後信長星崎の城を攻給ふと聞て、藤右衛門、商人と成、清洲へ行て城の臺所にて商する時、勝入の母に內意を通じ、此度出陣の御供なされ、勘氣のわびなさるべきに、具足を求むべき手段なしといふ、母も金銀はなしとて、綾の小袖三ッ出し、藤右衛門に與へらる、右の小袖を清洲の町にて銀錢六十にかへ、古具足をもとめしかども、兜を調べき力なく、茜染の布をはち卷にして、星崎の城攻の人數に加はりける、此働にて信長へ歸參せしとなり、

〔常山紀談十〕清正の武備嚴重なりし事

朝鮮にて、清正全州に在る時、〇中略屛重門より入、緣にて民部近習の士二人寄て、清正のさゝれし馬簡を取て旗差に立る、清正緣に上らるれば、よりて草鞋の紐を解、脚當の緒を解く時、清正腰に付たる緋疊子の袋を座敷へ投入たるに、どうと落る、米三升計に、味噌、銀錢三百文入られたり、馬印をさすに腰のつり合、是にて能となり、

〔常山紀談十一〕直江兼續が事

越後の士大將直江山城守兼續は、〇中略伏見の城にて、諸大名幾等も並居たる中に、伊達政宗、懷中より金錢取出して人々に見せられしに、其頃金錢の始りし比にて、珍しとてもてはやさる、直江が末座に在しを、これ見られよと有し時、直江扇の上に金錢を置て打返し、女童のはねつく樣にして覩しかば、政宗いや苦うも候はず、手に取れよと言も終らぬに、直江謙信の時より先陣の下

知して、塵取候手にかゝる賤しき物とれば汚れ候故、扇に載て候とて政宗のかたに投戻しけり、

〔鳴海平藏由緒書〕　治部一子六代目　同　鳴海○兵庫賢信

寛永十八辛巳年三月、御上御胎舍之御祝儀、御目出度相濟候以後、御誕生之御用意、金錢銀錢之御鑄法被爲仰付候、但員數幷秘法之御儀ニ御座候、天海大僧正ゟ御傳授被成下候如左、

一父錢金錢　貳拾八文

一母錢銀錢　三拾六文

次ニ家頭錢

一金錢　五千文

一銀錢　壹萬五千文

尤兩文形重目寸法口傳アリ

右之通鑄立奉差上候、同八月三日、若君樣被爲遊御誕生、御目出度爲御祝儀、御時服黃金拜領仕、難有奉存候、

一正保二酉年四月廿三日、若君樣御壽御五歲ニ而、被爲遊御元服、奉稱大納言家綱公樣と、此御祝儀之節も、金銀錢被仰付、鑄立奉差上候、如先例爲御祝儀、御時服幷黃金拜領仕、難有仕合奉存候、

〔洞房語園上〕冷水一杯銀錢十文の事

ひとゝせ淺草御門の邊より水道橋の邊まで、御堀御普請ありし砌、吉原も賑ふなり、夏の日の事か、冷水を賣る童、中の町に居しが、客人水を望みて天目に一ッ呑、舌打して袂から銀錢十文計取出し、冷水賣の小童にたびければ、小童光る錢を見て、其まゝ宿へ歸り親共に見せければ、親共も終に見たる事はなし、そこら持あるき相店の者共に見せたり、此客人は、平左衞門といふ揚屋にて、京町高島屋が家のかほるといふ大夫に折々逢れたり、此遊廓にて風流花麗なることも折ふ

しには有りといへば、冷水一杯銀錢十文に賣れたるも、隨分下直なるものか、

〇按ズルニ、神田川開鑿は、萬治中ノ事ナリ、但銀錢ハ何處ニテ鑄タルモノカ、詳ナラズ、又按ズルニ、幕府ノ寶藏中、赤銀錢アリ、寛文元年七月、天守金銀帳ニ、銀錢五十貫文、但長百也トアリ、是ハ蓋シ貯藏ノ爲ニ造リシモノニテ、他ニ用ル所アルニハアラザリシナラン、

〔續日本紀四元明〕和銅二年三月甲申、制凡交關雜物、其物價銀錢四文已上、卽用銀錢、其價三文已下、皆用銅錢、　八月乙酉、廢銀錢、一行銅錢、

〔續日本紀五元明〕和銅三年正月丙寅、太宰府獻銅錢、　戊寅、播磨國獻銅錢、

〔經濟錄五食貨〕銅錢ハ、寛永以來世ニ多ク流布セリ、元祿ノ季ヨリ、國用匱シキニ因テ、東都ニテ新錢ヲ鑄ルコトヲ命ゼラル、其時ノ有司荻原、銅ノ多ク費ユルコトヲ厭テ、鉛錫ヲ雜、一錢ノ形ヲ薄ク小サクス、寛永寛文ノ錢ハ、重サ十分ナルニ、元祿寶永ノ新錢ハ、文ニハ寛永通寶トアレドモ、重サハ僅ニ六七分ナリ、寛永寛文ノ錢ハ、上好ノ銅ナレバ、其色黃白ヲ帶テ光アリ、元祿寶永ノ錢ハ、色赤黯ニシテ麁惡ナルコト、古今ノ錢ニ比類スベキモノナシ、異國ニテ慳錢トイヘル、スナハチ箇樣ノ惡錢ヲ云フナリ、有司ノ意ハ、錢ハ好クテモ惡クテモ、一文ハイツモ一文ナレバ、多ク銅ヲ費シ、人工ヲ費サンコト無用ナリトオモヘルナリ、是無學ニテ古ヲ稽ヘザル故ナリ、錢ハ賤キ物ナレドモ、天下通用ノ貨幣ニテ、當時ニ行フノミナラズ、後世ニ遺リテ、彼ハ某ノ時ノ錢、此ハ某ノ世ノ錢ト人ノ評スル物ナリ、〇中略日本ノ古錢モ、和同開珎ナドハ、銅モ錢文モ甚美ニシテ、中華ノ古錢ニ劣ラズ、當代寛永寛文ノ錢ハ、銅ノ古ニ及バザルノミナラズ、錢ノ周郭太大ク、文字太細クテ觀ニクシ、筆ノ拙キモノヽ書タル故ニ、字形惡シク觀グルシヽ、異國ノ古錢ハイフニ及バズ日本ノ和同モ比スベキモノニ非ラズ、此等ノ錢サヘ、若異國ニ渡リ、後世ニ傳ハラバ、人ノ笑トナルベシ、況ヤ元祿寶永ノ錢ハ、古來見モ聞モ及バヌ惡錢ニテ、是ヲ後世ニ遺サンハ、國家ノ耻ナルコト

ヲ知ラズ、姦惡ノ吏ノ國ヲ誤ルコト、古ヨリ皆此類ナリ、寶永中ニ、國用又彌匱キニ因テ、新ニ大錢ヲ鑄セシメラル、圓徑一寸五分計ニシテ、面ノ文ニ寶永通寶ト置キ、背ノ周郭ニ永久世用ノ四字ヲ置ケリ、一文ヲ以テ常ノ錢十文ニ直ス、此錢出テ民大ニ不便利ノ思ヲナシ、甚コレヲ厭ヒ惡ム、○中略己丑ノ春、○寶永六年文廟○德川家宣ノ初政ニ、是ヲ廢セラレテ民大ニ悅ベリ、○中略正德ノ末、章廟○德川家繼ノ時ニ及デ、又新錢ヲ鑄セシメラル、寬永以來ノ錢ヲ法トシテ、文ニモ寬永通寶ト書ケリ、寬永寬文ノ故錢ニ較レバ、銅頗ル劣レリ、文字モ彌細クナリテ、數十年ヲ歷バ、漫滅スベシト思ハル、

〔類聚名物考調度十五金銀寶貨〕鐵錢

鐵錢は、本朝に古へ有ことを聞ず、寬延の比、江戸にて始て錢座を立て鑄られし、是その始なり、是も停られしを、又明和の初比より、後藤庄三郎が奉りにて、龜戸村古への錢座の迹にて、又永代錢座を立られたり、是又鐵錢を專らとして、その外に白目赤金さしの小錢を鑄出しぬ、大凡一ヶ年に廿萬貫とぞ聞えし、始は一寸と云ひしが、後には八分とせり、懸目八分に不足といふ、

〔地方凡例錄十一〕元文二巳年、初て鐵錢を鑄らる、銅に雜物を交て鑄之、甚小薄なり、背に元の字の文あり、錢の色黑くして、形質至て賤し、量目五分程あり、

〔貨幣秘錄〕通用錢之事

明和二年乙酉七月、後藤庄三郎に命せられ、龜井戸村にて六千四百坪の地所を賜ひ、鑄錢定座を立られ、九月十五日より吹方を始む、一箇年吹高貳萬貫文ツヽと定らる、安永三年丙午九月に至りて、鑄錢座を廢せらる、凡十年、此間鐵錢吹高貳百貳拾六萬貳千五百八拾九貫文餘、重サ各七分六厘餘、按に此間追々に吹高を增されし事あり、

明和四年丁亥より安永二年癸巳迄、凡七年の間、長崎にて銅錢を鑄る、重サ六分、此吹高貳拾三萬千貫文といふ、明和四年丁亥より安永三年甲午九月迄、京都鑄錢座にて鐵錢を鑄る、重サ七分七厘餘、

此吹高百四拾貳萬貳千七百八拾貫文餘、明和五年戊子四月、水戸殿領分、幷仙臺領内にて、鑄錢の事免許あり、尤江戸定座差配たるべき旨定めらる、同九年〈○安永元年〉壬辰十月に至り、凡五年にして其事止む、天明四年甲辰、仙臺領にて再鑄始、同七年丁未迄凡四年にして止む、此間兩所にての吹高凡銅錢貳拾萬三百貳拾九貫文、鐵錢百三拾九萬四百九拾六貫文といふ、〈銅錢重サ六分、鐵錢重サ七分六厘餘、〉

〔錢幣考證〕伏見鐵錢　城州伏見西濱にて鑄る、明和四丁亥年九月四日初て賣出す、此錢以後出る所の鐵錢、地金至てあしく、茶碗のかけを入るは、寶永の大錢より初れるよし、此伏見錢より、初て土を入たるよし、此後の長字錢、久字錢、千字錢など、皆土を交て鑄たるよし、故に金の音なし、加島〈○攝津〉銑錢までは、銑ながら金の音あり、

○按ズルニ、錢ニ磁器ノ末ヲ加ヘシコト、三王外記ノ憲王記ニ見エタリ、又地方凡例錄ニ、元祿末より寶永に掛け、江戸に於て新錢を鑄る、荻原近江守重英奉之、雜物を加へ、形文錢より小薄、位甚劣れりト、此時ノ事ナリ、

〔地方凡例錄　十一〕元文以後、延享ゟ天明迄之間、數十年の内、江戸深川錢座、幷於大坂、鍋地鐵之錢年年吹出す、是をずく錢と言、唐金銅は少も不入、都て鍋釜に成、鐵を以て鑄之、磨も不懸、文字能書を撰といふにもあらず、唯錢の形有而已、貨の位、次第に賤成行、古の錢に比して、實に雲泥の違、貨と言べきものにはあらず、

〔吹塵錄　十二〕御内密申上候書付　後藤庄三郎

鐵錢凡六拾九萬五百貫文

是者明和六丑年、水戸殿御領に於て、一箇年鐵錢拾萬貫文ヅヽ、七箇年之間吹立之積御領之者引請候而、三箇年餘吹立、猶又安永三午年ゟ同六酉年七月迄、三箇年餘吹立有之候、右鑄錢場之

儀ハ、定座差配ハ被仰付候得共、伺之上仕法傳達、幷拾萬貫文吹場所相當見屆、御益上納取扱候迄に而、吹高之儀ハ差綺ひ不申候、尤年限中私方役人、幷支配之もの、彼地江見分爲御用被差遣候、

（御書付留五）銅錢鐵錢之儀、吹方先年被差止候處、遠國其外拂底之場所も有之趣に付、猶又此度鐵錢吹增被仰付候間、於國々も彌無差支可致通用候、

右之通可被相觸候

天保六未年九月

（明慶錄）安政六未年九月三日

此度鐵小錢吹立被仰付、銅小錢之分、追々引替候積、右引替方、銅小錢壹貫文之替リ、鐵小錢百文錢取交壹貫五百四十八文、右之內壹貫五百文ハ持主、四十八文ハ兩替屋江被下候積、右引替方之儀、兩替屋共に而買集め、金座役所江爲差出候筈に候、

右之趣從町御奉行所被仰渡候間、町方御支配場限り、行屆候樣可申聞候、

未九月三日

（明慶錄）萬延元申十二月十四日

世上通用之ため、於銀座精鐵錢吹方被仰付、右精鐵錢壹文に而、並錢四文之代相用、來る十七日ゟ在來之眞鍮錢取交通用可致、兩替等百文錢眞鍮錢壹文錢同樣、相心得可申候、

右之通御料私領寺社領共、不洩樣可被相觸候、

十二月

○按ズルニ、此錢面文背紋トモ、眞鍮錢ト異ナルコトナシ、後數年、水戸會津ヨリ鑄出セシモノ皆此形式ナリ、

鉛錢
鑞錢

〔市中取締書留〕慶應二寅年三月十八日町年寄樽俊之助方にて申渡

三組番組
兩替屋

水戶殿にて吹立相成候鐵錢之儀は、領分錢拂底に付、領分限通用之積、精鐵錢吹方御差許に相成、世上通用錢と不ㇾ紛樣、裏江卜之文字有ㇾ之、領分限之通用にて、世上一般通用、御願濟には無ㇾ之候、右者北御番所江伺之之上申渡

寅三月

○按ズルニ、背文ノト ノ字、後故アリテ削去ト云フ、

〔市中取締書留〕慶應二年八月四日申渡

小口年番
名主共

水戶殿、松平肥後守殿、精鐵四文錢吹立中、出格之譯を以、御當地限通用御差許相成候間、有來通用錢に取交、無ㇾ差支ㇾ通用可ㇾ致候、

右之通從ㇾ御奉行所ㇾ被ㇾ仰渡ㇾ候間、町中不ㇾ洩樣入ㇾ念、早々可ㇾ申通ㇾ候、

〔九暦〕天德二年三月廿八日、可ㇾ新錢鑄進ㇾ歟、並鉛錢、宜ㇾ可ㇾ申者、而依ㇾ公卿之參ㇾ、不ㇾ能ㇾ定奏、

〔類聚雜要抄四〕母屋調度事

甲身納銀小筥廿二合內〔中略〕

同小筥納十二合十二時形、單功百八十疋、各十五疋、以銀造入之塗物、

五合置丸玉卅果、同平玉卅、銀錢卅、白鑞錢卅、鉛錢卅、各納之、

〔敎令類纂初集錢六十六〕慶長十三年十二月八日

一鐚錢濫に撰ぶべからず、但なまり錢、大われ錢、かたなし、新錢、へいら錢、此外は無ㇾ異義ㇾ取引べき事、

眞鍮錢

〔昆陽漫錄 四〕天正慶長の比は、關東の民、ひそかに鉛錢を鑄て使ひしなり、

〔日本永代藏 四〕仕合の種を蒔錢

人は正直を本とする事、是神國のならはせなり、伊勢の社のかろ〲敷、百二十末社、紙表具の神體、思へば淺猿なる事なれ共、何の僞りなき心を鏡に懸て、人も曇らず、殊勝に有がたく、此秋津洲に住者、歩をはこびぬ、さればいづれの世より小才覺らしく、宮廻りの蒔錢に、鳩の目と云をかしげなる鉛錢、百といふて六十つなぎにして、扨もせちがしこき人心、豊なる福の神、是を笑ひ給ふべし、

〔泉彙 上〕勢州宮錢

鉛錢 鳩目 伊勢ノ宮錢ナリ、往昔參宮ノ人、社頭ニ於テ、散米ノ代リニ蒔所ノ錢ナリ、內宮藤波長官氏富ノ時マデ專ラ用ヒシガ、其後ハ停止セリト云、

〔速水房常見聞私記 十二〕予見孔方圖鑑、勢州宮錢とあり不審、仍て來田隼人へ尋ぬるに、凡天文年中の比、鐚錢といふもの、永樂と交り通用したるが、永樂一錢に、鐚錢四錢五錢を用ぬ、此鐚錢を宮錢といひしか分明ならず、此鐚は、應永文和の比、專ら通用し、四十年前までは宮錢ともいひ、猿目ともいひて、折々見受たり、形は甚小形なるよし聞及ぬ、

〔古今沿革考 下〕北條氏康、關東にて七八箇國を領しける比、下總の相馬にて、鐵のびたにて錢を鑄させける、是を鳩の目と名づく、日本にて鐵錢を鑄るの初めなるべし、

〔倭訓栞 前編十三 世〕せに 其小なるに、仙人錢あり、肥後の產に鳩目錢あり、

〔金銀御吹替次第 十二 御觸御書付〕明和五子年五月二日御觸

世上通用之爲め、於銀座眞鍮錢吹方被仰付候付、右眞鍮錢壹文ニ而、並錢四文之代り相用ひ、國々ニ至迄、無差支可令通用候者也、

四月

右之趣可被相觸候

〔貨幣秘錄〕眞鍮錢之事

明和五年戊子五月、龜井戸村銀座に於て、眞鍮錢を鑄る、眞鍮錢壹枚を以、並錢四文に換ふ、故に是を四文錢といふ、徑り九分强し、重サ壹匁四分、〔銅六割八分、鉒鉛二割四分、白鑞八分、背に浪あり、〕一箇年吹高五萬五千貫文と定めらる、此後連々に吹高を減せらる、天明八年戊申十二月に至て吹方を止め、永代通寶の令あり、但吹高五百五十三萬六千三百八十貫貳百八文、〔但壹文を壹枚にして算す〕文政四年辛巳十一月より同八年乙酉迄五年之間、銀座にて眞鍮錢吹增の事あり、重サ壹匁四分、〔銅七割半、鉒鉛壹割半、鉛壹割、〕吹高七萬九千七百貫文、〔但同上〕

〔貨幣通考〕同年〔○明和五年〕四月廿八日、於銀座當四の眞鍮錢吹立に付、通用すべき旨の令あり、

按るに、此錢重一匁二三分あり、面は寬永の號を用ひ背は波文を布く、始造るものは波文廿一、精工なり、後漸々造るものは波文減じ、近年造りたるもの、鍮品下りて紅銅の如し、故に一品の內、凡三種あり、

〔街談錄〕五月〔○明和五年〕朔日より四文錢通用はじまる、表に寬永通寶、裏には靑海波を鑄る、泉の古字にかたどれるにや、其波紋、初は波數多して後には少し、緡は靑き苧繩にて渡りしを、兩替屋にて、藥の緡を墨にてぬりて通用す、今はそれだに黑くそめず、

〔天保集成絲綸錄〕九十〕文政四巳年十一月

此度吹增被仰付候、眞鍮錢之儀者、遠國通用之ためニ候間、當地ニおいて御取撰ニ者不相成候、其段相心得、相場ニ不相障樣可致旨、兩替屋共江可申渡候事、

文政四巳年十一月

大目付江

眞鍮錢吹方、先年被差止候所、遠國之内ニハ、いまだ拂底之場所も有之趣ニ付、猶又此度吹増被仰付候間、於國々も彌無差支可致通用候、

十一月

右之趣可被相觸候

紙錢

〔倭名類聚抄 十三 祭祀〕紙錢　新樂府云、神之來兮風飄飄、紙錢動兮錦繖搖、俗云、加美勢邇、一云、勢邇加太、

〔倭訓栞 前編十三〕せにがた　倭名抄に、紙錢をよみ、かみせにとも訓せり、今錢切の幣といふ是也、神宮古記に、銀の紙切見えたり、

〔泉彙 上〕唐館通寶 紙錢ナリ

往年長崎ニテ、唐人屋敷出入ノ買人、此紙錢ヲ請取役所ヘ持參シ、銀ニ替タルヨシ、一紙ニ五錢ノ形ヲ押セリ、

〔倭訓栞 前編十三〕せにがた　家禮に、漢以來里俗稍以紙寓瘞錢と見ゆ、瘞錢ハ六道錢也、

〔正寶事錄〕寬保二年四月十六日

世上葬禮之節、金銀錢、或は六道錢、土中へ埋捨候事、無益之儀に候、然共俗習之儀、急に難相止可有之に付、其處之寺院より、右無益之道理、寄々旦方共へ說聞せ、向後土中へ埋候事爲相止候積に候、

右之通町々江申聞、相止候樣可相心得候、

戌四月

土錢

〔江家次第 七 六月〕大殿祭 藏人一人相副、令奉仕之

神祇官人 中臣忌部 先石灰壇、次經御帳後、奉仕夜御所、次朝餉、次御湯殿、次御樋殿、次御膳宿、次御厨子所、

切符 割符

次南殿御膳宿、散供畢插土錢。以絲貫之

〔下學集 態藝下〕割符 兩所通錢之義也 切符

〔庭訓往來 下〕被仰下之旨畏拜見仕候畢、○中略 湊々替錢浦々問丸、同以割符進上之、任假載、運送之、○中略

卯月十一日

〔臥雲日件錄〕寬正六年乙未八月十六日、講經布施百貫割符、盡取現錢來、及御臺布施沙金盆之代、合二十九貫文也云々、

〔親元日記〕文明五年十月十五日、山門西塔院北谷雜掌云々、靑苧商人、於越後國乍請取荷物、割符料足不致其沙汰、仍坂本戶津押荷物、雖催促、尙難澁、仰給主可預御下知之由、

〔親長卿記〕文明五年十一月七日、室町殿若公○足利義尙 御元服、來十二月云々、仍參仕人々、云亂中依窮困、各申請御訪、元長參仕之御點歟、裝束無用意之間、其子細仰談廣橋大納言、御訪事可入御人數云云、仍千疋切符、今日到來、

御元服總用之內、中院大納言幷右少辨御訪、各千疋宛分、可被渡遣候也、謹言、

十一月七日　判

飯尾大和守殿

飯尾加賀守殿

〔當代記 四〕文祿二年八月、自去年、奈良町人、金借ト云事ヲシ出シ、指セル無證據、只切手ニテ黃金ヲ借引ス、然間貧者利分ニ迷惑シテ相倒間、入德政可給之由訴之、然者爲禮儀、金子二千枚可進上トナリ、秀吉公聞之給、知行モ不持者、日本國之寶ヲ何トテ猥ニ執行哉、甚曲事之由宣、則被入德政、其後又金ヲ借、損失シタル事、不便之間可書上之由依仰、十枚費シタル者ハ、廿枚ト書上、廿枚損ジタル者ハ、三十枚四十枚ト書上處、又此三ケ一、秀吉公可奉借之由宣、奈良上下迷惑相窮也、此金借、大

名乘モ入ケルガ、秀吉公奉隱其名云々、

〔武備志〈二百三十一日本考〉〕津要

國有三津、皆商舶所聚、通海之江也、〈○中略〉三津惟坊津爲總路、客船往返、必由花旭塔津、爲中津、地方廣濶、人烟湊集、中國海商、無不聚此地、〈○中略〉洞津爲末津、〈○中略〉貨物或備或缺、惟中津無不有、貿易用銀金銅錢、憑經紀名曰乃隔依理、錢鑄天順永樂洪武、〈讓自琉球高麗得之〉錢一兩換三百三十三文零、用三文抵一分、總錢千稱一貫、每米一石常價一兩、中國斛可三石、

玩弄錢

〔新編鎌倉志〈五〉〕佐介谷

錢洗水　隱里ノ巖窟ノ中ニアリ、福神錢ヲ洗ト云フ、鎌倉五水ノ一也、

〔經濟纂要前集〈五〉〕石州銀

倭使小西飛來議封事、時以京營將佐楊貴綠爲館伴、小西飛暱楊、有私覿之禮、如刀盒之類、一猶常見惟銀錢多作人馬之狀、〈中略〉〈璽邑志林〉

〔地方凡例錄〈十一〉〕日本錢に繪錢とて、大黑錢、夷子錢、駒曳錢、念佛錢、題目錢、福神錢、紋盡、藤丸环、其外種々之繪錢あり、今遍く藏せる物あり、孰れの代に鑄たるや、通用錢には非ずと見えたり、鍛冶共戲に鑄たる物にや、其譯不知、併駒曳は、中古平錢十文之間に、壹文ヅヽ堺に入たると云說あれども、慥成正說しれず、駒曳は一錢、平錢十文に代るといふ、

〔新校正孔方圖鑑〕日本繪錢　皆近代ニ出テ、圖樣陋拙、名クル所モ雅馴ナラズトイヘドモ、且舊本ノマヽコレヲ出ス、此類天神錢、七福神錢、及駒錢大黑ノ類、極盡スベカラズ、

厭勝錢

〔倭訓栞〈前編三十七禮〉〕れんせんあしげ　笠懸の的の中に當る所を黑くす、是をも連錢といふとぞ、又的革に六所に錢をつくるを連錢といふ、駒牽の錢を用たり、よて駒をつくるとも云といへり、

〔御產所日記〕普廣院殿樣〈○足利義敎〉御時之事

一納申御胞衣ヲ、先清水ニテ七度洗テ後、酒ニテ三度、其後酢ニ浸、其後白布三尺ニテ裹申、其上ヲ赤色絹ニテ裹申、

一太。平。ト文字ノ有錢ヲ卅。三。文。ト、筆一管ト、墨一丁相副テ壺ニ納申、吉方ハ御陽守可レ申、其方山壺ナガラ納申也、典藥鄕成卿、同伊勢殿、貞國白直垂ニテ有ベシ、鄕成卿ト有同道、納申在所ヘ參勤ス、兩人罷向テ納申、

○按ズルニ、御產所之記ニハ、たい平の鳥目十。三。文。えなにつゝみそへ、をけへ入候也トアリ、三十ノ三ヲ漏シタルニヤ、

〔泉貨鑑十八〕宇野宗明ガ曰、厭勝品漢駒ノ類ハ、凡テ漢土ノ兒童ノ弄ビ物ニシテ、本朝ノ福一玉ノ類ナリ、俗ニ云、アナイチノナゲセンナリ、故ニ錢質厚ク大形ニシテ、文字ノ體モ宜シカラザル者多シ、今見ルトコロ、前漢韓信、吳將孫武ノ二錢、全ク和錢ノ福一玉ノ類ナルベシ、然レドモ漢錢ニシテ厭物ニハアラズ、又和錢ノ畫錢ノ內ニモ、兎犬錢玉負駒ノタグヒ、凡テ錢質ノ格別ニ厚キ者、皆コレ兒童ノモテアソブ福一玉ノ類ナリ然リト雖モ近歲ノ作ニモアラズ、古代ノ作ニテ、銅質錢體モ古雅ニテ愛スベキアリ、

〔泉貨鑑十八〕六條錢ハ、東山慈照相公○足利義政ノ治世ノ時、京都六條川原ニテ、種々ノ錢ヲ鑄サセテ、小兒ヘタマハリシコトアリ、鑄寫ハ其時ノ禁制ニテ、樣々ノ形ヲ人々ノ物好ニ任セテ鑄サセ、古錢ハワザト文字モ形モ替テ、コレヲ鑄ルトアリ、是ハ多ク厭。勝。品。樂錢ノ類ニテ、其形製モ定ラズ、然レドモ東山殿時代ノ物ナル故ニ、銅質モ甚古雅ニシテ、文字錢畫錢共ニ賞スルニ絕タリ、元祿以後ノ錢トハ、同日ノ論ニ非ズト云、

〔泉貨鑑二十〕錢神論

周通元寶錢ヲ、卜家擲錢ニ用ユルコト、諸書ニ見エタリ、又狐狸ノツキタルヲ拂フ術アリ、俗ニ通。

弄錢家

天錢ト云、此錢ハ五代後周ノ世宗、天下ノ銅佛ヲ毀テ鑄ル所ナレバ其奇瑞アルベシ、凡テ古錢ヲ携ル人ニハ、狐狸ノ類、近付コト能ハズト云ヘリ、唐國通寶ノ篆書錢ヲサスガミト云、七錢ヲ以テ邪魅妖氣ヲ拂ヒ退ク、又常ニ携テ運強シ、或ハ云陰指神、

富壽神寶ヲ日本サスガミト云、モツトモ妙多シ、守鏡ノ下ニ納テ、不祥ヲ去ル、或ハ云陽指神、

長年大寶　萬年通寶　長命富貴　百千長壽　萬曆通寶　福壽双泉　永壽通寶　壽昌元寶

此外長壽ノ稱アル錢ヲ產湯ニ入レバ、其子長命ナリ、○中略

布泉ノ男錢ヲ佩ルトキハ、男子ヲ生ト云傳フ、是ハマヽ其奇瑞ヲ見タリ、然レドモ布泉世ニ希ニシテ得ガタシ、若コレヲ得ザル時ハ、捐形ヲ以テ婦人ニ守リトナサシメテ可ナリ、○中略

加官進祿　宜爾子孫　長命富貴　百千長壽　長生保命　福壽延長　壽福山海　金玉滿堂

福祿長壽

此外厭勝品ト云ノ類、凡テ祥瑞多シ、アゲテ計ヘガタシ、錢ハ古今人心ノ倚ル處、自然ニ神アリ、信敬スベシ、

右數箇條ノ說ハ、誠ニ空言ニ似タルトイヘドモ、左ニアラズ、古ヨリ泉貨ヲ尊敬スルコトヲ知ラシメ、世俗ヲシテ、古今ノ珍寶ヲ破ラシメザル爲ナリ、

○按ズルニ、射ヲ學ブモノ、常ニ大中通寶ヲ佩ルトキハ其技ヲ進ムト云フ、又大觀通寶ハヨク出血ヲ止ム、衂血ヲ發スルモノ、口中ニ大觀錢ヲ含メバ其血止リ、婦人之ヲ髻中ニ挾メバ、經行ノ期ヲ延スト云リ、此類ノ傳說、尙ホアルベシ、

〔鄉黨遺聞〕古錢水戸手ト云モノアリ、大錢ノ皇宋通寶ナド種々アリ、コレハ萬千代君、如此事好ミタマヒテ、戲ニ鑄サシメラレシトナリ、其處ハ今ノ錢屋ナリト云、

○按ズルニ、武田萬千代ハ德川家康第五ノ男ナリ、慶長七年十一月、水戸二十五萬石ニ封ゼラ

レ、同八年九月ニ卒シタリ、錢屋ト云フ地ハ、城東濱田村ノ中ニ在リ、蓋シ此人ハ、近古弄錢家ノ鼻祖ト云フモ可ナラン、

〔武江年表　五〕此年間〇寶曆記事

好事の輩、古錢を集る事行はる、

〔孔方圖鑑〕古錢を愛する事、異朝には梁の世より起り、唐宋に至て隆なり、錢義は諸史百傳に載せずといふ事なし、弄錢の書も十餘部經籍史に見たり、然れども其書多は今の世に不傳、予多年意を委て、儒館釋門の博才に尋、或は豪家書林にもとむといへども、漸得ところは津逮秘書に泉志あり、三才圖會に珍貨編あり、正說郛に卓氏泉譜あり、類要事林に貨寶編あり、文獻通考に錢幣考あるのみ、共に寫して考算するに、弄錢の爲に益多からず、惟歷史に雜出する錢文を採り、或は今の古文錢を以て、世々の年號に牽合するときは、古今の興廢、萬國の風俗、おのづから錢質にあらはる、古を感じて遠を見る事、是弄錢のたのしむところ也、〇中略享保十四年己酉春、浪華中谷顧山、

〔撈海一得　下〕先人浪華ニ戍セシ日、顧山ナド云賞鑑家ト會シ多ク奇錢ヲ收藏ス、百錢圖備考ヲ著シテ云、高價ノ古錢ハ贋物多シ、半兩五銖、大布直百、永安大和以下ノ古錢、二千年ニ幾キノ物、洪遵ガ泉志ヲ編トキ、既ニ彼國ニモ多カラズト云、況大海ノ東ニ見在スル物、豈コト〴〵ク信ズベケンヤ、唯開元以下ノ通用錢、年々舶到シ、吾國鑄錢ノ事ヲ煩サズシテ、錢天下ニ充ツ、今諸國地中ニ堀得ル錢、宋錢ニ非ザル事ナシ、古ヨリ一ヲ以一ニ當ルナレバ、僞造シテモ利ヲ見ザルユヘニ、贋物ノ恐ナシ、古物ノ眞面目ヲ見テ疑フベカラザルハ、開元以下ノ平錢ニ勝ルハ有ベカラズト、

〔泉彙　上〕凡古錢ヲ愛シ玩ブコト、上世ノ事ハ詳カナラズ、元和御一統ヨリ後ニハ、越中富山城主松平大藏大輔〇正甫ヲ祖トス、侯ハ延寶ヨリ元祿ノ末マデ御在世ニテ、化蝶類苑ヲ著シ給フ、其比天王寺屋長左衛門住大坂ト云人化蝶類集ヲ編シ、元祿ヨリ享保末年ノ間ニ、妹尾祁齋住大坂泉譜及世

寳錄ノ作アリ、並ニ錢學ニ益アリ、其後古錢ヲ愛スル人漸ニ多ク、近世ニ中谷顧山先生其名高ク、我カ宇野翁中興シテ、已ニ今コレヲ好ム人海內ニ多ク、就中三都ニハ、此道ノ聞人少カラズ、實ニ昇平ノ餘澤ト云ベシ、

余幼稚ノ時ヨリ古錢ヲ好ミテ、宇野翁ヲ師トシ事ヘテ、コレヲ鑑識スルコトヲ學ベリ、翁姓ハ宇野、名ハ宗明、俗稱ハ九郎兵衞、大坂ノ住ナリ、此人十三歲ヨリ古錢ヲ好ミ、七十餘ニテ、安永三年甲午八月ニ物故セラル丶マデ、其愛玩セラル丶コト、六十年一日ノ如シ、故ニ天下ノ珍錢トシテ、家ニ貯ヘ藏ザルハナク、又諸家ノ珍藏トイヘドモ、此翁ノ鑑賞ヲ經ザルハナシ、翁本ト商家ニ生レテ無文字ナリシガ、錢學ニ志篤クシテ、竟ニ本邦六國史、及ビ二十一史等ヲ涉獵シテ、少シニテモ錢學ニ益アランコトヲ考索セラレケル、安永二年、丹州福知山城主朽木隱岐守殿求ニ應ジテ、續化蝶類苑ヲ著シ贈ラレケル、

○按ズルニ、泉彙ノ作者芳川維堅ハ大坂ノ人、字ハ士貨、潛龍齋ト號シ、俗稱ヲ甚右衞門ト云フ、愛錢ヲ以テ當時ニ聞エシモノナリ、朽木隱岐守、名ハ昌綱、龍橋ト號シ、彩雲堂トモ稱セラル、所著新撰錢譜、古今泉貨鑑等アリ、皆世ニ行ハル、就中泉貨鑑十五卷ハ、集メテ大成スルニ近シ、後人復其右ニ出ヅルモノナシ、

〔奇抄百圓序〕至延寳元祿間、富山睿侯、大募天下之古錢、於是始有化蝶類苑之作、侯之好古、稱無與比、及卒藏錢於棺、豈是元凱氏沈碑之遺意歟、自是以來、嗣尋嘉倣者、蚤緣不絕、浪華有天王寺屋某者、著化蝶類集、又有妹尾柳齋者、著泉譜及世寳錄、京師有內堀善人者、爲富山藩既廩人、泉癖聞于海內、後浪華有中谷顧山者、著孔方鑑、又有宇野宗明者、頗有資產、以招募之、著續化蝶類苑、以余觀之、收蓄賞鑑、於天下之古錢、而詳且盡者、莫宇野宗明若、可謂集大成矣、其門人有芳川維堅者、奬成其友河村羽積、令抄錄之、

○按ズルニ、奇抄百圓ノ著者河村羽積ハ、大坂ノ人、河内屋清左衞門ト云フ、所ㇾ著寛政孔方鑑、新渡大錢譜等アリ、

〔北窻瑣談後編二〕近き年、古錢を弄び貯ふ事行れて、好事家競ひ誇る事也、諸侯にも數萬金の古錢を貯へ給ふ御方も多しとぞ、其外三都の富豪、侯國の諸士などにも、其名高き人多し、余が見及びたる中にも、乾元重寶の大錢一文を金七十五兩にて求し人有り、又聞及びしには、得一元寶一文を銀四貫目にて買しといふ、又皇祐元寶を金百兩にて得たりと云、一文の錢、金百金に到れるも甚しといふべし、錯刀などは、有らば數百金の物なれども、海内に異物なしといふ、いかゞなりや、

○按ズルニ、是ハ寛政中ノ事ナルベシ、

〔世事見聞錄五〕諸町人の事

古錢を好む町人ありしが、一錢を價五十兩、百兩、貳百兩、三百兩など有り、半兩といへる錢壹文を六百兩にて買たるなどいへり、

○按ズルニ、是弄錢ノ流行ヨリ起リシ弊風ナリ、

〔古學小傳下〕狩谷掖齋

狩谷望之ハ、字ヲ卿雲、號ヲ掖齋ト云、稱ヲ三右衞門トヨベリ、江戸ノ人ナリ、〇中略幼ヨリマタ古錢貨ヲ好ミ、聚ル所幾百品ナルヲシラズ、時トシテ間窓ニ攤列シ、コレヲ一樂トス、翁平生人ニ語テ曰、吾唐宋古刻本ヲ集ル、徒ニ酉洞ノ富ニ誇ルニアラズ、コレヲ以テ誤本ヲ正ント欲スルノミ、泉貨ハ度量ノ徵トシ、且コレニヨリ世代風習ヲ考ント欲スト、

○按ズルニ、掖齋所ㇾ著、皇國泉貨通考アリ、和同開珎ノ珎ヲ以テ、寶ノ省字ト爲セリ、其子懷之モ亦、新校正孔方圖鑑ノ著アリ、並ニ世ニ行ハル、

〔文昌堂錢譜凡例〕余聚二古泉一五十年于今、漢魏唐宋已下古錢、稱ㇾ爲ㇾ難ㇾ獲者、一旦完聚、可ㇾ謂二厚幸一矣、故譜

以示來者云、

○按ズルニ、此錢譜ハ、水戸ノ儒官青山延于ノ著ハス所ナリ、延于少時ヨリ深ク古錢ヲ愛シ、其聚ムル所、數千百品ニ及ブ、因テ錢譜五卷ヲ著ス、其品目專ラ宋ノ洪遵ノ泉志ニ據ル、

〔文昌堂錢譜後序〕慶元以降、海內寧謐、四方無警、好古之士、始集彼錢、弄錢者流、遂遍於天下、於是有嗜古文錢者、有嗜對錢者、有嗜背文錢者、而彼古錢漂沒於我諸國者、於是乎出矣、世之所謂珍錢奇品者、於是乎備矣、三家雲起、聯鑣並馳、迭競優劣、是亦昇平之一盛事也、而其盛蓋肇於元祿、極於寬政云、家嚴○青山延于少有好古之癖、讀書之暇、留意於此者幾三十年、適以職事移家江邸、乃就錢商購之、八年之際、索搜不措、而所謂珍奇者悉得而藏之、既歸而水府、又於今八年矣、頃者家嚴揭摹藏錢、都爲五卷、名曰文昌堂泉譜、

〔孔方圖鑑序說〕龍橋世子常ニ曰ク、近歲弄錢ノ人、僞錢ト云ヘバ、強ニ眞ニ近キ者ヲモ棄、是大ニ弄錢ノ意ニソムケリ、其故ハ古泉ノ書ヲ得テ、其書ニ圖アル則ハ、銘文ノミ書スル者ヨリ見レバ、樂ミ大ニ勝レリ、押形ヲ得ル則ハ、是眞錢ト異ナラザル故ニ、其喜ビ猶勝ルベシ、然ル則ハ眞錢ヲ母錢トシテ、直ニ樣トナシテ造者ハ、是古代ノ錢ト、大小輕重、文字製作、少モ異ナルコトナシ、只銅ト時代トノ異ナルノミナリ、其樂ミ正錢ト同カラズトイヘドモ、押形ヲ以テ珍トスルヨリモ亦甚勝レリ、直シ物等正錢ヲ知ズシテ作者ハ取ニ足ズ、譬バ大觀ノ當十錢、徽宗帝ノ宸筆トイヘドモ、帝自書ス者一品也、是ヲ樣トシテ數萬貫ヲ造ル、皆其錢ヲ帝筆ト稱ス、サスレバ正錢ヲ樣トナス者ハ、我朝ニテ摸寫ストイヘドモ、何ゾ是ヲ棄ンヤ、然レドモ正錢ト贋物ト、共ニ愛スル者ハ不智ナリ、又強ニ捨ル者ハ不仁ナルベシ、只正錢ヲ正錢トシ、贋物ヲ贋物トシテ是ヲ愛セバ、樂ミ其中ニアリ、夫古泉ノ目利ハ、其銅ノ精粗ヲ知ハ云フニ及バズ、第一ニ地理ヲ察シ、其國々ノ銅色ヲ知、第二ニ文字ノ新古、時代ノ書法ヲ正、第三ニ世々ノ盛衰、土地ノ貧富ヲ考ベシ、銅色世々異ナリト

イヘドモ、震旦ノ地ハ、大抵北邊ハ黑黃、南方ハ青白ナリ、文字ハ寶ノ字ヲ以テ考鑑スベシ、其餘ノ文字ハ同カラズトイヘドモ、寶ノ一字ハ盡クアレバナリ、製作ノ善惡ハ、世ノ治亂國ノ盛衰ニヨレリ〇中略近世ノ贋物ハ、製作益委クシテ、文字ノ對樣、銅ノ精錬、自然ノ古ビ、數千ノ星霜ヲ積モ及ガタキ者アリ、只書典ニ據テ其意ヲ識察スベシ、

〔續化蝶類苑上〕古錢ノ眞僞ヲ糺ス事、第一本錢ハ、和漢俱ニ錢座アリテ、堝一ツニテ百餘錢ヲ鑄ル故ニ、錢面眞平ラカニ、內郭ヨリ外郭迄、ズンミリトタリヒヅミナク、外輪ノフチ急度立ツ也、僞錢ハ一錢宛、鑄タル物ユヱ、錢面眞平ニ無之、是非外輪ニメン出來ル物也、或ハ厚薄ヒヅミ抔有之、背多ハ卑シ、扨又內郭穴內ノスレ吟味次之、

〔孔方圖鑑〕一二三四五六七八九十の十品に分て、一番を珍錢とす、世にすくなし、それより段々十番に至るを雜錢とす、世に多し、古文は古文ばかり、平錢は平錢ばかりの位なり、古文錢の一番を以て、平錢日本錢の一番に准ずる事なかれ、

〔泉貨鑑十九說論〕元和寬永ノ頃ニ、御所ニ於テ、花蝶定メトイヘルコトアリシト云傳フ、又越中富山ノ前田家ニ於テ、古錢ノ位、階定メト云事アリ、是ハ古錢ノ多少ヲ以テ位ヲ定メ、上中下ノ次第ヲワカツコトナリ、其後又中谷顧山、宇野宗明等ガ、弄泉品定メト云モノアリ、是ハ古文錢ヲ初メニ置テ、次ニ平泉百品ヲ集メテ次第ヲナセリ、是ハ年代ノ次第ヲ論ズルニハアラズ、古錢ノ多少ヲ以テ位階ヲ定ムルコトナリ、

元祿寶永ノ頃、泉貨ヲ集メテ鬪化蝶ト名ヅケテ、コレヲタクラベルノ遊アリ、其次第ノ如キハ、人知ル者希ナリ、今其式ノ大體ヲ記シテ、古ヘコノ樂アルノコトヲ知ラシムルノミ、又化蝶類苑等ニ、泉貨ノ多少ヲ以テ位ヲ定ム、曰珍上上、曰珍上、曰上上、曰珍、曰上、曰中、曰下、右ノ次第ヲ以テ、其位ヲワカツモノナリ、

〔續化蝶類苑上〕僞錢ノ作者

元祿年間新四郎　初禪坊主ナリシ故ニ、輪袈裟作ト云習セリ、後大坂高原ニ住、陶器ヲ業トシ、今仲春助ト改ム、古錢ニ不限、古書古筆土氣ノ者、萬似物名人也、此者ノ作ハ、唐鏡ヲ潰シテ鑄タル故、何レモ錢質青ミ有之、錢ノ厚サ中ヲ得テ、外輪内郭倶ニ可ナリ上作、富山侯ノ仰ニテ、竹ヲ以テ古錢ヲ細工シ差上タリ、面文背形、本錢ニ紛フ者ナリ、

升伊作　直シ物クサラカシ也、薄錢ニテ背ノ外輪内郭最宜シ、銅質ハ直シ物故、色々有之、不功者ノ間ハ、ハマリ安シ、中作黄カラ金間々有之、

谷川作　泉州谷川ノ住、和泉屋與右衛門、後剃髪シテ西田遠順ト改ム、手跡ヲ能仕タル故、錢文皆自筆也、雖然古文平錢共ニ其時代ノ筆意ハ曾テ無之、大錢小錢和錢共皆同筆法少モ不違、往昔ヨリ有來ル外、自作ニ色々ノ錢文鑄タリ、

靈和通寶　通蘤通寶　三朝通寶　通達無邊(行書)　唐將千里(淡駒)　和錢八幡宮錢　觀音錢　大福二神

其外難勝計、曾テ本錢無之者皆自作ナリ、新銅ヲ以テ鑄、古ビヲ付タル物故、青サビヲ付ルヲ第一トセリ、錢體厚ク濶縁ニテ、背ノ外輪厚ク、内郭ハ至テ細シ下作、

東條作　大坂小谷ニ住、東條屋德右衛門、此作ハ紫金ヲ以テ鑄タル故、銅質紫金多シ、後ハ本錢ヲ寫シタル僞錢多シ、背ノ外輪内郭等殊ニ卑シ、谷川ヨリモ下作、青サビハ曾テ無之、

與市作　大坂高津ニ住、河内屋與市兵衛、此者ノ作ハ、異鈴錢ノ分殊ニ宜シ、皆本錢ヲ寫シタル者故甚迷安シ、然レドモ大順ニ隆武ノ文字ヲ用キル類、背形倶ニ同ジ不可迷、其身高津新地錢座ヘ入テ勤メシ者故、同志ノ族多ク、始ハ下作ナリシニ、後ニハ銅質背形共甚宜シ上作、大錢小錢共、本錢ヲ不見分ハ、孔方鑑ノ圖ヲ切拔キ、鑄形ヘ寫タル者故面背共ニ、孔方鑑ノ所圖ト毫髪モ不違、蓋シ孔方鑑ノ作者、予(○宇野宗明)ノ朋友ニテ、繪心ノナキ人故、孔方鑑ノ人物氣形、甚不埒ニテ、本錢トハ

雲泥ノ相違有之、與一其事ヲ不知、唯孔方鑑ノ圖ヲ以テ拵タル故、泉貨ハ至テ似セ得ルト云ヘドモ、人物氣形、孔方鑑ノ儘ナル故、一向タハイナシ、殊ニ福壽延長大上呪文本命星官等ノ人物ノ面部、可笑ノ至也、長生保命背ハ、左右ノ星官、倶ニ左ヲ向タルニ、與一ガ僞錢ハ、孔方鑑ノマヽナルユエ、左右向對セリ、是本錢ヲ不知シテ、唯孔方鑑ニ倚ルノ證也、餘ハ准之可知、大錢小錢共、孔方鑑ニ少シモ不違者ハ、與一作不可迷、

寶暦明和年間、右ノ後僞錢ヲ作ル者段々ニ有之、甚上作ニシテ、與一作ヨリモ勝レリ、不可迷、

近年紅毛錢ヲ似スル者出タリ、繪ノ事ハ、紅毛錢ハ不及言、紅毛ヨリ渡來ノ繪ヲ以テ、鑄形ニ寫セシ者故、王面杯最能似タリ、雖然紅毛文字ヲ不知故、文字ニ至テハ一面タハイナシ、以是可察、〇中略

中古天正慶長ノ頃、京都飾屋細工ノ錢、徑七分許甚厚キ錢アリ、文字ハ和同開珎、天正通寶、篆唐國篆宣和、背ハ繪錢モ有之、又ハ面背替リテ、文字許モ有之、至テ厚ク風雅ニ渉ザル物ユエ、先士コレヲ賞翫セズ、錢文ハ右ノ外色々有之、

慈照院殿ノ記録ニ曰、前略東山殿〇足利義政六條川原ニテ種々ノ錢ヲ鑄サセ、小兒ヘ被下候、鑄寫ハ御禁制ニテ、樣々ノ形ヲ人々ノ物好ニ任セ鑄サセ候、古錢ハ態ト字モ形モ替テ鑄之、指徑五寸ノ錢ノ兩面ニ古錢ヲ鑄付、是ヨリ後本紙切テ、文字不讀、可惜云々、先士ノ云傳、六條ト稱スル者右ノ記録ニテ分明也、然レドモ當時六條ト稱スル者、皆以テ古文錢漢駒ノ類也、東山大樹御時代ノ物ナル故ニ、銅質甚古雅ニテ、文字又賞スルニ堪タリ、當時元祿以後ノ贋錢ト同日ノ談ニ非ズ、本錢ナラズト云ヘドモ、眞錢ノ亞ナル者也、

〔泉貨鑑〕十六近代和錢按ズルニ、近歲ノ樂錢、其種類甚多シ、然レドモ銅色製作ノ至テ宜カラザル者ハ、弄泉家コレヲ愛セズ、近歲ノ諸書ニ出スモノ數多アリ、

和同男珎　和同閉珎　南國通寶〇中略

右ノ外四ツ寳字錢、二ツ寳字錢、轡錢、箕升錢、四ツ升錢等アリ、又大觀泰和ノ大錢ニ、背文奇異ノ形チヲ鑄ナスモノ甚多シ、皆銅色製作宜シカラズシテ、コレヲ愛スルモノナシ、只古錢賣買ノ人ノ見世ニナラベテ、幼童ヲマネクノカンバントナスノミナリ、

〔日本靈異記 中〕極窮女於釋迦丈六佛願福分示奇表以現得大福緣第廿八

聖武天皇世、奈羅京大安寺之西里有一女人、極窮命、活無由而飢、流聞大安寺丈六佛、衆生所願急能施賜、買花香油而以參往、於丈六佛前奉白之言、我昔世不修福因、現身受取貧窮之報、故我施寳、令免窮愁、累日經月、願祈不息、如常願福、獻花香燈、罷家而寢、明日起見、于門椅所有錢四貫、著之短籍、而注謂之大安寺大修多羅供錢、女人恐急以之送寺、時宗僧等見入錢藏、封印不誤、唯無錢四貫、故取納藏矣、女又參向于丈六前、獻花香燈、罷家而寢、明日起見乎庭中、有錢四貫、又短籍注謂大安寺常修多羅供錢、女以送寺、宗之僧等見錢器、封不誤也、開見之唯无錢四貫、恠之藏封、女如先參往丈六前、願曰福分、罷家而寢、明日開戶見之、閫前有錢四貫、著短籍謂大安寺成實論宗分錢、女以送寺、宗僧等見入錢之器、猶封不誤、開見之、唯无錢四貫、爰六宗之學頭僧等集會恠之、問女人曰、汝爲何行、答曰、无所爲、唯依貧窮存命無便無歸無怙、故我是寺釋迦丈六佛獻花香燈、願福分耳、衆僧聞之而商量言、是佛賜錢、故我不藏、返賜女人、女得錢四貫、爲增上緣、大富饒財、保身存命、諒知釋迦丈六不思議力、女人至信奇表之事矣、

因慳貪成大蛇緣第卅八

聖武天皇御世、諾樂京長庭山寺一僧常住、其僧臨命終時、告弟子言、我死之後、至于三年、室戶莫開、然死後經七々日、在大毒蛇伏其室戶、弟子知因敎化、而開室戶見之、錢卅貫隱藏也、取其錢以爲誦經、修善贈福矣、誠知貪錢因隱得大蛇身、返護其錢也、雖見須彌頂、不須見欲山頂者、其斯謂之矣、

〔日本往生極樂記〕律師無空、平生念佛爲業、衣食常乏、自謂我巳貧、後定煩遺弟、竊以萬錢、置于房內天

非之上、欲支歛葬也、律師臥病、言不及錢、忽以卽世、枇杷左大臣〈〇藤原仲平〉與律師有故舊矣、大臣夢、律師衣裳垢穢、形容枯槁、來相語曰、我有伏藏錢貨、不度受蛇身、願以其錢可書寫法華經、大臣自到舊房、搜得萬錢、其錢中有小蛇、見之逃去、大臣忽令書寫供養法華經一部了、他日夢、律師法服鮮明、顏色悅懌、持香爐來、謂大臣曰、吾以相府之恩、得免邪道、今詣極樂了、西向飛去焉、

〔大安寺資財帳〕合錢陸阡肆佰漆拾參貫捌佰貳拾貳文〈佛物錢二百三十五貫二百六十五文、修多羅衆錢一千六百六十八貫六十一文、法物錢一貫一百文、三論衆錢一千一百十貫八百五十文、律衆錢一百七十九貫四百五十五文、攝論衆錢五百廿一貫九百卅二文、別三論衆錢三百十八貫五百六十四文、涅槃分錢卅二貫文、華嚴分錢十八貫文、孟蘭盆分錢十七貫五百一文、木叉分錢廿四貫四百八十三文、菩薩分錢一貫九百九十八文、聖僧物錢廿八貫一百九十文、功德天女分錢六十文、四天王物錢十六貫三百卅六文、八部物錢五百文、塔分錢一貫七百五十九文、堂莊分錢一貫六百文、燃燈分錢廿四貫五十文、溫室分錢百三貫四百九十文、功德分錢一百三貫七十三文、義物分錢五貫三百七十二文、悲田分錢二百五十三貫十九文、衣田分錢二百廿八貫六百卌五文、見前僧物錢三百廿七貫九百七十七文、通分錢一千二百卌貫五百廿二文、〉

〔類聚國史〕〈三十二帝王〉延曆十一年正月甲子、車駕〈〇桓武〉巡覽諸院、於猪隈院令五位以上射、賜中者錢、

〔類聚三代格〕〈十二〉太政官符

禁斷貯錢事

右被右大臣宣偁、奉勅、用錢之道、取於輕便、有無均利、彼此得宜者也、如聞外國吏民、多有貯蓄、京畿士庶、還乏資用、既乖均利之義、亦失得宜之方、宜下嚴制不得更然、所有之錢、盡皆納官、仍用正稅、準價給之、送京之功、亦用正稅、如有藏而不進、爲他被告、不論蔭贖、科違勅罪、五分其物、一分給告者、四分沒官、但伊賀近江若狹丹波紀伊等國、不在禁限、

延曆十七年九月廿三日

〔類聚三代格〕〈十二〉太政官符

禁斷民蓄錢貨以求爵位事

右大納言正三位壹志濃王宣、奉勅、頃年納錢、例敍五品、今聞殷富之民、多貯錢貨、藏鏹萬計、或至腐爛、

是以官府倍力、無輟於鑄作、京畿之錢、未布於民間、其百姓納錢以求爵位、自今以後、嚴加禁止、更莫令然、

延曆十九年二月四日

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁制貯錢事

右延曆十七年九月廿三日格偁、右大臣宣、奉勅、用錢之道、取於輕便、有無均利、彼此得宜者也、如聞、外國吏民多有貯蓄、京畿士庶還乏資用、既乖均利之義、亦失得宜之方、宜下嚴制、不得更然、所有之錢、盡皆納官、仍用正稅、准價給之、送京之功、亦用正稅、如有藏而不進、爲他被告、不論蔭贖、科違勅罪、五分其物、一分給告者、四分沒官、但伊賀近江若狹丹波紀伊等國、不在禁限者、而今畿外諸國、富豪之輩、不慎格旨、猶事貯積、聞其由緒、非充資用、徒奢富強之名、各爭聚進之夥、邊郡既無通用之理、朝家永增鑄作之勞、靜論其費、誠須懲革、右大臣宣、奉勅、宜更下嚴制、一切禁斷、其所有之錢、依先格行之、若隱藏不進、科罪亦如先格、唯告言者三分給一、國司仍須符到之後卅箇日內、勘錄緡數、專脚言上、夫搜勘無私、言上合期、不論多少、特加褒擢、若乖違符旨、延引無申、及許容不勘、爲他被告、同處違勅罪、不曾寬宥、又伊賀近江等五箇國、先格已稱不在禁限、宜聽其貯蓄、

貞觀九年五月十日〇又見三代實錄

〔土佐日記〕九日〇承平五年正月のつとめて大湊より、なはの泊をおはんとて漕出にけり、〇中略舟子かぢとりは、ふなうたうたひて、なにともおもへらず、そのうたふうたは、〇中略夜部の菜を、そらごとをして、おぎのりわざをして、錢ももてこず、おのれだにこず、これならずおほかれどかゝず、十四日、〇中略舟君せちみす、さうじ物なければ、うまの時より後に、かぢとりのきのふつりたりし鯛に、錢なければ、よねをとりかけておちられぬ、

〔太平記三十五〕北野通夜物語附青砥左衛門事

報光寺時宗北條最勝園寺貞時北條二代ノ相州ニ仕ヘテ引付ノ人數ニ列リケル、青砥左衛門ト云者アリ、○中略或時德宗領ニ沙汰出來テ、地下ノ公文ト相模守ト訴陳ニ番フ事アリ、理非懸隔シテ、公文ガ申處道理ナリケレドモ、奉行頭人評定衆、皆德宗領ニ憚テ、公文ヲ負シケルヲ、青砥左衛門只一人、權門ニモ不恐、理ノ當ル處ヲ具ニ申立テ、遂ニ相模守ヲゾ負シケル、公文不慮ニ得理シテ、所帶ニ安堵シタリケルガ、其恩ヲ報ゼントヤ思ケン、錢ヲ三百貫俵ニ裹テ、後ロノ山ヨリ潛ニ青砥左衛門ガ坪ノ內ヘゾ入タリケル、青砥左衛門是ヲ見テ大ニ忿リ、沙汰ノ理非ヲ申ツルハ、相模殿ヲ奉思故也、全地下ノ公文ヲ引ニ非ズ、若引出物ヲ取ベクハ、上ノ御惡名ヲ申留ヌレバ、相模殿ヨリコソ悅ヲバシ給フベケレ、沙汰ニ勝タル公文ガ引出物ヲスベキ樣ナシトテ、一錢ヲモ遂ニ不受用、遙ニ遠キ田舍マデ持送セテゾ返シケル、又或時此青砥左衛門夜ニ入テ出仕ヲシケルニ、イツモ燧袋ニ入テ持タル錢ヲ十文取ハヅシテ滑河ヘゾ落シケルヲ、少事ノ物ナレバ、ヨシサテモアレカシトテコソ行過ベカリシガ、以ノ外ニ周章テ、其邊ノ町屋ヘ人ヲ走ラカシ、錢五十文ヲ以テ續松ヲ十把買テ、則是ヲ燃シテ遂ニ十文ノ錢ヲゾ求得タリケル、後日ニ是ヲ聞テ、十文ノ錢ヲ求メントテ、五十ニテ續松ヲ買テ燃シタルハ、小利大損哉ト笑ケレバ、青砥左衛門眉ヲ顰テ、サレバコソ御邊達ハ愚ニテ、世ノ費ヲモ不知、民ヲ惠ム心ナキ人ナレ、十文ノ錢ハ、其時不求バ、滑河ノ底ニ沈テ永ク失ヌベシ、某ガ續松ヲ買セツル五十ノ錢ハ、商人ノ家ニ止マリテ、永ク不可失、我損ハ商人ノ利也、彼ト我ト何ノ差別カアル、彼此六十文ノ錢、一ヲモ不失、豈天下ノ利ニ非ズヤト爪彈ヲシテ申ケレバ、難ジテ笑ツル傍ノ人々、舌ヲ振テゾ感ジケル、

〔相州兵亂記三〕淺草ノ沙汰

大永二年九月ノ初メ、古河ノ御所ヘ御使アリ、○中略其日觀音ノ緣日ニテ、十八日ノ事ナルニ、常ヨ

リ人群聚ス、殊更不思議ナル事アリ、辨天ノ堂ノ邊ヨリ、錢涌出ルコト有リ、寺僧ドモ制シケレドモ、參詣ノ人コレヲ不用、多此錢ヲトル、

〔結毦錄 中〕甘露幷永樂錢降事

享保二十一年十一月、江戸御城邊甘露降ル、味甚ダ甘シ、同月日光山神君宮殿ヲ修セラル、殿ノ内外ニ永樂錢降ル、其數ヲ知ラズト、

〔正寶事錄〕寶曆三年酉十一月八日聞書

當十月十四日暮時過、駒込追分新助店小間物賣藤四郎と申者之居宅內江、何れより共不知、米錢降、尤米三四合、鹽も少々交、錢貳百文程有之候由に而、處より御訴申上候得ば、御見分被下置、委細口書御取被成候由、然る處今晝時分、又々米鹽少々降候に付、御訴申上候得ば、御吟味之上、又々右體之儀有之候はゞ、御訴可申上旨被仰渡候旨、右町名主八左衞門咄にて承之、珍事に付記置候、

〔談海 二〕佐竹領地十二所の人家に錢をふらす事

佐竹領十二所といふ所は、其世臣茂木氏代々預り支配する城下なり、支配の給人に正直なるものあり、寶曆五年正月二日、妻に語りて云、昨夜大黑天に、あたまを槌にて打れたると夢見たりと、妻も能事なるべしといへるに、七種の粥喰ふ時に錢五文六文疊の上にあり、後にはゐろりの灰に交りてあり、又土藏の中に錢おほく出來てあり、日々いづくよりもてくるともなく、只家の中にそこらこゝらにあり、時々は寄錢のふる音すれば、それを見るに、誠に錢おちて有、是を見聞する者聞傳へて群集をなせり、國守の聽に達し、檢使を付て糺されけるに僞造にあらず、かくして五六ケ月も經て、ひろひあつめたる錢、七十貫文ほどに及べりとぞ、其後主人沒したれば、錢の降事も止たりとぞ、

〔百練抄 八高倉〕治承三年六月廿日、近日天下上下病惱、號之錢病、

〔妙法寺記上〕享祿二己丑此年ノ冬、世中十分ニ吉、去共坂塞リ候間、米貳升五合、大原ニテハ三升拾文サシニ賣買申候、大豆五升、小豆三升五合、稗ハ壹斗、賣買一向無御座候、去間錢飢渇ト申候、

〔妙法寺記下〕天文三甲午此年正月閏月、此春言語道斷、餓死致候而、人々ツマルコト無限、次ニ疫病ハヤリ候而、皆々ヤミ申候、去共賣買一切安シ、錢飢渇ニテ御座候、

〔明慶錄〕天保十三年十月廿一日

市中肴市場江、鮮魚買出しに集り候商人共より、相渡候代錢之內、員數不足之差錢有之哉に相聞、全取遣り混雜之場合に仕成候哉に而、左樣之儀は有之間敷事に候、自今以後、市場に出候商人共、萬一右體之差錢取扱候儀於相聞は召捕、急度可及吟味候條、其旨組々名主番外迄、不洩樣此もの共より可申通、

寅十月廿一日

〔經濟錄五食貨〕當代寬永以來、錢ヲ鑄ルコト數度ニ及ベルニ、海內ノ錢昔ヨリ多モナラズ、新錢ヲ鑄タル五七年ハ、民間ノ錢豐饒ニテ、二十年ノ外ニ出レバ、錢文乏シクナリテ、價ヲ增テ賣買ス、其故何ゾトイフニ、一ツニハ火災ノ時燒失ス、二ツニハ民間ニテ人ヲ葬ルニ、六道錢ト名ヅケテ、錢六文ヲ棺中ニ入ルヽ事アリ、六文ハ僅ナレドモ、海內ノ民、每日ニ死スル者、幾千萬ト云事ヲ知ラズ、棺中ニ入タル錢ハ、土葬スレバ土トナリ、火葬スレバ灰トナル、三ツニハ愚民ノ富士淺間湯殿等ノ山ニ登ル者、錢ヲ坎中ニ投入ルヽ事アリ、山ヲ守ル者モ、坎ニ入テ取出ス事アタハ子バ、遂ニ棄ルヽナリ、四ツニハ寺院ニテ佛像ヲ鑄、大鐘ヲ鑄ルニ、愚俗ノ男女、爐中ニ投入ルヽ事アリ、又近來銅ノ價貴クシテ、世ニ好銅乏キ故ニ、寬永寬文ノ錢ハ、上好ノ銅ナレバトテ、是ヲ聚テ佛像ヲ鑄ル者アリ、或ハ茶ノ具、又ハ種々ノ器物ヲ鑄ルモノナリ、已上ノ四ツニ錢ノ銷亡スル道ニテ、諸人ノ知レルトコロ明白ナリ、此外ニモ人ノ知ラヌ心ヅカヌ方ニ、銷亡スル事アルベシ、予〇太宰純ガ少キ

時マデハ、寛永寛文ノ錢バカリナリシニ、元祿以來、惡錢出テ、其後ハ寛永寛文ノ故錢、漸々ニ少クナリテ、近キ比ハ百文ノ錢ノ内ヲ觀ルニ、元祿以來ノ惡錢ノミ多ク有テ、寛永寛文ノ故錢ハ、僅ニ十ノ一二ナリ、增テ永樂以上ノ古錢ハ更ニ甚少シ、是錢ノ銷亡スル證ナリ、國家宜ク制禁ヲ立テ、錢ノ多ク銷亡セザル樣ニアルベキ者ナリ、異國ニテモ葬ニ錢ヲ埋ミ、神ヲ祭ルニ錢ヲ焚キ、水神ヲ祭ルニ錢ヲ沈ムル類ノ事有シガ、後世ニハ錢ニ印シテ、紙錢ト名ヅケテ用キルナリ、銅錢ノ銷亡スルヲ厭テノ事ナリ、

〔世諺問答六月〕とふていはく、嘉定と申す事は何のゆゑぞや、
答、此事はさらに本說有がたきことにや、たゞかの錢の銘に、かちやう通寶と侍れば勝といふみやうせんを賞翫するよしをぞ承及び侍りし、

〔倭訓栞中編九佐〕さいふ　制符の義也といへり、今は其器を稱せり、演義文にいふ搭膊也、信濃にて布のさいふをぎんぎちといふ、江戶にてはちんきちといふ、甲州も同じ、武田信玄陣吉と名くといふ、

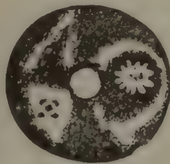
〔寶藏三〕錢箱
木ぞりうすからず、錠前きびしき箱有、見るから心地よし、古人の曰、筐を胠き櫃を發くもの、そなへに、扃鐍をかたくすれば、大盜至れる時は、却てその扃鐍のかたからざる事を恐ると辨せり、されども我箱よ錠おろしても、大盜のたすけともならず、おろさでも小盜の幸ともならず、とにもかくにも用心よろしきは其故いかん、其中に物なきがわざなるべし、

〔倭訓栞中編十二世〕せにかめ　錢瓶の義、錢を納て出ざる樣にこしらへたる器也、錇甯也といへり、

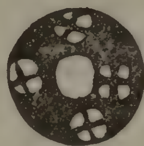
〔菅家文草五〕錢　四扶
家兄何利國、施用手中棄、楡莢重輕種、貨泉商賈源、貪夫身有癖、高士口無言、腐鏹誰應識、將令禮節存、

【泉彙】

無文銀錢



無文銅錢



和同開珎



萬年通寶



神功開寶



隆平永寶



富壽神寶



承和昌寶



長年大寶



饒益神寶



貞觀永寶



寛平大寶



延喜通寶



乾元大寶



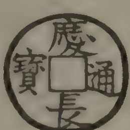
天正通寶



文祿通寶



慶長通寶



元和通寶



寛永通寶



文錢



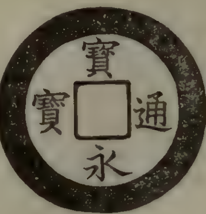


四當錢

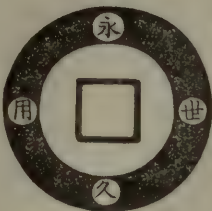




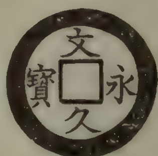
寶永通寶



同裏



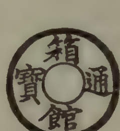
文久永寶



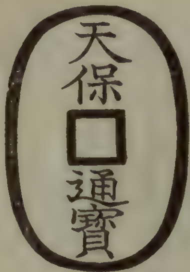
仙臺通寶



箱館通寶



天保通寶



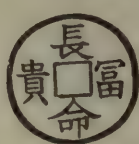
同裏



眞向大黒



長命富貴



藤丸



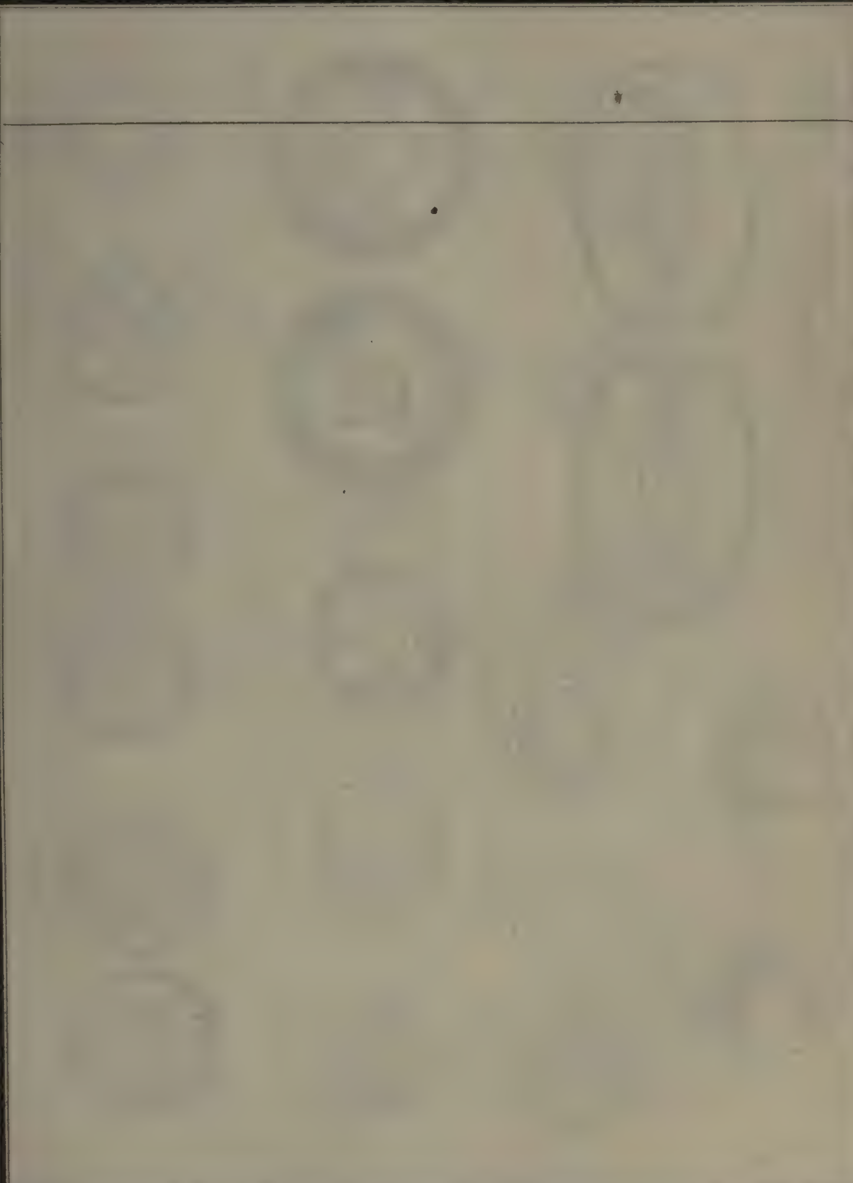
梅天神



猿曳駒



文久永寶箱館通寶ハ明治新撰錢譜ニ據リ
天保通寶ハ大日本貨幣史ニ據テ補フ



古事類苑

泉貨部四

金銀貨上

萬延金

古事類苑

泉貨部四

金銀貨上

金銀錢ノ事ハ、既ニ前篇ニ見ユ、故ニ此ニハ錢ニアラズシテ、而シテ專ラ交易ノ用ヲ爲ス者ヲ總稱シテ金銀貨ト爲ス、按ズルニ上世ノ通貨ハ、錢ノミヲ用キシモノニテ、金銀貨ノ用ハ未ダ起ラズ、時ニ之ヲ朝廷ニ貢シ、臣下ニ賜ヒテ、賣買貿易ノ資ト爲シヽ事ナキニアラザレドモ、未ダ之ヲ以テ直ニ通貨ト爲シヽニハアラズ、近衞天皇ノ頃ニ至リ、銀ヲ錬リテ鋌ト爲シ、稱シテ南廷或ハ南鐐ト爲シ、又沙金モ粒若クハ塊ト爲シテ、之ヲ贈遺ノ用ニ供シタリキ、金銀貨ノ用、是ニ於テカ萌芽ス、足利氏ノ季ニ至リテ、大小板金行ハル、豐臣秀吉海内ヲ統一スルニ方リ、盛ニ鼓鑄ノ業ヲ興シ、大判小判花降銀等ノ金銀貨アリ、德川家康天下ノ大柄ヲ掌握スルニ至リ、大小諸種ノ貨幣ヲ鑄造シ、金銀貨始テ海内ニ通シ、是ヨリ以後、時ニ盛衰ナキニアラズト雖モ、終ニ人世必須ノ物トナレリ、其慶長年間ニ鑄ル所ハ、大判金、笹判金江戸座小判、京座小判、駿河座小判、万兩頭小判、一分判、片本字一分判、兩本字一分判、丁銀、大黑丁銀、乃チ是ナリ、今之ヲ總稱シテ慶長金銀ト云フ、其後元祿年間、金銀貨ヲ改鑄ス、大判金、江戸座小判、京座小判、一分判、丁銀、大黑丁銀、豆板銀、二朱判金、乃チ是ナリ、今之ヲ總稱シテ元祿金銀ト云フ、其豆板銀ハ、俗ニ小玉銀又小粒トモ云フ、寶永七年、乾字小判等ヲ鑄ル、小判金、一分判、乾字小判同一分判、駿河座一分判、二寶丁銀、永字丁銀、三寶丁銀、豆板銀、乃チ是ナリ、今之ヲ總

稱シテ寳永金銀ト云フ、其乾字小判ト云ヒ、永字丁銀ト稱スルハ、極印ノ文字ヲ以テ稱スル所ナリ、正德元年、四寳銀ヲ鑄ル、同四年又金銀貨ヲ改鑄ス、四寳銀、武藏小判、一分判、佐字小判、佐字一分、佐字丁銀、佐字豆板銀、乃チ是ナリ、今之ヲ總稱シテ、正德金銀ト云フ、享保年間、大判小判ヲ鑄ル、今之ヲ總稱シテ、享保金銀ト云フ、其後元文年中ニ至リ、又金銀貨ヲ改鑄ス、元文小判、一分判、大黑銀、丁銀、豆板銀、乃チ是ナリ、今之ヲ總稱シテ元文金銀ト云フ、文字ノ極印アルヲ以テ、文字金銀、又ハ文金銀ト云フ、品位甚卑シ、爾來改鑄スル每ニ、品質漸ク降ル、明和二年、元文丁銀ト同位ノ銀ヲ以テ、掛目五匁ノ銀貨ヲ造リ、之ヲ五匁銀ト稱シ、三個ヲ以テ一分判金ニ當テシメ、始テ銀貨ヲ以テ金貨ト同等ナラシム、安永元年、銀貨ヲ鑄ル、其文ニ、以南鐐一片換小判一枚トアリ、蓋シ丁銀等ノ銀貨ハ、時ニ隨テ其直ニ高下アレドモ、五匁銀ト南鐐トハ、金貨ト同ジク、一定不動ナルモノト爲シヽナリ、文政年間ニハ、二分判、小判、一分判、一朱銀、二朱銀アリ、今之ヲ總稱シテ、文政金銀ト云フ、其二分判ニ二種アリ、文政元年ニ鑄ル所ノモノハ、眞書文字ノ極印アルヲ以テ、眞字二分ト云ヒ、文政七年ニ鑄ル所ノモノハ、草書文字ノ極印アルヲ以テ、草字二分ト云フ、天保年間、又改鑄アリ、五兩判、小判、一分判、二朱金、一分銀、乃チ是ナリ、今之ヲ總稱シテ天保金銀ト云フ、小判等ニ保字ノ極印アルヲ以テ、之ヲ保字金銀ト稱ス、又安政年間鑄ル所ノ、小判、二分判、一分金、二朱銀アリ、今之ヲ總稱シテ安政金銀ト云フ、又萬延元年鑄ル所ノ、大判、小判、一分判、二分判、二朱金アリ、今之ヲ總稱シテ萬延金銀ト云フ、德川氏金銀貨鑄造ノ業、此ニ至テ止ム、此他豐臣氏ノ遺制ニ倣ヒテ、金銀分銅ヲ鑄テ、之ヲ不時ノ用ニ備ヘタリト云フ、

金銀貨ヲ計ルニ、兩分朱ノ目アリ、兩ハ斤ノ十六分ノ一、分ハ兩ノ四分ノ一、朱ハ銖卽チ兩ノ二十四分ノ一ニシテ、共ニ斤兩ノ名ナルヲ、轉ジテ其直ノ名ト爲セルナリ、而シテ朱ハ後ニ兩

ノ十六分ノ一、(卽チ分ノ四分ノ一)トナレリ、此外ニ匹ト稱スルモノアリ、錢ノ匹ヨリ起レリ、卽チ四貫文ヲ一兩ト爲シ、時ノ舊慣ニ由リ、(事ハ前篇錢直條ニ見ユ)一分ヲ百匹トスルナリ、又百文ノ錢ヲ十匹ト爲シ、二百文ノ錢ヲ二十匹ト爲シヽガ如キハ、頗ル均一ヲ缺クニ似タリ、又小判ニ六十タノ稱アリ、卽チ金一兩ヲ銀六十タニ當ツルモノニテ、是亦計算上ニ稱スル所ナリ、京都以西ニ在テハ、必ズシモ此法ニ依ラザリキ、又千兩ヲ一箱ト云ヒ、百兩ヲ一包ト云フハ、民間ノ私稱ナリ、又一兩ヲ一圓ト云ヒ、一分ヲ一方ト云フガ如キハ、德川時代漢學書生間ノ通語ナリキ、

甲州金アリ、武田氏其領國ニ施行セシモノニテ、德川氏時代ニ於テモ、特ニ之ヲ甲州ニノミ行用セシメタリキ、又佐州銀アリ、佐渡國ニ於テ造ル所ナリ、此餘足利氏ノ季世以來、各國各自ニ鑄造シテ、一地方ニノミ用キシ所ノ貨幣アリ、此類今之ヲ雜金銀ノ條ニ收メタリ、

〔金銀圖錄附言七〕古金ノ名目ハ、沙金、棘金、延金、板金、筋金、竿金、竹流金、碁石金、金丸、ヒルモ金等アリ、(今モ小判金ヲ製スルニ、筋金、竹流金、延金ナド云名目アリ、古キ遺法ナルベシ、(中略)又按ニ、俗ニ六波羅小判ト云フアリ、平家物語競ノ條ニ、木ノ下ガ代リニ、六波羅ノ煖廷ヲコソ取テ參リテ候ヘ云々トアリ、是ハ仲綱ガ馬ノキハメテ白キヲ鐐ニ替ヘテ、南鐐ト名ケシナリ、疑クハ六波羅ノ南鐐銀ト云コトヨリ傳會シテ、六波羅小判ト云シニヤ、)天正慶長ノ間ニ至テハ、大佛判、小佛判、二條判、三條判、五條判、駿河判、武藏判、東山殿判、嵯峨判、舟印子、花印子、大坂ノ千枚分銅、橋本判アリ、甲金ニハ、大鼓判、細字金、縄目金、古甲金、上判、飯櫃等アリ、古銀ハ、南廷、南鐐、印子銀、判銀、(又板銀トモ)丁銀、紋銀、錠銀、サウマ銀等アリ、又切金切銀ト板金ヲ入用ホド切テ使ヒシナリ、是ヲ切遣ヒト云、後藤ノ切金、越後ノ鉈切ノ類、皆此遺制ナリ、萬治寛文ノ際ニ至テハ、金銀分銅、金小分銅、印子、碁石、金丸、流金等アリ、

丁銀ハモト鋌ニ作ベキヲ挺ニ作リ、又丁ニ路セルナリ、唐六典ニ、金銀曰鋌トミエ、通鑑釋文辨誤ニ、今人冶銀大鋌五十兩、中半之、小鋌又半之、世謂之鋌銀トアレバ、異朝ニモ若ク呼シナリ、南鐐ハ

金銀數量

爾雅ニ、白金謂之銀、其美者謂之鐐トアリテ、最上ノ銀ヲ指ナリ、本邦ニ傳ル南鐐ノ名ハ古キコトナリ、源平盛衰記、治承二年ノ條ニ、砂金千兩、南鐐百トミエ、八島大臣ヨリ仲綱ニ送ラレシ馬、フトク逞ク、キハメテ白キ馬ナレバ、南鐐ト名付ラレシ由モ同書ニ見エ、又之ヲ平家物語ニハ、煖遼ニ作リ、同ク異本ニハ歎丁ト書タリ、東鑑ニ南廷ト云ヒ、(廷ハ挺ナリ、延喜式ニ、銀一分、鐵一廷三斤、五兩爲廷トアリ、)砂金集ニ、歎挺ト見エタルモ皆同ジ、永享行幸記ニモ、南鐐ノ建盞アリ、然レバ鎌倉室町ノ時ヨリ、專ラ南鐐ノ名アリシナリ、(南ノ字、疑クハ詩ノ大路南金ノ南ヲ假借スルカ、又按ニ、廣韻類編ニ、外夷語音之珠ヲ載ス、珍寶ノ部ニ、金孔加尼、銀南者、錢慈尼トミエタリ、南者イカナル音ニヤ、)豆板銀、又小玉銀ト云、京都ニテハ小粒ト云、(關東ノ小粒金ヲバ、上方ニテ分判ト云、)其豆イタハ疑ラクハ豆バンナラン歟、異朝ニ子銀粒ト云、劈子ト云、零碎銀ト云、散碎銀ト云、塊頭ト云モノ、皆コレ切使ヒノ小玉銀ナリ、

〔日本書紀 十八 宣化〕元年五月辛丑朔、詔曰、食者天下之本也、黃金萬貫不可療飢、

〇按ズルニ、黃金萬貫トアルハ疑ハシ、貫ハ鏹數ヨリ出デタルニテ、黃金ニ施スベカラズ、又斤兩ニ貫ト云フハ、我國ニテ稱スルコトニテ、而モ後世ニ出デタリ、因テ意フニ貫或ハ鎰ノ誤カ、

〔大唐六典 二十 太府寺〕金銀曰鋌、錢曰貫、

〔史記 百二十九 貨殖〕子貸金、錢千貫、節駔會、

〔日本書紀 二十一 推古〕十三年四月、是時高麗國大興王、聞日本國天皇造佛像、貢上黃金三百兩、

〔日本書紀 三十 持統〕五年九月壬申、賜音博士大唐續守言、薩弘格、書博士百濟末士善信、銀人二十兩、　十二月己亥、賜醫博士務大參德自珍、呪禁博士木素丁武、沙宅萬首、銀人二十兩、　六年二月丁未、賜陰陽博士沙門法藏、道基、銀人二十兩、

〔續日本後紀 十八 仁明〕承和十五年六月壬辰、是日太政官牒送在唐天台宗留學問僧圓載、其辭奉勅省圓載表款、客服變更、心事艱阻、然自強不息、乞留數年、凡人心也、皆戀鄉土、非敦求法、誰樂遠偏、事須遂其實歸、不厭年深、又風潮萬里、齎獻遠臻、物豈在奇、唯嘉乃情、宜因子遠成等還次、令知此意、裁賜金物、以

充振資者、准勅聽更住數年、兼賜黃金一百廿兩、宜領之、

〔扶桑略記 二十四 醍醐〕延長四年五月廿一日、召興福寺寬建法師、於修明門外奏請、就唐商人船入唐求法、及巡禮五臺山、許之、又給黃金小百兩、以宛旅資、　六月七日、依有院〇宇多仰、勅奉黃金五十兩、此爲給入唐求法沙門寬建也者、已上出御記、

〔源氏物語 三十七 横笛〕故權大納言のはかなくうせ給ひにしかなしさを、あかず口をしきものに戀しのび給ふ人多かり、六條院にも、〇中略をり〳〵につけて忍び給ふ、御はてにも誦經などとりわきせさせ給、〇中略こがね百兩をなん、べちにせさせ給ける、

〔大鏡 六 内大臣道隆〕三の御方は、冷泉院のみこ帥宮〇敦道と申しをこそは、父殿むことりたてまつらせ給へりしも、後々はやがて御中たえにしかば、すゑのよは一條わたりに、いとあやしくておはするとぞきこえ給へりし、〇中略學生どもめしあつめて、作文しあそばせ給ひけるに、金を二三十兩ばかり、屛風のかみよりなげいだして、人々うち給ひければ、ふさはしからず、にくしとはおもはれけれど、その座にて饗應し申て、とりあらそひけり、金給はりたるはよけれども、さも見ぐるしかりしものかなとこそ、いまに申さるなれ、

〔吾妻鏡 六〕文治二年十月一日甲戌、陸奥國今年貢金四百五十兩、秀衡入道送獻之、二品可令傳進給之故也、

〔蔭凉軒日錄〕〔蔭戒記〕應永卅二年六月廿五日癸亥、或人云、入道内府殿〇足利義持今日自八幡還向給、直被參北野宮者、又曰、被進銀劒一振、金二裹、二百兩歟、神馬二疋云々、

〔宣胤卿記〕永正元年七月卅日戊午、自駿河爲一字之助成、金十兩 十枚 上之、

〔進退記 一〕板金の事、是も殿中にては披露なし、又進上もなし、私ざまにての事也、五枚十枚百枚とも候へば、折又は盆などにすへ候て披露候、〇下略

〔金銀圖錄附七言〕金幾枚、銀幾枚ト云コト、愚〇近藤守重ガ見ル所ハ、信長公ノ時ヲ始トス、是黃金大判丁銀ナリ、其金一枚ハ大概重サ四拾目餘ナリ、其幾兩ヲ以テ云フハ、推古紀ニ黃金三百兩トミエ、持統紀ニ白銀三斤八兩トアルヲ始トス、是鍊金挺銀ナルベシ、其兩ハ令ニ見エシ大兩ナリ、（廿四銖爲兩、三兩爲大兩一、十六兩爲斤、）鎌倉ノ時、南廷幾ト云モノ、其重サ今知ベカラズ、好古日錄ニ、近日久安二年四月廿二日、禮單ヲミル、進上南廷、貳直六百匹、コレ南廷一ハ三百匹ナレドモ、日錄ニ引書ナケレバ、輙スク明證ト爲シガタシ、（東鑑建長四年ノ記ニ、砂金百兩、南廷十兩トアリ、東鑑全篇ノ內、南廷ヲ兩ヲ以テ云コト、此一條ノミナリ、疑クハ十兩ノ兩ノ字衍文ナラン、）足利ノ時、金銀一兩ノ目各四匁五分ナリ、文明ノ末ニ至テハ、金ハ五匁ヲ以テ一兩トシ、銀ハ四匁五分ヲ一兩トスルモノアリ、天正中ニ金一兩ト云モノ、四五匁ニ當ルアリ、又小判金一兩ヲ銀五拾目ト定メラレシコトハ、慶長ノ令ニ見ユ、金ヲ分ヲ以テ云コトハ、孝謙紀ニ、獲黃金獻之、鍊金一分、沙金一分ト見ユ、是レ分兩ノ分ナルベシ、銖ハ朱ニ作ルコトハ、昆陽漫錄ニ、梁ノ時、五銖錢ノ文ヲ五朱トス、省文ナリ、今朱ヲ用ユルハ之ニ同ジト云ヘリ、

〔信長公記十二〕天正七年己卯四月十七日、多賀谷修理かたへ被遣注文、

御小袖五ツ　縮三十端　以上

銀子五枚　是は使者に被下候也

八月二日、以前法花宗と法文仕候、貞安長老へ、

一銀子五十枚　貞安へ被下

一銀子三十枚　淨嚴院長老へ

一銀子拾枚　日野秀長老へ

一銀子拾枚　關東之靈長老へ

如此送被遣、忝次第也、

十二月十日、去程八幡之片岡鵜右衛門と申者、周光香爐所持候を被召上、銀子百五十枚被下候也、

〔信長公記十三〕天正八年庚辰三月十三日、矢部善七郎御使に而、金銀百枚、北條氏政よりの使者笠原間宮兩人に被下、京都に而、田舎への宮笥、調申候へと被仰遣也、　五月十七日、國中之相撲取被召寄、安土御山に而御相撲在之、御馬廻衆御見物、日野之長光、正林、あら鹿、面白相撲を勝申に付而、爲御褒美、銀子五枚、長光被下忝頂戴、

○按ズルニ、右銀子幾枚トアルハ、皆挺銀ナルベシ、信長板金ト同時ニ造リシコト疑フベカラズ、

〔金銀圖録一正用品〕一永祿九年記ニ、正月十一日、從京上銀一雙、兩種被下之、〇中略

一水戸藥王院天正年間古文書ノ內此書年號チ失ストイヘドモ、信長ヘ兩度音信トアレバ、天正年間ノ書ナリ、

僧正口宣之爲御禮、禁裏樣江黃金三兩、田舎目、御門跡樣江同貳分、院家江同貳分、御進上候、

一同文書ニ

來春早々可被調進御禮物書立

金壹枚京目　禁裏樣　同五兩同　親王樣中略

同壹兩　御あちや〳〵樣　同壹枚　御門跡樣

同三兩此內貳兩京目　同民部丞　同壹分　伊勢丞

以上六枚九兩三分歟

右之外三兩壹分壹朱、信長江兩度御音信、鳥羽小路失墜仕候、此方江可被相渡分如斯候、

右金壹枚ハ大判ナルベキニ、京目ト記スト記サヾルトアリ、然レバ是モ掛目ノ多少アリテ、不足ノ分ハ包ミ足セシコトニヤ、又黃金ニモ三兩田舎目トアレバ、是モ品ニヨリ京目田舎目ノ差別アリテ、掛ケ分ケシコトヽ聞ユ、幾兩幾分幾朱ハ、モトヨリ砂金ノ掛目ニシテ、此時モ幾朱ト云コ

〔三貨圖彙附錄一〕京都若江從四位長公朝臣家藏ニ、觀應年間ノ古文書アリ、其中ニ、

京江進上ノ砂金ハ、目一〇兩〇四〇匁五〇分〇

田舍江下シ賜フ砂金ハ、目一〇兩〇四〇匁七〇分〇

トアリ、長公朝臣云、往古王政ノ時ハ、諸物ニ運力ヲ賜フ事アリテ、田舍ヨリ獻ルモ又賜フニモ、皆二分宛ノ運力ヲ加ヘラルヽ事、家藏ノ舊記ニアリト云リ、今常是ニテ上納銀ヲ包ムニ、銀百目ニ三分ノ餘分ヲ加ヘ、入目ト云如ク、是等モ運力ノ餘風ナラン、室町殿時代、京都金銀兩目ノ大法ハ、一兩四匁五分ニテ、田舍遠國ヨリノ進獻ハ、必二分宛ノ運力ヲ加フ、然レドモ在京シテノウヘハ、又京都大法ノ京目ヲ以テ納メシトモ見ユ、位階口宣等ノ禮ナドニテ、上京ノ時、一進獻必田舍目ヲ以テ納ム、尤運力ヲ加フルハ、皆切遣ヒノ黄金也、判金一枚ハ、其儘ニテ納メ、一枚ヲ切遣ヒ金ニテ納ムル時ハ、必京目田舍目ヲ用ユ、鹿苑院殿〇足利義滿御元服記始メ、其頃ノ舊記ニ、砂金何兩、兩分本法、銀折數コノ兩分本法トアルハ、皆京目ナリ、右量目ハ京都ノ大法ニテ、諸國ミナ此法制ヲ用キシナリ、然レドモ甲斐ノ國ハ金山有テ、又一國通例ノ量目アリテ、京目ノ四匁五分ヲ以テ一兩トセルモアリ、又四匁ヲ以テスルモアリ、金銀圖錄ニ、文祿五年、淺野長繼ノ古文書ニ、京目爲中目ノ事アリテ、此算當不解、前ニ記ス京目田舍目ニ不合、甲斐一國通用ノ量目ナルヤ、其委キハ不知、

〇按ズルニ、斤兩ニ朱ト云フハ、二十四朱ヲ以テ一兩ノ量トシ、金銀貨ニ朱ト云フハ、十六朱ヲ以テ一兩ノ値トセリ、而シテ其値トセシ事ハ、何ノ年代ニ起リシニカ、詳ナラズ、

〔泉志一正用品〕前漢高后紀曰、二年行八銖錢、〇中略舊譜曰、重八銖、文曰半兩、

〔通典九食貨〕錢幣

武帝梁〇乃鑄錢、〇中略五朱錢、徑七分半、重三銖半、文曰五朱、源出稚錢、但稍遷異、以銖爲朱耳、

〔香取大禰宜上給勘定目錄〕一高百四拾石八升五合　田畑辻〇中略

米百三拾俵壹斗四升三合 但三斗七升入

此金貳拾貳兩三分、永九百文、但壹兩ニ付貳石壹斗ゞゞ〇中略

寛永八年未十月廿日

〔駿河新風土記二十二〕田

慶安年中御高帳

高十九萬千三百十五石六斗九升一合

永八百四十七貫四百四十四文

金二十八兩二分二朱糸目半〇中略

金二十八兩二分二朱糸目半トハ金納ノ高ヲイフ、後世ノ永ヲ金ト云モノトヒトシカラズ、此金納ノ村方ト云ハ、安部郡ノ内九ヶ村アリ、其別、

小判三兩一朱小糸目　中野村

同五兩一分一朱小糸目　田代村

同四兩一分二朱中糸目　上田村

同二兩二朱中　藥澤村

同三兩二分二朱、　岩崎村

同四兩一分糸目半　小河内村

同一兩　上坂本村

同三兩　梅ヶ島村

同　二兩　入島村

此九ヶ村ヲ云、〔中略〕サテ一兩一分一朱中糸目小糸目トイフ斤兩ノ目アリ、此稱外ニモイフ事ニヤ、コノ國ニテハ安部郡ノ中ニ、茶ノ直段ノ高下ニ一朱中糸目等ノ稱アリ、外ニ此目ヲイフ事ナシ、〔中略〕銖ノコトハ、字書ニモ算書ニモ、六朱爲二一分一トアレド、通用ハ四朱一分ナリ、一銖ノ下ノ名、外ニ見ルコトナシ、朱中ト云ハ、一銖二分五厘ノ半、一分二厘五毛ニ當リ、糸目ト云ハ、其半ニテ六厘二毛五絲ニ當ル、糸目ト云ハ、絲トイフ字ノ訓ナルベシ、此絲ハ字書ニ十絲爲二絲一ト云義ナリ、又小糸目トハ三厘一毛二絲五忽ニ當ルナリ、以上ノ量ハ黄金ノ名ナリ、是ヲ今小判一兩六十目銀ニ充テ、算レ之ル事左ノ如シ、

一兩六十目　一分銀十五匁　一朱三匁七分五厘

朱中ハ一匁八分七厘五毛　糸目九分三厘七毛五絲　小糸目四分六厘八毛七絲五忽

コノ量目、昔ハ村ノ高ニサヘ用タル事ナルヲ、延寶年中、村高モ石ニ換リテヨリ、官府ニテ用ル事ナク、又外ニモ用ルコトノナキ故ニヤ、算法ヲ記シタル書ニ出ス事ナシ、上ニモ云如ク、此國安倍郡ニテ、安倍茶ヲ商フ者ノミ用フル事ニテ、茶ハ二百目ヲ一斤トシ、四十斤ヲ一本ト云フ、其一本ヲ又一箇トモ云、一本ノ價或ハ金三分二朱中糸目ナドヽ云、糸目小糸目ナドノ數九分三厘七毛五糸、四分六厘八毛七絲五忽等事ムツカシキ算ナレド、是ヲ只糸目ハ凡錢百文ニ當テ、小糸目ハ五十文ニ當レバ、大形違ハナバ、仕ナレタルコトヽテ、イサヽカモ滯リナク算用スル事也、

〔寛永板塵劫記上〕小ばん六兩三分三朱有時、一兩に付五十六匁がへにして、右の小ばんに銀なにほどぞといふ時に、

銀三百八拾八匁五分といふ

〔太閤記十八〕帶刀先生吉晴行狀

仕置者堀尾民部に、雲州松江之地下人便て云やうは、佐陀江の水口を、銀子二十章（なり）廿枚にて請申度由望しかば、卽奉行人宜しき事に存知、先生にかくと云しかば、曾て同心なかりしなり、

〔仁和寺御傳〕後南御室

慶長十五（庚戌）年九月廿五日、壬寅（鬼口曜口）於眞光院寢殿御灌頂（廿三歲）大阿闍梨晉海僧正、呪願權僧正光紹、唄師堯瑜法印、敎授禪宥僧都、誦經空盛僧都、色衆廿六口、相國家康公助成云々、白銀三百枚云々、

〔續近世畸人傳四〕室町孀（并犬頭　附脫金拾金二人）

板倉伊賀守殿京を守護し給へるころ、三條橋頭にて金三兩を拾へる人あり、落したる人いかにうれふらんと、さま〴〵もとむれども出來たる人なし、せんかたなく官に訴へければ、此よしを書付、辻々に張せ給ひしかば、落したる人出來りて我おとせしも、彼者拾へるも、皆天也、吾とるべきにあらずと辭す、拾へる人は訴出るほどのことなれば、もとよりうけず、互に讓りければ今の世にも、かゝるめづらしき訴をきくことのうれしさ、堯舜の民ともいひつべしと大に感じたまひて、吾も其中に交らんとて、又あらたに金三片を出し、六片となし、兩人へ貳片づゝあたへ、殘る二片を自ら納め給ひ、此後汝等むつまじくせよ、何事によらず、おもふことあらば聞ゆへしとねもごろに仰給ふとなん、

〔坂家日記〕松平陸奥守綱宗ニ被仰付、小石川御堀普請三月（萬治三年）ニ始リ、萬治四年ニ成就ス、右入用ノ金有增、金一分十六萬八百十六切ト云々、小判ニシテ四萬九千五百四兩、

〔松の落葉四〕金百疋

今の世に壹步金といふものひとつを百疋といへり、これは此金をはじめてつくらせたまへるとき、百疋にうりもし、かひもしけるによりて、いひそめたることゝぞおもはるゝ、百疋といふは、錢壹貫のことになん、

金銀裝飾

〔金銀圖錄附七言〕今金百兩ヲ一包トシ、千兩ヲ一箱トス、銀ハ十貫目ヲ一箱トス、漢書ニ王莽ノ時、黃金萬斤者爲一匱トミエ、梁書ニ黃金一斤爲餅、百餅爲一簉トミユ、異朝ニモ萬斤一箱ト、百斤一箱トアリシナリ、

〔品物名數抄金玉類〕金銀ト謂金一枚二枚者大判ナリ、一兩二兩ト云フハ小判ナリ、小判ハ一枚二枚ト稱セズ、銀ハ一枚トイフ、今俗貳ハ金一分爲百疋、以金三分充銀一枚、但通禮ニハ非ズ、今畿内ハ四十三文目ナリ、

〔今川大雙紙〕躾式法の事

一金をまゐらする事、うすやうに包也、うすやうは時にしたがひて、色ふしたるべし、四季により て包むべし、紙に包事もあり、時によるべし、めし金を折敷、又はやない箱におかるゝ也、是は持 て參も別の義なし、置て歸るも同前也、

〔榮花物語衣の珠二十七〕皇太后宮○三條后藤原妍子には故三條院の御ために御八講せさせ給はんとて、ほとけみなつくり奉らせたまへるに、五月十九日○萬壽三年よりといそがせ給、○中略女院○上東門院藤原彰子より瑠璃の壺にこがね五十兩いれさせたまへり、

〔奥州後三年記上〕永保のころ、奥六郡がうちに、淸原眞衡といふものあり、○中略賴義むかし貞任をうたんとて、みちの國へくだりし時、旅のかり屋の内にて、彼女にあひてけり、すなはちはじめて女子一人をうめり、祖父宗基これをかしづきやしなふ事かぎりなし、眞ひらこの女をむかへて、成衡が妻とす、あたらしきよめを饗せんとて、當國隣國のそこばくの郞等ども日ごとに事をせさす、陸奥のならひ、地火爐ついでとなんいふなり、もろ〳〵のくひ物をあつむるのみにあらず、金銀絹布馬鞍をもちはこぶ、出羽國の住人吉彥秀武といふ者あり、○中略おなじく家人のうちにもよほされて、この事をいとなむ、さま〴〵ことゞもしたる中に、朱の盤に金をうづたかくつみて、目上に身づからさゝげて、庭にあゆみいでたり、

〔吾妻鏡九〕文治五年八月廿二日己酉、申剋、著御于泰衡平泉館、主者已逐電、家者又化烟、（〇中略）但當于坤角、有一宇倉廩、遁餘焔之難、遣葛西三郎淸重、小栗十郎重成等令見之給、沈紫檀以下唐木厨子數脚在之、其內所納者、（〇中略）南廷百（各盛金器）等也、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年（〇康元元年）八月廿三日辛巳、將軍家入御于新奥州（〇北條政村）常葉第、（〇中略）供盃酒三獻之後、渡御泉殿、以金銀以下作屋形、納（金五十兩、色々甘葛蜂蜜、南廷三、絹三十、帖綿二十、紫一段、吳綾一端、屛風五十本等也、）被置此所、（〇中略）及晚被奉御引出物、刑部少輔敎時持參御劒、（竹作）金五十兩、（〇金一兩銀二兩折數）陸奥七郎業時役之、南廷五、（銀二兩折數）足利三郎利氏持參之、

〔聚樂第行幸記〕四日め（〇天正十六年四月十七日、中略、）北政所殿大政所殿ゟ、金吾侍從御使として進上物有、（〇中略）

一黃金　五十兩（〇砂金袋入之〇中略）

右政所殿より進上之也、（〇中略）

一黃金　五十兩（〇砂金袋入之〇中略）

右大政所殿より進上之也

〇按ズルニ、進退記ノ板金披露の事ト云フ條ニ、沙金は織物の袋に入て、これも唐の盆、硯のふたなどにするえて、人に遣す也、袋の口は受取人の方に向けて出べしトアリ、沙金袋ハ世ニ福包ト云フモノナリ、

〔慶長日記〕慶長十三年八月廿日、於駿府、內府樣將軍樣、御天守御普請場へ出御、御天守打槌、御大工中井大和守勤之、（〇中略）終而中井被任諸大夫、御知行被下、其上御大刀目錄、薄錢千貫文、銀子袋八、（〇一袋に十枚入）拜領、

〔金銀御吹替次第七包方〕包方取扱

一享保三戌年十月廿八日、新金銀通用御觸書仕候ニ付、翌廿八日包方之儀ニ付、左之通之書付差

出、

覺

一此度被仰出候金銀通用之儀奉承知候、依之御馬代包銀之儀、獻上銀壹枚之時は、唯今迄新銀ニ而貳拾壹匁五分、通用銀ニ而四拾三匁相包申候、向後新銀ニ而四拾三匁、通用四寶銀ニ而百七拾貳匁包可申儀ニ奉存候、

一獻上銀壹枚より參枚迄は、通用銀ニ而一包ニ可罷成候得共、五枚以上一包ニ難仕候、尤拾枚包は、四包ニ仕候樣罷成候、此儀如何可仕候哉奉伺候、

一包銀上書之儀、唯今迄は三寶四寶共、通用同事ニ御座候間、上書ニ銀何枚銀何百目と計相認申候、向後三寶銀四方銀は、被仰出候割合之通相包、上書ニ三寶四寶と肩書ニ而も可仕候哉、是又奉伺候、以上、

閏十月廿九日　大黑長左衛門

一享保三戌年十一月十七日、今朝御殿江罷出候處、水野讃岐守殿、杉岡彌太郎殿、辻六郎左衛門殿御列ニ而被仰渡候は、向後銀上納被致候衆中より、何れの銀持參致候共、御定之割合を以、包極相渡可申候、新銀ニ而致上納候ニ不限候間、其通り相心得可申旨被仰渡候、

〔金銀御吹替次第一吹方〕享保銀

享保三戌年十一月二日、包銀上銘書上之事

覺

新銀は唯今迄之通　新銀何百目

古銀は唯今迄之通　古銀何百目

元祿銀は唯今迄之通　元祿銀何百目

寳永銀は　　寳永銀何百目
中銀は　　中銀何百目
三寳銀は　　三寳銀何百目
四寳銀は　　四寳銀何百目

右之通御座候、小玉計包申候得ば、唯今迄之通、上書ニ小玉と添書仕候、丁銀掛足リニ小玉銀交へ申候は、斷書不ㇾ仕候、以上、

戌十一月二日　　大黒長左衞門

〔金銀御吹替次第七包方〕包方取扱

一享保十二未年二月、銀包上銘、板行ニいたし度願左之通、

覺

包銀上書之儀、唯今迄銀目何枚何百目と書付ニ仕候、自今五百目包、幷壹枚包より拾枚包迄、包銀上書之銀目、板行ニ仕度奉ㇾ存候、左樣仕候得ば、私勝手ニ罷成候ニ付奉ㇾ伺候、五百目以下之端銀は、銀目定り不ㇾ申候ニ付、唯今迄之通、書付ニ認申候、右之段奉ㇾ伺候、以上、

未二月

右之書付肥後守殿江持參

但右書面差出候後、同月廿八日、御呼出之御切紙留有ㇾ之候得共、罷出候儀留無ㇾ之、然者被ㇾ仰渡有無相分り兼候へ共、其以來迚も板行ニ致候儀無ㇾ之候得ば、難ㇾ相成事ニ被ㇾ仰渡候事と被ㇾ存候、

〔金銀御吹替次第七包方〕包方取扱

一寛延二巳年三月廿三日、神尾若狹守殿御宅へ願書壹通持參、外ニ役法書壹通、江戸包銀入目之

書付壹通、右三通、若狹守殿用人兒玉繁右衛門取次ニ而差出罷歸ル、

乍恐以書付奉願候

一町方取沙汰ニ承候者、私包銀之封印を似せ候包銀を封之儘買取候兩替屋有之、則買取候似せ包銀者、兩御番所江上り有之候よし承及申候、依之奉願候者、町沙汰之通、實正之儀ニも御座候ハヽ、右之似せ包銀、私方改役之者、爲心得見せ置申度奉存候間、可罷成御儀ニ御座候ハヽ、御見せ被成下候樣致度奉願候、

一上納銀御金藏江相納り候内ニ而、御拂方ニ相成候銀者、私封印之儘、世上江相廻り申候間、萬一惡事を巧候者、印判を彫習候而、世上江相廻り有之候私封印を寫取、其形を以似せ包仕候時者、御大切之儀ニ奉存候間、五百目小包幷拾貫目箱封共ニ、是迄用來候印判ニ見印仕、且又當日包方當番改役之者之印判をも押候樣ニ仕度奉願候、左樣仕候得者、當番之者之印判、七日ニ替り申候間、封印改之節、手掛りニ相成候間、右之通被新有成下候樣ニ奉願候、

一御金日前、諸上納銀包之案内遲く申來り候故、大方御金日前、日數二日宛ニ而、諸上納不殘包立申候、往古より晝七ツ半時過ル時者、包銀不仕候役方ニ而御座候得共、右二日ニ而包立候故、上納高多有之候時者、包餘り候而、上納之差支ニ罷成候間、無是非暮時分迄も包ニ掛り申候事も御座候ニ付、自今者包銀之案内、御金日前廣ニ爲致、御金日前、日數三日ニ而、包立候樣ニ仕度奉存候間、御金日前廣ニ包之案内仕候樣、上納方之者江被仰渡被下候樣奉願候、

一私役所江被仰渡候役法有之、往古より其通相守候而相務候得共、御書付不被下候故、私自分之役法之樣ニ相成、□□不宜候間、此度御吟味被成下、御改役法之御書付被成下候樣奉願候、則古來より勤來り候役法之通、別紙相認入御覽候、

右之通奉願候、被爲聞召分、願之通被爲仰付被下候者、難有奉存候、以上、

巳二月　　大黒長左衛門

包銀仕古より相勤來候役法之覺

一包銀之儀、先方より案内申來次第、日限繰合、無差支包極相渡候而、帳面ニ印形取置申候、

一悪銀持參之者有之候ハヽ、打砕き相返し、似せ候手筋可相知樣子ニ候ハヽ、無遠慮吟味仕候樣ニ被仰渡候、

一掛目之錢、本目之外、御定之入目掛入申候、依之小包ニ掛分候而者、本目ニ不足相立不申候、

一夜ニ入候而者、包銀不仕候、尤急御用之包銀者、私封印之五百目包を請取候而、包分候儀も御座候、

一獻上御馬代銀、御精進日ニは包不申候、此儀者元祿年中ニ被仰付候、

一拾貫目箱封仕候上封印摺レ不申爲ニ、是迄澁紙ニ而包、細引ニ而結來り申候間、右細引之結目江も封印仕候而、御金藏江相納り候節、右封を解相改候而、納候樣ニ仕度奉願候、

右之通御座候、此度御書付被成下候樣奉願候、以上、

巳三月　　大黒長左衛門

下ケ札文言

此儀者上納銀御金日前ニ、私役所江持參仕封印仕候而、又納人江相渡置申候間、爲念口封仕候儀新規ニ奉願候、

入目定法

一壹枚包　　貳分

一貳枚包　　三分

一參枚包　　三分五釐

一五枚包　五分
一拾枚包　八分
一拾匁以下　五釐
一拾匁より貳拾目迄　壹分
一貳拾目、より三拾目迄　壹分五釐
一三拾目より四拾三匁迄　貳分
一四拾三匁より五拾目迄　貳分五釐
一五拾目より百目迄　三分
一百目より百五拾目迄　三分五釐
一百五拾目ゟ貳百目迄　四分
一貳百目より貳百五拾目迄　五分
一貳百五拾目より三百目迄　六分
一三百五拾目より四百目迄　七分
一四百三拾目より四百九拾目迄　九分
一五百目　壹匁
一外七枚包　六分

右之通御座候、以上、

巳三月　大黒長左衛門

右之通三通、若狭守殿用人兒玉繁右衛門江相渡し罷歸ル、但し五百目包木形貳ッ上ル、

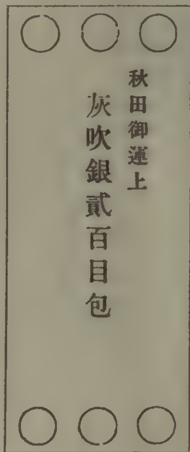
一右包銀伺書を六月十四日御附紙ニ而被仰渡候、尤堀田相模守殿被仰渡候由、願書之内似せ包

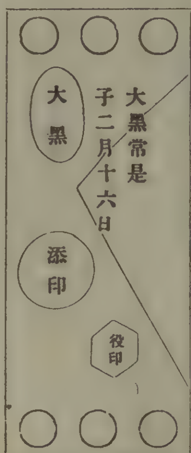
之儀、御町奉行衆江被仰談候處、其似せ包者、似せニ極り候事故切碎、只今無之よし御申被成候旨被仰渡候、包案内前廣ニいたし候儀、上納方江御勘定所より被仰渡候ニ不及候間、御勘定所御下知之由申候而、其方より上納方江申聞候樣ニ可被仰渡候、

〔金銀御吹替次第七包方〕包方取扱

一寶暦六子年二月十一日、佐竹右京大夫殿元方役川井七左衛門より、出羽國秋田院内銀山御運上銀封印之儀申來ル、〇中略

一翌十六日〇同月 右御運上灰吹銀掛直、今日使者關勘左衛門と申仁被致持參、〇中略 左之通包封印いたし候、



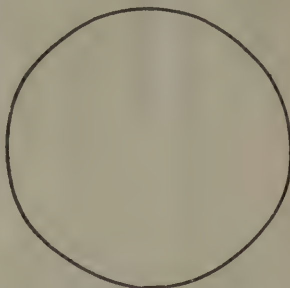


掛役役印　木村金右衛門
下包役印　村田幸藏
上包役印　高岡忠五郎

內ニ　灰吹銀貳百目
外ニ　入目貳拾四匁三分

右之通相認申候

灰吹大キサ大概如此



掛目壹枚ニ付
三枚五匁内外有之
壹包ニ六枚と端入

〔天保集成絲綸錄九十〕寛政元酉年三月

三奉行江

折銀割銀燒銀之儀、是迄上納銀包方之節、常是ニ而、少々之折割燒ニても相省き、包方不致候得共、以來ハ錆銀ハ勿論、六七分迄之折割銀幷燒銀ハ、極印一向ニ不分分ハ格別、一ヶ所ニ而も極印相分り候分ハ、無構上納銀ニ改包可致旨、此度被仰出候間、其段相心得、世上通用無差滯、武家町家共取引可致候、勿論八分より之折割銀幷燒銀者、極印一向難見得候ハヽ、少々之燒ニても通用難成候間、右之分ハ京大坂江戸銀座、或ハ兩替屋之内、銀座下買之もの方江差出、定法之步合引方を以直させ可申候、

右者先達而ゟ追々相觸候通、近來銀相場引上、諸色高價ニ至り、萬民難儀之事ニ付、世上通用銀相増候得共、一統之ためニ候間、丁銀吹方被仰付、猶又前書之趣相觸候儀ニ付、丁銀所持之者ハ、成丈ケ遣拂いたし、持圍ひ致間敷候、右之御趣意を相辨、若通用可成分取遣り差滯者、步合銀取候趣等有

之ニおいてハ、吟味之上、急度咎可申付候、右之趣武家在町寺社領共不洩樣、御料者御代官、私領ハ領主地頭より可被相觸候、

三月

〔金銀御吹替次第（包七カ）〕包方取扱

一大坂御用留之内

寛政三亥年

御銀包所御條目掛板　出入手代　矢倉三郎助相認申候

御條目左之通

定

一銀包案内申來次第、御用差支不申樣操合いたし、包之日限可申遣事、

一惡銀有之候はゝ打碎、其使江可相返候、尤贋候手筋可相知樣子ニ候はゝ、無遠慮可致吟味事、

一包銀晝七半時を限り相仕廻、夜ニ入候而は包銀一切致間敷事、

一御馬代銀、御精進日ニは包申間敷事、

右先規役法之通、可相心得候之旨、御書付出候間、彌嚴密ニ可相務候、以上、

寛延二年巳六月十四日　常是

定

一御銀包方之儀、先規御定之通相守、御用大切ニ可相務候、尤當番長役之差圖を請、無禮無之樣可相務事、

一上納銀持參之節、銀見役之者ども立會、數を算請取之、入念可相改事、

一改之上悪銀有之候ハヽ、御定法之通打砕、持参人江可相返候事、

一掛目之儀者、掛役之者入念相改、御定之入目を入、毛頭軽目無之様掛改可申候、改之上軽目有之候ハヽ、持参人江相返し、掛直させ可申事、

一分銅針に秤等、度々掛試相改可申事、

右之條々厳密ニ相守、御用可相務候、以上、

月日　　常是

〔金銀御吹替次第（七包方）〕包方取扱

寛政五年七月廿三日、左之書付壹通、我等川井次左衛門召連、御殿江持参、於御勘定若林市右衛門殿江差出候處、請取候條被申聞候、退出、

諸献上銀諸上納銀包組料并包紙代之覺

一献上銀壹枚包壹ニ付
　包極料銀貳匁宛
　包紙西之内四枚代銀三分宛
　〆貳匁三分

一同貳枚包壹ニ付
　包極料銀四匁宛
　包紙西之内四枚代銀三分宛
　〆四匁三分

一同三枚包壹ニ付
　包極料銀六匁宛
　包紙西之内四枚代銀三分宛
　〆六匁三分

一同五枚包壹ニ付
　包極料銀拾匁宛

包紙西之内四枚代銀三分宛

〆拾匁三分

一同七枚包壹ニ付

包極料銀拾四匁宛

包紙西之内四枚代銀三分宛

〆拾四匁三分

一同拾枚包壹ニ付

包極料銀貳拾目宛

包紙西之内四枚代銀三分宛

〆貳拾目三分

一諸上納銀五百目包壹ニ付

包極料銀七分宛

包紙西之内壹枚小四三枚代銀貳分宛

〆九分

一同五百目以下何程ニ而も壹包ニ付

包極料銀四分宛

包紙代銀貳分宛

〆六分

一小普請上納　銀壹包ニ付

包紙代銀貳分宛

右之割合を以、諸獻上御銀、諸上納銀共、改包極料包紙代銀、御三家樣御三卿樣奉始、諸御大名樣御旗本樣方、并諸上納銀共、納方向々より、書面之通請取度奉願上候、以上、

寛政五丑七月　大黑長左衛門無印

金銀圖録

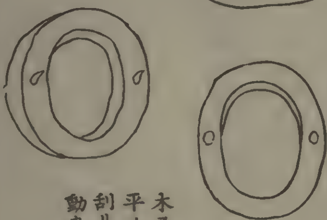


近世砂金裹

外亀甲形金紙一枚裏無地金紙一枚中黄青赤紙各一枚紅白水引ニテ結之釼先ヨリ底マテ長サ七寸七分許

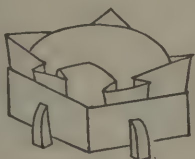


表金箔

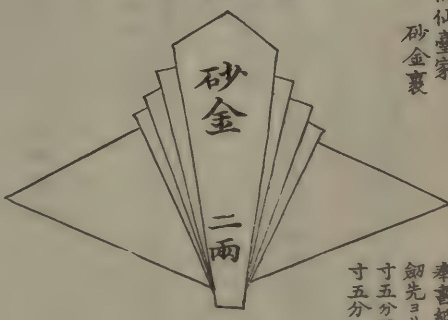


裏銀箔

木ヲ圖ノ如ク丸ク平メニ造リ中ヲ刳リ二ツ合釘ニテ動カザルヤウニス



後三年合戰繪砂金圖



同仙臺家砂金裹

奉書紙二枚重子釼先ヨリ底マテ九寸五分兩翼一尺二寸五分



面　側　背

白紙ニテ包ミ紙捻ニテ結フ

〔進退記〕板金披露之事

一板金の事、是も殿中にては披露なし、又進上もなし、私ざまにての事也、五枚十枚百枚とも候へば、折又は盆などにする候て披露候、只一枚二枚も同前に候、御前にて包をあけ候事などはなく候、但時宜によりて相替事可ㇾ有ㇾ之候、

○按ズルニ、此書撰者年代トモ詳ナラザレドモ、上文金銀數量ノ條ニ引ク所ノ宣胤卿記、永正元年七月ノ條ニ、金十兩十枚トアルニ合セ考ルニ、足利氏ノ季ニ成リシモノナルベシ、抑〻此板金ト云モノハ、其形狀詳ナラザレドモ、後ニイハユル大判小判ノ權輿ナルコト疑ナシ、十兩十枚トアルニ據レバ、初ハ其形小ナリシニ、織田氏ニ至テ、之ヲ十倍シテ大判トハナシタルニヤ、甲陽軍鑑ニハ、稱シテ十兩吹下ニ見ユト云ヘリ、

〔經濟錄五食貨〕寶永ノ間、濃州關ノ農民、宅地ヲ堀テ板金ヲ得タリ、形モ大サモ、今ノ大板金ノ如ク、文モナク款識モナシ、兩面ニ粗キ刻アリ、款識トハ銘ナリ、刻印ナリ其民京都ニ持往テ、金幣局ノ者ニ視セテ問ケレバ、織田氏ノ時ノ板金ナリト云フ、文モ款識モナキハ如何ニト問ヘバ、精金ナルガ故ニ款識ナクシテ、天下ニ通行シ、僞造スルモノナシ、若少分ノ用ニハ鑿ニテ切テ、其重サヲ秤テ使ヒシナリト答フ、純○太宰其時京ニ在テ、此板金ヲ見タリ、凡金銀ハ純粹ナルヲ貴ブ、純粹ナレバ僞ヲナシガタシ、印文等ハ僞ヤスシ、是ニ因テ前代ハ金ヲ純粹シテ、印文ヲ用キザリシナリ、當代ハ精金銀ヲ用テ、又印文款識アリ、僞造ヲ防ガン爲ナリ、金ハ重サ四錢八分ヲ以テ一兩トテ、一錢ニ分テ一分トス、大板金ハ重サ三十六錢、是七兩二分ナリ、小板金ハ四錢八分則一兩ナリ、板金ハ形橢ナリ、步金ハ形方ニシテ長シ、金幣ニ此三品アリ、直ハ高下ナク三品同直ナリ、金一兩ハ銀六十錢、銅錢四貫八百文ニ直スヲ常トス、時ニ隨テ價ノ貴賤アレドモ、大抵ハカクノ如シ、然ルニ大板金ヲ以テ、小板金ニ易ヘ、小板金ヲ步金ニ易ルニハ、皆兌錢ヲ出ス、俗ニ是ヲ切賃ト云フ、大金ヲ

切テ、小金トナスト云フ義ナリ、

〔金銀圖錄附七言〕大判小判ノ判字、或ハ板ニ作ル、蓋シ古ヘパン金ト(板金ナリ)呼シヲ、後藤判ナド云コト始リシヨリ、判金トノミ書キ來リシナルベシ、板金トハ薄ク板ノ如ク打延テ、切テ遣フモノニテ、延金ナド云モノ皆同ジ、進退記ニ、板金ノ事、是モ殿中ニテハ披露ナシ、又進上モナシ云々ト見エタレバ、足利ノ季世、スデニ板金トハ云シナリ、土佐軍記ニ、天正十三年ニ、判金ト云コトアリ、甲州ニ在ル慶長ノ初ノ文書ニ、其地ヨリ納候江戸判金トモ見エ、延寶ノ古帳ニ、石見國判銀幾貫目トモ見エ、元和ノ頃、長崎ノ文書ニ、板銀ト見エタリ、然レバ後藤判ナド云コト有テヨリ以來ハ、專ラ判金ト呼シコト分明ナリ、異朝ノ書ニ求レバ、爾雅ニ、餅金謂二之鈑一トミエ、周禮職金ニ、祭二五帝一供二金鈑一トミエ、釋文ニ、鈑音版、廣韻ニ、餅音餅、金鈑也、正字通ニ、餅傾二金銀一似レ餅者トミエ、通雅ニ、韓混擔夫與二白金一版、版猶レ餅也トミユ、(梁武陵王紀、以二黄金一斤一爲レ餅トミユ、夢溪筆談ニ、小金餅アリ、則小判ナリ、)此ニ據レバ鈑又版ノ字ヲ用ルヲ當レリトス、又古ヘ遺金一餅、(列女傳)金十餅、(漢江七賢傳)一餅金、(宋書)銀十餅、(列異傳)ナド云ヘルモノ、皆挺ト云、錠ト云ト同ジク、猶今ノ金幾枚ト云ガ如シ、

〔老談一言記〕後藤四郎兵衞云、大判之儀、信長公御代、私先祖相極申候、大佛判之儀、太閤樣之時、私先祖德乘相極申候、極印の桐も德乘作にて、大佛供養之時、入用のため拵候故に、大佛判と申候、常之通用之大判よりは金位能御座候、大判に十兩と申候は、常の小判拾兩にては無二御座一候、黄金拾兩にて御座候、黄金拾兩と申儀、昔は銀壹枚を黄金壹兩と仕、銀拾枚を黄金拾兩と申候、大判壹枚を銀四百三拾目に通用仕候、右四百三拾目の外の高下は、時々兩替師の相場と相見申候、

〔本朝寶貨通用事略〕一天正十六年、造二黄金大判小判一、
織田殿は、財を生ずる才略おはせしかば、國富たり、秀吉又其才おはしたれば、天下を知給ひし

より、天下の財を聚斂して國用を足されき、天正十六年に、新に大判小判等を造らる、是世に天正十六年判といふ物也、但是より三年前、天正十三年の秋に、金賦とて大名小名に金銀を給ひし事あり、金五千枚、銀三萬枚、さらば其頃既に大判丁銀等は有し也、是は古より有し物にて、十六年の制とは同じからざる歟、

〔信長公記 八〕天正三年乙亥十月十九日、奥州伊達方より、名馬がんせき黒、白石鹿毛、御馬二、幷に鷂取之御鷹二足進上、○中略二人之使者に、黃金二枚被下、御禮申罷下也、

〔信長公記 九〕天正四年丙子十一月廿一日、重而被進信長内大臣に御官、○中略禁中へ黃金二百枚、沈香卷物、色々盡員、被備叡覽、

〔信長公記 十〕天正五年丁丑後七月十二日、近衛殿御方、御元服之御望に候、從昔年禁中に而御祝言之御事候之間、當時其例尤之旨、再往再三雖御辭退候、頻に上意候間、不及是非御ぐし御はやしなされ、御元服職掌之儀式相調、攝家淸花其外隣國之面々、大名小名御出仕有、爲御祝儀、

御服十重　御大刀代萬疋　長光の御腰物　金子五十枚　已上

○按ズルニ、織田信長、天正中ニ始テ大判金ヲ製セシコトハ、寶貨事略以下諸金銀譜ニ、其説及ビ其圖ヲモ載セタレドモ、必ズシモ確證アルニアラズ、今信長公記ヲ閱スルニ、天正三年以降、黃金幾枚、或ハ金子幾枚ト記スルモノ、乃チ大判ナルベシ、果シテ然ラバ信長ガ之ヲ鑄始メシハ、蓋シ天正ノ初年ニ在ルベシ、

〔甲陽軍鑑 二十〕一織田の信長きりほこり、播磨國を取て、信長家老の木下藤吉を羽柴筑前守と申付、播磨一國を右筑前守にくれ、安藝毛利にさし向らるゝに、かの筑前守、信長に謀劣らぬ侍大將にて候故、信長金子を過分に申うけ、毛利家へ手を入、無事にと申、其模樣は、信長東の敵、武田を何樣にも倒給ふべきと有故、中國毛利家とは、無事に仕れと仰こされ候と、筑前方より毛

利家へ申越、毛利家の弓矢も末に成故、是を誠と存ずる所へ、見事なる金子の十兩吹をさしこし、八木をかひとり、○下略

○按ズルニ、金子ノ十兩吹ハ乃チ大判ナランカ、大猷院殿御實紀ニ、寛永六年五月廿九日、加賀中納言利常卿より、十枚作の黄金卅枚〈常の金十枚をもて一枚に作る、これを十枚作といふ、〉献ずトアル十枚作ハ、十兩吹ト相似タリ、

〔武家閑談〕五　享祿四年の冬、小笠原大膳大夫長時〈三十九歳〉信州塔の城にて、二木豊後を近付、家運巳に盡て、當城永く抱がたし、越後に走、上杉政虎を頼むべきと思ふ間、汝は當所に留り、暫く武田晴信に降り屬すべし、再本領を切取時節、舊功の輩を催し、開運の策をすべしと申含、二木は元來忠信の者なれば領掌し、黄金百枚を出し、流浪の助けとて長時にさづけ畢ぬ、

○按ズルニ、享祿ノ頃、黄金幾枚ト稱スルコト甚ダ疑ハシケレド、姑ク載テ疑ヲ存ス、

〔川角太閤記〕一　一かね奉行藏預米奉行ども召寄よ、可被仰渡事ありとありしかば、則祗候仕たると披露仕候處に、御前へ被召出、先かね奉行に御尋被成樣子は、てんしゆに金銀何程あるやらん、畏て承候、銀子は七百五十貫目ほど可有御座候、金子は千枚迄は無御座候、八百枚の少し外、可有御座候、○中略

一今度西國江之金奉行被召出候、御前祗候仕候、今度西國江持せたる金銀、何程遣ひあましつらんと御尋候得ば、銀子はわづか十貫目程も御座候はんや、金子は四百六十枚御座候、其金銀も不入事にてありながら、是をば明日持せよ、他所よりも使者飛脚などに出し度事もやありなん、其上褒美にとらすべき爲なり、明日路次へ持せよとの事、

〔土佐軍記〕下　元親上洛之事

天正十三年十月○中略廿日ニ浦戸ヨリ出船シテ、無程泉州堺ニ著給ヒ、○中略大坂へ出仕ノ支度セ

ラル、藤堂與右衛門堺ヘ來リ元親公同道スル、大坂ニテ町家ニ入、是ニテ裝束シテ登城有、〇中略元親公、進物小袖二十、馬代銀百枚、一文字大刀一腰ニテ、御禮申上ラル、〇中略秀吉卿御覧ジテ、〇中略其方ハスリキリト聞召、黄金下サルヽト仰ケレバ、藤堂、黄。金。百。枚。臺ニスエ持來前ニ置、元親座ヲ立頂戴セラル、〇中略秀吉卿長宗我部ハ津野孫次郎同道シテ明日國エ下リ、國ノ者共ニ安堵サセ給エト御暇下サル、〇中略元親父子同道ニテ下向有、〇中略元親公城ヘ入給ヘバ、殿中ノ御悦タトヘンカタナシ、其明ル日、家老幷諸侍ヲ召テ、座中ノ次第ヲ語リ給ヒテ、一番ニ御腰物ヲ見セ給ヘバ、コレゾ金作ナラント皆人イタヾキ、二番ニ黄金百枚見セ給ヘバ、是ハ判。金。ト云物カトコゾリカヽリ見物シテイタヾキ、初テ見タル事ナレバ珍シ、

〔一話一言十五〕光秀の事

扨尾州清須ニ信長公御在城ナレバ、是ヘ身上カセギニ行ントテ、路銀ノ爲ニ、古キ道具、ツブレタルヤクワン、足ノ折レタルゴトクナド取出シ、古カネカヒニウリケレバ、此者大判一枚取出シ、此金能キ金ニテアリヤト十兵衛ニミセケレバ、十兵衛以ノ外ニイカリテ、カヽル似セモノヲ持テマハリ、ハリ付ニカヽリ度トノ事カトオドシケレバ、此者肝ヲケシ、キリ〴〵ト子ヂマゲテ、溝ノ中ヘ捨ケリ、扨其アトニ大判ヲトリ出シ、マガリヲナホシ、草ヲ以テミガキケレバ、上々ノ大判ニ成シトナリ、サテ其後カノ名〇柳瀬名主ヘ申ヤウ、カクテ、コヽニ永居シ、飢ニ及テエキナシ、清須ヘ行、信長公ヘ身上カセグベシト思也ト云ケレバ、尤也サリナガラ路銀ヤアルト問所ニ、我常ニタシナミ置タル大判アリ、是ニテ妻子預リタマヘト賴ケレバ、サリトハ心掛ノ侍也、此金ニテハ八木百俵ハ、モトムル也、半分ハ先ヘ持玉ヘ、殘ヲ我ラ預リ、內室ハ長屋ヘ引取、介抱セント約諾ス、サテ清須ヘ行、追付在付、〈引二或人隨筆一〉

〔金銀圖錄一正用品〕天正大判金

右天正大判金、重サ四拾四匁、大判ハ信長公ノ時ニ始リ、又天正八年、スデニ金卅枚ヲ以テ、進見ノ禮ト爲シヽコト有ナリ、〇中略多門院日記ニ、銀子百枚ト云コト、元龜三年ニ見エ、金七枚十五枚ト云コト、天正八年ニ見エ、金子卅枚ヲ持テ大坂ニ禮ニ出シコト、天正十一年ニ見エタレバ、大判丁銀ノ有シモ舊キコトナリ、蓋シ其金一枚ト云モノ、金目四十目餘ニ當リタレバ、古ヘ黄金幾兩ト云ハ、ミナ砂金ノ掛目ニシテ、銀ハ東鑑ニ南廷幾ツナド見エタリ、然ルニ既ニ冶金ノ事アレバ、其形ナキコトヲ得ズ、〇中略ヒルモ金ノ如キハ、マサシク鎌倉ノ時ノモノト見エ、其金ハ幾枚ト呼ベキ形制ナレドモ、鎌倉足利ノ時、金幾枚ト云コト絶テ見エズ、タヾ進退記ニ、板金ノ事、〇中略見エタリ、是レ則大判ノ權輿ナルベシ、〇中略

太閤圓歩判金〇圖略　重サ壹匁二分、金位上、

同上壹分金〇圖略

三品各重サ壹匁二分、金位上、此金一名大坂壹分、〇近藤守重按ニ寶貨事略ニ、慶長四年始テ壹分判ヲ造ラルト云モノ、此等ノ類ナル歟、紳書ニハ、後藤ノ説ヲ引テ、慶長五年トアリ、或ハ下ニ載スル壹分、二分小判ノ類ナル歟、後考ヲ竢ツ、

同上壹分小判金〇圖略

重サ壹匁二分金色上、愚按ニ靜庵隨筆ニ、花小判ト云テ、金子一兩ヲ四ツニシテ、小判ノヤウニシタ物ナリ、壹歩大サナリトアリ、是等卽チ花小判ナル歟、

同上貳分小判金〇圖略　重サ二匁四分五厘、金色上、　面槌目

同上長小判金〇圖略　重サ二匁四分五厘金位上

同上壹兩小判金〇圖略

右重サ四匁八分、金位上、此金モト名テ慶長異象小判ト云フ、今鑑定シテ、貳分判ノ後ニ列ス、其同

品ナルヲ以テナリ、天正十六年小判ヲ造ルト云モノ、蓋是ナル歟、然レドモ文祿四年、武藏判ニ光次ト墨書セシヲ、慶長五年ニ至テ、初テ極印ニ改トアレバ、此金壹兩光次ノ極印アレバ、慶長五年以後ノモノ歟、博雅ニ問フ、

同上軍用金 ○圖略

重サ六分、此金朝鮮ノ役ニ、重サ壹匁ヨリ拾匁マデ造ルト云、未ダ然ルヤ否ヲ知ラズ、

同上銀 ○圖略

三品トモニ重サ六分、説前ノゴトシ、

天正小判金 ○圖略

右重サ四匁壹分五厘、金位上、金銀圖錄ニ云、天正十九年造ル所ナリ、○按ニ武德編年集成ニ、天正十九年十二月、關八州通用ノ爲ニ、後藤ニ命ゼラレ、大判小判ヲ造シムト云云、然レドモ紳書及ビ後藤家傳ニ云所ハ、文祿四五年ノ間、初テ小判ヲ造ルト有リテ此ト異ナリ、(貨幣事略ニ、天正十六年大判小判ヲ造ト云、前ニ見ユ、)或人云、此天正小判ハ、正德ノ新金ヲ形ヲ細ク摺リ直シ、緣ニ小丸ヲ打ナラベ、天正ノ字ヲ極印ノ如ク摸ヘ、打添タルモノニテ、後人ノ僞作ナリト、愚審ニ此金ヲ視ニ、天正ノ極印壹兩光次ノ極印ト異ニシテ、且天正ノ字ゴザ目ノ上ニ在テ、制造ノ頃一時ニ打タルモノニ非ズ、金色ハ上ナリト雖ドモ古色ニ非ズ、重サ四匁壹分五厘ナルモ、其謂レナシ、四匁八分ヲ六分五厘摺リ減シタルモノナルベシ、故ニ愚ハ或人ノ説ヲ取ル、

〔武德編年集成〕四十二 天正十九年、是年、○中略 神君關八州ヘ通用セラルベキ爲ニ、後藤德乘幷ニ門人庄三郎光次ニ命ジ、黃金ヲ以テ大小ノ形ヲ定メ是ヲ鑄サセラル、但大判ハ金目四十八文目ヲ以テ一枚トス、是ハ室町將軍家ノ流例也、往古ヨリ今ニ小判ト云物ハナク、灰吹ノ砂金ヲ權衡ニ懸テ通用スト雖急務ヲ成サズ、世ニ難義スル趣、神君尊慮ヲ惱サレ、今度光次ヲシテ昔年ヨリ在

慶長金銀

シ金錢ニ四增倍ノ積四文目八分ヲ以テ小判トシ、是ヲ鑄サセ通用其便ヲ得テ金錢トトモニ世ニ行ハル、

〔本朝寶貨通用事略〕一慶長四年始。造。一。分。判。

此年は秀吉薨じ給ひし翌年にて、關が原の前の年也、おもふに秀吉の末年に、此事をたくみ出されて、かくれ給ひし後に功訖りて、世に行はれしなるべし、

謹按、以上は皆々當家より前代の事どもなり、

一慶長六年の後に、大判小判丁銀豆板等の制改る、

駿河判江戸判などゝいふは、皆々造られしを以稱す、〇中略是より後元祿八年迄、年々に造り出せし處の金銀の總數、先は金七千萬兩、銀八千貫目ほどの積と申歟、

〔慶長見聞集七〕諸國に金山ある事

當君の御時代には、諸國に金山出來、金銀の御運上を牛車に引ならべ、馬に付ならべ、まい日おこたらず、なかんづく佐渡島は、たゞ金銀をもつてつき立たる寶の山なり、此金銀を一箱に十二貫目入、合百箱を五十駄づみの舟につみ、毎年五船十艘づゝ、能波風に佐渡島より越後のみなとへ著岸す、是を江城へ持はこぶ、おびたゞしき事、昔をたとへてもなし、民百姓まで金銀をとりあつかふ事、有がたき御時代なり、金の御たけの歌ノ心なれば、誠に今がみろくの世にやあるらん、佛の世ならずば、萬民いかでたのしまん、千世萬世も久しかれとぞ申あへり、

〔金座永野家記〕武藏判駿河判由來

正德二辰年十一月書上扣左之通

小判出來初覺

武藏判（慶長之初、江戸にて初て小判出來申候、小判之上に、墨にて先祖後藤庄三郎書付申候、是を武藏判と申傳候、）

駿河判　慶長五年、關ヶ原御陣後、江戸京佐渡に役所被仰付、墨判を相止、極印に被仰付、小判壹分判出來申候、駿河にても、少之内小判出來申候を駿河判と申傳候、武藏判と位同前に御座候、

拾兩判　慶長之初、江戸にて、少々出來申候由申傳候、先祖庄三郎、拾兩判之上墨にて書付、拾兩之代り通用仕候由申傳候、終に見不申候、

八兩判　二代目庄三郎時分に出來申候、如何樣之儀にて出來申候哉、樣子相知れ不申候、八兩之代りに通用仕候、二十ヶ年以來に、小判買取、小判八兩に出來申候、

大佛判　大坂時代之由承傳申候、庄三郎方にて出來不申候、

甲州判　甲州一國にて之通用之由、甲州松木と申者拵候由承傳へ候、庄三郎方にて出來不申候、

右之通御座候、以上、

十一月廿二日

右之通書上扣有之候、外之書留には、駿河之吹方を先き武藏を次と致候、書體も間々相見え、人之傳聞も、駿河を先きと承候趣も有之候へ共、愚案には右正德之書面を、後々共被取用候方に可有之儀と存候、子細は天正十八年、神祖關八州へ御領地替之以後慶長五年御一統之節迄は、駿河は御手を離れ候よし、文祿四年未年、初て小判吹方被仰付、翌年慶長之元年に候へば、右之通駿州御手を離れ候年間之儀、假令駿州之內、聊御手先きに付候所有之候共、御領國第一たる、御本城御手元の武藏にてこそ、吹方は可有之儀、殊に御一統以前、御領知八州之外、他國に於て、軍國之御資用を仕立候儀可被仰付事にも有之間敷哉、されば武藏光次と被遊候事、根本之故、且は御一統以前、天下他國へ對し被命候事に可有御座哉、慶長五子年御一統以後、同十年台德院樣〇德川秀忠へ將軍宣下、同十二年駿府御城御造畢之由、其年之前後には、神祖駿府へ被爲入、寶照院樣〇後藤光次儀、御供可被成儀、駿府御屋敷も、慶長年中に御拜領と彼地之ものも申候へば、駿河判之事、兎角慶長中程以後之事と存候、尤武藏と被認候へ共、駿河と墨書無之事は、慶長五子年以後は、武藏と申事さへ不被認候、全く御一統故之儀たるべく候、近年古き印判に駿府金と彫候品見え候、駿府之出來金、

江戶へ來り候節、包之上へ印し候事にも可ㇾ有ㇾ之哉、右之印判御用箱へ入置候、

右は武藏判駿河判之申傳へ事、兩樣に相聞え、後々に至り彌疑敷可ㇾ有ㇾ之儀、尤御金方根本の筋ゆゑ、兼て愚案致候趣、爲ㇾ後案相認置候、以上、

長井唯右衞門

〔金位幷金吹方手續書〕一古金類幷文字金位之事

慶長金者、小判之最初ニ而、其已前者、板金砂金を以、通用之處、文祿四乙未年、小判吹方被ㇾ仰出、右判金之通リ、先祖後藤庄三郎、於武州吹立、同五庚子年、初而同位壹分判被ㇾ仰付、桐之極印計ニ而壹分、光次書判者墨ニ而認候處、其後年月不ㇾ知、壹分幷名判共極印ニ相成、又慶長金最初武州ニ而吹候故、武藏判とも唱候說有ㇾ之、按ニ慶長十二丁未年頃より、駿州において、同樣之吹方被ㇾ仰出、同人吹立候を駿州判と唱候由、金之位幷目方形狀ニおいて、替り候事無ㇾ之候得共、金吹立候國名を以、名付候事に可ㇾ有ㇾ之歟、其頃之留書ニも、委敷儀者無ㇾ之由之事、

又位之儀、重ニ被ㇾ仰出も有ㇾ之故、慶長金吹入之節、位聊も劣り候事無ㇾ之樣可ㇾ念入旨、精々金座江申渡候間、何となく少々宛出來、金位宜敷方ニ有ㇾ之、二代目三代目庄三郎に到候ては、次第に出來、金位宜を見增之位と唱候由、尤當時諸向より持寄候、慶長金之內ニ而、引分り候ニは無ㇾ之、近頃迄御用向書留ニも、見增之位を三代目位共認、御勘定所江差出候儀も有ㇾ之由之事、

〔貨幣秘錄〕大判金之事

慶長六年辛丑五月、始て大判金を鑄る、重さ四拾四匁壹分、正銀七匁九分、正金三拾四匁六分、銅壹匁六分、位六拾四匁六分貳釐、世に是を慶長大判金といふ、吹立高壹萬六千五百六拾五枚、

按に金銀目を分る物は、享保之度、吹直之節、組合せ之手續に因て、其分量をあらはす也、

〔貨幣通考〕慶長六年五月、大判小判分判丁銀豆板の製を定む、紳書

按るに此時新に鑄るに非ず、天正十九年以來造る所のもの、其形式一定せざれば、是を整へて一

定の法を立し也、小判の墨書を止め、極印に改しなど其一なり、其大判は重四十四匁、長五寸計、巾三寸計、厚銭の如くにして楕圓、表裏共に桐章あり、拾兩後藤の四字、及押字を墨書す、小判又薄くして楕圓、長二寸二三分、巾一寸二分計、重四匁八分、面に桐章、及び壹兩光次押字等の模樣、呉座目、背に花押及び小識二字あること、都て今製のごとし、分判長五分計、巾三分計、厚之に准す、長方にして重一匁二分、面の桐章及び一分の字、背の光次花押等、都而今製の如し、丁銀壹枚は、煎傾の儘なれば、大小輕重固より一なることを得す、大概丁銀壹枚は四十三匁内外、長くして海鼠の如し、常是の字寳字、及び大黒の像等の極印あり、豆板は極印之に同じく、其大さは或は指頭の如く、或は菽粒の如く、率ね矮圓なり、此時歩判四ッを以て、小判一枚に當て、小判十枚を以て、大判一枚に當つ、銀は大概四十二三匁を以て、小判一枚に替ふ、其金料は皆純粹なり、或人曰、大判十分の一なれば、小判は四匁四分なるべきを、四匁八分あるは、金質九分なれば四分の餘目あり、蓋し是上吹拔んとすれば、消耗多きが故に、其儘餘目を附て造り、金料一兩ある程になせしもの也と云り、此より以來、連年鑄造し、大に天下に行はれ、以て元祿に至る迄通用す、去年關原の大捷より、海内一統して、天下の通寳一定して、遂に後世遵行の良製を得たり、故に世々是を慶長金銀と稱し貴重す、

〔石川正西聞見集廿〕太閤の御時代迄、すながね、ごいしがね、はづしがね、國々より京へ持のぼり、銀子にかへ申候に、兩替師共くろき石に金をすり付、色を見て南鐐がへと、ねだん不同に申候儘、殊之外手間入、諸人迷惑仕候、其比も御意として、江戸にては兩人金見被仰付、只今の壹兩判の形にして、墨判に仕候、是は江戸近き國々は用ひ候へ共、只今の樣に、直段定り候はず、不自由にて御座候つる、其以後御所樣、天下御ゑづめ被成、右被仰付候つる墨判を無用被成、後藤判光次に被仰付候而、京ゐなか、大方金子の直段も定り申候、其後壹兩を四ッにして壹分判をも被

仰付、自由よく候て下々悦申候、御所様御工風被仰付、諸人乍恐感じ奉り候、

〔永松堂金譜〕慶長片面本字壹分判金

是を世に短冊壹歩ともいひ、俗に小粒といふ、上方にては豆板銀を小粒といひ、是を分判といふ、又外廓に、小星の廻たるを、俗子持壹分といふ、又別に一種重廓のものあり、是を俗に額壹分といふ、

〔金銀圖錄二正用品〕慶長大判金○圖略

右往古大判重サ四拾四匁二分、制度古雅、金位上ノ上、花押ハ榮乘ノ判ナリ、恩○近藤守重按ニ、慶長六年五月、始テ通用金銀ノ法ヲ定サセラレ、大判、小判、壹分判、丁銀、豆板ノ制改マル、黄金大判壹枚重サ四拾四匁、小判壹兩重サ四匁七分六釐ナリ、世ニ慶長金銀ト云ヒ、又往古金銀ト云モノ、蓋シ是ナリ、

慶長笹判金○圖略

右笹判重サ四拾四匁二分、金位上、花押ハ榮乘判ノ變態ナリ、

同上江戸座小判金○圖略

右往古小判重サ四匁八分、恩按ニ、紳書ニ後藤云、武藏小判ニ光次ノ二字墨ニテ書キタリシヲ、慶長五年命アリテ極印ニ改ム、又小判ニ呉蓙目ヲ切コトハ、內マデ表ノ通リナルトノ印ナリト見エタリ、慶長中、大久保長安等ヨリ、甲州松木ヘ與フ古文書ニ、其元ノ金子碁石ニテ、マ子判多候間、ノシ金ニ江戸小判ノゴトク可仕由御意ニ候ト見エタレバ、當時江戸小判トモ云シニヤ、小判ノ始、金ノ位一兩ノ目ハ、武藏小判ノ下ニ載ス、

同上京座小判金○圖略　重サ四匁八分

同上駿河座小判金○圖略　重サ四匁八分

駿河判ハ、吳ザ目ノ密ナルヲ以テ異トス、

同上萬兩頭小判金○圖略　重サ四匁八分

同上壹分判金○圖略　重サ壹匁二分

同上駿河座壹分判金○圖略　重サ壹匁二分

同上片本字壹分判金○圖略　重サ壹匁二分

同上兩本字壹分判金○圖略　重サ壹匁二分

一分判、世ニ丹尺一步トモ云フ、俗ニ小粒ト云、上方ニテハ豆板銀ヲ小粒ト云ヒ、是ヲバ分判トノミ云ナリ、外廓ノ小星ノ廻リタルヲ、俗ニ子持一分ト云、又一種重廓ノモノ有リ、俗ニ額一分ト云、愚按ニ、紳書ニ、後藤云、慶長五年小一分判ヲ造ル、寶貨事略ニ、慶長四年始テ一分判ヲ造ルト云フ大坂ニテハ、此年創制セシニヤ、又按ニ、舜舊記ニ、元和二年三月、桑名ニテ、金子一分判一キレ、料足百疋ニ買也、銀十六文目之算用之由也、五月小判二キレ、一分判二キレ、銀子替ニ遣也トミユ、此頃モ分判ヲ幾切ト云ヒ、小判モ亦幾切ト云シコト有シトミエタリ、

〔國家金銀錢譜〕慶長小判壹分光次ハ後藤庄三郎先祖德乘名乘ニテ、代々コレヲ用ユ、

一分、一匁貳分、

本ノ字一分慶長一分ニ、本ノ字ヲ打タルアリ、或云ク、疵アル一分ヲナホシタル時、本ノ字ノ極印ヲ打ト、詳ナラズ、重サ一匁二分、○圖略

○按ズルニ、表ハ慶長一分ノ極印ノ如ク、裏ニ光次トアル極印ノ右方ノ隅ニ、本ノ字ノ極印アルハ是ナリ、

〔永松堂金譜〕慶長片本字壹分判金○量目壹匁二分圖略

同上兩本字壹分判金○量目壹匁二分圖略

〔金銀圖錄二正用品〕慶長丁銀　煎傾ノマヽナレバ、大小輕重モトヨリ一ナルコトヲ得ズ、白銀壹挺、

大概四十三匁ノ内外ナリ、俗ニ大黒遣ヒト云、常是ハ其名ナリ、〇圖ハ下ニアリ

同上大黒丁銀〇圖略

同上豆板銀　大小輕重一ナラズ、俗ニ小玉銀ト云、豆板ハ、疑クハ豆バントト云コト歟、

右往古銀ハ、共ニ慶長六年五月ニ定メラル、所ナリ、蓋是ヨリ先キ、泉州堺ニ南鐐座アリテ、各自ラ極印ヲ打タリシニ、(靜庵隨筆ニ、太閤ノ時マデハ、堺ニ宗障座ト云テ有ト云、)慶長三年十二月、大黒遣ヒ打印ニ一定セラレ、同六年初テ銀座ヲ設ラル、(一說ニ、此時第一文字、次一文字、大黒極印等ヲ打チ進呈セシニ、大黒極印ニ定ラルト云、)愚按ニ、長崎府元和、延寶ノ文書ニ、板銀、紋銀、丁銀、錠銀、ソウマ銀等ノ目アリ、寛文ノ記ニ、異國ノ内、丁銀小玉ニテ持歸ガタキ國々ハ、丁銀ノ紋ヲツブシ、錠ト云銀ニ吹替ナリト見エタリ、然バ此方ニモ錠銀ヲ吹キシコトアルナリ、

元祿金銀

〔享保集成絲綸錄三十二〕元祿八亥年八月

覺

一金銀極印、古ク成候付、可吹直旨被仰出之、且又近年山より出候金銀も多く無之、世間之金銀も次第ニ減ジ可申ニ付、金銀之位ヲ直シ、世間之金銀多く成候ため、此度被仰付之候事、

一金銀吹直し候ニ付、世間人々所持之金銀、公儀江御取上被成にては無之候、公儀之金銀、先吹直させ候上にて、世間江可出之、至其時諸事可申渡事、

右爲心得先達而申聞候、以上、

〔常憲院殿御實紀三十二〕元祿八年八月十一日、金改鑄の事仰出され、阿部豐後守正武、小老加藤佐渡守明英、その事を總督し、勘定吟味役荻原彥次郎重秀これをつかさどり、所屬もこれにあづかるものあまた仰付らる、

〔貨幣通考〕元祿八年九月十日、金銀の幣悉く吹改らる、

按るに慶長六年より今年迄、九十四年の間、慶長の幣通用す、是時大判小判分判丁銀豆板等、不殘改鑄す、金には銀を和し、銀には銅を和し、金銀の本質は其半分にして、程色粗惡なり、然れども其重は元の如くなり、常憲院樣〇德川綱吉華奢を極められければ、國用窮竭し、御勘定奉行荻原近江守重秀、獨り國計を掌り、種々征推收歛の法を創むれども、其乏きを續ぐ事能はず、遂に貨幣を改むるの計を創む、物價騰貴し天下之を苦めり、此幣金銀共に、元字の極印あり、世に之を元祿金銀とも、又元字金銀とも云ふ、

〔貨幣秘錄〕金銀通用之事

元祿八年乙亥九月、金銀の法を改む、大判金以下輕重其違あり、世に元字金銀、又元祿金銀といふ、背に元字の極印あり、享保三年戊戌十月、小判金歩判金通用停止、凡二十四年、

元祿十年丁丑、二朱判金を鑄る、

大判金之事

元祿八年乙亥九月、大判金を改鑄る、重サ四拾四匁一分、正金二十六匁六分一釐五毛四糸、銀十六匁二分五釐三毛九糸、銅一匁二分三釐七糸、位八十四匁餘、世ニ是を元祿大判金ト云是ナリ、吹立高二萬二千三百枚、

〔金銀圖錄二正用品〕元祿大判金〇圖略

右大判重サ四拾四匁二分、愚按ニ、元祿八年九月十日、金銀ノ法ヲ改ラレ、大判小判丁銀豆板ヲ改鑄ラル、背ニ元ノ字ノ添極印アリ、世ニ是ヲ元字金銀ト云、又元祿新金銀ト云フ、大判ハ世ニ元ノ字判トモ云フ、小判ハ元ノ字金ト云フ、元祿大判ハ、享保十年十二月朔日、通用停止、元祿小判分判ハ、享保三年通用停止、

元祿江戸座小判金〇圖略　重サ四匁八分

元祿京座小判金略○圖　重サ四匁八分

元祿壹分判金略○圖　重サ壹匁二分

元祿丁銀略○圖

元祿大黑銀略○圖

元祿豆板銀略○圖

元祿二朱判金略○圖

重サ六分、元祿十年六月晦日、新金ニテ鑄ルトコロ也、寶永七年四月停止、

〔享保集成絲綸錄三十二〕元祿八亥年九月

覺

一今度金銀吹直被仰付、吹直り候金銀、段々世間江可相渡之間ハ、古金銀と新金銀と同事ニ相心得、古金銀不殘吹直り候迄ハ、新金銀と入交、遣方請取渡兩替共ニ、無滯用可申候、上納金銀も、右可爲同前事、

一新金銀、金座銀座より出之、世間之古金銀と可引替候、其節金銀共に、員數を增可相渡事、

一金銀町人手前より引替ニ成候間、武家方其外之金銀ハ、勝手次第、町人へ相對ニて相渡引替可申事、

附古金銀貯置不申、段々引替可申事、

右條々國々所々に至ても、可存此旨者也、

九月

元祿九子年七月

覺

吹直金銀、段々出來寄候間、誰人によらず所持之古金銀兩替屋方江問合、無油斷新金銀と引替可被申候、吹直し新金銀出來之上ハ、古金銀通用可爲停止候間、可被存其旨候、次ニはひふき銀も吹直候間、同前可被心得候、以上、

七月

元祿九子年七月

覺

今度本鄕に而、金銀吹直し候場所之外、一切金銀吹直申間敷候、自然脇々に而吹直候もの有之歟、又ハ似せ金銀拵候者有之バ、早速可出訴、たとへ同類たりといふとも其咎をゆるし、急度御褒美被下、其上あたをなさゞる樣に可申付之、若隱置、後日に外よりあらはるゝにおいてハ、諸親類幷所之者迄、可爲曲事者也、

七月

元祿十丑年六月

覺

一今度新金ニ而、貳朱判出來、世間に相渡候、通用自由之ためニ候間、國々所々まで其旨を存、商賣請取方渡方無滯貳朱判を用可申候、貳朱判ハ、壹分判半分之積たるべき事、

一大判小判壹分判勿論有來通り通用可仕候事〇中略

六月

〔享保集成絲綸錄三十三〕享保五子年三月

覺

元祿銀、寶永銀、中銀、三寶銀、四寶銀通用之事ハ、來丑年を限り、翌寅年ゟ、世上通用一切停止たるべ

寶永金銀

く候、右五品之銀、新銀ト引替候儀、最前相觸候通、彌來寅年を限り可申候、

右可存此旨候、以上、

三月

〔享保集成絲綸錄三十二〕寶永三戌年六月

覺

一近年銀拂底之由其聞有之、通用不自由に相見候に付而、銀吹直被仰付候間、吹直候銀、段々世間江可相渡候條、有來銀と新銀と同事に相心得、不殘吹直候迄ハ、古銀新銀入交、遣方請取渡兩替共、無滯可致通用候、上納銀も可爲同前候事、

一新銀令出來、銀座より出之、世間之古銀と可引替候、其節銀之員數を增可相渡候間、兩替屋其外何商賣に而も、勝手次第役所江持參引替可申候事、

一銀引替之儀、町人手前より引替に成候間、武家方其外相對に而町人江渡之、引替可申候事、

附古銀貯置不申、段々引替可申候事、

右之趣至國々所々迄可存此旨者也、

六月

〔貨幣通考〕寶永三年六月六日、新銀を鑄る、

是銀寶字の印あり、故に是を寶字銀と云、按に銀幣悉く改鑄せしにはあらず、唯愈々銅料を增加し鑄出せしにて、元祿銀と交へ行ひし也、以下二寶三寶四寶とも、皆此趣なり、

寶永七年三月六日、又新銀を鑄る、

是銀寶字兩頭に二ッ、中に永字の極印あり、之を中銀とも、永字銀とも、二寶字銀とも云、

同年四月二日、又新銀を鑄る、

是銀寳字の極印三ッを打つ、故に三ッ寳字銀と云、

〔金銀圖錄正用品二〕寳永二寳丁銀略〇圖

寳永三年六月六日、新銀ヲ鑄ラル、宝ノ字ノ極印二ッ打ッ、常是ノ極印ハナシ、世ニ是ヲ寳永新銀ト云、又二ッ寳銀ト云、享保七年通用停止、

同上豆板銀略〇圖

同上永字丁銀略〇圖

寳永七年三月六日、二ッ寳銀ヲ吹改ラル、兩頭ニ宝ノ字ノ極印アリ、中ニ永ノ字ノ添極印ヲ打ッ、是ヲ世ニ永ノ字銀ト云、又中銀ト云、享保七年通用停止、

同上豆板銀略〇圖

同上三寳丁銀略〇圖

寳永七年四月二日、銀吹改ル、宝ノ字極印三ッ打ッ、寳ノ字宀ニ从ヒ玉ニ从フ、是ヲ世ニ三ッ寳銀ト云、享保七年通用停止、

同上豆板銀略〇圖

正銀略〇圖

同上豆板銀略〇圖

右正銀ハ寳永中ニ吹ク所ニシテ、異國ヘ與ル爲メナリト云、歷代朝鮮國ヘ賜フモノハ、必別ニ粹銀ヲ以テ挺銀ヲ吹カルヽナリ、琉球ヘ與ルモノモ亦同キニヤ、

寳永小判金略〇圖　重サ二匁五分

同上略〇圖

寳永七年四月十五日、元ノ字金ヲ吹替ヘ、古金ノ位ニ改ラレ、小判壹分判トモ、小形ニナル、乾ノ字

ノ極印ヲ打ツ、是ヲ世ニ乾字金ト云、又乾金ト云、享保五年、此金停止、竊ニ按ニ、乾ノ字ハ、易ニ乾爲金トアルニ本ヅカレシニヤ、

同上壹分金 略○圖　重サ六分二釐五毛

同上壹分判金異品 略○圖

重サ同上、此乾金ニシテ、元ノ字ノ添極印ヲ打ツ、異品ナル所以ナリ、

〔享保集成絲綸錄三十二〕寶永七寅年四月

覺

一先年新金吹直有之處、金之位惡敷、折れ損じも出來、通用不自由之事候、依之今度古金之位に吹直被仰付候、然共金之位宜敷吹直候に付而ハ、金子之數も減じ候間、世間之金子も增候樣に、今度小判壹步判共、少々小形に被吹直候事、

一貳朱判ハ、向後相止候間、所持之分引替可申事

一新金出來次第、段々世間江可出之候間、只今迄之金を新金と取交、大小のかまひなく通用可仕候、尤兩替之儀ハ、只今迄之金子可爲同前事、

一先年吹替より已前之古金所持之者ハ、勝手次第、新金と取交通用可仕候、於然ハ諸色商賣之代に相渡候ハ、新金壹兩之相場に、古金ハ拾匁增之積請拂可仕候、但後藤方、又ハ兩替屋方に而引替候時分ハ、其餘之步銀增候儀ハ相對次第可仕事、

一只今迄之金子取集、後藤方江持參引替候時分ハ、後藤方より金高に應、雜用之步銀增可相渡事、

一金子ハ町人之手前より引替に成候間、武家方其外之金子、勝手次第、町人江相渡引替可申事、

一大判ハ有來通に而用之、小判と差引之儀ハ、前々之積に兩替可仕事、

以上

四月

寶永七寅年四月

覺

金吹直しにて、向後貳朱判相止候ニ付、持合候もの共、急に賣拂候故、差支下直ニテ令迷惑由ニ候、直に後藤方江差越引替候歟、又ハ爲替御用相達候兩替屋方江承合可引替候、此旨町中可相觸候、

以上

四月

〔金位幷金吹方手續書〕一古金類幷文字金位之事○中略

寶永七庚寅年吹替

正德元辛卯年迄二ヶ年程盛ニ吹

乾字金○中略

此乾之字打候事、何故と申儀ニ候哉、庄三郎方ニ而も不辨由ニ候得共、御趣意有之、被仰出候旨申傳候由之事、一説に終日乾々タリトノ語を以、乾之字之極印打候樣被仰出候旨ニも咄傳候得共、書留も無之、難相知旨庄三郎申聞候事、

〔貨幣秘錄〕金銀通用之事

寶永三年丙戌六月、新銀を鑄る、寶字の極印二ツあり、世に寶字銀、又二寶銀といふ、享保六年辛丑十二月通用止む、凡十六年、寶永七年庚寅三月、二寶銀を改む、兩頭に寶字中に永字の極印あり、永字銀、又中字銀といふ、享保六年辛丑十二月通用止む、凡十二年、寶永七年庚寅七月、永字銀を改む、宝字の極印三ツあり、是を三寶銀といふ、享保六年辛丑十二月通用止む、寶永七年庚寅四月十五日、金を吹改め、慶長金の位に復せられ、小判歩判金共小形になる、乾字の極印あり、故に乾字金、又

乾金といふ、享保四年乙亥十二月通用止む、○中略

按に元祿以來、改貨の度毎に、品位を改めらるゝ事は去ば〱成しかど、都て輕重を亂る事は、乾金の外絶てあらざる事なり、後世同時に行はるゝ金銀、品位輕重混淆して、ひとしからざるの幣は、實に爰に基本せり、乾金は其位を古製に復せられんが爲に、暫く權に隨はれしものなれば、後世の雜貨と同日に論ずべからず、然れ共輕重混淆、其實に適はざるの價を作りし罪は、猶免れざるべし、

〔貨幣通考〕寶永七年四月十五日、小判分判改鑄通用の令あり、且元祿十年所造の二朱を止む、此冬元祿金乾金並行を令せらる、

是時は大判及銀は改めず、且小判分判も悉く改るに暇あらず、元祿金と並び行ひし内に、正德の改鑄あり、小判は重サ二匁五分、分判は六分貳厘五毛あり、是世に元祿の幣、其品惡きを云ひ、通用滯りたれば、文昭公○德川家宣其沙汰あり、荻原等之を純金となさんには、山より出る金を加へざれば、其銀料を去るに由なし、然るに天下の幣に增加ふべき程の金、何年の功を俟とも、山より出るの期なしとて、其目方を減じて、純金となして吹出したり、竊に是を考ふるに、元祿の幣は、多く銀を加へたれども、未半には至らず、七分計も金料あるべし、故に此新幣を作るの時、九分十分の位となしたれども、重サ二匁三分を減ずれば、猶官利ありし也、後々引替之劑を見て推算すれば、其大概を知るべし、是幣乾字の極印あり、故に世に乾字金と云、

〔折たく柴の記〕中略其明けの年庚寅の春寶永七年○より、金改造らるべきの議起れり、これは其春の祿として給りし所の金、裂け折れしもの多くして、小給の輩は、殊に難儀苦しめりといふ事を聞召れて、其事を問はしめられしに、重秀○荻原議し申て、前代に改造られし所は、凡金一兩の重さは、古の定の如くなれど、其銀料を增し加へられしにより、金すくなく銀多く、其性こはく成たれば、物にふ

る、時、或は折れ、或は裂く、その裂け折る、事なからんには、金銀の割、古の製のごとくならんにはしかず、されど今に至て、又古の製のごとく改造らんには、當時世に通行する金の數、其半を減ずべし、されぱまづさきに增加へられし所の銀料をのみ去すて、たとひ一兩の金、其重さは古に及ばずとも、其品は古のごとくに造られ、これより後諸國の山々より出來らん金を用ひて、その重さをも古にかへされんに、なに事かあるべきと申す、(此春の御給金、折裂しものの多き由は、御臺所の御方にみやづかへする女房たち、または御近習の人のめしつかふ、坊主六尺などいふものゝ申事の御聽に及びしなり、此事心得ず、すべて上にまゐらする所の金銀共に、おの〱其座といふものゝ許にして、わづかも折れ裂し所なきものをえらび參らする事也、それを出し給らんに、かゝるものゝあるべきにあらず、然るにかゝる事の有しは、必ず故あるべし、)衆議皆これに同じと聞えて、其議し申せしは、元祿の時、金には銀料を增し、銀には銅料を加へて改造られしより此かた、世の人其品の高下を論じて、つひに諸物の價平かならず、今改造られん所、たとひ其品は古の製のごとくなりとも、その重さ既に古に半す、必世の人相疑ふ所ありて、通じ行はれざる事有べし、されば此たび近江守(○荻原重秀)承りて、改造らん所の金の品、すこしく法の如くならざるをば糺彈すべき職掌の人を撰び定めらるべしと申せしによられて、大目付衆一人、目付衆二人、其事を仰かうふりて、金銀造らるべき由を仰下さる、(此仰四月十五日の事也、大目付は横田備中守、目付衆は長崎半左衛門、永井三郎右衛門、長崎は今の伊豫守の事也、此時に重秀金座して、金の樣をまゐらす、金の品古のごとくなるものは、ありし代々の物にくらぶるに薄く小しき也、また元祿の製のごとくにはあられど、古の製よりは銀料多きものは、さのみは薄く小しきならず、某を召れ、詮房朝臣して、其樣を見せらる、某これを見て、むかし某がしれるものゝ許より、酒二樽を贈りしものあり、日を經しのちに、其酒こと〲く醋となれり、これは雜るに水をもてしたるがゆえなり、彼ものふかく恨みて、たとひ一小盃なりとも、水まじはらざらん酒こそえまほしけれと申き、其事いやしけれど、此事にたとふべし、其折れ裂ざらんために、銀料を除れんには、薄き小しきなりとも、上品のものにしくべからず、申す所のごとくにこそ思召れたれとて、薄く小しきなりとも、其品古の製の如くに造るべしと仰下さる、かされて又其樣を參らせしを、かゝるもの造りて、世を歎くべしやとて、某に見せ給ひしを見るに、其品は古の製のごとくなり、されど見しよりはやゝ厚くして大きなるを、よて見ればその中にあたりぬる所は、薄紙のごとく打なし、外邊をば厚く造れるなりけり、此時に某申すは、今改造らるべき數用もすくなからずと見えしに、心得ぬ事一條あり、今までの金より除かしむる所の銀料をばいかになしぬらん、これを取用ひなば、その貨用は大にはぶくべきものをと申たりけり、さだめて此事をもて聞しめし給ひたるならんを、重秀いかに答申けるにや、其事はきかず、後にきくに、此時

すでにひそかに銀を改造りしかは、其料に用ひたるらめ、此時重秀が奉行して造られし所は、世に乾字金といふなるが、それもなほ金の品は古に及ばざりし由、今に至ては金座の者どもも申さこそ聞えたれ、かゝりしほどに、銀の品なほ下れるものども、多く造り出さるゝよし聞えたり、こゝろえぬ事に思ひて、去年の春のごとき、國事の急なるに臨てだにも、ゆるさせ給はぬ事の、いかにかくは候べきなれど、世の人ことごとく皆申す所なれば申すなりと申す、月を經し後に、此もの見るべしとて、詮房朝臣して、出されしものを見るに、近江守仰を承りて、勘定衆の中、銀造る事を奉る輩に詰問せしは、答ふる所の狀にて、今造る所の銀、寶永三年丙戌七月に改定められし法にたがふ所なき由をしるせしなり、其事をつかさどり、其事におゞかれるものども申す所かくのごとし、某また何をかあらそひ申すべきと答申て罷出づ、此事は五六月の間の事也、されどその月日をもわすれたり、此時に重秀がまゐらせし狀は、保木彌右衛門小宮山友右衛門といふ勘定衆の組頭の銀座御用懸りといひし二人進署せし所也、後にきくに、此年の三月六日に、重秀、保木小宮山等二人に下知して、ひそかに品下れる銀を造らせたり、これ世にいふ二寶字銀なり、ほどなく又四月六日に、猶品下れるものを造らしむ、これ世に三寶字銀といふものこれなり、

〔經濟錄五食貨〕當代慶長年中ニ、佐渡ノ山ヨリ金ヲ出ス、是ヲ取テ金幣ヲ造ル、今ニ至ル迄世ニ行ハル、元祿年中ニ、國用乏キニ因テ、銀銅鉛錫ヲ雜ヘテ新金幣ヲ造ル、文ニ元ノ字アリ、三品ノ外ニ、又二朱金ヲ造ル、一歩金ヲ半ニシテ形小サシ、四品ノ金皆黃金ノ眞色ヲ失ヒ、鍮石ノ如シ、是ヲ元祿新金ト稱シテ、海內ニ行ヒ、慶長ノ古金ヲ止ム、此新金既ニ純金ニ非シテ、僞易キニ因テ、僞造ノ罪人多ク出來テ、磔刑ヲ被レリ、民間ニモ此幣ノ純金ニ非ザルヲ賤ミ、稍々百貨ノ價ヲ增ス、金ノ直ハ故金ニ減ズルコト無レドモ、貨物ノ價貴ク成タレバ、則是金直ノ減ジタル也、且僞造ノ金、多ク民間ニ流行シテ、不識者ハ皆欺ヲ受タリ、文廟〇德川家宣此事ヲ深ク憂玉ヒ、登極ノ初ヨリ、金幣ヲ故ニ復サンコトヲ思惟セサセ玉フ、然ドモ元祿金ニハ、銀銅鉛錫ヲ雜ヘテ、金ト等分ナル故ニ、之ヲ銷シテ慶長ノ故金ノ如ク純金ニナサントスレバ、天下ノ金幣ノ數、其半ヲ減ズベキ事ヲ慮リ玉ヒ、故ニ復スル迄ノ內、姑ク小金幣ヲツクラシメ玉ヘリ、元祿ノ小判金、幷ニ一分金ヲ銷シテ、其中

ノ雜物ヲ去テ、純金ヲ以テ新幣ヲツクル、其形薄小ニシテ、其重サ故幣ノ半也、則小判金ノ重サ二錢四分、一分金ノ重サ六分二釐五毛也、○中略寶永ノ季ヨリ此新幣ヲ行ヒ、元祿金ト並ベテ、海內ニ行フ、小判金ノ文ニ乾ノ字有ニ因テ、是ヲ乾金ト稱ス、此幣出テヨリ、民間ニ僞造ノ者モナク、欺ヲ受ル患モナキ故、民之ヲ便トセリ、然ドモ其形薄小ニシテ、量目故幣ノ半減ナルヲ以テ、人情何トナク此幣ヲ輕ンズル故ニ、其直ヲサノミ減ズルニテハナク、諸物ノ價ヲ增テ賣買ス、且又此幣ハ永久ニ行フベキ者ニ非ズ、慶長ノ故幣ニ復ス迄ノ中、元祿ノ惡金ヲ止ル爲ニ、姑ク之ヲ行ハルト思ヘルヨリ、久シカラズシテ慶長ノ故幣ニ復セバ、乾金ハ自ラ半直ニ成ベシト悟リテ、漸々ニ乾金ノ直ヲ減ジ、諸貨ノ價ヲ增テ、故幣ニ復セル時ニ、少モ損失ナキ樣ニ計レリ、下民ノ狡黠ナル商買ノ利ニ賢キコト、士大夫ノ及ブ所ニ非ズ、茲ニ至テ乾金又大ニ不便也、正德二年、文廟薨ジ玉フトキ、大臣ヲ召テ、金幣ヲ慶長ノ故ニ復スベキ事ヲ顧命シ玉フ、是ヨリ民間ニハ、彌乾金ノ直ヲ減ジテ、物價ヲ貴クス、一兩ヲ以銅錢一貫六七百文ニ直スルニ至レリ、章廟○德川家繼ノ時、慶長ノ故幣ニ准ジテ、又新幣ヲ造ラシメラル、大判金ヲ姑置テ、先小判ト一步金トヲ造ル、精金ヲ以造リ、乾字ノ文ヲ止、大サ重サ悉ク慶長ノ故幣ノ如シ、正德ノ末ヨリ稍々世ニ出シ行ハシム、是ヲ新金ト喚テ、一兩ヲ乾金二兩ニ直シ、一步ヲ乾金二步ニ直ス、乾金一步ハ、則慶長ノ半分ニ直ス、半分ハ二朱也、慶長ノ故幣ト並ベ行フベキ旨ヲ命ゼラル、此時金幣多品繁雜シテ、民用甚不便利也、今ノ國家ニ及テ、享保ノ初ニ斷ジテ乾金ヲ止メ、幷ニ元祿ノ二朱金ヲ廢シ、專ラ新金ヲ行ハシム、○中略丁未歲○享保十二年ヨリ新幣ノ大判金ヲ止ラル、茲ニ至テ元祿以來、改造ノ金幣止テ、全ク慶長ノ故ニ復セリ、誠ニ目出度善政也、享保ノ新令下リシトキハ、海內ノ金幣、其半ヲ減ズト思テ、士民皆之ヲ歎キシガ、數年ニシテ新幣流布シテハ、半減ノ損モサノミ見エズ、民其痛ヲ忘レタリ、國家ノ政ハ、誠ニ果敢ヲ以テ行フベキモノ也、○中略

當代ノ銀幣ハ、國初以來二品アリ、一ハ銀丁、二ハ碎銀也、銀ハ四錢三分ヲ以テ一兩トス、碎銀ハ大小齊シカラズ、重サ二三分ヨリ四五錢ニ至ル、其形ハ豆ノ如クナル故ニ、俗之ヲ豆板ト云、銀丁ハ十兩ヲ一挺トス、重サ四十三錢也、俗ニ丁銀ト云、丁ニ大小有テ、必シモ重サ十兩ナルニ非ズ、丁銀ト碎銀ト、銀ニ善惡アルニ非レドモ、丁銀ヲ以テ碎銀ニ易レバ、必丁銀ノ方ヨリ兌錢ヲ出ス、板金ヲ歩金ニ易ルガ如ク、便ト不便トノ故也、國初ノ銀幣ハ純銀ナリシニ、元祿改造ノトキ、銅鉛錫ヲ雜ヘテ、其數ヲ多クス、文ニ元ノ字ヲ印シテ、是ヲ元祿新銀ト呼ブ、慶長ノ故銀ニ比スレバ、色稍薄シ、此幣海內ニ行レテヨリ、故銀ヲ停止セラル、此幣純銀ナラザルニ因、僞造スル者起テ、士民欺ヲ受ル者多シ、此新銀ニテ已ムベカリシニ、寶永年中ニ、又國用匱ク成テ、幣ノ數ヲ多クセン爲ニ、銅鉛錫ヲ增加シテ、文ニ寶ノ字ヲ印シテ、之ヲ寶永新銀ト呼ブ、元祿ノ銀ヲ止テ、寶永ノ新幣ヲ行フ、其色黑黯ニシテ、元祿ニ比スレバ鉛ノ如シ、民之ヲ賤ンズ、是ニテモ不止、其後又雜物ヲ增加シテ、文ニ二ノ寶ノ字ヲ印ス、色彌惡シ、民之ヲ賤ンズルコト彌甚シ、是ニテ猶止ズ、其後雜物ヲ增加シテ、文ニ寶ノ字三ツヲ印ス、其次又雜物ヲ增加シテ、文ニ寶ノ字四ツヲ印ス、寶永中ニ四度造レル銀幣ヲ、民間一ツ寶、二ツ寶、三ツ寶、四ツ寶ト目ク、四寶ニ至テハ、其色黑黯ニシテ鏽ヲ生ジ、銀ノ本色ヲ失ヒテ、鉛錫ト少シモ異ナルコトナシ、民是ヲ賤ズルコト土石ノ如シ、國初以來ノ故銀ハ、六十錢ヲ以テ、金一兩ニ直シ、一錢銅錢百文ニ直スルヲ常トセシニ、四方ノ惡銀ニ至テハ、直ヒ大ニ減ジテ、八十餘錢ヲ以テ金一兩ニ直シ、一錢ヲ銅錢四十文計ニ直ス、玆ニ至テ士民ノ患ヒ甚シ、東國ハ金ト錢トヲ以テ、銀ヲ用ルコト稀ナル故ニ、惡銀ノ害ヲ被ルコトモ輕シ、京師ヨリ西ハ專ラ銀ヲ用ル故ニ、惡銀ノ害ヲ受ルコト尤甚シ、僞造モ彌多クシテ、士民ノ患是ニ過ルコトナシ、

〔三王外記〕憲王故事、王卽位、必謁日光山陵寢、憲王〇德川綱吉立數歲、及元祿中、詔列相議日光之行、先是王奢侈且好與、府藏殆空、用度不足、浪華駿府二城、皆有神祖所藏金數鉅万、後先輸諸內府、王畢用之、

以濟其欲、於是王府遂空、列相奏言、殿下日光之行、法當用十万金、而今府藏空竭、無以供費、未可以有行也、王泣曰、吾有海內、而不得有數日之行、焉用王爲、因減飮食、弗樂、列相及侍中諸大臣皆病之、時忍侯正武爲計相、召大農度支官以下、而問足用之術焉、大農荻原重秀對曰、海內見行世幣、旣有其數、不可遽殖、莫如和劑他物以爲貨幣、無取益於原材、而其數倍、故爲之便矣、忍侯曰、善、遂奏請造貨幣、報可、於是下局務造貨幣、慶長中所造金銀二幣皆純金、至是和金以銀銅、和銀以銅錫、皆半原金、大板小板方金、形及重皆如故、錠銀碎銀、形皆如故、並款文曰元、俗謂之元金、別造小方金、形如故方金而重半之、款文曰二朱、十年始行、新幣直皆如故、日本造惡幣此其始云、

〔貨幣通考〕正德元年二月二日、四寶字銀を鑄出せり、是銀、寶字四ツを打つ故に、四寶字銀と云、之を後官にて吹分、銀料を計りしに、二百匁の中、僅に銀料一十八匁二分三毛ありと云、元祿以來、五回之改鑄にして、遂に如此の粗品となる、元祿八年以來造る處、金幣は大判、小判、分判、二朱、及び乾字小判、分判、及び慶長の大小判、都而八品、銀は元祿寶字、中字、三寶字、四寶字、都而五品、皆荻原等の擅に作らしむるもの也、其品多く、相場種々ありて、通用便ならず、海內之を苦む、

〔折たく柴の記中〕重秀〈○荻原〉其職奪るべき前四十日ばかり、八月二日〈○正德元年〉に、銀又改造らせたりけり、此たびは內々の仰によれる由をもて下知す、此事心得ぬ事に思ひしに、後に聞しに、七月の末、重秀に仰下されしは、去々年の夏の頃、新なる銀ども世におこなはるゝと聞えければ、其事を尋仰られしに、それらの事いまだかつてあらざる由の證狀を參らせしかば、さもこそと思召れしに、そのゝちも世に申す所やまずして、つひに人民の怨苦、此事にありときこゆ、急度申ひらくべしとありしに、其事申すべき事ありと答申て、そのあけの日御代つがれし初、國財すでに竭盡せしによりて、銀改造るべき由を申すといへども、此事においては、重ねて議し申すべからざる

出を承りぬ、されど此事の外に、國用を足しつべき事なきをもて、去々年より此かた、某ひそかに銀改造らせしによりて、それより此かた、凡の事廢闕なくして今日に至りぬ、某もとより其罪をしれり、敢て申すとしるしてまゐらせたり、聞召驚かせ給ふ事大かたならず、此後の御沙汰、いかにやあるべきと思召わづらはせ給ふほどに、重秀申すべき事をばすでに申しつ、今は憚る所なしと思ひて、八月の初、また銀改造らせし下知狀には、內々の仰ありとはしるし出したりけり、

正德元年二月二日、三ツ寶銀ヲ吹替ラル、宝ノ字ノ極印四ツ打ツ、是ヲ世ニ四ツ寶銀ト云、同年九月吹所ヲ止メ、享保七年通用停止、

〔金銀圖錄二正用品〕正德四寶丁銀○圖略

同上豆板○圖略

四ツ寶豆板、銀ノ宝ノ字、宀ニ从ヒ玉ニ从フ、之ヲ以テ異トス、

正德小判金○圖略　重サ四匁八分

右古金小判重サ四匁八分、正德四年五月十五日、金銀ノ品、慶長ノ法ノ如ニ成シ返サルベキトノ事ニテ、慶長金ノ位ニ改メ鑄ラル、添極印等ナシ、是ヲ世ニ正德新金ト云、今是ヲ古金ト云、

同上佐字小判金○圖略　重サ四匁八分、其佐ノ字ハ佐渡ニテ吹ク所ナリ、

同上壹分判金○圖略　重サ壹匁二分

同上佐字壹分判金○圖略　同上

同上丁銀○圖略

同上豆板銀○圖略

〔享保集成絲綸錄三十二〕正德二辰年十月

被仰出之趣

上古以來、我國にて金銀を生じ候事、其數すくなく、天下の財用とぼしく候ひし事共は、世の人傳へ承たる所にて候、然るに東照宮御治世の始、慶長七年に及びて、天運の時至り候故歟、神德の感じいたされ候故歟、天下の寶山、一時に開け始り、金銀の生じ出し候事、我國の始よりこのかた、いまだ其例を聞ず、これよりして公私貴賤の財用、ゆたかに事足り候のみにあらず、我國の外よりも、金銀を求むべきために、渡來候國々其數多く、これによりて又我國の資用もゆたかに事足り候て、今日に至り候、皆是東照宮の神恩にあらずとは申べからず、寛永年中、我國に渡來候事を被禁候國々多しといへども、今に至て年々に渡來候處も、其數猶すくなからず候を以て、我國の金銀は、萬國の寶にすぐれ候事、世の人又推知すべき處に候、然るに又慶長より以來、或は異國の中に流れ入、或は火災の度に燒うせ、或は神社佛閣、衣服器財のために費やし用ひし處、凡九十餘年の間、我國之金銀大半を減じ候故に、天下の財用相通じ候事、其始に及び難し、これによりて元祿年中、金銀の法を改め造られ、我國通用の金銀、又其數を倍し候、然ども其金銀の品は、東照宮之定置れし處には大きに及ばず候によりて、工商の類、あらたに造出され候金銀の價を賤しみ、各其利を失ふべからざる事を謀り、諸物の價を增し加へて商賣し候に及びて、諸物の價は年々に貴く、金銀の價は年々に賤くなり來りて、つひには公私貴賤の難儀には至りぬ、異朝にしては古より其寶貨の品、高下同じからざる事共にて、就中中古以來は、寶鈔とて紙を以て金銀にかへ候て、天下に通用せしめ候事、今にいたるのよし相聞え候、元祿以來の金銀、たとひ其品は下り候とも、異朝の寶鈔にはくらぶべからず、然れば我國の四民、各其家業を相傳て、其財用を相通じ候事、東照宮より以來、代々の國恩により候所を存候はんには、金銀の價もさのみは賤しまず、諸物の價もさのみは貴ばずして、今日の難儀にも及ばしむべからず、しかれども財を重んじ利を爭ひ候事は、工商の類の習ひに候上は、あながちに咎むべからず、只偏に其餘公私貴賤の煩となり候事、

今更是非を論ずるに及べからず、すべて此等の事ども、年久しく知召され候御事に候を以て、御代の始より、常に御心に掛られ候所は、金銀の品もとの如くに、諸物の價も平かに、いかにもして天下の煩を除かるべき御本意に候へども、凡は物一たびやぶれ候後、もとの如くになし返しがたき事は、定れることわりにて、中にも今日金銀の品をもとのごとくになし返され候事、尤以て難き事に候、若然るべきいはれもなく、今の金銀を以て、もとのごとくになしかへされ候はんには、天下に通用し來候金銀は、俄に其數の半を減じ、天下の人各其家財の半を失ひ、又工商の類の利を謀り候心は、もとのごとくに候はゞ、諸物の價は其半を減じて、商賣し候事も有べからず、然ば金銀の數は、今迄の半を減じ、諸物の價貴く候事は、今迄のごとくに候はんには、公私貴賤の難儀、只今よりは猶甚しきに至り候べき歟、此等之儀によりて、卒爾の御沙汰にも及び難く候うちに、新金の事、或は火にあひ候ては流れうせ、或は物にふれ候ては折損じ、其寶を失ひ候輩有之由聞召及ばれ、やむ事を得られず、先其品をもとのごとくに改造るべき由被仰出候、其形少しく候事は不可然候へども、金銀の法もとのごとくになし返され候迄は、天下に通用し候金の數其半を減ずべき、尤以て不可然事に有之候故に候ひき、然るに又新銀之法、次第に其品下り候て、去年の冬に至て、銀にて通用し候國々、貴賤之難儀に及び候由聞召され、殊に不可然事に思召され候を以て、新銀を造り出し候事をば停止せられ候、此上は猶更に金銀の品、もとのごとくになし返さるべき事、日々に御心を盡され候、但天下の寶は、天下ともに寶とすべき物に候上は、思召にまかせて御決定あそばされ難き御事に候、たとひ今日金銀の品をもとのごとくになし返され、其數の半を減じ候とも、慶長以前の代々にくらべ候はゞ、天下の財用、猶ゆたかなるべき事は萬々倍し候べし、然る上は天下の貴賤相共に存じ候所、我國の金銀は、萬國にすぐれ候て、萬代の後迄の寶とすべき物に候へば、たとひ各其財寶の半を失ひ候とも、其品をもとのごとくになし返さ

るべき御事に存じ、工商の類も相共に存じ候處、金銀の品もとのごとくになし返され候はゞ、たとひ其利を失ひ候とも、諸物の價は其半を減じて商賣仕るべき事に候と存候はゞ、年來の御本意のごとく、すみやかに金銀の品をもとのごとくになし返され、天下の煩を除かれ候べし、若天下の貴賤の存ずる所も、今日通用の金銀、其數の半を減ぜられん事も不ㇾ可ㇾ然御事と存、工商の類も、其利の半を失ひ候はん事はかなふべからずと存候においては天下の人と共に、其時を御待合せ可ㇾ有ㇾ之候、只いづれの道にも、金銀の事は、我國萬代までのために、東照宮御定置れし法のごとくになし返さるべき御本意に候間、天下の貴賤、よろしく此旨を存ずべき由被ㇾ仰出ㇾ候者也、

十月十一日

正德四午年五月

覺

慶長年中定置れ候金銀の法、元祿年中に至て始て其品を改められ、寶永の初、ふたゝび銀の品を改められ候よりこのかた、諸物の價も年々に高直になり來り、世の難儀に及び候によりて、前御代御治世の始より、金銀の品、慶長の法のごとくになし返さるべきのよし御本意に候といへども、近世以來、諸國山々より出來り候金銀の數、古來のごとくに無ㇾ之候を以て、たやすく其御沙汰に及ばれず候處に、就ㇾ中元祿の金は、折れ損じ候につきて、其通用難儀候由を聞召及ばれ、まづ其御沙汰有ㇾ之候、其後に至りて、寶永の銀も、其通用難澁し候事御聽に達し、其故を尋ねきはめられ候に及び、世上に通行し候所の銀、次第に其品宜しからざる物ども出來り候事相しれ、早速に銀吹出し候事を停止せられ、其事の由來を御糺明の上、其御沙汰あるべき御旨に候處に、既に御不例日々に重らせられ候につきて、去々年辰十月十一日に、御書付を以、思召之程を被ㇾ仰出ㇾ候、これによりて當御代に至り候よりこのかた、世の人の申沙汰し候事共をも尋きはめられ、各僉議の

上を以て、金銀の品、慶長の法のごとくになし返さるべき事に議定せられ候、其通用の法、引替の定等の事は、つまびらかに別紙に相見え候ごとくに候、今度此御沙汰においては、前御代の御旨によられ、天下後代迄の爲を以ての事に候上は、貴賤貧富をえらばず、皆々御定の旨を相守り、其功の終るべき所をよろしく覺悟あるべき事に候、もし一身の利潤をはかり候ために、何事によらず、其通用相滯候事共仕り出し候においては、前御代の旨、當御代の御沙汰を違犯候のみにあらず、天下後代迄の罪人たるべきものに候へば、急度其罪を糺され候て、嚴科に行はるべき事に候、是又其旨を相心得候べきもの也、

正德四年甲午五月十五日

今度被仰付候金銀の品、慶長の御定のごとくになし返され候事は、去々年辰十月十一日、前御代○德川家宣被仰出候御旨によらず、天下後代迄のために御沙汰候上は、公儀御費用の事等は論ずるにたらず候、雖然近世以來、諸國山々より出來り候所の金銀、むかしのごとくに無之候を以て、元祿以來の金銀等、こと〱くに皆相改り候迄は、多くの年月を經べき事に候、こゝを以て其功終り候迄の間、金銀通用の法を定められ候條々、

一今度被仰付候新金銀、幷に慶長以來元祿七年迄の古金銀はいふに及ばず、元祿寶永の金銀、皆皆これを通用すべし、但し元祿寶永等の金銀の事、公儀の御定においては、慶長の法の如に、金壹兩を以て銀六拾匁に相當られ候といへども、内々においては、歩金銀をくはへ候て、通用し來り候事は、其品々の高下同じからざる故に候、然る上はこれより後も、元祿以來、品々の金銀を以て、慶長の法の金銀等、其品を同じく通用の事は有べからず候、これによりて慶長以來、只今通用の金銀にいたる迄、おの〱其品の高下によりて、割合の次第を定られ、いづれの金銀にても有合候に隨ひて、皆々通用し候法を定られ候、其割合の次第は、別紙に相見え候事、

一何事によらず物の價を定め候事は、只今通用し候金積り銀積りを以て、其直段を多く候て、其金銀の事は有合候に隨ひ、いづれの金銀にても割合の定を以て、新古の撰びなく通用すべき事、

附借金借銀の事、是又此例に准ずべき事、

一御料所御年貢の金銀納を始て、すべて上納の金銀等、是又只今通用候金積り銀積りを以て勘定し、其金銀の事は有合候に隨ひ、いづれにても割合の定を以て通用あるべし、公儀御用の代銀として被下候所も、割合の定を以て、いづれの金銀にても用ひらるべく候、世上において、上下通用の法、皆々此例に准ずべき事、

一大判の事は、元祿年中改められ候所も、慶長の大判に引くらべ候に、其品大きに下り候にもあらず、折れ損じ候事もなく候によりて、寶永七年、只今通用の金を被仰付候時も、此沙汰には及ばれず候、今度においても、小判壹分判等相改り候以後に御沙汰あるべく候、其間は公儀より被下候所も、獻上之處も、其外私に用ひ候所も、皆々只今迄用ひ來り候大判を以て通用あるべき事、

一公儀江獻上之銀幷被下候銀の事、是又只今通用の銀積りを用ひ、其銀の事は、唯今迄用ひ來り候銀にても、又者割合之定を以て、今度被仰付候新銀を用ひ候とも、新古の撰びなく通用あるべし、一枚二枚の馬代等に至ても是に准ずべき事、

一今度被仰付候新金新銀を以て、元祿以來品々の金銀に引替候事は、年を經べき事に候によりて、諸國在々所々の手寄次第に、追々に引替候ために、江戸京大坂三箇所において、引替所を定め置れ、引替候ものと相對し、割合の定のごとく、其事の煩なく引替べく候由を相定められ候事、

附もし用事に就て、今度の新銀を以て唯今まで通用の金銀に引替たきもの候においては、是又割合の定を以て、其望次第引替候樣に相定られ候事、

一今度被仰付候金銀の事は、慶長年中ゟ元祿七年迄の間通用し候、古金銀と其品相同じく候上は、元祿七年以前の古金銀者、引替候に及ばず、今度の新金銀と相まじへ候て、永く通用有べき事、

右條々今度被仰付候金銀、世上あまねく流布し候までの間は、公私貴賤ともに、よろしく遵行あるべき者也、

〔貨幣通考〕正德四年五月十五日、金銀の製、慶長の舊に復さるゝの命あり、是時吹替しは、小判分判銀錠の三なり、大判は獨り享保十一年に至り吹替あり、小判分判とも、其形色重量共に、全く慶長の舊製に復す、故に紀年の極印なし、其引替の法は、元金乾金共に五分、則舊二兩に、新金一兩の割なり、銀は八分、則新銀一貫目に、舊銀一貫二百五十目、此銀の割は、後享保□年に改めらる、折焚柴に據り考るに、文廟〇德川家宣深く貨幣の亂れし事を患ひたまひ、群臣をして種々議を盡さしむ、遂に日本橋に高札を立て、庶人の異見を見給ひ、其議遂に決定し、章廟〇德川家繼の時、正德四年に至り、御遺言の趣を以て、改造の令を出されし也、當時は京師と江戶と兩所にて造りし也、佐渡にても是時造りしと見え、佐渡判とて、佐字の烙記あるものあり、又是時鑄造之幣、正德新金銀と呼び、又享保に至り盛に吹繼し故、享保金銀とも謂ふ、近世の俗には單に古金銀と唱ふ、

〔貨幣通考〕頭書正德四午年五月、一は吹替趣意之書付、二は交行法之書付、元祿以來之金銀等、ことごとく改り候迄之間、金銀通用の法、物價借金等、都而是迄之金銀積を以て定め、新古有合に隨ひ通用すべし、御年貢其外上納物、公儀御用物代被下等、是又前同斷、大判小判分判改めし後其沙汰あるべし、獻上銀、是亦只今之銀積を以、新舊割合、一枚之馬代たり共、是に准ず、引替之時、新銀を以

て、只今迄之銀江引替請取渡ものは是亦割合を以、定の如く望に隨ひ渡すべし、三には割合之定、一慶長之古金、新金元金に拾割增、卽ち二兩と一兩と也、但し引替には、元祿之方是迄之如く、元金百兩、二兩二分づゝ增步與ふべし、慶長銀は、只今迄之通、銀に拾割增、卽一〆目二〆目之割也、是は中銀三寶四寶共に差別なし、元祿銀は、只今之銀に六割增、卽一〆目に一〆六百目也、寶永の始の銀(卽寶字銀)は、只今通用の銀に三割增、寶銀一〆目に一〆三百目也、但し只今迄之銀は、大に其品下り候得共、公儀費用を以て被償、割合拾割增に止ると云へり、

〔教令類纂初集六十五金銀〕正德五乙未年四月

覺

元祿以前は、江戶表において小玉之銀通用有之候處に、近年に至て、小玉之銀其數少く候故に、其代として、專ら錢を以通用候によりて、錢の相場は言に及ばず、小判切賃等も年々に高直に至り、諸人之難儀に及候、依之今度之新銀は、別而小玉之數を增し、こまかに吹出され候といへども、今に至而新銀小玉之通用、古來之如くには無之由相聞候、自今以後は、金壹兩之端銀、又は乾字金壹分之代、或は町屋敷等之地代宿代、或は諸職人之手間料飯米料、諸商賣物少分之代銀等、專らに小玉銀を相用候樣に仕、金高に及候事に至りても、金銀相應に相交通用候樣に、町中大小之諸職人諸商賣人、相互に急度此旨を可相心得者也、

四月

〔貨幣秘錄〕金銀通用之事

正德元年辛卯二月、三寶銀を改む、寶字の極印四ツあり、之を四寶銀といふ、享保六年辛丑十二月通用止む、凡十一年、正德四年甲午五月、金銀の品悉く改鑄せられ、慶長の舊規に復せらる、添極印等なし、是を正德金銀といふ、又金をば武藏判といふ、享保新銀出來の後も取交通用す、元文元年

享保金銀

丙辰五月に至て通用止む、此間凡二十三年、

〔享保集成絲綸錄 三十三〕享保三戌年閏十月

新金銀を以、當戌十一月より通用可仕覺、

一金吹直被仰付、段々出來によつて、最前相觸候通、來亥年を限、乾字金通用停止に候、依之向後諸色相對を以、直段相極候事ハ格別、獻上被下金、又ハ給金借金拂殘金等、すべて前々より定來り候員數にて通用候儀、左之通被仰出候事、

但乾字金にて何兩と申、取やり候へども、當戌十一月より、新金にて何兩と申、取やり可仕候、尤乾字金通用有之内ハ、新金之代りに、乾字金引替之法を以遣候儀ハ、勝手次第之事、

一金ハ正味之有目ニ吹直され、足金ニ不及候故、右之ごとく出來候得共、銀ハ正味不足多有之によつて、灰吹銀にて足銀被仰付候處、近年山々より出候銀の出方にてハ、貳拾箇年餘に而も成就計がたく候、依之金之通、向後銀之有目にて吹直被仰付候員數に隨ひ通用候儀、是又左之通被仰付候事、

附通用銀にて何枚何貫目と申被遣候得共、當戌十一月より、新銀にて何枚何貫目と申取遣可仕候、通用銀等通用有之内ハ、新銀之代りニ、通用銀引替之法を以遣候儀ハ、勝手次第之事、

一乾字金引替ハ、當戌年より來ル寅年迄五箇年ニ限るべし、元祿金引替ハ、來亥年ニ可限事、○中略

一年貢幷小物成諸運上之類員數を定、元祿九子年以前より納來候金銀ハ、新金銀にても、只今迄之員數相納べし、子年より納來候分ハ、新金銀にてハ半減たるべし、但子年ゟ納來候品々ニ而も、古來之格を以納候分ハ、新金銀にても員數差別なく可相納事、

一元祿九子年より以來、請負にて直段相極候類、此以後も右員數を可用分ハ、當時之直段積を以極直し可申事、

一年貢幷小物成諸運上諸色とも、元祿九子年より當戌閏十月迄、其時々之直段積を以相極候品々、納殘り又は諸色代物拂殘之類ハ、乾字金百兩之所ハ、新金五拾兩、通用銀拾貫目之所ハ、新銀貳貫五百目可遣之事、

一獻上幷被下金銀、古來より格式有之ニ付、新金銀にて差別無之、世上祝儀取かはし、或ハ禮物等遣候儀可准之事、

一借金銀ハ、元祿九子年以前借用之返濟之殘りハ、新金銀にても其員數可返之、子年以來之借用ハ、金百兩之所江、新金五拾兩限、拾貫目之所江、新銀貳貫五百目可相返之事、

一給金銀ハ、元祿九子年前後共差別無之、新金銀にても只今迄之員數たるべし、然とも相對を以被拘候わたり奉公人之類ハ、近來之給金銀員數を不可用、猶又相對次第たるべき事、

附元祿九子年以來、金銀位惡敷成、つゞきかね候子細を以、別段ニ金銀遣候類ハ、元高新金銀にて遣候上ハ、增金銀ハ相止可申事、

一合力等入用之積りを以相極候類ハ、元祿九子年以前相極候分ハ、新金銀にても其員數たるべし、尤子年以來相極候品者、半減たるべき事、

右之通堅可相守、此外之儀ハ書面之趣ニ可准之、且又割合改り候ハ、寶永以來の限計之事ニ候得者、新金銀兩替、或ハ賣買之直段等ニ付、紛敷手たて仕においてハ、急度御僉儀之上、可被處嚴科者也、

閏十月

〔貨幣秘錄〕金銀通用之事

享保三年戊戌閏十月、新金銀を頒行す、是を享保金銀と云ふ、至是海內の金銀、悉皆神祖の定玉ひし舊製に復し、物價平準して、賈商も其直を二にする事あたはず、蒼生安堵し、猾吏も其術を施す

所なし、實に有廟〇德川吉宗の御恩德、仰ぐべし敬すべし、惜かな氣運極有、物力支へがたし、遂に元文元年丙辰五月に至て通用を止む、凡二十一年、

大判金之事

享保十乙巳十二月、元祿大判を廢せられ、新たに大判金を鑄る、品位輕重、慶長大判金に同じ、是を享保大判金といふ、吹立高八千五百十五枚、今用ゆる物是なり、

〔享保集成絲綸錄三十三〕享保十巳年十月

覺

一大判之儀、元祿年中吹直有ㇾ之、古來之大判より位劣候に付而、此度右吹直以前之大判之位に吹改被ㇾ仰ㇾ付之、當十一月より兩替屋共江相渡候間、獻上并被ㇾ下物、其外之通用には、當十二月朔日より可ㇾ用ㇾ之候事、

但壹枚は金七兩貳分の積たるべく候、兩替屋之もの共買入候節、右分量不ㇾ相減ㇾ樣に致ㇾ賣出し候時分も、步銀多く取べからず候、此旨於ㇾ令ㇾ違犯ㇾ者、僉議之上可ㇾ爲ㇾ曲事ㇾ候事、

一只今迄通用候元祿大判者、當十二月朔日ゟ、一切通用停止之事、

一元祿大判者、當十二月より潰金に成候條、所持之面々ハ、後藤庄三郞方江差ㇾ越之、潰金之割合を以、小判と可ㇾ引替ㇾ候、尤貯置べからず事、

但潰金之分ハ、壹枚ニ付小判四兩貳分餘之積たるべき事、

右之趣國々所々に至迄、急度可ㇾ相守ㇾ者也、

十月

〔金銀圖錄二正用品〕享保大判金〇圖略

右大判重サ四拾四匁、花押ハ壽乘ノ判ナリ、恐〇近藤重藏守按ニ享保十年十二月朔日、元祿大判ヲ止テ、

慶長大判ノ位ニ吹改ラル、是ヲ世ニ新金大判ト云、壹枚金七兩二分ノ積リ也、享保十一年亦吹之、

〔貨幣通考〕按るに、大判は正德にも其儘置れ、今年〇享保十年に至り、始て舊に復す、此後元文文政天保之三改鑄にも、大判は其儘置れ、今〇安政年中に至て通用す、唯天保に至り吹増あるのみ、今世にも諸物之價に金何枚と云、七兩貳步の積りなるは玆に始るか、素々大判は、小判十箇の重サにして、其價も十兩のものなれば、金局の墨書にも十兩と記せり、大方元祿改鑄の前迄は、十兩前後のものなるべし、元祿以來は如何程なしたるや、今之を考ふるに由なし、然も大小判皆同一に吹替たれば、差たる替りはあるべからず、此後漸々金幣吹替の度每に騰貴して、今は二十六七兩より三十兩にも至る、此他幣の金料に比して適當すればなり、

〔貨幣通考〕頭書 正見按るに、享保の大判は、其位慶長の舊に復さるゝと令せられたれども、眞の慶長金とは思はれず、小判七兩貳分に當ると定められたれば、意を以て推算するに凡如左、

小判重四匁八分、此位九程、金料四匁三分二厘、七兩貳分金料三十二匁四分、大判重四十四匁を除けば、則七分三厘六毛强を得る也、又元祿の大判は、四兩貳分餘の積を以て潰に引替らるゝを見れば、五六分の位と思はる、

官庫の古文書に、巳〇享保十年の四月、後藤四郎兵衛、源左衛門江差出す旨見ゆる一通を見る、按に源左衛門は、御勘定吟味役にて、荻原氏なるものなるべし、其略に曰、元祿の大判江金銅を指候て、古大判の位に仕候勘定、相勘見候處左之通、

元祿大判を二ッに割、此目方二十二匁五厘、指金二十二匁二八六二八五三餘、指銅一匁三厘六毛、台四十五匁三分六六八、但大判一枚四十四匁壹分なれば、一匁六分餘ゝ過に成候得共、細工仕上ゲ減之積、

右之割台にては、慶長大判之定に相違無御座候、

〔續三王外記 德王〕王〇德川吉宗常用儉素、而至有義不可儉、則斷然行之、元祿中、改鑄大板金、以其和銀銅、比舊例、其質甚惡、王曰、大板金、國家之上幣也、不可以質惡者行也、享保十年乙巳、詔改鑄、以純金、於是乎大板金復慶長之舊、十二月甲子朔、始行新幣、

〔反古のうらがき 三〕金貳枚刀

大判の黃金、小判七兩貳分に換ることとなるに、今は小判の黃金位おとりて、貳拾五六兩に當ることゝは成にたり、故をもて金壹枚といふを小判七兩貳分と定め、いにしへのあたひの名のみ殘し、刀劍の折紙などに玄るす時のみ此ことばを用ひ、常の賣買ことに用ことなし、又小判一ひらを一枚といふ人もありて區々なれば、あやまることも多くありけり、

〔翁草 百九十二〕一大判金は、古來一枚に付、小判七兩貳分の通用なり、然に元文吹替以後は、右に六割半相增、拾貳兩餘に通用の害なれども、其後段々相場引あげ、近來は判金一枚、小判廿二三兩に相成、依之寬政三亥年三月四日、左の御書付出る、風說には、判金の相場拾七兩に成ると申せども未碇としたる事を不聞、

本多彈正大弼被相渡候御書付

大目付へ

大判金相場、以前よりは格別引上、彌融通手狹に有之に付、直段相應に相成候樣可被仰出處、遠國御用御暇拜領物、其外御手當之筋は、近來之高直成所を以辨じ來候間、俄に相場下り候而は、拜領之面々可爲難儀候間、不相應之直段に候得共、先今年は其儘被差置候、以來御褒美之分は是迄之通、其外は御手當御暇に付、大判金拜領之分は、小判金を以相應に可被下候、

右之通寄々可被達候

三月

〔天保集成絲綸錄九十一〕天保七申年五月

大目付江

近來大判金相場、格別高直に相成、如何之事に候、兩替屋共は勿論、其外共貯置候者も可有之哉、右樣之儀堅致間敷候、兩替屋に無之町人、大判取遣り致し候儀、幷遠國江遣し候儀は、先年も相觸候通難成事に候、

右之通相觸候條、若大判貯置候者も於有之は、吟味之上急度可申付候、

五月

〔貨幣通考〕按るに、他の幣濫惡に成りたる故、寶藏家大判を貯し故なるか、縱へ誰貯へずとも、他幣の金料に比して、其程の價に成べきは理なり、天下誰か目なからん、

〔享保集成絲綸錄三十三〕元文元辰年五月

覺

一世上金銀不足に付、通用不自由之由相聞候付而、此度金銀被吹改候事、

一此度吹改候金銀相渡候儀、慶長金新金は、百兩之代り百兩、乾字金は、貳百兩代り百兩、慶長銀新銀は、拾貫目之代り拾貫目引替可相渡候間、右引替之格を以、書面之金銀無差別取交、請取方渡方兩替共、無滯通用可致候、尤上納金銀も可爲同前事、

一吹改候金銀、金座銀座より增步差出可引替候、員數之儀は、引替金百兩に付、增步金六拾五兩ヅツ、引替銀拾貫目に付、增步銀五貫目ヅヽ可相渡候事、

一引替候金銀、町人より引替候筈に候條、武家其外共ニ、勝手次第、町人江相對に而申付可引替候事、

一引替に可差出金銀之儀、員數相知候事候間、貯置不申、段々引替可申候、若貯置不引替もの相知

れ候はゞ、吟味之上急度可申付候事、

附右引替に不出銀は、唯今迄之通、潰銀之積り可相心得候、

右條々國々所々にて可存此旨者也

〔貨幣通考〕同月（元文元年五月）七日、六月十五日、より新幣始る旨令せらる、但引替入用、金一兩に銀一分銀百匁に銀一分五釐ヅヽ、金主より引替のものへ渡すべき由を觸られ、依て金銀取集の町人數人の居所姓字を書記す、

按るに、小判重三匁五分、分判重八分七厘五毛、文の字の記あり、世にこれを元文金とも、文字金とも云、是時世人頻に、正德の合併改造より、世の金銀の數、半を減じ、通用に不足と云者多し、故に此擧あり、幣は銀銅を加へ、目方を減じたれば、其員は增せども、五分六分の增を與へ兌換すれば、通用も自然歩合算し、物價亦其割程貴くなり、畢竟は小判を折て二分を造りたるに等し、失策と云べし、若亦專ら官利を計るのみならば如此なさずとも、增歩を與へざる程に改鑄し、如何程も仕方あるべし、

〔金銀圖錄二正用品〕元文小判金

重サ三匁五分、愚按ニ、元文元年五月十二日金銀ヲ改ラル、文ノ字ノ添極印ヲ打ツ、是ヲ世ニ文字金銀ト云、又文金銀ト云、

同上壹分判金　重サ八分七厘五毛

同上丁銀（圖略）

同上大黑銀（圖略）

同上豆板銀（圖略）

大小輕重一ナラズ、俗ニ小玉銀ト云、豆板ハ疑ハ豆ハント云コト歟、

〔續百一錢〕元文元年七月六日

覺

三條通烏丸東江入町　　銀引替所

來ル十一日より、文字銀引替候間、當六日より別紙之通、銀高書付相認、引替所へ罷越、帳面ニ附、十一日より順々引替可申候、則帳面ニ附候日割、左之通ニ候、

一引替之仕形者、古銀前日引替所へ相渡、手形請取之、扨番替り新吹銀請取可申候、

帳付日割

六日辰刻より申刻迄　堂上方　武家方　寺社方

七日右同斷　町方　在方

八日右同斷　堂上方　武家方　寺社方

九日　町方　在方

右之格を以、跡々迄隔日ニいたし候、

右之通山城國中江可相觸者也

辰七月

引替之覺

一古銀何程

右之銀子、文字銀ニ引替可申候、以上、

辰七月何日　　何町　誰印

引替所

〔一話一言十二〕賣貨の說

五匁銀　二朱銀

五松館遺稿に云、謙亭翁〇小宮山昌世云、予が三宅先生〇緝明に親炙せし比、乾字色金をやめて、慶長の純金にかへすの令ありて、寶貨を改められける時、先生ひそかに予にいへらく、寶貨は時勢に附て差略せざればながく行ふ事かたし、純金に改めらるゝは時勢にかなはず、廿年を出ずして、ふたゝび色金にかはりて、乾字よりはなほ等を降すべし、いやしき譬なれども、五文どりと云餅あり、人五人の中へ、此餅一ッあたへたらんには、蛇を畫て、一卮の酒を飲たる類ならん、壹文餅を五ッあたへたらば、飢に充るには及ばねども、口實とするにたれり、至治百年に及び、人民の蕃殖、昔日に數十倍せり、純金善といへども、五文どりにひとしければ、今の時勢にかなはずといふべしと、果して先生の言のごとく、元文紀元の年、文字金に改められたり、知言なる哉、

〔天明集成絲綸錄四十四〕明和二酉年九月

此度文字銀同位を以、掛ヶ目五匁に定り候銀、吹立被仰付候間、有來丁銀小玉銀に取交、渡方請取方無滯可致通用候、

右之趣國々江も可觸知者也

九月

明和四亥年十二月

文字銀同位を以、掛目五匁に定り候銀、吹立被仰付候間、有來丁銀小玉銀に取交、可致通用旨、去々酉年相觸候得共、以來右五匁銀之儀者、銀相場に不拘、金壹兩に六拾目替之積を以、金壹分に銀三枚、金壹兩に銀拾貳枚之積、渡方請取方無滯可致通用候、

右之趣國々江も可觸知者也

十二月

明和五子年七月

一五匁銀之儀、壹枚に付、目方四分迄之輕重、無構渡方請取方共ニ可致通用候、
一五匁銀兩替屋共方に而多集り、金子ニ差支候儀も有之節者、爲替相勤候兩替屋共より御藏江
相納、金子に引替候筈に候、
右之趣國々江も可觸知もの也
七月

〔貨幣通考〕明和二酉年九月一日、今度文字銀同位を以、重五匁の銀吹立仰出らる間、丁銀小玉に相交へ、通用すべき旨令せらる、

按るに、銀に定形ある玆に始る、其形長方、分判金の如くにして大なるもの也、其位通用銀と同じとあれば、且丁銀小玉に交へ通用すべき由なれば、官利を規の所爲にはあらじ、誰か銀も金の如く定量あらば急便によからんとの考より出しならん、此銀久しからずして廢すれども、後世二朱一朱一分の大利を開くものは、是が先驅たれば也、其功偉也、

同年十二月十八日、五匁銀一兩六十匁の定直を以て、金一分に三枚の通用にすべき旨の令あり、

按るに、初銀の通用に用ゆべき積にて鑄出し、遂に金通用の品となる、蓋し此頃銀價六十匁内外と見ゆ、

〔天明集成絲綸錄四十四〕明和九辰年〇安永元年九月

此度通用之ため、吹拔候上銀南鐐と唱候銀を以、貳朱之歩判被仰付候間、右歩判八を以、金壹兩之積、文銀幷錢共、時之相場之通、無滯可致兩替事、
一右貳朱銀兩替に付切賃之儀、是又金と同樣相心得、取遣り可致事、
一貳朱銀包之儀は、文字銀と違、於銀座包致候間、其通相心得可申事、
右南鐐貳朱銀之儀、金と同樣通用之爲被仰付候間、無滯可致通用候事、

右之趣國々江も可觸知もの也

九月

〔金銀圖錄二正用品〕明和五匁銀

壹歩重サ五匁三厘、愚按ニ、明和二年九月四日、新ニ五匁銀ヲ鑄ラル、此銀相場ニ拘ラズ、金壹分ニ銀三枚、金壹兩ニ銀拾二枚ノ積ナリ、

同上南鐐貳朱判

重サ二匁七分五厘、長九分半、横五分半、厚八厘、愚按ニ、明和九年九月七日、上銀南鐐ヲ以テ、貳朱ノ歩判ヲ鑄ラル、歩判八ヲ以テ、金壹兩ノ積ナリ、天明八年四月、貳朱判永代通用ノ令アリ、

〔天明集成絲綸錄四十四〕安永二巳年十二月

一二朱判之儀、世上通用之ため、南鐐銀を以吹方被仰付、南鐐は是迄拾匁に付、通用銀貳拾五匁替に付、其割合を以、金と釣合候目方、二朱判八に而、金壹兩に當候に付、金と同樣可致通用旨被仰出候處、貳朱判壹兩に付賣上四分、買上八分之引替賃を以、取遣之儀、兩替屋共申立候に付、其通被仰付候上、猶又過分之歩引等いたし、錢之儀も金と同樣には賣買不致、通用難澁之趣相聞候、吟味之上、急度も可申付處、新規之儀に付、世上不馴、心得違も可有之に付、其沙汰に不及候、以來左之通可相心得候、

一最初ゟ金と同樣通用可致旨被仰出候上は、其趣を相守、小判兩替之節も多少に不限、小粒に取交兩替いたし、切賃之儀も、是迄金之兩替同樣たるべく候、然上は先達而相觸候賣上四分、買上八分之引替賃を加候儀は可相止候、

右之通相心得、以來彌以金と同樣、無滯可致通用候、若兩替屋共錢屋共に不限、通用方難澁いたし、貳朱判を以、通用銀幷錢賣買之相場等を違、金と致差引、步引を相立、總て取遣り相滯候趣相聞候

ハヾ、吟味之上、急度咎可申付者也、

右之通兩替屋幷錢屋共、其外町中相觸候間、其旨相心得、世上無滯可致通用候、

十二月

〔貨幣通考〕按るに、二朱銀重二匁七分五厘あり、一兩に二十二匁に當る、而して二十五雙の直なれば、此頃通用銀五十五匁前後と見ゆ、

〔金銀錢譜追加〕小普請支配組頭川合次郎兵衛〇名久敬と云者、寶暦年中、御勘定吟味役に成り、夫より御勘定奉行に轉じ、越前守と改、五匁銀を工夫せしが、甚不通用故、異論錢兩替銀を吹出し、初の程は不通用なりしが、後には通用甚宜し、然し遠國へ行ては通用無之所も有之由、關東は專通用也、

〔草茅危言〕三金銀幣之事

一今日行ル所ノ金銀二幣ハ、甚輕重ノ宜ヲ得サセラレ、數十年來、上下通用聊モ碍ルコトナク、誠ニ永久ノ御事成ベシ、然ルニ近來、東土銀ツカヘニテ、銀甚貴クナリ、上國金相場、殊ノ外下直ニ成タル事、公私トモ大ニ失墜、平民モ大戸中戸迄、甚迷惑ノ事ニ成タリ、是ハ他ニ非ズ、安永中、二朱銀ノ幣始リテ、銀ヲ金ニ換テ用キラレシヨリ起リタル也、元來二朱ハ便利ナル者ニテ、民情ニ能合テ、三都ニ滯リナク流布シヌレバ、官ヨリ益鑄造アル故、僅ノ年數ノ内ニ、金數殊ノ外多クナリ、其上二朱ノ位、其量ニ少シ中ラザルニ、上國ニテ金價次第ニ劣リテ、一統ノ差支ト成タリ、竊ニ聞、今ハ廟堂ニモ右ノ弊ヲ知召シ、二朱ヲ廢シタク思召セドモ、夫ニテハ又大ニ人情ヲ動スベク、且ク見合給フナランカシ、或ハ迹ヨリノ鑄造ヲ停ラレ、又ハ追々鎔毀シテ、銀錠トセサセラルヽナド巷説アリ、イカヾ有ニヤ、何分近頃金價ハ少シ登テ、追々舊ニ復スベキ勢也、是ハ天下ノ爲ニハ賀スベキ事也、〇中略今ノ二朱ハ、世ノ評ニ、八片ノ價四十八匁ニ當ルト云、然バ一片六匁也、實ニ斯アレバ大ナル違戾ナル故、改鑄ニ位ヲ論ズルモムツカシ、手短ニ目ノ增方ニシテ、十片ヲ銷シテ、八

片トスル程成ベキカ、夫ニテ金一兩六十目ノ數ニ叶フベシ、○中略二。朱。背。文。ノ。以。ノ。字。顛倒ニアラ子ドモ、文字ノ語脈宜シカラズ、南鐐ヲワキニ置、傍ヨリ評シテ云ノ言ニナル也、是ハ南鐐ヲ主トシテ言ベキ事也、夫ニテ以ノ字ハ八片ノ下ニ有ベシ、筆者ニ其心得ナク、二句ノ準行ニ對スル樣ニスルガヨシト計ニテ、斯ナリシト見ユ、若準行ニ對セントナラバ、南鐐八片小判一兩ト計リ有ベシ、今右ニ云如ク、此銀ヲ主トシテ斯ナラバ、チト子細アリ、南鐐ノ二字ヲ大書ニシテ、下ニ兩行ニ以八片換小判一兩ト有ベシ、扨是ヲ表トスルコト宜シカルベシ、

〔天明集成緑綸録四十四〕安永三午年七月

貳朱判之儀、未京大坂江も不行渡、爲替等も難取組、江戸表諸問屋ゟ、彼地問屋江拂等も差支候趣相聞候に付、猶又二朱判吹高を相增、月々銀座ゟ大坂御金藏江差登、京大坂においても、通用有之筈に候間、諸問屋拂は勿論爲替等、金と同樣無差支取組、彌無滯可致通用候、

右之通町々江相觸候間、其旨相心得、無滯可致通用候、

七月

安永八亥年正月

貳朱判之儀、世上通用相增候ため吹方申付、去る辰年ゟ、金と同樣取遣り、皆二朱判に而も可致通用旨相觸候處、當時にては吹方も相當候に隨ひ、重に貳朱判而已を取遣いたし、小判小粒ハ相貯候樣に相成候而は、金銀取交、世上通用融通のため、貳朱判吹方申付候詮も無之候間、彌金と無差別取交、皆貳朱判にても通用いたし、金と貳朱判之無差別、心得違無之樣可致候、若金を圍置候樣成儀も於有之は、急度咎可申付候、

正月

右之通江戸町々國々江も可觸知者也

〔天保集成絲綸錄九十〕天明八申年四月

三奉行江

此度貳朱判吹方差止、丁銀吹方被仰付、勿論貳朱判之儀者、永代通用可致旨被仰出候、猶又諸色直段正路ニ相守、下直ニ致し候樣、江戶京大坂町々江相觸候、且唯今迄遠國等ニ而者、貳朱判通用、いまだ致し馴ざる場所も有之哉ニ相聞候、以來永代、一統通用之事ニ候得者、少しも無差支樣通用可致候、

右之趣、御領者御代官、私領者領主地頭より、幷寺社領共、不洩樣可被相觸候、

四月

〔憲法部類金銀八〕寬政十二申年十一月十一日京極備前守殿御渡

此度貳朱判吹方差止、丁銀吹方被仰付候、〇以下上文同故略

右之通天明八申年相觸候處、貳朱判之儀、近年拂底に付、猶又吹方被仰付候間、彌無差支通用可致旨、最前相觸候向々江可被達候、

申十一月

〔天保集成絲綸錄九十〕文化十五寅年〇文政元年四月

大目付江

此度世上通用之ため、貳步判金、新規吹立被仰付候間、右貳步判二ツを以、金壹兩之積り、尤銀錢共兩替、小判壹步判同樣之割合に相心得、取交無滯可致通用候、

右之趣國々江も可觸知者也

四月

〔嵩岳君言行錄〕金銀吹替の事、度々金座銀座より申出、御評議有之候處、君〇松平伊豆守信明の仰に、吹替

の事度々申出候は、何か子細のある事成べし、自然金銀の位の劣り候事抔有之節は、外國までも渡し候金銀に候へば、日本の耻辱なり、金銀不足に候はゞ、天下の御國印の居り候時は、石瓦にても通用いたすべし、吹替の事決て宜しからずと被仰御承引無之とぞ、佐藤久左衛門話、

〔貨幣通考〕按るに、此貳分金、重一匁七分五厘、其紀年の文の字異書なれば、世に之を異字二分判と云、竊に按るに、此金文金と目方同じく、位少々下る、然れども文政金よりは位上る也、後文政の大改鑄之時、其款號の異字なるを言ひ、吹改て文政金の位に下したる也、

〔天保集成絲綸錄九十〕文政元寅年五月

大目付江

此度世上通用之ため、吹立被仰付候、貳歩判金之儀、來月十日より通用可致候、尤先達相觸候通、小判壹分判江取交、無差別取引爲致候條、通用差滯申間敷候事、

一小判金之儀、年久敷相成、自然と瑕金等多く、世上難儀之趣相聞候付、追而及沙汰候迄は、五分以上之切レ金は勿論、其以下之瑕金ニ而も無差別、小判、貳歩判、壹歩判、貳朱判取交、無代ニ而引替可遣候間、武家在町共、所持之ものは來月十日より、後藤三右衛門役所を初、別紙名前之者方江、早々差出引替可申候、尤五分以下之瑕金通用方ニおいては、是迄之通ニ候間、心得違致間敷候事、

一貳歩判切賃之儀、壹歩判同樣ニ相心得、不相當之儀致間敷旨、兩替屋どもへ申付候間、其旨可相心得候事、

右之趣可被相觸候

五月

〔貨幣通考〕按るに、此金重元文之舊に仍り、猶毎兩三匁五分、分判准之、年を歷、款識漫滅、瑕玷多き

等の言を飾り、金料を減じ、官利を規せし也、元文より以來八十餘年、久して後改鑄の事あり、世に傳ふ、執政水野侯の專決に出で、弊政中の弊政也、是金を文政金といふ、

頭書 是時の金、紀年の字、文政なれば、文の一字を用ゆ、是迄の元文金の文と同じ、故に草書とし、以て是をわかちたり、

〔貨幣秘錄〕金銀通用之事

文政元年戊寅六月、二歩判金を鑄る、二枚を以て金一兩に換ふ、世に是を眞字二歩判といふ、天保六年乙未十月通用止む、凡十八年、

文政二年乙卯九月、小判金一歩判金を改む、是を文政金といふ、天保十三年壬寅八月通用止む、凡二十四年、

按に凡改貨の舉は、金銀共、同時に改めらる、事先格なり、是金銀の品位輕重、適當を欲すれば也、寶永の度、荻原近江守、屢々私に銀位を改め、其當を失ひ、天下惡幣に苦しめり、是一つなり 乾金は一時止むべからざるの權法に出て、其說前に論ずるごとくなれ共、其當を失へる一なり、是二つなり 明和の五匁銀、是三つなり 同二朱銀、是四つなり 文政の二歩判金、是五つなり 金銀を闕て、ひとり小判一歩判のみを改められし事、古規に違へりといへども、其品位輕重、適當の法を失へる事既に久しければ、今更いふべきにあらず、但し其事を奉れる輩、法意の基く所を知らず、政本を亂し、後世を誤つ事、實に歎ずべき事なり、

文政三年庚辰七月、通用銀を改む、是を艸文字銀、又新文字銀といふ、從來の文字銀を眞文字銀、又古文字銀といふ、天保十三年壬寅八月通用止む、凡二十三年、

文政七年甲申三月、二朱銀を改鑄す、從來の二朱銀に對して、新二朱銀といふ、天保十三年壬寅八月通用止む、凡十九年、

文政七年甲申七月、一朱金を鑄る、天保二年庚子十月に至り通用止む、凡十七年、文政十一年戊子十一月、二歩判金を改鑄す、是を草字二歩判といふ、從來の二歩判を眞字二歩判といふ、天保十三年壬寅八月通用止む、凡十五年、文政十二年己丑七月、一朱銀を鑄る、十六枚を以て金一兩に換ふ、天保十三年壬寅八月通用止む、凡十四年、

〔天保集成絲綸錄九十〕文政二卯年六月

大目付江

世上通用之ため、去寅年、貳分判吹立被仰付、且は小判現金多、難儀之趣に付、追々引替させ候得共、今以現金有之、畢竟元文之度、吹替之儘にて、此上年を經候に隨ひ、彌現金も多く相成、際限も無之儀、世上之難儀たるべく候、依之後年迄、現之憂無之ため、此度小判金、是迄之目方を以、厚めに吹直し被仰付候、壹步判之儀も、年久敷相成、座方之極印分り兼候も有之ニ付、是亦同樣吹直させ候間、兩替等是迄之通ニ相心得、無滯可致通用候、尤右引替日限等之儀は、追而可及沙汰候、

右之趣國々江可觸知者也

六月

文政三辰年六月

御勘定奉行江

金銀之儀、元文之度吹替之儘ニ而、小判壹分判は、先達而吹直し被仰付候處、銀之儀も年を經候ニ付、折銀燒銀銹銀、又は極印相分兼候も有之候間、此度吹直し被仰付候、兩替是迄之通相心得、無滯可致通用候、尤右引替日限等之儀は、追而可及沙汰候、

右之趣國々江可觸知者也

六月

〔牧民金鑑十五 通用金銀〕文政四巳年五月
一江戸京大坂エ國々より相廻し候、諸商賣物拂代、古金銀を以、請取度旨望候荷主も有之由相聞
候、態々新金銀に引替可申處、右之次第不埒候、江戸京大坂其外引替所相立有之場所より、他國
エハ新金銀を以可相渡事に候間、無差滯取引可致候、畢竟遠國渡海等に而、引替方手廻り兼候
場所エハ、いまだ新金銀不行渡候ニ付、古金銀相望候儀に可有之候間、向後右樣之場所は、御料
ハ御代官、私領ハ領主地頭より世話いたし、最寄引替所ゟ差出引替させ國々一般に新金銀行
渡、通用無滯樣可致候事、
右之趣可被相觸候
五月

〔天保集成絲綸錄九十一〕文政七申年二月
大目付江
金銀之儀、先達而吹直被仰付候得共、貳朱判之儀、其儘被差置候處、年來相立候分ニ者、手摺等ニ而、
極印文字も消、相分兼紛敷見候貳朱判も有之趣相聞、此度吹直被仰付候、然ル處貳朱判目方重キ
故、平日持運ニも嵩張り、相離儀之旨相聞、其上遠國江遣ルニ者、猶更之儀、依之此度者、壹枚ニ付目
方七分充相減じ、吹直申付候間、兩替等是迄之通相心得、無滯通用可致候、尤右引替日限等之儀者、
追而可及沙汰候、
右之趣國々江も可觸知者也
二月
〔貨幣通考〕按るに、是二朱重二匁、其形式全く明和の法に同じ、是時嵩張不辨、遠國へ送るに重く
して難き等の言を唱へ、一箇重七分を減ずると令せり、妄誕甚し、然も此頃、金幣のみ用ひ來り

たれば、世人亦時に、二朱銀は遠送に勞なりと云しこともあるならん、彼は眞に輕からば便ならんと云意にはなき也、戲を以て實據となす、放言と謂べし、又明和の二朱、重二匁七分五厘とあり、今七分を減ずとあれば、宜く二匁五厘あるべし、今其重サを計るに方に二匁あり、然らば明和の二朱は、二匁七分の定量なるか、糠輿家を俟ッ、此二朱新南鐐と云、

〔天保集成絲綸錄九十一〕文政七申年五月

大目付江

此度世上通用之ため、壹朱の歩判金、新規吹立被仰付候間、右歩判十六を以、金壹兩之積り、尤銀錢共兩替、小判貳歩判、壹分判、貳朱判同樣之割合に相心得、取交無滯可致通用候、

右之趣國々江も可觸知者也

五月

〔貨幣通考〕按るに、是金二分一八七五忽たるべし、正方にして長からず、金位文政金に減ず、輕薄極り、手を失へば見るべからず、民太に苦患す、

〔天保集成絲綸錄九十一〕文政九戌年十二月

大目付江

古金銀通用之儀、當二月相觸候通、來亥年二月より、彌通用停止候間、停止以後、堅く通用致間敷候事、

一古貳朱判之儀も、近々通用停止可被仰出候條、古貳朱判所持之者は、此節精出之、引替所江差出引替可申候事、

一古金銀通用停止以後も、遠國其外、無據引替殘古金銀も可有之哉ニ付、引替所之儀、古貳朱判通用中者、先是迄之通被差置候間、古金銀所持之もの者、早く差出引替可申候、若停止以後、古金銀

通用致候歟、又者古金銀貯置、不引替もの於有之者、吟味之上急度可申付候、

右之趣可被相觸候

十二月

文政十一子年十一月

三奉行江

貳步判金之儀、世上通用不足之由相聞候間、此度吹增被仰付候、然る處是迄之貳步判は、金座極印之文之字、眞字に候處此度ゟ小判壹分判同樣、草字に相直し候筈候間、其旨相心得、是迄之貳步判と無差別取引いたし、通用差滯申間敷候、

右之趣可被相觸候

十一月

文政十二丑年六月

大目付江

此度世上通用之ため、南鐐三銀を以、壹朱之步判、吹立被仰付候間、右步判十六を以、金壹兩之積、尤銀殘共兩替貳朱判同樣之割合ニ相心得、是迄之壹朱判に取交可致通用候、右南鐐壹朱銀之儀、金と同樣通用之ため被仰付候間、無滯可致通用候、

右之趣國々江も可觸知者也

六月

〔貨幣通考〕按るに、此銀一箇重七分、其形式二朱銀の如く長方、面には法馬の形、銀座常是の字あり、背には以十六換一兩の文あり、郭列星を周すこと方金の如く、都て二朱銀に同じ、銀品は上なれども、一兩の重、古貳朱銀よりは、十匁八分を減じ、新二朱銀よりは四匁八分を減ず、故に古

二朱十箇には、十九ヶ餘を作るべく、新二朱百兩を以、百四十二兩餘を作るべし、民を欺き利を貪る、之より甚しきはなし、又曰、已に金の一朱あり、而又二朱銀の利少きを嫌、何の藉にすべきこともなく、又一朱銀を作る、術も亦疎なり、

〔天保集成絲綸錄九十一〕文政十二丑年七月

大目付江

貳步判金通用不足之由に付、去子年より追々吹增被仰付候、然ル處右吹增之分ハ、先達而相觸候通、小判壹步判同樣、金座極印之文字、草字に相直し、是迄之貳步判取交通用いたし候得共、後年に至り、極印兩樣に而ハ、紛敷儀も可有之候に付、今度不殘草字に相直し候筈候間、眞字極印之貳步判所持之ものハ、江戶京大坂其外在々に而、當時吹直金引替御用相勤居候者共之內江差出、引替可申候、尤引替相濟候迄は、是迄之通、眞字之貳步判取交、無滯可致通用事、

一右引替金之儀、草字之貳步判者勿論、小判壹步判壹朱判等を以、引替可遣候、燒貳步判に而も、眞字之極印相分候分者、差出次第、無代ニテ引替可遣候條、其旨相心得早々引替候樣可致事、

右之趣可被相觸候

七月

〔貨幣通考〕按るに、此草字二分金、重サ眞字と同く文金法なり、思ふに其品位は眞字より下れるなり、始め文化十五寅年に、眞字二分を造れる時は八十年來廢絕したることなれば、改鑄之義、通用の滯りを懸念し、未だ決せざりしならん、故に姑く其法を替へ銀料を增加し、二分判を創め、民の視を惑し、舊幣と比較せざらしむ、紀年の記の如き、始めは舊幣に同く、眞體文字を用ゆ、其明年に至り、改幣の議、遂に一決して、舊幣に分たんが爲、草體文之字を用ふ、私に之を聞く、諸有司比日、改鑄之行れ難きを慮り、一人も決然として然りとするものなし、遂に時の執政水野

出羽守、通用滯なきことは、吾斷然として身を以て保つと云ひ、其議始めて決す、此時銀料を加ふること、眞字二分と等しからしめば二分を亦忽ち改鑄するに及ばず、然るを未だ其利の少きを嫌ひ、更に大に銀料を加ふ、於是二分金をも、草體文字紀に改め鑄ること、なれり、小判分判の位已に下り、二分金をも同品たらしめんことは、已に小判分判の改鑄の時に決せり、然も頓に之を言を欲せず、故に其鑿記を小判分判に同じく交行ふこと、姑く令し、以て其時を俟ち、二分改鑄之令を發す、尤老練狡黠と云べし、然も其引替の法に云く、苟も眞文字の記分明なるは、燒殘と雖、無代に而易と、是其金料の差元費を償ひ餘りあれば也、草字の燒金は、工費を償はざれば無代の引替を許さず、之を觀て誰か其利する所なく、唯款識文字の故とし思はんや、覆へば愈顯るもの歟、

〔天保集成絲綸錄九十一〕天保四巳年七月

三奉行江

壹朱銀吹立追々出來ニ付、壹朱金相止候間、持合候ものは、後藤三右衛門役所幷江戶京大坂其外在々ニ而、當時吹直金銀引替御用勤居候者共之內江差出し、段々引替可申候、尤引替相濟候迄者、是迄之通無滯可致通用事、

一右引替金之儀、小判貳步判壹步判貳朱金等を以引替可遣候、燒壹朱金ニ而も、極印相分り候分ハ、無代ニ而引替可遣候條、其旨可相心得候事、

右之趣可被相觸候

七月

〔貨幣通考〕按るに、一朱金、固り當時現行の小判分判よりは品位下れり、其細薄民用に便ならず、天下競々、不便を言ふ、於是其言を幸として、改て二朱金となして、又竊に其品位を下し、以て重

天保金銀

量の利を計る、是の二朱金重サ文政法なれば、一箇重サ四分三厘七毛五餘たり、面は二朱の字あり、背は光次花押のみにして桐章なし、其形は長方、他幣の如く列星周廻す、始造之時は、藥煎の力脱せず、黄色儼然たる金なれども、稍人手を歴るものは、文字等都て高き處皆剝落し、金氣を見ず皎々たる銀色なり、是以て鹵莽の徒は、全く僞金の銀幣なりと云に至る、或は又金幣局の工三右衞門、私意に銀料を增し、官を欺き自ら私利を計れり、故に幣此の如く惡く、彼亦事發覺して誅を受るなど、巷說紛々たり、要之官利多き幣なりと見ゆ、連年鑄造する所夥敷、天下通寶の大半に居るが如し、

〔甲子夜話 二〕是モ亦何レノ時ニカ、十二月廿一日ノ曉前、村松町ノ裏坊失火シ、買屋士宅二町餘モ焚亡ス、此トキ商家ニテ貯シ所ノ寶貨ヲ多ク燒シモノアリ、然ルニ近キ頃改鑄アリシ新金ハ皆銀ニ變ジ、銀ハ銅ニ變ゼシトゾ、新貨ノ位、ソノ工人ハ素ヨリ辨ジタランガ、常人ハ此時ニ於テ、始テ其位ノ原貨ヨリ劣レルヲ知リヌトナリ、

〔貨幣通考〕按るに、文政元寅年より以來十五年にして、現行の金銀皆改鑄し、更に增加の品を加へ、頗る多種たり、此時の通幣數は、元祿寶永の間に過ぐ、一に大判、舊物也、二に小判、三に分判、四に二分判、五に一朱判、六に二朱判、金幣都而六品、而して二分に異草二樣あり、銀は丁銀豆板二朱一朱、都而四品、合して十品、其餘通用停止、天下未だ引替殘りの品、在小判、分判、丁銀、豆板、古二朱銀、眞字二分金等、六品あり、紛々紜々、妄濫甚し、

〔天保集成絲綸錄 九十一〕天保八酉年七月

大目付江

世上通用金、慶長已來、度々吹替に付而ハ、自然金位古今異同有之儀ハ勿論之事に候間、兼而悉最上之位に吹改之御趣意も有之候得共、不容易儀に付、此度慶長金位之通、新規判金吹立、壹枚に付、

金五兩通用之積被仰出候間、銀錢共兩替、小判壹步判二朱金同樣之割合に相心得、無滯可致通用候、

一右五兩判吹立、幷小判壹步判をも位を上げ、吹立被仰付候、右に付而ハ、金子之員數も相減候間、世上融通金相增候ため、小判壹步判共、壹兩に付五分目方を減、吹替被仰付候條、兩替是迄之通相心得、無滯可致通用候、尤引替日限等之儀ハ、追而可及沙汰候、

一貳朱金通用方之儀ハ、是迄之通相心得、且貳步判之儀も壹朱金同樣、追而通用停止可被仰出候間、兼而其旨可相心得候、

右之趣國々江可觸知者也

七月

〔嘉永明治年間錄三〕安政元年七月十二日、五兩判通用ヲ停ム、

〔吹塵錄十八〕天保八酉年十月廿六日水野越前守殿御渡

世上通用之爲、此度位最上之銀を以、新規壹分銀吹立被仰付候間、右壹分銀四ツを以、金壹兩之積、尤銀錢共兩替、貳朱銀壹朱銀同樣之割合に相心得、無滯可致通用候、

一通用銀之儀、此度吹直被仰出候條、兩替等是迄之通相心得、無滯可致通用候、尤引替日限等之儀ハ、追而可及沙汰候、

一貳朱銀壹朱銀通用方之儀ハ、是迄之通相心得、且貳朱銀之儀ハ、無程通用停止可被仰出候間、兼而其旨可相心得候、

右之趣國々江可觸知者也

十月

〔貨幣通考〕按るに五兩判九分位上、小判は三分、位文政より稍よきか、一分判、位重准之、皆保字の

記あり、故に保字金と呼ぶ、小判も目方に減じたれば、形餘程小くなり、長二寸、巾一寸許、正に昔乾字金に同じく、只稍厚のみ、是歳七月中、古幣引替に一分ヅヽの利を與へたるは、已に此改鑄の事決せし故也、文政金にては、如此多く増歩出しては、官利少き故、其事なかりしかども、今度毎兩五分ヅヽ目方を減じ改め鑄る時は、其利大なれば、多く利を與ふることをも惜まざりし也、一分銀は其質純、重二匁三分あり、此頃行ふ所の二朱銀に比する時は、毎兩の重、殆と半ばす、官厚顔、人意の表に出づ、此銀は郭格重雙、郭中散梅花、細工頗る佳なり、銀は品甚下り、銅に稍銀氣あるのみ、久しては銅青色を生じ、一塊石の如し、是亦保字印あり、保字銀とよぶ、

○按ズルニ、此銀其形扁額ニ似タリ、故ニ世ニ額銀額判ナド呼ベリ、

〔明慶錄〕天保十三年六月廿二日水野越前守殿エ伺之上申渡

市中取締掛　名主共

百姓町人共、金銀之品相用申間敷、心得違に而、所持致居候分ハ、其品早々金銀座エ差出、引替可申旨、去る戌年中相觸候處、今以銀喜世留、其外金銀具之品、所持致候もの有之哉に相聞、不埒之事に候、奢侈之風俗をも被禁候上ハ、致所持居候も無益之儀に而、其主人或は出入屋敷より貰受候共、嚴禁被仰出候品に有之上は、素ゟ所持可致儀も無之、譬年來持傳候共、早々其品金銀座エ差出引替可申候、右は先年取集方、掛り名主エ申付置候處、當座之儀に付、今度改而其方共エ掛り申付候間、能々申諭、町人共所持之金銀具爲差出、其方共ニ取集、品柄之儀に付、目方等得と記し置、品持主之名前、別段不及申立候間、直に金銀座エ差出、引替候代金は、品持主共ヘ相渡、座方エ差出候員數ハ、毎月兩御役所月番之方エ相届候樣可致、若申渡候趣不相用、隱置不差出族有之候ハヾ、早々申立候樣可致候、

寅六月廿二日

○按ズルニ、農商家ノ金銀器ヲ括收スルノ令ハ、昔ヨリ幾度トナク發セラレシト雖モ、多クハ其効ナカリシニ、此時ハ水野忠邦ガ庶政ヲ改革スル勢ニ乘ジテ斷行セシカバ、江戸ノ商民、其令ヲ奉承シ、名主ヲ經テ金銀座ヘ差出シ、通貨ニ引替タル其代價、凡ソ貳拾六萬餘兩ニ及ビシト云フ、但シ他ノ國々ノ事ハ詳ナラズ、

〔吹塵錄十八〕天保十三寅年八月六日水野越前守殿御渡

文政度已來、金銀吹直被仰付候處、當時保字金銀、壹分銀、貳朱金等を以、專世上通用に被成置候、右に付而ハ、文政度之文字金銀、草字貳歩判、貳朱銀、壹朱銀等、此度不殘通用停止被仰出候間、其旨相心得、凡古金銀是迄停止之品共所持致し候ものは、多少共有體ノ員數銘々ゟ書付、其筋江可差出候、○下略

○按ズルニ、此ニ至テ、文政中ニ造出セシ金銀ハ、悉ク停止セラル、其通行年數、近キハ十年、久シキモ二十餘年ニハ過ザリキ、

〔牧民金鑑十五通用金銀〕天保十三寅年八月七日水野越前守殿御渡

文政度以來、金銀吹直被仰出候處、當時保字金銀、壹步銀、貳朱金等を以、專世上通用に被成置候、右に付而ハ、文政度之文字金銀、草字貳分判、貳朱銀、壹朱銀等、此度不殘通用停止被仰出候間、其旨相心得、凡古金銀是迄停止之品共所持致シ候者ハ、多少共有體之員數、銘々より書付、其筋ヱ可被差出候、數度引替之儀相觸候得共、今以引替殘り之高不少候ハ、畢竟金銀持囲候餘力有之候者共品位宜と存じ候方を寶と致し隱置候故に候哉、人情におゐて、無謂事にハ無之候得共、心得違に而候、金銀は世上通用を以寶と致し候事故、品位何程宜しき金銀たりとも、既に停止之上は、持囲候者、一己之寶と致候迄にて、世上一同之寶には不相成候、公儀御製作、世上之寶たる品を、一己之私を以寶と致し、持囲ひ隱置候ハ、心得違に而、觸渡之趣を背、罪科不輕義に有之、世上之爲、品々御改

安政金銀

正被仰出下之筋に相成候儀は相厭候樣之御趣意に而、誠に難有御時節之處、一己之迷により、違犯之罪科に陷り候者も有之候而ハ、其節に至り後悔致し候而も無詮、不便之儀に付、兼而諭示し候是迄之停止、此度より停止之金銀共、速に觸書に應じ、銘々持囲候員數、有之儘書出候ハ、自己之冥加を辨へ、觸渡相守、奇特之段可被賞候、若此上通用之義理を不顧、一己私情之迷を不悟、有之儘不書出、此上猶隱置候ハヽ、取上之上、嚴敷咎可申付候、此旨能々相心得、違犯致間敷候、

右之趣、諸國御代官御預所諸奉行所、私領は國主領主地頭より、不洩樣爲觸知、停止之金銀、所持之有無吟味致し、所持之者は爲書出、御勘定所エ右書付可差出候、引替遣方之儀は、御勘定奉行可申達候、若持隱之吟味不行屆、等閑之儀も有之においては、面々可爲越度候、

右之通可被相觸候

八月

〔金銀御吹替次第三編二〕正月〇安政元年十九日石河土佐守殿より御觸書

此度世上通用之ため、南鐐上銀を以、壹朱銀吹立被仰付候間、右壹朱銀十六を以、金壹兩之積、尤銀錢共兩替、壹分銀同樣之割合に相心得、取交通用可致候、右南鐐壹朱銀之儀、金同樣通用之ため被仰付候間、無滯可致通用候、尤通用日限等之儀者、追而可及沙汰候、

右之趣國々江可觸知もの也

十二月〇嘉永六年

〔貨幣通考〕按るに、是銀重五分、面一朱銀、背銀座常是の四字あるのみ、以南鐐十六換小判壹兩など云文なし、

〔嘉永明治年間錄五〕安政三年六月三日、新金貳分判吹立、同月廿八日より通用初る、

〔吹塵錄十八〕安政六未年五月廿四日太田備後守殿御渡

世上通用之ため、此度貳朱銀吹立被仰付候間、右貳朱銀八ツを以、金壹兩之積、尤壹分銀、壹朱銀は、追而吹直し可被仰出候得共、夫迄は取交、銀錢共兩替無滯可致通用事、

一小判壹分、此度吹直被仰付候條、兩替之儀は是迄之通相心得、金銀取交可致通用、尤通用日限之儀は、追而可及沙汰候、

一保字小判壹分判之儀は、追而停止可被仰出、夫迄之間、保字小判は壹兩壹分、同壹分判は壹分壹朱之積を以、取交通用たるべく候事

右之通御料私領寺社領共、不洩樣早々可觸知者也、

五月

○按ズルニ、當時外交ノ事頻ニ起リ、我國ノ舊制ニ從フトキハ、百事扞格スルコト多ク、就中最モ不便ヲ感ズルモノハ貨幣ノ制ナリ、故ニ首トシテ變更アリ、右二朱銀ハ重サ二匁三分、大サ往時ノ南鐐銀ノ如シ、

〔金銀御吹替次第三編三〕六月〇安政六年朔日御觸書御廻狀ニ而後藤より到來〇中略

大目付江

此度吹立被仰付候、新小判、壹分判、貳朱銀共、六月朔日より通用可致候、尤有來候金銀取交、請取方渡方兩替共、無滯通用可致候、

一保字小判、壹分判は、新小判、壹分判、并貳分判、貳朱金取交引替候筈ニ候條、別紙名前之者方江、追追差出引替可申事、

一武家其外共、町人江相對ニ而申付、右名前之者方江差出、爲引替候儀も勝手次第ニ候事、

一新小判、壹分判、同貳朱銀兩替ニ付、切賃之儀、諸金銀同樣相心得、取遣可致事、

五月

〔吹塵錄十八〕安政六未年八月十三日

此度洋銀同位之銀を以、壹分銀吹増被仰出候間、在來壹分銀取交、無滯可致通用候、

右之趣可被相觸候

八月

○按ズルニ、此壹分銀ハ、洋銀ヲ鎔シテ造レルモノナリ、製作ノ粗ナルコト、古來貨幣中、未ダ曾ヲ有ラザル所ナリ、

〔金銀御吹替次第三編四〕四月〇萬延元年三日御觸書銀座より到來朱座江順達

御勘定奉行江

此度大判吹直被仰付、是迄大判者引替、當四月十日より兩替屋共江可相渡候間、獻上幷被下物、其外同日より可相用之事、

但新大判壹枚、貳拾五兩之積、兩替之ものども歩金多く取べからず、

一是迄之大判壹枚ニ付、新大判壹枚江、増歩三拾兩相添引替遣候間、聊も不貯置、別紙名前之方江差出引替可申事、

一唯今迄通用之大判者、當四月十日より通用停止之事、

右之趣國々江も可觸知もの也

閏三月〇別紙略

〔金銀御吹替次第三編四〕四月〇萬延元年十日御觸書銀座より到來米座江順達

御勘定奉行江

此度吹立被仰付候小判、壹分判、貳分判、貳朱金とも、四月十日より通用可致候、尤有來金銀取交、請取方渡方兩替共、無滯通用可致候、

一保字正字小判、壹分判、幷貳分判、貳朱金共、新小判、壹分判、貳分判、貳朱金ト引替候筈ニ候條引替御用相勤候もの共方江差出引替可申候、

一武家共外共、町人江相對ニ而申付、引替御用相勤候もの方江、差出候儀も勝手次第ニ候事、

一新小判、壹分判、貳分判、貳朱金共、兩替ニ而切賃之儀、前之通相心得、取遣可致候事、

四月

御勘定奉行江

保字金、正字金、步增被仰出候割合を以、此度新小判、壹分判吹立、貳分判、貳朱金共、吹替被仰付候間、新小判、壹分判、壹兩六拾目之積、貳分判、貳朱金之儀も同樣相心得、兩替無滯通用可致候、

一正字小判、壹分判、是迄之貳分判、貳朱金共保字金同樣、追而停止可被仰出、夫迄之間、取交通用たるべく候、

右之趣御料者御代官、私領者領主地頭より、不洩樣可被相觸候、

四月

古事類苑

泉貨部五

金銀貨中

分銅

古事類苑

泉貨部五

金銀貨中

〔永祿已來出來初之事〕秀吉御代之事

一金之千枚分銅

〔當代記六〕慶長十三戊申年十月

東山大佛、來年可被立トテ、金子ヲ自秀頼公被出、是ヲ大御所ヨリ被請取、又大御所ヨリ此代ニ被出兵粮、其外モ秀頼公ヨリ金銀材木被調、此タメニ黃金ノ千枚吹ノフンドウヲ江戸ヘ被下、於江戸是ヲ板金ニ吹ケレバ、右ノ內卅四五枚不足ト云々、

〔增補金銀錢譜〕慶長十四年、右府秀頼、洛東大佛像再興アリ、營監ハ長臣片桐市正且元、及雨森出雲守ナリ、誠ニ無雙之大營タリ、依之四國鎭西中國ノ諸侯、工匠ノ粮米二萬石、或ハ五千石、三千石、大坂ヘ運送シ其資用トナス、洛陽ニ於テ、石河三右衞門、饗庭民部ヲ以テ、太閤秀吉、聚斂ノ黃金千枚分銅ヲ潰シ、後藤德乘ニ課セ、大佛資用ノ爲ニ大判トセラル、德乘分銅一ツヲ鑄潰ス時ニ、金目ヲ減ジ、大判九百五六十枚トナル、追日大判若干出來ルト云々、

〔武德編年集成八十六〕元和元乙卯年五月廿八日、台德公二條ノ城ヘ渡御、藤堂和泉守、井伊掃部頭ガ兩年ノ戰功ヲ賞セラレ、太閤秀吉ノ儲ヘ置ルヽ、金ノ法馬(フンドン)(俗稱千枚分銅)各二ツ宛ヲ授ケラル、

〔貨幣秘錄〕金銀分銅之事

萬治二年己亥正月、金銀分銅を鑄て、非常御備金に除置かる、行軍守城用、勿ㇾ作二尋常費一、萬治二年正月吉日の銘あり、是より前、明暦三年丁酉正月、御本城炎上之後、燒爛金銀を以、分銅に鑄立べしとの儀によりて、此年於二三之丸一此擧あり、金分銅貳拾程、四拾壹貫目より四拾四五貫に至る、此內金分銅七ッ、此目三百拾貫九百目餘、延寶四年丙辰、慶長金に吹直さる、此代金五萬七千八百兩餘、金分銅拾、此目四百三拾八貫百目餘、天和元年辛酉、慶長金に吹直さる、此代金七萬六千百六拾兩餘、此他巨細の事、記載慥かならずして今知るべからず、當時奥御金藏に存する物、金分銅三、位三十五匁、銀分銅五、位欠、

金目四十四貫六百五十目　同四十三貫三百目　同四十二貫四百目

合金百三十貫三百五十目

銀目四十四貫七百七十目　同四十四貫六百三十目

同四十三貫九百八十目　同四十三貫三百五十目

同四十三貫五十目

合銀二百十九貫七百八十目

寛政五年癸丑八月、金銀分銅を鑄る、征伐軍旅用、勿ㇾ爲二尋常費一、寛政五年癸丑八月吉日の銘有、筆者御勘定吟味役佐久間甚八、彫工後藤四郎兵衞、當時奥御金藏にあり、五ッ〇金分銅位五十二匁より三匁五分、銀分銅一ッ、〇中略

天保十三年壬寅十二月、金銀分銅を鑄る、藏充二軍資一、泰平寶傳、天保十三年壬寅五月吉日の銘あり、筆者御勘定奉行岡本近江守忠成、彫工後藤四郎兵衞なり、金分銅三ッ、位五十三匁五分、銀分銅二十三、〇下略

〔折たく柴の記 中〕神祖の御時、黄金千枚宛を以て、大法馬をつくられて、行軍守城之用、莫ㇾ作二他費一、

と銘せられしもの、候なるを承りぬ、是等の物いかに候やらんと申すに其年をも問はせ給ひしに、それもたゞひとつ二ツをとゞめおかれて、其餘は皆々新金の料となされしと申す事なりと答らる、

〔吹塵錄九〕奥御金藏御有高

天保八酉年以來

金四拾三萬八千兩〇中略

一金分銅　八　　金目三百三拾七貫五百五拾目

一銀分銅　六　　銀目貳百四拾九貫八百八拾目

外當時蓮池御金藏ニ有之、追而奥御金藏江可相納分、

一金分銅　三　　金目百貳拾三貫九百五拾目

一銀分銅　二十三　　銀目七百貳貫四百七拾目

〔國家金銀錢譜〕此度被仰付候金銀大分銅金ハ四拾四貫七百目銀ハ四拾七貫三百目

元來三拾枚被仰付置候所、中比十七枚失付、此度十五枚被仰付候、當時九枚出來候由、〇圖略

代々後藤四郎兵衛作之

享保年中被仰付候由

〔三貨圖彙附錄一〕度量衡考云、宋依開元通寶造錢定秤、元明亦倣此製、以爲造錢之則、所謂積十錢重一兩、同於今秤、明今秤一錢之目、昉於開元錢、其輕重無差可知トアリ、是十錢積テ重一兩トハ、開元ノ定也、仍今秤ノ目一文目ハ、開元錢二文ノ量目ナリ十文目ヲ一兩トスル事唐ノ制ニシテ、則開元錢ヲ法トス、今後藤家ニテ造ル分銅十匁ハ、銘ニ一兩トアリ、百目ハ十兩、五百目ハ五十兩トアリ、皆唐ノ制ニヨル歟、右分銅ノ制、何レノ世ヨリ起ルト云コトヲ不知、

沙金

〔貞丈雜記十五鳥目〕一古は物の代物にも進物にも、鳥目ばかり用ひし也、大判小判小粒など、云物、古はなかりし故也、銀も今の丁銀はなかりし也、金は砂金とて、金山より金をほり出し、白き石に取つきてあるを石を打くだき、水に入ゆりて砂をゆりすて丶、金ばかりをえり取て、いまだ吹たてずして、すなの如くなるを袋に入て進物にしける也、舊記に、砂金何兩と云は秤の量目也、○中略古は砂金も黃金も、常の進物にはなし、まれの事也、

〔多識編一金〕沙金、美豆乃那加乃須那加禰、

〔經濟纂要前集五〕金銀品　麩子金、寶貨辨疑、碎屑如麩片、出湖南高麗山中、沙金、乃麩金之屑、如沙細者、

〔佐渡志一食貨〕金

慶長ヨリ元和ノ初メ迄ハ、筋金ヲバ竹流トイフ物ニナシ、砂金ハ拾ヒタルマヽ紙ニツヽミテ、四匁五分ヲ一兩、四拾五匁ヲ一枚ト定メ、各運上ニモコレヲ供セリ、○中略年ヘテ後延享四年丁卯、寬延元年戊辰、砂金ノマヽ關東ニ納メシメタリシガ、其後ハマタ吹成シテタテマツルコトニナリタリ、

〔金銀私考〕諸國金山より出候生金の儀は、何方より出る金にても、石中に交り有之候間、打碎き粉に致候て、水にゆすり分る處、則砂金也、是往古目方を分つ丶み候て通用仕候、是金の位に上下は無之、一統に交りなしの正金にて御座候、其後板金に相成、切り候て通用致候事に相成候、右砂金に鉛を加へ寄せ申候て、夫より吹分け鉛をぬき燒鍛候、通用金には其儘相用不申、其上銀を少し加へ相用申候、尤板金にも銀少し入候哉、其段は往古の事故、相知不申候、先年戸隱山より出申候辨定と申印御座候金は慶長金よりも五變倍も金位宜く候由申候へば、定て入候事至て少しの事と被存候、

〔金銀圖錄五尙古品〕砂金

古ヘ黄金若干兩ト云モノハ、砂金ナリ、砂金ニ二品アリ、水沙中ニ自然ト生ズルモノ有リ、礦石ヲ碎キテ粉砂トナシ、水ニ淘リテ成モノアリ、其ニ山出シノ生金ニシテ、冶錬ヲ歷ザルモノナリ、佐今渡ニテ、西三河ト云處ニ砂金山アリ、砂山ノ中ヨリ自然ノ金砂出ヅル也、砂山ヘ流チ畑リテ水チ流シ、子コゲト云布チ底ニ敷ク、沙金ハミナ子コダヘ殘ル也、又相川ノ濱ニ寄ル砂金ハ、金山ノ碎チ屑チ海ヨリ打揚グルナリ、濱川流シト云カニテ金ヲ採ルナリ、是ハ自然ノ砂金ニハ非ズ、其砂ヲ目方ヲ掛テ包ミ分ケテ通用セシ事也、恐○近藤守重南部ノ沙金ト、蝦夷ハボロノ砂金ヲ收貯ス、其ニ水沙中ヨリ出ルモノ也、唐山ニ之ヲ麩金糠金ト云、○中略

砂金ハ紙ニ裹ミ、袋ニ入テ用フ、○中略天正十六年四月、聚樂行幸ノ時獻品ニ、黄金五百兩砂金袋ニ入テト、天正記ニ見エタルハ、豐鑑ニハ五十兩、多門院日記略、太閤記ニハ、百兩ニ作ル、砂金ナルヤ錬金ナルヤ今知ベカラズ、近世用ル砂金裹ト云モノハ、小判金十兩ヲ木形ノ香合ノ如キモノヽ中ヘ入テ、其上ヲ色々ノ紙ニテ包ムナリ、其圖左ニ出ス、○圖上篇ニ見ユ、又今俗間ニ茶巾餠ト云アリ、砂金餠ノ誤ナリ、今川大雙紙ニ、シヤキントヲカシハ、コガチヲツヽム樣ナリ、橘ノ如シ、是ハ包メヲ、クヒキツテ、クフベキナリト見ユ、竹流ト同ジク、古雅ノ菓子ナリ、

砂金一裹ノ目方何ホドナルヤ、錢何貫ニ當ルヤト思ヒシニ、京都將軍家ノ時ノ諸書ヲ參考シテ、初テ其說ヲ得タリ、砂金一裹ハ十兩ナリ、十兩ハ代二千疋ニシテ、錢二十貫ニ當ルナリ、康富記ニ、文安六年四月宣下ノ時、祿物砂金二十兩二裹、納宣旨筥被下之云々、祿物砂金十兩一裹、納筥蓋被下之、コレ一裹ハ十兩ナリ、親長記ニ、文明五年十二月、御元服ノ時各給祿、砂金十兩、但代二千疋被出之云々、コレ十兩ハ二千疋ニ當ルナリ、小槻記ニ、一名晨興記文明七年四月宣下ノ時、內記恩祿、沙金一裹、代二千疋云々、副使千疋被下云々、文明九年正月、敍品宣下時、祿物マタ同ジ、略之、コレマタ一裹ハ二千疋ニシテ、親長記ノ十兩二千疋ト云ト合セ考ヘテ、彌其證ヲ得タリ、近世用キラルヽ砂金裹十兩一裹ナルモ、コノ遺制ナルベキナリ、是等ニ據レバ、當時砂金一兩錢二貫文ニ當ルナリ、○中略今松前ノ俗、往時

ノ遺法ナリトテ、砂金一兩ヲ丁錢四貫三百二十文ニ當テ、砂金一匁ヲ丁錢六百文定價トス、又甲州ニテ、今金一兩ヲ四拾八匁ト定ム、是モ砂金ノ遺制ナリト云、然ルヤ否ヲ辨ゼズ、甲州ノ砂金ハ、今巨摩郡保村ヨリ出ル、則兩畑ノ金山ト隣リ、駿州梅地金山ノ後ニアタル、砂金若干兩ヲ賜ト云コト、國史ニ比々ト見エ、モトヨリ賞賜ニ充シナリ、東鑑ニ、正治元年、賜砂金廿兩以下祿ト出タレバ、此頃砂金若干ト云ヲ以テ、賜賚ノ準トナセシナリ、

〔大安寺資財帳〕合金伍佰貳拾壹兩壹分〇中略

砂金幷消金六十一兩三分佛物沙金卅八兩一分、通物沙金六兩三分、通物消金十六兩三分、

〔續日本紀孝謙十八〕天平勝寶二年三月戊戌、駿河國守從五位下楢原造東人等、於部内廬原郡多胡浦濱獲黃金獻之、練金一分、沙金一分、於是東人等賜勤臣姓、

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜七年四月壬申、御前殿賜遣唐使節刀、〇中略賜前入唐大使藤原朝臣河清書曰、汝奉使絕域、久經年序、忠誠遠著、消息有聞、故今因聘使、便命迎之、仍賜絁一百匹、細布一百端、砂金大一百兩、宜能努力、共使歸朝、相見非賒、指不多及、

〔續日本後紀仁明五〕承和三年四月壬辰、天皇御紫宸殿、賜餞入唐大使藤原朝臣常嗣、副使小野朝臣篁等、〇中略賜大使御衣一襲、白絹御被二條、砂金二百兩、副使御衣一襲、赤絹被二條、砂金百兩、各淵醉而罷、

〔三代實錄陽成三十二〕元慶元年十二月八日甲戌、先是太宰府言、資財蕃客遣唐使留置進上等四箇帳、貢綿千一百五十二屯、徒積庫底、將致腐損、請相轉砂金五百七十二兩、以爲永貯、至是許之、

〔三代實錄陽成三十六〕元慶三年十月十三日己巳、勅令太宰府庫物之代、砂金六百三十三兩、水銀百七十五斤、注附官帳、先是府司申請、每唐人來、易貨物直、借用庫物、交關畢後、以砂金進官給綿、總計返納、其砂金一兩、充綿十六屯、絹一匹充綿十四屯、府司不能勸却、行來尙矣、今當交替之日、新司論曰、物非其

實、相違官帳、仍不受領、而太政官去年八月四日符、只免唐人崖鐸之時、返上砂金三百六十一兩、望請准據彼例、被許注帳、從之、

〔延喜式 二十三 民部〕交易雜物

下野國 砂金百五十兩 陸奧國 砂金三百五十兩

〔扶桑略記 二十四 醍醐〕延長七年九月十七日、左大臣 ○藤原忠平 子息四人、共於法性寺、設五十賀齋會、○中略 大娘宮君諷誦、砂金百兩納銀壺、裹青朽葉紗、附五葉松枝、

〔貞信公記〕天慶十年 ○天曆元年 三月十六日辛丑、中宮御八講始、 十八日、今日捧物銀甚多、百餘寶又口者侑侍誦經、砂金百兩、入瑠璃壺、

〔日本紀略 十三 後一條〕寬仁元年七月廿日丙辰、播磨國捕進前攝政家 ○藤原道長 砂金盜人、去月廿七日夜、入彼家倉町、盜取砂金千三百餘兩銀等、隨身件砂金等、

〔小右記〕長元二年九月五日庚申、前陸奧守孝義、志砂金十兩、金粒太不似例金、加鷲尾、尾隨身壺胡籙料也、孝義云、此砂金者異例金、不可被充用雜之事、若有御用者、今十兩可志者、

〔續古事談 一 王道后宮〕後一條院、ヲサナクオハシマシケル時、傳大納言 ○藤原道綱 參テ、御前ニ候テ、金百兩ナゲチラシタルヤ御覽ジタル、イミジク興アル物也ト申サレケレバ、イマダミズ、イカナルゾト、被仰ケレバ、大納言マコトニオモシロキ物ナリ、御覽ズベシトテ、ヲノコドモメシテ、ヲサメ殿ノ砂金百兩タテマツレトアリケレバ、藏人トリテ參タルヲ、ヒキアケテ御前ニナゲチラサレタルヲ御ランジテ、イヅレオモシロキト被仰ケレバ、大納言サラバステ候ナントテ、ヒキツヽミテ、フトコロニ入テ、イデラレニケルトゾ、

〔古事談 二 臣節〕俊明卿 ○中略 造佛之時、薄料ニトテ、清衡令獻砂金云々、彼卿不請之、卽返遣之云々、人問子細、答曰、清衡令押領王地、只今可謀反者、其時ハ可遣追討使之由可定申也、仍不可請之云々、

〔古事談〕（四勇士）宗形宮内卿入道（師綱）陸奥守ニテ下向時、基衡押領一國、如無國司威、仍奏聞事由、申下宣旨、擬檢注國中公田之處、忍郡者、基衡藏于先々不入國使、而今度任宣旨、擬檢注之間、基衡件郡地頭大庄司季春ニ合心禦之、國司猶帶宣旨、推入之間、已放矢及合戰了、守方被疵者甚多シ、基衡カクハシツレドモ、背宣旨射國司事依恐存、招季春云、依無先例、雖追返國司、背宣旨之條、非無違勅之恐、イカヾスベキト云々、季春云、今仰兼皆存知事也、主君命依難背、於一矢者射候了、然者君者不知食之體ニテ、召某頸可被遣國司之許也、其上ハ定無爲候歟云々、（○中略）基衡季春ヲ惜テ、我ハ不知之樣ニテ、猥構女人沙汰之體、再三遣妻女於國司館乞請サセケリ、其請料物、凡不可勝計、沙金モ一萬兩云々、守不耽之、遂切畢云々、師綱高名在此事歟、（○又見十訓抄）

〔古事談〕（五神社佛寺）園城寺鐘ハ、龍宮鐘也、昔（時代不分明、可尋記、）粟津ニ有男、號粟津冠者、武勇者也、建立一堂、欲鑄鐘、爲尋鐵下向出雲國、（○中略）龍王甚安事也トテ、龍宮寺ニ所釣之鐘ヲ下テ與之畢、歸粟津所建立堂（廣江寺）也、事移時變、件寺破壞之後、纔住持之法師一人爲鐘主、而去年比鎭守府將軍清衡施砂金千兩於寺僧千人、其時三綱公某乞集五十人之分、以五十兩金、給廣江寺法師、是件鐘主法師成悅賣件鐘畢、上座不廻時刻、招寄寺僧等、終夜顚來畢、所釣園城寺也、件廣江寺天台末寺也、後日衆徒漏聞此事、搦件鐘主法師、不日令入湖云々、

〔古事談〕（六亭宅諸道）平等院寶藏ニ、水龍ト云笛ハ唐土ノ笛也、唐人渡此朝之時、於海中船欲沈、舟人等奇之、種々ノ財物ヲ令入海ニ皆以不沈、仍入件笛之時卽沈之、無爲著岸之後、本主沙金千兩ヲ儲テ、龍王ニ相傳ヘントて、欲入於海之時、件笛ヲ買取給テ令籠寶藏給云々、

〔古今著聞集〕（四文學）仁平の頃、宋朝商客劉文冲、東坡先生指掌圖二帖、五代記十帖、唐書九帖、名籍をそへて宇治左府（○藤原賴長）に奉り、返事は文章博士義明朝臣草して、前宮内大輔定信ぞ淸書したりける、尾張守親隆が奉書にて書たりける、砂金卅兩を給はせけり、又要書目錄をもつかはしけり、

〔源平盛衰記三十三〕賴朝征夷將軍宣附康定關東下向事

兵衞佐賴朝、上洛不輙トテ、鎌倉ニ居ナガラ征夷大將軍ノ宣旨ヲ被下、〇中略左史生康定、此院宣ヲ賜テ、九月四日關東ニ下著、兵衞佐ニ奉院宣、對面シテ勅定之趣ヲ申含、〇中略サテ宣旨ヲバ、誰シテカ可奉請取ト評定アリ、三浦介義澄ト被定、〇中略三浦荒次郎義澄ト名乘儘ニ、宣旨奉請取、良久アリテ覽箱ノ蓋ニ、沙金十兩入テ返ス、

〔源平盛衰記三十四〕公朝時成關東下向附知康藝能事

壹岐判官ハ、是ヲバ角トモ不知シテ、兵衞佐殿〇源賴朝ニ、法住寺ノ合戰ノ事申ン爲ニ、鎌倉ヘ下向、佐殿ハ是ヲ聞給テ、侍共ニ、知康ガ云イレシ事不可執次ト誡仰ラレケレバ、知康近習ノ侍ト覺シキ者ゴトニ、ウデクビ把テ、ヤヽ申候ハン〳〵ニト彼此ニ云ケレ共、誰モ聞入ル者ナシ、日數モ積ケレバ、侍ニ推參シテ候ケリ、兵衞佐ハ簾中ヨリ見出シテ坐シケルガ、子息左衞門督賴家ノ、未ダ少ク十萬殿ト申ケル時、招寄給テ、アノ知康ハ、九重第一ノ手鼓ト一二トノ上手トキク、是ニテ鼓ト一二ト有ベシトイヘトテ、手鼓ニ砂金十二兩取添テ奉リ給タレバ、十萬殿是ヲ持テ、簾中ヨリ出テ、知康ニタビテ、一二ト鼓ト有ベシト勸給ケレバ、知康畏ツテ賜テ、先鼓ヲ取テ、始ニハ居ナガラ打ケルガ、後ニハ跪キ、直垂ヲ肩脫テ樣々打テ、結句ハ座ヲ起テ、十六間ノ侍ヲ打廻ツテ、柱ノ本ゴトニ、無盡ノ手ヲ涌シ躍ラシタリ、宛轉タリ、腰ヲ廻シ肩ヲ廻ラシテ打タリケレバ、女房男房心ヲ澄シ、落涙スル者モ多カリケリ、其後又十二兩ノ金ヲ取テ云、砂金ハ我朝ノ重寶也、輙ク爭カ玉ニ取ベキト申テ懷中スル儘ニ、庭上ニ走下テ、同程ナル石ヲ四トリ持テ、目ヨリ下ニテ片手ヲ以テ、數百千ノ一二ヲ突、左右ノ手ニテ數百萬ヲツキ、樣々亂舞シテ、ヲウ〳〵音ヲ擧テ、ヨク一時突タリケレバ、其座ニ有ケル大名小名興ニ入テ、エッポノ會也ケリ、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年六月廿三日壬寅、今日大慈寺郭內、新造精舍安二丈六供養也、〇中略導師、南都東

北院僧正圓玄、呪願助僧正嚴海、導師布施卅物又法服横皮香爐宮壷裝束等也、此外自二大相國禪閤一被物百重、鞍馬十疋、加布施銀檜扇、置二砂金百兩一、

〔集黄記〕寛元四年五月十四日辛未、今日有二御受戒事一、〇中略事訖賜二布施一、沙金一裹、三兩、置扇、自二簾中一被レ出レ之、前内侍取傳了、

〔五代帝王物語〕文永七年十月七日、法皇〇後嵯峨龜山殿にて、宸筆の法華經を供養せさせおはしまして、五ヶ日の御講を行はる、土御門院の御菩提のため也、〇中略御方々の御捧物、まづ内裏の御分は、頭辨資宣朝臣もつ、砂金を宿紙につゝみて、柳筥に居られたり、

〇按ズルニ、增鏡ニハ、内の御さゝげ物は、かみやがみに、かねをつゝみて、柳筥にすゑて、頭辨ぞ持たるトアリ、

〔太平記三十一〕吉野殿與二相公羽林一御和睦事

憂カリシ正平六年ノ歳晩テ、アラタマノ春立ヌレドモ、皇居ハ猶モ山中ナレバ、白馬踏歌ノ節會ナンドハ不レ被レ行、寅ノ時ノ四方拜、三日ノ月奏計有テ、後七日ノ御修法ハ文觀僧正承テ、帝都ノ眞言院ニテ被レ行、十五日過ケレバ、武家ヨリ貢馬十匹、沙金三千兩奏二進之一、其外別進貢馬三十匹、卷絹三百匹、沙金五百兩、女院皇后三公九卿、無レ漏方引進ラス、

〔鹿苑院殿御元服記〕應安元年四月朔日

禁裏進物事、後日有二其沙汰一被レ進レ之、

砂金百兩、兩分本法、銀折敷、

〔駿府政事錄三〕慶長十八年十月六日、南部信濃守利直、從二奥州一參著、則出二御前一、獻二砂金百枚一、

〇按ズルニ、東照宮御實紀ニ此文ヲ引キテ、砂金千兩トセリ、佐渡志ニ、砂金ハ四匁五分ヲ一兩トシ、四十五匁ヲ一枚ト定ムル由見エタレバ、一枚ハ十兩ニシテ、百枚ハ即チ千兩ナリ、

〔台記〕久安四年九月一日丙戌、獻銀四十兩南廷、於南圓堂、

〔倭名類聚抄十一 寶貨〕銀　爾雅云、白金曰之銀、宜珍反、其美者曰之鐐、力彫反、和名之路加禰、

〔下學集中 器財〕南鐐○爾雅云、銀美者謂之鐐、說文曰、白金也、鐐力彫反也、

○按ズルニ、南鐐ノ南ハ、毛詩魯頌泮水ノ篇ニ、大賂南金トアルヨリ出デシナラン、支那ノ南方荊州楊州ノ邊ヨリ出ヅルト云フ、

〔沙石集六下〕正直之人得寶事

近年歸朝ノ僧ノ說トヤ、或人語シハ、宋朝ニ賤シキ夫婦アリ、餠ヲ賣テ世ヲ渡リケリ、有ル時道ノホトリニシテ餠ヲ賣ケルニ、人ノ袋ヲ落シタリケルヲ見ケレバ、銀ノ南挺(ナムチヤウ)六有ケリ、

〔七十一番歌合中〕卅一番　銀ざいく

なんりやうのやうなるかねかな

〔塵添壒囊抄九〕閻浮檀金事

閻浮檀金、軟挺(ナンリヤウ)ナンド云ハ、何金ゾ、常ニ軟挺ト書共、猶南鐐ヲヤ善シトスベキ、只銀ノ上品ナルヲヤ、

〔好古日錄〕南廷

南廷古書ニ散見ス、余其價ヲシラズ、近日久安二年四月廿二日禮單ヲミル、進上銀南廷貳、直六百匹

〔昆陽漫錄二〕南廷

連山雜抄に云く、沙石集の正直の人、寶を得と云ふ部に、宋朝の物語を引て、人の袋を落したるに銀の軟挺六ありと云ふ、これ今の挺銀なる事疑なし、その頃丁銀を軟挺南挺とも云ふとみえたりと、敦書按ずるに、胡三省が釋文辨誤に云く、今人冶銀、大鋌五十兩、中鋌半之、小鋌又半之也、謂之鋌銀と、今の人とあれば、宋朝に鋌銀あること明なり、

甲州金

〔源平盛衰記十一〕中宮御產事
治承二年十一月十二日、寅時ヨリ中宮御產ノ氣御坐ト聞ケリ、〇中略權亮少將維盛、左中將淸經、越前侍從資成ナド、遣列給ヘリ、御馬十二匹ニ四手附ケ被引立タリ、神馬ノ料ト見エタリ、砂金千兩、南鐐百、御劒七振、廣蓋ニ入テ、御衣二十領相具セラレタリ、

〔吾妻鏡五〕文治元年十月廿日己巳、參河守範賴朝臣、〇中略彼朝臣今夜卽參二品御所申日來事、〇中略唐錦十端、唐綾絹羅等百十端、南廷三十、〇中略同進院之由申之、次別進解文二通二品幷御臺所御方、唐錦唐綾唐絹、南廷十五、甲冑弓、八木大豆等也、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年三月廿七日甲午、將軍家〇宗尊親王御吉事有露顯之義、相州以下人々布衣下括參候、未剋入御中御所、御直衣頃之有進物、御劒武州、砂金百兩銀鐐置ニ相模太郎殿、南庭同鐐置ニ相模四郎、

〇按ズルニ、德川氏ニ於テハ、二朱銀ヲ南鐐ト云フ、事ハ上篇二朱銀ノ條ニ見ユ、

〔毛吹草四〕從諸國出古今名物聞觸見及類載之、但庭訓用分除之、
甲斐國　甲州判

〔甲陽軍鑑十八〕山縣同心廣瀨みしな辻彌兵衞武邊公事の事
信玄公、伊豆韮山へ取詰、あたりの在鄕放火の時、韮山の城のおさへに、山縣三郎兵衞罷有、城より備を出してせりあひ有、此節山縣あまりに競かゝつておしこむ故、引取事成かぬる、敵出てくひとむる時、三河牢人に河原村傳兵衞、白き四方に船の字を黑〃書て差物にして、返して鑓を合、敵をおつちらしのく程に、六度迄鑓を合する、彼傳兵衞が振舞は、信玄家にても餘多有間敷とて、信玄公のたまふは、賞功不踰時とありとて、則傳兵衞を被召出、御盃を給り、御腰物を被下て後、當座の褒美として、碁石金を、信玄公の自身兩の手に御すくひなされ、三掬(すくひ)、彼河原村傳兵衞に下さるゝ、

〔常憲院殿御實紀五十四〕寶永三年七月廿九日、松平〇柳澤美濃守吉保に、封内〇中略甲斐にて金を鑄るこ

とをゆるさゞる、

〔秦山集雜著甲乙錄八〕甲斐出沙金、或在島、或在澤及河、拾貯之、以沙金通世用、武田全盛時、甲府民松木七左衞門、買沙金送之他國、與甲府所之相貿易、依此信玄始命七左衞門、作甲府判一分判以下也、小判無之、一分判重一錢、三銖判重七分五釐、二銖判重五分、一銖判重二分五釐、凡四等形皆平圓、有細魚子、一分判圓徑三分許、厚分半、有壹分松木四字及極印、三銖以下毎等差小而字印皆同、松木七左衞門仕御當家、今子孫爲勘定及稅官者多、七左衞門子亦名七左衞門、仕駿河大納言家、給仕度支雜用、御本丸後藤上御服、駿河家七左衞門上御服、一族多仕大納言家、大納言家亡後隱居甲斐、今復仕御本丸及甲府君、或改氏野田、竹村、細田、細井、今至四世云、此甲申春松木氏所書與昔尹也、

〔國家金銀錢譜追加〕甲斐國は甲金と號し、今以碁石金あり、一國通用にて、他國へ不出、金の位は至て宜、目方は三四段も有ものなり、古甲新甲と號し二品あり、右古甲は位宜、新甲は少し劣れり、慶長以來、小判一步判となりて、小判は飯櫃形にして、步判は角にせし事なり、

甲州金　文金壹兩に付、錢六貫文位也、甲金壹兩は八貫文餘の替なり、尤定りたる事なし、信玄代の金は古〻甲と唱、至て位よし、今は拂底なり、裏形信玄代 ⌂山下 甲府宰相綱重公代 ⌂重 松平美濃守吉保代 ⌂定、

〔昆陽漫錄三〕甲州金

一老人の云く、古き甲州金に、竹流シ金、鳥目金、六角極印小判あり、

竹流金長さ二寸七八分、横八分ほど、厚さ中にて三分ほど、緣にて一分ほど、長きは幅狹く、短きは幅廣し、重さ四十目十兩と云ひて通用す、形圖の如し、○圖略 中の極印は、極の字、上下の極印は見えがたし、

鳥目金、重さ一匁一分と云ひて通用す、極印なし、形圖の如し、○圖略

六角極印小判、重さ四匁、形圖の如し、○圖略 表に六角の極印あり、上の六角の内に桐あり、下の六角

の内に菊あり裏極印なし、

甲州金、甲州略記に載すれども、其後此說を聞くゆゑこれを記す、この三金いまだ見ず、

〔甲斐國志國法二〕甲州金

一甲金ハ其始詳ナラズ、武田氏治國ノ例ニヨリ、至今一國限リ通用免許ナリ、（但都留郡ハ自古不通用○中略）古甲金數品ノ內、古品モ有ナラン、年代前後考知リ難シ、金座役人ハ、古金ニ國字、吉字、極印、又金字、吉字ヲ並押タル有リ、未考、山下氏志村氏ハ由緖聞シコト無シ、野中新兵衞ト云者文書三章、山梨郡室伏村市右衞門藏之、然ドモ傳ハリタル家乘ナシ、松木源十郞ハ、中郡筋宮原村ニ住ス、苗字帶刀ナリ、府中柳町ニ、屋敷一所拜領地ヲ有セリ、其先松木了存、紹哲父子、天正壬午後、府中檢斷ヲ役シ金座ヲモ兼帶ス、野田氏同流ニテ、本州ニ舊キ吏人也、其頃、武田家申樂大藏大夫ガ子大藏藤十郞者、神祖ニ召出サレ、金礦ノ事ヲ申立、大ニ蒙君寵、大久保十兵衞ト改名シ、後ニハ石見守ニ遷任ス、伊奈備前守二人、御分國中租稅ヲ司ドリ、金山一式ハ、大久保十兵衞奉之、然シテ本州武田以來ノ金座役人、幷金山係リノ者、此時皆々御差止ニナリ、大久保一人ニ任セラルト云、慶長十八年、大久保ガ奸曲發覺シ、被刑ニ及デ、再ビ松木五郞兵衞ニ被命、所藏文書ニ所見卽是ナリ、五郞兵衞ハ紹哲ナリ、其子柔、役金座者稱五郞兵衞、慶安承應ノ頃、御代官ヲモ兼役セリ、元祿古甲金ノ時マデハ、灰吹下金ノ有合次第ニ建御吹所、松木數代勤極印事ユヱ、甲金ノ品多シ、且時々ノ小印ヲ加ヘ、品類ヲ分クルモ有トナン、其後ノ御吹所モ、皆松木ノ極印ナリ、御吹所ハ府中佐渡町ニ御用地アリ、大久保ガ時、佐渡國ヨリ召金工、此處ニ置キ吹金ユヱ、町名ニ呼云、後遂ニ例トシテ、御吹所ヲ建ルニ此處ヲ用ラル、松木所藏慶長中ノ文書三章アリ、（共ニ後ニ記ス）今摹寫スル古甲金、都テ一百餘品、世ニ所存甚稀ナルヲ以テ、一二藏ムル者モ他見ヲ慳ム故ニ、其名ハ記セズ、皆就テ所見ナリ、異品ニシテ通用ニハ非ジト見ユル者、未視其金モ、好事家ノ眞寫セル者ハ倂記之、其品目方ノ不分明アリ、必

シモ其品類ヲ盡セシト云ニハ非ズ、漏タルモ猶多カルベシ、常時ノ通用スル所ハ、甲重甲定二品同位ニシテ、各壹分判、貳朱判、壹朱判、朱中判、四等ナレドモ、貳朱以下本無數ナリシ故ニ、今漸ク少シ、

加藤遠江守印書一章　室伏村市右衛門藏

當國黃金かけ之事、如先規不可有相違者也、

天正拾九　六月廿三日　光泰印

野中新兵衛

淺野左京大夫長繼印書二章　同人藏

覺

一金壹兩者　京目　五拾枚出目

一金四兩貳分壹朱　爲中目　貳百枚之出目

合五兩貳分貳朱壹厘五者、爲中目ニ延引請取候也、

文祿五　正月廿八日　左京

野中新兵衛殿

覺

一金子貳兩壹朱者　爲中目

右者百枚之内にて出目金也

文祿五　二月十二日　左京

野中新兵衛江

慶長中ノ印書三通　松木源十郎所藏

急度申候、したかねはいふきの儀、最前は一圓御法度之儀に候へ共、松木五郎兵衛壹人には御ふかせ可有之、爲其申遣候、恐々謹言、

七月廿一日

後庄三郎光次花押
成隼人□　花押
前帶刀直次花押
村茂助直元花押
大石見長安花押
本上野正純花押

櫻井安藝殿
小田切大隅殿
大野主人殿
平岡岡右衛門殿

覺

急度申入候條、其元之金子、碁石にてまね判多候間、のし金に江戸小判のごとく可仕由御意に候、金二三兩のし候はゝ、右之分に致して被懸御目尤候、恐々謹言、

正月十一日

後庄三光次花押
成隼人□　花押
大石見長安花押

松木五郎兵衛殿

覺

急度申遣候條、去年其地より納候、江戸判金、皆々諸代官衆へ御返し被成候、其方判に極べく由御諚候間、其分御心得尤候、金之くらゐ能候由御意候間、彌々被入念肝要に候、恐々謹言、

九月三日　成隼人正口花押

松木五郎兵衛殿

〇中略

青木敦書ガ昆陽漫錄ニ載ス、老人云、甲州金ニ竹流シ金、鳥目金、六角極印ノ小判アリ、〇中略按ニ本州金トスル明證モ無カルベシ、敦書ハ元文庚申、使シテ本州ニ來リ、奉使小錄、甲州略記ナド云册子ヲ著ス、其中ニ甲金ノ事、松木源十郞ガ出セル書ニ、灰吹、碁石金、延金、繩目金ト記セリ、今再問之ニ甚詳ナラズ、又甲金吹出總高ト云事ヲモ記タレド、自古國忌アリ、松木家ニ秘シテ、甲金員數ハ、曾テ人ニ知サズト聞エタレバ、所記信ジ難シ、定テ相違ノ事アラン、故ニ不擧、又甲州人記シタル書ニ見エタリトテ、附云、甲金ハ正金ヲ鐵炮玉ノ如ニシテ打平メ、其形碁石ニ似タル故ニ名トス、重一匁又四五匁不同ナリ、按ニ甲金ハ、古今共ニ鑄ナリ、古ハ全體ニ鑄付テ、極印ノ打コミナシ、後ハ極印ニテ打ナレドモ、縁繩目ハ鑄付ナリ、末ニ見ニ打平金如ク打延テ切テ遣フ、享保中板金拾枚ホド堀出タルヲ視ルニ、長二三寸四五寸不同ナリ、按ニ板金ハ切金竿金トモ云リ、安永中、東光寺村ニテ堀出シ官ニ上ル、其事ヲ聞タルニ、長短アリ、幅ハ歩金ホドニテ、厚稱之、究テ本州ノ金トモ見エズ、或人云、歩金ヲ造ル料ニ延タル下金ナランカ、左モアラン、松木ガ所ニテ一品ヲ視ルニ、如所言ニシテ、鑿ノ切コミ多クアリ、全下金ナルベシ、古史ニモ砂金トハ見エタリ、切テ通用セシ事ハ明據ナシ、越州鉈切銀ト云類ニハ非ラズ、大鼓判ハ信玄ノ時造ル、重壹匁圓ニシテ表ニ桐、周ニ星七アリ、其後ハ繩目金ナリ、又小判アリ、大如鷄卵、表裏ニ鐫目五筋、表上ニ上ノ字アリ、甲三分ニ遣フ、大鼓判ト云ハ、前ニ圖アリ、周ニ星七ト云ハ、鎔ノ喎ミタルヲ見違ヘタルナラン、繩目ハ諸共有之、小判トハ壹兩判ノ事カ、如ニ鷄卵ト云、三分遣フト云ハ誤ナリ、繩目五筋ト云モ、暇ノ付タル金ヲ見タルナラン、寶暦ノ頃、板垣二中軒ト云僧所錄、甲州記追加ト云書ニ此事ヲ戴タリ、稗說ヲ雜輯タル者ニテ、適從シ難シ、甲州略記ニ、松木所藏文書ヲ視ルニ、甲金數品アリ、壹兩壹分貳朱壹朱朱中等アルハ、神祖ノ御時ニ始ト云、此說宜シカルベシト云リ、慶長中、後藤庄三郞ニ、慶長十巳十二月、小判分金ヲ造ラセラルト云コトヲ臆度シテ云ニヤ誤ナリ、本州

ハ武田制度ヲ循承テ、至今通用ヲ免許セラル、但古文書ニハ、貫文ヲ專用フレバ、金子ノ事ハ所見少ナク、偶所書ハ貫金何兩トアリ、亦何疋ト記シタルハ、貫文ニモ所云ニシテ未分明、天正ノ始ノ大宮神馬奉納記ニ、黃金壹分ト見エタリ、前ニ載ス文祿中淺野ノ印書ニ、貳朱壹朱ト云コトアリ、前所圖八卦壹兩判、志村壹分等ニ、武田家紋ヲ附タレバ、本州ニハ以前ヨリ有之、武田ノ通用ハ、碁石無文ノ金ナリト謂者ハ僻說ナリ、碁石金ハ甲陽軍鑑ニ見ユ、松木藏書ニ、其許ノ金子、碁石ニテ僞判多トアレバ、慶長中マデ通用セシ事明カナリ、又加藤ノ印書ニ、當國黃金掛ケ候事トアリ、淺野ノ印書ニ、金壹兩ハ京目ナリ、五拾枚ノ出目金田舍目ニ廻リ、壹兩貳朱餘ト有レバ、山金灰吹ノ大小輕重定マラザルヲ鑄替ヘ、目方ヲ極タル事ニ聞ユ、野中極印ノ甲金ハ是ナルベシ、但シ黃金掛ケ候事如前々トアレバ、以秤目通用セシ事モ有ル樣ニ聞エタリ、延金ニ如江戶小判トハ、松木ノ大判壹兩判貳分判ノ類ナルベシ、其方判ニ極メ候トハ、松木ノ判金ヲ貢納スルニ、金ノ上包ノ判ヲ被仰付ニヤ、極印ハ以前ヨリ有之、此頃始マルニハ非ラズ、甲府殿及ビ松平甲斐守領分ノ時マデハ、府中ニ金包役人アリ、松木氏判氏ナド見エタリ、御料所以來御差止ニナリ、今ハ於江戶包仰付ラレ、百兩ニ銀五匁ヅヽ公納スト云、

本州ハ銀子ノ通用ナシ、自古銀礦ナキ故也ト云、甲金壹兩ヲ銀四拾八匁ト定ム、前ニ云、壹貫文ニ籾八斗也、六合摺ニテ米四斗八升ニナル、此割合ヨリ出ト云、拾貳匁ヲ壹分トシ、六匁ヲ貳朱、三匁ヲ壹銖、壹匁五分ヲ銖中、七分五釐ヲ絲目、三分七釐五毫ヲ小糸目ト云、小糸目中ト云モアリ、小判ニモ同ク言之、元祿以前ノ書類ニハ間々見エタリ、今ハ糸目ト云ハズ、專ラ端銀ヲ通稱ス、○中略糸目ノ事ハ、其始メ武田時代ヨリ布役トテ、木綿布壹段ニ七分五厘收ム、是ヲ絲目運上ト云フユエニ、七分五厘ノ事ヲ糸目ト云ヒ習ハセリ、七分五厘ノ金子ハ元來無カリシトナリ、慶安三寅年、御代官平岡勘三郎上請ニ依リ、諸運上金トトモニ布役モ赦免ニナルト聞ケリ、亦云、慶長小判拾兩ニ

古甲金ハ拾三四兩餘兩替ナリシ由ナリ、甲重金以來ハ員數少キユヱニ、文字金多ク入交リ通用スレドモ、小判ニ銀六拾匁ト云コトニハ曾テ拘ハラズ、甲金ニ兩替スルニ、文金拾兩ニ甲金九兩替ナラバ、金壹兩此銀四拾三匁貳分トス、（二朱ニ五匁四分）甲八兩替ナラバ、銀三拾八匁四分トス、（二朱ニ四匁八分）甲九兩壹貳分ヨリ七兩前後マデ、時々高下ノ端銀アリテモ、右ノ割合ニテ文金ハ銀札ノ如シ、諸色ノ商買ミナ甲銀四拾八匁ノ通用ナレバ、文金ニ六拾匁ト云フコトハ、聞知ラヌ人多シトナリ、

〔貨幣通考〕甲金篇

天正九年武田氏亡、明年明智光秀之亂、甲亦亂、東照公入甲撫之、甲遂爲我有、

按るに、甲の金幣は、已に信玄の時より盛に行ひしものにして、大なるは重拾貳匁餘、小者重四匁、貳匁、壹匁、五分、貳分五リ、壹分貳リ五毛、其形至圓、薄くして錢の如し、一種碁子の如く、厚くして矮圓のものあり、皆純粹佳品たり、甲の我に歸せし時も其儘行はれ、天正東幣の出來しころも、此國のみは彼金局別にありて、舊製に遵ひ造り、慶長の後も、依舊りて造りし也、

寶永四年、柳澤吉保封甲、改鑄舊幣、謂之甲安、

按るに、慶長以來、百年の間、舊幣行はれ、此時始て改鑄す、其品一分、二朱、一朱、朱中の四品となり、一兩判は止みたり、一分二朱一朱の品は、薄く丸く錢の如し、朱中は小方なり、金品元祿法に准じ、銀料を多く加へたり、

正德四年、柳澤吉里、消寶永金鑄新金、

按るに、寶永の製は、安字の記あり、故に甲安金と呼べり、是回の製は、正保の新金に准じて作りたれば、品位稍舊金より高し、定めて其時兌換の法も、一新當二舊の法を以て引替しならん、是も亦安字の記なれば、今吹甲安金といふ、

享保六年十月、又改鑄而加銀料、

此時の製、全く舊に同じ、品位稍下り、重字の記あり、之を甲重金と呼ぶ、今に至て通用す、

享保十二年四月、增造あり、

此金全く甲重金に同じ、定字の記あれば、之を甲定金と呼ぶ、此時は甲巳に官地に復せし時なり、此後吹替の事なく、今に至る迄通用す、然も漸々減じて、今は（安政の頃）日々民用に供するに非ず、富家寶藏の品となり、唯物價を定て、貿易の數を計るのみ、甲金法を用ひ、賣買通用の貨は、官製の金錢となれり、元祿の八分兩金を二朱判と名づけたるも、甲金に基くものなるべし、海内の帳簿の記、明和二朱の始まらざる以前は、物價も二朱一朱などゝ呼しはなし、故に官簿には、今も一分以下は盡く永法を用ひ、朱の稱あることなし、而して甲の朱金は、昔沙金を行ひし頃よりの通稱なるべし、

〔金銀圖錄（三甲州品）〕（近藤守重）○按ニ、甲金ハ其始ヲ詳ニセズ、武田氏ノ舊制ニ因テ、天正中ニ改造セラレ、今ニ迨テ一國通用ヲ許サル、其金坑ハ、モト山梨郡黑川ニアリ、其金座ハ志村野中山下松木ノ四家アリ、其古金ハ、碁石金、板金、大鼓判、細字金、延シ金、縄目金等、其新金ハ、甲安金、中金、甲重金、甲定金ノ品アリ、其通用ハ壹分判重サ壹匁、是ヲ銀拾貳匁ト定ム、今通用スルモノハ、壹分、貳朱、壹朱、朱中ノ四品ノミ、今採錄スル所ハ、甲金凡壹百三十六品、

古金大判

右大判重サ拾貳匁貳分、背石打無文、製造ノ年歷ヲ詳ニセズ、金質精純、製作古雅、天正以前ノ物ナルコト疑ヲ容ズ、松木源十郎ハ、其先了存、五郎兵衛紹哲ト云、甲州ノ金座ナリ、巨摩郡宮原村ニ住ス、

古金壹兩判

右壹兩判重サ四匁、背石打無文、金位上々、形制精雅、古物知ベシ、

〔吹塵録十二〕明和四亥年

去月廿二日、位改被仰付候、甲金貳拾九品、金座人共相改候處、至而位不同御座候ニ付、凡似寄之位平均仕、左之通積書差上申候、

一古甲金壹分　裏無判　凡五拾四匁位
一同貳朱判　右同斷　同位
一同壹朱判　右同斷　凡五拾貳匁位
一同壹分　裏ニ忠ノ字判有　同位
一同貳朱判　右同斷　同位
一同壹朱判　右同斷　同位
一同壹分　裏ニ安ノ字判有　同位
一石打古甲金壹分　同位
一同貳朱判　同位
一大鼓判壹分　凡五拾三匁位
一細字壹分　凡五拾貳匁位
一壹兩判　凡五拾六匁位
一裏逆桐壹分　凡五拾三匁位
一同小桐　同位
一山下壹分　凡五拾貳匁位
一志村古甲金壹分　凡五拾四匁位

一貳朱中小糸目　凡五拾九匁位

一壹兩判　凡五拾匁位

拾八口合

平均位五拾三匁

右平均五拾三匁位

甲金拾兩　此有目四拾目ノ積

此相當

文字金拾貳兩壹分、永百三拾文餘、

但右甲金文字金ニ吹立、諸入用等引殘候高ニ御座候、

御買上積ニ而は

代文字金拾壹兩、永百八拾文餘、

是者總而下金類、金座江御買上ニ相成候御定法、文字金拾兩ニ付、同位之金目四拾目替之積、但代文字金拾兩ニ付、壹兩永六拾文餘、御益有之、

一甲安中金壹分　凡六拾九匁位

一同貳朱判　凡七拾五匁位

貳口合

平均七拾貳匁

右平均七拾貳匁位

甲金拾兩　此有目四拾目ノ積

此相當

文字金九兩壹分、永四拾文餘、

但出來高之內、諸入用引殘高、

御買上積ニ而者

代文字金八兩壹分、永百四拾文餘、

但御定法四拾目替、御益前同斷、

一今吹壹分　凡百拾匁位

右甲金拾兩　有目四拾目之積

此相當

文字金六兩、永八拾文餘、

但出來高之內、諸入用引殘高、

御買上積ニ而者

代文字金五兩壹分、永貳百四拾文餘、

但御定法四拾目替、御益前同斷、

一甲重金壹分　凡五拾八匁位

一同貳朱判　同位

一同壹朱判　凡六拾貳匁位

一同朱中判　凡五拾八匁位

四口合

平均位五拾九匁

右平均五拾九匁

甲金拾兩　　有目四拾目ノ積

此相當

文字金拾壹兩、永貳百三拾文餘、

但出來高之內、諸入用引殘高、

御買上積ニ而は

代文字金拾兩、永百四拾文餘、

但御定法四拾目替、御益前同斷、

一甲定金壹分　　凡六拾壹匁位

一同貳朱判　　同位

一同壹朱判　　凡六拾貳匁位

一同朱中判　　同位

四口合

平均位六拾壹匁五分

右平均六拾壹匁五分位

甲金拾兩　　有目四拾目ノ積

此相當

文字金拾兩三分、永百貳拾文餘、

但出來高之內、諸入用引殘高、

御買上積ニ而は

代文字金九兩三分、永七拾文餘、

佐州銀

但御定法四拾目替、御登前同斷、

右之通御座候、然ル處右御金一體位不同御座候上、各銅氣強含、殊一種之內ニも位不同相見申候、右ニ付相考候處、是迄銅氣有之儘出來、金ニ用來候程之儀ニ御座候得ば、位之儀も、兼而嚴密極置候儀とは相聞不申候ニ付、此度相改候金之同名目たり共、重而見合候節者、位相違可仕哉難計奉存候、勿論位相違仕候得ば、此度差上候代金積も相當不仕候間、此段申上置候、以上、

亥十二月二日　　後藤庄三郎

〔貨幣秘錄〕佐州印銀之事

元和五年巳來、佐州一國通用のため、初て印銀を鑄る、德通定印の四字、表裏に極印あり、飾師三左衞門造之、元和より正德迄鑄るものを元印銀といふ、元印銀壹匁、錢六拾七文に通用す、正德年間吹直す物あり、新印銀といふ、新印銀壹匁、三拾六文に通用す、一說に、新印銀壹匁代錢四拾八文といふ、寶曆十一年辛巳に至りて通用止む、凡百四十三年、

〔金銀圖錄各四品〕佐渡國上銀〇圖略　位七步半入カ

同上銀一分〇圖略　重サ壹匁

同上元印銀〇圖略

同上元印銀〇圖略

元和五年、佐渡一國通用ノ爲ニ、初テ印銀ヲ吹ク、極印德通定印ノ四字表裏ニアリ、布目形、極印トモ飾師三左衞門造之、上銀ニ八步引ナリ、元和ヨリ正德ニ至マデ吹ク所ヲ、元ト印銀ト云、元印銀壹匁ハ、錢凡六七十文ナリ

同上新印銀〇圖略

正德ニ吹直スモノナリ、寶曆ニ印銀通用一旦停止ソノ後又通用アリテ、寶曆十一年ヨリ通用停止トナル、印銀壹匁ハ錢三十六文ニ通用ナリ、

〔佐渡志 一 食貨〕銀

慶長ヨリ元和ノ初メ迄ハ、此國ノ民ドモ、私ニ金銀ヲ吹テ、物ニ換タルコト前ニ云ルガ如シ、此時ノ銀ヲ笹吹銀ナド云也、又上銀ト云物アリ、委シキ事ハ傳ハラズトイヘドモ、其制圖ノ如シ、略○圖元和五年己未、新タニ一國限リ通用ノ銀八百貫目ヲ造ラレ、印銀ト名ヅケテ、後藤銀ニ並ベ行ハシム、其制大小輕重各均シカラズ、極印ハ德通定印ノ四ツ、中ニモ印ノ字ヲバ處々ニ打タルヲ以テ、印銀トイフナルベシ、位ハ上銀ニ比スレバ、大ニ賤キ物ニシテ、寛永ノ中頃迄ハ、年々ニ作リテ國用ヲ足タリ、其直ハ官ニテ金壹兩ヲ印銀五拾九匁四分ニ換ラレケルガ、市中ニテハ六拾二三匁ニ易ルコトニテ、後正德ニ印銀吹改メラルヽニ至ル迄遂ニカハラズ、此間通用金ノ制ハ改リタレドモ、印銀ヲ易ルノ直ハ舊ノ儘ニテアリシト云ヘリ、初メ相川彌十郎町ニ官局アリ、寛永十九年壬午、官廳ノ園中ニ移ス、正保四年丁亥、火災ノ後、印銀ノ數補ハレテヨリ後ハ、常ニ吹ク事ナク、官局ハ唯出納ヲノミ事トセシト見エ、サテ又後藤銀ニハ、其頃此國ニ居タル庄三郎ガ手ノ者ノ餘業ニ出、極印ト云モノヲウタセシ事記セシモノ往々ニ見エタレドモ、正保二年同四年ノ文書寫イカナル極印ヲカ用ヒケム詳ナラズ、萬治ノ初、錢ノ通用始リ、印銀一匁ヲ錢六七拾文ニ易ヘタリ、世界ニ金銀隱レ、通用ハ彌繁多ナルニ從ヒテ、印銀他ノ國ニ流レ出、又姦民等僞造ノコトアラハレテ、慶安四年辛卯、嚴刑ニ處スル者、大工町八兵衛泉州堺ノ生レ、羽田町清兵衛京ノ生レ、其餘數人ニ及ベリ、此年國中ノ印銀ヲ吹改ラレケルニ、元和寛永ニ造レルハ、夥ク失セタリト見エテ、僅ニ五百八貫五百二拾七匁ノミアリ、餘ハ正保ノ頃造レル所ニシテ、極印ノ文字ノ姿カハレリ、僞造ノ物モ、二百八拾二貫三百九拾三匁九分迄有ケレバ、上銀ヲ多ク加ヘテ、定メノ位ニ歸シタリ、其數多カラムハ、他ノ國ニ溢出ルノ源トモナルベシトテ、總テ千九百貳拾六貫百七拾壹匁二分五厘ニ止リヌ、此時又極印ノ姿ハ替リケルニヤ、布目モ昔ハ無リシト云リ、承應元年壬辰ニモ吹ルヽコトアリタ

レドモ、其制ハ慶安ノ時ノ如シ、正德ノ初メ、重ネテ吹改ラルヽノ事アリ、然ルニ慶安ノ度、二千貫目ニ近カリシ印銀、アヒダ六十年ノ程ニ過半失セテ、國中ニ殘レル所、僅ニ八百二貫四百二拾目九分ヲ官局ニアツム、此度ハ愈位ヲ引下ゲテ、今迄ノ印銀壹貫目ニ、鉛五百八拾目、銅百目ヲ加ヘ、千三百四拾八貫九百九拾四匁ニ吹成ス、此後ハ他ノ國ニ出ルコト自ラ止ミタリ、正德四年甲午ヨリ、金一兩ニ印銀百六拾目、印銀壹匁ニ錢二拾六文ヲ易ヘシメラレシガ、享保三年戊戌十一月、印銀壹匁、錢三拾二文ニナリ、同キ四年己亥十月三拾文ニナル、久シカラズシテ明ル庚子ノ三月、舊ノ如ク二拾六文ニ換ヘシメラル、元文三年戊午、文金通用ノハジメ、此國ニテ印銀ニ易フベキ法則ヲ立ラレムガ爲メ、印銀三百目ヲ江戸ニ出シ、吹試ミラレケルガ、百目ニ上銀三拾六匁三厘餘宛ゾ籠リケル、細カニ議セラルヽコトヾモアリテ、是ヨリ金一兩ニ印銀六拾目、印銀一匁ニ錢四拾八文ニ定リ、寶曆ノ初ニ至リテ金壹兩ニ印銀八拾九匁、印銀壹匁ノ錢ハ、今迄ノ如ク四拾八文タルベシトアリ、其後八九年ヲ過テ、印銀ノ直、公私二ツニナリ、官ニテハ壹匁ヲ四拾八文ニアテヽ出サルヽヲ、市中ニテハ四拾文ニモ易ヘ煩ヒケレバ、忽細民ノ苦シミトナリ、銀山ニ雇ハレテ其日ヲ送ル者ナドハ、殊ニ之ヲ歎ケリ、（カクナリシ事ハ、其起レル由アレドモ、長ケレバコヽニ出サズ、）其事捨置ルベキニアラネバ、同ジキ十年庚辰ノ八月、印銀ヲ廢シテ、金錢ノミヲ通用セムコトヲ關東ニ申ス、然レドモ元和ヨリコノカタ國用ニアテシ印銀、永ク廢セラレンコト、寶貨ノ數ヲ減ズルニ似テ惜ムベキコトナレバ、今ヨリ其直ヲ卑クセラレテ、官ニテハ元文ノ前ニ復サレ、壹匁ヲ二拾六文ニアテヽ出シ入ラレ、私ノ通用ハ、民ノ心ニ任セテ高下スベキニナリ、人皆欣ブコト限リナシ、明レバ十一年辛巳、遂ニ印銀ヲ廢セラレ、文銀ヲ用ヒラルベシトテ、銀座（常是）ノモノドモ來リ居ケルガ、寬政ノ初メ、コレモ止ミニケリ、今金銀山ノ鏈代トイフ物、印銀ヲ以テ唱フルコト殘レリ、又浦々番所ニテ、他ノ國ヨリ來レル商物、其品ニ從ヒ、入役トイフヲ納メシムルニ、壹匁トイフハ錢

雜金銀

五拾壹文八歩四厘ナリ、是モ印銀ノ時ノ遺法ニシテ、錢四拾八文ヲ壹匁ニアテ、ソレニ外八歩ノ入目ヲ加ヘタルナルベシ、

〔金銀圖錄目錄一〕卷四　各國品

山城國堀川小判金　同上銀　山城小判銀　同上
河內小判銀　和泉國堺小判銀　攝津國多田鉸銀　尾張國那古屋小判金
同上津島小判金　駿河國今川永四貫小判金二品　同上永貳貫小判金
相模國大礒小判金　同上小田原小判金　同上北條小判金　同上小田原菱小判金
同上銀二品　同上菊小判銀六品　同上笹小判銀　武藏國辨定小判金
上總國東金小判金　下總國千葉壽命小判金二品　同上小安小判金二品
常陸國水戶松岸小判金　同上土浦小槌小判金　近江國戶笹小判金
同上江津川桐小判金　飛驒國梅鉢銀　信濃國善光小判金二品　上野國吉豆小判金
陸奥國永字小判金　同上定字小判金二品　同上分銅金　同上分銅半小判金二品
同上松島小判金　同上津輕弘前切銀　同上津輕尾太銀　松前小判金
出羽國月山小判金　同上赤西小判金　同上秋田小判銀　同上窪田切銀
同上橫手切銀　同上角館切銀　同上佐竹花降銀　土佐國小判金
越前國蔦小判銀三品　加賀國小判金二品　同上梅鉢小判銀　同上花降銀拾兩
同上花降銀壹兩　同上花降銀三品　同上花降銀壹枚　同上花降銀壹兩
同上花降銀拾匁　同上上字竿銀　同上圓銀　同上南鐐一分
同上壹分銀　同上切銀　同上挺銀　同上花降切銀
同上古極印切銀二品　同上シブ銀　同上蝶銀　越後國高田小判金

同上圓小判金
同上越座小判金 同上切銀
同上長岡寛字切銀 三品
同上村上永字銀
同上新潟榮字切銀
同上寶字切銀
同上シカミ切銀
同上長字玉字極印切銀
同上嶋田德字極印切銀
同上柏崎永字極印切銀
同上糸魚川切銀
佐渡國上銀
同上壹分銀
同上古印銀
同上新印銀
美作國二菊小判銀
同上壹分銀
長門國萩判銀
丹波國亀山小判金 二品
同上鬼ヶ城切銀
但馬國小判金
同上南鐐小判 二品
同上小判銀
同上壹兩小判銀
同上南鐐 四品
同上小玉銀
同上道津銀
因幡國甚兵衛極印切銀
同上壹丁目切銀
同上定字銀
伯耆國常是極印小玉銀
出雲國木爪判切銀
石見國挺銀
同上御公用切銀
同上天又一切銀
同上山口余極印切銀
同上御藏灰吹銀
同上細銀 三品
同上分判
筑前國博多御公用銀
肥前國長崎伊藤小判金
對馬國高木握小判銀

通計一百三拾五品

巻五　尚古品

金丸
砂金 二品 砂金嚢圖附
竹流金
印子金銀 三品
上字古金
雁古金
同上
上字古金
ヒルモ金
玉子小判金
甲子小判金
牛舌大判金 三品
角判金
日良判金
大枝小判金
朝鮮大判金
同上小判金
同上半小判金
同上銀
壽永小判金
大塔宮小判金
大平小判金
正門小判金
赤松小判金

正長小判金
同上銀
上字小判金
澤潟一分銀
袋一分銀二品
南鐐判
和同壹分銀
通計七十三品

卷六　玩賞品

九重小判金
桐大判金
御所雛小判金二品
壽雛小判金
雛小判金
雛板銀
女院小判銀
同上桔梗
同上雌
同上卯
同上未

高來小判金
三浦小判金
南鐐大判
菊桐南鐐
菊一分銀
銀小判
梅村銀
女院雛小判金
雛判一兩金
往古雛小判金
雛小判銀
橘姫大判金
菊寶小判金四品
同上花成銀
同上菊
繪十二支小判金子
同上辰
同上亥

風戸小判金
平田小判金
尊氏小判銀
南兩一分
桐一分銀二品
銀壹分
銀一分十五品
女院小判金
同上銀
雛丁銀
福壽小判金
同上銀
菊小判金
花降小判金梅二品
雛小判金雌
同上酉
同上巳
巴大判金

湊小判金二品
桐小判金
乙良判銀
銀一分
寶一分銀
南銀壹分
女院大判金
桐大判銀
桐雛小判銀
雛小判銀
福寶雛判銀
桔梗小判金四品
同上櫻二品
同上銀
字十二支小判金子
同上午
巴小判金二品

花一歩金　花壹分銀　玉屋小判金　大黒福字小判金
同上德字小判金　稻荷福字小判金　稻荷壽字小判金　元文稻荷小判金
翁小判金　鶴千代小判金二品　同上銀　龜萬代小判金二品
同上銀　福引小判銀

通計七十品

〔金銀圖錄一凡例〕正用品ノ外ハ、制造ノ事歷ヲ詳ニセザルモノ多シ、其名疑ベキモノト雖モ、姑ク舊號ニ從テ之ヲ記ス、秀衡大塔小判ノ如キ、甚謂レナシト雖モ、今妄ニ臆斷ヲ以テ舊名ヲ易フベカラズ、凡正品ハ、必金色醇古ニシテ、制作精雅ナリ、上字金、雁金、甲古金、謙信丸小判ノ如キ、問ズシテ眞品ナルコトヲ知ル、各國品ノ內、筑前公用石州其他ノ切銀、加州花降銀ノ如キ皆同ジ、又太平土浦辨定、及ビ壽永大塔定字諸品ノ如ハ、疑ベキコト有ト雖モ、其金色制作ニ至テハ、一種ノ見ベク喜ベキモノ有リ、古人何ノ故ヲ以テ、是等ノ金幣ヲ如此精造セシヤ、嘗テ聞正德中改貨ノ頃、世ニ古金ヲ欣賞スルコト流行シテ、其時ノ假作スルモノ少シトセズ、今愚ガ見ル所ハ製作拙ナリト雖モ、古色隱然トシテ自ラ上品ニ見エ、眞正ニ疑ヲ容ザルモノ有リ、又一種制作巧ナリト雖モ、鑿痕新ニシテ、自ラ下品ニ見エ、一目シテ假作ト知ベキモノ有リ、銅質鍍金ニシテ、中古近古ノ時代差等ナキモノ有リ、是ミナ後人ノ古圖ヲ以テ摸造假作スル所ナリ、タトヘバ壹兩ノ二字ヲ以テ鑑定スルニ、其品ハ時代異ニシテ、壹兩ノ二字ノミ同刻印ヲ以テ打モノ有リ、東金、松岸、赤松、河內、湊、玉屋小判ノ類是ナリ、其太閤小判、異品永四貫、菱小判ノ如キハ、最モ拙ナルモノナリ、又其品ハ異ナリト雖モ工匠ノ手癖同ク見ユルモノ有リ、津島永久井翁等ノ小判是ナリ、或ハ背文ヲ誤寫シテ面ニ移スモノ有リ、異品善光小判是ナリ、

〔金銀圖錄四各國品〕愚〈○近藤守重〉按ニ、足利家ノ季世ヨリ慶長ノ前後ニ迨マデ、各國各自ニ金銀幣ヲ造

ル、蓋往昔陸奥下野對馬ノ金、對馬伊豫肥前ノ銀ノ如ハ、國史格式ニノセ、佐渡ノ金ハ宇治拾遺物語ニ見エテ、越後ノ謙信、ソノ金ヲ採テ國用ヲ足、慶長六年ニ至テ大ニ盛ナリ、石見ノ銀ハ、大内介弘幸ニ始リテ、天文二年、義興ノ時、銀ヲフク事ヲ得、ソノ後尼子毛利互ニ権據ス、是モ慶長六七年ニ盛ナリ、但馬ノ銀ハ、延喜ノ時ニ聞エテ天文ノ頃、山名氏ヨリ織田家ニ至テ、始テ多ク出タリ、伊豆ノ金銀モ、慶長十一年ノ頃ヨリ多ク出タリ、元祿以前マデハ攝津豐後薩摩加賀出羽ヨリ金銀ヲ出シタリ、今ハ佐渡ノ金銀、石見陸奥ノ銀ノミ多シ、

〔金銀圖錄各國品四〕陸奥國永字小判金一名秀衡小判

重サ四匁、金位中ノ下、此金厚クシテ肉アリ、相傳フ秀衡ガ所造ト、疑クハ臆説ナラン

〔金銀圖錄古品五〕竹流金

一友嘗テ竹流金ノ斷片ヲ藏ス、竹ヲ剖テ金ヲ鎔シ流シタルナリ、使用ノ時ハ秤ニ懸テ切シナリ、或ハ云、織田氏ノ時ノ物ナリト、豐臣氏ノ時ノ記錄ニモ、竹流ノコト往々ミエタリ、靜庵隨筆ニ、大坂ノ竹流ハ、大方金五兩ホドヅヽアリシトナリ、今モ佐渡ニテ小判ヲ製スルニ、筋金ヲ竹流ト云ニスルナリ、津輕ニ今竹流ト云菓子アルモ、此遺制ナルニヤ、

〔續近世畸人傳四〕小萬女〇中略

思孝云、予が志れる老婆、其番袋と、銀の竹ながし三筋と、手箱一ッを傳へ持たりしが、天明の火に燒失たり、今は此調度につきて、常にかたりしまゝを書つく、又銀の竹流といふは、細き針がねのさまして八寸ばかり有、鋏にて切て用るもの也、蒿溪云、おのが部族の家に傳へもちたるは、針がねよりはやゝ平めにして、たけも定らず、通稱はさをがねといふよし、形のかはれるも有にや、近世の小玉銀など用るごとくながら、是は心にまかせて切用となん、刻印などはかつて見えず、今よりいへば質樸なるものなり、

〔佐渡志 一 食貨〕金

慶長ヨリ元和ノ初メ迄ハ、筋金ヲバ竹流トイフ物ニナシ、〇中略各運上ニモコレヲ供セリ、竹流ノ制、他ノ國ニモアリケルニヤ、コヽノ物ハ長サ六寸バカリニ延テ、重サハ三四百目アリシトイヘリ、元和年中文書寫

〔武德編年集成 六十五〕慶長十九年十月五日、京尹板倉伊賀守ガ驛次ノ飛檄到來シ、大坂城ニ於テ、故太閤ノ千枚分銅ト稱スル金ヲ以テ、四十八文目宛ノ竹流判ト云ヲ拵ヘ、諸國亡命ノ徒、或ハ庚子ノ亂、落魄ノ士ヲ募リ求ルコト頻ナル由注進ス、

〔武德編年集成 六十七〕慶長十九年十月、大坂ニテ、故太閤ノ收斂シテ置レシ千枚分銅ハ勿論ナリ、城中金熨斗付ノ座席モ打放シ、小川七郎右衞門ヲ奉行トシ、掛目四十三錢目宛ノ竹流金ヲ拵ヘサセ、是ヲ以テ募リ求ム、〇下略

〔紀伊國物語 上〕日向半兵衞、其外誰々伺公ノ節、大坂ニハ何者カ居候ト御尋也、日向半兵衞申上ルハ、墓々敷役ニ立者ハ無御座候、方々ノ集リ浪人ナドニ候ヘバ、何モ竹流ノ金子ナドヲ能ホドニ取リ、大方走リ候ハント批判仕事ニ候ト申上レバ、以ノ外御意ニ不入御叱リ被成故、御前ヲ罷立ツ、暫有テ日向ヲ召サセラルヽニ付、偖ハ御成敗ニモ合候カト存、脇指ヲ置、オジ〳〵罷出ケレバ、存ノ外御機嫌ヨク、御側近ク召サレ被仰聞ハ、大坂ノ者ドモガ、竹流ヲ取テ走ラント云批判ガ敵エ聞ユレバ、氣ガ付テ人質ヲ取故ニ、御合戰御勝ニ御手間モ入ル也、將軍樣御爲ニ惡キ儀ヲ申ニ付、御シカリ被成タル也、乍去昔モ左衞門尉ナドノケテハ、加樣ノ考ハ不知ジト御意ノ由、

〔おきく物語〕田中意德池田家の醫師なりの祖母は、大さかにて、よど君につかへし人にて、名をきくとぞいひける、落城の日、元和元年五月七日ながつぼねに居申候、〇中略やう〳〵城外へ出申候處に、竹束有之候得共、武者も居不申、又城中城外等にも見えが、ゝりには手負等も見え不申然る時竹束の陰より單物

一ツ著たる者、さび刀を拔もちて來り、金にてもあらば出せよといふにより、懷中に、竹流し二本持て有しを出し遣す、（一本七兩貳歩に當るさ云）

〔金銀圖錄 五 尙古品〕金丸 ○圖略

重サ三匁三分、相傳フ昔時沙金ノ散失シヤスキヲ以テ、吹テ顆塊トナスモノナリト、疑クハ即チ碁石金ナランカ、又按ニ、和漢三才圖繪ニ、鈑一名餅金、俗云、金丸也、用砂金安於鑪上積炭燒之、則金沙徐集爲玉、而生文理、コレ所謂金ノマルガセナルモノ歟、再按ニ、金山ニテ吹目ト云モノ則是ナリ、今藥金ニ砂金ト呼モノモ、又是ヲ用ユルナリ、

ヒルモ金 ○圖略

寛政七年三月、越後國蒲原郡水原市北二町計リ千苅ト云所ニテ、古金七枚ヲ堀出ス、形圖ノ如シ、

○圖略 金色上、重サ壹匁九分ト壹匁七分アリ、

右上ノ字金、重サ拾八匁九分、雁金重サ三拾八匁四分、共ニ俗ヒルモ金ト名ク、形眼兒菜ニ似タルヲ以テナリ、金位上ノ上、金色甘黃蒸粟ノゴトシ、面槌目背石打ニシテ、鏨ヲ以テ上ノ字雁金ヲ刻ス、古色藹然トシテ、其鎌倉前後ノ物ナルコト、鑑定ヲ待ズシテ知ベシ、天明六丙午年閏十月、（一說寛政元酉年四月）越後國刈羽郡五日市村ノ農夫、地ヲ堀テ古金十五枚ヲ得タリ、形ミナ同ジ、大小半楕アルノミ、其刻記ハ上ノ字十ノ字ト雁金ナリ、其二枚ハ圖ノ如シ、○圖略 其十三枚ハ、一ハ重サ三拾八匁四分、一ハ重サ貳拾六匁、一ハ重サ拾八匁、二ハ重サ拾九匁、一ハ重サ拾三匁七分、一ハ重サ拾八匁八分、一ハ重サ三拾壹匁六分、一ハ重サ拾五匁五分、一ハ重サ貳拾四匁四分、二ハ重サ拾三匁、一ハ重サ貳拾九匁五分、

牛舌大判金 ○圖略

右重サ拾貳匁貳分、金位下、其餘ノ如シ、其牛舌トハ、形ノ似タルヲ以テ名ク、此金制創ヲ詳ニセズ、

愍嘗テ加賀ノ人ニ聞ケリ、云フ其國民間、秋成ノ躍歌ニ、八島クドキト云アリ、其句ニ牛若コロシテ、牛ノ舌、大判小判ツカミ取リ云々ト、然レバ往時普通ニ用ヒシモノト見ユ、疑クハ此金加賀ノ制ナランカ、

壽永小判金〇圖略

重サ五匁、金位上上、雅古醇龍喜ベシ、或ハ云、壽永中造ル所、或ハ云、北條泰時所造、何ノ據ヲ知ラズ、

〔石川正西聞見集坤〕太閤の御時代迄、すながね、ごいし、はづしかね、國々より京へ持のぼり、銀子にかへ申候に、兩替師共、くろき石に金をすり付、色を見て、南鐐がへと、ねだん不同に申候儘、殊の外手間入、諸人迷惑仕候、

〇按ズルニ、德川幕府ノ寶藏中ニモ碁石金アリ、寛文元年七月天守金銀帳ニ、碁石金百五十八、大小六百五十目トアル是ナリ、

〔昆陽漫錄三〕寛字銀

或人越後國長岡にて、先年行使する寛字銀を惠む、形圖の如し、〇圖略

越後の老人の云く、越後にて通用せる銀は一ならず、長岡にては寛の字を打ちたる銀を使ひ、長岡にて吹くは、銀の位立しからず、新潟にては榮の字を打ちたる銀を使ふ、新潟江屋吹と云ひて、銀の位上品なり、圖の如し、〇圖略其外高田等にて使ひたる銀は形象を覺えず、寛字銀榮字銀も、大抵厚さ二分ばかりに長く吹き、ごく印を打ち置きて、通用の時に望みて、大小意に任せて切りて通用せり、故に里言に鉈切銀と云ふ、元祿九年の秋、越後國諸の銀の通用停止せられて後は、今に至るまで變じて越後國は金使ひとなれりと、敦書按ずるに、中古金を切りて使ひし事は、人口に膾炙すれども、銀を切りて使ひしことはいまだ聞かざるところなり、さて今の佐渡銀もこの遺風なるべし、佐渡銀の外にあることを聞かず、越後の鉈切銀は、佐渡銀に倣ひていたるなるべし、東鑑に切錢と云ふことありて解せ

ず、これにて見れば弘長の頃、民間にてひそかに銅を薄く長く吹さて、切りて錢となして通用せしにや、

〔昆陽漫錄二〕花降銀

俗說辨に、花降銀の圖を載す、敎書元文中、花降拾兩とある銀を見るに、俗說辨の圖と大樣相似たり、按ずるに、室町殿の末より慶長の頃まで、專ら此銀行はれしにや、金銀行使の法國々一ならずして、花降銀を鑄て行ひし國もありとみゆ、

〔金銀圖錄四各國品〕同上〇加賀國花降銀拾兩圖略〇

右銀重サ四拾三匁、位一割入カ、恐〇近藤守重按ニ是加賀利長卿ノ時造ル所ナリ、一說ニ、鎌倉ノ時ノ物トスルハ、無稽ノ臆說ナリ、下ニ見ユ、又按ニ花降トハ、上銀ノ品位ノ名ナリ、嘗テ銀山ノ人ニ聞ケリ、云、凡銀ヲ吹ニ灰吹ニテ鉛氣ヲ吹ヌケバ、其色變ジテ飜(ヒツクリカヘル)轉スルガ如ニ見ユ、是ヲ銀匠ノ語ニカブリト云、水ヲ濺テ餠ト爲ス則ヒノシタ、花降、シイワ、三等ノ品位ニ分ツ、ヒノシタハ正白ニシテ光ナシ、花降ハ光澤アリテ、顏面ニ細小ノ花紋ヲ斑現ス、シイワハ皺紋アリテ紫紺色ヲ顯ス、所謂カブリハ唐土ニ云竄飜ナルベシ、

同上花降銀壹兩圖略〇　重サ四匁三分

同上〇圖略　重サ四拾三匁

同上花降銀壹枚圖略〇　四方耳極印アリ

右花降銀、重サ四拾三匁、加賀利長卿ノ時造ル所ナリ、金屋彥四郎、淺野屋治郎兵衞ハ其時ノ銀座ナリ、昆陽漫錄ニ、是ヲ謂テ室町ノ季世ノ物トナシ、金銀圖錄ニ、會津ノ物トスルハ、サラニ無稽ノ臆說ナリ、

〔安齋隨筆後編三〕一古花降銀と云物あり、圖は俗說贅辨に見えたり、方二寸ばかりにて、端に星形

迹り、面に花降の二字あり、是通用する銀にあらず、古代は錢ばかり通用して、金銀は只器物などの飾に用る計也、進物抔にはする也、近年或人云、出羽國の金山見物に行たる時、銀を鑄るを見しに、銀鑄る者、此銀を花降にして御目に懸べしとて、手に水を付て盪したる銀の面に水の滴をふれば、其滴の痕付て、落花の散かゝりたるが如しと語りし、其語りし人、兼て花降といふ事をば知らぬ人なりし、其語にて花降といふ名を辨得たりと、土州の儒官谷氏の談也、

〔當代記 六〕慶長十二丁未年四月廿五日、當年は于レ今船不レ渡、是は通事、去年唐船頭ニ告テ云、船多渡海之間、糸日本ニ多シ、今年又猶著船ハ、糸可レ爲二下直一ト云々、依レ之不レ來歟、但大御所ヨリ印。子一萬御誂ト云々、印子一ツト云ハ、或ハ百目、或ハ百五文目有レ之ト也、印子一ツヲ銀一貫四百目程ノ直ト也、印子一萬ハ、銀一萬四千貫目之價歟、モトヨリ唐人ハ銀ヲ吹直シ、銅交ヲ皆吹捨、本々ノ銀迄ヲ取、此度大御所命ニハ、不レ吹シテ丁銀ヲ可レ取由宣フ、是唐船ノ者共不快ト云々、

〔東武實錄 二十八〕寛永六年九月二日、公〇德川家光土井大炊頭利勝ガ家ニ來臨アリ、〇中略猿樂四番過御成、書院ニ於テ御膳ヲ獻ズ、三獻ノ時、公ノ御盃ヲ賴房卿ニ賜リ、其盃ヲ公メシアゲラレ、大炊頭利勝是ヲ頂戴ス、時ニ御脇指大內正宗黃金五十枚、小袖五十、利勝ニタマハル、其盃メシアゲラルヽノ時、大刀正恒刀正宗緞子五十卷、印。子金。二十。九。利勝是ヲ獻ズ、

〔金銀私考〕金位極上々を印。子と申候、是は隨分度々鍛拔候、廿五位より上の金にて御座候、

〇按ズルニ、廿五位トハ廿五雙ノコトナリ、

〔夢溪筆談 二十一 異事〕壽州八公山側土中、及溪澗之間、往々得二小金餠一、上有二篆文劉主字一、世傳淮南王藥金也、得レ之者至多、天下謂二之印。子。金。一是也、

〔經濟纂要前集 五〕石州銀

倭使小西飛來議二封事一、時以二京營將佐楊貴綠一爲二館伴一、小西飛餽楊、有二私覿之禮一、如二刀盒之類一、一猶二常見一、

惟銀錢多作人馬之狀、更有銀一片、形類橡桑、厚二分、長七寸許、中有一脊、陽凸陰凹、兩旁斜鑿數槌、酷似葉瓣、側有一印、長寸餘、隱起三字、曰石州銀、皆中國字、惟州字斜飛耳、鹽邑志林

敦書按、國史及諸書載、我國白鳳中、初造銀錢、○中略 天正年中、造大橢金小橢金、大橢金、今謂之大佛大橢金、小橢金、世謂之天正金、慶長四年、始鑄方金、今謂之大坂方金、六年後、改造大橢金小橢金方金鋌銀銀豆、然天正十三年、豐閤白、頒賜金銀於諸侯卿大夫、金五千枚、銀三萬枚、我國大橢金鋌銀皆以枚稱意橢金鋌銀、已流行于世、十六年更鑄、蓋十三年頒賜之銀、疑此石州銀也、

〔金銀圖錄四各國品〕石見國挺銀○圖略

重サ四十三匁、背石目、愚○近藤守重按ニ此銀朝鮮征ノ爲メニ造ラレシナルベシ、○中略

同上御公用切銀○圖略

此銀文祿二年ニ吹トコロ、下ノ筑前博多銀ト合セテ其全體ヲ見ベシ、愚按ルニ石州銀山舊記ニ云、天文二年大內義興、銀山ヲ領スルトキ、筑前博多ヨリ壽亭ト云モノ來テ、初テ鏈ヲ吹鎔シ、銀ヲ成スコトヲ出仕セリ、是ヲ銀吹ノ始トス、永祿中、毛利元就、銀山ヲ取ル、天正中、太閤ヨリ上使近實某、毛利家ヨリ三井某ヲ以テ、銀山ヲ奉行スト云々、此銀必是朝鮮征ノ爲メニ造ラレシナルベシ、寶貨事略ニ云、石見國ヨリ黃金ヲ出セシコト其始ヲ知ラズ、慶長六七年ノ間ヨリ出ル事多クナレリ、程ナク金ヲ掘ルコトヲ止メラレキ、

同上天又一切銀○圖略

同上山口余極印切銀○圖略

同上御藏灰吹銀○圖略　位一割入カ

同上細銀○圖略

此銀正用品中ニ載スル、太閤軍用金ト云モノト略似タリ、○圖略　重サ九分、○圖略　重サ六分、或人云、此

外國金銀

石州エギレ銀ナリト、然レドモ金銀錢譜ニ、エギレ銀ハ灰吹ニテ耳ウスク、中厚ク細長クエギレノ魚ニ似タル故ニ云ト、是ト同カラザルニ似タリ、

同上分判〇圖略

〔好古日錄〕灰吹銀

灰吹銀ノ行用、四百年來諸記ニ散見ス、永享二年八月記、鈴鹿某云、灰吹銀五十目、錢壹貫文ノ價也、

〔金銀私考〕生銀の事、山より出申候を灰。吹。と。申。さら〳〵と致候銀にて、細工銀には相成不申候、夫を鍛候て段々宜く相成候、金同樣にて、鍛候程減申候、右鍛候上、宜き銀を南鐐と申候、

〔鼓銅圖錄〕沈鉛取銀

火熱功到、鉛汁漸滲入于灰中、爲底子、則世寶凝然、成小圓片、在中央、此銀名灰吹銀、

〔經濟纂要後集一〕正保五年、西土舶二十隻、除互市物件外、載回錠銀銀器灰。吹。銀。等國制、未造錠銀、謂之灰吹、千七百九十四貫五百五十六錢餘、引要覽四

〇按ズルニ、銀座ニテハ、古來ヨリ灰吹銀ヲ銖（マヤ）ト云ヨシ、意フニ金丸（マルカセ）ノ略稱ナラン、

〔徵古文書甲集山城國〕京都上京文書

菊大黑之銀と、常是ぶきのしろかねと、善惡之へだてなき樣にと被仰付候間、いよ〳〵へだてなく取やり仕べし、されども銀子あしく候はゞ申上べし、えからずしてえりきらいを仕べからざるものなり、

以上

五月十六日

〔善隣國寶記下〕皇帝頒賜〇係永享六年明宣宗賜將軍足利義教者 日本國王、銀貳百兩〇中略王妃、銀。壹。百。兩。、

〔善隣國寶記下〕別幅〇係享德三年、明景帝諭將軍足利義政書別幅

皇帝頒賜日本國王、白金貳百兩、〇中略王妃白金壹百兩、

〔類聚名物考調度十五寶貨〕赤足金

寶曆十四年、唐山清朝より、眞金銀來るに、赤足金といふ字をしるす、なに事たることをしらざるよし人の問しに、本草により所有、

本草綱目八金條下、時珍云、金有山金沙金二種、其色七青、八黄、九紫、十赤、以赤爲足色、和銀者、性柔、試石則色青、和銅者性硬、試石則有聲、是によれば、以赤爲足色といふによりて、上金といふ意に赤足とはいへるなり、足といふも、錢神論に、足なくしてよく行といふ意より出たるなり、和語にあしといふも同じ意なり、

〔寶貨事略附錄〕暇積抄云、舶來金銀數量、

寶曆十三年より天明元年まで十八年の間に、唐山、安南、西藏、紅毛等の國々より、舶來せし金銀の數量總計、

銀七千拾六貫六百六拾匁八分三厘三毛七糸四忽

內千七百五拾貫六百七拾八匁三分七厘貳毛五糸、銷爲文字銀、

三千四百貳拾八貫六拾壹匁七分七厘三毛

每六拾匁替金壹兩

金にして五萬七千百三拾四兩壹分、永百拾貳文八分八厘貳毛六糸、

三千八百貳拾九貫九百拾九匁九分九厘□毛、銷作南鐐貳朱判、

百貳拾六萬六百五十斤

每八片換文字金壹兩

金にして拾五萬七千五百八拾壹兩壹分

金六拾三貫九百拾七匁貳分

今按するに、文字金に造改せし數量なし、此時いまだ改造の事なき故なり、其後改作せり、其數を求めて補ふべし、

棨人○曾槃薩摩按、右六拾三貫九百拾七匁二分を、今の通用替金の兩の小判、重三匁五分を以て割るに、金壹萬八千六拾壹兩三分、永二拾壹文四分二厘八毛なり、

〔貨幣秘錄〕唐金銀之事

舶來の唐金に五種あり、所謂足赤金、九程金、八程金、西藏金、安南金なり、其品位により價銀の等差あり、足赤金三拾貳雙半替、九程金貳拾八雙四分替、八程金貳拾六雙四分替、西藏金貳拾三雙替、安南金貳拾壹雙壹分三厘九毛八糸替、

唐銀に三種あり、元寶銀壹挺、重サ五百目、足紋銀壹挺、重サ三拾三匁、元圓銀壹挺、重サ拾壹匁、是清國通貨の定なり、

〔金位幷金吹方手續書〕唐金位附之事

阿蘭陀金錢　位四拾五匁、但銅氣强有之、　足赤金　位四拾五匁壹分より四拾六匁位迄

九程金　位四拾九匁五分位より四拾九匁八分位迄　九程金寶印　位五拾五匁五分位より五拾壹匁位迄

八程金　位五拾五匁七分位より五拾八匁五分位迄　馬上金　位六拾九匁七分位、但銅氣含有之、

安南金　位四拾八匁五分位より五拾九匁五分位迄、但銅氣含有之

西藏金　位四拾六匁七分位より五拾貳匁七分位迄、但銅氣含有之

廣東金　位五拾七匁位

右唐金類九品、明和二酉年以後、追々持渡、位糺シ有之分、但唐金之儀は、最初より次第に少々ヅツ位劣り候事、

〔吹塵錄九〕嘉永七年甲寅六月、亞墨利加使節へ應接之上、取極候趣申上候書付、

豆州下田表江亞墨利加船再渡致候付、爲應接罷越、追々被仰渡候條々、幷伺濟之趣を以、使節ペルリ江應接之上、取極候廉々、其外共左ニ申上候、○中略

一亞墨利加人江相渡候、薪水食料缺乏之品、代物として受取候、彼國金銀錢位之儀、私共ニ而は難相分候間、右金銀錢、御勘定所江相廻し承合候處、金錢之方は、目方壹匁ニ付、代銀拾九匁、銀錢之方は、同斷、貳匁貳分五厘之旨申越候間、右割合を以取調候處、左之通御座候、

金錢壹枚　此目方八匁八分

此銀百六拾七匁貳分　　但金錢目方壹匁ニ付銀拾九匁

銀錢壹枚　此目方平均七匁壹分貳厘餘

此銀拾六匁　　但銀錢目方壹匁ニ付銀貳匁貳分五厘

但端は誠ニ聊ニ付切捨申候、且本文銀錢壹枚を、彼國ニ而一ドルラルと相唱、右二十ドルラルを以、前書金錢壹枚ニ替へ候由、銀錢之方は、目方聊違ひ候分も有之候間、平均仕候處、書面之通御座候、

右之通御座候間銀一ドルラル銀十六匁替、金錢は百六十七匁貳分替之積、且錢相場之儀、唐國は一ドルラル錢壹貫四百文之由ニ付、是迄下田表ニ而相渡候諸品代物は、假ニ錢壹貫貳百文之割合を以致勘定候得共、長崎表唐紅毛引合之錢相場は、金壹兩ニ付調錢六貫文替之趣に付、調錢ニ而同相場之積、亞人談判仕候處、日本之通用金銀、目方何程有之哉之段申聞候間、我國之通用金銀は目方ニ不拘、政府よりの命令ニ而極印を打、右を目當ニ通用致し候、外國之見合には難相成旨相答候處、其後申出候は、日本之壹分銀目方相改候處、右銀三ッ程ニ而、銀一ドルラル錢一ッニ當り候間、右を潰し壹分銀三ッにいたし、前書之極印を通用いたし候様相成候は

ば右目方之割合ニ而取引いたし可然、壹分金貳朱金之目方をも相改候處、不同ニ而貳朱金は銀も相交居候間、何れも目方ニ而取引致度旨申聞候ニ付、我國之通用金銀は、前書申述候通之次第ニ而、目方性合等ニハ不拘、尤細工銀山出金銀共、都而前書之割合を以買上候義ニ付、銀一ドルラル、銀十六匁替より外難動旨嚴重申談候處、右ニ而は諸色高直に相成、下々可及難義、政府に於て、右樣之義は有之間敷抔品々申聞候得共、右は國中一體之義ニ而、何れにも難動旨申聞候ニ付、其後程立今般御渡相成候品々之代物等、右相場を以勘定可致、尤追而勘辨之上、猶又引合候義も可有之旨申聞候、元來外國之金銀位目方等、何方も粗同樣之趣ニ付、區々之義を不快ニ存じ、先方之勝手宜敷所江引付、彼是申出候得共、詰り右一條相決不申候而は、彼方差支ニも相成候故前書之趣ニ而、致取引候義と奉存候、

一金銀目方壹匁當リ之相場、幷錢相場共、先は狂ト　レ義有之間敷候得共、數年來之內ニは、無之共難申旨、亞人共江申聞置候、〇中略

寅六月　　林大學頭〇以下六人署名略

〔金銀御吹替次第三編三〕十一月〇安政六年十四日御觸書

御勘定奉行江

外國金銀、其儘通用被仰出、金は金、銀は銀と、量目を以取遣致候筈ニ付、新小判、壹分判、貳朱銀、目方割合ニ應じ、可致通用旨、最前相觸置候處、今般洋銀同位之銀を以、壹分銀吹增被仰出候間、外國銀と壹分銀と、量目掛合之上取引可致候、

一洋銀之儀、御年貢其外諸向上納金之內取交候は勿論、皆洋銀ニ而も勝手次第可致上納候、尤世上通用之儀、彌以國々迄も無滯可致通用候、

右之趣御料私領寺社領共、不洩樣可觸知者也、

十一月

〔金銀御吹替次第三編三〕安政六年十二月十二日

乍憚以書付申上候

此度洋銀其儘通用被仰付候ニ付、銀座ニ而極印仕候上は、常是極印打添申度奉存候、元來往古より銀通用之品ニ、常是極印無之儀は無御座候故、右洋銀江も極印仕度儀ニ御座候、依之此段申上候、以上、

未十二月　大黒作右衛門

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年十二月廿八日

洋銀ニ銀座ノ章印ヲ烙シ、以テ國内ニ通用セシム、

外國銀目方七匁以上の分、壹分銀三分通用の積り、於銀座極印打渡し候間、無滞金銀取交通用可致候、尤も銀錢所持の者は、銀座へ差出し極印請可申候、

巷說、右の御達有之、銀座極印附西洋銀錢、通俗ドロ銀と唱へ、日本銀少しく交り通用始りしが、馬喰町御貸附役所返納金持參する者ありと雖も、ドロ銀にては不請取、日本金銀にて可相納旨申聞られ、其外諸役所共、如斯公邊役所にて不受取銀、何方にて受取もの有べきや、自然通用相止む、右は金銀取交せ通用可致と觸達し置、ドロ銀にては受取ざるなど、公邊は不極りの事と當時專ら風評をせり、

追て萬延元申年五月十二日に至り、外國銀錢目方七匁以上壹分銀三分通用觸置候得共、不辨利の趣に付、時相場通用可致旨を達せり、

〔金銀御吹替次第三編四〕同日（〇萬延元年閏三月四日）長崎幷神奈川表江、左之通申遣候趣、銀座より寫差越候、

以飛札申入候

一洋銀江極印打立候儀、鷲後光之模樣ニ而、目方七匁以上之分而已、打立可申御規定之處、以來模樣相變候而も、七匁以上有之分、同樣極印打立可申、尤極印居候場所、是迄之振合、横ニ極印相並可申旨、御掛方より被仰渡候、且洋銀之儀、座方において、表裏之儀相分り不申、併模樣ニ寄リ、模樣文字ニ相障リ候而も不苦、場所見計、極印打立可申樣いたし度、右御掛り方より被仰渡候趣、重役衆より相達候間、此段爲御心得申越候、

月日

森儀右衛門

松本太右衛門

〔金銀御吹替次第三編四〕五月〇萬延元年十三日御觸書

外國銀錢目方七匁以上之分、壹分銀三分通用之積、於銀座極印打渡候間、無滯通用可致、尤銀錢所持いたし居候者は、銀座江差出極印請可申旨、去未十二月相觸置候處、通用不辨之趣ニ相聞候間、向後右銀錢量目輕重極印有無ニ不拘、丁銀之振合ニ准じ、時相場を以取遣可致、尤不相當之相場相立申間敷候、

一諸上納物之儀も、是又時々相場を以可相納候、

右之通相心得、五月十三日より通用可致候、

右之通可被相觸候

五月十二日

金銀出於外國

〔延喜式三十大藏〕賜蕃客例

大唐皇、銀大五百兩、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年五月癸酉、渤海使史都蒙等歸蕃、(中略)賜渤海王書曰、(中略)緣都蒙請、加附黃金小一百兩、水銀大一百兩、金漆一缶、漆一缶、海石榴油一缶、水精念珠四貫、檳榔扇十枚、至宜領之、夏景炎熱、想平安和、

〔日本紀略桓武〕延曆十五年五月丁未、渤海國使呂定琳等還蕃、(中略)仍賜其王璽書曰、天皇敬問渤海國王云々、(中略)今因定琳等還、賜沙金小三百兩、以宛永忠等、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年九月四日己巳、從五位上掃部頭藤原朝臣貞敏卒、貞敏者、(中略)尤善彈琵琶、承和二年、爲美作掾兼遣唐使准判官、五年到大唐、達上都、逢能彈琵琶者劉二郎、貞敏贈砂金二百兩、

〔本朝文粹七〕爲清愼公(○藤原實賴)報吳越王書(加沙金送文)　後江相公

蔣袞再至、枉一札、開封捧讀、感佩駭懷、筆語重疊、不異面展、幸甚幸甚、(中略)勅袞等還、不宜謹言、

天曆元年閏七月廿七日　日本國左大臣藤原朝臣

吳越(○越下恐脫王字)殿下謹空

沙金貳佰兩

右甚雖輕微、當土所出、聊表寸心、謹狀、

天曆元年閏七月廿七日

〔法成寺攝政記〕長和四年七月十五日壬戌、唐僧念救歸朝、從唐天台山所求、作料物送之、(中略)

砂金佰兩(○中略)(藤輸宮)

右依大宋國天台山大慈寺傳疏、施送如件、

長和四年七月七日(○中略)

家司署名皆書、又送寂照(○大江定基)許金百兩、是一切經論諸宗章疏等可送求料也、

〔參天台五臺山記〕延久四年四月廿二日辛未、辰時家主張三來、爲買錢沙金三小兩、水銀百兩渡家主、

五月十六日乙未、巳時寺主許獻沙金三小兩、狀云、

進上

砂金參小兩

右物雖乏少、志准香積一鉢僧堂一日供料、進上如件、

熙寧五年五月十六日　　大日本國延曆寺阿闍梨寺主

阿闍梨寺主

〔源平盛衰記十一〕育王山送金事

我朝ノ三寶ニ財寶ヲ拋チ給ノミニ非ズ、異國ノ佛陀ニモ志ヲゾ運給ケル、奧州知行ノ時、氣仙郡ヨリ金千三百兩ノ金ヲ進セタリケルヲ、妙典ト云唐人ノ筑紫ニ有ケルヲ召テ、百兩ノ金ヲ賜テ仰ケルハ、千二百兩ノ金ヲ大唐ヘ渡ベシ、其內二百兩ヲバ育王山ノ衆徒ニ與ヘ、千兩ヲバ帝ニ獻テ、當山ニ小堂ヲ建立シテ供米所ヲ寄進セラレ、重盛ガ菩提ヲ弔テ給ルベシト可申トテ、檜木材木一艘、漕渡スベキ由ヲ下知シ給ケレバ、妙典承テ、材木砂金取具シテ、事故ナク渡唐シテ、二百兩ヲ僧衆ニ施テ、千兩ヲ帝ニ獻ジテ、事ノ仔細ヲ奏シケレバ、御門其深キ志ヲ隨喜シテ、一塵ノ送物猶以テ默止ガタシ、況ヤ千金ノ重寶ヲヤトテ、卽檜木ノ材木ヲ以テ寶形作ノ御堂ヲ立テ、五百町ノ供米田ヲ彼育王山ヘゾ寄ラレケル、依之當山ノ禪侶其志ノ眞實ナル事ヲ感ジテ、始ニハ息災ノ祈誓シケルガ、薨給ヌト聞テ後ハ、大日本國武州大守平重盛神座ト過去帳ニ被入テ、讀上奉リ弔ナルコソ哀ナレ、

〔大日本史列傳百五十六〕按重盛、素重國體、方疾拒宋醫、而不應以私請宋主、此時宋僧德光主育王、故後世以德光與僧正琰頌傳會爲贈金之證、其實無所干涉、

〔元史日本二百八〕十四年、〇至元、當我建治三年、日本遣商人持金來易銅錢、許之、

〔康富記〕應永八年五月十三日辛丑、草菅相公秀長卿、清書前宮內卿行俊卿、

日本准三后(二字道義、擦)上書大明皇帝陛下、日本國開闢以來、無不通聘問於上邦、道義幸秉國鈞、海內無虞、特遵往古之規法、而使肥富相副祖阿通好、獻方物、(金千兩○中略)搜尋海島漂寄者幾許人還之、道義誠惶誠恐、頓首頓首謹言、

應永八年五月十三日(○又見善鄰國寶記)

〔慶長日記〕慶長十二年五月十四日

一朝鮮人從江戶發足

一三使へ各白銀三百枚、上々官二人へ各白銀二百枚、中官二十六人と、其次は十四人へ白銀五百枚被下之、

十四年九月、唐人共前々より銀を吹ぬき、南鐐にして取り候處に、向後不吹して、丁銀にて直に可取之旨、駿府より黑船へ御下知、

〔大猷院殿御實紀十四〕寬永六年十月二日、暹羅の國使にいとまたまはり、御返簡を授らる、(○中略)かの正使に銀二百枚、小袖十、副使に銀百枚、小袖十、三使に銀五十枚、小袖六、譯官に銀二十枚、小袖一襲たまはり、大御所より正使に銀百枚、副使に銀五十枚、三使に三十枚、譯官に二十枚下さる、

〔本朝寶貨通用事略〕本朝金銀銅外國へ入し總數之事

一慶長五年より前、上古よりの事は暫く不論、室町殿の代より、信長秀吉兩代に至る迄、西國中國の地より、外國へ入し金銀の數、いかほどゝいふ事を不可知、是一、

一慶長六年の夏、交趾の船來れり、(其船に乘し者二百人ありき)是當家に及て海船の來れる始也、從是正保四年迄四十六年が間、我國の金銀外國へ入し事、いかほどゝいふ事を不可知、是二、

一慶長六年の夏、外國の船我國へ來り始て、寬永元年迄二十四年の間は、九州の內、いづれの浦々

へも、心儘に船を寄て商賣したり、東國へも船著て商賣せし事もあり（慶長十四年に、上總大瀧浦に黑船著し事あり、）長崎より外にての商賣を禁せられし事は、寛永二年に始れり、されば廿四年が間、諸國の浦々にて、外國船商賣せし時、取行し金銀の數は不可知、是三、

一慶長六年より寛永十一年迄、三十三年の間は、御朱印船とて、我國の商人共（今の吳服所共の先祖、又は富める商人共ゆるされて行しなり、）亞馬港ノビスハン、暹羅、安南、呂宋等の國々に、年毎に行て商賣し、此外にも私に行てあきなふ事年々に不絕、其時に我國の金銀持行し事、其數いくらといふ事を不知、是四、

一寛永の初迄は、今來れる國々の外に、交趾、占城、安南、呂宋、ノビスハン、イギレス、アレウタ、イタリヤ、亞馬港などいふ國々より、年々に來りあきなひしたり、其後耶蘇の法をいたく禁せられしより、此等の國々來ることを不被許、是等の國々へ持行し金銀の數も不可知、是五、

一寛永の始、耶蘇の法を禁せられしより、前方三四十年の間、我國にて其法を信受せし者ども、年年に其國々の師の許へ贈つかはし、禮物の金銀、（是は商賣の外なり）いくらといふ事を不知、是六、

一近年に至て、長崎にて商賣の外、私の商賣に、（拔荷と云事也、）外國へ入し金銀の數不可知、是七、

一慶長の初より今年に至て、對馬國より朝鮮國へ入し金銀の數、いくらといふ事を詳にすべからず、是八、

一古より今に至迄、薩摩國より琉球へ入し金銀の數、いくらといふ事を詳にすべからず、是九、

右九ケ條の事は、いづれも詳にすべからず、（是等某が愚なる心づきし處也、此外にもあるべし、）此九ケ條の外に、長崎一處より、外國へ入し金銀銅大數、しれし所左の如し、

一金二百三十九萬七千六百兩餘

一銀三十七萬四千二百九貫目餘

正保五年より寶永五年迄、六十一年が間、外國へ入し大數也、

正保五年より寶永五年迄、凡六十一年が間、外國へ入し大數也、

一銅一億一萬千四百四十九萬八千七百斤餘

寛文三年より寶永五年迄、凡三十六年の內、外國へ入し所也、但銅は慶長六年の頃より寛文二年迄、六十一年の間の事、不分明といふ也、

謹按、長崎一處より外國へ入し所、六十一年が間の大數も右の如し、ましてや前にしるせし所のはかり知べからざるの九ヶ條の大數、おもひやるべし、今算法を立て、長崎一處より外國へ入し大數を以て、彼不可知の九ヶ條の大數を推はかるに、

一金六百十九萬二千八百兩餘

慶長六年より正保四年迄、四十六年が間、外國へ入し大積、幷正保五年より此方の總數也、

一銀百十二萬二千六百八十七貫目餘

慶長六年より正保四年迄、四十六年が間、外國へ入し大積、幷正保五年より此方の總數也、

右金銀の事は、正保五年より寶永五年迄、長崎一處にて、外國へ入し大數を二倍して、兩口を都合せし積也、

一銅二億二萬二千八百九十九萬七千五百斤餘

慶長六年より寛文二年迄、六十一年が間、外國へ入し大積、幷寛文三年より此方の總數を二倍せし積なり。

右は慶長六年より寶永五年迄、百七年の間、我國の金銀銅、外國へ入し所の大數也、此大數を以て推時は外國に入し金は、唯今我國に在所の金の數三分が一に當れり、

我國唯今の新金は、古金二千萬兩を以て造り出せし所なりといふ、六百十九萬兩を三合すれば、大數二千萬兩にちかし、銀は唯今我國にある所の數よりは、二倍ほど多く外國に

入しなり、我國中古銀の數四千萬貫目ならではなしと云、然るに外國に入し數百二十萬貫目近くなれり、我國の銀は殊外に減せしなり、但此數は餘程引入たる積なるべし、外國に入し所の金銀銅の數、従是は猶夥敷事にや、

〔吹塵錄二十二〕正保寛文之頃ヨリ元文年中迄、長崎表ヨリ唐紅毛ヘ持渡候金銀銅、凡左之通ニ御座候、

金百八拾壹萬四千五百兩餘

銀拾萬六千八百六拾貫目餘

金ニシテ百七拾八萬千兩餘

銅三億萬斤餘

右久保田十左衛門差出候書付之内、下ゲ札ニ有之、

〔吹塵錄二十二〕昔時安政三丙辰年海軍傳習中、和蘭教師士官ハントローウェン氏、伊斯巴之古銀貨即スパーンセマットと稱するもの一枚を被送云、是銀貨、貴國の銀三分一に含むもの也と、其然る所以を問ふ、答て云、昔スパーンセ及びポルトガル國之海運、歐羅巴中に冠たりし時、東洋に航して貿易し、貴國に入りて教法を布す、此際や貴國の金銀、彼國に齎し入る者頗る多く、今に到て其古銀貨中、日本の銀なりといふもの、普通の俚言、以て其多寡を思ふべしと、慶長以上、其金銀之輸入輸出之數、今しるべからずといへども、此俚言ある時は、また輸出之數も夥敷を察すべし、

〔鎖國論〕波爾杜瓦爾と我國と交易のこと、檢夫爾全書を按ずるに、其言にいはく、其交易、前後盛衰ありといへども、其全盛なりし時、年々運輸し去る所の金三百トンに過たるを以て、大概その大利ありしを知べしといへり、一トン各今の文銀にして、大約四百貫目なり、三百にては十二萬貫目なり、又曰、其利の最小なるも、逐來運去の貨物各一倍となりて、共に四双倍の利あり、又曰、千六百三

十六年(寛永十三年)船四艘にて銀二萬三千五百貫目を輸し去る、諸人私の銀は此外にあり、翌年六艘にて二萬千四百二十貫六百五十目一分、又翌年に船二艘にて一萬二千五百九十貫二百三十七匁三分を輸すといへり、委く彼方の年を記したるものにて、夫爾見たりといへり、原文には十匁を一ルクイといへり、但其比の銀は、今の文銀とは異なるべし、右の三年は、彼が交易衰微の極をいへるなり、

〔常憲院殿御實紀十四〕貞享三年八月九日、この日宗對馬守義眞に仰下されしは、朝鮮國貿易の事、今より後、總額金壹萬八千兩にかぎるべし、此定制をこえて、金銀をわたす事あるべからず、かつ無用の品物は、一切に買求べからずとなり、　十二月十五日、松平薩摩守綱貴に仰下されしは、薩摩大隅兩國より琉球に年々互市の事、今より金二千兩をもて定額とし、それより增して金銀わたすべからず、かつ無用の品物をば、一切買事あるべからずとなり、

〔名山藏書簡〕一外國へ金銀出申候義、長崎一口迄之樣に皆存候へ共、朝鮮琉球へ、毎年公義を經出申候事有之候、銀、毎歲二千貫目ヅヽ朝鮮へ渡申候、琉球へは八百貫目ヅヽ渡申候、十ヶ年に正銀二萬八千貫目、外國之貨に成申候、先年御吟味之事にて能承候に、慶長以來、外國へ蕩顯の上にて、相渡候吹出銀十分之内、七八分も相渡申候金子は、夫に合せ候へば、相渡候處少く御座候由被申候、以上、

十一月朔　　　小瀨復庵

○按ズルニ、是享保年間ノ事ナルベシ、

〔市中取締書留〕七月八日向方より來る

神奈川表おいて貿易相始候處、外國人共、兎角新古小判を相望、小判にて買入候諸物之價、格外に引下ゲ相渡候間、橫濱居住之商人共、御府内江小判爲仕込、追々罷出候哉に相聞、御府内商人共も

改貨議

右之景氣承り、是又小判所持罷越取引可致哉、左候而ハ、御國之金貨、外國江追々流入候ハ必定に而、以之外之事に付、此上心得違之もの無之樣、名主支配限精々可心付、

右御諭之趣、名主共一同、不洩樣早々可申通旨被仰渡、奉畏候、以上、

安政六年七月

新革屋町
名主　定次郎
外　十九人印

御番所樣

〔常山紀談二十三〕土屋數直執政の事

土屋但馬守數直、執政たりし時、金座の者ども相はかりて、金に銀を入てふきかへられなば、日本國の金甚多くなるべし、金の色の損ずるのみにて、莫大の利なれども、但馬守用られじ、但馬守だに此事を聞入られなば、事行はるべしといひけるを數直に申す人あり、兎角の答なくて打過られしかば、又人をして問せしに、但馬守、是は邪なるわざなり、金を以て天下の寶とするは、純物なるが故なり、其實を惡くせんとや、思ひもよらぬ事なりといはれけるとぞ、

〔折たく柴の記下〕我よく知し召れし御事の、なくなり給はん後には、我言の行はれざらんは去年〇正德二年の九月廿七日より思ひ設けぬ、されど此金銀の事に限りては、天下の患、是より大なるものなければ、當時の御政を輔け申されし人々の中一人もかゝる事、議し申さるゝとも聞えねば、去年の春、我ひとり身を出して、封事を參らする事、第三度に至りぬる時は、既に御不例の最中なりしが、御志し決し給ひ、銀造る事を停められ、近江守重秀が職奪れたりけり、其後はいかにもして、金銀の製古にかへされんことを思召はかられ、隱れさせ給ふべき御きは迄も、此事に及ばれしは、今の御政を輔られし人は、よく知給ひぬる事ぞかし、されど又かくれさせ給ひし御跡より

も、此事を議せられし人も聞えず、吾散之吾能收之など云事もあれば、我はじめ封事を上りしより、此患を除かんほどの事、おもひもよらざるにもあらず、ましてやかの御志を世に行はせ給ふに及ばで隱れさせ給ひしかば、今の人も後の世にも、此事をこそ其代のあやまちなりとおもふべければ、善く志をつぎ、善く事を述るを孝とはいふなり、ましてや是は天下後世の大患を救はるべき事なれば、前代の御爲にも、當代の御爲にも、吾いかにもして、此事をば申行ひてんと心一つに思ひ極めて、此年〇正德三年六月、改貨議三册を記して、詮房朝臣〇間部に參らせて、我思ふ所をも聞えたりけり、初め金銀の製、古にかへさるべき事仰下されしより此方、世の人の私議せし所さまざまにぞ有ける、或は元祿よりこのかた作られし新銀ども、古の製にかへされんには、灰吹の銀凡百十八萬貫目を用ふべし、然るに當時一年に產する所の灰吹銀、凡四千貫目に過ず、さらば其功の終らんことは、三百餘年をや經べきと云あり、或は諸國銀山より出る所の鉛をもて、當時の新銀共に雜れる銀と赤銅とを吹わけて、其銀をもて、古の製のごとくに造られんには、其押とすべき鉛、凡二百七十六萬二千貫目餘を用ふべし、然るに當時一年に產する所、諸國銀山より出來る鉛、凡三千七百三十六七貫に過ず、さらば其功の終らむこと、七百三十九年餘を經べし、しかのみならずかの銀と銅と吹わけん、年々鉛の毒氣に當り死せんもの、其數を計りしるべからずと云けり、或は今の新銀どもをもて、古の製にかへし製られんこと、其功成がたきは前の二條の如し、たとひ又古の製にかへさるべきこと有とも、今の新金を改め作られざらんには、金銀の價、相當らずして、必萬物の價平かなるべからず、さらば先今の新銀の價に相當るべき程の銀作られんは、金銀二つながらの爲、宜しかるべき事なりと云ふあり、〇以上三說に、皆是銀座のものいひし說歟、或は元祿の頃よりして、金には銀をまじへ、銀には銅をまじへて造られしかど、金銀を換べき法は、古の如く金一兩の價六十匁なるべしと定めらる、されど世の人、古の金銀の製と改め造られしものと、其品

を論じて、新金は、新銀の猶古に近きに及ばずといひて、是より金銀の價平かならず、其後寶永に又金銀造り改められしより、銀改め造る事度々に及び、今に至りては金三品銀六品になりたれば、世の人銀をもて銀に換るにだに、其價の高下あり、ましてや今の新金、其品は古に同じけれど、其製は少しきに輕くして古に相半す、たとひ銀のみ、其製古に復されんにも、金銀の價、相當らずして、必世に行るべからずと云あり、或は新銀共改造られん事もかなふべからず、金銀の價貴からず、賤からざらん御沙汰もかなふべからず、しかし歳々に金十萬兩をいだされて、新銀ども買收められんには、さらば世にあるところの新銀の數すくなくなりて、金銀の價を初めて、萬物の價も平かなるべしとなり、(以上二說は、兩替師と云者の說にや、)或は今の新銀の價甚賤しき、實には其品の下れる爲のみにもあらず、其數多きがゆゑなれば、其數の半を收められんには、其價平かなるべし、されど故なく其半を收められん事もかなふべからず、好銅をもて大錢を鑄出され、今の新銀にかへて其新銀をば悉々に吹つぶされ、銀と銅とを引わけて、其銀をば御藏に收められ、其銅をして大錢を鑄らるゝ料にあてらるべしと云あり(是はさきに大錢を鑄しもののいひし說か、)或は金銀の製、古に復されんには、先寶鈔を造られ、金銀共に換られ、金と銀と鈔をもて、雜用ふべき由を定められ、次に新錢を鑄られて、錢の數をたされんには、天下の財用乏しからずして、諸物の價も、自ら平かなるべし、次に天下の山々を尋ね求めて、金銀銅の鑛を開きなば、十年の內外には、元祿以前に、天下に通行せし程の金銀の數は出來るべし、其時に至りて改造られし金銀を以て、寶鈔の半にかへて、其寶鈔悉くに焚棄られんには、誰か異議を申者のあるべきと云あり、(是は然るべき人の中に、こさかしき人のいひし說也、)或は元祿より此かた、金銀の品多く成て、其品古には及ばねども、其數は古に倍々しぬ、されば近年以來、米穀の價、年々に高く成て、古の飢饉と申せし時の價よりも猶ましくはゝれども、飢饉の者、一人も見え來らぬは、金銀の數多くなりて、天下の人、各其財乏しからぬによれり、さらば元祿よりこのか

た、金銀改め造られし事、其利益なしとは云べからず、金銀の價平らかに、諸物の價平らかにならんには、金銀の數多からんにはしかじ、然るに金銀の價平らかならずして、諸物の價、年々に高くなりし事は、金銀を換る事を業とする、兩替師など申者の、私に其品の高下を論じて、其價を定むるによれり、たとひ此後古の製に復さるとも、又々いかなる事を巧み出して、世の害を引いださんもはかりしるべからず、公法に背きて、私價をたつる罪を糺されて、かの兩替師三五人をも嚴刑に行はれなば、天下の人の心を懲めらる、のみにあらず、金銀の價は、立どころに平らかに成て、諸物の價も自ら平らかになるべし、天下の人おの〳〵其寶を寶とし、其利を利とすべし、かの奸商等が爲に誤られて、只今迄造られし金銀を改め造れり、重ねて天下の患を致さる、事もあらん、然るべからずと云あり、(是は武家の人々の中より出し說にや)是等の說皆々よく其道を得し事とも見えねば、我議には、先是らの說あらぬ事どもなるいはれを、悉くに辨じ明らめて、次に我行ふべきと思ふところを議し、次には其法を記して、すべて三冊の書にはなしたるなり、詮房朝臣も、上の御志のほどはよく知られぬ、いかにもして、其事のならんことを心にこめておもはれしかど、世の人議する事ども聞て、いかにもかなふべからずと大方おもひ絶えられしに、我言を得て悅にたへず、老中の人々と相計らひて、八月の初めつかた、評定の衆中に、金銀の事は前代仰おかれし所なり、いかにもして古にかへさるべき事を議し申さるべしと仰下さる、(此仰を記されしもの、某が議を用ひられき、)されど是等の人々は本より其心とするところ、身の爲家の爲を計るにこそいとまなけれ、天下の事憂ふるに心の及ぶべきにもあらず、なまじひに本末しらぬ事いひ出て、世の議とならん事、益なしと思ひぬれば、いかにとも對へ申す人もあらず、かくては事ゆくべしとも覺えず、此事仰奉る事なからんには、誰かは其心をも用べき、其人を選みて、仰蒙らんにはしくべからずといひしかば、詮房朝臣、又老中の人々と議して、十月三日に其人を選み定らる、(老中には但馬守喬朝朝臣、大目付には中川淡路守、勘定奉

行には水野因幡守、目付には大久保甚左衛門、今の下野守が事也、勘定吟味役は杉原萩原二人、共に此仰を蒙ろ、

〔丁銀改鑄秘策〕諸物の價を定むる金銀なれば、金銀の品位は、もとより正しからずば有べからず、然るを安永元年に、南鐐新銀鑄造ありてより、丁銀と南鐐銀との品位正しからず、南鐐銀は丁銀にすべきにもあらねど、通用便利よきゆゑに、年々盛におこなはれ、

小判歩判南鐐ともに、通用差別はあらねど、小判は十に一二はかならず瑕ありて、俗これをきれと云取扱に嫌ひ、歩判はあまりに形ち小く、捜索のわづらひをいとひて、人々南鐐を好むなり、また南鐐通用の始めは、遣ひ馴し小判歩判の方を好み、兩替に南鐐の方より打賃とて出しぬるを、今は南鐐通用便利よき故に、遠國邊鄙までも流行してひらけ、人々好みぬれば、自然と南鐐拂底になり行、今は兩替に小判の方より打賃を出しぬ、俗これを逆打賃といふ是以ても南鐐通用便利よきを知べし、

丁銀は自然と不便になりぬれば

今既に關東筋は、百姓商家ともに通用なし、上方筋計りなり、銀相場の下直なるを以ても、不便なるを知るべし、

今丁銀を、ことごとく南鐐に鑄改めなば、品位の違ひもなく、不便の物を便利の物にかへ、その上金六百萬兩餘、銅四拾萬貫目餘の益ぞあるべき、

丁銀の相場、今金壹兩に凡六拾六匁、右金壹兩の銀六拾六匁を鑄改むる時は、但凡五分銀五分銅の積りなり銀三拾三匁、銅三拾三匁、又南鐐銀一片の重さ貳匁七分、八片にて、銀目、貳拾壹匁六分、前の銀三拾三匁にて、南鐐八片の目方貳拾壹匁六分を除けば、銀拾壹匁四分殘して、拾壹匁四分を南鐐となせば、四片餘になりぬ、本朝寶貨事略白石先生著述に、元祿八年迄、年々に造り出しゝ處の金銀の總數、先づは銀八拾萬貫目ほどゝあり、さある時は銀八拾萬貫目は、今の相場六拾六匁替を以て

買上れば、金子二百拾二萬兩餘に當る、その銀八拾萬貫目を鑄改る時は、（但五分銀五分銅の積り）銀四拾萬貫目、銅四拾萬貫目となりぬ、右の銀四拾萬貫目を南鐐となせば、南鐐銀一億四千八百拾四萬八千百拾八片餘、此金千八百五拾萬兩餘となりぬ、買上し金千貳百拾貳萬兩を引除ば、殘金六百三拾八萬兩餘、銅四拾萬貫目餘、益となるべし、

其益莫大なる事なれば、誰かゑらぬもの、有べき、されどいひ出るものもなきは、舊慣を改むるをはゞかり、また通用に憂あらんことをおそれて、皆人いひ出ぬになん有べき、これによりて今考ふるに、舊きを改るのはゞかりもなく、通用にうれひもなき策あり、その大綱は、先京大坂において、丁銀を買上、銀拂底になりぬれば、おのづから金の相場下り、六拾目（金の相場今は六拾五匁位）に至るは必定なり、その時に至り、此後は永く金を六拾目と、（江戸も同様也）公より御定めあるべし、さあるとも漸次に相場のゑからしむる事なれば、誰かわづらひいなむ者一人もあるべき、

江戸幷に關東の國々は、小判六拾目の定めなれば、（銀は時の相場也）銀何拾何匁と賣買せしも、みな銀は名のみにて、實は金賣買なり、諸家の獻上銀、拜領銀、又は諸侯に銀通用の御家もあるべけれど、是は百に五六家には過べからず、其他はみな銀は名のみにて、實は金賣買なれば、銀の有無、相場の高下に、關東の國々は、いさゝかわづらひなし、たゞ京大坂西國筋は、銀を專ら通用仕馴ぬれば、假に銀の有無、相場の高下ありては、諸物の價にわづらひあるに似たれば、こゝに京大坂を專ら云、江戸にても、京大坂と同時に銀を買上なば、京大坂にて、金の相場六拾目に至る時節は、江戸もまた銀の相場六拾匁となるは必定なり、其時々見計ひ、江戸は以來銀を六十匁と御定めあるべし、これ又誰人かわづらひいなむ者あるべき、

かくて金も銀も六拾匁と定まりぬれば、銀を專らにつかひ馴し國々も、銀は名のみになり行、實は金賣買となりぬれば、爰において御定の銀六拾目相場を以て、諸國の丁銀を不殘買上、南鐐に

鑄改めなば通用にいさゝか憂ひなかるべし、

小玉銀は、端銀に遣ひ馴ぬる國々もあれば、これ迄のまゝに用ゐるべし、

また諸國の丁銀を不ㇾ殘買上し、その員數のうちを、二三十分の一をも殘し置、是を諸家の獻上銀、拜領銀等にのみ用ゐなば、丁銀も永久通用在て、舊を改るのはゞかりなるべし、

今の大判の如く、丁銀は商家の通用相止、武家にのみ取扱ふものとは成行なん、

今にありてはとにもかくにも、通用便利なる事、南鐐銀にしくことなければ、此末いか程鑄出るとも、通用に憂ひなきは前にいふが如し、實に不便のものを、便利のものにかへ、その上金三百萬兩餘、銅四十萬貫目の益ありて、銀品位も等しくなり、

公より六拾目と御定めありて後、買上し銀、また小玉銀、幷總員數の內を、二三十分の一も殘し置、且改鑄る所の諸雜費を除かば、金六百萬兩の益には及ずとも、丁銀の員數さへ八十萬貫目ありなば、凡金五百萬兩程の益とはなりぬべし、

いと〳〵めで度ことなるを、いひ出る者なきは歎くにもあまりあることにしあれば、おふけなくも書しるしぬ、あなかしこ僭妄の罪さり所なくなん、

文化己巳五月　　福田務廉

〔吹塵錄十〕金銀錢流幣御改革之儀取調、密々可ㇾ奉ㇾ申上ㇾ旨被ㇾ仰付ㇾ候ニ付、乍ㇾ恐左ニ奉ㇾ申上ㇾ候、

一金幣通用之法は、御國政肝要之儀ニ被ㇾ爲ㇾ思召、乍ㇾ恐東照宮樣御直ニ、元祖庄三郎光次江被ㇾ爲ㇾ仰付、初而慶長之頃、小判壹步判出來仕候、右小判ハ最上之純金ニ御座候處、元祿之度、金位を劣し、御吹替ニ相成候以來、世上人氣不ㇾ穩、物價ニも差響、仍而正德年中、猶又金位被ㇾ相進、乾字金ニ御吹直有ㇾ之候得共、目方を減じ、小形之小判ニ相成候ニ付、矢張世上人望不ㇾ宜、諸物之價も混雜仕、不ㇾ被ㇾ爲ㇾ得ㇾ止事、享保年間、全慶長金之通、金位目方共古復被ㇾ仰付、金性至極ニハ相成候得共、其弊

哉、御勝手御操合向、必至と御究迫ニおよび、右ニ付乍恐有德院様〇徳川吉宗御代、元文年中、亦吹替被爲仰付、文字小判壹歩判出來仕候、是は金位目方共、慶長ゟ品位相劣候得共、時世人情ニ協ヒ、數十年無滯通用仕來、物價又平和ニ相成申候、然ル處文政之初度、金位一層相劣シ吹直、猶又天保八年ニ至リ、壹兩之目方相減吹替被仰付、當時通用之保字小判ニ御座候、此金子上品ニは無御座候得共、先當世之人望ニ相叶、永久之寶貨ニ可相成品ニ而、御差支之儀も無御座候處、特り二朱金之一種は、格外金位卑候而、保字金と押並ベ、永久之貨幣ニ可相備金性ニは無御座候得共、近年御物入莫大之折柄、危急を被爲凌候、御時宜之權道、是又不被爲得止事之御所置、乍恐御尤至極と奉存候、然れ共此節何事も、享保寛政度之御趣意ニ古復被仰出、物價高下之御沙汰等迄、厚被成下候上は、右惡幣之貳朱金、其儘被差置候ハ、正理潔白ニ無之、甚不相當ニ相成候ニ付、此節不殘吹潰し、金位相進メ、保字小判壹分判ニ吹直シ、右貳朱金之内ゟ、燒分ケ絞リ取候金含銀を以、此不足補之爲、永樂錢吹立、壹朱宛之通用被仰出可然哉と奉存候、左候而も、末凡三百九拾萬兩餘之御不益相立申候、右償方之工夫は、別紙を以奉申上候事、

但永樂錢壹朱通用之法も、甚不好事ニ候得共、補方之一助之爲、不得止事之所置ニ御座候事、

一銀幣之儀、是又最初私元祖庄三郎光次江、銀座支配被仰付候節、初而丁銀豆板銀出來仕、是を慶長銀と相唱、至極之銀性ニ御座候、其後元祿銀、寶永銀、永字銀、三寶銀、享保銀、元文銀等、品々位優劣吹替被仰付候得共、何れも古代御定法之通、目方壹匁を以、則代銀壹匁通用之丁銀豆板銀而已ニ御座候、明和二年、五匁銀と申もの吹立被仰出候得共、不辨理之故を以、忽通用相止、其後安永之初度、御勘定奉行川井越前守、新規之工夫ニ而、貳朱銀と申品、初而被吹立、銀を以金ニ換る之通用は是より始、神君御定被爲置候、金銀通用之格を崩し候、惡法之濫觴ニ御座候、乍法其頃名目ニ於ては、頗御斟酌有之、貳朱銀とは不相記、以南鐐八片、換小判壹兩と之極印を打、右八片

之目方貳拾壹匁六分有之ものを以、則六拾目通用ニ被宛行、不相當眼前に差見え、其後文政度ニ吹替、右八片之目方拾六匁ニ相減、又壹朱銀ニ吹直、目方拾貳匁ニ相減、猶又此節之壹歩銀ニ吹直し、目方大ニ減じ、九匁貳分を以、則六拾目之通用ニ被行、前代未聞之惡幣と相成、是をも可忍は、此上は銅鈑紙鈔之類ニ流候而も、不苦場合ニ陷リ、乍恐東照宮様之御尊慮、幷光次等之素意ニ見競候得ば、以外之僻事、歎息可仕御儀と奉存候、殊更慶長以降之御定法ニ、金を以製候寶貨は、何兩何朱と唱へ、銀を以製候貨幣は、何拾何匁と唱來候處、當今此御定法ニ反シ、銀製之寶貨を以、兩歩朱と唱へ通用仕候而は、是則准金と申ものニ當り、左候而は、何程正金之寶貨を純粹ニ被相改候而も、右銀製之貨幣之爲に、正金之位迄も俱ニ引下られ、金銀不平準に相成候道理ニ御座候、從來京都より西國は銀を尙び、東國は金を尙び候風俗なるに、今西國筋ニ通用銀乏敷、壹步銀之惡幣と入代り、譬バ骨格其部位を失ひ、氣血とも循環せざるが如し、是ゟ三都物價之混雜をも生候儀と奉存候、殊更右惡幣之壹分銀は、庶民悉忌嫌候故を以、世上一般、當時壹分銀のみ通用仕、小判壹步判之類は、絕而一切見當り不申、畢竟金幣は、釣合貴相成候ニ付秘藏仕置、銀幣は人々是を賤んじて、手取候得ば、先此幣ゟ先へ拂出候儀と相聞、左候而は、金銀不融通と可申者ニ御座候、且又丁銀小玉銀之儀も、此節吹立候保字銀は、目方百目之內、銀貳拾目、銅八拾目入之割合、餘り法外之惡幣と相成申候、乍併右貳品共、是又時世不被爲得止事之御所爲とは奉恐察候得共、此度享保寬政度ニ復古之御趣意ニ候得ば、右壹分銀丁銀等之惡幣は、何卒速ニ御吹銷ニ相成、神君御定古法之通、時世相當之品位ニ改、悉く丁銀小玉銀ニ御吹替有之候ハヾ、至極相當之筋とハ奉存候得共、左候而は、俄に國用も逼相成、且莫大之御損失、補方之手段も無之、當時ニ於ては難行筋と奉存候間、篤と勘辨仕候處、當世元立ニ可相成保字金も、實は位目方共、元文金より劣り居候ニ付、右ニ見競、不及是非、壹分銀之方は不殘吹潰、文政度之貳朱銀

ニ吹直し、保字丁銀之方も、今一級位を進め、文政度之割合ニ直シ吹替被仰付、左候得ば金之方ニ而ハ、舊法之通小判壹分判ニ限り、銀之方ニ而は貳朱銀丁銀而已、此外ニ壹朱之永樂錢とも、都合五等ニ約し、通用被仰出候はゞ、金銀共、先は其舊位ニ復シ、格合も凡相當ニ相成、諸物之價も自然と其所を得、御德化國々江溢れ、士民擧而、萬歳を可奉祝儀と奉存候、乍去右樣勘辨仕取計候而も、末凡七百五拾萬兩餘も耗損可仕哉、此補方工夫は、別紙を以奉申上候事、

但淡路廢帝天平寶字四年ニ、金銀銅三等之錢を鑄立られ、其通用之法ハ、金錢壹文を以、銀錢拾文ニ當り、銀錢壹文を以銅錢拾文ニ當て行はる、是則日本之法則と相成、慶長金銀、元文金銀、通用之割合も、粗此法ニ當リ申候、依而前條奉建白候、金銀品位御改革之法も、此規矩ニ據り、勘考相定候而、猥に私意は相加不申候事、○中略

御尋ニ付別紙凡仕法書、并金銀錢之御見本十品相添、不顧恐極密此段奉申上候、以上、

卯九月　　後藤三右衛門

新古貨幣比較

〔享保集成絲綸錄三十二〕正德四年甲午五月十五日

新古金銀割合之次第

一慶長の古金は、只今通用の金に拾割增、右慶長の古金（世上に、おほく往古金と稱す、）壹兩には、只今通用の金貳兩を用ゆべし、今度被仰付候新金は、すなはち此古金と其品同じく候故に、其割增も又これに同じ、

附只今通用の金と、元祿の金とは、其品に高下ありといへども、其形の大小あるを以て、此二品は其差別なく、一樣ニ用ゆべし、但し只今通用の金と、元祿金とを引替候例、元祿金百兩につきて、分金として、只今通用の金貳兩貳分ヅヽを增し加へ來り候處ニ、もし其法を改められ候ハヾ、元祿金を所持し候者のために不可然によりて、自今以後も引替所ニおいて、此二

品の金を引替候にハ、歩金の法ハ、只今迄の例の如くなるべき由を定られ候、

一慶長の古銀は、只今通用の銀ニ拾割增、右慶長の古銀（世上において、往古銀と稱す、）壹貫目には、只今通用の銀貳貫目を用ゆべし、今度被仰付候新銀ハ、すなはち此古銀と其品同じく候故に、其割增も又これに同じ、

附只今通用の銀、凡寶永七年以來出來る所の品々（世上において、中銀三寶四寶と稱す、）其差別なく、一様に用ゆべし、

一元祿の銀は、只今通用の銀に六割增、右元祿銀（世上において、元字銀と稱す、）壹貫目には、只今通用の銀壹貫六百目を用ゆべし、

一寶永始の銀は、只今通用の銀に三割增、右寶永始の銀（世上において、寶字銀と稱す、）壹貫目には、只今通用の銀壹貫三百目を用ゆべし、

此割合次第は、別紙の定書に相見候ごとくに、今度被仰付候新金新銀、世上にあまねく流布し候迄の間は、新古銀をえらばず、皆々通用あるべきために定めらるゝ所に候、就中只今通用の銀の事は、慶長の古銀に引くらべ候に、其品大きに同じからず候へば、其品々に應じ候て、割增を定められ候はゞ、公儀御費用にも及ばずして、慶長御定の品の如くになし返さるべき事に候へども、世のためにおいては、其損失あるべき事に候を以て、わづかに拾割增の法ニ定められ候て、其不足の所においては、公儀御費用を以て償はれ候所にて候、是則前御代の御旨によられ天下後代迄のために御沙汰有之事に候條、よろしく其旨を相心得候て、此定を相守べき者也、

（寶曆集成絲綸錄二十六）延享元子年六月

金銀吹替以後、古金銀、末世上ニ相殘有之樣相聞候間、元文元辰年定之通、古金者六割半、古銀ハ五割增之積りを以、古金銀相交通用可致事、

但古金銀と有之者、慶長金銀幷正德年中より吹改、去ル午年迄通用致候金銀之事ニ候、

一御年貢諸運上を始、公儀江納候類、幷合力或奉公人給金、諸商賣物代等、其外金銀ニ而取やり之儀、唯今迄之通、文字金銀通用居置、古金銀は右割合を以通用可致事、

一古金銀引替をおくれ候歟、又右之古金銀引替申度者ハ、金銀座江出し、勝手次第引替可申候、尤古金六割半、古銀ハ五割増之積りを以、引替候筈ニ候事、

右之通可相心得候、且辰年吹替以來、又候金銀吹替可有之抔と取沙汰有之候由相聞候、此以後決而其儀無之事候、世間金銀手廣通用之ためニ候條、末々之者心得違無之樣ニ、能々可申聞候、以上、

右之趣可被相觸候

六月

寶曆三酉年十一月

灰吹銀潰銀等、銀座江差出候樣、先達而御觸有之候處、銀座江取上ニ成候樣心得違候哉、御觸以後、右之類銀座江差出候者無之由、依之灰吹銀潰銀位ニ應じ割合を以代り銀相渡之旨、銀座年寄書付差出候、右割合左之通、

一上灰吹銀百目ニ付　代り銀百四拾目

一櫛笄幷銀道具類百目ニ付　代り銀百四拾目

一元祿銀百目ニ付　代り銀八拾九匁六分

一寶永銀百目ニ付　代り銀七拾目

一中銀百目ニ付　代り銀五拾六匁

一三寶銀百目ニ付　代り銀四拾四匁八分

一四寶銀百目ニ付　代り銀貳拾八匁

右之積を以、員數小分ニ而も銀座江買入、代銀相渡候間、不貯置町内限ニ取集、銀座江差出候樣、町中不殘入念可相觸候、以上、

十一月

三奉行江

〔天保集成絲綸錄九十〕寛政十午年五月

慶長以來、於銀座吹立候慶長銀、元祿銀、寶永銀、永字銀、三寶銀、四寶銀、享保銀之分、吹改候度毎、通用ニ不相成銀ニ付、不貯置其時々銀座江差出新銀と引替可申旨相觸候處、不殘引替ニ不差出、當時右口々古銀之分、引替殘有之哉ニ付、當時通用無之品、貯置候而も無益之事ニ付、猶又此度年限相立候間、當午五月より來ル酉年五月迄、三ヶ年之間ニ早々銀座江差出、通用銀ニ引替可申候、則右代銀左之通、

一慶長銀拾貫目ニ付　此代通用銀拾壹貫貳百目

一元祿銀拾貫目ニ付　此代通用銀八貫九百六拾目

一寶永銀拾貫目ニ付　此代通用銀七貫目

一永字銀拾貫目ニ付　此代通用銀五貫六百目

一三寶銀拾貫目ニ付　此代通用銀四貫四百八拾目

一四寶銀拾貫目ニ付　此代通用銀貳貫八百目

一享保銀拾貫目ニ付　此代通用銀拾壹貫貳百目

右之通定、代リ銀ヲ以、銀座において引替候筈ニ候間、此節より右年限中、古銀所持之者は、江戸京大坂長崎銀座江勝手次第差出引替可申候、萬一心得違ニ而、不引替向も於有之は、吟味之上、急度可申付候、

〔吹塵錄十八〕安政二卯年十一月

古金銀引替差出方之儀先年より度々相觸、是迄分増御手當等も被下、追々引替差出候向も有之候得共、未引替殘有之候ニ付、此後引替差出候者江ハ、道法之遠近ニ不拘、猶又相増候割合左之通、

慶長金武藏判金	百兩ニ付代リ	金貳百七兩
元祿金	同斷ニ付代リ	金百四拾三兩
享保金	同斷ニ付代リ	金貳百拾三兩
元文金	同斷ニ付代リ	金百貳拾兩
文政金眞字貳分判五兩判	同斷ニ付代リ	金百四兩貳分
元文銀	拾貫目ニ付代リ	銀拾三貫九百三十匁
文政銀	同斷ニ付代リ	銀拾貫六百九拾目
古貳朱銀	百兩ニ付代リ	金百八兩
新貳朱銀	同斷ニ付代リ	金百壹兩

右之通増歩御手當被下候間、聊も不貯置、銀座并江戸京、其外諸國引替御用相勤候者共之内江差出、早々引替可申候、若此上貯置候者於有之は、糺之上急度可及沙汰候間、御料は御代官、私領は領主、地頭より其旨相心得、入念可申付候、

右之趣向々江不洩様可被相觸候

十一月

〔吹塵錄十八〕安政六未年六月廿九日太田備後守殿御渡

古金引替差出方之儀、今度小判、壹分判吹直、并保字小判、壹步判步増通用被仰出候ニ付、此後引替差出候者江は、道法遠近ニ不拘、御手當相増候割合左之通、

一慶長金武藏判　百兩ニ付代り　金貳百五拾八兩
一元祿金　百兩ニ付代り　金百七拾八兩
一乾字金　百兩ニ付代り　金百三拾五兩
一享保金　百兩ニ付代り　金貳百六拾六兩
一元文金　百兩ニ付代り　金百五拾兩
一眞字貳分判文政金　百兩ニ付代り　金百三拾兩
一草字貳分判　百兩ニ付代り　金百貳拾三兩
一五兩判　百兩ニ付代り　金百五兩

右之通増歩御手當被下、引替人御手當之儀は、是迄之通都而百兩ニ付金貳分宛被下候間、聊も不貯置、江戸京大坂其外諸國引替御用相勤候者共之内江差出、早々引替可申候、若此上貯置候もの於有之は、糺之上急度可及沙汰候間、御料は御代官、私領は領主、地頭ニ而其旨相心得入念可申付候、

右之趣向々江不洩樣可被相觸候

六月

〔金銀御吹替次第三編三〕七月（○安政六年）四日御觸到來、銀座植村定八郎請取、

太田備後守殿御渡候御書付寫

大目付江

古金銀差出方之儀、今度小判壹分判吹直、幷保字小判壹分判吹直、幷保字小判壹分判歩増通用被仰出候ニ付、此後引替差出候者江者、道法遠近ニ不拘、御手當相増候割合左之通、

一慶長金武藏判　百兩ニ付　代金貳百五拾八兩

一元祿金　百兩ニ付　代金百七拾八兩
一乾字金　百兩ニ付　同百三拾五兩
一享保金　百兩ニ付　同貳百六拾六兩
一元文金　百兩ニ付　同百五拾兩
一眞字貳歩判 文政金　百兩ニ付　同百三拾兩
一草字貳分判　百兩ニ付　同百貳拾三兩
一五兩判　百兩ニ付　同百五兩〇中略

右之趣向々江不洩樣可被相觸候

〔金銀御吹替次第三編四〕正月〇萬延元年廿六日御觸書

大目付江

外國交易ニ付、貨幣釣合不宜候間、追而鑄改被仰出候迄、左之通通用可致、尤引替之儀者、追而可及沙汰候、

一保字小判壹兩　金三兩壹分貳朱
一同壹分判　金三分壹朱
一正字小判壹兩　金貳兩貳分三朱
一同壹分判　金貳分三朱

右之通相心得、來ル二月朔日より外金と取交兩替無滯通用可致候、
右之通可被相觸候

〔吹塵錄十八〕萬延元申年四月十四日內藤紀伊守殿御渡

古金類引替差出方之儀、今般保字正字小判壹分判步增通用被仰出候に付、此後引替差出候者江

は、道法遠近に不拘、御手當相增候割合左之通、

一慶長金武藏判　百兩に付代り　金五百四拾八兩
一元祿金　同斷に付同　金三百七拾八兩
一乾字金　同斷に付同　金三百四拾七兩
一享保金　同斷に付同　金五百六拾五兩
一元文金　同斷に付同　金三百四拾貳兩
一眞字貳分判文政金　同斷に付同　金三百四拾貳兩
一草字貳分判　同斷に付同　金三百拾三兩
一五兩判　同斷に付同　金貳百七拾三兩〇下略

〇按ズルニ、右古金引替ノ增步ハ、安政二年十一月ニ、慶長金武藏判百兩ノ代リニ貳百七兩ヲ給セシニ、同六年六月ニハ、貳百五十八兩トナリ、後僅ニ二年ヲ踰テ、今玆五百四十八兩トナリシハ、是皆外來銀ノ價格ヨリ來レルモノナリト云フ、

元治二丑年五月十四日水野和泉守殿御渡
古金銀類引替差出方之儀先年ゟ度々相觸、是迄增步御手當等被下、追々引替差出候向も有之候得共、未引替殘有之候ニ付、此後引替差出候者江は、猶又相增候割合左之通、

一元文銀　拾貫目ニ付　代銀拾九貫目
一文政銀　同斷ニ付　代銀拾五貫目
一保字銀　同斷ニ付　代銀拾壹貫目
一古貳朱銀　同斷ニ付　代金百六拾兩
一文政貳朱銀　同斷ニ付　代金百拾五兩〇中略

右之趣不洩樣可被相觸候

五月

慶應二寅年四月水野和泉守殿御渡

天保度吹立貳朱金の儀、通用停止引替之儀、去々子年四月相觸置候得共、兎角引替方遲々致し候ニ付、向後通用可爲停止、就而は引替御手當、是迄百兩ニ付三拾兩之處、六拾兩被下候間、所持之者は、早々引替可申候、

右之通可被相觸候

四月

慶應二寅年五月水野和泉守殿御渡

保字正字金共、夫々新金と引替候筈の處、兎角心得違ニ而、持貯候もの有之哉ニ相聞候、慶長以來古金之儀も、先達而被仰出有之候得共、是又同樣貯候者有之哉ニ相聞、不埒之事ニ候、古金正保金共、來る辰年十二月を限り、引替差出可申、是迄古銀類被盜取、其品出候節は、相觸置候通、増步を以引替被下候得共、右期限已後は、糺之上其品取上、咎申付候間、其旨相心得可申候事、

右之通可被相觸候

五月

〔憲法類編九國法〕古今通用金銀銅錢定價ノ事

戊辰〇明治元年閏四月　日御布告

大政御一新ニ付、宇內貨幣之定價、御吟味之上、古今通用金銀銅錢等、別紙之通被仰出候間、支配末々迄、不漏樣可相觸者也、

別紙略〇中

一慶長金（小判一分判）　百兩目方四百七十六文目　内（金四百〇一文目二二六 銀七十四文目七七四）
　此通貨九百〇五兩一分二朱換
一武藏判　右同斷
一乾字金　百兩目方二百五十目　内（金二百十文目〇七三 銀三十九文目二七）
　此通貨四百七十五兩二分換
一元祿金（小判一分判二朱判）　百兩目方四百七十六文目　内（金二百七十三文目〇六三 銀二百〇二文目九三七）
　此通貨六百三十五兩三朱換
一享保金（小判一分判）　百兩目方四百七十六文目　内（金四百十三文目〇九六六 銀六十二文目九三四）
　此通貨九百三十兩一分二朱換
一古文字金（小判一分判）　百兩目方三百五十目　内（金二百三十目 銀百二十目）
　此通貨五百二十八兩二分二朱換
一眞字二分判　百兩目方三百五十目　内（金百九十七文目四六五 銀百五十二文目）
　此通貨四百六十兩換
一文政金（小判一分判）　右同斷
一一朱金　百兩目方六百目　内（金七十二文目三二八七 銀五百二十七文目六七一三）
　此通貨二百二十七兩一分三朱換
一草字二分判　百兩目方三百五十目　内（金百七十一文目一二 銀百七十八文目八八九）
　此通貨四百〇四兩二分換
一古二朱金　百兩目方三百五十目　内（金百〇二文目六六六六 銀二百四十七文目三三三三）
　此通貨二百六十兩〇三朱換

切金
疵金
輕目金

一五兩判　百兩目方百八十目　内金百五十一文目七二四　銀二十八文目二七六
此通貨三百四十二兩一分二朱換

一保字金一分判小判　百兩目方三百目　内金百七十目三二二六　銀百二十九文目六七七四
此通貨三百九十六兩二分一朱換

一正字判一分判小判　百兩目方二百四十目　内金百三十六文目二五八　銀百○三文目七四一九一
此通貨三百十七兩一分換

一安政二分判　百兩目方三百目　内金五十八文目六六六六　銀二百四十一文目三三三
此通貨百六十一兩三朱換

一元祿大判　一枚目方四十四文目一分　内金二十六文目六一五四　銀十六文目二四七五　銅一文目二三七
此通貨六十一兩一分三朱換

一享保大判　一枚目方四十四文目一分　内金三十四文目六　銀七文目九　銅一文目六
此通貨七十八兩一分換

一慶長大判　右同斷

一新大判　一枚ニ付目方三十目　内金十一文目　銀十六文目　銅三文目
此通貨二十六兩二分一朱換〇下略

〔享保集成絲綸錄三十二〕寶永二酉年十月

御藏金幷世間通用之金共ニ、切れ有之候小判、只今迄兩替屋方ニ而、歩銀を取候由、向後者切レ有之候小判ニ而も、遣方障り不申、小判歩銀取申間敷候、但小判をれ候而、遣方滯可申分ハ、後藤方江差越、歩銀を出し、疵無之金と引替可申候、兩替屋其外之商賣人方ニ而、歩銀取候之儀、可爲停止候、

以上、

十月

〔草茅危言三〕金銀幣之事

一世ニ輕目金切金トテ通ゼヌアリ、不自由ノ上差構ヒ多キコト也、是官ヨリ兼テ令モ下リ、カマヒナク通用スベシトノコトニテ、切金ハ、二ツニチギル、迄用ユベキ官命アレドモ、兎角行ハレズ、此行レヌニ二ツノ子細有、一ツニハ、下ヨリ官ニ金子ヲ納ル時、有司ノ私ノ働トモナル故ニヤ、右ノ二種ノ金ハ、必ズ斥ケラルトキク、是ハ自ラ令シ自ラ犯スト云ニ似タル者ナレバ、民間ニテアヤブミ通用ニ障ル也、又一ツニハ、士大夫以下一通ノ平民マデ、自分ニ金子ヲ受取ル時ハ、何ノ心付モナク、夫々兩替ニ遣セバ、右ノ二種ヲ云立テヽ、價ヲ落シテ是ヲ取ル、故ニ皆皆思ヨラズ損失ヲスルコト也、サテ兩替ノ手ニテハ、多ノ金子ノ中ニ取雜ルユヘニ、入時ハ價ヲ減ジ、出時ハ常價トナリ、コヽニテ私利ヲ營ム故、兩ガエニテ二種ノ通用ニサハルヲ喜也、此二ツトモ、甚ダ然ベカラザルコトナレバ、何トゾ改テ令ヲ布カレ、右ノ二金、勝手次第上納ニ取雜ユルニ嫌ナカルベシ、兩ガエニテ二言ナク通用スベシ、若以後兩ガエニテ、二金ヲ彼是ト申ス者アラバ、早ク訴ヘ出ベシ、兩ガエヨリ金ノ多少ニ應ジ、金主ヘ過料ヲ出サシムベシト有ナバ、此害速ニ消弭スベシ、

〔正寶事錄〕享保六年六月四日

一慶長古金之內、きれ金、又は金目輕く成候も有之、通用差支候由に候間、向後ハ小判之內三分迄之きれ一ケ所、金目三厘迄輕き分、并壹分判も少々之疵目輕く候共、無滯通用可仕候、右之分ハ上納金にも、後藤方にて包申筈候、勿論新金も右に可准候、此外ハ只今迄之通を以、金座江差遣之、直させ可申候、若通用之きれ金目輕き金より、歩銀取候者於有之ハ、急度曲事可申付候、

〔享保集成絲綸錄三十三〕享保八卯年三月

覺

慶長金幷新金共に、小判之内三分迄之切有之、金目三厘迄輕き分、壹分判も疵有之、金目少々輕く候共、無滯通用可致旨、去ル丑年相觸候處、通用滯候由相聞え候、依之自今切レ疵大小に無構致通用、金目之儀ハ、只今迄之通、三厘以上輕き分ハ、直シ金に仕べし、諸國在々御料私領共、右之段相心得、諸商賣物代金爲替金等、無滯取引仕べし、若滯所々有之候ハヾ、可訴出旨急度可申付候、以上、

三月

享保十一午年九月

疵金輕目金通用之儀、去る丑年卯年兩度相觸候處、今以通用相滯候由相聞え、自今彌無滯可致取引旨、諸國兩替屋共江も、此旨支配々々より急度申渡、若又武家方幷町方百姓等、不請取者も有之ば兩替屋方ゟ、其支配々々江申出候筈に申付候間、武家方町方百姓末々まで、無滯可致通用候、若此以後、彼是申、致難澁、歩銀等取候兩替屋有之ば、其所之支配江早速可訴出候、吟味之上、急度可申付候、

右之通京大坂ハ不及申、諸國一統、武家町百姓等迄相觸候間、當地之兩替屋は不及申、諸國之兩替屋共迄此旨相守、可致通用候、若難請取旨申族於有之ハ、早速其所之支配江訴出可申候、吟味之上ニ、急度可申付候、依之猶又此度相觸候間、可得其意候、

九月

〔寶曆集成絲綸錄二十六〕延享二丑年閏十二月

頃日切レ金疵金等、通用不自由ニ相成候由、畢竟諸國在々諸商人共、切疵金嫌ひ、國々爲替金等ニも、疵金等撰候故之事ニ相聞候、前々も被仰出候通、自今小判壹分判共ニ、切レ疵へげ疵大小無構、切れはなれ候迄、可致通用候、輕目金之儀は、小判者四厘迄、輕キ分致通用、壹分判も右分量を以、輕

分疵金共、無滞可致通用候、此旨諸國在々御料私領共、右之段相心得、兩替屋を始、諸商賣物代金爲替金等、無滞可致通用候、若又武家方幷町方百姓等、不請取者有之者、兩替屋ゟ其支配々々江可申出候、此以後彼是致難澁、萬一歩銀等取候兩替屋有之候者、其所之支配江早速可訴出候、吟味之上、急度可申付事、

右之趣江戸京大坂者勿論、其外御料者御代官、私領ハ領主地頭より、急度可申付候、以上、

閏十二月

寛延三午年五月

切レ金通用相滞候ニ付、小判壹分判とも、切疵へげ疵大小無構、切レ離候迄、輕目金之儀者、小判ハ四厘迄輕分、壹分判も右分量を以、無滞可致通用旨、先達而相觸候處、大切レ金、多分世上ニ流布いたし、右體之切レ金請取候而、切離候得者、請取候者難儀之筋ニ候、依之自今小判者、五分迄之切レ金、幷輕目ハ四厘迄、無滞可致通用候、但五分以上之切金ハ勿論、五分以下之疵金共ニ、輕目ハ四厘内ニ而も、形かけそこね、穴明キ候歟、又者疵數ヶ所有之類者、金座江差出、定法之通ニ而、直させ可申候、若五分以下之疵、四厘内之輕目ニ而、形かけそこねざるを、武家方幷町方百姓等、不請取者有之ハ、兩替屋ゟ其支配々々江可申出候、且又此類之通用可成金ゟ、歩合取之候兩替屋有之候者、其所之支配江早速可訴出、吟味之上、急度可申付候、

右之趣江戸京大坂者勿論、其外御料者御代官、私領ハ領主地頭ゟ、急度可申付候、以上、

五月

古事類苑

泉貨部六

金銀貨下

古事類苑

泉貨部六

金銀貨下

〔金位幷金吹方手續書〕金吹方之事

一山出金其外吹金類、後藤江相渡候歟、或ハ買上金ニ而も、金座人江渡、位改致し、譬ば凡六拾目位ニ而、文字金之位ゟ宜敷品ニ而も、山氣銅氣有之候故、又蠟氣共唱ふ右交り物拔候ため、一旦燒詰候事、

但金吹方之儀は、都而金座人取扱候事ニ候、

燒金方手續

一山出金其外吹金類、都而位宜敷金氣多キ儘燒候而は、交り物燒拔兼候ニ付、縱令ば六拾目位之金目、性合を見定メ、位戾しとて、七拾目位、或ハ八拾目位、其餘ニも位を下ゲ候ため、銀と鉛を入、

但譬へば六拾目位之金目ハ、其品ニ寄、七拾目位ニ銀を加へ候事ニ候、鉛は金之出所ニ寄、見計砕候爲に入申候、

吹戾し鑄形江入棹金ニ致し候上、砕金と唱、又火江入吹立湯にして、

但湯加減あり、砕金ニ致し候吹入方は、土間に床を附ケ、直ニ金を入吹立、湯ニ成候時、鐵杓子ニ而汲ミ、鐵盤江明ル、

鐵之上ニ而、石ニ而細に砕き候を砕金と云ヒ、右砕金を銅ぶるひにてふるひ分け、荒物、中物、ミヂンと、三段に引分候而、貫目を改糺候上、鹽江交ぜ、ほうろく江盛り、數三拾程ヅヽ燒候事、

但、燒金場、別紙圖之如く、庄三郎役人壹兩人、金座人五六人立會、工者成細工人五六人附切り、炭之繼方惡敷候得ば、鹽流れ候由ニ付、直ニ鹽を盛り足シ、終夜燒、翌朝火より上ゲ、湯ニ而鹽を洗落し、鹽出し置、夕方又前書之通鹽へ交ゼ、右同樣取扱、終夜燒候事三夜程ニ而、燒上り申候、然共金之性ニ寄、四五度も燒不申候而は、山氣蠟氣拔兼候も有之候間、大體色合等宜敷見候得ば、五匁か拾匁程試吹致し、打延し見候而、延ビ兼、或はひゞわれ候得ば、又燒直候故、度數定候儀無之事、

一右燒上り試吹之上、宜見江候得ば、日々湯ニ漬、五六日ヅヽ鹽氣去り候節又試吹致シ、位改極り候節は、小寄セニ而寄吹、棹金ニ致し、一本毎ニ目方掛改候事、

一右燒金ニ用候炭は、紀州邊より出候、大きなる炭ニ無之候而は用立不申候間、隨分撰候而用ひ申候、炭性惡敷候得ば、三度燒ニ而上り候、金も五六度程燒候樣ニ成り、却而入用も相增候事、

一右燒金致候炭之つぎ方、其外取扱候躰ニ無之候而ハ、燒方不宜候事、

一燒金夕方より火を入レ、終夜燒候儀、前々ゟ申傳ニ而、長夜短夜ニ不拘、四季共ニ夜燒之方金之燒上り宜敷、自ら失墜も不掛由ニ付、倘又此度糺之上、早朝より火を入、晝燒も爲致試候處、夜燒之方、陰分ニ而宜敷趣ニ相見、其上晝燒ニ而は、暮におよび燒上り、金取上ゲ候ニ付、手都合不宜、夜燒は翌朝に至り取上ゲ候故、取扱方致し能御座候間、此度も兩三度晝燒[illegible]ミ、其餘は不殘終夜掛、御勘定方附切、夜燒而已爲致候事、

一右之通數度燒候得ば、山氣幷差鉛等拔候故、元貫數減候得共、金之性ニ寄り候間、燒減り定法等ハ無之事、

一右燒金致し候鹽を湯ニ而解き、金を取上ゲ候跡、大桶ニ入、湯を汲込置候笊之內、數篇糊入紙ニ而張り、桶之上江右之笊を置、日々鹽水を汲込、水をこし拔候得ば、鹽笊一はいに溜り候を、水鹽

銀と唱候事、

一右燒金ニ用候ほうろく、能洗落候上、石臼江入、搗キ碎き、水にてゆり候得ば、少々宛金氣出候、是等を下鉢と唱候事、

寄吹之事

一右燒金試吹之上、小寄吹致し、棹金ニシテ貫目掛改、夫より大寄吹と唱、右小寄吹之棹金を大吹致し、又棹金にして目方位等、金座人改メ候事、

此寄吹は燒金上り候分、紙ニ包、蓬砂少し交、茶碗之内江入れ吹候事、

但茶碗は紀州燒、黒キ藥之懸り候茶碗なり、之を留茶碗と云、外々之茶碗は、割れ候而用立兼候由、金を紙に包候ハ、碎き候細成金故、外江不散ため懸紙致し候、包紙之儘直に吹入、蓬砂は金を能シメ寄セ、金ニ含候故、鹽を燒拔候爲入候由之事、

小寄吹は、金之湯ニなり候を鑄形江汲あげ、棹金ニ致し、夫を水江入さまし、棹金一本毎に目方掛改、帳面江記し候、是を小寄吹といふ、

又右之小寄吹致し候棹金を、留鉢江入吹直、

但留鉢も留茶碗と同出所ニ而、黒き鉢なり、又ブツ切鉢と云、

程能き節、小さき留茶碗ニ而、鑄形江汲入、棹金ニ成ル、茶碗ニ而汲兼候程、少く成候得ば、留鉢を挾上ゲ、鑄形江明ケ流し、其棹金を小寄吹之通、水江入さまし、一本ヅヽ掛改候を、大寄吹と云、又右之小寄吹大寄吹ニ用候、留茶碗留鉢共、其度々に石之臼江入、搗き碎き細かにして、木鉢江入、水ニ而汰り、金氣木鉢ニ殘候を取上ゲ、其外吹所之床土をも能改、右吹方に遣ひ候火をもしめし、留茶碗留鉢と一緒に粉にして、水にてゆり、金氣出候を集め、目方掛改寄吹仕候、右下鉢も又又取集、水ニ而汰り候得ば、少々ヅヽ金氣出候儀、際限も無之事ニ候、併再三取上り候上、餘り少

分之下鉢ニ成候得ば、入用而已懸り候故、其儘桝抔に集メ置、吹方有之節之下鉢と一緒に汰り集候得ば、金目出候由、勿論下鉢汰り候ニは、汰桶有之水を汲込置、其水之内ニ而汰り分ケ、時々に右水をも汲捨、底に有之屑取上ゲ、汰り分ケ候事、

又小寄吹大寄吹之棹金に致し、ひゞ割候儀も有之候、是は蠟氣燒拔兼候歟、鉛氣を含居候歟、又は吹方之若キ故も有之候間、再吹致し、棹金ニ成り候得ば、金吹方湯加減惡敷ニ候、且吹直し候而も、ひゞ割同樣ニ候得ば、再三評議之上不殘燒直し申候、尤本吹にては出來上り能、下鉢吹寄之分、ひゞ割候儀、間々有之候、右下鉢は吹所土間掃寄候炭、其外種々搗碎き汰り上ゲ候もの故、銅氣山氣等にあやかり候儀有之哉之由、後藤役人幷金座人共申之候事、

判合之事

一大寄吹之棹金、貫目位等改札之上、彌銅氣も無之、位何拾何匁之位と極り候得ば、拾匁或は貳拾目程ツヽ、文字金位ニ成候差銀之割合を以、譬ば棹金位五拾壹匁貳分位と見極候得ば、其位差銀定法通割合、前後壹分たがひの差銀割合共、三段程に仕出試吹致し、文字金之手本金ニ合セ、其内ニて少しも違無之方江極メ、其上ニ而不殘棹金にして、貫目江差銀致し、文字金位に吹入、又棹金にして貫目掛改、壹本毎に目方書付候を判合と唱候事、

右吹入方仕法、前之大寄吹と取扱方同前にて、留鉢之内江金と留吹銀とを入、吹立加減宜節、火を除け、留茶碗ニ而鑄形江汲込、棹金ニ成リ候事、○中略

延金之事

一判合と唱、文字金位ニ成候棹金、尙又貫目掛改之上、棹金を火に入なまし、薄く打延し候を、延金と唱候事、

此延金之儀は、火に掛なまし、鐵床之上ニ而打延、壹本毎に、元之如く番付附置申候、延金長サ

凡貳尺五六寸、幅三寸位ニ成候を、貫目掛ケ改、後藤役所江差出候得ば、延金之中程江大桐之極印を打、金座人江渡、直ニ其場所ニ而、右極印之中ゟ貳ツに切、一ツは別紙圖之如く、貳所ツヽ、タガチにて切懸致し、後藤役所内之銅氣改場ニ而、火ニ掛なまし切掛候所、槍を以摺り附水江入、後藤人兩三人宛にて改、又一ツは長五六寸、幅八九分程ニ切、拔石に付能樣に丸ミを附、金座人位を改メ、手本金ニ引合候上、後藤役人江差出し、年寄役之もの兩三人にて、外之石ニ付、庄三郎役所ニ有之候、文字金之手本ニ合セ位改、若銅氣或ハ位ニ善惡之狂ひ有之候得ば、切碎金座江差戻し、尚又燒入吹直候事、

右銅氣有無は勿論、并文字金位ニ無相違極り候分は、延金之縁り通江、桐之極印透間なく打、金座江相渡、是を定法成り金と唱、右之極印を以、始終改濟之證據ニ致候事、

右極印打候延金を、金座人詰所ニ而、小判之下拵荒切と唱へ、壹兩之目方ニ仕立、減を見込、前ケ條ニ有之候、極印壹宛附候樣に切おろし、夫を一ツ毎目方掛改、若掛目不足ニ候得ば、屑物に除ケ置、目方足分計り、總目掛改候事、

但荒切之目方改候を中揉と唱、尚其上一ツ宛懸ケ改候を眞揉と唱申候、

右屑物も目方掛改之上、少々にても留茶碗江入、吹寄棹金にして打延し、其度々改方は、前條同事ニ取扱、小判ニ切おろし、尚又切屑出候得ば、右同樣取計申候、尤餘り屑物目方少分ニ成候程、夫計りにては、燒詰り位昇り候間、其程を見計、跡吹方有之候得ば、其內江入潰候歟、若跡吹方無之候得ば、右屑物吹寄目方改之上、其儘御金藏江上納致し申候、右切おろしにて出候屑物を切出と唱候事、

細工所取扱之事

一細工所は、吹屋と唱、別に小屋有之、金座人之內、吹所棟梁と申者、往古ゟ連綿相續致し、都而小判

小粒ニ仕立候、細工方司り取扱候事、

右金座役所ニて、荒切とて、小判之目方ニ一ッ宛切オロシ候を、兩數目方改之上、吹屋棟梁江渡、尙又改等致シ、細工人共大勢ニ而、荒切之金を火江入なまし、石之上ニ而、壹ッ毎に、極印無之緣之方計を打延し、小判之形に成り造る、是を杓子小判と唱候事、右杓子小判ニ打延候分、員數取揃、後藤役所江出ス、尙兩數懸目共、幷極印改之上、極印を目當ニ、小判之形ニ成候方江計り、又極印を打、金座吹屋江渡す、是を打替と唱候事、

右打替極印受、金座ゟ吹屋へ受取、前之如く員數改之上、火江入なまし、貳度目改之節、打候極印之方ハ、打消し不申樣取扱、初之極印之方計打延し、四方小判之形に成候を火江掛ケなまし、一體ニ打ならし、横竪寸法を合せ、夫より鏟目を打、端打等迄致し候得ば、小判之形に出來上り候を青小判と唱、直ニ裏之方江、金座ニ而小極印打候事、

但打替極印ハ薄く殘候事

右青小判を員數等改、金座人より後藤役所江出ス、夫を後藤役人共改之上、貳度目打替極印目當ニ致し、本極印打候分左之通、

桐極印　壹兩極印　名判極印　裏判極印　文字極印

右極印打揃、金座江渡、細工所江廻り候節、又火江掛なまし、端タ打致し候分、薬ダハシを以、胴すりさて、鹽ニて磨き、夫より色附候事、

但右細工中、へげ疵等出候分ハ除置、又火江懸ケ燒候而、打直し候事、

右色付薬法左之通

ラウハ壹貫目　蓬砂五拾貳匁　鹽硝三百貳拾目

薫陸百六拾目　タンタン七百目　鹽壹貫目

右藥ニ出來小判を入取上ゲ火ニ懸ケ燒附、鹽ニて磨き洗ひ、又藥ニ入、右之通燒付、都合貳篇ヅヽ色付候事、

前書手續之通取扱文字金ニ成、

壹分判仕立方之事

一前條文字金位延金成り金迄之手續同斷、其後壹分判之仕立方、庄三郎役所極印打候節〻、取扱方違ひ候事、

右分判ニ仕立候延金ハ、一旦上下ニ計り、後藤印並べ打候を、金座詰所ニ而、巾四五分程ヅヽ竪ニ挾ミ切ル、是を分棹と唱へ、不殘庄三郎役所ニ出ス、則上下極印有之候を目當ニ致シ、分棹ニ又極印を透間なく打候而金座へ渡候事、

右極印打候分棹、金座入火にかけなまし、壹分判之凡形ニ挾ミ、仕立減りを見込、一ッ宛目方掛改候事、

但小判之荒切仕樣同斷、中揉眞揉と唱再應改、其外取扱方手續小判ニ同じ、

右一ッ毎に改之極印壹ッ宛殘リ候を、分判ニ仕立上ゲ候迄之證據ニ致し候事、

右切おろし候金を、雙方ニ而目方改、吹屋へ渡、大概分判之形に打延候を荒造りと云、右之通打延候得ば、目當之極印薄ク成候間、荒造員數取揃ひ、後藤役所ニ金座〻差出、下地之極印改之上、極印打替、金座へ渡し候事、

右打替極印請候上、細工所ニ而、尙又壹分判之形、ヒヅミ等打直シ、是を淸造りと云、本形ニ仕上ゲ、右打替候極印は薄く殘候を、後藤役所ニ差出候得ば、下地之極印壹分毎に改之上、本極印打候事、

但步判之極印は、裏表共、一度ニ打候道具有之候事、

右極印濟候分金座へ渡、細工所ニ而員數尙又改之上、笊江入、砂ニ而磨き候上、色付方小判之通り、貳度ツヽ燒附、皆仕上ニ成候事。○中略

下鉢之事

一前條燒金幷寄吹之箇條ニ記し候通、都而金吹方取扱候節、下鉢と唱、聊ニても金氣付候ものは、手之屆候丈は取上候事、

〔小判製之記〕小判所初發之事

佐渡國金銀山御所立之初發者、山出筋金砂金灰吹銀ニ而、江戸駿府兩所御金藏江上納ニ相成候由、其頃者筋金請座與申場所有之候由、山出筋金ヲ買取、兩目吹揃上納仕候儀ニも御座候哉、仕法相知不申候由、且其砌者、金銀山大盛ニ而、出方多く、國中御物成之分ニ而者、御入用引足不申候ニ付、年々江戸表より、多分之御金御差下シ有之候、右筋金請座之儀ハ、元和四午年御差留ニ相成、其節より相川町人之內、筋見之者御雇ニ相成、右之者共目利を以御買上ニ相成、前書之通上納仕候處、筋金砂金者上納ニ成、御入用不足之分、多分之御下シ金有之候儀、渡海場ニ付、萬一異變之處も難計候間、山出金之分、佐州ニ而小判ニ吹立、金銀山之御入用御渡方ニ相成候ハヽ、江戸表より御下シ金も不及可然候間、後藤庄三郎手代、佐州江詰切可被仰付哉之旨、元和七酉年御窺有之候處、同年七月窺之通、庄三郎手代幷小判師等多勢被差遣、則當時之場所ニ而屋鋪被下住居仕、山出金之分當地ニ而極小判ニ吹立、金銀山之諸御渡方ニ相成候ニ付、其節より當時寄勝場ニ相成候場所之內ニ、筋金燒所小判延所與貳ヶ所相建、掛リ役人被御附置、小判仕立候處有之、或ハ筋金高之內ニ而御間燒有之、附口金所之右割合を以小判仕立、筋金拾貫目ニ付、諸入用印銀何程ニ而引請可申哉之儀、右附口金を添、町中御觸流有之口入札之上、落札之者江請負被仰付燒立候儀も、元祿九子年より延享三寅年迄者、燒金小判ニ不仕立、後藤座ニ而、慶長金之位相極壹枚目形金拾兩目

程宛ニ仕、延金之儘、江戸上納ニ相成候儀も御座候、且寛永三戌年、新小判座壹軒相建候處、正德年中相止、有來之一軒ニ而、延享四卯年以來、山本之藏一圓、小判ニ吹立、江戸上納ニ相成候處、寶曆二申年は、江戸表より被遣候、御勘定衆御徒目付等立會ニ而、御直燒ニ相成候處、同三酉年御代官支配ニ相成、尙亦町方之者江請負之儀、御觸出有之候得共、望人無之、夫より御本燒ニ相成來り、同八寅年、池田喜八郞殿支配ニ相成、翌卯年春より、廣間役壹人、御目附役壹人、定役壹人並役壹人、年々正月十一日掛り被仰付、前年分山出筋金出來高多少ヲ量り、六月江戸上納之間ニ合候樣、小判所取掛り遲速有之候、山出シ多キ節者、其年秋中より取掛り候儀も御座候、勿論筋見共、兼而目利仕置候筋金之儀ニ付、御用中諸事引請、筋金燒方小判仕立方之義、仕事師共江差圖仕、取計申候、尤年中不怠ニ不相立場所ニ付、仕事師共定御雇者無之候得共、吟味之上、定人小樣三人、吹大工壹人、金洗壹人、板取貳人、鞴指壹人、小遣壹人相極置、爲御手當、月々御拂米買請被仰付、御用中者、御入用之内ヲ以雇入、賃錢相渡申候、且寶曆十辰年寄勝場御補理之節、元形之儘ニ而、當時之場所江引移り、夫より年々引續、當時之場所ニ而、小判仕立申候、

〔銀位并銀吹方手續書〕銀吹方之事

一灰吹銀吹元として、御金藏ゟ相渡候歟、或は世上より古銀灰吹銀買上候而も、銀座役所内、銑場と申處ニ而、銀座人共立合、目方相改候上、銀見役之者、夫々位改致し、右灰吹銀位壹割入、并九步入、五步入位迄者、其儘文字銀位ニ差銅致し、通用銀ニ吹立申候、四步入より下品之銀位ニ候得ば、上銀位一割入ニ吹拔候上にて、差銅いたし通用銀ニ吹立候事、

但八九步入之位ニ候而も、銀之性合惡敷候得ば、一旦上銀壹割入位ニ吹拔候上、吹方致し候事、

位劣り候灰吹銀上銀ニ吹方之事

一灰吹銀位四歩入ゟ下品之分、壹割入上銀ニ吹抜候ハ、銀座糺吹所と申處ニ而、松葉灰三分、紺屋灰を七分、合凡壹升五六合程ニ組合床を作り、

但紺屋灰と申は、椿を燒灰ニ致し、紺屋ニ而用候故之由、

凡五寸四方程、深サ五六分之くぼみを付、其上江縦は位四歩入灰吹銀五百目程を入火を懸吹立、凡鉛五六拾目程、追々ニ差鉛致し、湯ニ成候銀を火箸ニ而廻し、精を取候得ば性合宜敷、銀面鏡之如くニ照り候節、加減見計、宜時分火を取除、銀之上江水を打、其儘にて暫くさまし、取揚水江入洗上ゲ、直ニ鈗場江持參、吹減懸改、銀座手限にて座人立合、銀見役之者位相改、壹割入上銀と定、差銀之性合惡敷候得ば、又候右同樣吹立候事、

但差鉛いたし候ハ、灰吹銀ニ含有之候銅氣鉛氣等、右鉛を以呼出、灰引かせ候爲之由、銀之性合ニ寄、差鉛增減有之候事、

一灰吹銀を文字銀位ニ致し候を取組と唱、左之通差銅致候事、

灰吹銀拾貫目　位壹割入正銀

此差銅拾壹貫七百三拾九匁壹分三厘餘

合文字銀貳拾壹貫七百三拾九匁壹分三厘餘〇中略

右之通銀座鈗場と申處ニ而、座人共立合之上、勘定書ニ引合、夫々銀之位ニ應じ差銅致し、目方掛改候而、一吹分凡拾貳貫目程ヅヽ箱江入、座人共封を付申候、是を取組と唱候事、

一右文字銀位ニ取合せ候を、箱之儘、常是大黑長左衞門圍ひの内に有之候吹所江銀座より持運、壹吹分宛箱を明ケ、員數相改、吹入箱と申候江入替、銀座銀見役之者より、常是手代江相渡申候、

但右は常是方吹所ニ而、普請修復等も、長左衞門手限ニ取賄候得共、銀座ゟ錠おろし封を付、鍵は銀座江預り居、吹方當日銀座人共罷越、常是手代共立合、銀座ゟ入口明させ、雙方手代働

之者共吹所江入申候、尤入口左右江銀座人壹人ツヽ、兩人終日詰切、吹所出入之諸道具人數共相改、吹方相濟差出候節も、銀取扱候雙方手代働之者共著物をぬぎ、髮を解、口をすゝがせ差出、尤最初吹所江這入候上は、吹所內ニ而、食事小用迄致し、一切出し不申事、

一文字銀位ニ取組候分、常是ニ而請取吹立方之儀、炎之留江積炭を懸、雨差吹子ニ而吹立申候、但留と申ハ、壹尺四寸、深サ六七寸位ニ、土ニ而拵候鉢にて御座候、尤右鉢ニ用候土ハ、江戶表之土は用立兼、京都白河山之土を取寄拵候由、炎之留前土羽口等ニも、右之土を用候事、

右留江積吹立候銀銅、湯ニ成能解合候時、常是手代湯入役之もの、鐵杓子を以、湯廻りむら無之樣度々掻廻し、加減宜時分、鐵杓子ニ而湯を汲、丁銀之形江流申候、

但丁銀流し候ハ、長サ壹尺三寸餘、橫九寸、深サ三寸程之箱を總名船と唱、右之內江丁銀之形りに、六ツ宛くぼみを付、且湯底と唱、布を苧ニ而さし、右之形江張り、釘ニ而シメ、あつき湯を一抔入並べ置、湯に成候銀を流候事、

右形江流し、丁銀之形りニ成程能さめ候を、常是手代共、壹枚ツヽはさみ出し、別に、桶江湯を入置、右湯之中江入候事、

一右桶江入候丁銀を、座働之者、銀座手代江相渡、出來高改之上宜分、手之付候銅盆江、三拾枚ツヽ乘せ、常是運び之者江相渡申候、

一右銅盆江乘せ候丁銀、常是運之者請取、銀座人之前江持參、員數改を請申候、常是重役之手代ニも員數改を受、夫々常是手代極印役之者江相渡、極印打候分、左之通り、

常是寶ノ極印　大黒常是ノ像ノ極印　文ノ字ノ極印

右極印揃候上、常是手代共、鐵網江乘セ、火ニ懸ケなまし、笊江入、梅酢江漬引上ゲ、水ニ而洗ひ候上、丁銀之數相改、銀座手代江相渡申候、右梅酢江漬候者、銀之色を引出候爲ニ候事、

但常是方ニ而打候極印之儀は、吹方相濟候得ば箱江入、銀座人封を附、鍵者銀座江取置、極印箱者、常是方江差置申候、

一右梅酢江漬、洗上ゲ候丁銀を、銀座手代共請取、五拾枚ヅヽ箆江入、湯ニ漬候上、布巾を以ふき、員數相改、一吹ヅヽ之出來高帳面ニ記シ、銀座人江手代より相屆申候、

一丁銀壹吹ヅヽ之出來高、端書ニ致し、常是手代重役よりも、銀座人江相達候事、

一右出來丁銀貳百枚ヅヽ、布之袋江入、其上箱ニ入、銀座人立合之上錠おろし、右座人共之封を付、銀座へ持運申候、

小玉銀吹方之事

一前條丁銀吹方之通、湯ニ成銀を、常是手代共、小玉之形と申物江流候得ば、小玉銀之形出來候をさまし、鐵べらにて搔出シ、桶江入、銀座働之者江相渡申候、

但小玉之形と申候は、長サ二尺餘横九寸餘、深サ三寸程之箱之内江、小玉銀之形リニ、三拾五六程、丸く窪みを付候處江、湯底と唱布を苧ニ而さし、右之形江張り、釘にてシメ、あつき湯を一盃入、四ッ並べ置、湯ニ成候銀を流申候、

一右吹立候小玉銀を、常是ゟ請取、銀座手代共相改、屑を撰、宜分五百目ヅヽニ、掛ケ壹貫目ヅヽ升江入、目方書付を添、常是運之者江、銀座手代ゟ相渡申候、

一常是運び之者、吹立候小玉銀を請取、銀座人之前江差出、目方帳面ニ爲記、又常是手代重役之前江も持參、目方帳面ニ爲記、夫より常是極印役之者江相渡、極印打分左之通、

雛形略之

右極印三品之内、壹ッ打申候、尤小玉銀之儀は、極印之付方不宜候間、文之字極印さへ見江候得ば、宜敷儀と定有、文之字計り之極印は、壹分貳分程宛之小玉銀江重ニ打、極印相濟、常是働之者

ゟ銀座手代江相渡候得バ、直ニ水ニ而洗ひ、笊江入、湯江漬候上、ふきんにてふき、目方相改、五百目ヅヽ漉紙江包、拾貫目宛箱江入、座人共封を付、銀座江持運、其外取計方は、丁銀同様ニ候事、

糺シ吹之事

一吹立候文字銀差銅割合、相違有無糺之爲、吹方之節、丁銀三百目除置、銀座釻場と申處ニ而銀座人並常是手代重役之者立合、百目ヅヽ貳包拵候而、常是重役封印之上、其儘銀座圍ヒ内ニ有之候糺シ吹所ニ而糺致候事、

一右百目宛包置候丁銀を、銀座方糺吹所ニ而、銀座人幷常是手代重役立合之上、松葉灰壹升五合、紺屋灰貳升、焦灰四合程ヅヽ調合致し、床を作り、貳寸五分四方、深サ凡壹寸程之くぼみを付ケ、其中江文字銀百目紙ニ包、常是重役封印之儘ニ而入、火を懸湯に致し、鉛凡五百目程追々に差加江、火箸を以湯を廻し候得ば、鉛ニ而灰江引、正灰吹銀元目ニ吹戻申候、尤半時程も吹、一旦火を取、沸水を打さまし、湯江入洗上、雙方ニ而改候を中揚と唱、中揚致候銀を、又候右三品之灰ニ而床を作り、壹寸貳三分四方ニ、深サ五分程之くぼみを付、其上江銀を入、炭を掛吹立、湯に成候得ば、火箸ニ而幾度も湯を掻廻し、銀面鏡之如く照候節、加減見計、火を取、沸水をさまし、湯江入洗上ゲ候而、銀座釻場と申處ニ而、雙方立合目方掛改、正銀四拾六匁と相成候得ば、差銅五拾四匁之分は、鉛ニ而灰江引付候ニ付、割合相違無之儀と治定仕候、尤銀目四拾六匁ニ都合不仕候共、内外壹匁五分迄之懸目違候分は、差銅割合、相違無之旨相定候仕來ニ而、若糺方合不申節は三度迄吹直、三度ニ而も目方合不申節は、吹立候丁銀小玉銀共、不殘吹直候仕來ニ候事、

一吹方中は前條之通、始終銀座常是立會之上、雙方ニ而取扱、丁銀幷小玉銀ニ吹立、右丁銀小玉銀仕立ニ成候得ば、銀座手限にて取扱、常是ゟは差構不申事、

丁銀小玉銀仕立方之事

一銀座圍内ニ、仕建場と申場所有之、入口左右江銀座人兩人詰切、諸道具人數等逸々相改、手代幷働之者、仕建相濟差出候節も、常是方吹所出入之通取計、且仕建丁銀は、銀見役枚數相改、廚人江相渡、丁銀凡八百枚程宛、大半切桶江入、梅酢を涌し置候而、右半切江汲込み、濡筵ニ而蓋致し、半時程漬置取出シ、濡筵之上ニ而、手代共磨立候上、水ニ而洗、貳拾枚程ヅヽ笊江入、大釜ニ湯を沸シ置、其中ニ漬酢鹽氣を取、其後布巾以ふき、筵之上江廣ゲさまし候得ば、銀之色甚引出、宜敷相成候事、

一右丁銀程能さめ候節、極印之付キ方等、銀見役共相改、五百目ヅヽニ懸假包ニ致シ候事、

一小玉銀は、凡三四貫目程ヅヽ、手之付候桶江入、涌シ候梅酢を汲込、暫之内桶ニ而、もみ磨立候上、跡取扱方は丁銀同樣ニ候事、

右手續を以、通用銀ニ仕上ゲ、銀座ニ而目方を改、夫ヨリ常是方ニ而、尚又掛目改之上、五百目ヅツニ包立、拾貫目入壹箱ニ致し、御金藏江上納之事、

〔金銀御吹替次第二編一〕文政御吹直銀〇中略

一同年〇文政三年四月廿一日、御組頭高山彌十郎殿、銀座へ御出ニ而、金右衛門被召呼、元文之度、一日ニ何程吹立、且當時は何程宛吹立出來候と申書付、差出候樣被仰聞候ニ付、當時は一日八拾貫目程吹立出來可申、手馴候はヾ百貫目位は吹立可申候、人數相增候はヾ、夫丈ケ吹高も相增可申段、金右衛門申上、左之書面御同人江差出、且亦去ル十二日差出御好有之、同十七日御下ゲ被成候、吹方手續書壹通、今日差出申候、〇中略

吹方手續

一立會筋役　但名代役幷銀見掛役相勤申候

是は當日吹入銀壹吹分、何拾貫目宛箱ニ入、銀座より吹所江持來候吹入、壹吹毎ニ取組入

記ど銀高引合セ、銀座人ど雙方立會相改、火土江吹込候節も雙方立會ニ而、吹入爲仕申候、
且吹所より出入之節立會、都而取締仕候役ニ而御座候、
筋役ど申候は、當日吹所ニ而出來丁銀三拾枚宛銅盆ニ並べ、大算役銀座筋役之者江小數を爲見、數取壹枚を置キ、夫ゟ私方筋役江數を爲致、又壹枚數取を置キ、其節帳面ニ一を引、次第ニ數を增し、玉之文字にして數を取、玉之字十を以、千五百枚ど出來丁銀之數を記、別ニ小札ニ何百枚ど書付、銀座酢頭役江相渡置候、尤小札ニ番附書有之候間、吹數何程御座候ども、右之通ニ仕候、右一文字之筋を以、數取ニ仕候間、筋役ど唱申候、
當日吹出來小玉銀は、何貫何百目ど、掛〆五百目宛枡ニ入、小札ニ目方書付相添、大算役是亦銀座私方雙方筋役ど爲見候節、帳面ニ記置、小札ニ何百枚、小玉何百目ど書付、銀座酢頭役江相渡置申候、
當日吹廻之上出來丁銀、〆上何千何百枚、小玉何貫何百目、屑銀何貫目ど合、銀座筋役之帳面ど、入高突合セ相濟候上ニ而、夫々人數吹所ゟ出し申候、

一湯入役　　但名代役幷銀見役相勤申候

是は當日吹入銀、火土留鉢之中江灰吹銀ど銅ど五百目宛有之候間、包之儘、火土留鉢之中江入交、鞴風之廻り宜樣、手傳役ニ差圖致爲積、吹立候上ニ而、能下り候節、丁銀杓子を入、能交汲上、丁銀形、又は小玉形ト相流し申候、銀湯ニ相成候を、形ニ流入候故、湯入役ど唱申候、

一火土前手傳役　　小仕幷男頭相勤申候

一吹子差　　中間共相勤申候

一湯揚役　　但手代相勤申候

是は丁銀形江流し有之丁を、鋏ニ而揚ゲ、中ニも善惡を見、屑丁は直ニ火土前江戻し、吹直

し、出來丁銀は揚桶ニ入置、小玉銀は出來之善惡ニ不拘、小玉搔ニ而、形ゟ落し、湯槽ニ溜、揚桶江入置候役ニ而御座候、湯之中ゟ取揚候故、湯揚役と唱申候、

一中働之者　銀座中間相勤申候

是は湯揚役、丁銀形ゟ鋏ニ而上ゲ、桶ニ入置候を請取、其儘撰場江運び、又は湯水其外持運び、掃除等都而働役ニ而御座候、

一撰役　銀座手代相勤申候

是は出來丁銀善惡を撰、三拾枚宛銅盆ニ並べ、大算役江相渡候、小玉銀は善惡を撰、笊ニ入、銀座奥書江相渡申候、右丁銀小玉銀之善惡を撰り候役ニ而御座候、

一大算役　但手代相勤申候

是は出來丁銀三拾枚宛、銅盆ニ有之候分、撰役ゟ請取、銀座筋役之者江數を爲見、數取壹枚置、夫ゟ私方筋役之者江數を爲見、是亦數取壹枚置、殘り貳拾八枚を極印役江相渡申候、壹吹相濟候上ニ而、右數取ニ差置候丁銀何枚と、雙方筋役之者ゟ請取、極印役江相渡、都合壹吹分何百枚と、極印方江相斷申候、右數を算候故、大算役被唱申候、

小玉銀は、銀座奥番、目方掛ヶ五百目宛枡ニ入、目方書相添請取、極印役江相渡、極印相濟候上請取、銀座奥書江相渡申候、

一銀座筋役　銀座人相勤申候

是は大算役、出來丁銀三拾枚宛、銅盆ニ並候數を改メ、數取壹枚置候を、帳面ニ一を引、次第ニ數增、玉之文字にして數を取、何百枚出來丁銀被記申候私方筋役同樣ニ御座候、

一極印役　但手代相勤申候

是は出來丁銀、大算役ゟ請取、初メ文之字極印打、次ニ大黑極印打、次脇極印打、壹吹分打仕

廻、何百枚と合、鈍役江相渡申候、

小玉銀は、五百目宛枡ニ入、何貫目と申書付小札相添、大算役ゟ請取、極印打相濟、大算役江相渡申候、

一鈍役　但手代相勤申候

極印打相濟候上、何百枚と請取、丁銀をなまし、梅酢ニ入、其上水ニ而洗揚、壹吹分板數何百枚被合、銀座酢頭役江相渡申候、丁銀を火ニ掛あぶり候故、鈍役と唱申候、

一酢頭役　銀座手代相勤申候

是は鈍役ゟ出來丁銀を請取、筋役ゟ請取置候小札書ニ、員數引合セ請取、奥書之者江相渡申候、

一奥番役　銀座手代相勤申候

是は出來丁銀、酢頭役ゟ請取、當日吹方出來高、丁銀員數合、銀座筋役之者と相屆申候、○中略

右吹方手續、其外御尋ニ付申上候、以上、

辰四月　　大黒作左衛門無印

〔金銀御吹替次第二編二〕天保御吹直幷一分銀

一天保十五辰年九月廿七日銀座會所より呼ニ越候故、佐藤與兵衛罷越候處、年寄秋田內記、左之通之書面、御掛り方江さし出候間、御見セ置と申事故、則寫置候、

通用銀吹方手續

一保字銀湯流

是は吹入之分、吹方前日、於銀座御定之通之割合を以、銀銅共包分封じ目、御勘定方御見屆御印申請取極、箱詰之上、御用藏江入置、當朝常是吹所江相送り、御勘定方御見屆を請、銀座役人

立會、御封印切解相改候上、吹所ニ而吹卸、常是名代湯入役被相唱候者、加減見計、鐵杓子を以汲取、湯舟之内、丁銀小玉形江流し入、出來形宜敷分取上、形チ不宜、又は疵御座候分者、直ニ火土江吹戻し、至く當日吹方殘屑銀之分は、目方掛改之上、箱詰封印仕置申候、

一同鈍し方極印下地

是は丁銀小玉銀共、出來之分、常是鈍し方之者、火ニ而燒鈍し、加減相試取上、梅酢ニひたし、水ニ而洗上、壹吹銀員數相改、銀座方江請取、猶又磨方いたし、極印下地出來候得ば、常是方極印打之者江相廻し申候、

一極印打上

是は極印下地、常是方ニ而、石床ニ而極印打上、銀座仕立所江取、梅酢にひたし、丁銀小玉銀共磨上候上、磨色極印付方、壹枚每ニ銀座役人相改、宜敷分五百目宛、掛ケ假包いたし、御勘定方御見屆を請、箱詰仕、錠封之上、御用藏江入置申候、仕上改之節、出候極印打方不宜分は、屑銀ニ相立、是又目方掛改、包封之上、吹方之節、吹直候儀ニ御座候、

一柴流銅

是は丁銅夜銅を以、火土江吹卸、笹葉之上江流し相仕立候ニ付、笹吹共相唱へ、通用銀吹入ニ相成候節、差銅ニ相用申候、

右は保字銀吹立方手續荒增、書面之通ニ御座候、以上、

辰九月

　　　　　　　　　　　　　　　辻傳右衞門
　　　　　　　　　　　　　　　秋田内記
　　　　　　　　　　　　貳吹所　大黒作右衞門

〔金位幷金吹方手續書〕金銀吹減定法之事

一山出金、川金、砂金、幷唐金共、都而惡物燒拔候上ニ而、留吹銀定法割合通差銀致し、文字金位ニ吹入致シ、出來小判ニ成候迄之仕立減定法左之通、

但古金吹入も同前之事

（文字金百兩ニ付、金目貳匁貳分壹厘九毛九糸、同壹兩ニ付、金目貳厘貳毛壹糸九九、）定法仕立減

灰吹銀壹貫目ニ付銀目八匁壹分三厘　（花降銀迄）定法吹減

是は元文最初灰吹銀を花降銀ニ銀座ニ而吹拔候吹減り定法を以、勘定仕上ゲ候事、

右之通候處、其後定法吹減之外、多分吹減相立候旨銀座申立、灰吹銀壹貫目ニ付、貳拾六匁餘增減りを加、定法吹減共、都合三拾三匁餘之吹減を以、勘定仕上ゲ候ニ付、寶曆十一巳年、後藤より伺候は、右增減り之分、差銀代之勘定ニ組候而は、元文最初之證文ニ障り候ニ付、增減り之分は、差銀代勘定合相除、灰吹銀ニ而引落、殘灰吹銀を元ニ立、壹割步を入、六拾目替之金ニ直し、代金銀座へ相渡候積、證文有之、外ニ花降銀迄吹拔候、極步一被下之候金高之儀は、步一之部ニ記す、

花降銀壹貫目ニ付、五匁壹分四厘六毛七糸、　（留吹銀迄）定法吹減

右は證文有之候事

極印

〔金銀御吹替次第（吹一方）〕通用銀御吹替之次第

慶長銀、一名往古銀、糺八銀步一三步糺御用拾内外三分、慶長銀は、慶長何年ニ吹初候哉、舊記無之、最初之極印、元祖常是弟常隆彫之、（究竟院と申候、大黒源左衛門先祖ニ而候、）其後常拙、（常拙由緒不知）其後德右衛門、其後彥次郎、其後太郎左衛門、其後善助、慶長年より享保年中迄、右六人ニ而彫之、元文元年より喜左衛門權次郎彫之、

〔金銀御吹替次第（三編二）〕十二大黒兩面大黒銀之事由

大國主神ハ、土地開闢の祖神にして、五穀豊饒を守り、凶惡邪魅の類ひを避しめ、寶貨財用を主りたまふ事、普く人の知る處にして、天竺には摩訶伽羅と稱し、漢土に大黑天と唱ふる、みな此神の德を譽たるなり、爰に吾が家代々此神に奉仕して、銀貨の事を家務とし、神姿を銀面に印して、百福を公にする事年あり、神祖草創のはじめ、兵革日久しく、世上融通の金銀其差多く、些異甚しきを痛み歎きおぼし給ひ、金は後藤の某に命じ、銀は吾が家に金を下し給ひ、世上交在る處の銀を以て、集めて大成せしめ、大國主の神像を印して、長く大寶に備へたまひ、且神號を家號に下し給ふ、鑄冶する處の品多きが中に、其方銀十二大黑と俗稱するものは、蓋大國主ノ神一名大名牟遲ノ神、國造大己貴ノ神、芦原醜男ノ神、八千矛ノ神、宇都志國玉ノ神、大地主ノ神、大名持ノ、神と白し、また荒魂ノ神の名、大國御魂ノ神、大國玉の神、又その和魂ノ神ノ名大物主櫛甕玉ノ神、大物主ノ神等と稱し奉る名の數の十二にかたどり、尙四方八隅を表して、廣く國土の至寶たらんがためにして、蓋神祖命を下したまへるより以前、世間切遣と號し、方銀を分裂して融通せし比、方銀一丁へ神姿二ッ四ッを印せるものにしては、間寶印のなき所を割斷する事もありて、少しく移分の薄きに似たれば、何れの所を割用ひても、必神姿を失はざらんがために、傚此數の十二によりて、神姿を聯ね印せるものなり、

また碎銀兩面大黑と呼ぶものは、この荒魂大國玉ノ神、和魂大物主ノ神の國土を守り、萬福を來したまふ所謂によりて、陰陽の兩儀をわかてり、もとより金銀の寶貨に上たるは論をまたねども、猶此十二大黑、および兩面大黑の如き、是を神とし崇め尊ばゞ、災害頓に去り、吉祥並び起りて、日々に月々に富貴の位に進らむ事、それ掌を指すが如き歟、

〔金銀御吹替次第六吹方〕五匁銀

極印之儀

一厘より九厘迄
一分より九分迄
一糸より拾糸迄

右之通貳拾八本揃置、たとへば三十目之ものへは十之極印三ッ、又三拾目壹分貳厘へは壹分之極印壹ッ、貳厘之極印壹ッ打添候はゞ出來可致事ニ候、

右之趣を以、答可差出候、右之通ニ而者可致出來候哉、兎角出來いたし候趣相考、右之趣意ニ引合答差出候、以上、

十月〔〇明和二年〕六日　　吉川三郎右衛門

大黒長左衛門殿

申渡

五糸銀之儀、二三厘迄之過者、出來銀ニ相定度旨、銀座年度願ニ付、可成丈五糸ニ出來候樣ニいたし、若重目之分貳三厘之過は、出來銀ニ相定、格別重目之分、并輕目之分者、少ニテも吹直候樣申度候間、此旨相心得、極印打候樣可致候、

十月

乍憚以書付申上候

一文字通用丁銀小玉銀共ニ、掛目相糺、目方極印打添候儀可相成哉、極印之儀者、壹厘より九厘迄壹分より九分迄、壹糸より拾糸迄、右之通極印貳拾八本揃置、譬者三拾目之物江者、拾糸之極印三ッ、又三拾目壹分貳厘者、壹分之極印壹ッ、貳厘之極印壹ッ打極申候はゞ、被仰渡候趣出來可仕旨、若又右之通、極印打添候儀出來不致事ニ候はゞ、右ニ相當可仕義相考、可申上旨被仰渡候ニ付、左ニ申上候、

一丁銀掛目相糺候儀、何拾何匁と申儀者、相見え申候得共、厘目ニ至り、何厘と申儀者、封口之儀者不及申上、銀秤ニ而も相知不申候間、掛目之極印打候者、難仕奉存候、

一厘目相糺候儀者、厘秤ニ而相改可申候得共、厘秤之儀者、五匁以下之目方、相糺候迄之儀ニ而、五匁以上之掛目、相糺候儀者相成不申候、厘秤ニ狂ひ出候而も、右之狂ひ相糺候儀、壹厘より九厘迄ニ、分銅者三御座候間、狂ひ糺候儀も難仕御座候、且又銀秤ニ而者、何厘と申儀者相知不申儀ニ御座候、

一小玉銀之儀者、通用極印之文字ニ而、銀之表ニ目方極印打添可申口者無御座候間、裏ニ打添可申哉被奉存候得共、是者最初通用極印打立候節之石目有之、何れも銀肌荒く御座候故、極印者移不申候、且又表極印も潰ニ申候、依之小玉銀之縁江打込可申哉と奉存候處、形ノ丸キ小玉銀之儀ニ御座候間、極印打候而も居り悪敷、中々必至とは出來不仕候儀と奉存候、極印打損候得者、再打者難仕候間、口ニ相成候様ニ、小玉銀之内ニも、大小御座候間、銀ニ相應仕候様ニ、極印彫立可申儀ニ奉存候、極細字ニ極印仕候而者、打立候而も文字見分り申間敷候、且又細小玉銀之儀、是者目方之文字打添可申程之大サ者無御座候、

一此已後丁銀小玉銀共ニ、極印兩面打ニ被仰付候儀等御座候而も、極印之文字數多儀ニ御座候間、一遍打ニ者相成不申、再遍打候而者、最初打候表極印潰れ申候間、丁銀小玉銀共、極印兩面打ニ者相成不申候、

右之趣、御尋被遊候ニ付申上候、以上、

酉十月　　　大黒長左衛門無印

〔金銀御吹替次第吹六カ〕貳朱判

一安永元年八月十六日、左之書付壹通川井治左衛門召連御殿江致持參、湯呑所以林清助篠木六

左衞門殿江差出候處、○中略書面之通伺相濟候間、書面之奥江、請書致シ差出候樣ニと被仰、書付御下ヶ被下候間、左之通請書致差出罷歸候、

乍憚以書付申上候

此度南鐐銀を以、掛ヶ目貳匁七分ニ極、外五厘迄之過目御免、貳朱銀吹方、銀座江被仰付候間、出來之上、改方之儀者、定法之通相心得、委細銀座年寄江可申談段被仰渡、奉畏候、併南鐐銀之儀者、善惡共私方ニ而見分ヶ候者無御座候間、定法之通相改、包極候儀者難仕候間、目方改計、私江被仰付被下候樣仕度候、裏極印打方等之儀、昨十五日銀座より相伺候趣も承候間、左ニ申上候、

一貳朱銀吹出來之上、私方ニ而掛ヶ目輕重相改、目方相違無之分計江、私方ニ而常是と申極印打添、銀座江相渡申度候、南鐐善惡改幷包極一件之義者、銀座江被仰付被下候樣仕度候、

右之通御座候得者、御用御差支ニ者相成申間敷奉存候、以上、

辰八月十六日　大黑長左衞門無印

右之通申上候處、書面之通被仰渡奉畏候、御請申上候、以上、

辰八月十六日　大黑長左衞門印

朱書

此度南鐐銀を以、貳朱銀吹方銀座江被仰付候ニ付、雙方之裏極印並候順、銀座當是と雛形ニ記、其通ニ致度由、銀座年寄長谷川長兵衞より、右雛形爲見候節、銀座好之通之順ニ相仕候趣意者、南鐐銀位極候者、銀座職身之事ニ而、勿論此度之貳朱銀も、銀座ニ而吹立候事、此方者目方計相改候事ニ候得者、貳朱銀ニ限り候而者、銀座役尤重き事候間、極印順、銀座好之通ニ相仕候、後年ニ相成、若格合之論も有之候節、銀座より右極印順之事申出す儀も可有之哉と、爲心得此處ニ記し置もの也、

一同年八月廿五日、左之伺書壹通、貳朱銀形貳枚、御殿江致持參、〇中略

乍恐以書付奉伺候

一先達而被仰渡候貳朱銀掛ヶ目私方ニ而相改、目方相違無之分江計打添可申、裏極印之儀、寳之字を打申度、彫方申付、小極印出來仕候間、極印形幷打方之義、圖之通打添申度奉入御覽候、

一貳朱銀形大サ、文字認方之儀者、銀座より私方江爲見候恰好を以申上候、

右之通奉伺候、以上、

辰八月廿五日　大黑長左衛門無印

御附札

寳之字者、四ッ寳銀等之節、用ひ候而不宜候間、外之文字何ニ而も可相用候、尤極印打方筆形、幷銀座常是之文字江不障樣可致候、

辰八月

右御附札を以被仰渡奉畏候、御談申上候、且手本銀御渡被成下、奉請取候、以上、

辰八月廿五日　大黑長左衛門印

一同年同月廿九日、左之伺書壹通、御殿江致持參、〇中略

乍恐以書付奉伺候

一貳朱銀裏打添小極印ニ、定之字を打申度奉存候、定之字大サ幷打方共、當月廿五日、奉入御覽候圖之通ニ御座候、

右之段奉伺候、以上、

辰八月廿九日　大黑長左衛門無印

右書面之通被仰渡、奉畏候、御請申上候、以上、

辰八月廿九日　　大黒長左衛門印

〔金銀御吹替次第三吹方〕極印。

御尋ニ付申上候覺

一先年大黒之像、銀ニ而彫刻仕、差上候儀有レ之候哉之段、御尋被レ遊候、此義前々彫刻仕候事無二御座一、尤書留等ニも見當り不レ申、承傳も不レ仕候、

一通用銀吹方有レ之候節、形宜出來仕候、小玉銀撰出除置候而、兩面ニ大黒之極印を打申候義は、從二前々一有レ之候、此銀私方ニは無二御座一、銀座江相渡申候、且又小玉銀江片面ニ大黒之極印を打候銀者、平生通用仕候銀ニ而候、

右之通ニ御座候、以上、

申八月〇安永五年六日　　大黒長左衛門無印

〔金銀御吹替次第二編二〕南鐐壹朱銀

文政十二丑年六月廿四日○中略

一同日御殿退出掛ケ極印打方之儀、辻傳右衛門江問合候處、南鐐之文字無レ之旨申聞ニ付、歸宅後早々御組頭大島九郎太郎殿御宅江常最罷出、御面會ニ而小貳朱判極印南鐐之文字無レ之候而者、後年ニ至銀位自在ニ相成、私方家督之障ニ相成行可レ申哉者、甚歎ケ敷奉レ存候間、何卒貳朱判同樣南鐐之文字相乘候樣被二成下一度段、一向相歎キ候之處、尤ニ御聞取被レ成候得共、何分貳朱判より者、形チ小振之事ニ候得者、南鐐之文字ははまり兼候、依レ之相除候ニ御評議相定り候、乍レ去被二申立一筋尤ニ存候間、何れ明日淡路守殿江其段可二申上一候得共、世上江御觸も矢張南鐐上銀之位を以、吹立被二仰付一旨御書付出候ニて、則御書付御見遣有レ之、且亦御禮廻之義署中旁遠方之處、入來ニ不レ及旨、淡路守殿被二仰候ニ付、乍二序此段相達候旨被二仰候ニ付罷歸、辻傳右衛門とも右御

禮廻勤、御斷之旨奥田祐助を以通達致候、

一同年六月廿五日銀座江大島九郎太郎殿御出ニ付罷越候處、小貳朱判極印打上出來之分貳百枚御取寄セ被成、其方ニ而も掛紏方幷打添定極印試之ため、何枚ニ而も持歸候樣被仰候ニ付、内五枚持歸掛試候處、内三枚者通り目、貳枚者輕目ニ付、墨ニ而十文字を付ケ、猶定極印も是迄貳朱判ニ相用候極印ニ而者、文字大きくはまり兼候ニ付、卽日小振ニ彫かゝらせ候、其後極印彫上候ニ付、通目三枚打立、輕目貳枚共持參、渡邊三郎助殿江差上候、

〔金銀御吹替次第二吹方〕元文銀

一元文元辰年五月廿一日、左之通之書付、御殿江致持參、菊池又五郎殿江相渡、○中略

乍憚以書付奉願候

一極印石四ツ入申候得共、賣買ニ無之石ニ而御座候間、御石場之内見立候而、極印石ニ罷成候石御座候はゞ、數四ツ拜領仕度奉願候、先年も拜領仕候得共、此節之御用ニ不足仕候間、奉願上候、以上、

辰五月　大黒長左衛門

極印石拜領例書

覺

一元祿年中、於本鄕御吹替被仰付、吹方仕候節、柳原御石場ニ有之候、極印石拜領仕候、

但運送車力、御入用ニ而引取申候哉、自分入用ニ而引取申候哉、相知不申候、○中略

右之通御座候、以上、

辰五月　大黒長左衛門

右書付、廿一日於御殿、菊池又五郎殿へ相渡候處、見立候而濟候上、何方ニ有之間、拜領仕度段書付

一所ニ、丹波守殿江差出可申候間、早々石見立、書付差出候樣ニ被仰候、依之家來平田與兵衛へ申付、石見立候處、左之石有之間、則左之書付致、又五郎殿へ喜六爲持差遣ス、

覺

一本所壹ッ目御石場、五郎兵衛預り場所ニ有之候極印石壹本、

面三尺四方

高貳尺六寸略○中

右之石四本拜領仕度奉存候、以上、

辰五月　　大黑長左衛門

右之願書可差出相認候處、極印石相願候ニ付、何角と殊之外御面倒なる事故、何とぞ賣石今一應吟味いたし、少々物入有之候共、自分買ニ致させ度との御噂有之段及承候ニ付、小ぶりには候へども、八丁堀ニ賣石有之候を相調、則廿三日御殿江罷出、とくと方々吟味仕候得ば、賣石ニ有之候間、極印石拜領願相止可申旨御斷申上候、

〔金銀御吹替次第三吹方〕極印

延享二丑年十一月廿日、先達而吹所之內、極印損じ候ニ付、新規ニ入替、古極印拾九本、吹所之內之火序ニ燒潰し候處、銀座大勘定小西彥右衛門見え而、常番細谷三郎左衛門ニ申候ハ、吹所之內ニ而、極印燒つぶし候樣子、見分不宜候間、自今者外ニ而つぶし候樣ニいたし度旨、次左衛門江申入候樣ニと申ニ付、細谷三郎左衛門、此方湯入役川井次左衛門江申候者、右之通小西彥右衛門申候、然れ共極印者、入念潰し不申候而者、吹取出し不申候由、彥右衛門申候者、三郎左衛門、次郎衛門江咄し候間、次郎衛門存候者、此方之極印を潰し不申候而者、吹所を出し不申抔ト、假初之咄ニも過言千萬不屆ニ候間、次左衛門申候者、吹所之內、極印箱ニ、其元より封を御付候事者、譯有之事ニ而、

鑄造料

御吟味之ため＝封御付候事＝而者無之候、此段者定而御存＝而可有之候、依之長左衞門手前＝、何程も極印影置候得共、各之封印請候事無之候、元文前迄ハ、吹所極印差替候へば、古極印をば其儘＝而外へ出し、長左衞門居間庭＝而、新極印燒刃を附候、火之序＝燒つぶし候故、古極印、吹所之內＝而者潰し不申候而、其儘出し申候、元文＝成、極印數々多入替候間、大切之もの故、吹所之內之大火＝而燒つぶし候方、手廻し能候迚、元文已來、吹所之內＝而つぶし候、此段者御自分樣御年若＝而、元文已前之事、御存無之候間、極印つぶし不申候而者、吹所を不出抔と御覺被成候、右之樣子御聞置候樣ニと、咄之樣々、次左衞門、三郞左衞門江申聞候、

〔金銀御吹替次第一吹方〕享保銀

一正德五未年八月十二日、小宮山平右衞門殿、黑澤直左衞門殿、吹賃之儀御尋＝付、左之通書上、

一御吹賃　貳百步一

但御銀百貫目＝付五百目

一座步　十步

右は銀座へ被下候三步通之高、總座人共、役々＝應じ配分仕候、

〔天明集成絲綸錄四十四〕明和四亥年三月

御勘定奉行江

五匁銀之儀、吹職諸雜用多相懸り候＝付、吹職諸雜用、御入用＝相立候樣致度旨、銀座年寄相願候得ども、銀壹枚＝付、四分宛之輕重無構候はゞ、步一被下銀＝而相濟可申由＝候間、以來右之趣＝而吹方可被申付候、且又右五匁銀、自今銀相場＝不拘、金壹分＝銀三匁、金壹兩＝銀拾貳匁之積、渡方請取方無滯可致通用旨、一統可被相觸候間、諸御拂之節、右之割合を以、追々相渡候樣可被致候、

三月

〔金座永野家記〕天明七未年十月、御勘定奉行久世丹後守へ後藤より書上扣寫、○中略

一御金吹方に付、私幷支配金座へ被下候御手當、

出來金千兩に付

金拾兩　　　私へ被下

金拾五兩壹分　　私支配金座へ被下之

但御金吹方之御入用は、別段に不被下、右御手當之内より取賄申候、尤甚多分相懸り候儀に御座候山出金等、銅氣燒拔候節は、燒入用別段に被下之、

〔金位幷金吹方手續書〕歩一金幷色付代之事

後藤庄三郎、幷金座吹屋棟梁江被下候、歩一金法割合左之通、

出來金千兩ニ付
金拾兩　　後藤庄三郎江被下候歩一

是は慶長金吹方被仰付候初年、出來金之百歩一被下候旨、御直ニ被仰渡、其後金吹替ノ度度、右御定之通被下來候事、

右歩一金を以、金吹方ニ付、庄三郎役所ニ而相用候、諸道具修復買入物、筆墨紙蠟燭入用等引殘金は、平日包方御用、御勘定所淺草御藏元拂、御金藏元拂、御納戶出役、其外御用向ニ付、諸入用幷江戶京佐州役人金座人手當、家内召仕迄之扶助共、取賄仕來之事、

出來金千兩ニ付
金拾兩貳分　　金座江被下候分

是は慶長金被仰付候初年ゟ、金座人共、庄三郎支配ニ被仰付、山出金其外金類取集、燒詰通用金吹方御用相勤候ニ付、爲諸入用出來金拾兩ニ付、金目五分宛被下候處、元祿金ニ吹替被仰付候節ゟ、右金目代金ニ直し、出來金百兩ニ付、金壹兩、永五拾文被下候割合を以、其後金吹替之度々、右御定之通被下來候事、

右被ㇾ下金を以、金吹方諸入用取賄候事、

出來金千兩ニ付
金四兩　吹屋江被ㇾ下候分

是は右同斷、吹方細工方御用相勤候ニ付、爲ㇾ諸入用ㇾ金目壹分九厘四糸被ㇾ下候處、元祿金吹方之節ゟ、右金目代金ニ直シ、出來金百兩ニ付、永四百文被ㇾ下候割合を以、其後金吹度々、右御定之通り被ㇾ下來候事、

但金座吹屋共、諸入用之名目を以被ㇾ下候處、寶永之頃ゟ、何となく歩一と唱來候事、

右被ㇾ下金を以、細工方諸入用取賄候事、

一文字金吹替被ㇾ仰付ㇾ候節、歩一金請取方下知書左ノ通、

覺

此度金改候ニ付、歩一金之通可ㇾ相心得ㇾ候、

一金吹高千兩ニ付、金貳拾四兩貳歩、

右之内

金拾兩　後藤庄三郎

是は百歩一之積を以、古來より請取候通、此度も可ㇾ請ㇾ取之、

金拾兩貳分　小判師

是は元祿金吹直之節ゟ、請取候積を以、此度も可ㇾ請ㇾ取之、

金四兩　吹所之者

是は右同斷

右之通可ㇾ請ㇾ取ㇾ候、御老中江伺ㇾ之如ㇾ斯候、山出金其外之金吹立候節も、向後右可ㇾ爲ㇾ同前ㇾ候、

元文元年辰六月

井彌總兵衞〇以下七人署名略

是は慶長金、乾字金、武藏判、享保新金之四品は、位宜ニ付、色付不ㇾ申、元祿金幷文字金は、位不ㇾ宜ニ付、小判小粒出來上り之上、色燒付候ニ付、右藥種其外諸入用如ㇾ斯、

出來金千兩ニ付
永七百五拾文　定法 色付代

花降銀極歩一之事

元灰吹銀拾貫目ニ付
金拾貳兩　灰吹銀を花降銀ニ吹立極メ候爲、歩一被ㇾ下候分、

是は寶暦十一巳年、金座灰吹銀を花降銀ニ吹拔被ㇾ仰付候節、銀座ニ而灰吹銀を花降銀ニ吹拔上納之節、極歩一、銀座へ被ㇾ下候通被ㇾ下候旨、證文有ㇾ之、

〔銀位幷銀吹方手續書〕歩一銀之事

一銀座吹方ニ付、被ㇾ下候歩一定法左ノ通、

吹銀高百貫目ニ付

銀七貫目　銀座江被ㇾ下候分

内

五百目

是者前々ゟ之仕來を以、吹賃として常是江差遣申候、右を以、常是方之吹方入用取賄申候、

貳貫九百七拾目貳分

是者吹減幷差銅代、且仕建之節、炭薪梅酢、其外諸道具品々入用之分、

〆三貫四百七拾目貳分

殘銀三貫五百貳拾九匁八分　金銀座請取高

右歩一銀を以、京都ゟ罷出候座人旅籠代、幷京都銀座ゟ之勤番入用、賄方飯料、小役人手代以下下

下迄之給分、其外所々繕普請、江戸京都銀座役所諸入用ニ致し、殘銀有之候得ば、銀座年寄共初、大勢之座人手當、家内召仕迄之扶助取賄、且常是江も右殘銀之内割合、銀座ゟ差遣候積、元文年中、銀吹替御用之節定を以、取扱候事、

右步一銀請取方之儀、置證文有之、左ニ記、

此度吹改候銀步一之儀、差銅銀座ゟ出之、幷吹減も勘定ニ不相立候ニ付、寶永三戌年請取候通、七步之積銀吹高百貫目ニ付、銀七貫目宛可請取候、御老中江相伺如此、灰吹銀を以吹立候步一も、向後右可爲同前候、以上、

元文元年辰六月　井彌總兵衛印〇以下七人署名略

銀座中

一大黑長左衛門江は、吹方ニ付別段步一銀被下候儀無之、銀座江被下候步一七分之內を以、吹高百貫目ニ付五百目ヅヽ、銀座ゟ長左衛門江相渡候定ニ候事、

〔金銀御吹替次第二編一〕文政御吹直銀〇中略

一同年〇文政三年四月十四日、掛り西村貞太郎殿、此方江御出有之、金右衛門江御內密ニ而、吹方諸入用積書相認、差出候樣被仰聞候ニ付、御請申上候、

一同年四月十五日、右同斷ニ付、吹方諸入用積書壹冊、金右衛門ゟ貞太郎殿江差出候處御請取、無程深山宇平太殿、西村貞太郎殿、齋藤左一郎殿、此方江御出、諸入用減方、彼是御調有之ニ付、金右衛門、右直段之儀、明和年中積方を以、當時見合セ、積り立候儀ニ御座候、此上之儀、減方無之段申上候處、御承知有之、猶御評議可有之旨被仰聞候、

諸入用積書

吹方一日五千兩分、銀三百貫目吹立、壹吹拾貳貫目程ニ仕、此吹數貳拾五吹を貳火ニ而吹立、諸

入用凡見積り譯書

一銀三百目　貳拾五吹分　吹炭七拾五俵　但壹俵ニ付四匁

一銀貳拾四匁　同断　留鉢六枚　但壹枚ニ付四匁

一銀四拾五匁　鐵大羽口貳ツ　但壹ツニ付貳拾貳匁五分

一銀四拾目　渡し鐵貳本　但壹本ニ付貳拾目

一銀九匁　小玉杓子三本　但壹本ニ付三匁

一銀拾匁　小玉掻四本　但壹本ニ付貳匁五分

一銀三拾目　長杓子貳本　但壹本ニ付拾五匁

一銀拾貳匁　鐵長鍵貳本　但壹本ニ付六匁

一銀拾三匁五分　杓子柄九本　但壹本ニ付壹匁五分

一銀六匁　木羽口大小四本　但壹本ニ付壹匁五分

一銀九拾目　同断　同渡シ炭大掛炭共拾八俵　但壹俵ニ付五匁

一銀七匁貳分　同断　土羽口拾貳　但壹ツニ付六分

一銀貳拾四匁　鐵小羽口貳ツ　但壹ツニ付拾貳匁

一銀貳拾四匁　丁銀杓子六本　但壹本ニ付四匁

一銀三拾目　湯揚鋏六挺　但壹挺ニ付五匁

一銀七匁　形摺貳本　但壹本ニ付三匁五分

一銀三拾目　十能貳本　但壹本ニ付拾五匁

一銀六匁　鐵槌大小四本　但壹本ニ付壹匁五分

一銀四拾八匁　湯敷百六拾枚　但壹枚ニ付三分

一銀五拾四匁　極印鋏拾八挺　但壹挺ニ付三匁

一銀拾貳匁　鈍シ場板十能貳挺
但壹挺ニ付六匁

一銀六拾目　同所大鐵網貳枚
但壹枚ニ付三拾目

一銀五匁　酢籠貳ツ
但壹ツニ付貳匁五分

一銀拾匁　同水桶貳
但壹ツニ付五匁

一銀貳拾目　手桶八
但壹ツニ付貳匁五分

一銀百五拾目　極印貳拾本彫入
但壹本ニ付七匁五分

一銀貳拾四匁　韛狸皮六枚
但壹枚ニ付四匁

〆壹貫百五拾四匁三分

一銀三百六拾目　六尺大韛兩差貳丁
但壹挺ニ付百八拾目
三箇年持

一銀百八拾目　丁銀槽拾貳
但壹ツニ付拾五匁
三箇年持

一銀五拾四匁　丁銀形拾貳枚
但壹枚四匁五分
貳箇年持

一銀六匁　同所板熊手貳挺
但壹挺ニ付三匁

一銀五匁六分　梅酢八升
但壹升ニ付七分

一銀八匁　酢桶貳ツ
但壹ツニ付四匁

一銀三拾九匁　火土前ニ而遣候水桶六
但壹ツニ付六匁五分

一銀拾五匁　松眞木

一銀九拾目　極印貳拾本下地
但壹本ニ付四匁五分

一銀百貳拾四匁　三尺韛貳挺
但壹丁ニ付六拾貳匁
三箇年持

一銀九拾目　小玉槽四
但壹ツニ付貳拾貳匁五分
三箇年持

一銀貳拾四匁　小玉形四枚
但壹枚六匁

一銀九拾目　湯入場堅板銅張貳枚 但壹枚ニ付四拾五匁　一銀百貳拾目　湯入場吹子差鈍場 湯揚場腰掛湯槽壹

一銀百拾貳匁　丁銀運銅盆四枚 但壹枚ニ付貳拾八匁　一銀壹貫百貳拾三匁五分　看板類夏冬共 貳拾九人分

〆

吹立一日ニ付、三百貫宛之積りを以、壹ヶ月分入用凡見積〇中略

〆拾四貫六百貳拾貳匁

辰四月　大黒作左衛門無印

〔金銀御吹替次第二編一〕文政御吹直銀〇中略

一同年〇文政三年四月十七日、昨十六日、金右衛門、掛り方江被召呼候節、西村貞太郎殿、被仰聞候は、此度吹方ニ付、被下候銀座歩一銀、半減ニ被仰付候間、其方江請取候吹料も右ニ准じ、減方可被仰付候、尤銀座へも諸入用積書被仰付候、其方積書も傳右衛門江差遣し、諸事打合セ可申旨被仰聞候、依之左之見積書壹通、金右衛門持參、辻傳右衛門江致示談相渡候、

吹方一日八拾貫目吹立、諸雜用凡入拂見積、

一銀三貫八百九拾九匁貳分

是は吹方一日八拾貫目宛吹立、壹箇月貳千四百貫目分、吹炭諸道具類損シ物直し諸入用、

一銀四貫四百八拾八匁　但一日壹人出勤料貳匁五分宛、壹箇月壹人心付三拾日宛、一日壹人飯料九分宛、

是は吹方人數、一日ニ付三拾四人宛、壹ヶ月千貳拾人分出勤料、幷飯料心附共、

一銀貳拾六匁

是は極印下彫役給金、幷十五日分出勤飯料、

〆八貫四百拾三匁貳分

内

銀拾貳貫目　貳千四百貫目吹料請取宛　但百貫目ニ付五百目

差引

殘り銀三貫五百八拾六匁八分

是迄認傳右衛門江相渡、此末は掛り方江差出不ㇾ申、爲心得記置之、○是以下二十七字朱書

内

銀壹貫七百九拾三匁四分　私儀用

銀壹貫七百九拾三匁四分　江戸京大坂三地役人共割渡遣候分

吹方一日三百貫目吹立、諸入用凡入拂見積、

一銀拾四貫六百貳拾貳匁

是は吹方一日三百貫目宛吹立、壹ヶ月九千貫目分、吹炭諸道具類損じ物直し諸入用、

一銀拾貫三拾貳匁　一日壹人出勤料貳匁五分ツヽ、一日壹人飯料九分ツヽ、壹ヶ月壹人心付三拾目宛、

是は吹方人數一日ニ付七拾六人宛、壹ヶ月貳千貳百八拾人分出勤料、幷飯料心附共、

一銀貳拾六匁

是は極印下彫役給金、幷十五日分出勤飯料、

〆貳拾四貫六百八拾目

内

銀四拾五貫目　九千貫目吹料請取　但百貫目ニ付五百目宛

差引

殘り銀貳拾貫三百貳拾目

内
銀拾貫百六拾目　私徳用
銀拾貫百六拾目　江戸京大坂三地役人共江割渡遣候分

一同年四月十八日、掛り西村貞太郎殿江、左之諸雑用書差出候、
御銀吹方一日八拾貫目程吹立、掛り人数諸雑用、
一人数三拾四人分諸雑用
壹ヶ月分
銀貳貫五百五拾目　三拾四人分出勤料　但一日壹人貳匁五分宛
銀九百拾八匁　右同断飯料　但一日壹人九分宛
銀壹貫貳拾目　三拾四人分心附遣候分　但壹人三拾目宛
銀拾貳匁五分　極印下彫役給金
銀拾三匁五分　同断飯料日数十五日出勤之積　但一日九分宛
〆四貫五百拾四匁
壹箇年分
合銀五拾四貫百六拾八匁　諸雑用
外ニ
銀六拾目　極印貳拾本彫入日数七拾日分　極印下彫役出勤飯料但一日九分宛
〆
右之通御座候以上
辰四月　大黒長左衛門常印

〔金銀御吹替次第 三編四〕三月〇萬延元年廿一日、神奈川表洋銀極印、幷諸道具入用直段書、早々差出候様ニと、御掛り方より被仰聞候ニ付、即左之通認、即刻差出、

覺

一定極印三拾五本　但壹本ニ付壹匁貳分五厘
此代四拾三匁七分五厘
一鐵敷三挺　但壹挺ニ付拾壹匁五分
此代三拾四匁五分
一鐵槌三挺　但壹挺ニ付四匁貳分
此代拾貳匁六分
一打臺三　但壹ニ付三匁五分
此代拾匁五分
一鐵槌柄貳拾本　但壹本ニ付三分五厘
此代七匁
〆百九匁八分五厘

右者神奈川表、洋銀極印打諸道具代料ニ御座候、以上、

申三月廿一日　大黑作右衛門

〔金銀御吹替次第吹一方〕元文銀

鑄造雜事

一元文元辰年五月三日、細田丹波守殿江被仰渡候は、此度御吹替之御沙汰有之候ニ付、左之趣被仰渡候、依之左之通之請書即刻差出、

被召呼候人數
後藤庄三郎
樋木藤兵衛

大黒長左衛門
日比五郎左衛門
中村吉右衛門

覺

一新吹銀百目之內　位書有之
右之位仕、丁銀貳三拾挺、小玉銀五六粒吹立可申事、
一右極印是迄之通之文字之外ニ、文之字を打添可申事、
一丁銀極印は、壹枚之兩端ニ文之字添、極印ニ打可申候、小玉は文之字を小文字ニ彫入可申事、
右之通ニ相仕立、極印を打、來ル七日朝迄差上可申旨、尤隱密ニ相心得可申旨被仰渡候趣奉畏候、
以上、

辰五月三日　日比五郎左衛門
中村吉右衛門
大黒長左衛門

一右之通故極印相改、手本吹相調、丁銀小玉銀七日之朝、細田丹波守殿へ、日比五郎左衛門、中村吉右衛門自分、申合持參差上候、但手本吹、五月六日夕飯後壹吹、○中略
一同年五月十三日
御殿御勘定部屋へ罷出候處、越前守殿丹波守殿、御列座ニ而被仰渡候は、此度金銀吹替被仰付候、嚴密ニ相勤候樣被仰渡候、

覺

一銀百目之內　位

右之通ニ吹立可ㇾ申候、以上、

辰五月

手本吹之通、極印之儀も可ㇾ仕旨被ㇾ仰渡、右書付御渡被ㇾ成候、

御用掛

松平左近將監殿

本多伊豫守殿

大岡越前守殿

細田丹波守殿

罷出候人數

後藤庄三郎

椹木藤兵衛

大黒長左衛門

日比五郎左衛門

中村吉右衛門

右之通可ㇾ相心得由被ㇾ仰候

卽日爲ㇾ御禮、右御四人、幷〇中略神尾五郎三郎殿へ罷越候、

一同年五月廿一日、明六ッ時御評定所へ罷出、誓詞相濟候、

起請文前書

一今度銀吹改御用就ㇾ被ㇾ仰付候、被ㇾ仰渡候儀共堅相守、聊以御後闇儀不ㇾ仕、物毎精入、諸事有體ニ相勤可ㇾ申候事、

一銀位吹方包方之儀、念入嚴密ニ仕、秤目毛頭違不ㇾ申様可ㇾ仕候事、

附私之奢不ㇾ仕、諸事相愼、銀座仲ヶ間之者江對し、聊以非分申掛間敷候事、

一銀位之儀無ㇾ相違ㇾ様、隨分入ㇾ念吹立、銀座之者と立會、度々試吹致、委細吟味可ㇾ仕候、且又極印相濟候丁銀小玉、御差圖無ㇾ之以前ニは、一切他所へ出し申間敷候事、

一銀座江買入候、灰吹銀之事、是又右同前ニ相心得、入ㇾ念吹立可ㇾ申候、吹高之都合無ㇾ相違ㇾ様ニ、帳面

記置可レ申候事、

附召抱候手代は不レ及レ申上、御用ニ懸り候末々之者共迄、右之趣を以誓詞致させ、諸事相愼、精入相勤候樣ニ可レ申付候、且又銀座中之者、幷私手代末々之者ニ至迄、私曲ヶ間敷義ハ不レ及レ申上、總而不レ宜者も御座候ば、少も不レ隱置、有體ニ可レ申上候事、

右之條々雖レ爲二一事、於レ致二違犯者、罰文如二式目、六十六字 可レ罷レ蒙者 蒙之字罷之字之下へ書 也、

元文元年五月廿一日　大黑長左衞門書判

三宅周防守殿

大岡越前守殿

細田丹波守殿

深尾隼人殿

〔金銀御吹替次第一吹方〕元文銀

一元文二巳年正月廿三日、古銀貳千貫目宛、一日ニ吹立候人數積り書付、別紙之通差出、

覺

一一日ニ古銀貳千貫目宛吹立候人數積

內

古銀千貫目、唯今迄之人數ニ而吹立申候、

殘り古銀千貫目宛吹立候人數積り

凡火土數　七

湯入役拾貳人　筋役七人　極印役四拾貳人　湯揚役拾四人　大よみ役七人　なまし役拾八人　小仕五人　手傳拾四人　吹子指三拾五人　下働貳拾人

〆百七拾四人

此内江戸より爲差登候人數

湯入役貳人　極印役五人　湯揚役六人　なまし役五人　手傳三人　吹子指拾五人

〆三拾六人

殘る百三拾八人ニ京都ニ而新規召抱可申分

右之通之人數、京都ニ而召抱申候はゞ、二ヶ月程之内ニは、手馴可申と奉存候、以上、

巳正月　大黑長左衛門

〔吹塵錄九〕後藤方ニ而取調候通用金吹立高幷引替殘高

一慶長金　慶長五子年より元祿八亥年迄吹立

是は元祿年中、書類燒失ニ付、吹立高難相分、

引替高

千五拾貳萬七千四拾三兩

一元祿金　元祿八亥年より寶永七寅年迄吹立　千三百九拾三萬六千貳百貳拾兩壹分　〇以下引替高殘高略

一乾字金　寶永七寅年より正德四午年迄吹立　千百五拾壹萬五千五百兩

一武藏判　正德四午年吹立　貳拾壹萬三千五百兩

一享保金八百貳拾八萬兩 享保元申年より元文元辰年迄吹立

一元文金千七百四拾三萬五千七百拾壹兩壹分餘 元文元辰年より文政元寅年迄吹立

一眞字貳分判貳百九拾八萬六千貳拾貳兩餘 文政元寅年より同十一子年迄吹立

一文政金千百四萬三千三百六拾兩餘 文政二卯年より同十一子年迄吹立

一壹朱金貳百九拾貳萬百九拾貳兩餘 文政七申年より天保三辰年迄吹立

一草字貳分判貳百三萬三千六拾壹兩貳分 文政十一子年より天保三辰年迄吹立

一貳朱金千貳百八拾八萬三千七百兩壹分餘 天保三辰年より安政五午年迄吹立

一五兩判拾七萬貳千貳百七拾五兩 天保八酉年より同十四卯年迄吹立

一天保金八百拾貳萬四百五拾兩 天保八酉年より安政五午年迄吹立

一安政貳分判三百五拾五萬千六百兩 安政三辰年より萬延元申年迄吹立

安政六未年吹立

一正字金三拾五萬千兩〇中略

以上

其後取調

萬延元申年二月廿三日より慶應三卯年八月六日迄出來高

一新小判六拾貳萬五千五拾兩

萬延元申年二月廿三日より元治元子年十二月廿五日迄出來高

一新壹分判四萬千六百五拾兩

萬延元申年二月廿三日より明治元辰年四月十四日迄出來高

一新貳分判四千六百八拾九萬八千九百三拾貳兩貳分

萬延元申年十二月廿三日より文久三亥年十一月十四日迄出來高

一新貳朱金三百拾四萬兩〇中略

以上

〔吹塵錄九〕

貳朱判を古貳朱判ニ吹立	金壹萬兩ニ付	貳千六百五拾七兩	御損
壹朱銀を古貳朱判ニ吹立	金壹萬兩ニ付	四千八百八拾五兩	御損
壹分判を古貳朱判ニ吹立	金壹萬兩ニ付	五千七百九拾九兩	御損
三口平均壹萬兩ニ付	四千四百四拾兩	御損	
古貳朱判を新貳朱判ニ吹立	金壹萬兩ニ付	三千三百四拾七兩	御益
壹朱銀を新貳朱判ニ吹立	金壹萬兩ニ付	三千百四兩	御損

壹分判を新貳朱判ニ吹立　金壹萬兩ニ付　四千三百三拾五兩　御損

三口平均壹萬兩ニ付　千三百六拾四兩　御損

新文字銀古文字銀ニ吹立　目方六百貫目ニ付（金ニシテ壹萬兩〇原書朱字以下同）　百三拾貫四百三拾四匁（金ニシテ貳千百七拾三兩）　御損

保字銀古文字銀ニ吹立　目方六百貫目ニ付（金ニシテ壹萬兩）　貳百六拾貫八百六拾九匁（金ニシテ四千三百四拾七兩）　御損

二口平均六百貫目ニ付　百九拾五貫六百五拾壹匁（金ニシテ三千貳百六拾兩）　御損

古文字銀新文字銀ニ吹立　目方六百貫目ニ付（金ニシテ壹萬兩）　百六拾六貫六百六拾六匁（金ニシテ貳千七百七拾七兩）　御益

保字銀新文字銀ニ吹立　目方六百貫目ニ付（金ニシテ壹萬兩）　百六拾六貫六百六拾六匁（金ニシテ貳千七百七拾七兩）　御損

以上好事家の手錄による

〔貨幣通考〕貨幣略上

國家貨幣之制、在於豐臣之時、既別鑄造行于關內、慶長五年、天下歸一、因舊制確定之、以爲永式、明年定銀錠式、謂之慶長金銀、曰大鈑、重四十四錢、楕而薄、曰小鈑、重四匁八分弱、形如大鈑而小、曰分鈑、重一錢二分弱、長方而稍厚、銀則傾注灰上、無定形、大者曰挺銀、形如海蛆、重概四十餘錢、小者曰豆鈑、其形如指頭、如菽粒、輕重不等、後世每更造改鑄、有大小純駁之差、而其形狀則遂仍以不變、當是時礦運極盛、國用亦豐足、造幣之間無意利之、故其質皆純粹精好、蓋其直與不成幣者相等也、後九十五年、至憲廟〇德川綱吉時、後宮之飾、崇佛之費、動以鉅萬計、國用大變、判度支荻原重秀、獨專國計、收斂既盡、與利無方、始行改貨之事、元祿八年、悉廢慶長金銀、改鑄新幣、其重雖如法、其質粗惡、和金以銀、和銀以銅、雜質居半、謂之元祿金銀、十一年、始鑄二銖金、重半分鈑、寶永三年五月、七年三月及四月、累鑄銀錠、謂之寶字、二寶字、三寶字、四寶字銀、愈鑄愈粗惡、殆同純銅、至百錢中僅有一十八錢之銀、寶永七年、鑄小鈑分鈑、其重二匁五分、及六分二厘五毫、殆半定量、是元祿金之去銀料爲純者也、謂之乾字金、與元祿金並行、於是金幣六品、銀幣五品、薄惡多品、民心迷亂、隨意低昂、物價騰貴、商賈不行、天下苦之、文廟〇德川家

宣患之、遍使百官議、議已決而公薨、正德四年、以遺命、金銀悉復慶長之舊式、改鑄小鈑分鈑銀錠、盡除其雜質、概合二爲一、程色重量、與慶長不差毫釐、其替換貿易之法、亦以一當二、幣法壞二十年再復其實、天下大悅、獨其大鈑、享保十一年改鑄焉、當時以直小鈑七枚半、此後他幣歷改造數回、而大鈑獨存至于今、但其直每改貨漸騰、殆至三十金、元文元年、改鑄小鈑分鈑判錠、時有言海内之幣減半、不足民用者、故大加銀銅、且減金量、爲每兩三匁五分、以增其數、其間雖非無官利、而其意在增幣數、故兌換交收之際、多與之贏餘、金則收百出百六十五、銀則取十與十五、謂之元文金銀、自正德四年至此二十有二年、明和三年、創五匁銀、重如其文、以十二枚當小鈑一、銀有定形者始茲、九年盡去其銅質、始造二銖銀、重二匁七分五厘、文政元年、始鑄二分金、重准元文法、二年改鑄小鈑分鈑、其重仍舊、更加銀料、三年改鑄銀錠、謂之文政金銀、元文金銀行于世八十有三年、至茲悉廢毀、七年改鑄二銖銀、重減舊七分、天保三年、銷一朱金、以鑄二朱金、重猶准文政法、八年銷二朱一朱二銀、以始造一分銀、重二匁三分、又鑄五兩鈑、重九匁、比他金質純而量小、是冬改鑄小鈑分鈑銀錠、其金每兩減五分、謂之天保金銀、自文政二年至此十有八年、廢文政金銀及二分金、明年、鑄大鈑以增享保中所造、嘉永六年、復造一朱銀、重五分、安政二年、罷五兩鈑、以鑄二分金、重准天保改鑄、至茲二十年矣、有廢者、有造者、而今現行者、金幣則有大小分鈑二分二銖、凡五品、銀幣則有一分一銖及鋌銀豆鈑、四名三品、要之明和以還、常以鼓鑄爲足財要務、故數鑄而漸至粗薄、是亦勢之不得已者也、

品位

〔貨幣通考〕程色

凡定金銀之品第、其法有二焉、本邦古來、摩塗於石而視其色、以定其品第、謂之試石術、石以出南紀那知山者爲佳、其質緻密黯黑、如黑端硯、又有對牌純駁數十、各鑿記其程色、試之時與其金銀並摩塗、相照而知其程色、頗爲便捷、唯鑄對牌、非極精且多、則無由精察耳、遠西人有水試術、諸金中黃金最重、白金次之、銅錫鉛鐵漸輕、故視其輕重、可以察其純駁矣、其法以所欲試金、繫馬尾人髮單糸等至輕物、懸

稱頭、先知二其幾錢一、而下二之蒸餾水中一、浮而不レ露二水面一、沈而不レ著二器底一、再計則由二水力一減二其重一、以二其減量一比二較金量一、純者減少、駁者減多、可三以見二其純駁一矣、確實精細、

		純金			
蒸餾水	○一○○○○	九分	一八三七九七	四分	一三九八七八
純金	一九二五八一	八分	一七五○一三	三分	一三一○九四
鍛純金	一九三六一七	七分	一六六二二九	二分	一二二三一○
純銀	一○四七四三	六分	一五七四四五	一分	一一三五二六
純銅	○七七八八○	五分	一四八六六一		

〔金座永野家記〕天明七未年十月、御勘定奉行久世丹後守へ、後藤より書上扣寫、

金位の最上を四拾四匁位と相唱申候、夫より位劣り候に隨ひ、唱之目方は却て昇申候、但最上を四拾四匁位と相唱候由來は、往古目方百目有レ之金を、晝夜燒ツメ最上に仕候處、目方四拾四匁に相成、最上極品に燒揚、其上ハ何ケ度燒候ても、目方減不レ申候金の妙所に至り候に付、右の由緣を以て、唯今に最上金を四拾四匁位と相唱申旨申傳候、右四拾四匁迄に詰り不レ申、四拾四匁以上目方之多き程、燒ケ方之若きにて、銀氣銅氣等交物有て、目方之通に相成候故、夫丈ケ位相劣り申候、依て位劣り候樣唱て、目方は却て相增申候儀に御座候、

古來は板金砂金等を以て通用仕候處、御入國以後、金銀通用之儀は、御國政第一之事に被レ爲二思召一候間、宜相計申候樣、上意を以て金座銀座支配仕、猶御直之御差圖奉レ伺、初て小判小粒吹立させ申候、右小判小粒を慶長金と相唱申候、○中略

通用金に、銅氣其外鑢氣惡物等相交り候儀を、精密に相改め申候、佐州にて出來金吹立候節、私役所にて相改候儀は勿論之儀、江戸表にても支配金座人、右之御定を以て、入レ念取扱候へ共、猶

又私役所に於て、役人共立合、再三及吟味候儀に御座候、古來より右之通にて、今以私役所幷支配金座人共、精密に相改申候、前條相認候古金品々も、位之甲乙は御座候へ共、差銀之增減計にて、外物決して相交り不申候、右故御金之差銀に用候灰吹銀も、花降留吹と申迄に吹詰、惡物を除き候儀に御座候、

慶長金

乾字金

武藏判

右何れも五貳々位に御座候

最上之金百目に、花降留吹銀拾八匁六分餘差加候へバ、右三品之金位に相成申候、

元祿金 七六七位に御座候

最上之金百目に、花降留吹銀七拾四匁三分餘差加、右元祿金之位に相成申候、

新金 五口七位に御座候

最上金百目に、花降留吹銀拾五匁貳分餘差加候へバ、右新金位に相成申候、

文字金 六六九五六五位に御座候

最上之金百目に、花降留吹銀五拾貳匁壹分餘差加、右文字金位に相成申候、

〔金位幷金吹方手續書〕金位之事

一山出金川金砂金筋金吹金等、都合位附之儀者、金座に手本金有之、位糺之金と手本金とを、石に付ケ見競、金之位何程之位と定メ候事、

此吹、金位附ニ、庄三郎江相渡候得バ、同人より金座人共江渡し、金座人共請取、兩三人ニ而右之吹金を見、凡何程位之金と申儀を、銘々當りを見定置候上、吹金と手本金を石ニ付ケ、見込

之位幷壹匁違之手本金を前後に附合せ、座人共評論之上、吹金何程之位と定メ、候事故、金座人共も、年來之修業鍛錬仕候儀ニ而、尤金を石ニ付候も、右同樣不レ附馴内者、摺附候篇數ニ厚薄出來、位定候儀難レ成、又山中より出るを山出金と唱、砂中より出るを砂金と云ヒ、水中より出るを川金と唱候、右之品位附見様は、砂之如く細ニ候故、先は石ニも難レ付候間、凡位は工者之金座人共見覺候處にて、凡何程位と定候得共、正敷事は一旦吹寄候上、石ニ付不レ見定レ候而者、丈夫に位定り不レ申候、依而吹寄候金者、總名吹金と唱候、其品々ニ而位甲乙有レ之候、勿論山出金川金砂金之細かなるをも、石ニ付候儀難レ成ニ者無レ之、楊枝之先江附ケ、石にうつし附ケ見定候事、又筋金と唱候者、金氣至而少々、銀銅鉛蠟氣、其外惡ものと申、山氣類交り候金を筋金と唱、金之位薄、下品成品ニ候事、

〔銀位幷銀吹方手續書〕銀位之事

一銀之位、壹割入を上銀と定め、夫より位劣候を歩入と唱、或は釣替とも唱、又至而不品を歩引之位と唱候事、

此壹割入と唱候を上銀と定候は、慶長年中、灰吹銀を銀座江買上候節、上灰吹銀壹貫目ニ付、代り銀として、慶長銀を壹割增之積、壹貫百目ニ而買上來候故を以、いつとなく上銀之位を壹割入と唱申候、夫より位劣り候を歩入と唱候は、銀之性合不レ宜、銅鉛之類含有レ之候ニ付、縦令ば、灰吹銀壹貫目をば、歩增壹貫八拾目ニ而買上候を八歩入之位と唱、壹歩入迄は同樣之割合に候事、

又釣替と唱候は、灰吹銀壹貫目を慶長銀壹貫目ニ而買上候故を以、釣替之位と唱申候、歩引之位と唱候は、灰吹銀壹貫目ニ付、慶長銀壹貫目之内、壹歩引之積、九百九拾九匁ニ而買上候を壹歩引之位と唱江、九歩引迄同樣之割合ニ候得共、凡五歩引より位劣候銀者無レ之由、銀座

年寄共申聞候事、

右之通、慶長年中ゟ灰吹銀は壹割增、夫ゟ劣候を何步增、又は壹貫目を壹貫目ニ直買上、其餘は右ニ准、買上候故を以、いつとなく右之通相定候事、

〔貨幣秘錄〕金銀品位の事

慶長小判金一枚、重サ四匁七分六厘、正金四匁一厘二毛二糸位五十二匁二分、

同一步判金一枚、重サ一匁一分九厘、正金一匁三毛位同上、

元祿小判金一枚、重サ四匁七分六厘正金二匁七分三厘六糸位七十六匁七分、

同一步判金一枚、重サ一匁一分九厘、正金六分八厘二毛六糸位同上、

同二朱判金一枚、重サ五分九厘五毛、正金三分四厘一毛三糸位同上、

乾字小判金一枚、重サ二匁五分、正金二匁一分七毛三糸位五十二匁二分

同一步判金一枚、重サ六分二厘五毛、正金五分二厘六毛八糸位同上、

正德小判金一枚、重サ四匁七分六厘、正金四匁一厘二毛二糸位同上、

同一步判金一枚、重サ一匁一分二厘、正金一匁三毛位同上、

享保小判金一枚、重サ四匁七分六厘、正金四匁一分三毛九糸位五十匁七分、

同一分判金一枚、重サ一匁一分九厘、正金一匁三厘二毛七糸位同上、

文字小判金一枚、重サ三匁五分、正金二匁三分位六十六匁九分五厘六毛五糸、

同一步判金一枚、重サ八分七厘五毛、正金五分七厘五毛位同上、

眞字二步判金一枚、重サ一匁七分五厘、正金五分七厘五毛位七十八匁、

文政小判金一枚、重サ三匁五分、正金一匁九分七厘四毛三糸位同上、

同一步判金一枚、重サ八分七厘五毛、正金四分九厘三毛五糸位同上、

一朱金一枚、重サ三分七厘五毛（正金四厘五毛二糸〇餘）位三百六十五匁、
草字二分判金一枚、重サ一匁七分五厘、（正金八分五厘五毛）位九十匁、
二朱金一枚、重サ四分三厘七毛五糸、（正金一分二厘八毛三糸）位百五十匁、
五兩判金一枚、重サ九匁、（正金七匁五分八厘六毛二糸）位五十二匁二分、
保字小判金一枚、重サ三匁、（正金一匁七分三毛二糸）位七十七匁五分、
同一歩判金一枚、重サ七分五厘、（正金四分二厘五毛八糸）位同上、
丁銀一枚重サ四十三匁内外なり、俗に大黒銀といふ、
豆板銀、大小輕重同じからず、俗に小玉銀といふ、
慶長銀百目、銀八十匁、銅二十目、
元祿銀百目、銀六十四匁、銅三十六匁、
寳永銀百目、銀五十匁銅五十匁、
中銀百目、銀四十目、銅六十匁、
三寳銀百目、銀三十二匁、銅六十八匁、
四寳銀百目、銀二十匁、銅八十匁、
享保銀百目、銀八十匁、銅二十匁、
眞文字銀百目、銀四十六匁、銅五十四匁、
草文字銀百目、銀三十六匁、銅六十四匁、
保字銀百目、銀二十六匁、銅七十四匁、
五匁銀一枚、重サ五匁三厘、銀二匁三分一厘餘、銅二匁六分八厘餘、
古二朱銀一枚、重サ二匁七分、

新二朱銀一枚、重サ二匁、
一朱銀一枚、重サ七分、
一步銀一枚、重サ二匁三分、

〔柳葊雜筆　四〕黃金を純精に鎔鑄ば、曲尺一寸四方六面にて、重百六十匁あり、依て是を四々の金と云、言は方一寸厚一分にて、四々十六匁ある故なりとぞ、是金の極品なりと云り、但享保十四年十一月、金座へ仰付られ、黃金一寸四方六面の重さを試されし時は、百三十匁ありしと物觀の衡考に見えたり、然る時は今百六十匁あると云も、定論となし難し、〇中略甲州の金工某が說に、山吹金四十八匁八分あり、上に鎔て四十四匁を得る、依て是を四四の金と云、極品也と云り、深井庄兵衞入道常甫甲州金座が說に、無交銀六十目燒つめ、四匁七分六釐になる、元和小判金位の金となる、四匁七分六釐の金燒つめ、三匁八分となる、是より何日燒ても耗ずと云り、但常甫が銀を鎔化て金と爲と云說は、小判六十目と云說の本據にして、實に銀を鎔て金と爲にはあらずと殿村常久が語りし、

貞享元年磯村吉德著はせし、算法闕疑抄に、金一寸四方六面、重百四十六匁とみゆ、又同書頭書には、金一寸四方六面、重百七十五匁と、百六十六匁四分と、百六十匁と、三種を載す、本書の說と四種なり、それに今校定する所と合せて七種の中、百六十匁と云者古今比同の說なり、

〔茂木隆春草書〕銀工中村內藏助某、正德ノ末、公儀御咎ヲ蒙リテ、江戶ヲ追放セラレ、大津三井寺ノ邊ニ流浪セリ、其後公免ヲ蒙リテ、享保十年ノ頃ハ、北野ノ邊ニ在住シ、剃髮ノ身トナリ、風竹ト稱シテ有シ、其頃予ニ語テ曰ク、太閤始テ金銀一兩ノ量目ヲ定メント欲シ、鷄卵ヲ煮サセテ前ニ召シ、其皮ヲ去テ、其黃白二品ヲ秤ニ懸ケサセテ見ラルヽ時、黃身ハ其量四匁八分アリ、白身ハ四匁三分アリ、是ヲ以テ天下周ク、金銀各一兩ノ量目ト下知セラレテ、今ニ至テカクノ如シ、竹流シノ

制迄ハ、專ラ金銀共ニ一兩ノ量四匁八分ニ、三分ヲ用ユルモノナリト云々、〇又見二地方落穗集一

〔草廬雜談上〕賜予之銀

我國古ハ唐ノ制ニ依ラレテ、十匁ヲ一兩トスト見エタリ、四匁三分ヲ一兩トスルハ、何レノ時ヨリナルヤ詳ナラズ、古ノ銀子ノ一兩ハ十匁ナレバ、國初ノ頃ヨリ四匁三分ヲ一兩トスルニヤ、

〇按ズルニ、銀ノ一兩四匁三分ハ、銀一枚ノ十分ノ一ヨリ出デタリ、乃チ小判一兩四匁三分ガ、大判一枚ノ十分ノ一ヨリ出デタルガ如シ、サレバ大判ノ出來シト共ニ、銀ノ量目モ定リシナラン、

〔退私錄〕金一兩の重サも、もとは五匁也、銀一枚五十匁也、それをわざと内ばにしたる物也、錢の九十大文を百文に用るも、其心也と仰し、但し今の金の重サは、神君の御定有しと町人の云しをきく、それはひしと五匁ときはまれば、一りんかろくても用ひられず、それ故内にて重サ分明ならねば、天下にすたる金のなき爲なりといふ、

〔鈴鹿氏日記〕借用仕候灰吹鳥目ノ事

錢合百貫文　此利一ヶ月ニ付四貫文

灰吹合五拾兩　料目式百十五匁

此利一ヶ月ニ付六匁四分五厘

右錢灰吹致借用所、實正明白也、爲其質物、兩人之田畠、吉田村ニテ貳町八反、内壹町三反大角筑前、壹町五反ハ鈴鹿大藏、來年十一月迄、預置申候、若□銀錢遲々仕候者、兩人田畠、永代作取ニ可被致候、其時一言モ違辭申間敷候、仍借狀如件、

應永元年十二月八日　鈴鹿隼人正

定康判

大角筑前守
時行判

伊地知宗雲老

○按ズルニ、一兩ハ四十三匁ナリ、

〔大内家壁書〕金銀兩目御定法之事

こがねしろかねの兩目之事は、京都之大法として、何れも一兩四文半錢にて、貳兩九文目たる處、こがねをば一兩五匁にうりかふ事そのいはれなし、殊に御分國中如此云々、代はたかくもやすくも、其身〳〵のはからひたるべし、兩目の事は、京都の法をまもるべし、若此旨を背やからあらば、經上裁、罪科有べし、自然又此御法を破輩を聞出事あらば、遂糺明、其科不通者、重科におこなはるべし、仍下知如件、

文明十六年五月日　參河守重行判

○按ズルニ、四文半錢トハ四匁五分ノコトナリ、

〔金銀圖錄一正用品〕一同書實〇志ニ又左ノ古文書ヲ載ス云、此書年號ナケレドモ湯河氏紀州ノ畠山尾張守尚順ヘ仕ヘシ比ノ事ナレバ、天正上下ノ書ナルベシ、

一しろかね事之外たかく候
一金かねはやすく御入レ
一米は一貫に一斗八升ツヽ御座候
一金がねは五十貫仕候
一金がねにしろがねは四百廿め仕候
一半ノ金一まいしろがね四百廿文にてかはり候

一銀子是にてひきおこし八石五斗
○按ズルニ、金がねハ黄金ニテ、卽チ大判ナリ、大判一枚十兩ナレバ、銀ニ換テ四百二十匁ナリ、乃チ金一兩ハ銀四十二匁ニ當レリ、

〔敎令類纂初集錢六十六〕慶長十四己酉年七月十九日

定

一金子壹兩に銀五十目たるべき事

右之旨を以、御年貢幷諸商賣倶に取扱ふべき者也、仍而所ㇾ被ㇾ定置ㇾ如ㇾ件、

〔寬永板塵劫記上〕一よりうちのこかずの名の事



〔國師日記〕元和四年二月朔日

請取申銀子之事

合八百六拾目（但貳拾枚〇一枚當ニ四十三匁一）丁銀也

右是ハ禁中樣、金地院へ拜領之銀子也、慥に請取申候、以上、

午二月朔日

金地院内 松首座判

同 森久右衛門判

廣橋大納言樣御内

速水長門守殿

速水安藝守殿

寛永八年七月十二日、竹西堂清兵衛下著、久右衛門七月二日之狀來る、〇中略

一小判百兩、清兵衛へ渡下し進候、御うけ取候樣にと存候、右小判代、銀子合五貫七百四拾五匁也、

但壹兩に付、五拾七匁四分五リンヅヽさん用也、

一壹分判三拾切、平清兵衛へ渡、此銀四百卅三匁五分也、

但壹分一切に付、銀拾四匁四分四リン五毛ヅヽさん用也、

〇按ズルニ、壹分判三十切ヲ銀四百卅三匁五分トスル時ハ、壹兩ハ銀五十七匁八分ニ當リ、壹分一切ヲ銀拾四匁四分四厘五毛トスル時ハ、壹兩ハ銀五十七匁七分八厘ニ當ル、

〔國師日記〕寛永九年八月十九日

請取申銀子之事

合四貫三百目　但百枚分〇一枚當ニ四十三匁

右是ハ爲南宗院樣御吊料之銀子也、慥に請取申處如件、

寛永九年申八月廿一日　國師内 平賀清兵衛判在

南部山城守樣御内 楢山五左衛門殿 參

九月十六日、南部殿後室源秀院殿ゟ、使楢山五左衛門來る、十八日月忌初佛事料として、銀子拾枚

但一包五百目來、

〔貨幣秘錄〕金銀相場之事

享保十年乙巳十二月、大判金一枚、金七兩二分の積りたるべき由定めらる、

寛政三年辛亥三月、遠國御用御暇拜領物之分、以來大判金一枚の代、小判金二十兩賜ふべき由定めらる、

〔御當家令條三十四〕請取申銀子之事

合五枚者但丁銀也

但貳百拾五匁也〇一枚當二四十三匁

右是者公儀御證文破れ申候に付、御僉議之節、有體に申上候爲御褒美、從公儀被下、難有慥請取申處實正也、仍而如件、

寛文十二子年八月　　下總國角木村　市兵衛

小泉源右衛門殿

佐久間次郎右衛門殿

松原善兵衛殿

稻野伊右衛門殿

〔正寶事錄〕延享四年卯四月十六日、今晝九時頃、二御丸出火ニ付、町火消共相詰候處、〇中略御褒美左之通、〇中略

一銀五拾枚　此銀貳貫百五拾目

六拾四匁九分五厘替

此金三拾三兩六匁六分五厘内六匁六分五厘切貨

差引金三拾三兩

名主百三十二人に割、一人金壹分ヅヽ、

〔享保集成絲綸錄 三十二〕元祿十三辰年十一月

覺

一銀子之儀、御藏元拂金子壹兩ニ六拾目替之積候間、世間准之、金子壹兩ニ銀六拾目替積、可相心得候、乍去兩替屋共差引利潤可有之候間、當年より來年十二月迄、金子壹兩ニ銀五拾八匁ゟ高直仕間敷事、

〔十組問屋集要記錄〕元祿八乙亥年、金銀御吹替有之、(元の字金也)慶長金銀に元字金銀取交取遣有之、銀相場次第に高直に相成、上方下り物、諸代物高直に付、其上諸差引等差支、難儀致候に付、元祿十二己卯年、御町奉行保田越前守樣、松前伊豆守樣へ、諸國一統、小判六拾目通用之御定法、御觸被成下候樣相願候得共、重き御事故、御聞濟も無之候得共、十組問屋は不及申、世上一統之難儀に相見申候間、十組申合、段々相願候處、翌辰之年霜月八日より、小判六拾目通用仕候樣に御觸有之、依之右御禮三奉行樣へ上り申候、但シ此時關東其外國々、小判壹兩六拾目遣ひ始也、(以上記錄)

○按ズルニ、此ノ如ク令シ、レドモ、京大坂ニテハ兩替屋等、切引ト名付ケ、金壹兩ニ付貳匁餘ノ歩ヲ立、五拾六匁程ノ相場ヲ立テ、諸色買物代、觸書ノ如ク小判六拾匁ニハ受取ラズ、因テ江戶問屋等、元祿十三年ヨリ享保二年マデ、數十度ニ及テ願出、京大坂共當地同樣、金壹兩ヲ銀六拾匁ニ通用スベキ旨、仰付ラレ度旨願立ト雖モ、竟ニ聞屆ノ沙汰ハナカリシトナリ、(以上上文集要記錄)(大意)思フニ關東ハ金通用ナレバ、銀ニ定價アルモ或ハ故障ナカルベシ、關西ハ昔ヨリ銀通用ニテ、時々ノ相場ニ從フベキ旨ナレバ、銀ニ定價ヲ立ツルコトハ大ナル支障アリ、故ニ此令ハ後後マデ、關西ヘハ實行セラレザリキ、

〔享保集成絲綸錄三十二〕元祿十四巳年十二月

覺

銀子幷錢相場之儀、去年相觸候通、向後彌金壹兩ニ、銀ハ五拾八匁替、錢ハ三貫九百文替之積より高直に仕間敷候、右之相場より下直ニ成候分ハ、勝手次第ニ候、若內證にて相對いたし、銀子錢共ニ高直に賣買仕候者相聞候者、僉儀之上、可爲曲事勿論、かこひ置候もの有之候はゞ、其所之者支配方江可申出候、存ながらかくし置候はゞ、其所之者共迄、可爲曲事者也、

十二月

寶永二酉年十一月

一銀相場之儀、最前相觸候處、猥有之高直之由相聞不屆候、向後金壹兩ニ、銀五拾八匁ゟ高直ニ仕間敷候、若高直ニ致賣買もの有之者、僉議之上、可及沙汰間、此旨急度可相觸候、以上、

十一月

〔吹塵錄九〕

一元文銀百目　內正銀四拾六匁　但雙替二十六雙

此代銀百拾九匁六分

一文政銀百目　內正銀三拾六匁

此代銀九拾三匁六分

一保字銀百目　內正銀貳拾六匁

此代銀六拾七匁六分

一古貳朱銀壹兩　目方貳拾壹匁六分

此代銀五拾六匁壹分六厘

一新貳朱銀壹兩　目方拾六匁
此代銀四拾壹匁六分
一壹朱銀壹兩　目方拾壹匁貳分
此代銀貳拾九匁壹分貳厘
一壹分銀壹兩　目方九匁貳分
此代銀貳拾三匁九分貳厘
以上好事家の手錄による

〔貨幣秘錄〕金雙替之事は、慶長金二十四雙一分、元祿金十六雙八分、元文金十九雙、享保金二十四雙八分、
文政金十六雙、保字金十六雙六分、草字二步判十三雙九分、二朱判八雙六分、一朱判五雙一分、五兩判二十四雙一分、〇中略
銀雙替の事は、御買上正銀一匁、代銀二匁六分、銀座賣渡正銀一匁、代二匁七分なり、

〔貨幣通考〕享保五子年七月、總て諸色御用物代金銀の事、去々戌十一月より以來は、別而銀相場高直ニ成候處、只今迄ハ金六拾匁替ニて、公儀之納拂有ㇾ之候ニ付、向後元直段の極め、金極めの品は金にて相渡し、銀極の品々は銀にて相渡候筈ニ候、依ㇾ之戌十一月以後、直段極候品々、右六拾匁替之御定之格ニ相立、銘々其心得を以、請負直段極有ㇾ之候間、自今以後は、右之通り銀ニて積り立候品は銀渡し、金ニ而積立候品は金渡しニ成候上は、六拾匁替之御沙汰ニ及ざることに成候間、六拾目替の積を以、積立候直段之品々、元直段を以、相應ニ引下ゲ申べき筈ニ候、此趣諸色御債負之者江御申聞せ、此道理得心致し引下させ、其趣銘々御書付遣さるべく候、〇中略御勘定所より諸向へ達す其下ゲ札ニ、譬ば總數拾ヲ此代銀六拾匁金にして百兩、但し六十匁替、右之通只今迄、六貫

目の銀を金百兩ニて相渡し候處、向後は六貫目を銀ニ而、眞に相渡候ニ付、此銀を請取たるもの、時の相場ニ兩替する時は、凡一兩四十五匁替ニ、〆金百三十兩餘ニ成候、左すれば最前賣上ゲ候時の覺悟ニは、金百兩ニ成候心得ニて、百三十兩ニ成候故、此三十兩餘の分は、覺悟之外ニ多く請取候にて候、然ル上は六貫目と申分は、四貫五百目程ニ賣申心得ニ而直段引申べき義ニ候、此段能々諸御用達之職人商人了簡いたし、戌十一月以後の極直段之分は、元直段凡二割半程宛は引申べき事ニ候とあり、

按るに官の銀法六十匁替の事、其始を審にせず、天正の頃、率ね四十二三匁替なる由なれば、慶元の頃も、左迄の替りは有まじ、(慶長の令に、五十目替の定めあり、)蓋し漸々銀の價下り、六十匁程に至り、官銀六十匁と云こと定まりたるならん、是迄は世間の通用も六十匁前後にして、是時より銀價登り、四十五匁計に成たる也、此後六十匁に復せし時も定かならず、意に元文改鑄の時よりならんか、猶他日の考を待つ、

〔經濟錄食貨五〕國初以來ノ故銀ハ、六十錢ヲ以テ金一兩ニ直シ、一錢銅錢百文ニ直スルヲ以テ常トセシ、四寶ノ惡銀ニ至テハ、直大ニ減ジ、八十餘錢ヲ以テ金一兩ニ直シ、一錢ヲ銅錢四十文計ニ直ス、茲ニ至テ士民ノ患甚シ、

〔草廬雜談下〕銀價

寛明日記ニ云ク、寛永九年、大相國公、(○德川秀忠)當將軍(○德川家光)江黄金三十萬枚被進、注ニ一兩ニ付銀六十六匁がヘトアレバ、國初ヨリ六十匁ノ内外ト見エタリ、

〔折たく柴の記下〕元祿の比よりして金には銀をまじへ、銀には銅をまじへて造られしかど、金銀を換べき法は、古への如くに、金一兩に價銀六十目なるべしと定めらる、

〔貨幣通考〕安政三辰年(○七月二十三日)発舗之稟狀

金座

銀　一分銀毎一兩（實六十八匁二分／買六十八匁二分）

大判一枚以一分銀（實二十六兩三分五匁／買二十六兩二分十匁）　六十匁替也、下倣之、

（小判／分判）毎百兩以一分銀（實百兩／買百兩十二匁）

（二分判／二朱金）毎百兩以一分銀（買百兩五匁）

〔官中秘策二十九〕金座之事

一後藤庄三郎、小判壹歩相究候、江州野洲郡小比江村において被下置候、五十石餘之知行御扶持方も不被下候事、御運上銀之手代之事、江戸に而十八人、京にて十二人、佐渡にては十八人餘罷在、上納金改包仕候事、

一佐渡に而、毎年御金貳萬兩程も吹立、御納戸へ納手間代、金百兩に付壹兩ツヽ被下候、恩祿銀佐渡銀も、庄三郎手代相改、銀座へ相まはし候事、

一但馬より御金出候事も有之、漸一ヶ年に五七兩の由、於江戸御代官衆へ納金、一ヶ年に四十萬兩程包申候由、上方ハ銀納にて京都にて包金指て無之由、包代ハ取不申候事、

一京都に而、庄三郎下に、小判師三十人計有之由、薩摩其外より寄金有之を買取、小判位之金銀持來候を吟味之上、小判壹分判ニ申付候、去亥年迄二十年平均、寄金一ヶ年に三萬兩程も有之候、

極印賃、百兩に付金壹兩宛取申候事、

一小判之儀、關ヶ原御陣七年以前、後藤庄三郎江被仰付、小判出來書判とも光次と被仰付候事、

一大判之儀、前々より後藤四郎兵衛方にて出來、今において書判ともに仕候、幷分銅落シ四郎兵衛方にて仕候、但シ金座之外見世にて彫物後藤と申候事、

後藤庄三郎事

一後藤庄三郎、駿州にて金座を仕、光次之判を定む、京江戸佐渡にて金を吹たり、方々國々にても

吹分、其吟味を駿州へ遣し、後藤庄三郎方判を取て、世に通用す、大法拾貳兩替之定也、然るに拾貳兩替の金にして遣すといへども、金の色惡敷ければ、見にくきよしにて後藤が判をせず、しかれば國々遠方より作り、遙に遣したる雜用の損金も多に付て、成丈拾貳兩替より過分に能仕立て判を取故に、慶長判は、拾貳兩替よりは能となり、駿河吹といふ小判は位惡敷とぞ、是駿河にて後藤が御定之通、拾貳兩替を以吹立候所故、他國の金と合せては、位あしく色も惡敷となり、

〔駒井日記〕文祿三年四月十七日

一三坂銀ふきども、太閤樣被成御改、常是に被成御定者、

求刹　宗切　宗列　宗生

次兵衞　理右衞門　又兵衞　與介　甚三郎　次郎右衞門　助次郎　三郎次郎　源左衞門　新五郎　三右衞門　三郎右衞門　彌兵衞　次郎左衞門　藤右衞門　次兵衞

已上貳十人

右之者共改、太閤樣御朱印被下之由、民法被申越、御禮爲申候、上樣〇秀次へ錫十對、湯つぎ五對進上、

同四年四月廿五日

一後藤手前金判之事、堺方々之者貳十人、太閤樣へ訴訟申、則後藤下に而、總金替、彼貳十人儘に可仕旨相定由、關白樣〇秀次へ後藤申上、

〔靈岩夜話〕後藤庄三郎事

權現樣御上洛被遊、聚樂の御屋形に御逗留の内、後藤一家のもの共の中にて、彫物細工を仕候ものを一人、召抱へらるべきとの被仰出に候へ共、其節田舍へ罷下候義をば、いづれも好不申候處

に、後藤一家のもの、中に庄三郎と申もの、私罷下り可申と申に付被召連、濱松へ罷下候處に、御意に相叶ひ、彫物御用の儀は脇へなり、御伽衆同前に相詰、常に上方咄など申上候由、或時御前にて庄三郎申上候は、御前樣天下を御取被遊候はゞ、只今の大判を切候而、小判と申物に仕り、又其小判を切候而小き金子に仕候はゞ、用事もたり、別て重寶に成可申由申上候に、果て慶長五年ゟ御當家の御代と罷成候に付、庄三郎を以、金座に被仰付、今時の慶長金と申物は初り候と也、其以前の儀は大判計にて、小判一歩判と申義は無之候となり、

〔老談一言記 一〕後藤庄三郎云、小判之儀、先祖庄三郎被仰付候以前も、小判と申事有之歟、承傳不申候、　壹分判之儀、慶長五年より出來仕候、

金座由來、權現樣御代、文祿二巳年、初而金銀之改被仰付候、同四未年は、江戶駿河兩所にて小判拵立申候、金之位、小判壹兩之目、御直に奉伺相定め申候、此小判墨にて光次判と書シ申候、是を武藏判と名付申候、慶長五子年、右墨判にて書シを極印に直し候樣に被仰付、此時壹分判、初而仕立候、江戶京佐渡三ヶ所に役所相立、小判壹分判共に拵候、此節金座之者共、分一金之儀、御直に奉伺相定り候、右之格を以て、代々分金を被下置候事、

〔貨幣秘錄〕金銀座起立之事

古へ大判小判等の製造あらざりし以前は、板金或砂金にて、各其代物に換へて通用せしかば、自ら品位輕重の違ひありて、不辨なる事共なりき、豐臣家の代、文祿四年乙未に至りて、神祖、金銀は御政務第一の重事たるを思召よらせ、後藤庄三郎光次を召て、御直に金銀改役を命せらる、爰に初て小判を製造して奉る、世にいふ文祿小判是なり、其後駿府江戶兩所にて宅を賜ひ、あらたに金座を設けらる、是金座の起立なり、加之江州小比江村の中にて、馬飼料として五拾壹石六斗の御朱印を賜ふ、是より世々家職を奉じて怠らず、十一代目庄三郎の時に至りて、文化七年庚午入

錢座

月十六日、年來の不正顯れて、終に御咎を蒙りて家斷絶せり、是によりて庄三郎が同家、銀座年寄役後藤三右衛門をして、御金改役に命せられ、新たに貳拾人扶持を賜ふ、同年十月、御手當として毎年金千五百兩、幷常盤橋御門外にして、庄三郎が上地の內、八百坪を役所地として下し賜ふ、其子三右衛門に至りて、天保十二年辛丑十二月、年來の功勞を賞せられ、さきの貳拾人扶持を併せて、貳百俵の世祿に加增し給ふ、〇又見二金銀錢座秘記一

〔慶長見聞集六〕江戶にて金の判あらたまる事

見しは昔、江戶町にて金に判する人、四條、佐野、松田とて、此等三人也、砂金を吹まろめ、一兩、一分、一朱、朱中などゝ、目をも判をも紙に書付、取渡する事、天正十八寅の年より未迄、六年用ひ來る、此判自由にあらずとて、後藤庄三郎と云人、京よりくだり、おなじひつじの年より、金のくらゐをさだめ、一兩判を作り出し、金の上に打判有て是を用る、又近年は一分判出來て、世上にあまねく取あつかへり、

〔明慶錄〕弘化二年十二月十日御勘定方ゟ御達

御金改役後藤三右衛門義、不屆之義有之、御仕置被仰付、右跡役、御腰物奉行支配四郎兵衛忰後藤吉五郎被仰付、新規二十人扶持被下、三右衛門拜領屋敷、役所向住居、有來土藏等、其儘被下、

〔官中秘策二十九〕銀座之事

一佐渡但馬兩國より出候御銀、百貫目に付銅貳拾貫目入、丁銀吹立、百拾貫五百目上納之御定也、

但殘三貫目は吹減、又は常是吹賃、其外諸入用に遣す、常是吹賃、壹貫目に付六匁餘、

一石見御銀は、百貫目に付、銅貳拾貳貫目入、丁銀に吹立、百拾九貫目上納之御定也、

右之御銀を受取、御定之通銀座にて吹合、其以後常是江人を付置、丁銀に吹立させ、右極印を打せ包せ申候事、

一寄銀百貫目、御銀位之銀にして、銅貳拾貫五百目入百拾五貫目にて遣、御銀位に無之銀は、ためし候上、相對有之候事、

一運上之銀は、寄銀三千九百九拾貫目迄は、御運上銀五百枚、寄銀四千貫目より五千九百九拾貫目迄は、御運上銀千枚、寄銀六千貫目より上は、千貫目に付、貳千枚宛差上申候事、

年寄　末吉孫九郎
　　　鳥屋清三郎
行事　狩野七郎右衛門
　　　玉村市郎右衛門

一大黒作右衛門義は極印并包役勤候、御銀吹賃被下候、但銀座之由也、

〔貨幣秘錄〕按に慶長以來銀は常是包の儘通用す、露體にて通用に施す事、是を始とす、○明和五匁銀銀を楮封の儘用る事は、神祖深き徵旨おはしましての事なり、其事常是が譜牒に載たり、

○按ズルニ、獻酬ニ用ルモノハ、明治以前マデハ、猶ホ包銀ニ限レリ、是ヲ座包ト云フ、通貨ニ換ヘントスルトキハ、乃チ銀座ヘ遣ハスナリ、他ノ兩替店ニテモ交換スレド、切賃ヲ要スルナリ、

一包銀壹枚ニテ、價ハ時ノ相場ニ依テ、少ノ高低アリキ、

〔金銀圖錄二正用品〕往古銀ハ、共ニ慶長六年五月ニ定メラルヽ所ナリ、蓋是ヨリ先キ泉州堺ニ南鐐座アリテ、各自ラ極印ヲ打タリシニ、靜庵隨筆ニ、太閤ノ時マデハ、堺ニ宗啣座ト云テ有ト云、慶長三年十二月、大黑遣ヒ打印ニ一定セラレ、同六年初テ銀座ヲ設ラル、一說ニ、此時紫一文字、爽一文字、大黑極印等ヲ打テ、進呈セシニ、大黑極印ニ定ラルト云、

〔東照宮御實紀附錄二十一〕銀も往古は、諸國の銀礦よりほり出せしを、灰吹にせしまゝにて通行せしかど、定價もなければ、世人なべて交易に艱困す、慶長六年六月、大津の代官末吉勘兵衛利方、建言せしは、銀價定らざるよりして、諸物の價もまたひとしからず、今よりは官府にて、其制を定

め給へと申により、新に銀座を設られ、利方もてその頭役となし、後藤庄三郎光次とおなじく、これを管轄せしめ、新に銀の品位を定め、丁銀小粒銀を鑄出して通行せしめ、これまで世上にある所の灰吹銀、潰銀、及礦穴よりほり出せしものみな座に持來り、新銀と兌換して、いよ〳〵さかむに鑄鎔ありしかば、これよりして天下の物價もおのづから一定し、金銀の通行いさゝか障礙なく、萬民みな御仁政の貨幣の上までに及ぼし、至らぬ隈なき膏澤の程をかしこみ奉りけるとなん、

〔貨幣秘錄〕金銀座起立之事

そのかみ諸國銀山より掘し銀は、灰吹の儘、切遣にて通用せしかば、品位違あり、互市ひとしからず、さるに依て天下一統、銀位一定あるべきとの御旨によりて、慶長六年辛丑五月、伏見において地所四町を賜ひ、始て銀座を設けらる、此所を兩替町といふ、座人を定め、後藤庄右衞門、末吉勘兵衞、差配たるべき由を命せらる、同十三年戊申、伏見の銀座を京都に移され、地所四町を賜ひ、銀座を建られ、伏見と兩所にて鑄造す、爰をも兩替町といふ、同十七年壬子、駿府の銀座を江戶へ移され、京橋より南に地所四町を賜ふ、今の銀座是なり、享和元年辛酉七月、今の蠣売町へ移され、文政十二年己丑六月、濱町にて七百四十坪餘の添地を賜ふ、蠣売町三千五百六十坪餘に併せて四千三百坪餘となれり、天保十三年壬寅九月十二日、銀座圍込地千貳百八拾壹坪餘、夫而已ならず文政二年己卯六月、淺草橋場町に而、千貳百八十七坪之地を下吹所に賜ふ、銀座は代々座人の中ゟ年寄役を建られ、萬の事を取計ひ來りしを、寬政十二年庚申六月、座人共、不正の品これあるによりて、悉く座職を召放され、三都銀座、一時に廢絕に及べり、其月改て座人の中、十五人を召返され、舊弊を除き、改革を遂られて今に至れり、當時辻傳右衞門、秋田內記の兩人、年寄役たり、

慶長十三年戊申、大坂兩替町に銀座を立られ、御改正後も其儘に而、今に存在せり、

同十九年甲寅、長崎芋原といふ地に銀座を設けらる、寛政十二年庚申十二月に至て廢せらる、
常是の事は、慶長三年戊戌十二月、泉州堺の町人湯淺作兵衞常是を伏見に召て、御銀吹極、并御銀改役を命せられ、大黒と苗字を賜り、大黒銀打印の事、末々迄違犯無之樣改むべきの由、御朱印をなし下さる、其比迄は銀位不同に而、堺の町人申合せ、諸國より出る灰吹銀を買集め、銅を加へ、各々極印を打、賣買なしたりしを、此時より常是一人の極印に定められ、伏見兩替町に而、宅地を賜り、其子作右衞門常好の時、同十三年戊申伏見より京都兩替町に移る、十代目作右衞門常明の代に至りて、寛政十二年庚申五月、同家長左衞門、御咎の事によりて江戸に召下され、同年七月、江戸の御用をも一手に勤むべき由命せらる、同十二月蠣売町にて、酒井雅樂頭上地千八百七十一坪餘の宅地を賜ふ、享和元年辛酉十二月、御手當として毎年金貳百兩を賜ふ、天保二年辛卯十一月、大坂鈴木町にて役所地を下し賜ふ、慶長十一年丙午、作右衞門が弟長左衞門、駿府へ移り御用の事を奉る、同十七壬子、江戸兩替町に而、宅地を賜ひ引移る、是より世々事を奉じて怠らざりしに、寛政十二年庚申五月、八代目長左衞門、不正の事有に因て御咎を蒙り、其家終に斷絶す、此迄は京都に大黒作右衞門、江戸に大黒長左衞門あり、兩人にて御用の事を奉りしなり、

〔教令類纂初集 六十五 金銀〕寛文乙巳年四月廿八日

一銀座運上之員數、壹ケ年付而、可爲白銀壹萬枚、
一每年其年之運上銀、翌年七月をかぎり可令奉納事、
一灰吹銀百文目付而、銅貳拾目加來上ハ、彌可爲其通、但馬石見佐渡灰吹位能候間、但馬灰吹ハ貳拾貳匁五分、石見佐渡灰吹ハ貳拾貳匁宛加之、總樣丁銀同位にいたし、大黒極印可打之事、
一江戸京都銀座之頭共、諸事遂相談、御用可勤之、一人として不可勤仕事、
一新規銀座可入者有之か、又ハ不作法無精之輩有之バ、猶可相除ハ、頭共以連判、御留守居衆迄申

伺之可受差圖事、

右條々可相守此旨若違背之輩於有之ハ、糺咎之輕重可被處曲事者也、

寛文五年四月廿八日

大和 大○久世和守
美濃 美○稲葉濃守
豐後 豐○阿部後守

銀座

〔享保集成絲綸錄 三十二〕正德四午年五月

申渡之覺

銀の事ハ、世の重寶たるに依て、公儀より被仰付候事有之時分、古來ハ老中、又ハ御留守居、近來ニおいてハ、御勘定奉行連判之證文を以申付候御例ニ候、然處ニ寶永七年以來、荻原近江守、幷銀座御用掛の御勘定組頭等、內々の證文ニ任せ、度々に銀の位を改め候事、不法の至ニ候を以、銀座之輩、悉く其罪科を糺さるべき事に候といへども、今においてハ、近江守死後ニ至て、其旨を請候輩之事、御糺明を遂られがたきに就て、位下り候銀吹出の事、近江守江申すゝめ候輩、罪科ニ行はれ、其餘ハ御沙汰ニ及ばれず候、自今以後、如此の事等有之ニおいてハ、急度嚴科ニ行はるべく候、且又近江守證文三通之事ハ、公儀より被仰出候旨に無之候上ハ、破り捨らるべき事ニ候へ共、銀座ニおいて、近江守一人の取はからひニまかせ、銀吹出候事の、永々迄之證狀ニ罷成べき物ニ候を以て、三通共、銀座之輩に預置候者也、

五月

〔金銀御吹替次第 三編 五〕一閏八月二〇文久二年廿三日

此度舍弟錦三郎儀、古筆家江養子ニ差遣候ニ付、同家より願書差出候處、實家由緒書も可差出旨

之趣、依之左之通リ認遣之候、

由緒書

本姓湯淺
大黒作兵衛

一先祖

湯淺作兵衛常是儀、泉州堺ニ罷在、天正十年年權現樣伊賀越被爲遊候節、御供仕候ニ付、慶長三戊年十一月、於伏見被召出、先年御奉公之爲御褒美、御目見之上、御拵付宗近之御刀一腰拜領仕、且御銀吹極幷御銀改役被仰付、大黒ト苗字被下置、銀位相定、天下一統大黒遣ト被仰出、同年十二月廿八日、大黒銀打印、末々迄違犯無之樣可相改ト之御黒印拜領仕、右御黒印幷御刀、唯今以所持仕候、且伏見於兩替町屋敷拜領仕、御用相勤、同十一午年、伏見從御城駿府御城江御引移被遊候節、常是悴共之内、兄作右衞門儀者、伏見ニ而御用相勤、弟長左衞門儀者、駿府江罷下リ御用相勤、同十七子年、江戸新兩替町ニ而屋敷拜領仕、御用相勤、此家筋當時御勘定奉行支配無役大黒喜左衞門相續罷在候、其後奉願隱居仕、寬永十酉年三月五日、病死仕候、

〔金銀御吹替次第一吹方〕享保銀〇中略

一同年〇享保元年八月三日、今日御銀吹始、御用掛リ御奉行樣方、不殘御立會有之候、吹方人數御尋ニ付、左之通認差上候、

湯入役　木村喜左衞門
　　　　中村小右衞門
　　　　安村平入
手傳役　川合次右衞門
　　　　山本三郎兵衞
湯揚役　三木甚六

磯貝新七
鐙田藤吉
大よみ役　岡村善八
極印役　平田與兵衛
久住伊助
飯田忠七
伊東清兵衛
砂田利助
なまし役　山川彌右衛門
林次助
同吹子指　壹人
小遣　壹人
大吹子指　三人

右之人數御吹所相勤申候

伊藤利兵衛
吉川平三郎
二羽忠藏
遠藤小平
小野茂八
角倉吉兵衛

右之分御包所へ相殘申候　大黑長左衛門
宮崎萬右衛門

八月三日

〔金銀御吹替次第一吹方〕通用銀御吹替之次第

元祿銀、一名元字銀、紀六四銀歩一四歩紀御用捨、內外八分、元祿八乙亥年八月被仰付、於本鄉金助町吹替、御普請は公儀御入用を以御建被遊、總圍之御門番遠山七之丞殿、金銀座一圍ニ而、門札ニ而出入仕候、元祿十一寅年、本鄉を引キ、手前吹ニ相成候、

〔御定書百箇條〕似セ金銀拵候もの御仕置之事

從前々之例

一似金銀拵候もの　引廻之上磔

〔享保集成絲綸錄三十二〕寬文五年巳三月

一町中兩替尾共、武士方幷町方より、銀子兩替ニ參候節、にせ銀有之候ハヾ、御公儀ゟ被仰付ニて、にせ銀者はさみ切候へと被仰付候間、如此仕候と斷を申候而、赤がね見え候所迄、はさみ切返し可申事、

右貳ヶ條之趣、御評定所ニ而、總御寄合ニ被仰出候間、此旨相守可申者也、

三月

元祿九子年七月

覺

一今度本鄉ニ而、金銀吹直シ候場所之外、一切金銀吹直シ申間敷候、自然脇々ニ而吹直シ候者在之歟、又は似セ金銀拵候者有之ば、早速可出訴、たとへ同類たりといふとも、其咎をゆるし、急度御褒美被下、其上あたをなさゞるやうに可申付之、若隱置、後日に外よりあらはる、において

は諸親類幷所之者迄、可ㇾ爲ㇾ曲事ㇾ者也、

七月

○按ズルニ、贋金銀ノ事ハ、詳ニ法律部詐僞篇ニ在リ、

〔甲子夜話 二〕昔ノコトニテヤ有ケン、或曰文政四年重職ノ建言シテ、通貨ヲ改鑄アリシトキ、金銀ノ位、元貨ヨリ劣リタルナド、サマ〲世ニ浮言アリシガ、ツヒニ贋貨ヲ造リシモノ出來テ追捕セラレキ、鞠問ノ後罪極リ、ソノ者ヲ馬ニノセ、法場ニ赴キ、刑行ハルベキ路次ニテ高聲ニ、似セ金ヲ作リ出セシ御仕置アラバ、我々ヨリモ蛇トシタル、二本道具ノ御役人コソ罪ハ重カルベシト罵リシニ、滿路ノ行人、一哄ニ笑ヒケリ、付從ヘル町與力同心共、忌諱ニ觸ルヲ恐レテ、叱レドモ更ニ用キズシテ、我等ハモハヤ死スルナレバ、何デフ世ニ憚ルコトアルベキヤトテ、幾度トモナク罵リシニ、與力等モ、セン方ナク默セリトゾ、

〔駿府政事錄 六〕慶長十九年十二月三日、後藤少三郎申云、今度平野御殿阿部備中守正次、致ㇾ普請ㇾ處、小壺一箱堀ㇾ出之、壺中黄金卅兩、金具九塊、南鐐百兩有ㇾ之、伊丹喜之助康勝持來云々、件金五六十年以前埋ㇾ之歟之由云々、則賜ㇾ備中守ㇾ云々、

〔台德院殿御實紀 三十九〕元和元年七月六日、松平下總守忠明、大坂東北櫓燒跡より、黄金三拾枚、竹流金數十枚、幷金の盆香爐簪壺等の諸器を堀出せしとて、松平右衞門大夫正綱、後藤庄三郎光次もて、二條へ進呈す、伏見へ進獻して後悉く忠明に賜はる、

〔玉露叢 十八〕同○寬文七年三月上旬ニ、大坂ノ川筋ノゴミヲサラヘケル處ニ、天神橋ノ中ホドヨリ少シ下ニシテ、黄金十七枚ト、金ノナガシ拾ト、金ノ薄板二枚堀出ス、薄板二枚ノ内、一枚ハ長サ二尺五寸、幅三寸、又一枚ハ長サ七寸、幅四寸ナリ、此通リ日用ノ人足掘出シ指上ル由、同年五月七日ニ、江戸ヘ注進ナリ、其後ノ沙汰何トモ聞エズ、

〔三貨圖彙金七〕寛文十一亥年、大坂天神橋下川中ニテ、
大佛判十六枚目方一枚ニ付四十四匁二分ツヽ
ながし金十枚目方四百四十目
延シ金二枚目方大小ニテ都六匁七
右四月廿一日ト廿二日兩度ニ、土砂中ヨリ堀出ス、則奉行所江納ム、東奉行石丸石見守殿ヨリ、兩替天王寺屋五兵衞、小橋屋淨德、鍵屋六兵衞、三人被召、右改被仰付、其趣關東江御達被成、則三人ノ者立會、判金一枚ツヽ、流シ金延シ金トモ夫々包立、金目幷年號月日三人名前等相記シ、五月十六日、御城内關所藏江相納、

〔壺簪錄四雑載〕筑前博多鎮管下市小路町商人有呉竹善三郎者、元祿戊寅歲、妻死葬本州聖德寺内瑞應庵、穿壙之次得金銀器什法馬等一罌、悉進之寺、以爲修葺之資、置石佛一軀、以誌其處、後十九年、享保丙申之歲、以側傍竹茂、主僧命俾改厝、六月十九日、移石佛、穿土三尺所、又得一罌、比前稍大、内藏金銀器物如前、得法馬八錠、合重貳貫百七拾四錢餘、其餘金鈴金虎銀刀鞘金銀鑄造物象諸具甚夥、凡得金八百八拾八錢餘、銀五貫二百九拾錢餘、以今時金銀分兩準之、可得百貫目價云、法馬上各鑿記字號、面三行、經歷郭德潤、行宣政院、福建分院、提調官副使側失監、背亦三行、客商謝福、花銀肆拾捌兩重、辨驗銀匠彭禎、按元時、諸路置行宣政院經歷官、元明俱有側失監、似是人名、元有丞相撒思監、想側失監、是胡人之名、然則所謂銀錠等物、皆元時物、前世外國船舶、皆湊于筑州、故元時器物亦埋土中、距今殆五百年餘、中國前代之制、儼然可見也、丙申九月廿三日記

〔金銀錢譜續集〕延享元年子二月十四日、信州飯山領、戸隱山支配三千寺、戸隱山ヨリ五里雨落ノ大石ノ下ヨリ土中ヘ二尺入金小判八枚堀出ス、内二枚ニ辨定判トアリ、二枚ハ辨定トアリ、八枚ニテ金重サ二百四十五匁八分、三千寺、此金ヲ官ヘ上テ、官ヨリ文字金下ル、

〔公用雜纂〕知行所にて金子堀出候伺

文政七申年七月廿二日、增山河內守殿へ上る、

私知行所
常州信太郡阿見村
組頭　瀨兵衞

當月六日大雨之節、居宅裏土手際に而、元字金壹分見付候間、近邊得と相尋候處、土手中程ゟ追々金子見當り、都合元字金壹分判にて、百兩貳分堀出シ候、右瀨兵衞ゟ六代以前瀨兵衞、隣家分地百姓與兵衞火元に而、引續兩度類燒仕候節、有合之金子、不取敢屋敷內へ埋置立退候由、然る處同人右之類燒にて、家財過半燒失仕、心配之餘り放心仕、金子員數埋候處、場所共忘却仕、其節色々相尋候得共、相知不申罷在候、乍去代々申傳候間、心懸穿鑿仕候得共、相知不申候處、今前書埋金此度見當り候儀に有之、尤右埋候節は、革財布之儘埋置候由に候得共、年來之儀に而腐り、形も無之、土手中程へ埋候哉、土共に押流候樣子にて、金子散亂仕候儀と相見候旨、村役人一同訴出候に付、相糺候處相違も無御座候、此上如何可申渡哉、奉伺候、以上、

七月廿二日　　丹羽五左衞門

付札　書面堀出候金子、不殘瀨兵衞江相渡候樣可被致候、

〔弘化年錄〔一〕〕江戶箱崎一町目に於て金子堀出候事

昨八日九ッ時過、北新堀町德兵衞倅吉太郎義、箱崎一町目裏河岸、御高札場駒寄之內に、桃苗生有之候に付、取可申と棒に而突候處、土一寸程かむり候下ゟ、木蓋樣之もの相見え候處、側に同所家主喜平次召使佐吉と申もの居合見受候處、右下に何歟可有之旨申候に付、右吉太郎駒寄內へ這入り、右蓋を取見候得ば小瓶有之、右內へ手を入候所、金子晒切に包、一ッ取出候に付、同處へ爲差置、佐吉儀主人喜平次江申聞、同道罷越、瓶之中見候得ば、左之金子何れも包紙腐居、右切へくるみ

有之候に付、金子幷瓶蓋共持參、此段御訴申上候、以上、

未三月〇弘化四年九日　　　　右町名主　卯太郎

保字小判貳百兩　但百兩包二ツ

壹包　　　座包

壹包　　　播磨屋新右衞門包

貳朱金貳百兩　但五十兩包四ツ

貳包　　　米屋文介包

壹包　　　竹川彥太郎包

壹包　　　名前不知

〔日本靈異記　上〕人畜所履髑髏救收示靈表而現報緣第十二

高麗學生道登者、元興寺沙門也、出自山背惠滿之家、而往大化二年丙午、營宇治椅往來之時、髑髏在于奈良山溪、爲人畜所履、法師悲之、令從者萬侶置之於木上、迄于同年十二月晦夕、人來寺門白、欲謁道登大德之從者萬侶者、萬侶出而遇之、其人語之曰、蒙大德之慈顧、得平安之慶、然非今夜无由報恩、輙將萬侶至于其家、從閉屋而入、於屋裏多設飮食、其中以己分之饌與萬侶共食、其於後夜有男聲、告萬侶曰、殺吾之兄欲來、故早去、萬侶恠而問之、答昔吾與兄共行交易、吾得銀卌斤許、時兄妬忌殺吾取銀、自爾以來多經年來、人畜所蹈我頭、大德垂慈、今見離苦、故不忘汝恩、今宵報耳、〇下略

〇按ズルニ、大化以前銀ナキニアラザレドモ、未ダ裕ナラズ、交易シテ銀四十斤ヲ得ト云フコト、頗ル信ジガタキニ似タリ、然レドモ當昔銀ヲ以テ物價ト爲シヽコトハ、蓋シ分明ノ事實ナラン、

〔宇治拾遺物語　一〕旅人のやどもとめけるに、大きやかなる家のあばれたるがありけるによりて、

こゝにやどし給てんやといへば、女こゝろにて、よきことやどり給へといへば、みなおりゐにけり、○略中かくて夜あけにければ、物くひしたゝめていでゝゆくを、此家にある女いできて、得いでおはせじ、とゞまり給へといふ、こはいかにとゝへば、おのれが金千兩おひ給へり、そのわきまへしてこそ出給はめといへば、○略中旅人とふやうは、この親は、もし易の占ひといふことやせられしとゝへば、いざゝや侍けん、そのし給ふやうなる事はし給ひきといへば、さるなるといひて、さてもなに事にて千兩金おひたる、そのわきまへせよとはいふぞとゝへば、おのれがおやのうせ侍しをりに、世中にあるべきほどの物など得させおきて申しやう、いまなん十年ありて、その月に、こゝに旅人來てやどらんとす、その人は我金を千兩おひたる人なり、それにその金をこひて、たへがたからんをりはうりてすぎよと申しかば、○略中けふにあたりておはしてやどり給へれば、金おひ給へる人なりと思て申なりといへば、金の事はまことなり、さることあるらんとて、女をかたすみに引てゆきて、人にもしらせではしらをたゝかすれば、うつぼなるこゑのする所を、くはこれが中にのたまふ金はあるぞ、あけてすこしづゝとりいでゝつかひ給へとをしへて出でいにけり、○下略

〔太閤記七〕金賦之事

秀吉公御藏入領、貳百萬石餘有しかば、金銀米錢あつまりぬる事夥しき事なり、かやうに年を逐て財寶あつまり來たるを、施さゞれば慳貪くづれとやらんにあふよしなり、左もある事もやと由己法眼に問給ふに、仰いと宜しく侍る旨申上しかば、さらば施してんよとて、天正十三年初秋の比、金子五千枚、銀子三萬枚、諸侯大夫等に施し給へり、聚樂總門南のかたにして、臺にすゑならべ御賦有しが、朝より晩に至て事盡にけり、此後又其沙汰に及び給へり、京童見物して與さめつつ云やうは、活潑々地なる事かな、古今に傑出し給へる君なりとて、感じあへりき、

〔豐臣秀吉譜　中〕天正十七年五月、秀吉謂、我既握扶桑六十餘州于掌內、金玉滿堂、復何求哉、不用則金玉與瓦石、何異之有、不如分授之而富贍其人、乃於聚樂門內二町之間、積金銀於臺而倚疊之、見者眩目、聞者驚魄、秀吉御座在門戶邊、秀長座在其東、六宮古佐丸與秀吉同座、菊亭右大臣晴季、勸修寺大納言晴豐、中山大納言親綱、烏丸大納言光宣、日野大納言輝資、廣橋中納言兼勝等來會、其餘雲客猶多、民部卿法印玄以、帥法印、淺野彈正少弼長政、前野但馬守長康、增田右衞門尉長盛、石田治部少輔三成、監金銀之事、而出金臺若干于庭上、每臺各載百枚、四人持舁之、玄以長政等讀金銀若干賜于誰人、則其人出而拜禮之、其品數者、賜黃金二千兩銀一萬兩于六宮古佐丸、內大臣信雄、大權現、黃金三千兩銀二萬兩于秀長、黃金三千兩銀一萬兩于秀次、秀家、黃金千兩銀一萬兩于毛利輝元、上杉景勝、銀一萬兩于前田利家、又賜金銀二十萬七千兩于中將二人、少將五人、侍從十三人、其餘贈金三千兩銀一萬兩于大廳、金一萬兩于北廳、金五千兩于駿河御前、備前姬君、金千兩于丹波少將秀勝之母、凡是度所恩賜之、總計金銀三十六萬五千兩也、

〔川角太閤記　四〕一天正十八年に北條御追討の爲に御馬を被向候〈○中略〉

一上樣〈○豐臣秀吉〉天下へ御歸陣被成、御祝こ御意候て、日本の諸大名衆へ御金被下候、聚樂三の丸の大庭にて被遣候、民部法印卷物大目錄を讀上げ、一番に江戶內府、二番に加賀大納言、三番に備前中納言、四番に廣島の中納言、五番に越後の中納言、如斯次第々々に大名小名被召、御金銀拜領之事、

〔老人雜話　坤〕世上に金銀澤山に成事、五六十年已來の事なり、〈○慶長元和間〉台德院殿の時、佐久間不閑所持の雲山といふ茶入を、金森法印、黃金百錠に求む、台德院殿御聞あつて、其價を與ふべしと宣ふ、折ふし金三拾錠は有て、七拾錠不足也といふ、今の世と相違す、南都東大寺の奉加に、賴朝公金五十兩を寄進せんといはれけれども、其年旱にて調はざりしと云事、東鑑に見えたり、

〔武德編年集成五十八〕慶長十五年八月八日、島津陸奧守家久、琉球ノ中山王ヲ携ヘ、一昨日駿府ニ著、今日登營ス、神君烏帽子直衣ヲ著シ、大廣間上壇ニ御著座、中山王、白銀一萬兩、段子百卷、羅紗二十尋、芭蕉布百匹、太平布二百匹、大刀一腰ヲ獻ジ、拜禮終リ、家久ヨリ長光ノ大刀一腰、白銀千枚ヲ獻ジ、琉球ヲ賜ル謝詞ヲ述ル、廿八日、家久中山王ヲ携ヘ江城ニ登リ、中山王ヨリ純子百卷、虎皮千枚、白銀一萬兩、芭蕉布百匹、太平布二百匹、大刀一腰ヲ獻ジ、且大猷公ヘ段子五十卷、太平布百匹、芭蕉布五十匹、紅絲百斤、大刀一腰ヲ捧グ、家久ヨリ長光ノ大刀、白銀千枚ヲ台德公ヘ獻ジ、大猷公ヘモ御大刀馬代ヲ獻ト云、

〔憲法部類金銀八〕寶曆十一巳年七月廿九日
江戶京大坂其外諸國共、當時通用之文字金銀、幷古金銀を其向々江質物に入候もの有之由相聞候、右體之儀ハ、金銀通用之差障に相成候に付、自今堅停止之事候、向後若金銀を質物に取引致候もの有之ば、吟味之上、急度可申付候、

〔享保集成絲綸錄三十二〕延寶二寅年四月

覺

一當春ゟ町中小判之吟味つよく、諸人令難儀之條相聞候、舊冬迄用來候小判、無相違如前々可用遣之、於金座直ニ小判ニ今度改、新極印打之由ニ候得共、向後可相止旨申渡候間、新極印無構、常常之通取遣可仕候、若違背之族在之者、可爲曲事者也、

〔教令類纂初集金銀六十五〕寬文十一年十二月

一西國中國其外上方筋ハ、商賣物銀遣にて、金を遣候儀不自由之旨相聞候、向後諸國一統に、金銀無滯通用可仕候、當分遣ひなれ不申內、商賣等不差支樣に、御料ハ御代官、私領ハ地頭より、入念可被申付候、

十二月

〔塵のすさみ 三〕元祿の頃、富永伴意とて、外科ありし、老醫にて、世にもてはやしぬ、その人壯勇にして質直なりしが、予が十二三ばかりの時にや、金銀の吹替始りしころ、ある所にて皆人打かたりしに、伴意予に向て、御身幼少なれば、末久しく打かたり、世のさまを見給はん、今より後は世の中次第に手うすく、眞寶悉く少くなりぬべし、御身の五六十ばかりのころは、世上困窮におよびぬべし、いかにとなれば金銀は萬寶の本なり、その元體を失ぬれば、人心も次第に本を捨て利をもとめ、夫に習ひて成長じぬるゆゑ、今まで殘りたる質實、おのづから少く、僞のみにて通行樣になりぬべしといひしが、まことによくあたりぬると思はる、

〔近世畸人傳 三〕伊藤東涯先生、二條街にて、藥の袋のおちたるを、つれし書生に拾はしむ、内を見れば、方金數枚あり、先生眉をしはめて、よしなきものを拾ひしことよ、しるせる名もなければ、かへすべきよしなしとわびながら、取てかへられしが、そのまゝ神だなに置て、其年の暮に、伊勢の御師の來れるに附せられしと、其拾ひし書生の話せし、

〔先哲叢談 七〕藤煥圖

東野家屢空、嘗寄書徂徠借財、徂徠誤解違其數、今撮錄各書于左、東野書曰、向書舗齎天中記至曰、九日在邇、主人渴黃白之切、交金在節前、二圖三方而得易、若不能請三圖二方而獲者先在焉、不佞渴此物久矣、唯圓而方焉者、猶之其渴也、先生其或能爲僕損一朝之供、令免其渴否、九月吾不能矣、其至十月、必能了算帳、伏冀方便、千祈萬祝、徂徠答書曰、承求金其言、若周蝌斗時券契者狀、子幸不生天王家、天王則必書于春秋矣、子之所爲求貨盖呂而不足、器而有餘、品乎品乎、是亦易々耳、書訖、覺東方朔郭舍人所爲隱者、聊供病牀之一玩耳、東野又書曰、所謂二天三地者、向既以蒙先生之諾、唯先生品其方者、乃僕又欲隨而圓之、未知能易々乎否、九十月之間、廩米在目、伏冀使握中玉無他人是歸哉、則令人

或稱僕智饕者、實在此物也、卽雖毳毛哉、然亦倘先生六關間之物也、力新市養、有餘乎信、若蒙見附、亦等僕親受也、徂徠又答書曰、鄉所謂蝌斗時劵帖者矣、予嘗誤謂方者三、足下則篆之矣、是予所併月俸之餘以優游卒歲者、何以能應足下之需哉、雖然足下則曰、九十月之交云爾、猶之外府哉、且也篆距蝌斗時、爲未遠也、吾過矣、吾過矣、謹以區々者三、致諸左右、

〔一話一言十五〕米金の事

或曰、今ノ世〇元祿年間ホド、スリ切ノハヤル事ナシ、金銀ノ不足ハイカ樣ノ事ゾト云ケレバ、友人云、今ノ世ホド、金銀ノ澤山下ニアル事前代未聞ナリ、衣類居宅食物祝言ノ美々、昔ニ百倍セリ、諸事ニ心ヲ付テ見玉ヘ、サテ元和比、越前福井ノ城下、松本ト云所ニテ、町人ドモ名主所ヘ寄合、元服名ヲ改トテ、其中ニ金子所持ノ者有トテ、何モ所望シテ拜見セントテ云ケレバ、金主巾著ヨリ八重ニ包オキタルヲホゴシ、金。一步。ヲ取出見セケレバ、上下イタヾキ手渡ニスルトテ、トリ落ケルニヤ、何方ニテ失ヒタルトモ知ラズ失タルト也、其比不慮ニ物ノ見エザルヲバ、戴失タルカト章句ニ云ケリ、サホドニ金子ト云物ヲ凡下ノ見ルコトヲダモナカリシニ、今ノ世ハ乞食非人モ、金銀澤山ニ所持セリ、引或人隨筆

〔政談二〕昔ハ在々ニ、殊ノ外錢拂底ニテ、一切ノ物ヲ錢ニテハ不買、皆米麥ニテ買タルコト、某田舍ニテ覺タルコト也、近來ノ樣子ヲ聞合スルニ、元祿ノ比ヨリ、田舍ヘモ錢行渡テ、錢ニテ物ヲ買フ事ニナリタリ、

〔鳩巢手翰四〕一金銀吹替之事、何共申兼候、難成事候付、只今迄銀拾貫ニ七貫目程赤銅まじりて、是を吹拔申候、鉛おびたゞ敷入申儀ニ候、其上其雜用是又夥敷儀ニ御座候、第一銀天下に夫程無之候、其內不過ニ鉛かな山より出申歟、又は銀出申候はゞ、何とも近年之內に直り申儀は可有之候、左なく候ては、勘定衆などよりの積、五六百年も掛り候て、其後は元之銀ニ可相成由ニ候、去共頃

日色々料簡いたし、二十年程之内にて、先元銀ニ可能成様に積り申候、此事唯今之又難事候、是ニ付候ても、荻原事、天下に害を残し候事、古今ニ無之程之大賊にくきやつニ候由被申候、私申候は、左様に候はゞ、銀の相場を御上ゲ被成、可然存候様ニ、百年二百年立候ても、捨置れまじき儀は御尤と奉存候、然共左様計にては、金銀之直り申時迄、天下之難儀、兎角可申様は無之事奉存候間、其内銀の相場を先あげ候て、天下一統、金壹兩六拾目ニ相定度ものに奉存候、是は上之御下知次第之儀と奉存候、此相談を被成御口候様ニ被申候へば、新井氏只今相場を改申義も被成申候へ共、夫にては人を損じ不申候而者成不申候、三十人程も損じ申候はゞ成可申候、其様は銀の相場を下げ申儀、是皆兩替屋共之仕義にて候、銀相場を下ゲ、金と兩替之間之利を取申儀にて、にくき奴原にても何も申合可仕候故、僉議仕掛り候ては、大勢人を損じ申儀ニ候、皆深見新右へも申候へ共、新右合點不被致候、米穀と申物は、よき米は味よく、惡敷米はたべにくきに付、美惡かへられぬ事候も、其外布帛之類は、よき布帛は、こまやかにて著あたりよく、惡敷布帛は、著用惡敷候故、是又美惡にて價を高下仕事尤也、金銀と申ものの美惡は、色の僉議までにて候、唯今用申候惡銀を用申候ても、替申儀は無之候、何によつて銀を唯今拔擧下ゲ申候哉、たとへば玉杯の様に、飾物に致申儀ニ候へば尤に候、金壹兩六拾目と申御定之所、惡銀迚、八拾目にも致候事難心得儀にて、夫を申候へ共、新右様合點不被致候由被申候故、私申候は遠くは不致申儀にて、しれ申儀にて、只今錢永樂通寶抔之古錢と比候て、至極色惡敷品下候得共、昔永樂錢にて金壹分を一貫にいたし候へ共、唯今貳貫文ニ仕と申儀は無之候、惡錢に候へ共、通用之上は古錢と替申儀無之候、都て金銀貨幣は、時王の制令次第御座候、米穀とは替申候由申候へば、新井氏錢の事は扨々氣付不申、近き事に候故埒明申とて感被申候、扨私申候は、三十人か五十人も候へ、此者共故に天下之難儀ニ罷成候へ共、一々磔ニ被成候ても不苦候、夫を御用捨にて、天下之難義其儘御覽候事、天地之心にも叶間

敷候、天地は令德仁主と申儀候へば、少を害して多を養申儀は、天地の心にて、况や罪科難遁者どもにて御座候、是は合點難仕由申候へば、成ほど其通之由被申候、何卒難成儀外にも有之哉と奉存候、來年頃は少々銀能なり可申と被申候、いかゞ之儀に候哉、子細は不承候、先日被申候、唯金銀吹替申候事、大分之鉛入申儀に候、此鉛天下に無之ば、其上御入用至極大分之事にて候、唯今上にも金銀無之候故、何共不能成候、夫ニ付色々工夫いたし候處、兎角上之御格不被成候ては不被成候、天下之惡銀をそろ〱錢にて御買上被成候て、其御買上被成候を段々に吹替被仰付候樣子に候はゞ、當分世上之錢も澤山に能成候て能可有之候、金銀は只今すぐに山より出不申候、錢は何ほども出來申物にて候由被申候、此料簡も成ほど面白く御座候、いろ〱に工夫を費被申と見え申候、間部殿にも、先日しみ〱と禮を被申候、片腕之樣に存候間、隨分息才に居被申樣にとの事御座候由承申候、左樣に可有之儀と奉存候、段々少ツヽ銀よく成候へば、此よき銀をおさりにして、世間にかくし置候古銀をすひ出し可申にて候、奉行中吹替候へば、へる〱と御心得候て、世上へかくれに居候、古銀を吹出し候事を不被存候ましく申され候、○中略

閏五月九日〇正德三年

〔草茅危言三〕金銀幣之事

一天下ノ通寶ニハ、必ズ其製造ノ時ノ年號アルベキ者也、後世迄モ傳ル者ナレバ、幾千年ヲ歷ルトモ、是ハイツノ時ニ出來タル寶ト、紛ルヽ所ナク知ヌベキコト也、夫ニテハ萬一散逸シテ外國ニ渡リテモ、日本ノ通寶タルコト明白也、コレラハ微事ト雖、國家ノ大體ニ係ルコト也、然ルニ大小判金方金ニ年號ノナキコソ遺憾ナレ、其上右ノ三金、幷ニ二朱銀ナドニ、金座銀座ノ名判稱號ノ有ハ、イカナル故實カモ知ラネドモ、何トモ心得ガタキコト也、總ジテ刀劒ヲ始トシ、諸道具ニ至マデ、上手名人ノ品アルモノハ、作者ノ名ヲ勒スルコトサモ有ベキコト也、皆是一分ニ作リ出スモノ故、人皆其名ニ因テ高下ノ品ヲモ定メタル也、金銀幣ハ公儀ノ製造ニテ、天下公私トモノ

寳、何モ名ニ因テ甲乙スベキ品ニ非ズ、然ルニ必ズ賤民ノ名ヲ勒シテ通用スルコト、國體ヲ失フニ似タリ、但シ是ハ今日ノ金幣ニ據テ云也、其源ヲ尋レバソケアルコト也、序ニ是レヲ詳ニセン、昔ハ四角ナル延ベ金ニテ切遣ヒニ成シヲ、足利ノ時、沙金ノ三。品。ニ改ル、豐臣氏ニ至リ、始テ大判小判ノ製アリ、我照祖〇徳川家康關東御入國ノ砌リ、夫迄東土梗塞シテ、豐家ノ新製幣、關東マデハ行ハレザル故照祖陳請セサセ玉ヒ、京師ヨリ金工後藤光次ヲ召下シ、別ニ大小判金ヲ鑄造シテ、關東ニ行ハセ玉ヘリ、其時ノ金ハイカナル物トモ知ラネドモ、定テ今ノ如ク、光次ノ名判有タル成ベシ、是天下ノ通用ニ非ザレバ、右ニテ豐家ノ製ニ別タセ給フコトナラン、其時ニ在テハ寔ニ然ルベキ御事ナルベシ、故ニ慶長御治世以來、豐金終ニ廢シ、東金專ラ天下ニ行ハレシモ、最早有リ來リノ勢故、其マヽ用キサセ給ヒシモ、一々理ニ當リタリ、其後金幣屢變ジ、今ノ金ハカッテ光次ノ製ニ非ザルヲ、是許有來リニ成タルハ、其時有司ノ心付無リシナランカト思ハル、別シテ今ヨリ古昔ノ金ヲ稱スルニ、天正慶長ナド唱テ、其金工ノ名ハ問所ニ非ズ、主トスル所ハ時代ニ在テ、金工ニ非ザルコトヲ見ルベシ、故ニ追々新吹ノ金ヲ仰セ付ラルヽ時、何卒光次ノ名判ヲ削リテモ苦カラズバ削テ、以前初造ノ時ノ年號ヲスヘタキ者也、今ノ金銀トモ文ノ字有ハ、元文ノ文也、是年號ヲ用キサセラルベキ端ハ見エタリ、トテモノコト仝ク具ヘテ、判金方金ノ背、幷ニ錠銀ノ表ニ元文何年ト明ニ有タシ、判金ノ表ニ華押一ツ別ニ見エタリ、今ノ金工ノ判ニヤ、既ニ年號右ノ如ナラバ、コノ華押有テモ苦カラヌ者カ、二朱銀ハ右ニ論ズル如ク、モシ改鑄ニナルトモ、何分安永中ニ始リタル物ユヱ、銀座常是ノ四字ヲ削リ、安永某年ナド有ベキカ、但シ是ハ年々改造ノコトナレバ、直ニ寛政某年ト有テモ可ナランカ、モシ年々追造アラバ、幾年幾年ト年ヲ追テ勒スルモ可ナランカ、

〔貨幣秘錄〕金銀活用之事

金銀は諸物を運輸するの具也、故に諸物に金銀の相對して、其平を得るを至極とす、往古金銀乏しかりし世にて、其貴くして諸物賤しき事を知るべし、當時〇天保末年物價の騰貴を以、獨其罪を金銀の品位輕重に歸して、多少の論に涉らざるは、いまだ其實を盡さゞるの論なり、諸物の貴くなれるは、金銀の多きによれり、抑年々生ずる所の諸物には定數ありて、歲々鑄る所の金銀に定額ある事なし、其數ます／＼多して、其弊ます／＼多し、何を以てか割肉醫飢に異ならん、古の金銀乏しく、諸物の賤價なりしは、其利あるに似て、其便宜しからず、今の金銀多して、諸物の貴價なるは、其便宜しきに似て、其利を失へりと申べし、金銀諸物平準を得て、始て其運輸の具たるを知り、其後に至りて終に品位輕重の論にも涉るべき事なり、

金銀品數之事

金銀品多き時は煩碎にして眞僞錯亂少からず、尤通用に害あり、今より後其品を定められんには、金は大判小判壹步の三品に限るべし、銀は丁銀豆板銀の二品に止るべし、今假に其數を減せられんに、猶通辨のさゝはりあるに於ては、別に貳朱銀を用ゆる事は、暫時其時宜に隨ふべし、金銀の品少きときは、通用不辨抔と申者あり、目前の小利に拘泥して、千載に達せざるの論は、識者のとらざる所なり、

〔撈海一得上〕金錢ヲ多ク儲積タルヲ、うなるほど金を持しト云、古キ諺ナリ、五雜俎ニ、五代ノ衰正辭、積錢盈室、室中常有聲如牛、人以爲妖、勸其散積穰之、正辭曰、吾聞物之有聲、求其同類耳、宜益以錢、聲乃止、是滑稽トイヘドモ、俗諺ヲミルニタレリ、

〔梅園日記五〕錢有聲

夷堅支志乙集云、靖安張保義者、貲產甚富、藏錢不勝多、至築工庫數十所作貯積處、閱三十年、歲暮忽聞庫內錢唧々有聲とあり、

〔金銀圖錄附錄〕俗ニ金玉ト云、飛モノ有リ、異朝ニモ似タルコト有リ、地鏡圖ニ、黃金之氣赤黃、千萬斤以上、光大如鏡盤

〔用捨箱中〕金銀を伽羅といふ隱語

昔の俳諧は、狂言に過、二佛の中間といひかけ、釋迦を鎗持にとりなす類、今のいひざまとは異なり、談林の俳諧調には、なほ此趣ありて、後世には聞え難きあり、

空林風葉自悅撰天和三年刻

笑ひ顏伽羅もらはゞや若衆　季好

年若き遊女を、若島若詰なんどいふにより、若衆を遊女にとりなしたり、これ彼の釋迦を鎗持とするの類ならん、さて句意は、花街の隱語に、金銀の事を伽羅といふ、それをもらはゞやとて、笑顏をつくる歟といひたてたるなり、吉原かゞみに、

伽羅卷　金大夫京町孫兵衛內

ある人のいはく、男に金銀もらひかけ申品是如何、金大輔の云、男に金銀くれよとは、さすがきたなく申がたし、其時伽羅なくて事をかき申間、伽羅少御こしといふ、此男いやとはいはれず、月ふ野暮なり（月さは今いふ）は伽羅かとこゝろえ、まことのきやらをこし申事有、其時たいこ水（スイ）なれば、伽羅の代とて金銀つかはす也、又男すいなれば、きやらといふよりはやく、金銀の事とさとる也、金銀を伽羅といひし語釋こゝに見えたり、此さうし萬治三年の印本なれば、此隱語いとふるし、

〔談海一〕大坂豪富の者通用金の事

大坂豪富の町人、奢侈年々甚敷に付て、寶曆十二年の秋、分限に應じ用金を命せられ、其外嚴敷穿鑿ありて、種々の禁を立られ、是より大坂衰微の初と成たりといへり、夫までは大坂豪富の者、仲間通用の金と云ものをこしらへ融通せしが、是も同時に制止ありけり、此仲間金止たるは、殊の

外大坂のさし支に成たることゝぞ、此通用金といふは、大坂にて爲替金の仲間、又大名仕送りを取扱ふ者ども、百兩包を拵へ、上封に銘々名判を連書し、包たる内は銅を小判の形にこしらへ、重さも百兩の斤目にひとしく調置て、急に金子入用の時は、眞の小判に交せ遣ひし故、巨萬の金も卽時に辨ずる事にて、甚融通宜しかりきと、若右百兩他國へ遣す時は、上封の名判ある方へ持行ば、其儘眞金に引換らるゝゆゑ、數萬金の融通差支ふことなし、全體銀札を遣ふ樣なるものにて、夫よりは猶たしかなるもの也、大坂の通用は、過半此封金にて自由したるを制止ありしより、奢侈の徒も一時に困窮に及びしとぞ、

〔川角太閤記 五〕一又左衛門殿（○前田利家）分別には内藏助殿（○佐々成政）とせり合四度なり、其内三度は我手前失二勝利一者なり、此度末森の城乘捕候て無二面目一次第なり、十死一生有無の一合戰に覺悟を被レ極、内藏助陣被レ取處への中間の積を工夫し、明十日（○天正十二年九月）ほのぼの明の合戰と被二相定一、家中へ一言も觸不レ被レ申、日の程をさげすみ、はや時も能とや思はれけん、おすへにて具足を著被レ申處に、不慮成夫婦いさかひ出來す、其子細は肥前守殿御袋、江戸人質に御座候時は芳樹院（○樹ハ春ノ訛）と申つる、又左衛門おすへにて具足著被レ申時、女房達被二召連一、金藏を明け、菖。蒲。革。の。袋。には金子、な。め。し。袋。には（○此間恐クハ脱字アラン）金銀の皮袋を御内儀も手に持御出候、

〔明良洪範 十二〕浪士某ハ編笠ニテ顏見エザレバ、兼松ハ知ラズ、某ハ笠ノ中ヨリ見テ兼松ト知レド、名乘ラズシテ供ノ士ノソデヲ引留、我等御覽ノ通リ尾羽打枯シタル浪人ニテ、今日ヲモ送リ兼ル者ニ候、御救助願奉ルト云、兼松聞テ宿ニテ有ラバ、救助ノ仕方モ有ベケレド、途中ノ事故心ニ任セズ、去ナガラ我ヲ見カケテ乞ハル事大慶也ト、懷中ヨリ金。入。袋。ヲ取出シ、中ヲモ見ズ、其儘鼻紙ニ包テ、心ニハ任セザレド是ヲト云ツヽ相渡シ行過ギケル、浪士某袋ノ内ヲ改メ見ルニ、金十五六兩、銀十計有リ、

〔金銀圖錄〕

慶長大判金

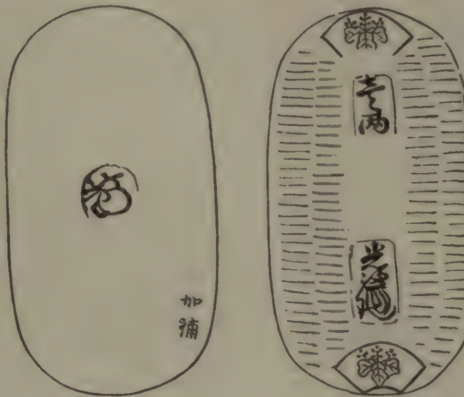


背



〔金銀圖録〕

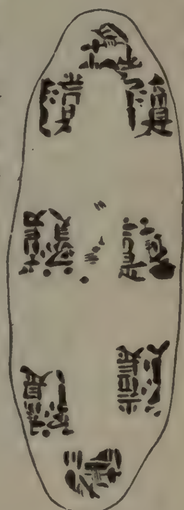
慶長江戸座小判金



慶長壹分判金



慶長丁金



慶長豆板銀　俗ニ子持銀ト云



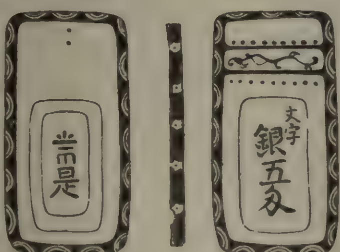
元禄二朱判金



明和南鐐二朱判



明和五匁銀



甲州古金大判



甲州古金壹両判



文政壹朱金

面　背



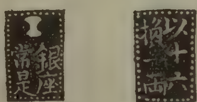
文政二分判金

面　背



文政壹朱銀

面　背



天保壹分銀

面　背



嘉永壹朱銀

面　背



〔題林和歌集雜二十九〕寄金述懷　　雅親卿

おろかにて月と花とをいかゞみん千々のこがねもよしや春の夜

〔顧順集〕青柳

露をおもみたえぬばかりの青柳はいくめかけたるこがねなるらん

〔夫木和歌抄春六〕家集山吹を　　權大納言公實卿

燒金の色ににほへる山吹ははかりもしらぬ花のいろかな

古事類苑

泉貨部七

紙幣

初見

古事類苑

泉貨部七

紙幣

紙幣ハ紙錢ノ類ニシテ札ト稱ス、金銀貨及ビ錢貨ニ交換スルヲ以テ、金札銀札錢札等ノ稱アリ、後醍醐天皇建武元年楮幣ヲ造ル、是ヲ吾邦紙幣ノ權輿トス、德川幕府ニ至リ、寛文以來、諸藩幕府ニ請ヒテ紙幣ヲ製シ、各〻封內ニ施行ス、元祿以降、諸藩用途足ラズト云フヲ以テ、益〻之ヲ造ル者多ク、寶永四年、幕府令シテ紙幣ヲ發行スルコトヲ禁ゼシカドモ、享保十五年、再ビ舊制ニ復セリ、而シテ幕府ニ於テハ、其一代竟ニ紙幣ヲ發行セザリキ、然レドモ其末路ニ至リテ、初テ之ヲ施行セントシテ果サズ、按ズルニ德川氏ノ初メ、元和年間、大坂ノ商人、私ニ銀札ヲ行ヒシコトアリ、是蓋シ金銀貨篇雜載ノ條ニ揭ゲタル、大坂商人仲間通用金ノ類ナラン、羽書アリ、亦紙幣ノ類ナリ、京都及ビ伊勢國ニ於テ行ハレタリ、

〔細細要記〕建武元年二月三日、紙錢通用ノ儀仰出サレ、諸國ノ地頭御家人ノ所領ニ課役ヲカケラル、先例イマダナキ所ナリ、

〔建武年間記〕改錢事　建武元年三月廿八日有御沙汰云云

詔、○中略今以新化、爲除舊弊、始造官錢、須頒天下、濟世便民、孰謂不爾、仍文曰乾坤通寶、銅。楮。並。用。交易莫滯、○下略

〔倭名類聚抄十三祭祀〕紙錢　新樂府云、神之來兮風飄飄、紙錢動兮綿繖搖、俗云加美勢爾、一云、勢邇加太、

〔箋註倭名類聚抄五祭祀〕按、陰陽寮式有錢形、蓋是今伊勢神宮河原祓用錢切幣、佛家祭諸天、亦用紙錢、

〔菅家文草六〕寒食日花亭宴、同賦介山古意各分一字、探得交字、
請看冷酒又寒肴、應是良辰不暗抛、再拜終無他禮奠、落花自與紙錢交、

〔太平記十二〕大内裏造營事附聖廟事
安元二年ニ、日吉山王ノ依御祟、大内ノ諸寮一宇モ不殘燒ニシ後ハ、國ノ力衰テ、代々ノ聖主モ、今ニ至マデ造營ノ御沙汰モ無リツルニ、今〇建武元年兵革ノ後、世未安、國費民苦テ、不歸馬于花山陽、不放牛于桃林野、大内裏可被作トテ、自昔至今、我朝ニハ未用作紙錢、諸國ノ地頭御家人ノ所領ニ被懸課役條、神慮ニモ違ヒ、驕誇ノ端トモ成ヌト、顰眉智臣モ多カリケリ、
〇按ズルニ、是本邦ニ紙幣ヲ用キシ濫觴ナリ、

〔享保集成絲綸錄二十五〕寶永二酉年八月

覺

領内ニ而金銀札遣仕候分は、いつ頃より札遣仕來候哉、且又年數之定在之分も、書付可被差出候、
以上、

〔享保集成絲綸錄三十二〕寶永四亥年十月
一金銀錢札遣之所々も有之候而、札遣無之所、通用のため不宜候條、向後札遣停止之事候間、其所所江申遣し、相達候日より五十日を限、相止可被申候事、

〔貨幣通考各國〕寶永四年、諸國銀札通用停止仰出さる、
按るに元祿寶永の政、稱すべきものなし、此銀鈔停止も、其實金銀の權を重じ、品位下りたる幣の勢を得せしめんとの謀慮より出たれば、其志は善ならざれども、其事は正大の政にして、後

世の遵守すべきことなり、所謂秦郡縣、漢武の紀元の類か、

〔三王外記文王〕元祿以來、諸侯奢侈、國用不足、造鈔代銀、其士民皆不便、王〇德川家宣立出令禁之、

〔經濟錄五食貨〕異國ニテハ、天下ニ銅錢乏キ故、紙札ヲ造テ、錢ノ代ニ用ルコト多シ、之ヲ寶鈔ト云、吾國ニハ古ヨリ此事無リシニ、元祿中ヨリ、諸侯ノ國ニテ、用度乏キニ依テ、寶鈔ヲ造テ、其國內計ニ是ヲ用ルコトアリ、其頃ノ俗、之ヲ銀札ト云、是ヲ用ルヲ札遣ヒト云、其鈔ヲ見ルニ、廣サ二三寸、長サ一尺計也、苟且ニ懷中ニ入ルニモ板ニ夾ム故ニ、小板金ナドヲ持ヨリ勞煩也、或ハ火ニ焦ゲ、或ハ水ニ濡レ、或ハ鼠ニ咬レ、或ハ汚レ、或ハ摺レ、又ハ破レ、少モ損敗スレバ、其直ヲ減ジ、又ハ全ク棄ル故ニ、民其害ヲ被ル事限ナシ、異國ニテモ鈔ヲ用ルヲ昔ヨリ善政ト云ハズ、上其利ヲ占テ、下ニ大ナル患害ナル故也、文廟〇德川家宣ノ時、嚴令ヲ下シテ、諸國ノ鈔ヲ禁止シ玉ヘリ、其時民間ニ有シ鈔ドモ一旦ニ棄レ、人々忽ニ寶ヲ失テ大ニ困メドモ、永々ノ害ヲ除キ玉ヒシヲ悅ベリ、是善政也、凡國家用度乏シケレバ、興利ノ臣、種々ノ惡說ヲ言上スルハ定ルコト也、其中ニモ鈔ヲ造ルハ甚キ惡政也、不防バアルベカラズ、

〇按ズルニ、家宣ノ令所見ナシ、疑フラクハ綱吉ノ令ヲ誤リシナラン、

〔敎令類纂初集六十五〕享保十五庚戌年六月四日水野壹岐守殿御渡

金銀錢札遣有之所々、先年相止候得ども、向後ハ前々札遣仕來候所々ハ、勝手次第に可仕候、

但札遣致候ハヾ、御勘定奉行江可被達候、

右之趣可被相觸候以上

戌六月

同日御勘定奉行江

前々ゟ仕來候處に而、金銀錢札遣候儀、貳拾萬石以上ハ二十五年、貳拾萬石以下ハ十五年之間た

るべく候、年數滿候而も、猶札遣仕度儀も候ハヾ、其節に至り、御勘定奉行江可承合旨挨拶可被致事、

六月

〔寶曆集成絲綸錄二十六〕寶曆五亥年四月

御勘定奉行江

今度松平加賀守領分、金銀札遣之儀相願候得共、金札遣ハ致無用ニ、銀札遣之儀ハ、可爲伺之通旨相達候、依之向後金札遣之儀ハ、都而難成候間、可被得其意候、

一奥平大膳大夫領分、金銀札遣之儀者、去申年相濟候事ニ候間、年季之內者、其儘通用爲致、年季明候ハヾ、金札遣年延、直相願候共難成候間、其趣ニ可被心得候、

寶曆九卯年八月

金銀錢札遣之儀、寶永年中相止候處、前々札遣致來候所者、勝手次第可仕旨、享保十五年相達候、其後新規之場所ニも、銀札遣願相濟候も有之候得共、新規之分も、段々相濟候而ハ、類例も多相成、後後差支之儀も可有之候間、前々より札遣致來候場所、幷享保十五年以後、新規ニ相願濟候分ハ格別、右之外向後、新規之場所札遣之儀ハ難成候間、可被得其意候、

一金銀札遣之儀者、前々通用致來候分も、向後願難成候事、

但當時通用致候分者、年季之內者、唯今迄之通たるべく候、

右之通可被相觸候

〔御書付留五〕銀札遣之儀、中絶之分も願候得者相濟候得ども、向後は前々銀札遣いたし候場所ニ而も、中絶之分は、銀札遣難相成候間、可被得其意候、

安永三午年八月

〔憲法部類八金銀〕寛政十午年十二月十四日堀田攝津守殿御渡

米札通用之儀、古來仕來之趣を以、是迄申立有之、其時宜に寄、相濟來候分も有之候得共、以來之儀者、前々仕來に而伺有之、引續年季等を以相濟居候分ハ格別、假令古來右之例有之候共、中絶之分ハ、札遣之儀ハ難相成候間、可被得其意候、

十二月

○按ズルニ、米札ハ大坂ノ諸家藏屋敷ヨリ發セラルヽ拂米切手ノ類ニハ非ズ、札遣ノ代リニ施行シ、名目ハ米札ナレドモ、其實ハ銀札錢札等ナリシ故、之ヲ停メタルナリ、米切手丁錢三貫文、米五升定價五百文ナドヽ記シタルモノナリ、

〔天保集成絲綸錄九十一〕天保七申年十二月

御勘定奉行江

銀札遣之儀、前々より札遣いたし來候場所、幷享保十五年以後、新規相願濟候分者格別、右之外向後新規之場所札遣之儀者難成、金錢札遣之儀者、前々通用いたし來候分も、向後願難成旨、寶暦九年相觸、猶亦前々銀札遣いたし候場所ニ而も、中絶之分者、銀札遣難相成旨、安永三年相觸、米札遣之儀も、前々仕來ニ而伺有之、引續年季等を以相濟居候分者格別、假令古來右之儀有之候共、中絶之分者、札遣之儀難相成旨、寛政十年相觸候處、近年猥ニ相成、願濟之外、領主地頭限リ、銀錢札等差出し、又者米札酒札抔紛敷名目を以、札遣いたし候場所も有之趣相聞、如何之事ニ候、前々相觸候通、金錢札遣難成儀者勿論、銀札米札共、願濟之分者格別、其餘相遣之儀者難相成事ニ付、心得違無之樣可致候、若此上不束之儀相聞候ハヾ、急度御沙汰可有之條、兼而其旨可存候、

右之通可被相觸候

十二月

右之趣相觸候間、可被得其意候、

徳川幕府遣紙幣議

〔開國起源下〕慶應年間邦内之形勢四

兵庫御開港ニ付商社取建方幷御用途金見込之儀申上候書付

此度兵庫港、御開可ㇾ相成ㇾニ付而は、是迄長崎橫濱兩港之仕來ニ而は、開港に相成候度每、御損失相成、西洋各國おいて港を開き、政府之利益を得候方法とは相反し、實以奉ㇾ恐入ㇾ候次第、右は全く商人組合之仕法無ㇾ之、薄元手之商人共、一己一己之利慾に而已耽り候故之儀と奉ㇾ存候、將又兵庫幷大坂え、外國人居留地御取設相成候ニ付而は、兩所地平均築立等ニ而、凡貳拾萬兩程は相掛り可ㇾ申、其餘運上所、波戶場、常夜燈掃除方、役々御役宅、西國往還、西之宮ゟ兵庫迄之間道附替、其外に而總計いたし、八九拾萬兩は當年之御出方ニ相成可ㇾ申、尤地平均築立等ハ、居留地御貸渡ニ相成候へば、御入費元高ハ相返り可ㇾ申候得共、借受人急速無ㇾ之候節は、一時繰戾し候譯ニは參り不ㇾ申、運上所以下御用途金ハ、年々稅銀ニ而御仕埋之積りニは候得共、是等も一時繰戾衆可ㇾ申、兎も角も差向候處、當年丈ニ而、八九拾萬兩之御出高に有ㇾ之可ㇾ申候處、近來御多端之折柄、御用途も相嵩、當年中ニ而、八九拾萬兩之臨時御出高、不ㇾ容易ㇾ義ニ而、假令御差繰相成候共、當節之形勢、少も御貯蓄ニ相成置、非常之急需ニ御差向置之方可ㇾ然、就而は右御開港ニ付、商社取建方、幷御用途金出方之儀、勘辨仕、存付候儀左ニ申上候、

一大坂町人共之內、身元宜敷者廿人程人撰仕、兵庫開港場交易商人頭取申渡、右之者組合、諸商買取引いたし、其餘望之者ハ、右廿人之組合に入、取引致候積、一體交易筋は、商人共一己之利益のみを貪り、薄元手之者共、互に競ひ取引いたし候樣に而ハ、元手厚之外國人之爲に利權を得られ、當時橫濱表商人之如く、今日僅に千金之益あり候共、明日直ニ壹萬之損失出來候儀は、全くは商人組合不ㇾ申、一己一己ニ而取引致候より、右樣之次第ニ陷り候儀、右は商人一己之損失斗之樣ニ相見候へ共、一商人其利を得ざるは、一夫其所を得ざると同じ理ニ而、卽御國內おいて、

夫丈之損失ニ相成、十商人之損失も、百商人之損失も、其高丈御國之損失ニ相成、遂ニ全國之利權を失し、外國商人之爲に蔑視され、西洋商人の爲に、東洋おいて、貨殖之地を與る儀に而、實ニ歎息之次第ニ御座候、就而は外國人と取引いたし候には、何れにも外國交易の商社（西名コンペニー）之法ニ基き不申候半而は、迚も盛大之貿易と御國之利益ニは相成申間敷と奉存候、

一御用途金出方之儀、凡百萬兩と見込候而、前文申上候通、當年中臨時御出高に而ハ、御差繰も如何可有之哉、差向候處、六月下旬よりは夫々目論見仕不申候半而は、間に合申間敷、即今莫大之金高御入用ニ付、勘辨仕候處、右は前書町人共より金子爲差出、右にて仕拂置、追々御仕埋之方と奉存候、乍去大坂商人共、是迄上納金も致し、且は只々御用之申渡のみにては、利益を以生業と致候商人共、たとへ如何樣之引當手形相渡候共、御請申上候儀は有之間敷、就而は兵庫港諸式御入用金之廉を以、百萬兩之金札、右町人廿人程之者共より差出候儀、御免許に相成候はゞ、町人共おのれ之利益有之候事故、御請申上候樣相成可申候、尤廿人に而百萬兩は、大數之如く候得共、右廿人商社頭取相成候事故、五畿內は不申及、近國之內ニは加り候者有之、就中東西近江之豪商共、右組合に屬し可申候間、百萬兩位は出來可申と奉存候、若又右にても危み候樣にも候はゞ、右之內より御用達申渡、稅金取立役所に出張爲仕、取立之稅銀、立合之上御預ケニ相成候はゞ、日に月に元金入相成候間、危み申間敷候、橫濱表當時稅銀、大凡壹ヶ年百萬兩餘は有之可申、兵庫は新港之事ゆゑ、三分一と見込候而も、三ヶ年程ニは皆濟相成可申と見込申候、

但開港御用途金百萬兩と見込候は大凡にて、右程は懸り申間敷候へ共、御用途殘りは、平常御入用之急需へ、一時御繰合相成候而も可然奉存候、

一右町人共へ、御差免ニ相成候金札仕樣、譬ば、

壹兩之札　拾萬枚　拾萬兩

拾兩之札　一萬枚　拾萬兩
五拾兩之札　二千枚　拾萬兩
百兩之札　七千枚　七拾萬兩
合百萬兩

右札は頭取町人共にて取調、仕立上り之上、元方大帳へ番號を以、御勘定方御目付方にて立合之上割印いたし、金銀同樣通用致可ㇾ申旨御觸渡ニ相成、公儀にて御入用金有ㇾ之、たとへば開港御普請、幷諸式入用拂方之節、金札也正金也、町人共より爲ㇾ差出、御拂方ニ相成候節より、分合之利分御下ゲ相成候事、

右札通用國々を限り候儀、幷御觸案は、御下知之上取調可ㇾ申上候、

一楮幣通用之儀は、利税之第一にて、實は公儀にて御施行相成候樣仕度候得共、一體楮幣ハ、百萬兩なり、千萬兩なり、現在之實貨備へ置、楮幣ニ代へ候事故、引替之節、何時成共差支無ㇾ之候間、上下是を信用し、通用差支無ㇾ之、爰に於て利權相立、物價にも相響き不ㇾ申候得共、支那往昔より之楮幣、幷御國諸侯之楮幣ハ、現在之實貨なくして、貧國より起り、猥りに楮幣を行候間、引替之節差支候ニ付、上下是を信用致し不ㇾ申、遂ニ同種同價之物といへ共、楮幣と實貨との相場、格外懸隔ニ至り候義ニ御座候、支那幷御國内諸侯之楮幣は、貧より起り、泰西各國之楮幣は、富より起り候義にて、其實天淵之違有ㇾ之、同じ楮幣ニ而、利權を失すると利權を得るとは是に基き候て、貧は益貧ニ相成、富は益富の確證ニ御座候、右之次第故、楮幣ハ公儀にて御施行之方、實ニ可ㇾ然候得共、目今御備置之實貨無ㇾ之、此度町人共之楮幣を考へ候も、全く御貯蓄之實貨無ㇾ之故より起り候儀にて、迚も即今は行ひ難く候、且は比年御用途多ニ而、莫大之御物入有ㇾ之、三都町人共、幷寺社共へ上納金も被ㇾ仰付候次第故、申上候は恐入奉ㇾ存候へ共、御府庫御充實ニ無ㇾ之段は、上

下粗察知候事故、迚も公儀之楮幣は信用不致、遂ニ人心ニ關し物貨ニ響き可申候間、此度は御勘忍被爲在、一先楮幣之利權を町人共へ御任せ有之候方、御捷徑と奉存候、〇中略

一町人共へ金札停止之仕法

三年にて、凡稅銀百萬兩にハ相成可申候ニ付、右ニ而町人共より差出候金高ハ皆濟相成候間、其節ニ至り、前書町人共金札停止被仰出候共、町人共、是迄おのれ〳〵の利分は有之、御入用ニ差出候丈ハ、元利共御下ゲ切ニ相成候事故、聊も故障不服之義ハ無之候、是ニ而全く町人共之金札ハ相止可申候、

一公儀にて金札前書申上候富より起り候楮幣御施行之仕法

前書三ヶ年目より、又候貳ヶ年も相立候はゞ、追々稅銀も相增し、現在之元金、實貨百萬兩は御備置ニ相成可申候間、其節公儀より金札御施行可被成、左候へば百萬兩之現在實貨ニ而、貳百萬兩之御融通に相成可申候、

一公儀幷町人共と上下共に金札施行之仕法

前書三ヶ年目ニ至り、町人共金札御停止ニ相成候とも、町人共おいて、公儀へ對し御非分聊も無之間、故障不服之義は無之候得共、銘々是迄手廣ニ商賣筋、全く半高ニ相成候事故、必歎願可申立、其節はいまだ公儀おいては現在之實貨無之候間、楮幣ハ御施行被成兼候得共、一時冥加金爲差出、御聞濟相成置、又候貳ヶ年も相立、前書現在之實貨、御貯蓄ニ相成候節、又候町人共楮幣停止ニ相成候はゞ、又々歎願可申立候間、其節永々之冥加金爲差出候而、御聞濟ニ相成、公儀おいても楮幣富より起り候御施行に相成候ハヾ、上下共ニ楮幣之利行はれ、其中公儀之楮幣位貴く、町人之楮幣位賤く、利權全く公儀に歸し候樣相成可申候、

但此三ヶ條、三ヶ年にして百萬兩、又貳ヶ年にして百萬兩、交易筋盛大に有之候得ば、必如斯

ニ有之可申、新開港場之事故、若又交易筋不十分ニ候とも、唯々此年數相延候丈ニ而、仕法之順序に取り候而は、違ひ候儀は無之儀と奉存候。○中略

卯四月

塚原但馬守
小栗上野介
服部筑前守
星野豊後守

兵庫御開港ニ付商社御用達共江金札御差免之儀ニ付奉伺候書付

松平大隅守
星野豊後守
竹内日向守
小笠原伊勢守
設樂岩次郎

此度兵庫御開港ニ付而は、商社組合御取立ニ付、商社頭取等夫々被仰付、同所居留地向其外、右へ關係之御入用筋不少儀ニ付、差向商社組合之者共へ、出金之儀申諭候とも、急速相整申間敷哉に而、追々期限も差迫り候間、兼而御勘定奉行等伺濟之趣を以、商社共江金札通用之儀、此節斷然御差許相成候方に可有御座、就而は右手續御取締筋之儀、勘辨評議仕候趣左に申上候、

一金札摺立候紙之儀ハ、要用之儀ニ付、右は御下ゲ渡之積りを以、當時江戸表御勘定所おいて漉立罷在候厚紙、漉増御渡之方と奉存候、

一札仕立方之儀ハ、銅板に彫刻爲致、摺立之上、商社共ゟ御役所へ差出候はゞ、右掛役向にて相改、番號等帳面へ書留、御勘定方町方御目付方立合、役々押切改印等いたし、相渡可申と奉存候、

但押切改印之儀、平常は箱入致、封印之儀も押切致候節、御勘定方町方御目付方、實印を以、上封いたし、商社頭取江相渡置、右役々立合無之候而ハ、一切押切無之積、

一右引替元金ハ商社共ゟ差出、右元金御仕埋方之儀は税銀を以追々御渡之積ニ付、税銀取立候節々ハ商社江元金積り帳面江書留、押切之上其節々相渡置、追而元金ニ相備候節は取計方可相伺候積り、

一金札正金引替方之儀ハ、商社會所、幷商社頭取、其外御用達共方おいて、勝手次第引替可申積、

一金札之内、若疑敷札爲引替持參候節は、其者留置、札受取候先々、一應相糺、怪敷體ニ有之候はゞ、其者召連、町奉行所へ可訴出旨、兼而可申渡置と奉存候、

一商社取立ニ付而ハ、近郷豪商共、貿易取極方元手金として差出金いたし度ものは、勝手次第御差許相成、銘々出金高ニ應じ、御下ゲ金可被成旨、大坂兵庫最寄市在江御觸相成候樣仕度奉存候、

右ニ而可然被思召候はゞ、向々へ之御觸案、取調申上候樣可仕候、此段奉伺候、以上、

卯六月

一商社ニ而發行可相成金札、摺立出來候ニ付、京師御勘定奉行小栗下總守へ見本添回送、見本之內壹兩之分左ニ寫出す、○圖略

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年八月楮幣通用ノ達

美濃守殿渡書付　此度兵庫御開港、商社御取開相成候に付而は、融通の爲、此節より金札當分の內通用被仰出候に付、都て通用金銀同樣相心得、御年貢其外諸上納物ニ相用候而も不苦候間、五畿內近國共、無差支通用可致候、尤右札正金ニ引換の儀は、商社會所、幷商社頭取、其外御用達共方に於て、引換候筈に有之、引換に付而は、歩割減等一切無之候間、不取締之儀無之樣、正路に取引可

諸藩紙幣

致候事、

右之趣、御料私領寺社領共、不洩樣可相觸候、

〔大日本貨幣史紙幣十四〕謹按、○中略慶應三年中、兵庫開港融通ノタメ、五畿內近國ニ行ハントシテ、既ニ百兩、五拾兩、拾兩、壹兩、貳分、壹分、六種ノ札、總計拾萬兩造リタルコト、德川氏ノ記錄ニ見エタレドモ、未ダ通行ニ及バズシテ止ミタレバ、是亦本文ニ載スベキニアラズ、

〔談海十四〕中國銀札をつかふ事

中國は大概銀札をつかふなり、就中因幡伯耆出雲石見は、數多領分入交りたる故、不殘銀札なり、半日程行て他領に入れば、迹の領分の銀札通用せず、よく聞合て、他領に入らぬ手前にて、其領分の銀札役所にて銀を引替、他領に入時、又銀札を買てつかふべし、勝手しらぬ旅人は、行かゝり銀札通用せず、迹へ戻りて行、札替などすれば、往來の日數無用の事にて費多く、甚難儀する事あり、中國陸路往來、心得あるべき事なり、

〔地方凡例錄十一〕銀札通用之事

紙錢と言ハ、銀札之事也、中華にてハ寶鈔と云、○中略紙錢ハ和漢共、民に害ある惡政也、依て寶永之末、文昭院樣○德川家宣御代に成、諸國に令して嚴敷銀札を禁止せらる、誠に難有善政也、其以後諸侯により被始、近年○寬政年間にてハ、江州彥根領、四國阿波土佐、九州豐前中津領小倉領など、銀札通用あり、元文之頃、筑後久留米領柳川領抔、銀札有、其外之國々有べし、五七年或ハ十年餘にして、金銀上に集れば、札會所の引替及延引、後ハ三枚重ネ五枚重ネといふて、縱ハ銀札五匁三匁差出せバ、漸、正銀壹匁相渡候樣になり、次第に銀札之位劣り、其上不殘引上不濟內停止せられ、諸人所持致したる銀札通用止めバ、廢き反故と成、實に士民之難儀無言計、○中略國々銀札之制し方、幷多少等夫々違有、惡けれども大概城下に札會所を建、役人を出し置、金銀錢を受取、銀札を渡し、又金銀に

引替度銀札を出せば請取之、其員數程金銀を渡す、市中兩替店にても、銀札を以て金銀錢に引替度望めば、無滯引替遣す、尤時之相場有之儀ハ、金錢之相場に准ずべし、會所にて引替るハ、銀札壹匁ハ銀壹匁に引替、通用自由なる處、後に成てハ會所之引替怠り、前條に如申、銀三匁差出、正銀壹匁請取樣になり、次第に銀札衰の故、兩替屋抔にてハ、金銀無之由を申斷、銀札にハ不引替、諸商賣物も、銀札にてハ決て変易不致樣に成行、果ハ下々の損失成事にて、寔に惡政の甚敷也、

〔大日本貨幣史紙幣部附錄五藩札〕越前國福井藩

福井藩ノ札ハ、寛文元年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ九種アリ、曰ク、銀百目札、藩ノ支消ニ付定ル價格ナシ曰ク銀五拾目札、曰ク銀貳拾目札、曰ク銀拾匁札、曰ク銀五匁札、曰ク銀三匁札、曰ク銀貳匁札、曰ク銀壹匁札、曰ク銀五分札、又維新ノ後錢札ヲ造リ、銀札ト並ビ行ヘリ、

○按ズルニ、徳川氏ノ時、諸藩中、最初ニ紙幣ヲ用キシモノハ福井藩第一ナルベシ、而シテ之ニ次グモノヲ岡山、寛文十年松江、延寶二年平戸、同五年ノ各藩トス、其他ハ皆元祿以後ノ制ニ係ル、

〔備藩典刑四〕

一札賣買之事、銀百目持參仕、札百壹匁可受取、札百貳匁持參候時は、銀百匁可受取、尤銀札ともに、多少有之時は、取步遣左右之制符たるべき事、

一岡山在々とも、札遣ひに被仰付候上は、御家中末々町在とも、諸色うり買之義、少にても銀取遣り仕候はゞ、賣手買手ともに、急度曲事可被仰付候事、

一御藏入給知とも、年貢米麥大豆とも、代銀にて拂申分は、札にて受取可申候、相場之外ニ、札步相代、銀百匁ニ付貳匁相濟、請取可申候、并諸運上も札步左右可爲同事事、

一御藏并御家中共、札米麥、大豆其外俵物札賣ニ仕、右之通札步相、相場之外ニ出候樣ニ被仰付候事、

一札賣買下にて仕義停止之事

一他國のもの、諸事賣買に參り候はゞ、宿主肝煎、札賣買に仕候樣被仰付候、たとへ隣國より其日歸りに參り候とも、銀にては一切取遣仕間敷候、旅人諸奉公人かけ通候義は各別に候間、銀にても取遣候樣被仰付候、但し一日とも逗留仕候はゞ、宿主肝煎、札買遣し候樣可仕候、銀遣間敷事、

一小判壹歩兩替之義は、札にても銀にても可仕候、尤金子にて札之外買物一切仕間敷事、

一錢遣之義は、貳分迄札有之上は、貳分より下、錢遣ひに被仰付候事、

一損じ札之義は、札壹枚ニ付錢貳文ヅヽ、持參候はゞ、新札ニかへ可申事、

一札場銀包之事、拾匁より上は包に仕、拾匁より內は手包にても、相對にて取遣り可仕候事、

一札うりかひ下にて仕候義、御法度ニ被仰付旨候上は、岡山計ニ札所被仰付候而は、御國中札手支可仕候間、或は牛窓、片上、下津井、作州さかひ、備中他領さかひに、札場被仰付候事、

一札包之事、札百枚より上は包ニ仕、百枚より內は相對ニ可仕候事、

一借銀返辨之義も、札拂に被仰付候、但前方より借米之分は、札歩相貳匁相添可遣事、此後借銀取やり之義は、歩相有之間敷候事、

一御銀奉行手前にて、御用ニ遣ひ候札賣買、御家中內事ニ被仰付候事、○中略

一御家中男女とも、銀給之分は札にて可遣候事、

但只今迄銀給來り候分、札歩相添へ可遣候事、

一似せ札仕候樣之者於有之は、其身は不及申、一類迄罪科に被仰付、幷五人組共、曲事可被仰付候事、

一若他所より似せ札を以、持參仕候者於有之は、其もの押置、早々奉行所へ注進可仕事、

七月（寛文十年）朔日

〔大日本貨幣史（紙幣部藩札附錄七）〕備前國岡山藩

岡山藩ノ札ハ、享保十五年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ四種アリ、（初メ七種ナリシガ、三種ハ早ク廢シ、且銀札ナリシヲ錢札ニ改造セリ、）曰ク錢壹貫文札、曰ク錢百文札、曰ク錢貳拾文札、曰ク錢拾文札、其ノ枚數貳千六百四拾壹萬貳百九拾八枚、此ノ錢價千百三萬五千三百八拾五貫文ナリ、

○按ズルニ、本書ニ享保十五年始テ藩札ヲ造ルトアレドモ、既ニ其以前ヨリ通用セシコト、上文載スル所ノ備藩典刑ヲ看テ知ルベシ、

〔大日本貨幣史（紙幣部藩札附錄六）〕出雲國松江藩

松江藩ノ札ハ、延寶二年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ銀札三種、錢札貳種アリ、外ニ錢預札五種、連判錢預札貳種アリ、右銀札三種ハ、曰ク銀壹匁札、曰ク銀三分札、曰ク銀貳分札、其ノ總計千七百六拾三萬千六百六拾八枚、此ノ銀價壹萬五千六百七拾貫八百六拾三匁ナリ、右錢札貳種ハ、曰ク錢壹貫文札、曰ク錢五百文札、其ノ總計七百五拾七萬千九百七拾壹枚、此ノ錢價七百三拾貳萬貳千貳百七拾貫四百五拾文ナリ、（此ノ内百三拾七萬七千八百三拾四枚、錢價七拾五萬七千八百八貫七百文ハ、藩ニテ支消スト、藩札調書ニ見エタリ、）右錢預札五種ハ、曰ク錢百貫文預札、曰ク錢五貫文預札、曰ク錢三貫文預札、曰ク錢貳貫文預札、曰ク錢壹貫文預札、其ノ總計貳百萬六千九百三拾三枚、此ノ錢價九百貳拾八萬五千四百五貫文ナリ、

〔赤城義臣傳二〕岡島訇大野大野走伊藤之家事

四月（元祿十四年）十二日城中ノ僉議一決ノ上、即時ニ奉行ヲ召シ、府庫ノ金銀ノ高ヲ計リ、民手ノ箋（フダ）ヲ買取テ、蚤ク民ノ心ヲ安ゼント、札座ノ奉行岡島八十右衞門常樹ニ命ジ、民ニ出ス處ノ札銀高ヲ府庫ノ有銀ニ平均シ、六分ノ積リヲ以テ之ヲ渡ス、（札壹貫目ニ六百目渡）

〔大日本貨幣史紙幣部附錄七藩札〕備中國庭瀨藩

庭瀨藩ノ札ハ、元祿十四年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ七種アリ、曰ク永百文札、曰ク永拾文札、曰ク永五文札、曰ク銀壹匁札、曰ク銀五分札、曰ク銀三分札、曰ク銀貳分札、右永札枚數拾三萬貳千百枚、此ノ永三千貫文、別種永札(是ハ銀札ニ永字ヲ印記シテ、永札ニ當テタルモノヲ云フ、)枚數四萬三千三百八拾四枚、此ノ永四百拾八貫拾四文、右銀札枚數詳ナラズ、此ノ銀價百七拾八貫七百六拾九匁五分ナリ、

安藝國廣島藩

廣島藩ノ札ハ、元祿十五年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ銀札五種、米札六種、銀預券三種アリ、曰ク銀五匁札、曰ク銀壹匁札、曰ク銀五分札、曰ク銀三分札、曰ク銀貳分札、其ノ總計三千六拾九萬三千五百九拾四枚、此ノ銀價七萬九千九百四拾五貫八百六匁壹分ナリ、曰ク米貳斗札、(代銀百貳拾目)曰ク米壹斗札、(代銀六拾目)曰ク米貳升札、(代銀拾貳匁)曰ク米壹升札、(代銀六匁)曰ク米貳合札、(代銀壹匁貳分)曰ク米壹合札、(代銀六分)其ノ總計貳百貳拾萬六千九百九拾八枚、此ノ銀價六萬五千四百八貫七百四拾八匁ナリ、曰ク銀五百目預券、曰ク銀貳百目預券、曰ク銀百目預券、其ノ總計貳拾壹萬九千九百三拾六枚、此ノ銀價四萬三千四百七拾三貫六百目ナリ、

〔河方記〕元祿十七年甲申(寶永元年)二月朔日水戶御達

公儀ヘ御願被仰達、御領內賣買之諸品、金。銀。札にて通用之儀、此度被仰出候、此儀自古代於御國其例も雖無之候、他國にも區々其見合就有之被仰出候事、　四月十五日被仰出候、先達而御家中へ被仰渡候通、此度御領內金札遣に被仰付候に付、向後正金通用之儀、御停止被遊候條、別紙御定書を相守、札遣滯無之樣一統可仕候、若相背、或ハ似セ札、其外謀書之輩有之バ、御糺明之上、可被處嚴科者也、

正金を以賣買貸引等仕候ハ、雙方或ハ曲事、或可ㇾ爲二過料一事、
來ル廿七日ゟ、七軒町札役所相立、來月六日迄ハ、正金札金入交リ通用、七日ゟ正金交易、堅御停止之事に候、〇中略
四月廿日、七軒町紙金役所に而、紙金出る、壹分に紙金替るに、役所より錢十文出る、紙金に而正金替るに錢廿文上る、
〔大日本貨幣史紙幣部附錄藩札 一〕山城國淀藩
淀藩ノ札ハ、享保八年始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ、銀札ヲ製造セシガ、維新ノ後、西京ニ於テ、更ラニ許可ヲ受ケテ、之レヲ錢札ニ改造セリ、

大和國郡山藩

郡山藩ノ札ハ、享保十五年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ四種アリ、曰ク銀五匁札、曰ク銀壹匁札、曰ク銀三分札、曰ク銀貳分札、其ノ枚數詳ナラズ、此ノ銀價貳萬千四百四拾六貫百三拾八匁九分ナリ、其ノ價格明治四年七月十四日、金價壹兩ニ付キ、銀札貳百貳拾四匁ノ届ニ據テ定ムル所ノ價格、銀五匁札壹枚ハ、新貨價壹錢八厘ニ當リ、銀壹匁札壹枚ハ、新貨價三厘ニ當リ、銀三分札壹枚ハ、新貨價壹厘ニ當リ、銀貳分札貳枚ハ、新貨價壹厘ニ當ル、
〔大日本貨幣史紙幣部附錄藩札 七〕播磨國赤穗藩
赤穗藩ノ札ハ、享保十五年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ銀札九種アリ、曰ク古銀五百目札、價位六貫文曰ク古銀百目札、價位壹貫貳百文曰ク古銀拾匁札、價位百貳拾文曰ク古銀壹匁札、價位拾貳文曰ク新銀百目札、價位六貫文曰ク新銀拾匁札、價位六百文曰ク新銀壹匁札、價位六拾文曰ク新銀三分札、價位拾八文曰ク新銀貳分札、價位拾貳文其ノ總計三百壹萬六千三百拾八枚、此ノ錢價九拾九萬貫文ナリ、
〔大日本貨幣史紙幣部附錄藩札 二〕伊勢國神戸藩

神戸藩ノ札ハ、享保十六年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ三種アリ、曰ク米壹升代銀壹匁札、曰ク米五合代銀五分札、曰ク米三合代銀三分札、其總計貳百八拾七萬千貳百拾五枚、此ノ銀價貳千七百五拾貫貳百九拾七匁六分ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部藩札附錄六〕因幡國鳥取藩

鳥取藩ノ札ハ、享保十六年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ七種アリ、曰ク銀五拾目札、曰ク銀拾匁札、曰ク銀五匁札、曰ク銀壹匁札、曰ク銀三分札、曰ク銀貳分札、曰ク銀壹分札、其ノ總計千三百拾七萬四千七拾五枚、此ノ銀價八萬千九百七貫三百目ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部藩札附錄一〕大和國柳本藩

柳本藩ノ札ハ、享保年間、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ六種アリ、曰ク銀拾匁札、曰ク銀五匁札、曰ク銀壹匁札、曰ク銀五分札、曰ク銀三分札、曰ク銀貳分札、六種ノ總計五拾壹萬三千三百枚、○中略又天保九年、幕府ノ許可ヲ受ケテ製造シ、古銀札ト唱フルモノ四種アリ、曰ク銀五匁札、曰ク銀壹匁札、曰ク銀三分札、曰ク銀貳分札、其ノ枚數詳ナラズ、此銀價千百貫目ナリ、而シテ嘉永年間ニ至リ、不通用トナリシヲ以テ、支消ノ方法ヲ設ケ社ヲ結ビ、銀札所有ノ者入社シ、抽籤ヲ以テ消却セシニ、廢藩ノ際此ノ社モ廢セリ、

〔大日本貨幣史紙幣部藩札附錄二〕伊勢國菰野藩

菰野藩ノ札ハ、享保年間、幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ五種、曰ク銀貳匁五分札、曰ク銀壹匁五分札、曰ク銀壹匁札、曰ク銀五分札、曰ク銀三分札ナリ、其ノ後之レヲ錢札ニ改造ス、曰ク錢貳貫文札、曰ク錢壹貫文札、曰ク錢五百文札、曰ク錢百文札、曰ク錢四拾八文札ナリ、然レドモ右銀札及ビ錢札ハ、藩ニテ支消セルニヨリ、定ムル所ノ價格ナシ、別ニ米札三種アリ、曰ク米壹斗六升代永貳百五拾文札、曰ク米八升代永百貳拾五文札、曰ク米壹升代永拾五文六分札、其ノ總計四拾貳萬

六千四百拾壹枚、此ノ永價壹萬九千貳百六拾八貫九百貳拾壹文九分ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部附錄六〕石見國津和野藩

津和野藩ノ札ハ、享保年間、幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ五種アリ、曰ク米貳斗代銀拾匁札、曰ク、米壹斗代銀五匁札、曰ク米貳升代銀壹匁札、曰ク米六合代銀三分札、曰ク米四合代銀貳分札、其ノ枚數詳ナラズ、此ノ銀價壹萬貳百四拾貫目ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部附錄一〕攝津國尼崎藩

尼崎藩ノ札ハ、安永六年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ銀札二千五百貫目アリ、其後文久三年許可ヲ得テ製造セルモノ、銀札二千五百貫目アリ、合計三千貫目ナリ、是ハ維新ノ後錢札ニ改造セリ、別ニ又金札三種アリ、曰ク金壹兩札、曰ク金壹分札、曰ク金壹朱札、其ノ枚數五萬五千枚、此ノ金價壹萬兩ナリ、而シテ右改造ノ錢札ハ六種アリ、曰ク錢五貫文札、曰ク錢貳貫五百文札、曰ク錢壹貫文札、曰ク錢五百文札、曰ク錢百文札、曰ク錢四拾八文札、六種總計百拾四萬七千貳百枚、此ノ錢價三拾萬貫文ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部附錄五〕越中國富山藩

富山藩ノ札ハ、寛政四年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ九種アリ、曰ク金壹兩札、曰ク金壹分札、曰ク金貳朱札、曰ク金壹朱札、曰ク錢壹貫文札、曰ク錢五百文札、曰ク錢三百文札、曰ク錢貳百文札、曰ク錢百文札、右金札總計貳拾九萬九千貳百六拾貳枚、此金價九萬貳千九百五拾五兩貳分貳朱、右錢札總計拾七萬八千九百枚、此ノ錢價八萬五千貫文ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部附錄九〕豐後國日出藩

日出藩ノ札ハ、文化年間、幕府ノ許可ヲ經ズシテ製造セルモノ七種アリ、曰ク錢拾匁札、曰ク錢五匁札、曰ク錢壹匁札、曰ク錢五分札、曰ク錢三分札、曰ク錢貳分五厘札、曰ク錢壹分札、其ノ枚數詳ナ

ラズ、此ノ錢價八千三百五拾六貫百七匁ナリ、

〔御陰參宮文政神異記 上〕閏三月〇天保元年四日、阿波國德島より三里脇、富〇富一本作福田村と申ところ、魚屋儀助、〇中略右魚屋儀助と申もの、むかしの長者の末なり、阿波國の銀札裏書に、今もなほ魚屋寺澤と書き、通用いたし候よし、

〔大日本貨幣史紙幣部附錄九藩札〕豐後國森藩

森藩ノ札ハ、文政十三年〇天保元年始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ、七六錢札五種、七錢札六種アリ、右七六錢札ハ、曰ク米代七六五匁札、曰ク米代七六貳匁五分札、曰ク米代七六壹匁札、曰ク米代七六貳分五厘札、曰ク米代七六壹分札、其ノ總計貳百三拾三萬九千三百四拾五枚、此ノ錢價五千百九拾貫六百七拾六匁貳分五厘ナリ、右七錢札、曰ク米代七錢拾匁札、曰ク米代七錢五匁札、曰ク米代七錢壹匁札、曰ク米代七錢五分札、曰ク米代七錢三分札、曰ク米代七錢壹分札、其ノ總計四拾三萬九千九百貳枚、此ノ錢價八百五拾四貫九百八拾三匁三分ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部附錄七藩札〕播磨國姫路藩

姫路藩ノ札ハ、天保八年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ六種アリ、曰ク銀百目札、曰ク銀五拾目札、曰ク銀拾匁札、曰ク銀壹匁札、曰ク銀貳分札、曰ク銀壹分札、其ノ總計貳億五千三百八拾萬枚、此ノ銀價貳拾八萬五千貫目ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部附錄三藩札〕美濃國加納藩

加納藩ノ札ハ、安政六年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ五種アリ、曰ク傘貳本代銀四匁札、曰ク傘壹本代銀貳匁札、曰ク綛(カセ)糸代銀壹匁札、曰ク幟幮三個代銀三分札、曰ク幟幮貳個代銀二分札、其ノ總計貳拾三萬三千百拾九枚、此ノ銀價三百九拾六貫貳百匁壹分ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部附錄二藩札〕伊勢國桑名藩

桑名藩ノ札ハ慶應元年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ壹種アリ、曰ク銀壹匁札、又許可年月詳ナラザレドモ、製造セルモノ五種アリ、曰ク錢四拾八文札、曰ク錢三拾貳文札、曰ク錢貳拾四文札曰ク錢拾六文札、曰ク錢拾貳文札、而シテ此ノ錢札ハ已ニ廢シ、獨リ銀壹匁札ヲ行フ、其ノ壹匁札總計三百六拾六萬七千貳百枚、此ノ銀價三千六百六拾七貫貳百目ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部藩札附錄五〕越後國高田藩

高田藩ノ札ハ、其ノ始詳ナラザレドモ、幕府ノ許可ヲ受ケテ製造セルモノ拾壹種アリ、曰ク錢札價位金五兩札、曰ク錢札價位金壹兩札、曰ク錢札價位金壹分札、曰ク錢札價位金壹朱札、曰ク錢拾貫文札、曰ク錢五貫癸札曰ク錢三貫文札、曰ク錢貳貫五百文札、曰ク錢壹貫文札、曰ク錢五百文札、曰ク錢三百文札、此ノ金價拾五萬六千五百六拾五兩貳朱ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部藩札附錄八〕伊豫國吉田藩

吉田藩ノ札ハ、其ノ宗家宇和島藩ヨリ交付セルモノ十三種アリ、曰ク銀壹貫目札、曰ク銀五百目札、曰ク銀三百目札、曰ク銀貳百目札、曰ク銀百目札、曰ク銀五拾目札、曰ク銀拾匁札、曰ク銀五匁札、曰ク銀三匁札、曰ク銀壹匁札、曰ク銀五分札、曰ク銀三分札、曰ク銀貳分札、其ノ總計貳拾四萬九千枚、此ノ銀價五萬貫目ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部藩札附錄十〕肥前國平戶藩

平戶藩ノ札ハ、其ノ始詳ナラザレドモ、製造セルモノ金札貳種、銀札壹種、錢札六種アリ、右金札貳種、曰ク金壹分札、曰ク金壹朱札、其ノ總計四拾五萬貳千三百八拾貳枚、此ノ金價四萬三千九百拾四兩貳分永六拾貳文五分ナリ、右銀札壹種、曰ク銀四分札、其ノ枚數貳拾四萬枚、此ノ銀價九拾六貫目ナリ、右錢札六種、曰ク錢五貫文札、曰ク錢壹貫五百文札、曰ク錢壹貫文札、曰ク錢三百文札、曰ク錢貳百文札、曰ク錢百文札、其ノ總計百三拾四萬六千五拾七枚、此ノ錢價五拾四萬九千三百五

羽書

拾六貫三百文ナリ、

〔大日本貨幣史紙幣部附録十藩札〕薩摩國鹿兒島藩

鹿兒島藩ノ札ハ、維新ノ前製造セルモノ、金札、銀札、及ビ錢札ノ三類アリ、右金札四種、曰ク金五兩札、曰ク金壹兩札、曰ク金壹分札曰ク金壹朱札、其ノ總計貳百拾九萬四百五拾四枚、此ノ金價四拾九萬五千七百九拾五兩壹分ナリ、右銀札三種、曰ク銀拾匁札、曰ク銀五匁札曰ク銀壹匁札、其ノ總計四百三拾七萬八千百三拾枚、此ノ銀價貳萬九百七拾貳貫目ナリ、右錢札拾貳種、曰ク錢拾貫文札、曰ク錢七貫文札、曰ク錢六貫文札、曰ク錢五貫文札、曰ク錢四貫文札、曰ク錢三貫文札、曰ク錢貳貫文札、曰ク錢壹貫文札、曰ク錢五百文札、曰ク錢百文札、曰ク錢四拾八文札、曰ク錢拾六文札、其ノ總計千九百四萬三千三百八拾四枚、此ノ錢價九百九拾三萬六千七百八拾三貫文ナリ、

○按ズルニ、諸國紙幣ノ結末ハ、明治元年ニ、銀目通用ヲ停メラレシ時、銀札ハ皆錢札ニ改メ、同四年廢藩置縣ニ由リ、藩札ハ一般ニ政府ノ負債ト變ジ、此年七月十四日ノ相場ニ據リテ、新紙幣ト交換セラレ、五錢未滿ノ小札ハ、改算押印ヲ經テ、暫時通用セシメラレシモアリキ、藩札處分當時、調書ニ、藩札ヲ用キシモノハ、凡ソ二百八藩、德川氏旗本知行八所、(丹後ノ藤掛、牧、但馬ノ小出三家、備中ノ戸川、豐後ノ羽柴、)及ビ三縣(奈良、度會、倉敷、)ニテ、札數凡四億一千七十二萬二千四百八十四枚、之ヲ新貨ニ改算シテ、凡ソ一千七百五十四萬六千四百二圓四十八錢七厘ニ抵ルト云フ、但シ其中ニハ、德川幕府時代ニ施行セシモノ、ミナラズ、明治ノ初年ニ發行シタルモノモ多キニ居レリ、

〔類聚名物考調度十五寶貨〕羽書　はがき　紙鈔

伊勢一國にてつかふ紙札なり、銀遣の札にて、禰宜神主組合て、この羽書を出す、札の表に細密の繪有て、銀目をもかきて有、昔より此制を私に取行ふなり、家々のしるし、みな同じからず、紙もあらたにすかせて似せの出來ぬやうにかまへし物なり、是を羽書と云は、おもふに錢神論に、翅な

くしてよく飛と云にもとづきて、羽書と云なるべし、

〔御當家令條二十一〕京都町中可令觸知條々〇中略

一就賣買書物取置事

右當時致し置はがきといふ事、及相論時、爲證文奉行所に持來といふとも、不分明、難議定、於向後其時代銀を渡さず、證文取替す事有之ば、雖一札可取置事、〇中略

以前條々所相定也、町中不殘可令觸知者也、

元和八年八月二十日

〔東武實錄十一〕寛永元年三月六日、勢州山田三方年寄ノ輩ニ仰出サル丶趣、

一山田において、にせはがきをいだし、其上町中へ、火をも付候はんとたくみを仕候惡人出來付而、籠舍之由尤候、成敗之儀ハ、其元御代官可被仰付候間、其節御代官と相談之上、可及沙汰事、

〔千慮一得〕銀札、勢州山田ニテハ、六十四枚ヲ一兩トス、津ニテハ六十枚ヲ一兩トス、古市モ津領ナレバ、津ト同ジ定ナリ、

〔地方凡例錄十一〕銀札通用事

伊勢神領之銀札ハ享保年中ゟ通用あり、是を端書と唱、引替等無差支、神領ハ不及言、近領迄通用し、諸人の患も少き故に今通用す、

〔大日本貨幣史紙幣部附錄二藩札〕伊勢國度會府

度會府ノ札ハ、羽書ト稱シ、伊勢ノ國山田ニ於テ、往昔ヨリ施行セシ者ニテ、或ハ云フ足利氏ニ始ルト僅ニ口碑ニ傳フレドモ、文明年間、宇治山田ニテ、屢鬪爭アリテ、記錄盡ク兵燹ニ燬カレ、其詳ナルコト今考フ可カラズ、寛永八年、幕府始メテ山田奉行ヲ置キ、花房志摩守ヲ以テ之ニ任ズ、當時其ノ地ノ耆老ヲ選任シ、山田三方年寄ト名ケ、專ラ羽書ノ事ヲ掌ラシメ、其後寛政年間、一色兵

錯載

庫頭奉行タリシ時、改メテ市民四百四人ヲ擧ゲ、羽書總中ト名ケ、其ノ人員ヨリ金ヲ出サシメテ、羽書ノ事ヲ主管セシメシト云フ、明治元年、羽書交換所ヲ度會府ニ設ケテ之ヲ掌ラシム、今其ノ記錄ニ存スルモノヲ擧グルニ、銀札四種アリ、曰ク銀壹匁札、曰ク銀五分札、曰ク銀三分札、曰ク銀二分札、其ノ四種ノ總計九百八萬二千枚、此銀價八千九百七拾貳貫八百匁ナリ、（明治四年七月十四日、金價壹兩ニ銀價六拾四匁ノ屆ニ據テ定ム。）

〔大日本貨幣史紙幣部附錄藩札附載一〕攝津國大坂江戸堀河銀札

右銀七分札ハ、元和年間、大坂ニ於テ、江戸堀河ヲ開鑿セシ際、一時通貨トナシテ用キシモノナリ、表面ニ、攝州大坂江戸堀河銀札、萬民用之、永代重寶也トアリ、裏面ニ、桔梗屋伍郎左衛門、紀伊國屋藤左衛門ノ印記アリ、且塗抹ノ處アルニ據レバ、蓋交換ニ付セシモノナラン、此札ハ大坂人山科清五郎ノ藏スル所ニテ、明治八年、同所博覽會ニ出セリ、實ニ慶長以來ノ舊紙幣ト云フベシ、

〔銀札御救諸色產物掛諸留〕備中國御領知村々產物類大坂表江廻方之儀ニ付見込書

備中國御領知村々、穀物產物類、大坂表江相廻シ、賣捌方取調候譯者、元來御領知百姓、近年迄最寄私領市町江米穀產物類賣拂、代料ニ正金無之國柄故、私領遣ひ出銀札請取、其銀札を私領銀札引替所へ致持參、正金ニ引替、御年貢銀調達致し來候處、五六年以前より、私領向々ニ而正金兩替方差支、百姓共代料ニ更取居候銀札悉潰ニ相成、多分之損失致し候ニ付、百姓共所持之他領諸家遣出銀札を、正金ニ引替相成候樣、當御役所より向々役場江掛合方願出候ニ及掛合候處、いづれも勝手方差支、引替不相成、御年貢取立方差支候ニ付、奉行所江御領知村々より諸家江相掛り、及出訴候手續ニ有之候處、奉行所江及出訴候とも、迚も百姓共所持の銀札、正金ニ相替リ候見當無之、出訴入用等多分ニ相掛リ、難澁彌增、御年貢上納方、追々差詰リ候場合ニ付、始末取調、委細江戸表江相伺候處、右銀札引替方差滯、百姓共難立行次第ニ付、再應公邊江被仰立ニ相成候處、御勘定奉

行より備中國諸家へ、一橋御領知に有之銀札、無滯引替候樣、於江戸表夫々御達ニ相成候段、御通達有之、其後當御役所より諸家へ掛合候而も、素々諸家困窮、勝手方不行立故、右樣の場合に至り候儀ニ付、公邊より諸家江御沙汰相成候而も、更ニ其詮無之、いづれにも奉行所へ郡中村々より出訴致し、裁許請候外無之候得共、裁許相成候迄之入用不少、○中略

申十一月　井石善兵衛

〔它山存稿一〕答秦時亮、代白水丈夫

姫路世臣河合某拜復、西讃時亮秦君足下、愚本與足下不相識、今乍承厚意、感荷感荷、○中略又蒙論楮幣非良法善政、是蓋鄭介夫丘仲深、固嘗言之、愚知之久矣、雖然宋時張詠、鎭蜀設此法、民頗便之、夫忠定一代名賢、有識度者也、爲此以取便、則未爲叔世之秕政矣、蓋其事剏於唐元和中、所謂飛錢、乃後世之會票也、其法盛于宋元、而元季中廢、明太祖在軍制之取權利、英傑有爲者、亦皆用之、食貨之政、時而有權、亦非覺啓窾識之所及也、且所謂楮幣寶鈔、固與錢引交子關會、自然不同、足下概爲楮幣、不知今所行之非楮幣也、夫楮幣者、直以此爲錢也、周益公丘瓊山所謂以紙爲錢也、交子諸名、與憲宗飛錢忠定質劑、是周丘二公所謂官券、以此換錢也、今國中所用、所謂質劑交子也、斥爲楮幣非矣、近時伊藤東涯、亦言其別、足下偶失之邪、且敝邑行之、別有一義、他封之接地壤者、用此物抑舊矣、我封不鋳造錢貨、爲他所併、將就彼取此、路程往復、事不速辨、於是敝邑亦議剏此、緡貫之數、十倍于他邑、行之僅四年矣、他邑亦奉行之、其所有交子、或至沮廢、可謂愉快矣、敝邑立交子局、積金委錢、至貫朽不可校、屋礎爲之折損、近邑亦知之、非誇詞也、足下唯論其道、不審其勢、亦似非通識矣、○下略

〔憲法部類金銀八〕寶暦十二午年正月四日

近年大坂表兩替屋共之内、印金と名付、正金に而無之帳合金を致賣買候者有之由相聞、不埒之至に候、以來右帳合金賣買之儀、堅令停止候條、急度可相守、若令違犯においてハ、嚴科に可申付者也、

（大日本貨幣史　藩札）

因幡國　鳥取藩

表

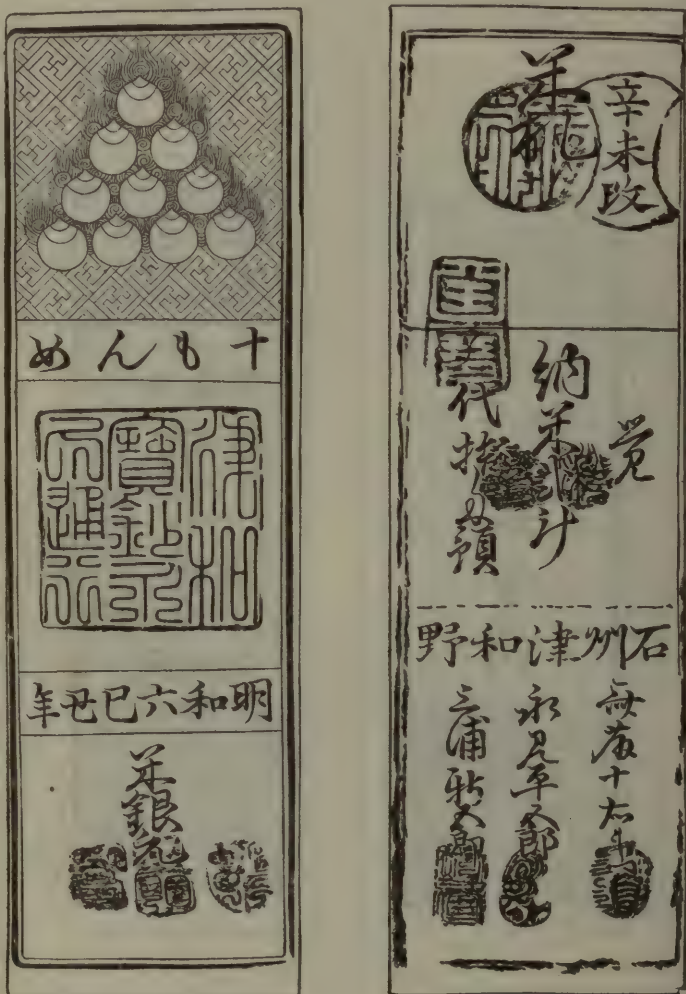


裏



石見國 津和野藩

表　裏



（大日本貨幣史　藩札）

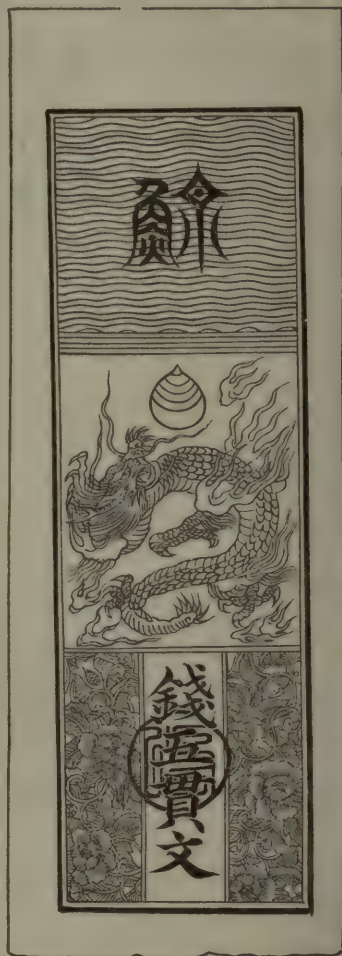
豊後國　森藩

表　裏



肥前國 平戶藩

表



裏



〔草茅危言五〕米相場ノ事

一大坂ニ於テ、大ニ風俗ヲ破リ、人心ヲ害スル事ノ最上第一タ、ルベキハ堂島ニテ、帳合米ト名付ル米穀ノ不實商也、北濱ニテ印。シ。金。ト名付ル金子商、是ニ繼者也、〇中略印金ノ事ハ、寶暦十一年辛巳ニ堅ク禁止ノ令有テ止タリシガ、何ノ比ニ又始リタルヤ、至盛ニ行ハルヽ也、此米金ノ空商禁絶有バ、世ノ澆漓ヲ淳質ニ挽回スル事ノ一大機軸ト云べキ者カ、

編修總裁　正三位　細川潤次郎
編修　正七位文學博士　佐藤誠實
副編修　松本愛重
助修　石井小太郎
助修　加藤才次郎
助修　山本信哉
助修　馬瀨長松
助修　和田信二郎
助修　村尾節三

顧問　從四位文學博士　黑川眞頼
顧問　正五位　本居豐穎
顧問　從五位　木村正辭
顧問兼校正　井上頼圀

古事類苑

稱量部目錄

古事類苑

稱量部一

度

古事類苑

稱量部一

度

度ハ物ノ長短ヲ量ルノ謂ニテ、其器ヲ名ヅケテ尺ト云フ、後世之ヲ物指(モノサシ)トモ云フ、指(サシ)ハ卽チ長短ヲ量ルノ謂ナリ、蓋シ太古ニ在リテハ、其器未ダ出デズ、故ニ兩臂ヲ伸張スルヲ尋(ヒロ)ト云ヒ、四指ヲ以テ握ルヲ握(ツカ)ト云ヒテ之ヲ量リシナリ、其後度器ヲ造ルニ至リ、物ノ長短大小、始テ其正ヲ得タリ、然レドモ其制詳ナラズ、文武天皇ノ大寶制令ニ至リ、尺ニ大尺小尺アリテ、小尺ノ一尺二寸ヲ以テ、大尺ノ一尺トス、而シテ大尺ハ地ヲ量ルニノミ用ヰ、其餘ハ皆小尺ヲ用ヰシム、又銅造ノ樣式ヲ大藏省及ビ諸國司ニ給シ、官私用ヰル所ノ度器ヲシテ、每年省國ニ就キテ題印ヲ受ケシメ、然シテ後始テ用ヰルコトヲ聽ス、而ルニ元明天皇ノ和銅六年、此制ヲ改定シ、其大小尺ハ、各從前ノ大小尺ノ一尺二寸ヲ以テ一尺トシタリ、而シテ延喜式ノ制ニ、小尺ハ晷景ヲ測ルニノミ用ヰ、其餘ハ皆大尺ヲ用ヰルハ、恐ラクハ和銅ノ改定ニ出ヅルナラン、

曲尺ノ稱ハ、旣ニ源順ノ倭名類聚抄ニ見エタリ、造ルニ鐵ヲ以テシタレバ金(カネ)尺ト云ヒ、屈折シテ矩ノ形ヲ成シ、專ラ工匠ノ用ニ供スルヲ以テ、又大工尺トモ云ヘリ、又同抄ニ竹量(タカハカリ)アリ、竹ヲ以テ製スルニ由リ此名アリ、後ニハ鷹計トモ書ケリ、德川幕府ニ至リテハ、竹量ノ名ハ旣ニ亡ビテ、其曲尺ノ外ニ、吳服尺、鯨尺アリ、吳服尺ハ、曲尺ノ一尺二寸ニシテ、鯨(クヂラ)尺ハ曲尺ノ

一尺二寸五分ナリ、而シテ呉服尺ハ專ラ裁衣ノ用ニ供スルニ由リ呉服ヲ以テ名トシ、鯨尺ハ其初メ鯨骨ヲ以テ製セシニ由リ此稱ヲ得タルナリ、然レドモ後ニハ、一尺二寸五分ノモノヲ以テ、裁衣ノ用ニ供シ、呉服尺ヲ用キルコトハ幾ド希ナリ、故ニ鯨尺ヲ呼テ、呉服尺ト云フ、或ハ云フ、鯨尺ハ卽チ呉服尺ニシテ、後ニ分レテ二種ト爲リシナリト、右三種ノ外ニ、量地尺、裏尺、文尺等ノ數種アリ、要スルニ德川幕府ニテハ、量衡二器ノ爲ニハ、座ヲ置キテ之ヲ檢束シタレドモ、度ノ爲ニハ、別ニ其制ヲ設クルコトナカリキ、

此他寺院等ニ藏スル所ノ古尺アリ、其長短大小一ナラズ、事ハ本文ニ詳ナリ、

〔古語拾遺〕于時天照大神赫怒、入于天石窟、閉磐戸而幽居焉、○中略 高皇産靈神、會八十萬神於天八湍河原、議奉謝之方、爰思兼神、深思遠慮議曰、○中略 令手置帆負彦狹知二神、以天御量、大小斤雜器等之名也 伐大峽小峽之材、而造瑞殿、

〔皇國度制考上〕天御量とは、廣成宿禰の自註に、大小量雜器等之名也と云れし如く、謂ゆる度量權衡の大小雜器どもを言ふ、先師○本居宣長の紀伊殿に此書の義を聞え白されし時に、本に書入られし説も是に同じ、○註略 其和幣と奉る種々の物の長短輕重多少を調へむ爲の設けなり、其は、度量衡の異有れど、共に諸物を量る器なる故に、總て御量とは言へり、然れど其が中に尺度は主たる物なるに、其は度制まづ定まりて、量衡は是より出ればなり、況て此は宮造りの事を云ふ所なれば、本文の御量は尺度を主とせることと論ひなし、

〔古史傳十〕手置帆負命、彦狹知命、此二神の始めて御殿を造り給へる事より及ぼして、名義を考ふるに、まづ手置とは、手を布て物を度るを云ふ、其は曲尺を用ふるは、稍後の事にて、古は必手して度けむ故に、十握劒、八握須、七握脛などの都加、また八咫鏡の咫、みな手の度なり、○註略 帆負の帆は借字にて、尋負なり、尋は一尋二尋などの尋なり、此は一廣げ、二廣げと云ふ義なるべし、さてヒロをホと云

は、船の帆卽ヒロなり、又軍裝の保呂てふ物も帆と同言なるべし、かく見る時は、帆も借字には非ず、正字と云べきか、斯て尋は長ヶ一丈ならむ、者(ヒト)は、尋も一丈あるべく、五尺の人は、尋も五尺なり、これ大抵定れる度(ノリ)なり、然れば小き物は手にて度り、大なる物は尋にて度れりと見ゆれば、手置帆負命と、御名に負給へるなるべし、彥狹知命、彥は例の稱辭、狹知は、狹は借字にて度知(サシシリ)の義ならむか、サシシリのシシ、一音に約まるは常なり、其は尺度(サシ)もて、物を度り給へるよりの名なるべく所思(オボユ)ればなり、但し毛。能。佐。斯。を唯に佐。斯。とばかり言むは、如何にも思ふべけれど、毛能とは弘く諸物を指て言辭にて、佐斯とのみ云ぞ本語なりける、其はサシガチ、曲尺のサシは更なり、さし對ひ、さしふたぎ、又二人にて物する事を、さしにて爲と云などのさしも、此と彼と差通(ワタ)れるを云て、同意なるべし、さて掌(シリ)は、彼事を司(シ)る、此處を領る、また神ぞ知るらむ、などの斯留、みな同言にて、尺度を掌給へる故の御名なるべし、又若くは今の尺度と云も、其起原は、天津神の大御長より出たらむも、其を尺度と爲て用ふる事は、此神の始めて製り給ひけむも知べからず、猶よく考ふべし、其は尺度は、家作に無くて叶はざるは更にも云はず、萬の器械(モノ)を作るにも、必用ふべき物なるを、此二神さる方に功(イソシ)く坐ます故に、各も〳〵其事(ワザ)を御名に負給へるなりけり、

〔古今要覽稿器財〕古尺大小量

或人問ふて云はく、古語拾遺の本文に天御量とあるところの本註に、大小量とあるを大小の度なりといへるは、實にさも有べく聞ゆれど、さらばその大量小量といふは何なる度ぞ、大量は令の大尺、小量は令の小尺なるか、今世に傳はる尺度のしな〳〵あるが中に、いづれか皇國の眞度なる、くはしく其說をきかむ、答ふ、廣成宿禰の謂ゆる大小量は、すなはち令の大尺小尺にて、宮殿造營の度なれば、大量とは大尺をいひて度地にもちひ、小量とは小尺をいひて造營にもちふ、其尺度は今の世まで番匠の用ふる鐵尺(カネサシ)とも曲尺(マガリカネ)ともいふ、すなはち其度なり、抑この大小量は天つ神世に、天太玉命、かの大御神の新宮を造らせ給ひし以來、その子孫たる齋部首の家に傳はり、人世となりて、神武天皇の御世に御殿をつくり給ふに、太玉命の孫天富命こ

れを掌どり、其後ついに此家の職掌となり、神宮皇宮ともにつくり奉れるが、移りて木工長上に傳はり、（木工長上を、後には頭工とはいへり、）ひろく番匠に傳はれること、古語拾遺、延喜の神祇式、大殿祭詞、延暦の儀式帳、心御柱記、などを照し見て知らる、また此尺を用ふることたゞ造營のみにあらず、伊勢神宮に奉る御裝束、また御調度等も此尺を用ひしこと、寛正四年に荒木田氏經のしるせる日次記に、以往より定まれる鐵尺をもつて、御裝束を差たりと有にてしらる、けだし是は垂仁天皇の御世に、はじめて伊勢の神宮を造られし時よりの御制を易給はざる式なること、大同本記にその時の御杖代たりし倭姫命の左、左、右、右、違事奈久奉仕と宣へる御語にて知られたり、

〔出雲風土記 楯縫郡〕五十足天日栖宮之縱橫、御量千尋栲繩持、而百結結八十結結下、而此天御量持而所造天下大神之宮造奉、

〔日本書紀 二神代〕一書曰、○中略高皇產靈尊、○中略勅大己貴神曰、○中略汝應住天日隅宮者、今當供造、卽以千尋栲繩結爲百八十紐、其造宮之制者、柱則高太、板則廣厚、

〔倭名類聚抄 十四裁縫〕尺　魏武雜物疏云、象牙尺、辨色立成云、尺竹量也、（太加波可利）

〔倭訓栞 前編十〕さし。　度をいふは指渡るの義、物さしともいへり、

〔節用集大全 十毛〕尺（ものさし）圖

〔物類稱呼 四〕ものさし　武州河越にて、しやく共云、常陸にてしやくごと云、

〔倭訓栞 中編二十六毛〕ものさし　度をいふ、物をさしはかるなり、又長さしあり、長さ八尺あり、尺づゑは長さ七尺なり、

〔伊呂波字類抄 波員數〕度（知長短之度、度之所起、起於忽、從一蠶口出爲忽、十忽爲一絲、十絲爲一釐、十釐爲一毫、十毫爲一分、十分爲一寸、十寸爲一尺、十尺爲一丈、六尺爲一步、三百六十步爲一段、）

丈尺寸

〔古事記 中垂仁〕故大帶日子游斯呂和氣命者、〇景行治天下也、御身長一丈二寸、御脛長四尺一寸也、

〔日本書紀 七景行〕十二年十月、天皇初將討賊、次于柏峽大野、其野有石、長六尺、廣三尺、厚一尺五寸、十八年七月甲午、到筑紫後國御木、居於高田行宮、時有僵樹、長九百七十丈焉、

〔古事記 下反正〕水齒別命、〇中略御身之長九尺二寸半、御齒長一寸、廣二分、

〔東大寺獻物帳〕

牙笏一枚 長一尺三寸二分 本廣一寸九分

通天牙笏一枚 長一尺一寸八分 本廣一寸六分

大魚骨笏一枚 長一尺二寸一分 本廣一寸九分

〔馬具寸法記〕一馬の寸の事

一寸　二寸　三寸　四寸　五き　六き　七き　八寸　九寸　五尺二寸など丶云べきなり

〔塵添壒囊抄 三〕馬尺事

馬ヲ一寸二寸ト云ハ、何ト定ル事ゾ、凡ソ馬尺ト云ハ、四尺ヲ定テ、其上ヲ一寸、二寸、三寸、四寸、五寸、六寸、七寸、八寸ト云、八寸ニ餘ルヲバ、長ニ餘ルト云、長ニ餘ル大馬モ多キニヤ、生食ハ五尺二寸アリケル也、四尺ニ足ヌヲバ駒ト云、是曲尺ノ尺也、四尺ヲ一尺トスルニハ非ズ、四ノ音ヲ忌ム故ニ、都テ尺ト云也、

〔貞丈雜記 十三馬〕一馬のたけは、四尺を定尺とす、四尺に一寸あまるを一寸と云、二寸あまれば二寸と云、以下是に准じ知べし、四寸より七寸迄は、寸の字をすんといはず、よき(四寸)、いつき(五寸)、むき(六寸)、なゝき(七寸)といふ也、寸の字をきとよむ也、扨八寸九寸をば、八すん九寸と云也、九寸にあまるをば長に剩ると云也、三尺九寸あるをば、かへり一寸と云也、

〔空穗物語 吹上上〕ひきいで物は、じやうにさま〴〵のふちむまのたけやきばかり、〇中略少將にくろ

かげのむま、たけなゝきばかり、〇下略

〔宇治拾遺物語七〕今は昔小野宮殿〇藤原實頼の大饗に、〇中略引出物の馬を引立て有けるが、〇中略黒くり毛なる馬のたけ八き餘りばかりなる、ひらに見ゆるまで身ふとくこえたる、〇下略

〔詞花和歌集三秋〕駒迎をよめる　大藏卿匡房

あふさかの杉間の月のなかりせばいくきのこまといかでしらまし

〔康富記〕嘉吉二年十二月十三日庚子、是日室町殿孝經被遊、終清外史被下御馬黒鹿毛四寸八ナキ、御大刀、黒作金匱也、祝著被申之、

〔世事百談〕馬の丈四尺を定尺とし、それよりあまれば、一寸より三寸までをスンといひ、四寸より七寸までをば、寸といはず、キといひ、又八寸より九寸までを、又スンといへるよし今の馬乘人はいへど、そはいつ頃より定りたる詞にか、むかしは幾寸にても、なべてキとのみとなへたり、〇中略私云、馬は四尺を馬たけといふを、それに一寸まさりたるをば一きとし、八寸まさりたるをばやきといふなりと見えたり、幸若の舞の高館志田などの詞に、名馬のことをいひて、さんのへだちのしらあしげ、七き八ぶんあけ、六さいにひきよせ、ゆらりとのつたりけりといへり、この七き八ぶんは七寸八分なり、幾寸にてもキといへることの證とすべし、おもふに寸をキとよめることは、古事記傳に、寸を伎といふは刻むの意なり、萬葉集に、玉刻春と伎に刻の字を書けるも、その意にて、伎といふぞ、キダ、キザムなどの本語なるといへり、〇中略因に云、錢の壹文の半をきなかといへることは、算勘の詞に、壹文半を壹文五分といへり、そは五分は一寸の半なれば、きなかとはいふなり、寸半の約語なるべし、再びおもふに、たゞ半が五分なれば、きなかとのみいひては、くはしからず、錢の徑りは壹寸なること、開元錢よりの定めにて、吾邦も同じければ、もと尺度よりいでゝ、壹文の半を五分ともきなかともいへるとしるべし、

〔日本書紀 一神代〕一書曰、天神謂伊弉諾尊、伊弉冊尊曰、有豐葦原千五百秋瑞穗之地、宜汝往循之、迺賜天瓊戈、於是二神、立於天上浮橋、投戈求地、因畫滄海、而引擧之、卽戈鋒垂落之潮、結而爲島、名曰磤馭盧島、二神降居彼島、化作八尋(ヤヒロ)之殿、

〔古事記 中景行〕爾天皇亦頻詔、倭建命、言向和平東方十二道之荒夫琉神、及摩都樓波奴人等、而副吉備臣等之祖、名御鉏友耳建日子而遣之時、給比比羅木之八尋矛、

〔古事記傳 四〕尋(ヒロ)ハ兩手を伸たる長さを云、今人も然して一尋と定るなり、其は手を廣げて度る故に、一廣げ二廣げの意なるべし、

〔運歩色葉集 比〕一尋(ヒロ)布

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一布木綿ハ善惡によらず、大工金ニ四尺五寸を尋にして、七尋たるべし、太布ハ可爲六尋事、〇中略

慶長貳年三月廿四日

盛親在判
元親在判

〔和漢名數 數量〕度名　四尺爲尋

〔天明八年板 早算法〕一尋は、曲尺にて五尺、呉服尺にては四尺なり、

〔古事記 上〕於是天照大御神見畏、閉天石屋戸而刺許母理(此三字以音)坐也、爾高天原皆暗、葦原中國悉闇、因此而常夜往、於是萬神之聲者、狹蠅那須(此二字以音)皆滿、萬妖悉發、〇中略召天兒屋命、布刀玉命、(布刀二字以音、下效此、)〇中略天香山之五百津眞賢木矣、根許士爾許士而(自許下五字以音)〇中略於中枝取繫八尺鏡、(訓八尺云八阿多)

〔古事記傳 八〕八尺鏡　延佳が、尺當作咫と云るぞ宜き、こは決く寫誤れるものなり、

〔釋日本紀 七述義〕延喜公望私記云、于時戸部藤卿進曰、嘗聞或說八咫烏者、凡讀咫爲阿多者、手之義也、一手之廣四寸、兩手相加、正是八寸也、

制度

〔古事記神武中〕於是亦高木大神之命以覺白之、天神御子、○中略今自天遣八咫烏、故其八咫烏引道、

〔古事記上〕於是伊邪那岐命拔所御佩之十拳劒、斬其子迦具土神之頸、

〔日本紀纂疏上三〕十握者、以四指量劒柄、則得十握、言四十指之長也、握此訓曰束、

〔秦山集雜著甲乙錄三〕鄙翁春海○保井曰、○中略矢今猶用長量、用四指量之、曰十一束十二束及幾布世、

〔貞丈雜記弓矢十〕一矢づかの長サの事、○中略大雙紙に云、總じて我らが手にて、矢つか十二束本也、又人によりて十四束も、又十五束も有、但十三束とは平生いはざる也云々、一束は一にぎりにて、指を横に四ツ並べたる也、大ゆびは除く也、大ゆびは肉へまはる也、

〔源平盛衰記四十二〕屋島合戰附玉蟲立扇與一射扇事

與一、○中略十二束二ツ伏ノ鏑矢ヲ拔出シ、爪ヤリツヽ、滋藤ノ弓握太ナルニ打クハセ、能引暫固タリ、

○按ズルニ、十二束ノ束ハ、ツカヲ音讀シタルナルベク、二伏ハ二指ノ廣サヲ云フナルベシ、

〔令義解雜十〕凡度十分爲寸、謂度者、分寸尺丈引也、所以度長短也、分者、以北方秬黍中者一黍之廣爲分、秬者黑黍也、十寸爲尺、一尺二寸爲大尺一尺、十尺爲丈、

〔唐律疏議雜律二十六〕雜令、○中略度、以秬黍中者一黍之廣爲分、十分爲寸、十寸爲尺、一尺二寸爲大尺一尺、十尺爲丈、

〔令義解雜十〕凡度地量銀銅穀者、○中略皆用大、此外官私悉用小者、

〔好古小錄下〕大寶令ノ制ハ晉前尺ヲ用ルコト、大寶ノ内外印等ノ寸法ヲ以知ベシ、養老制令ヨリ、唐ノ大小尺ヲ用ユ、按和銅六年格ヨリ唐ノ大小尺ヲ用ヒ始メシナラム小尺ハ今ノ曲尺、大尺ハ俗ニ云呉服尺也、又俗云鯨尺ハ唐ノ御府尺也、按南都西京藥師寺ニ鐫ル所ノ佛足跡記云、佛足長一尺八寸、廣六寸ト、是小尺ヲ以度ル者也、シカルニ長一尺八寸、一尺六寸ニ作ルベシ、八寸ハ誤ナリ、巨指端ヨリ踵端ニ至テ一尺六寸、此ヲ中ニシテ八寸ニアタル所ヲ以度ルニ廣六寸、

〔本朝度量權衡考 度〕本朝令ノ大小尺ハ卽唐ノ大小尺ニテ、今ノ曲尺ハ其大尺ナリ、羽倉在滿ガ度制略考ニ本朝令ノ小尺ハ、唐ノ大尺ニシテ、今ノ曲尺ナリ、本朝令ノ大尺ハ、高麗ノ度地尺ニテ、今ノ吳服尺ナリト云ヘリ、此說ニ據レバ、本朝令ノ小尺ハ唐ノ大尺ニテ、唐小尺ヲハ用ヒザリシトシタレドモ、モシ唐大尺ヲ小尺トシタランニハ、義解ニ以北方秬黍中者廣爲分ト云フベカラズ、一黍ノ廣サヲ一分トスレハ此小尺ナリト、且和銅五年ニ寫シタル佛經ノ紙、唐小尺ノ度ニ合ヒタレバ、此事下ニ詳ニス本朝ノ小尺ハ卽唐小尺ナルコト明ラケシ、又高麗尺ハ田令集解ニ引キタル古記ニ出シ說ニ據リタルナレドモ、其本據慥ナラズ、高麗尺ト云フモノハ他書ニ見エザレバ證トナシ難シ、タトヒ高麗尺ト云フモノ有リトテモ、本朝令ハ唐令ニ因リタルニ、唐尺ヲ用ヒズシテ高麗尺ヲ用フベキ理アランヤ、羽倉氏ノ說誤ナリ、(中略)又藤貞幹ガ好古小錄ニハ、本朝令ノ小尺ハ卽唐ノ小尺ニテ今ノ曲尺ナリ、大尺ハ卽唐大尺ニテ今ノ吳服尺ナリト云ヘリ、本朝令ノ大小尺ヲ卽唐ノ大小尺トシタルハ當リタレドモ、唐小尺ヲ曲尺トシ、唐大尺ヲ吳服尺トシタルハ誤ナリ、累黍ノ說ハ非ナレドモ、其長サハ大ヨソ違フベカラズ、試ニ黍ヲ累子テ曲尺ノ唐小尺ニ非ルヲ覺ルベシ、サレドモ年久シク傳ヘタレバ今ノ曲尺ハ稍訛長セシモノナリ、

〔古今要覽 器財〕令大尺 度地尺

大寶令の大尺は令前常用にして、卽令の曲尺なり、その證はのちにいふべしその大尺といふ稱を設けられて、度地銀銅穀にのみ用ひられしは、文武天皇卽位のはじめ、壬申擾亂のゝちの弊風をあらためられんがために、律令を制せらるゝ時、常用の尺、全くかの唐の大尺とおなじかりし故に、彼の大尺といふ字をかり用ひられしならん、皇朝の令は李唐の令をうつされしかば、その令條多く唐律及び六典に合るにてしるべし、然れども全く李唐の制度によられしにもあらざることは、五尺一歩といふを用ひられて、二百四十歩を畝とすといふにはしたがはれずして、舊のごとく三百六十歩を段とせられしは、舊制三百六十歩の地をあらためらるゝこと便ならざりし故なるべし、大化の租稻、大寶の租稻と全くおなじきをみれば、令前の常用尺は令の大尺なる事疑ひなし、もししからずば、何ぞ度地にのみ大尺を用ひられんや、これその度地銀銅穀の類は、舊制にしたがはざれば制度のあたらしき際、姦民邪曲を濫妨にいたるがゆへに、大尺を用ひられて舊のごとくなされしとみえたり、

〔延喜式雜五十〕凡度量權衡者、官私悉用大、但測晷景、合湯藥、則用小者、其度以六尺爲步、以外如令、

〔好古小錄下〕古昔布帛及衣服ヲ度ルハ、大尺ヲ用ト云、按ニ續日本紀云、天平八年五月、諸國調布長二丈八尺、闊一尺九寸、法隆寺ニ天平勝寶八年ノ調布〇註略アリ、闊大尺ノ一尺九寸也、帛布ヲハカルニ大尺ヲ用ルノ明證トスベシ、又續敎訓抄ニ、襲裝束ノ裁縫ヲ載ス、其寸法大尺ヲ以、ハカル者也、是衣服ヲ度ルニ大尺ヲ用ル證トスベシ、然レバ大尺ニ吳服尺ノ名アルモ古キコトトミユ、

〔令義解雜十〕凡用度量權官司、謂大藏省及諸國司之類皆給樣、其樣皆銅爲之、

〔令義解關市九〕凡官私權衡度量、每年二月、詣大藏省平校、謂凡諸司及庶人、用權衡度量者、皆詣大藏省平校、然後用之、其諸國幷要用官者、司別給樣也、依律雖平而不經官司印者笞卌、卽知平校日、官司題印、但唐令云、虵印署然後聽用、此令除印署文、故不可署、唯依律可印、卽與量函不同、不在京者、詣所在國司平校、然後聽用、

〔唐六典太府寺二十〕太府寺、凡官私斗秤度尺、每年八月詣寺校印署、無或差繆、然後聽用之、

〔唐律疏議雜律二十六〕諸校斛斗秤度不平、杖七十、監校者不覺減一等、知情與同罪、

疏議曰、校斛斗秤度、依關市令、每年八月、詣太府寺平校、不在京者、詣所在州縣官校、並印署然後聽用、

諸私作斛斗秤度不平、而在市執用者笞五十、因有增減者、計所增減準盜論、卽用斛斗秤度出入官物而不平、令有增減者坐贓論、入已者以盜論、其在市用斛斗秤度、雖平而不經官司印者笞四十、

疏議曰、卽用斛斗秤度、出入官物、增減不平、計所增減、坐贓論、入已者以盜論、因其增減得物入已、以盜論、除免倍贓依上例、其在市用斛斗秤度、雖平謂校勘訖而不經官司印者笞四十、

〔類聚國史政理八十〕延曆十七年十月乙未、勅〇中略度量權衡、先有定製、平校行用、亦具令條、然所司怠慢、曾不遵行、大小任意、輕重由人、收納多濫、蠹害尤甚、自今以後、宜改此弊、升尺等類、就大藏省、依法平校、永

絕奸源、若違此制、□寘嚴科、

〔續日本紀 文武二〕大寶二年三月乙亥、始頒度量于天下諸國、

〔續日本紀 元明六〕和銅六年二月壬子、始制度量調庸義倉等類五條事、語具別格、

〔令集解 田十二〕雜令云、度地以五尺爲步、又和銅六年二月十九日格、其度地以六尺爲步者、未知令格之趣幷段積步改易之義、請具令釋、使无疑惑也、答幡云、令以五尺爲步者、是高麗法、用爲度地令便、而尺作長大、以二百五十步爲段者、亦是高麗術云之、卽以高麗五尺、准今尺大六尺相當、故格云、以六尺爲步者、則是令五尺內積步、改名六尺積步耳、其於地无所損益也、然則時人念令云五尺、格云六尺、卽依格文可加一尺者、此不然、准令云五尺者、此今大六尺、同覺爾耳、

〔令集解 田十二〕古記云、慶雲三年九月十日格云、准令田租一段、租稻二束二把、(以方五尺爲步、步之內得米一升、)一町租稻廿二束、令前租法、熟田百代租稻三束、(以方六尺爲步、步之內得米一升、)一町租稻一十五束、○中略令前方六尺、升漸差地實、○下略

〔政事要略 五十三〕勸田租束積事

右被右辨官宣偁、○中略檢舊說、令前租法、熟田五十代、租稻一束五把、以大方六尺爲步、步內得米一升、(此升大升也、)二百五十步爲五十代、慶雲三年格、准令以大方五尺爲步、步內得米一升、(此升稱大升、)三百六十步爲段者、○中略卽所得米其數亦同、然則段內得米三百六十升、實此大二百五十升也、○中略

弘仁十二年十一月五日　明法博士額田國造今足

〔續日本紀 元明六〕和銅六年四月戊申、頒下新格幷權衡度量於天下諸國、

〔續日本紀 元正八〕養老四年五月癸酉、頒尺樣于諸國、

〔好古日錄〕晉前尺

近家宿禰云、以曲尺六寸六分五厘弱爲周尺一尺、以周尺一尺二寸爲古尺一尺、是古來所傳之秘

竹量

說也、幹按、古尺ハ卽晉前尺也、余嘗古錢〈元狩五年鑄五銖錢、鍾官赤側錢、太貨六銖錢、常平五銖錢、布泉錢、五行大布錢、白錢、五銖錢、巳上眞正大樣者、〉ヲ以晉前尺ヲ起ス、一尺出尺ノ八寸許ナリ、國朝制、養老以前晉前尺ヲ用ユ、器用ノ寸法皆此ニヨル、此間ノ古印章モ間考ニ備フベキ者アリ、古法帖載ル所ノ秦璽亦一證トスベシ、近家宿儒ノ說、實ニ傳ル所アルコトヲ知ル、

〔倭名類聚抄〈十四裁縫〉〕尺　魏武雜物疏云、象牙尺、辨色立成云、尺竹。量。也、〈太。加。波。可。利。〉

〔倭訓栞〈前編十四〉〕たかばかり　裁縫尺にて、今いふ物さし也、

〔伊呂波字類抄〈太員數〉〕尺〈タカハカリ竹量也〉

〔俗說贅辨〈下〉〕たかばかりの說

俗間の書に、たかばかりとは、竹に作れる曲尺也とあり、

今按ずるに非也、たかばかりとは、人の長にて定る寸尺なり、是上古の法なり、神代卷に八尋殿とあり、これたかばかり也、內外宮內裏の間架を定むる、皆俗間の曲尺にて極めたるものにあらず、みなたかばかりより出たりとかや、延曆儀式帳などに、毎社皆曲尺を付たるは、たかばかりを匠尺に寫したる物なり、匠尺は聖德太子、異國の曲尺を用給ふよりおこりて、今に天王寺番匠の受傳ふる所なり、當世も民間の茅屋は、繩をひろどりて架をさだむ、是たかばかりの古法なり、弓にも人々のたかばかり有けれども、とり失ひて、今は七尺五寸といふめる、有職家には定て古傳有べし、唯矢ばかり、長ばかりを傳て、十二束三ぶせなど丶いふ、是故實のことばなり、

〔四季草〈春〉〕おのがたかばかりの事

おのがたかばかりとは、我手の寸にて、物の長短をはかる事也、おのとは、おのれ也、たかばかりは、和名抄に、尺の字を太加波可利と訓を付たり、太加はたけなり、〈カとケと音通す〉はかりは寸尺をとる也、物さしの事也、されはおのがたかばかりといふは、おのれが身の物さしといふ事にて、我手にて

物の寸尺をとる事と心得べし、弓矢鞭行縢等は、皆おのがたかばかりにて寸尺を定る也、手にて寸の取様あり、○中略人々の手の大小によりて、長短同じからず、其人々の身の大小相應の寸尺になるなり、

〔園太暦記録部類所引〕延慶四年○應長元年二月二十五日丁卯、御三夜儀、○中略兒御衣調進事、

絹寸法者用竹量

〔大內家壁書〕麻布寸尺之事

御分國中所納年貢之麻布寸尺之事、古式に任、よろしく貳丈八尺を以壹端とす、臺斗用也を亦うり布之事は、貳丈五尺、或は貳丈六尺、各臺斗、即和銅七年符也、壹端たるべし者、早右之定法之旨を守、豐前國中之甲乙人等にふれしむべきよし所被仰出也、仍執達如件、

寛正三年十月廿五日

〔續日本紀六元明〕和銅七年二月庚寅、制以商布二丈六尺為段、

○按ズルニ、大內家壁書ハ、段ト端トヲ混ジタリ、但シ此時ノ端ハ、往時ノ段ナルガ故ニテモアルベシ、

〔氏經卿日次記〕一行事官等言上

去年內宮御遷宮神寶御裝束金物等相違之由、禰宜等注進無謂間事

一御裝束寸尺の事、背先例大たかばかりをもて、御裝束を禰宜等の中へ取、如所存さしとるなり、先例為官方古來手尺をもて相共にさし渡、是を請取處、今度非先規といへども、其用意心得餘分いたす間、如申無相違渡者也、○中略

寛正四年四月日

〔氏經卿日次記〕就先度注進行事官等陳狀條々掠申間事

曲尺
曲金

一御裝束寸尺の事、禰宜等が中にとり、大たかばかりをもて、如所存さしとるよし申、以外のそらごとなり、以往より定まれる鐵尺をもて、辨代と一禰宜が前において、お丶い筵をしき、その上に御唐櫃の蓋をおき、其上にて神宮の奉行幷物忌等さしまゐらせ、行事官等相共に拜見仕、如先規さたをいたす處に、如此申條以外の不當なり、尊神の照覽をば申さる也、○中略

寛正四年五月日

○按ズルニ、大たかばかりトハ、鷹斗ニ對ヘテ云ヘルニテ、一尺二寸五分ノ度、卽チ鯨尺ヲ云フナルベシ、

〔下學集下器財〕鷹秤(タカハカリ)鷹猛惡之鳥也、生子在巣、其子生長、則有食親之義、父長之、居去自巣一尺枝而養子、故呼一尺量鷹秤云傳也、

〔後奈良院御撰何曾〕けふのかり場は犬もなし　たかばかり(○鷹○尺)

〔鷹三百首和歌冬〕男山はとやかひたるたかばかりかけをくれてや落に行らん

〔倭訓栞前編十四〕たかばかり　鷹の巣をかくるに、一尺二寸上に枝を置て、其枝に居て餌をとす、さなければ母鳥に噬著故也、よて一尺二寸を鷹秤(ハカリ)ともいふともいへり、

〔古今要覽器財〕甲冑用鷹ざし

南都に、甲冑用鷹ざしといふあり、御尺司林氏製する所なり、その長曲尺一尺一寸五分にあたる、延喜式の造位記尺に比すれば五分短し、その尺に添たる說あり、云、鷹は勇猛の鳥にして、子を生し巣にありて、子に食をあたふるに、巣より一尺枝をさがり、子をやしなふゆゑに、是を呼て鷹度(タカバカリ)といふ、武勇をいはふ吉例によりて、往古より甲冑に此尺を用ふる事なりとあり、

〔倭名類聚抄十五工匠〕曲尺　辨色立成云、曲尺、(麻加利加禰)

〔倭訓栞中編二十四〕まがりかね　倭名抄に曲尺をよめり、矩なり、今さしがねと云、

〔書言字考節用集七器財〕矩(マガリカネ)規矩爲圓之法、又云勾尺、匠家所用、乃李唐尺也、矩爲方之器、曲尺同

〔塵添壒囊抄三〕馬尺事
ウルハシクハ曲尺ヲバ、マガリガチト云ベキヲ、略語ニカチド云也、
〔倭訓栞中編二十四〕まがり　曲尺をもいへり、かねを略したるなり、
〔新猿樂記〕八御許ノ夫、飛驒國人也、位大夫大工、名檜前杉光、○中略指者墨笠臂者曲尺、
〔稱德篇〕一總じて政道に法と云物あり、法とは大工の曲尺の如し、譬へば此疊を長六尺横三尺と定めたるが如し、然れば京さしを筑紫の果、奧州にて敷ても間に合ぞ、是を曲尺の手を定めたる法と云ぞ、
〔數學類聚上〕曲尺　圖略ス　曲尺一尺ハ、クジラ尺ニテハ、八寸に當る也、古への吳服尺にては、八寸三分三厘三毫三糸不盡ニ當る、
今番匠が家を造るに用るは此尺也、形ちは一別にこしらへて持つ也、横に曲げたる所有り、此曲る所は、四角の矩に合せて拵らへたるもの也、

サシカ子

〔增字番匠往來〕曲尺
〔倭訓栞前編十〕さしがね　矩なり、もと四方の板に刻をつけたる物にて、略して今の曲尺となるよし、まがりがねと訓ず、

カ子サシ

〔算法地方大成五〕測器用法
一甲所より目的迄の遠さを量るには、○中略目的の點より甲所の點まで、曲尺にて長を量り、○中略
但縮圖を書き、長さを量るには曲尺を用ふ、此餘准じて知るべし、

大工金

〔御當家令條二十九〕定
一絹紬之事、壹端ニ付、長大工金にて三丈二尺、幅壹尺四寸、
一布木綿之事、壹端ニ付、長大工がねにて、三丈四尺、幅壹尺三寸、
右織物之寸尺、如此御定之上ハ、長幅不足之絹布賣候に於ては、來年四月朔日より、見合候もの可

取之者也、

寛永三年寅十二月七日

〔御當家令條二十九〕定

一絹紬之儀、壹端ニ付、大工がねにて、長三丈二尺、幅壹尺四寸たるべき事、

一布木綿之儀、壹端ニ付、大工がねにて、長三丈四尺、幅壹尺三寸たるべき事、

右之通從此以前被相定之處、近年猥有之間、向後書面之寸尺より、不足に織出す輩あらば曲事たるべし、來巳年秋中より改之、不足之分見出次第可取之間、於諸國在々所々可存其趣者也、

寛文四年辰七月十三日

〔尤之草子下〕まがれる物のしなじな

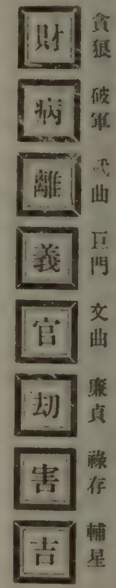
大工のかね也

〔居家必用七〕開門尺法、古言、事去人家造百墳、墓去人家造一門、門最利害、一家禍福、率由之、周尺分節、一財、二病、三離、四義、五官、六刧、七害、八吉、財與吉爲上、官義次之、餘無取、財吉公私内外通用、官可用之官房中戸、出文章貴子、庶人用之、起官事凶、義可用之中房、出人孝順、若在外門、主兩姓同居、非人家内外大小門戸、以財吉義三者兼用之、主世代昌隆、特義不可用之外門耳、

淮南子曰、魯般尺法、

造作置自魯般、即公輸、般楚人也、乃天下之巧士、士能作雲梯之械、其尺也、以官尺一尺二寸爲准、均分八寸、其文曰財、曰病、曰離、曰義、曰官、曰刧、曰害、曰吉、乃北斗中七星與輔星主之、用尺之法、從財字量起、雖一丈十丈皆不論、但於丈尺之内、量取吉寸用之、遇吉星則吉、遇凶星則凶、亘古及今、公私造作、大小方直皆本乎是、作門尤宜仔細、

造尺樣範



〔書言字考節用集器財七〕矩(カネ)曲尺也

〔源平盛衰記三十五〕高綱渡宇治河事

高綱ハ窮竟ノ逸物ニ乘タレバ宇治河ハヤシトイヘ共、淵瀨ヲ不云、サヾメカシテカ子ニ渡シ、向ノ岸近ク成テ、高綱ガ馬綱ニ懸テ、足ヲサト歩除クレバ、大刀ヲ拔、大綱小綱三筋サト切流、向ヒノ岸ヘ打上、〇中略武藏國住人男衾畠山庄司重能ガ子息重忠ハ、〇中略渡セ殿原々々、〇中略馬ニモ人ニモ力ヲ副ヘヨ、金(カ子)ニ渡シテ误スナ、

〔後押小路內府抄〕棟步事

當家棟樣、〇中略張肱拔笏云々、此事張肱者、肱ヲ肩ノトホリニカ子ニ持、

〔寬文板新編塵刧記〕町つもりの事

むかひに人のたちてゐる所迄、とをさ何程と云、三町廿八間二尺一寸七分有といふ、法に三寸有かね(かね)に、長二尺一寸七分ある糸をつけて、口に糸をくはへて、むかひの人のたけを見る時に、かねにて八厘にみゆる時、是に三をかくれば、二分四厘と成、

〔人倫訓蒙圖彙四〕御錦屋　大和錦とて由緖あるとかや、金(カネ)一尺代貳匁五分、東洞院二條下ル町一井五良左衞門、

〔嬉遊笑覽二上服飾〕大幣と云三絃の書、とり組の歌に、京では一條やなぎやがむすめ、よつわり帶をたすきにかけて、此歌は文祿慶長ごろの歌なり帶地のはゞ、凡金(カネ)幅二尺五寸を四ツ割として見れば、巾三寸許の帶也、

鐵尺

〔律原發揮〕本邦曲尺者、比舊尺長一分六厘、（以舊尺言之）以鐵制、故又名鐵尺、

〔延喜式（內記十二）〕凡造位記料、（○中略）鐵尺一隻、（長一尺二寸）

〔續日本紀（聖武十二）〕天平七年四月辛亥、入唐留學生從八位下下道朝臣眞備、獻唐禮一百三十卷、（○中略）測影鐵尺一枚、（○下略）

〔唐六典（三戸部）〕凡積秬黍爲度量權衡者、調鐘律、測晷景、合湯藥、及冠冕之制則用之、內外官司悉用大者、

〔厨事類記〕□□寺殿被注下、御產御前物記云、

□□□六脚一面（弘力一尺一寸、鐵尺定、）

〔古老口實傳〕一年中行事

九月十五日、（○中略）御調布各一段、正禰宜勤仕之、（長六丈、鐵尺定、）

〔園太曆（記錄部類所引）〕延慶四年（○應長元年）二月二十五日丁卯、今日御三夜儀、（○中略）兒御衣調進事、

寸法事（木作分用鐵尺）

〔園太曆〕康永三年二月廿一日、今日予（○藤原公賢）上左大臣表狀也、（○中略）件表乍持左手、以右手開函蓋入表狀、覆蓋裹函、其儀不切高檀紙四枚取之、二枚ヅヽソバヘ引チガヘテ、其上置函、（○中略）件紙弘サ六分、長サ二尺六寸五分帖之、高檀紙ヲ切テ、中央ヲ績テ、其上一結シタル物也、長サ寸法ハ結テノ後ノ寸法也、皆是鐵尺之定也、

貞和二年閏九月五日、予百首淸書、今日終功了、高檀紙十二枚、其長一尺二寸、（鐵尺定）切々縮々書之也、

〔安東郡專當沙汰文〕一在地御倉付之時御糇納之升勢寸法事

弘六寸、深二寸五步也、鐵尺ノ定、（中ノ寸法也）

〔氏經卿日次記〕就先度注進行事官等陳狀條々掠申間事

一御裝束寸尺の事、〇中略以往より定まれる鐵尺をもて、辨代と一禰宜が前に於て、〇中略神宮の奉行幷物忌等さしまゐらせ、〇中略

寬正四年五月日

〔書言字考節用集 器財七〕呉服尺（ゴフクジヤク）今按、相當曲尺一尺二寸、

〔律原發揮〕呉服尺者、以曲尺一尺二寸（鯨尺ノ一尺二寸二分弱）爲一尺、量裁衣服用此尺、故名、

〔滋草拾露 九 冠井烏帽子〕一挾（ハサカメ）形ノ仕立（ゴフクザシニテ）

長サ壹尺　幅五分

〔寬永板 塵𠛬記 一〕きぬもんめんうりかいの事

きぬもんめんの丈尺寸といふは、大くのかねに一尺二寸を、ごふく一尺といふ也、

〔天明八年板 早算法〕壹尋は、曲尺にて五尺、呉服尺にては四尺なり、譬曲尺にて三尺六寸有、呉服尺にては何程と問、三尺六寸に定法の八を掛れば、二尺八寸八分と知る、法の發は、呉服壹尺を、曲尺一尺二寸五分にて割たるなり、

〇按ズルニ、此ニ云ヘル呉服尺ハ、曲尺一尺二寸五分ノ度ナリ、

〔律尺考驗〕尙衣局裁尺　尙衣局トハ、天子ノ御衣ヲツカサドル官府ナリ、此尺ハ本朝禁裏ノ御衣ヲ調進スル高倉家ノ呉服尺也、其長大尺ノ一尺二寸五分ニアタレリ、今俗間ノ呉服尺ハ、只匠尺ノ一尺二寸ヲ用フ、勢州ノ俗、ナホ古法ヲ失ハズシテ、十二寸半ヲ用ヒ、海鰌ノ鰓骨ヲ以テ作ル、コレヲ俗ニ鯨尺ト云、世ニ海鰌ヲ鯨ト呼ガ故也、

〔尺準考〕本朝裁尺（本名呉服尺、名鯨尺、〇中略）今之朝紳高倉藤公、自古傳呉服尺以至今、調進主上御衣者卽此尺也、以其用海鰌骨造故又名鯨尺、俗間弇陋、以其尺八寸恰當大尺之一尺、而猶餘二寸、不知其二寸之比大尺二寸五分、故遂誤作一尺

鯨尺

二寸之度、傳來既久、故後之作令集解者妄名以爲高麗尺、而京商織齋、名一尺二寸五分之度曰鯨尺、名一尺二寸者曰呉服尺、〇中略今則除京商外、天下皆用一尺二寸五分者、而奸商之術、需故衣敝裳者、往々猶用一尺二寸者、以欺貪婪愚庸之人、可歎也、俗間呼是尺曰加治介尺、加治介、俗語凍縮之義、言寒凍而身縮也、取以擬大寶大尺、極爲絶倒、

〔皇國度制考上〕今の小尺は、廣成宿禰の謂ゆる小量にて、今の曲尺なる事を知り、已に其本度を知ときは、令の謂ゆる大尺は、其小尺に二寸を加へたるなれば、其度は乃小尺の百二十分を百分に刻める尺なりと云ことを、隨ひて思ひ定めらる、斯て本文〇雜令に度地用大と有れど、地を度るにのみ用ひしには非ず、絹布の類も亦この尺を用ひたり、是を以て今も曲尺の一尺二寸なる尺を呉服尺と云ひ、また量地尺とも云傳へたり、

〔書言字考節用集七器財〕魚鬣尺（ジラザシ、當曲尺一尺二寸五分者、）

〔古今要覽器財〕釋名

くぢらさし（この尺、鯨鯢の鬚を以て造るがゆへなり、しかれども今は竹木を以てつくるもの多くなれり、）

〔律原發揮〕鯨尺者以曲尺一尺二寸五分（曹尺一尺二寸七分）爲一尺、以鯨魚鬣製之、故名、

〔古今要覽器財〕鯨尺

くぢら尺のはじめ定かならず、永承の鐵尺などをや始とすべき、又高倉家所傳の裁縫尺も、この鐵尺とおなじ、又按に和名類聚抄に、竹量といふものみえたれど、寸分をしるさず、その裁縫具にのせたるをみれば、くぢら尺の事にやあらん、

〔乳母草紙〕御ぞたちぬふ事、いやしきわざにてあらず、天照大神の御父母、いざなぎいざなみのみことよりはじまり、ゑやういろあひなどの事は、もんとくてんわうのきさきよりはじまり、住吉へ御參りの時、かのものたちのにつきをたてまつり給ふ、今のすみよしたちこれなり、それより

くじらくはのものさしに、やなぎのかきいたを御もちひ候、

〔本朝度量權衡考度〕乳母冊子ニクヂラ、クハノモノサシトアルハ、鯨魚鬚又ハ桑木ニテ作リタル尺ト云フコトニテ、曲尺一尺二寸五分ノ鯨尺ニハアラズ、

〔雅筵醉狂集春〕藤花

咲花のはなのしなひをさしみればしかも鯨の三尺あまり

伊勢物語に、あやしき藤有けり、花のしなひ三尺六寸ばかりなん有ける、鯨は金さしより長し、

〔風流曲三味線四〕帶とかぬ枕物語

禿の市彌、大臣の御乘物の見える程は立止りて、お土產に、鯨尺を買ふて來て下さんせといへば、雲八可笑く、鯨尺を土產に貰ふて何にするど問へば、大夫さまに延びさんした客さん達の鼻毛を度すと、是を大笑ひにして、機嫌能く廓へ歸りぬ、

〔獨語〕婦女の帶は、金襴を美麗の限とし、黑地に梅櫻松を所々に織つけて、是を鉢の木の帶となづけて珍重しけり、廣さ僅に鯨尺の二寸ばかり、紙を心として、綿などいるゝことなし、四月より八月迄、婦女の禮服に綿にて、廣さ鯨尺の八分ばかり成るを、後を結てたるゝを、つけ帶といふ、○中略男子も女子も十四五歲までは、長き袖を著るに、昔は鯨尺の一尺七八寸を極とせしに、貞享の比より二尺計になり、それより漸くます〳〵長くなりて、ちかき比は二尺四五寸になりぬと見ゆ、婦女の帶も、貞享元祿の比より、やうやく廣くなりて、今は鯨尺にて八九寸におよべり、綿を心として襷の如し、男の肩衣といふ物、昔は麻の幅、鯨尺の八寸ばかりなりしに、貞享元祿の比より、幅一尺におよべり、

享保尺

〔地方新書〕或書に、○中略享保尺はともに、曲尺より四厘を強くす、訛長なるべけれど、是亦一種の度

なり、

〔法規分類大全一度量政體〕尺度種類廢置ノ議

享保尺

古ノ小尺ニシテ、今ノ所謂曲尺ナリ、然シテ今ノ所謂曲尺ハ、中世以降、器法訛替シ、長短一ナラズ、於是乎舊幕府德川吉宗、博ク之ヲ書籍ニ尋チ、古今尺度ノ由來ヲ考フ、爰ニ古尺アリ、紀伊國熊野神庫ニ藏ス、乃チ出シテ之ヲ摸造シ、以テ原尺ト定ム、實ニ是享保年中ナリ、此尺爾後紅葉山寶庫ニ於テ火災ニ罹リ、今ハ則チ亡シ、先是書籍奉行近藤正齋、嘗テ之ヲ摸造シ、內田五觀ニ與フト云フ、五觀之ヲ藏スル久シク、今現ニ存セリ、此尺ヤ古ノ小尺タルコト明カニシテ、今ノ所謂曲尺ノ原ナリ、此度法、享保年中始テ世ニ明ラカナルガ故ニ、爾後此度ヲ享保尺ト稱ス、然シテ其坊間散布ノモノニ至テハ、其稱均シク享保尺ト雖ドモ、長短差等ナキ能ハズ、今其由來傳說、最モ正シキモノニ就キ、內田五觀所藏ノ尺ヲ以テ、此度ノ正器トス、

又四郎尺

中古尺工又四郞ナルモノアリ、多ク木匠矩尺ヲ造ルトイフ、近世又四郞尺ト稱スル者、其度法ハ蓋シ此ヨリ出ルナリ、然シテ木匠矩尺ハ、所謂曲尺トイヘドモ、コレヲ享保尺正器ニ比スレバ一尺四厘ナリ、享保尺正器ハ、コレマタ所謂曲尺ニシテ、其長短一ナラザルハ、蓋シ中世以降、尺度器法、或ハ伸長シ、或ハ縮小シテ、遂ニ其種類稱呼ヲ異ニスルニ至ルナリ、然シテ此尺ノ如キハ、其器法縮小ニ失スルモノナリ、然リト雖ドモ、此尺近世異ノ曲尺ト並ビ行ハルヽガ故ニ、乃チコレヲ一種ノ器法トシ、今ソノ比較ノ如ク、享保尺正器一千〇〇四分ノ一千ヲ以テ此度ノ正器トス、

折衷尺

往昔寛政享和ノ際、測量家伊能勘解由、享保尺ト、又四郎尺トヲ、長短折衷シテ此度ヲ造リ、以テ度地ニ用フト云フ、蓋シ中世以降、尺度器法、漸々訛舛シ、種類紛雜、濫製百出スルニ至ルニ及テ、眞僞辨ジガタク、正否分クルニ由ナシ、於是乎長短折衷以テ一時ノ便ニ供ス、亦是不得止ニ出ルノ度ナリ、然シテ此尺、長ト短トノ間ニアルガ故ニ、近世尺度器法ノ伸縮スルモノ、坊間散布ノ器ノ如キハ、之ト相密合スルモノ居多ナリ、斗量ノ如キハ、其製作、從來容量ヲ以テ準トスルガ故ニ、所用尺度ハ、頗ル杜撰ニ屬スルト雖ドモ、今之ヲ檢査スルニ、從來斗量ノ容量ハ、此尺ヲ以テ造ル幾ンド密トス、今其長短折衷ノ算ニヨリ、又四郎尺正器一尺二厘ヲ以テ、此度ノ正器トス、

念佛尺

〔本朝度量權衡考度〕今ノ曲尺ハ、唐大尺ノ三分訛長セシモノト知ルベシ、今ノ曲尺ニ、工匠ノ用フル、鐵尺ト竹尺トノ二ツアリ、竹尺ハ京ノ六條ニテ作ル、念佛尺ト云フテ精好ナリトテ賞シ、他國ニテモ是チ事シ造レドモ、工匠ノ鐵尺ニ比レバ七厘許長シ、

〔法規分類大全政體一篇〕尺度種類廢置ノ議

念佛尺

嘗テ近江國伊吹山ヨリ、念佛塔婆ヲ堀出セシコトアリ、其塔婆尺度ヲ刻ス、乃チ之ヲ摸シ、以テ念佛尺ト名ク、此度法、享保尺ニ密合スト云フ、

〔地方新書〕或書に、量地尺。念佛尺。享保尺は、ともに曲尺より四厘を強くす、訛長なるべければ、是亦一種の度なり、

量地尺

〔法規分類大全政體一篇〕尺度種類廢置ノ議

量地尺

古ヘ令ノ大尺ヲ或ハ量地尺ト稱ス、大寶令、度地大尺ヲ用フルガ故ナリ、今曲尺一尺四厘ノ度ヲ量地尺トナスハ誤ナリ、

尺杖

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一尺杖之事、城普請其外何によらず、本間六尺五寸間たるべき事、附田地者可為各別事、○中略

慶長貳年三月廿四日　盛親在判
元親在判

間竿

〔田園地方紀原〕町段畝歩の考附間竿尺寸の考

勢州須瀨村渡邊六兵衞の家に所傳の太閤の檢地條目を書寫して贈らる、○中略

就伊勢國御檢地相定條々

一田畑屋敷、六尺三寸棹を以て、五間ニ六十間、三百歩を一反に可致檢地事、○中略

文祿三年六月十七日　御朱印○中略

仁右衞門の筆記せる古き書きものゝ内に、

太閤樣御檢地

文祿三年きのへ午年、一柳左近殿御打被成候、仁右衞門地方に御宿を仕、大繩に請申候、

古來檢地六尺坪にて

一長六拾間 横六間　此歩三百六十坪壹反なり

其後檢地六尺五寸坪にて檢地あり

太閤樣御檢地六尺三寸坪なり

一長六拾間 横五間　此歩三百坪壹反なり

是六尺坪は、三百三拾歩七分五厘に成、然ば元壹反にて、廿九步貳分五厘ヅヽ出也、

〔地方落穗集七〕檢地致方の事

一間竿は、長一丈二尺二分也、末三尺の内へ目をもり、外は一間ごとに、切廻しをして墨を入る也、

但二分は土入也、竪竿横竿兩人也、竿取一人ニ、百姓一人宛付ヶ、數の合よみをさするなり、

〔善庵隨筆〕二西土の人は、瑣細の事迄も、何くれとなく記載し、餘す所なき樣なれど、文に過ぎて、反りて實を失ふ弊あり、邦俗は文足らずして、傳ふべきをも傳へざる弊ありといへども、朴實舊を守るより、反りて古を存し、考證の資けとなることあるなり、今一事を擧げていはゞ、吾邦古へ唐制に倣ひ、尺に大小の二樣あり、大尺の一步は五尺、小尺の一步は六尺、これ五尺六尺と、名を異にする迄にて、大尺の五尺は、小尺の六尺、小尺の六尺は、大尺の五尺にて、度の長短に變りはなし、たゞ地を度る尺杖は、大尺の五尺を用ふることにして、雜令に、凡度ㇾ地五尺を爲ㇾ步とありて、定制の樣に思はるゝなれど、時に臨みて小尺を用ふることもあるにや、令集解に、和銅六年二月十九日の格を引きて、其度ㇾ地以六尺ㇾ爲ㇾ步とも見えたれば、當時大小の二樣、とり交せ通用する事なりし、御家にては、紛はしき故を以てにや、慶長年中より、概して小尺の六尺を用ふる制度と爲し給ふめれど、昔より大尺の五尺を以て檢地せし所は、別に檢地帳を書き改むることと無きも、其儘にて差し置かれ、若し新に檢地するときは、必ず御定法通り、六。尺。一。步。の。間。竿。を用ふるにぞ有りける、然るを地方懸りの有司、文字無きゆゑ一步を一分と心得違ひし、間竿に一分の有餘を加へ、一間六尺一分とし、二間竿にして、一丈二尺二分を用ひしより、遂には御規定の樣に心得、今日に至りては、六尺一分、天下の制度となりたり、廣大なる地面の上にて、何の損益ありて、一分を加へ給ふの理あらんや、六尺一步なればこそ、今に檢地帳奧書に、六尺壹步之間竿を以て、壹反三百步の積御檢地相極と書き來ることなるを、或人の六尺一分と書きて、指し出だしゝことの有りしに、該府にて、壹步と書く仕來の法に相違するとて、步の字に書き直し被申付之由、故に縣令も其跟官も、何の故とも知らず、只此步の字のみに限り、分の字に書くまじきことゝの樣に心得、堅く先規を守ることにぞ有りける、若し容易に分の字に書き

改めなば、今日に在りて、誰か六尺一歩の歩なることを知るべけんや、

〔日本永代藏三〕煎じやう常とはかはる問藥

大工、○中略袖口のきれたる羽織のうへに帶して、間棹杖に突も有、

弓杖

〔古今要覽稿器財〕弓杖。

小笠原持長射禮私記云、數づかのたかさ一尺二寸、(定金の)前と後との間、弓杖(はづし弓のさだめ)一杖にうちて、のちの數づかを一尺五寸、的の方へよするなり、

〔秦山集雜著甲乙錄三〕口訣曰、弓長七尺五寸、曳則一丈五尺、三五之數也、神代矢長五尺、弓之三分一以爲矩、都翁○保井春海曰、此說非也、弓曰弓杖、是長量也、以鈔尺定之、豈故實哉、弓長人々不同、皆用長量也、矢今猶用長量、用四指量之、曰十一束、十二束及幾布世、可見、

〔貞丈雜記十弓矢〕一弓の長サ七尺五寸と云事、京極大雙紙に云、弓は我々が手にて七尺五寸也と云、大ゆびと、人さし指をのべて、其長サを五寸と定て尺をとる也、(中略)これをおのがたかばかりと云也、

つよくゆびをひらかず、又かゞめず、ゆるやかに指をひらく也、

大指、人さしゆびをのばして、大ゆびのかしらより、人さし指の頭迄を五寸と極る也、

一寸と云は、人指ゆびをかゞめて、中のふし間をあて、、一寸と定るなり、

尺サシ

〔貞丈雜記十三馬〕一馬のたけをさす物を尺さし。と云也、尺杖とはいはぬ也、弓握記一名弓馬秘抄に見たり、(尺さしは馬の肩の通りに立て、ゆみの鞍の所に横に木をあてゝ、寸をさすなり)

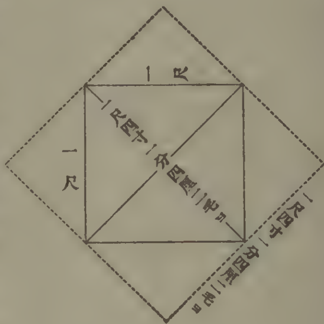
裏尺

〔律原發揮〕曲尺有稱裏尺者、卽以方一尺斜弦、强爲一尺、當表尺一尺四寸一分四釐二毫有奇、算法一尺、自乘得一百寸、倍之平方開之而得之、嘉量腹徑合此數、圓內容方、以其斜弦、直爲圓徑也、

〔倭訓栞前編十〕さしがね　矩なり、○中略うらのめは、算法の勾股弦をうつしたる也、是をうらがね。といふ、大かねと稱する者は、木をもて造れり、勾股弦の矩なり、

〔增字番匠往來〕曲尺裏目之事

曲尺は裏目一尺の處にて、表目壹尺四寸壹分四厘貳毛餘あり、是を一四一四二の法といふ、其出所左の如し、



右圖の如く、一尺四方の隅より隅に尺を當る時は、一尺四寸一分四厘二毛、餘あり、是を曲尺の裏目とす、裏目の遣ひ方は甚ひろし、番匠家各辨へ居べき事故、爰に略す、

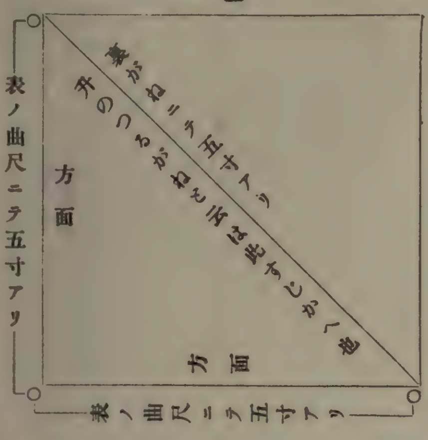
〔數學類聚上〕匠工のまがりがねの裏に、一種の物さしあり、是を匠工の言葉にうらがねと呼ぶ也、其おこる所を知らず、筭法にも非ず、前の七代の種にも合せず、甚不審也、表に彫付たる曲尺に比すれば、一尺四寸餘有るを十寸とし、寸毎に十分に彫割たり、此十寸を一尺としたり、其寸毎に一字づゝ彫付く、一尺に十字有り、神佛家の文にも非ず、何歟もの〳〵しく見へたり、故に予匠に問へば、匠答て唐尺なりと云ひし也、其起る所を問へば知らずと答ふ、其後また一人の匠に問へば、是も又唐尺也と答ふ、又其興る所を問へば是もまた知らず、其後匠毎に問へども知らざる也、其用法を問へば、秘密なりとて云はず、おもての曲尺一尺四寸餘にくらべて、裏は一尺にしたるを

以て按ずるに、是は算法にて、常に用る斜徑と云ものなるべし、一尺四寸一分四厘二毛の數也、俗に升の弦がねと云て、四方一尺ヅヽに四角なるときは、其角より角へ斜にわたる尺は、一尺四寸一分四厘二毛有る也、是を算法にて、斜徑一四一四二の定法と云ふ也、此長さを彼裏がねにて十寸にして、寸毎に十分に彫りて、一尺に用ひたるなり、扨また其遣ひかたを秘して云はざれども、按ずるに裏がね一尺にて、すじかへに有る所は、方面の寸は、表の曲尺にて一尺有る也、うらがねにてすじかへに九寸九分有る所は、表の曲尺にて九寸九分方面有る也、椽類など、二方へ廻りて有る所のすみのすじかへ、或は屋根の方形の角に登り梁など云もの、皆此かたちを持て、うらがねの法を帶びたり、其外方面へ鐵矩尺を以て、寸尺を見んとしても、物の障りて得叶はざる時には、其所のすじかへの所を、彼うらがねにて寸を定めて、方面の寸尺を知る也、

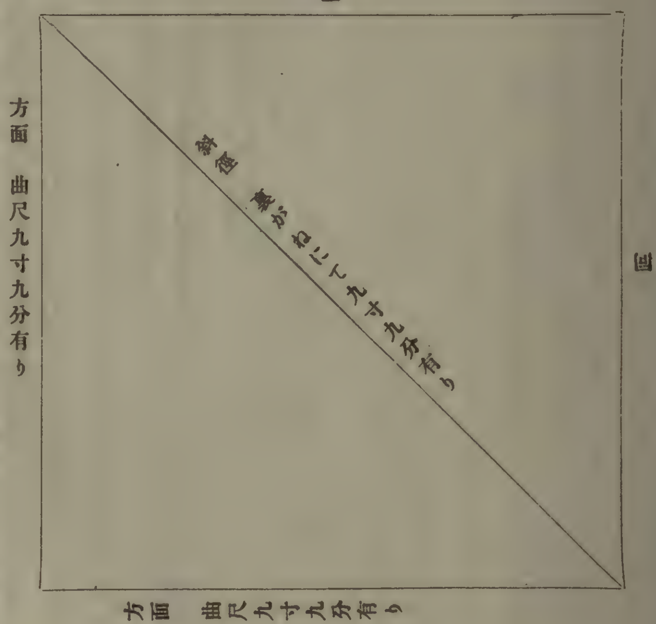
圖

斜徑の圖

マスノツルガネ　圖



前ニ同　圖



是は算法にて、鉤股弦と云章術ありて、夫より出して斜徑の定法を一四一四二と定め置て、初學の者を道引きて、習ひ學ぶにこゝろ安くせん爲也、匠工は算法は知らざるもの故、右の圖の形ちある事を伐り刻み作るとき、彼うら表の尺にて業をなすなり、曲尺に當るに、四寸餘長きは、異國の尺には一色もなし、又或人、此尺は本朝一種の物さしと云ふ、是も大なる誤也、全く匠工等が、己

文尺

が業のなしよき爲に、我儘に作たる寸尺也、正しき證據有る物さしにては決してなし、加樣のものさしを作るならば、此外に數々物さしの新作自由也、平圓形の圓徑の寸も、廻りとさし渡りごを、裏表の尺にて、同寸になるやふに割合せて作り遣ふべし、是はさしわたり九寸の平圓は、廻りは二尺八寸四分四厘也、是を十寸に刻みて、寸毎に十分ヅヽにすれば、重寶なる物さし又一種出來て、其職々の工人等悅ぶべし、又三角方面の中徑を初として、五角七角以上、立圓の中貫、卵形飯櫃三錐方錐などの中貫の尺等を作りて、夫々に本朝一種の物さしとか唐尺とか名付けて、物知らぬ族に信仰させんとならば、數も限りも有べからず、身に餘力さへあらば、一生盡る事なかるべし、芋實の升量、小者部屋の飯衡を察し給へ、

〔律原發揮〕文尺(モンザ)者、以二曲尺八寸一爲二一尺一、算二顆子一用レ之、其寸大率、合二錢一文徑一、故名、

〔成形圖說農事十四〕○物指(モノサシ)略○中

文尺　曲尺八寸、是寶永通寶錢の徑八分なるを、十文合て尺にせし也、尺を伎さ讀は、八寸の寸(キ)の國訓に由れり、

〔本朝度量權衡考度〕文木　襪尺ナリ、今俗錢ヲ以テ襪ノ長サヲ度リ、何文ト定ル故、錢ノ徑ヲ一寸トシテ作リシ度ナリ、故ニ俗ニ文木ト云フ、然レバ此尺ハ卽寛永錢尺ナリ、寛永錢ノ徑ハ開元錢ト同ジケレバ、暗ニ唐ノ小尺ニ合ヘリ、

〔數學類聚上〕本朝の商家に、足袋を鬻ぐを見るに、一種の物さし有り、十分を一寸として、十寸を一尺とする也、其一寸をば一文と唱ふ、何某殿の足袋は九文なり、又は九文半也、或は九文六分也、七分也など云て、彼ものさしにて、九寸、又は九寸五分、あるひは九寸六分をさすなり、其物さしの長さを見れば、曲尺の八寸ばかり也、或人醫法の骨度同身寸より出たる尺也と云ふ、按ずるに同身骨度ならば、何人にても、一尺ならば一尺にて、外の寸はあるべからず、大兵も一尺、小兵なるも一尺にて有べし、大兵小兵に拘らず、誰れも々々々、九寸なりとも十寸なり共、一色に定るべし、是は其人々の骨髓、或は乳のひらき廣さ、目の間ダ、指の節の間などより割り出して、短きも一寸、長き

も一寸と、其人々の大兵小兵に隨ひて、一寸に長短を爲すゆゑ、背の何所の寸は誰にても四寸は四寸と定め置、又足の何所々々の寸は、誰にても何寸也と定めて違ふ事なし、既に其人々の臂に競べて、足袋を作ると云ふ事あり、是らこそ同身寸とも云べけれ、先に物さしを一種こしらへ置て、大兵小兵、其人々に隨て、寸の數に多少有るは、骨法と云ふにてはなき也、此物さし曲尺にて八寸計りあるうちへ、十分十寸を置たるを以て見れば、前の夏の尺なるべし、かの黃鐘管の長さ也、唐の武德四年に錢を鑄る、開元通寶是なり、此錢は今爰にあり、日本の秤にて、重さ一匁目有り、又日本曲尺にてわたり八分有り、十錢並べて八寸有り、曲尺の八寸は夏尺の一尺也、曲尺八分は夏尺にて一寸なり、然れば此開元錢一文は、彼物さしにて一寸なる故、一寸を一文と唱へて、足袋を商ふと見へたり、開元錢のわたりに合ふ故のことば成べし

〔數學類聚上〕本朝流俗に菊。ざ。し。と云ふて、一種の物さし有り、是は菊の花の寸をさす物さしにて、其長さを見るに、日本曲尺にて六寸餘ばかりある也、或人是を陶淵明が用ひたる尺也、晉の尺也と云ふ、又彭祖の用たる物さしにて、漢の尺也と云ふ、淵明菊を集めて、花の隱逸なるを翫びしと云ふ事有、陶淵明は大隱の賢人にて、虎溪に隱居して獨り摘菊を樂しみし事は聞及ぶ也、是は野生の菊花を賞翫せし成るべし、花壇花欄に蒔し、己れが作り立て、咲たる菊を、かの物さしにて、花のわたり一尺有か、或は一尺に一寸越えたか、二寸に至りたかなどゝ過分に大きなる事を悅びて、勝を得たりなどゝ自慢したる事は聞及ばぬ事也、又彭祖ハ灑縣山江配流せられて、菊を友として、八百歲を壽せりと云ふ事は、小兒も知るなれども、是は周の穆王の枕をば持居たりしなれども、物さしを持たるは書にも見たる事なし、彼物さし、日本曲尺にて六寸餘有るは、いかさま武王八寸を尺とすると云ふ尺にて、黃鐘管の長さを五段として、段を捨たる尺有り、前に委く出しあらはしたる也、是夏尺の八寸にて日本曲尺に六寸四分なり、漢尺と

云ふは誤なり、前に云ふ如く、日本曲尺にて漢の尺をはかれば、八寸八分餘に當る也、しかしながら證據なければ、必ず武王の尺也とも定め難し、未考、

長尺

〔多聞院日記〕天文十二年四月廿九日、ヘンサン長尺ニ五丈ヲ、三百七十五文ニ買テ、ハリトノヘ遣之、絹尺ニ五丈七尺五寸ありしが、一尺六寸ナラデハ不餘、

〔古今要覽〕器財 多聞院日記に、長尺といふものあり、日記に就て之を按ずるに、曲尺の一尺一寸五分にあたるものにして、卽今南都にてひさぐ甲冑用鷹尺といふもの、類にやあらん、

古尺

〔本朝度量權衡考〕度 古尺ノ今世ニ殘リ傳ハル者ヲ求ムルニ、大和國法隆寺ニ象牙尺アリ、聖德太子ノ遺物ナリト云傳フ、吾友松崎慊堂、復コレヲ唐ノ鏤牙尺ナラントテ云ヘリ、コノ說據リ信ズベシ、然ラバ聖德太子ノ遺物ニハアラデ、遣唐使歸化人ナドノ將來セシモノヽ、寺家ニ入リシガ傳ハレルナラン、長サ今ノ曲尺ノ九寸八分弱ナリ、陸奧國耶麻郡大寺村ノ慧日寺ニ、瑠璃尺ト云ヘル尺ヲ藏ス、平將門ガ女、如藏尼ノ遺物ナリト云傳フ、其摹ノ造シタルヲ見ルニ、大體法隆寺ノ尺ト同ジ、タヾ法隆寺ノ尺ハ紅ニ採リタルヲ、是ハ青ク採リタルガ異ナルノミ、其實ハ牙尺ナレドモ、青キニヨリテ瑠璃尺トハ云フナリ、其長サ法隆寺ノ尺ニ比レバ、四釐許長シ、是モ唐ノ鏤牙ナルベシ、尺卽唐ノ大尺ナルベケレドモ、儀物ニシテ用尺ニアラザレバ、據トナシ難シ、〇中略 又古キ寺々ニ、律尺トテ藏スルアリ、律トハ、釋家ノ法律ノ律ニテ、音律ノ律ニハ非ズ、予〇狩谷望之其摹ヲ得シハ、叡山尺、曲尺七寸六分強、背ニ山門僧嵩定、於寶乘院寫トアリ、高野尺、曲尺七寸九分強、背ニ寶永九年、高野山酬恩庵、僧久竺寫トアリ、於東寺金蓮院尺、曲尺八寸一分強、背ニ大師所用之トアリ、橫尾尺、曲尺八寸二分弱、背ニ東寺一體トアリ、泉涌寺尺、曲尺八寸二分、俊芿國師、將來ノ物ト云傳フ、按ズルニ、泉涌寺長典筆記ニハ、周尺事、當世流布ニ有三不同、佛所用ハ、金尺ノ八寸ナリ、建仁寺ノ相傳ハ八寸二分餘、當時ノ相承ハ八寸一分中ナリトアリ、此筆記ハ、文龜永正ノ間ノモノナリ、今彼寺ノ尺ヲ摹シタルヲ計レバ、八寸二分ナルニ、長與ハ八寸一分中ト云ヘリ、其校セシ長サ、中分ノ異アルハ、其頃既ニ訛長ノ曲尺アリテ計リシニヤ、中根璋ガ律原發揮ニハ、八寸二分有奇ト云ヘバ、余ガ得シ摹尺ノ訛長シタリシニハアラザルベシ、大安寺尺、曲尺八寸二分半、背ニ康永二年九月十四日、以大安寺資藏本寫之、於西大寺二聖院、尊照法師寫之、大師將來御什物之內也トアリ、法壽庵尺、曲尺八寸三分、背ニ南都瓦釜町、法壽庵律尺トアリ、生駒長福寺尺、曲尺八寸四分、背ニ延寶七年己未、於和州金龍山長福寺作トアリ、コレ等ナリ、

〔聖德太子傳私記〕周世尺、先生所持、象ノ牙ヲ染作、色赤、通鉤金五寸者、平一分者無、

此尺者、番匠等鉤金二分短、

〔律尺考驗〕上宮太子ノ古尺　和州法隆寺ハ、上宮太子ノ宅、斑鳩ノ宮ノ舊跡ナリ、寶藏ニ太子ノ遺物多シ、中ニ周尺ト云モノアリ、余南都ノ相知レル人ニツケテ、其尺樣ヲクハシク摸シ取テミレバ、象牙ヤウノ物ヲ赤ク染テ、花文ヲ刻、机上ノ壓尺ニ造リタル物トミユ、其長サ御府ノ古尺ニテ、一尺二寸五分ニアタリ、外ニ二厘バカリ强シ、其生目ハナケレドモ、兩方ノソバニ、四花ノ細點各廿一アリ、其間ヲ五分アテニシテ、首尾一尺アル物ト示シタルナラン、一端ニ五段ノ寸ヲ刻ム、コレ即世ニ太子ガネト稱シテ、大和番匠ノ用キ行ヘル、工匠曲尺ノ定本ナリ、其末ハ匠尺ノ五寸ニタラザル故ニ、寸ヲキザマズ、○中略彼寺ニコレヲ周尺ト云コト、浮屠氏古尺ノ通稱ナリ、元祿八年、法隆寺ノ寶器ヲ京都ヘモチ來リテ開キケル時ニ、此摸尺ヲ以テ本尺ニ比校シテ、少モタガフコトナカリシ也、

〔尺準考〕檢和州法隆寺所藏紅牙尺、其長當今尺九寸八分、正面四邊一二釐、緣以方界、界中之度、當今尺九寸七分二釐、與隋市尺同也、其一端雕五段之寸、當今尺五寸弱、開元大尺五寸也、其一三五段雕五出花文、二四段雕花鳥雜文、其一端不刻寸、當今尺四寸七分二釐、惟雕花鳥雜文四、已其底無方界、亦惟雕七鳥六花、其長當今尺九寸八分、兩側各刻四花細點二十、上下側各一、蓋唐六典少府之屬、中尙監所獻鏤牙尺、而白居易所謂紅牙爲尺、白銀爲寸者也、○中略雖不知其所起、而載在六典、則其肇於開元改尺之前者審矣、故其後所造進之尺、改用開元之寸、而其度則仍用隋尺歟、唐肅代間、猶及我寧樂御宇之朝、故傳入於我、而藏於法隆寺歟、要之非上宮太子所御也審矣、此乃一尺、而隋唐之度備、其亦奇矣、

〔古今要覽稿器財〕常用の鐵尺古昔の度に差はざる事

或人また問ふ、今の世に用ふる鐵尺、すなはち皇國固有の度にて、齋部氏より世に傳はると云ふ

こと、然もあるべし、然れどもその度、いにしへを差へず傳はれりと云こと、何を據として知れる事ぞ、答ふ、大和國法隆寺に、聖德太子の納め置給ひしと云ひ傳ふる象牙尺あり、この尺のこと、先輩も何くれと云ひ置たれども、大かたは眞物を見ずして云る說どもなれば誤り多きを、己いにし寬政四年にかしこに至りて、親しく其眞物をみて、手づから摸寫し來れるが、全體は象牙につくれる尺にて、すべてを薄緋に綵色して花鳥を畫き、一寸より五寸まで刻めるが、全く今の鐵尺に合へども、その以下は刻なく、曲尺の五寸に三分足らず、上の五寸とを合せて九寸七分あり、これを或は周尺なりと云ひ、或は西土ものゝ如くいへる人の多きは、凡て皇國の故實にうとく、かつ彼國の尺度の由來にも闇き故なり、西土の尺の由來以下に附錄す、其故はこれ全尺にあらず、古尺の本樣を殘せる物にて、その面に五寸のみ刻みて、以下を略せるは、五寸を倍して尺をしるに足り、寸度だに得れば、分またおのづからしらるゝ故なり、然ればその餘りの材は用なけれど、有るにまかせて其足り足らぬに拘はること無く、共に花鳥を畫きて、美觀にそなへ、後來の龜鑑に納置給へる物と見えたり、然るに法隆寺古今目錄抄に、此尺者、比番匠等鉤金短二分とあり、二分はきはめて三分の誤字なり、さて此抄にかく云へるは、此尺たゞ上の五寸のみ正寸にて、其以下は餘材を存せる物なるに心づかず、一尺の全形とおもひ誤りてかくいへるなり、

〔東大寺獻物帳〕

紅。牙。撥。鏤。尺。二枚

綠。牙。撥。鏤。尺。二枚

白。牙。尺。二枚

○按ズルニ、此ノ三種ノ尺ハ、共ニ法隆寺ノ象牙尺ト同ジモノナルベシ、而シテ紅牙尺、綠牙尺ニ刻スル所ノ度ハ、寸目ニシテ、白牙尺ニ刻スル所ノ度ハ、分寸ノ目ナリ、

〔觀古雜帖〕百萬塔幷塔中所納陀羅尼
小卷無軸、紙高各一寸八九分、但天平尺也、天平尺ハ今ノ曲尺ヨリ十寸ニシテ二分短シ、次下分寸ヲ云モノ皆用之、

〔續日本紀 稱德二十〕寶龜元年四月戊午、初天皇八年亂平、乃發弘願、令造三重小塔一百萬基、高各四寸五分、基徑三寸五分、露盤之下、各置根本慈心相輪六度等陀羅尼、至是功畢、分置諸寺、

〔地方新書〕法隆寺の百萬塔のこと、○中略余嘉永辛亥九月、色川氏をとひ、同氏家藏の百萬塔をはかり見しに、今の曲尺と符合せり、さるを觀古雜帖に、天平尺は曲尺より二分を短くすと云るは、失考なるべし、

〔律尺考驗〕御府ノ竹周尺、○中略往歲余コレヲ小倉藤亞相實起卿ニ聞ケリ、古來禁裏ノ御文庫ニ、竹ノ周尺アリ、弘法大師、入唐ノ時、彼方ヨリ佩テ歸リタル尺ト云傳ヘタリ、竹ニテ作リ、ウラニ周尺ト刻メリ、形色甚ダフルビテ、誠ニ千載ノ物トミユ、一トセ勅ヲウケテ、文庫ノ書ヲ晒シケル時ニコレヲ見テ、則謹テ委シク摹シトメタリ、其後寬文元年、內裏燒タル時、モトノ尺ハウセタリト、余ツノ摹尺ヲ亞相ニ請ヒ、ウツシ取テ、漢唐ノ錢ヲ以テハカリシニ、此尺卽唐ノ准尺ニ合タリ、則此尺、梁ノ表尺ナリ、此尺ヲ一尺二分一四餘ニワリテ、其一尺ヲ以テ、古周尺ト定ム、晉前尺とするなり後周鐵尺、比晉前尺、一尺六分四釐トアリ、唐小尺、卽此尺ト同ジキ故ニ、考定ノ古尺ノ一尺六分四釐ヲ以テ、唐ノ小尺ヲ定メ、小尺ノ一尺二寸ヲ以テ、唐ノ大尺ヲ定ム、大尺ハ古尺ノ一尺二寸七分六釐八毫ニ比シ、古尺ハ大尺ノ七寸八分三釐二毫ニ比ス、又此古尺ヲ以テ、何レノ證跡ニクラベテモ、皆合ズト云コトナシ、然レバ、此尺ノ梁ノ表尺ニ出テ、唐ノ准尺タルコトハ、其疑ナキモノ歟、是ヲ周尺ト云ツタヘタルハ、凡古代ノ尺ヲ、佛氏ハ皆周尺ト稱スルガ故ナリ、

〔槐記〕享保九年五月九日、三器通考拜借ス、尤秘スベキ由仰ラル、ソレニ付兼テ仰ラルヽ通リ、日本

ニテハキト知レザルモノハ、御府ノ周尺ナリ、法隆寺ノ尺モ、シカト周尺トモ定ガタシ、御府ノ尺ヨリ長シ、御府ノ周尺ハ六寸四分弱、法隆寺ノ周尺七寸餘アリ、シカレバ迚モ尺ト云モノニハ證ニシ難シ、何ゾ外ノ器ニテ、コレガ三寸アル器也ト云モノガ出レバ、代々ノ尺ヲソレニ合セテ、三寸ニ當ル尺ヲ何ノ代ノ三寸ト究メテ、ソノ世カラワリ出スヤウニスレバ、終ニ成ルベキコトナリ、是ニ付テ淡海公ノ令ニ載タル、天皇ノ內印外印ト云モノアリ、御所ニモ其璽ヲオサレタル者アリ、コレガ令ノ寸法、內印三寸外印二寸八分トアリ、コレニ代々ノ尺ヲ合セテ見レバ、漢ノ尺ガ丁ド當ル、是ヲ本ニシテ、代々ノ尺ヲワリ出スカラハ、成ソウナモノ也ト仰ラル、

〔古今要覽 器財〕御府周尺

御府竹周尺は、高野大師の將來する所にて、御府に傳はりしを、小倉大納言實起卿のうつされしものとて世にも傳はり、律尺考驗にもしるせり、さてその眞の御尺は、寬文元年に燒失せしよしいへり、その寸分を校するに、曲尺にて七寸九分八釐九毫五絲許にあたる周尺といふは用ゆるにたらず、唐の准尺なりといふはしかるべし、たゞし准尺は曲尺の八寸にあたるものなり、此尺一釐〇五短し、然るに此尺を梁表尺なりとし、以て十五等尺をもとむるは、あやまれるなるべし、

〔近聞寓筆 一〕奧州會津慧日寺、平將門女爲尼、是爲第一世、有所遺古銅尺一枚、中間有鼻柄可把持、其尺長與今曲尺相近云、奈佐隅東(勝皐)說、

〔古今要覽 器財〕惠日大寺瑠璃尺

惠日大寺は、陸奧國耶麻郡にあり、此尺相傳へて、相馬將門が第一女、如藏尼が遺物也といふ、その形は大かた法隆寺の牙尺にたがふことなし、卽一寸より五寸にいたるまでは、全く今の曲尺にて、其の末は寸を畫せず、法隆寺の尺に比すれば、一分五釐長きなり、(曲尺にて二分不足)角を用ひて造り、その面に花鳥、側面に香草を畫きし樣など、大概おなじ、但多く藍色を施せし故に、土俗これを瑠璃

尺といふ、瑠璃もて作りしにはあらず、これもまた唐の鏤牙尺なるべし、背に十二支を畫けり、寅に始り丑に終る、

大安寺周尺。

大安寺に傳來せし尺とて、うつし傳へたる尺あり、その長曲尺八寸二分五釐、その底記によるに、高野大師將來のものなりとぞ、是もまたその寸分によりて考ふれば、令小尺の微短くなりしなるべし、令小尺は、唐朝にても周尺と稱せしなれば、そのまゝに傳へしならん、

法壽庵周尺。

南都瓦釜町法壽庵に、周尺とて傳はれる尺あり、その長曲尺八寸二分六釐五毫あり、蓋し令小尺の漸短なるものなるべし、

橫尾尺。

この尺長曲尺八寸一分四釐四毫〇七にして、寸分なし、その底記によれば、所謂肘尺にして、梵尺なるべし、肘尺は倶舍論に詳なり、然してこの尺、もと唐家の尺度より求めしにはあらず、廿四指を橫に布を、一肘といふによるべし、然らばその人々の手指の大小にかゝはることなれば、高野山叡山等に傳はれる肘尺、みな異なるにてしるべし、

生駒寺律衣尺。

此尺長曲尺八寸五分一釐有奇にあたる、是も例の肘尺なれども、その度は唐小尺を用ひしものの訛長せしなるべし、

高野山尺。

この尺長曲尺七寸九分三釐一毫五々、寸分なし、これもまた肘尺にして、その人の手指の小なりしなるべし、又按にこの尺の底記に、寶永九年の字あるによれば、この尺さしてふるきものにはあらざるべし、律尺考驗にのする、御府周尺といふものをうつせしにはあらざるか、御府周尺は、

寛文前より、世にあらはれたればなり、

叡山尺

この尺長曲尺七寸六分弱、傳へて南山法尺といふ、南山は釋道宣をいふ、分寸を刻せざるをみれば、これもまた肘尺のみじかきものなるべし、

〔好古日錄〕小尺

一故家傳ル所ノ古尺、以竹造之、實ニ千年ノ古色アリト云、近光宿禰、嘗テ摸造ス、今ノ小尺即曲尺ニ短キ二厘弱也、按ニ上文ニ所謂周尺ノ一尺二寸、古尺ノ一尺、曲尺八寸弱ナル者ト毫忽ノ長短ナシ、

古尺

延享中伏見ニ塾師アリ、田中某ト云、塾徒古銅尺ヲ以書鎮トスル者アリ、其尺和漢辨ズベカラズ、古色蒼然愛スベシ、其家久ク藏ル所ト云、曲尺ヲ以ハカルニ、八寸七分五厘ヲ一尺トス、何等ノ尺ナルコトヲシラズ、後ノ考ヲ俟、

〔人倫訓蒙圖彙〕五　物指師　鯨指は伊勢大坂より出す、竹指、京にてこれをつくる、所々にあり、周尺とて、代々唐の尺を考へ出すなり、

〔東大寺要錄〕一　延暦僧錄文

仁政皇后菩薩諱安宿媛、尊號天下臨眞天皇、〇天下天平、天皇皇后誤、

出家尼名光明子沙彌

皇后、俗性藤原朝臣氏、父贈一位太政大臣藤原朝臣史氏之女、即勝寶感神聖武皇帝之后也、皇后在室、諮父入市、敎諸商人用於稱尺、于時日本未行稱尺、新從大唐得稱尺、所以皇后入市、敎人用稱尺、文曰、當助國宜風、權衡稱尺、非久各流天下、後帝納之册爲后、號天平仁政皇后、

〔本朝度量權衡考〕度　按ズルニ、〇中略　皇后ハ天平寶字四年春秋六十ニテ崩ジ給フ、聖武皇帝儲貳

タリシ時、納レテ妃トシ給ヒシハ、御年十六ノ時ナリト續日本紀ニ見ユ、然レバ皇后ハ大寶元年ニ生レ給ヒ、妃トナリ給ヒシハ靈龜二年ニテ、和銅六年ニハ御年十三ナリ、然ラバ皇后ノ家ニ坐シ時敎ヘ給ヒシハ、和銅六年改制ノ稱尺ナルベシ、尺ハ皇極天皇孝德天皇ノ紀ニ見エ、稱ハ齊明天皇天智天皇ノ紀ニ見エ、度量ヲ天下ニ頒タレシコト、文武天皇ノ紀ニ載セ、大寶ノ令ニモ、正シク度量權衡ノ制ヲ擧ラレタルヲ、思託〈○上文東大寺要錄所載延曆僧錄文著者〉ハ唐人ナレバ、〈鑒眞ニ從ヒテ歸化セシ僧ナリ〉皇國ノ典故ヲ知ラデ、和銅ノ時マデ皇國ニ稱尺無カリシヲ、皇后ノ始テ敎ヘ給ヒシトハ誤リタルナリ、其實ハ皇后ノ敎ヘ給ヒシハ、和銅改制ノ稱尺ニテ、此時稱尺ヲ始テ用ヒシニハアラズ、和銅六年ハ、唐ノ開元元年ニ當レリ、

〔東大寺要錄　九〕最初法式章第一

先著東大寺、〈○中略〉堂達等小十師、於講堂前持尺、令著衣鉢座具針筒漉水嚢等所作之事、依律文敎訓既畢、

〔醍醐雜事記　九〕一醍醐寺座主御拜堂日記〈治承三年己亥座主實○中略〉

鐘木彙日造儲事　工一人　堂童子三人〈食料米各一斗下之〉

懸緖料本尺白布三反　本尺麻布三反

今日、上醍醐准胝堂鐘木不懸替、去年法印御房御入寺之時懸替、仍新勁〈○勁恐誤字〉之改不替云々、

〔我衣〕寬保ノ比、將軍吉宗公御三男、從三位右衛門督宗武公、近臣ニ語テ曰、元文ノ比、荻生總右衛門〈徂徠先生〉ヘ、唐尺ノ本寸吟味被仰付、唐尺ハ開元通寶徑リ八分、十錢ヲ以テ一尺ト定タリ、依テ其比開元通寶ヲ集ルニ至テ、大中小ノ不同アリ、何レヲ本寸ト定ベキト迷ヘリ、徂徠中ナルヲ用ヒテ曰、過不及ナシトシテ、中分ノ錢ヲ一寸ト定メタリ、吉宗公是ヲ本トセリ、宗武公是ヲ不審シテ曰ク、夫玄宗、錢ヲ製スルニ、役人ニ命ジ下民ニ令製、然ルニ民小錢ヲ本トシテ、大錢ヲコシラユベキイ

ハレナシ、極テ大錢ヲ本トシテ、次第々々ニ錢ニ鑄タルニ紛レナシ、予ガ本寸トスル者ハ、大錢ヲ用べキ者カトゾ仰アル、近侍臣我等如キ小身ナレドモカホド下情ニハ通ズルコト能ハズトテ、皆感心ストイヘリ、

〔勘者御伽雙紙中〕尺なをしの事六ヶ條

鯨尺を曲尺になをすには八分に割ばしるゝ也、

曲尺を鯨尺になをすには、八分かくればしるゝなり、

呉服尺を曲尺になをすには、一ヶ二分をかくればしるゝ也、

又三分をかけ、四をかくるも同じ斷、

曲尺を呉服尺になをすには、一ヶ二分にて割ばしるゝなり、

又三分に割、四に割も同斷、

呉服尺を鯨尺になをすには、九分六厘をかくればしるゝ也

又三をかけ、四分をかけ、八分をかくるも同じ斷、

鯨尺を呉服尺になをすには、九分六厘に割ばしるゝ也、

又三に割、四分に割、八分に割も同じ斷、

右尺なをしの法は、女も裁物などに用ゐる事なれば、たゞしりやすからんことを欲て、術を二樣にしるすのみ、

〔數學類聚上〕日本に三種の尺あり、呉服尺、鯨尺、曲尺なり、呉服尺は、衣類を裁ち縫ひするにいにしへは用ひたる也、今世はくじら尺を用ゆれども、古へはくじらざしは用ひず、呉服尺を用ひたる也、くじら尺より五分短き尺也、此呉服尺は、曲尺を五つに切りて、六つよせて、其長さを一尺につくり、一尺には十寸づゝ也、一寸には十分づゝにしたる尺也、これは前條に云ふ所の周の例に准

じたる也、曲尺にては一尺二寸に當る也、くじら尺と云は、鯨魚の鬚にて作りたるゆへの名也、是は曲尺を四つに切りて、五つよせて、其長さを一尺にしたる尺也、是も一寸には十分づゝ有り、一尺には十寸づゝ有也、前に云ふ所の成陽の例に准じたる也、くじら一尺は、曲尺にては一尺二寸五分に當る也、今世通用、衣類を裁ち縫ひをするに用ゆる也、曲尺は、今世日本にて匠工の用ゆる尺也、則商の營造尺と同じ事也、くろがねを錬のべてつくるゆへに、かね尺と云ふ也、

〔經濟錄四律暦〕日本ノ度ハ、唐ヨリ受傳ヘタリト云フ、昔ノ尺ハ、今姑略シテ論ゼズ、當代用ル處ノ尺四種アリ、〇中略願クハ種々ノ尺ヲ止テ、萬事ニ曲尺一ツヲ用ル様ニアリタキモノナリ、

〔槐記〕享保九年五月八日
兼テ指上置候、度量ノ考古譯通說御返シ、字ノ誤ドモ訂正ス、ソレニ付兼々御ウハサノ三器通考ヲ御カシアルベキノ由仰ラル、

〔田園地方紀原上〕町段畝步の考附間竿尺寸ノ考
本朝度制略考云、本朝古の大尺唐制を承たると云事、其明證なしと雖ども、法令萬緒、十に八九は唐に承たる事、律令以下にて見つべく、且後成恩寺關白、令抄及貝原篤信、和爾雅中村迪齋、三器攷略中根元珪、律原發揮荻生徂來、度量考伊藤原藏、制度通等の一公五儒も齊しく唐制に承たりと云ふ、

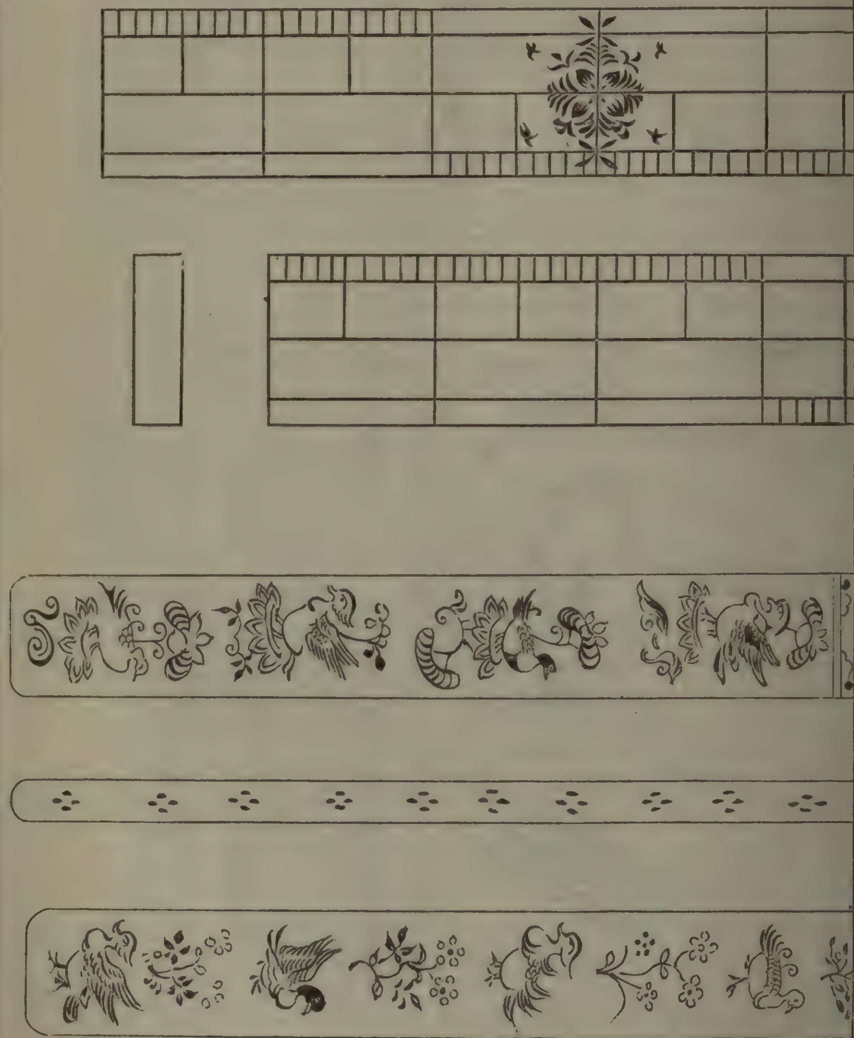
〔尚古圖錄〕

東大寺正倉院所傳天平尺
按其一尺當曲尺九寸七分八釐



法隆寺所傳鏤牙尺
曲尺九寸八分弱





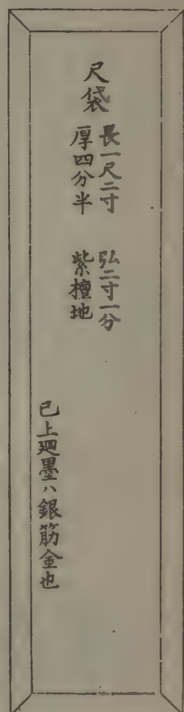
〔類聚雜要抄〕

尺袋口形

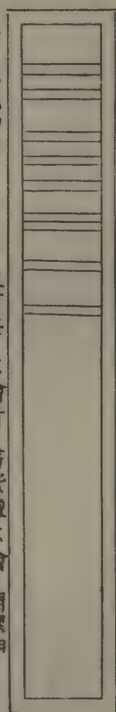


中ヲツカヒニシテ筥ニ固付テ左右ヲ開也

又尺筥ト云



長一尺　弘九分半　厚二分　牙又紫檀用之



五寸ニ如此切目

五寸ニ牙ニハ繪計ニ書紫檀ニハ繪ヲ摺螺鈿

〔人倫訓蒙圖彙〕



古事類苑

稱量部二

量

古事類苑

稱量部二

量

量ハ物ノ多少ヲ量ルノ謂ニテ、其器ニ合升斗等アレドモ、通ジテ升ノ字ヲ用キテ之ヲマスト云フ、後世ニ至リテハ、升字ニ木偏ヲ加ヘテ枡ニ作リ、以テ斗升ノ升ニ別テリ、蓋シ上古ニ在リテハ、未ダ一定ノ量器ナク、其形狀モ亦詳ナラズ、舒明天皇ノ世、始テ斗升斤兩ヲ定メラル、文武天皇ノ大寶制令ニ至リ、量ニ大量小量アリテ、十合ヲ一升トシ、十升ヲ一斗トシ、十斗ヲ一斛トス、而シテ小ノ三升ヲ以テ、大ノ一升ト爲シテ、米穀ヲ量ルニノミ之ヲ用キ、餘ハ皆小升ヲ用キシメタリ、又銅造ノ樣式ヲ大藏省及ビ國司ニ給シ、官私用キル所ノ量器ヲシテ、毎年省國ニ就キテ題印ヲ受ケシムルコト、一ニ度器ニ同ジ、然ルニ桓武天皇ノ延暦ノ頃ニ至リテハ、大小ノ制、漸ク亂レテ、平校ノ法モ亦行ハレザリシヲ以テ、更ニ令シテ其ノ違濫ヲ防遏セントセラレタレドモ、竟ニ復行ハレザリキ、而シテ延喜式ノ制ニ、湯藥ヲ調合スルニノミ小ヲ用キ、餘ハ大ヲ用キシメタルハ、恐ラクハ和銅六年、改制ノ時ノ定ナラン、降テ德川幕府ニ至リ、江戸ト京都トニ升座ヲ設ケ、江戸ハ樽屋藤左衞門ノ升ヲ用キ、東三十三國之ニ從ハシメ、京都ハ福井作左衞門ノ升ヲ用キ、西三十五國之ニ從ハシメタリ、而シテ其ノ僞濫ヲ防グガ爲ニ、之ヲ檢定スル事ヲモ、亦升座ニ命ジタリ、

按ズルニ、古來ヨリ傳フル所ノ升ノ種類ハ、凡ソ七八十種アリ、今之ヲ大別スルニ宣旨升ノ

名稱

外ニ、容量ヲ以テ名トスルアリ、十三合升ノ類是ナリ、所用ヲ以テ名トスルアリ、家用升ノ類是ナリ、土地ヲ以テ名トスルアリ、京升ノ類是ナリ、質ヲ以テ名トスルアリ、銅升ノ類是ナリ、特ニ足利氏ノ末ニ至リテハ、種類頗ル多ケレド、皆一家一寺ノ私用タルニ過ギズ、

〔倭名類聚抄稱量十四〕升　陸詞切韻云、升音昇、和名麻須、十合器也、

〔伊呂波字類抄員數末〕升マス十合器也

〔倭名類聚抄稱量十四〕斗附斗概　陸詞切韻云、斗當口反、俗音度、十升器也、字亦作㪷、見唐韻、

〔書言字考節用集器財七〕斗ト升マス大升之者

〔倭名類聚抄稱量十四〕斛。半石。　唐令私記云、大倉署函斛、函者受五斗、形如此間酒槽耳、今按函稱半石者、又斛宜作斛、見四聲字苑、

〔伊呂波字類抄員數波〕半石ハンセキ以五斗量之器也

〔倭訓栞前編二十九末〕ます略○中　增益をいふ、略○中　量をいふも、數量は多少を知るの器、次第に加倍する物なれば增と同義なるべし、斗升を訓ずるも同じ、合を一。合。ま。す。といひ、斗をと。ま。す。といふ、又半石をはかる器を函といふ、石は十斗也、

〔成形圖說農事十四〕麻須略○中

麻須とは倍マスなり、勺抄を倍て升より斗、斗より斛といふを以てなり、

〔日本書紀顯宗十五〕二年、歲比登稔、百姓殷富、稻斛ヒトサカ銀錢一文、

〔萬葉集十一〕正述心緒

百モヽサカノフネカクシイル、ヤウラサシ、ハヽハトフトモ、ソノナハノラジ積。船潛納、八占刺、母雖問、其名不謂、

〔拾遺和歌集哀傷二十〕大僧正行基よみ給ひける

百。さ。か。〇さか、原作草、據一本改、に八。十。さ。か。そへてたまへりし乳ぶさのむくい今日ぞわがする

〔朝野群載六太政官〕要劇文二枚

左乃管司々乃人等、合天二百餘卌人加、去月仕奉日數仁依天、要劇乃料乃米百。坂。四。十。坂。給申津、右乃管司々乃人等モ、合二百餘六十人加、去月仕奉日數仁依天、要劇乃料米百。坂。五。十。坂。給申津、

〔枕草子六〕ひとますがめに、二ますはいるやといふを、なでう事としる人はなけれど、いみじうわらふ、

○按ズルニ、ひとますがめハ一升容ルベキ甕ヲ云フ、一升ヲヒトマスト云フ語ハ、今日尚ホ在リ、

〔倭名類聚抄稱量十四〕斛。漢書律曆志云、龠合升斗斛、胡谷反、所﹆以量﹅多少﹅也、野王按、說文云、十斗爲﹆石、石猶﹆斛也、

〔箋註倭名類聚抄稱量六〕今本玉篇石部云、石山石也、又厚也、斛也、又角部云、十斗爲﹆斛、引﹅說文﹅云、斛十斗也、並與﹆此不﹆合、說文原文、亦與﹅今本玉篇所﹆引同、此恐有﹆誤、按十斗爲﹅一石﹅見﹅說苑辨物篇﹅又按、石今之斛也、見﹅國語周語注﹅玉篇蓋本﹆之、律曆志十斗爲﹆斛、又云、斛者角斗、平﹅多少之量﹅也、

〔續日本紀元明六〕和銅七年六月癸未、大﹅赦天下﹅、○中略諸老人歲百以上、賜﹅穀伍斛、九十已上叁斛、八十已上壹。石。、

〔續日本紀考證三〕壹石石一本作﹆斛、和名抄野王按、說文云、十斗爲﹆石、石猶﹆斛也、元融案斛石字異義同、詳見﹅陔餘叢考﹅、

〔陔餘叢考三十〕石

石、本權衡之數也、漢律曆志、二十四銖爲﹆兩、十六兩爲﹆斤、三十斤爲﹆鈞、四鈞爲﹆石、是石乃權之極數、至﹅十龠爲﹆合、十合爲﹆升、十升爲﹆斗、十斗爲﹆斛、則斛乃量之極數乃俗以﹅五斗﹅爲﹆斛、兩斛爲﹆石、是以﹅權之極數﹅爲﹅量之極數﹅殊屬﹅歧誤﹅然漢時米穀之量、已以﹆石計、如﹅二千石六百石之類﹅未﹅嘗以﹆斛計﹅葉石林謂、以﹆斛爲﹆石、自﹆漢以來始見﹆之是也、又管子禁藏篇、民率三十畝、畝取﹅二石﹅則人有﹅三十石﹅果蓏素食當﹅

十石、糠粃六畜當十石、則人有五十石、國策、燕噲讓國子之、自吏三百石以上委子之、又漢書食貨志、記李悝之論曰、一夫田百畝、每畝歲收一石半、百畝爲粟百五十石、除十一之稅十五石、餘百三十五石、則斗斛之以石計、自春秋戰國時已然、時俗所稱、蓋相沿舊名也、又按、古時一石重一百二十斤、與一斛之數不甚相遠、漢書成帝紀註、如淳曰、中二千石、月得百八十斛、一歲凡得二千一百六十石、眞二千石、月得百五十斛、一歲凡得一千八百石、二千石、月得百二十斛、一歲凡得一千四百四十石、雖官秩之名、與所得俸之實數、多寡微有不同、然大略不外乎一斛爲一石也、蓋古時十斗爲斛、一斛卽是一石、後世五斗爲斛、而兩斛之數十斗、則仍沿一石之舊名耳、按葦航紀談、宋韓彥古、爲戶部尙書、孝宗問曰、十石米有多少、對曰、萬合千升百斗廿斛、然則五斗爲一斛、宋時已然、

〔算法統宗　一〕量　所以分別多寡之法也、　斛　古一石、今五斗、或二斗五升、

〔塵添壒囊抄　十〕石用斛事　付鄭玄事

石字ヲ一斛二斛ノ斛ニ用シハ何ニ、同字歟、是字同ジキニハ非ズ、由有テ用也、其義ニ云ク、米五斛、其斗ノ量重シテ難扛、以石懸秤、合其斛量則止矣、亦復漢書云、鄭玄身長八尺、飮酒一斛、注云、鄭玄腹中有石、大キニ飮酒、後年ニ瀉石、不能復飮、仍石ノ字、斛ニ用也、

〔〕按ズルニ、石ニコクノ音ナシ、コクト云フハ斛ノ字ノ音ヲ假レルナリ、

〔大安寺資財帳〕合糯玖拾玖碩。漆㪷。壹勝。　合米參阡參陌拾捌斛。貳㪷。捌勝。　合粇參阡壹拾碩。貳㪷。貳勝。

〔伊呂波字類抄　波員數〕量　音亮、算經云、知長短謂之度、知輕重謂之稱、知多少謂之量、量之所起、起於黍、六十四黍爲一圭、十圭爲一抄、十抄爲一撮、十撮爲一勺、十勺爲一合、十合爲一升、十升爲一斗、十斗爲一斛、

〔拾芥抄　下末　物充官位〕物充

十撮爲勺、十勺爲合、十合爲升、十升爲斗、十斗爲石、

〔塵添壒囊抄 五〕夕撮事 附升字事

石、斗、升、合、夕、才ト云、夕トハ何ゾ、才ニ於テハ音義共ニ不審也、夕ト書ハ僻字也、夕ハ詞積ノ反、寡也、亦ハ作𡖋、勺ト書ベシ、時灼反、飲器也、十勺ヲ爲升、亦杓ト作也、勺トハ、スクフ也、手ヲクボメテスクフ心也、今、日本ニハ十勺ヲ合ト定タリ、才ニ至テハ正字ヲ不知、本說ヲ不見、短慮難及ビ、但音ニ付テ推量セバ、若是撮字歟、撮ヲバツマムトヨム、仲庸云、夫地一撮土之多、及其廣厚、載華嶽而不重、振河海而不洩、萬物載焉、夫水一勺之多也、及其不測、黿鼉鮫龍魚鼈生焉ト云取意、巨海ト云モ一勺ノ水ノ所湛、厚地ト云モ一撮ノ土所積也ト云也、然レバ片時モ學門ニ志シ、假染ニモ仁義ヲ思ハヾ、必積テ道ニ至ルベシ、勸ムル論也、就之思ニ、十撮ヲ一勺トシテ撮ト云ヲ、作リヲ略シテ、篇許ヲ用歟、抄物ニ、或ハ作ヲ書キ、或ハ篇ヲ用事、常ノ習也、其一升二升ヲ一シユク二シユクト云人アリ、升ニハ全クシクノ音ナシ、字ヲ誤テ、叔ノ字ト思ヘル歟、叔ハ書六反、ワタルトヨム、又伯叔ハ父ノ兄弟ト注セリ、升字ハ篇ハ勺、作ハ十文字也、サレバ字注ニモ、十勺爲升ト云ヲ以テ知ベシ、

○按ズルニ、勺ヲ古來夕ニ作レリ、勺ノ一體ナリ、淳化法帖東晉簡文帝書ニ、酌ヲ酌ニ作レルニテ知ルベシ、

〔寬永板新編塵劫記 一〕糧の數の名之事

石斗升合勺抄撮圭粟

○按ズルニ、勺ノ十分ノ一ヲ撮ト云フハ、天平年間ノ文書ナドヨリ、既ニ爾ルコトニテ、慶長十六年ノ節用集ナドニモ亦、撮ヲ勺ノ下ニ置ケリ、而ルニ此ノ塵劫記ニハ、勺ト撮トノ間ニ抄ヲ置キテ、抄ヲ又ハ才ニ作リテ、サイト讀ミ、撮ヲ又ハ札ニ作レリ、

〔令義解 十雜〕凡〇中略量十合爲升、(以秬黍中者容一千二百爲籥、十籥爲合也、)三升爲大升一升、十升爲斗、十斗爲斛、

〔唐律疏議雜律二十六〕雜令、量以二北方秬黍中者一、容二一千二百一爲レ龠、十龠爲レ合、十合爲レ升、十升爲レ斗、三斗爲二大斗一、十斗爲レ斛、

〔本朝度量權衡考量〕本朝ニテハ、唐令ニ十龠トアルヲ受テ、實ニ十龠ヲ合ト定メ給ヒシナリ、明詐天皇ノ御時ニ定メ給ヒシ量モ、十龠ノ合ニゾアリツラン、モシ二龠ノ合ヲ用ヒラレタラン二ハ大寶ノ時、却テ謬ナル十龠ヲ合ニ定メラルベキニ非ズ、是ニヨリテ本朝ノ量ヲ起セバ、

斛積小尺八千一百寸今六斗六升二合七勺六撮餘
斗積小尺八百一十寸今六升六合二勺七撮餘
升積小尺八十一寸今六合六勺三撮弱
合積小尺八寸一百分今六勺六撮強
龠積小尺八百一寸分今六撮餘倭名類聚抄稱量具ニ龠ヲ載セタレドモ、本朝令ニ合升斗斛ヲ擧ゲテ、龠ヲバ載セズ、義解ニ龠ノコトヲ云ヒタルハ、唐令ニヨリテ合ノ容受ヲ示シタルニテ、此器アリシニハ非ズ、延喜式ニモ、何合何勺何撮トアリテ、龠ヲ以テ量リシモノナシ、龠ハ唐ニテスラ用ヒザリシカバ、マシテ本朝ニテハ用ヒザリシナリ、

是小量ニテ、大量ハ是ヲ三倍シタルモノナリ、

斛積小尺二萬四千三百寸今一石九斗八升八合三勺弱
斗積小尺二千四百三十寸今一斗九升八合八勺三撮弱
升積小尺二百四十三寸今一升九合八勺八撮強
合積小尺二十四寸三百分今一合九勺九撮弱

是大量ナリ、雜令ニ、凡度二地一量二銀銅穀一者皆用レ大、此外官私悉用二小者一ト云ヒシハ、此大小量ヲ云ヘルナリ、銀銅ハ大稱ニテ稱リ、穀ハ大量ニテ量ルヲ云フ、稱二銀銅一量レ穀ト云フベキヲ、量二銀銅穀一ト書シハ、文ヲ省キシナリ、

或人難ジテ曰、令義解ニ十龠トアルハ、唐令ニヨリタルナレドモ、唐ニテ令ニハ十龠ト云ヒナガラ、其實ハ二龠ヲ用ヒタレバ、本朝ニテモ義解ニハ十龠トアレドモ、實ハ二龠ヲ用ヒタルモ

知ルベカラズ、况令ノ正文ニ十斛ト云ハザレバ、十斛ヲ用ヒシトハ定メ難キニ似タリ、然ルヲ本朝ノ量ヲ十斛ト定メシハ如何、答延喜雜式ニ、凡公私運米、五斗爲俵、仍用三俵爲駄ト云ヘリ、雜令ニ穀ヲバ大量ニテ量ルト云ヒ、雜式ニハ悉ク大ヲ用フト云ヒタレバ、此五斗モ大量ナルベシ、小量ヲ二斛トスレバ、大量ハ六斛ナリ、六斛ノ合ヲ以テ五斗ヲ量レバ、今ノ一斗九升八合八勺餘ナリ、俵トセンニ甚少キニ非ラズヤ、十斛ノ合ナレバ、今ノ三斗三升一合餘、三俵ハ今ノ五斗九升六合餘ナリ、

〔古今要覽器財〕令小升大升

大寶の時設けられし小大升は唐令と同じかるべし、よつて是を唐律六典通典等に通考するに、小尺の千六百二十寸を以て、小一石の積とし、是を三倍して大一石とするなれば、大一石の積、小尺の四千八百六十寸にあたる、その小尺は即今の曲尺の八寸三分三釐不盡にあたる、是尺一千六百二十寸は曲尺の九百三十七寸有奇にあたる、九百三十七寸を今量法六四五々にて歸除すれば、今量一斗四升五合一勺六撮七三有奇にあたる、是開元時量の三の一と明らかに通典にみえたれば、即唐律六典にのする黍量とおなじきものなるべし、是を小升とし大升をもとむれば、今の四斗三升五合五勺有奇を以て唐の大升とすべし、即是大寶の大小升なり、伊勢國安東郡在地倉付の升といふものあり、その大さ方六寸、深さ二寸五分とあり、六寸を自乘し三十六寸あり、二寸五分を乘じ九十寸あり、分積九萬あり、今量を以てはかるに、一升三合九勺四撮をいる、疑らくは是令小升の遺制にや、

〔令義解雜十〕凡度地、量銀銅穀者、謂量者權衡升斗相兼之稱也、文唯擧銀銅、不言金鐵、金貴於銀、鐵賤於銅、即貴者用小、賤者用大、雖文不言、亦須准知、皆用大、此外官私悉用小者、

〔延喜式雜五十〕凡度量權衡者、官私悉用大、但測晷景、合湯藥、則用小者、

〔令義解雜十〕凡用度量權官司、謂大藏省、及諸國司之類、皆給樣、其樣皆銅爲之、

〔令義解關市九〕凡官私權衡度量、毎年二月、詣大藏省平校、○中略不在京者、詣所在國司平校、然後聽用、○下略

解文見度篇

〔唐六典司農寺十九〕凡受租皆於輸場、對倉官租綱吏人執籌數函、其函大五斛、次三斛、小一斛、

〔類聚國史政理八十〕延曆十七年十月乙未、勅量收糯穀、斗斛有限、經年除耗、法令立例、今或所司斛斗之外、更加耗分、糯則一俵二升已上、穀亦斛別五升已上輸納、百姓常苦此費、自今以後、檢收糯穀、不得數外更加耗分、如有違犯、依法科處、度量權衡、先有定製、平校行用、亦具令條、然所司怠慢、曾不遵行、大小任意、輕重由人、收納多濫、蠹害尤甚、自今以後、宜改此弊、升尺等類、就大藏省、依法平校、永絕奸源、若違此制、□寘嚴科、

〔多聞院日記〕天正十四年十月九日、奈良中賣買升、中坊ヨリ、京番トテ、悉ク鄉中ヘ被出、家毎ニ升如此用意シテ判ヲ可取、代二斗ヅヽト云々、今迄ノ十合ノ二合入ナリト、今出タル一石ト申ハ、前ノ十合ニハ、一石二斗在之云々、珍敷難儀計被申付處也、

〔田園地方紀原上〕町段畝步ノ考附間竿尺寸ノ考

勢州須瀨村渡邊六兵衞ガ家ニ所傳ノ、太閤ノ檢地條目ヲ書シテ贈ラル、原本拙筆ニシテ、古ク損スレバ難讀、文儀分ケ兼ル所モアレド其儘ニ寫スト云、

就伊勢國御檢地相定條々○中略

一升ハ京升に相定、則檢地爲奉行、左樣に京升を相調可遣、前之升を悉集可取上事、

右之條々相守、下々迄此一書をきさほ打に可申付也、

文祿三年六月十七日御朱印○下略

〔多聞院日記〕文祿四年十一月二日、此間奈良中ノ升、大小出來、無法量トテ及糺明、諸商賣衆、及籠者

迷惑之由也、欲深過量、眼前之事也、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一升之事、國中京升一偏可相定事、但計樣者年貢借物者あげ、賣買者さげ可計事、○中略

慶長貳年三月廿四日

〔御定書百箇條〕似セ枡○中略拵候もの御仕置之事

寛保二年極

一似せ枡拵候もの　引廻之上獄門

但入目違無之に於ては中追放

〔享保集成絲綸錄三十四〕寛文九酉年二月

一江戸升、今度京升之ごとく御改、升一同ニ被仰付候間、望之者は、樽屋藤左衛門所江參可申候、新升之直段、壹挺ニ付代銀四分宛ニ御定被仰付候、左樣可相心得旨、町中江相觸可申事、

二月

寛文九酉年八月

當春相觸候通、江戸升と京升寸法相違有之故、京升之ごとく御改、升一同に被仰付候、當閏十月朔日ゟ、一切古升用申間敷旨被仰付候間、其ゟ前ニ樽屋藤左衛門所江參、新升調之遣可申候旨、町中相觸可申事、

八月

寛文十戌年九月

覺

去年より京升之寸法にて、新升被仰付之所、于今古升を用候所有之由其聞候、高壹萬石ニ付而、新升五十宛之積高に應じ、樽屋藤左衛門所より求之、江戸幷ニ領內ニをひて可被用之者也、

九月

寛文十一亥年三月

一三年以前酉之年被仰付候新升、樽屋藤左衛門所ニ而調之用、同酉閏十月朔日より、古升一切遣申間敷旨、町中江相觸候所ニ、于今古升遣申者有之由相聞候間、古升堅遣申間敷候、自今以後相背者於有之は、急度曲事可申付事、

三月

正德二辰年三月

覺

一升之直段壹匁八分相增、向後壹升升壹挺ニ付五匁八分宛、其外大小之升、右之直段ニ應じ賣渡候筈ニ申付候、尤まぎらはしき升堅取扱申間敷候、此旨町中可觸知候、以上、

三月

升增直段之覺

一壹斗升　代銀三拾七匁七分

一七升升　代銀貳拾九匁

一五升升　代銀貳拾三匁

一壹升升　代銀五匁八分

一五合升　代銀三匁七分

一貳合半升　代銀三匁

一壹合升　代銀貳匁五分

享保二酉年五月

無判之升遣イ候儀停止之所、所々にて相用、近き頃別而多成候由相聞へ不屆候、吟味之儀、樽屋藤左衛門ニ申付候間、無判之升、堅用申間敷候、若於相背は可爲曲事候、此旨町中可相觸候、以上、

五月

〔牧民金鑑十六〕安永五年三月三日御書付

枡之儀、東三十三ヶ國ハ樽屋藤左衛門方枡、無判之枡遣ひ候儀、堅停止之處相用、近來ハ別て、無判之枡多有之由相聞不屆候、追て樽屋藤左衛門方より、改之者相廻候間、急度相守、無判之枡相用申間敷候、若相背ニ於てハ、可爲曲事候、

右之趣、東海道東山道北陸道幷丹波丹後但馬、都合三十三ヶ國、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭より、可被相觸候、

二月

安永七年八月十五日御書付

枡之儀、京都福井作左衛門方燒印有之京枡を用來候國々、近來猥に成、紛敷枡取扱候趣相聞候、追て作左衛門方より、枡改之者相廻り候間、急度相守、都て弦掛枡木地枡共、作左衛門方にて京枡を用可申候、若於相背は、可爲曲事候、

右之趣、五畿內山陽道南海道西海道、山陰道之內、因幡伯耆出雲石見隱岐壹岐對馬、都合三十五ヶ國、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭より、可被相觸候、

八月

〔憲法類集十三〕文化七年六月廿四日牧野備前守殿御渡

枡之儀、京都福井作左衛門方、燒印有之京枡を用ひ來候國々、近來猥に成、紛敷枡取扱候趣相聞候、追而作左衛門方より、枡改之者相廻可申候間急度相守、都て弦掛枡木地枡共に、作左衛門方の京

升屋

枡を用ひ可申候、若於相背は、可爲曲事候、

右之趣、五畿内山陽道南海道西海道山陰道之内、因幡伯耆出雲石見隱岐幷壹岐對馬、都合三十五ケ國へ先年相觸候處、近來猥に成、紛敷枡、數多取扱候趣相聞、不屆に候、此度作左衞門方より、枡改之者相廻可申候間、前以相觸候通、急度相守、作左衞門方の京枡の外、紛敷枡、堅取扱申間敷候、若於相背は、可爲曲事候、

右之通先達て相觸候向々へ、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭より、可被相觸候、

午六月

右之通可被相觸候

〔三河後風土記二十八〕三浦三崎番附守隨町年寄之事

天正十八年九月十二日、樽屋藤左衞門ハ、〇中略此度江戶町支配仰付られ、神田玉川の水道、關口小日向金杉三ヶ村の代官、東國枡の事、支配を命せらる、和州奈良の產にて、奈良屋市右衞門も、遠州より駿府までも御供したる者なりしが、是をもめされて樽屋と同じく、江戶町々の支配、幷水道の事を命せらる、しかしながら枡の事ハ、樽屋一人にて掌るべしと仰付らる、

〔國花萬葉記七上武藏〕升

北村彥右衞門本町三丁目

〇按ズルニ、北村彥右衞門ハ、樽屋藤左衞門ノ誤リナラン、

〔江都管鑰秘鑑十〕樽屋藤左衞門由緒の事

一東三拾三ヶ國枡の儀、古來ゟ被仰付候、

享保十巳年八月

〔牧民金鑑十六〕寛政五年十月

山本太郎左衞門御代官所
越後國頸城郡川浦
番丁

斗掻焼印

右吉右衞門方にて、樽與右衞門枡、取次賣所差出之由、與右衞門申出候間、此段申達置候、

丑十月　町奉行

吉右衞門

作左衞門（油小路竹ヤ町下）

〔花洛羽津根一〕升座

油小路竹屋ノ下　福井作右衞門

〔國花萬葉記山城一上〕升。鈎。掛。

〔雍州府志土產七〕斗量　凡盛米穀一升之方器、是直謂升、其式四方内、自一隅至一隅、上横鐵準、量米穀時、滿其準爲限、是謂弦。掛。升、鐵準之横升上也、似施弓弦之謂也、洛下伊豆倉屋、幷鍛冶屋清水某、斯兩家造之、貼鐵印而賣之、其外不能造之、

〔人倫訓蒙圖彙六〕枡師　天竺にあり、日本にては推古天皇の御代にはじむとかや、京。枡。師。油小路竹や町下ル丁作左衞門、金物清水是をつくる、枡の口廣さ四寸九分、深さ貳寸七分、代四匁三分也、

江戸樽屋藤左衞門、

〔倭名類聚抄稱量十四〕斗　附斗概　禮記注云、概（古礙反）平斗斛者也、斗概（俗云、度加岐）

〔段注說文解字六上〕槩杚米所以杚斗斛也（所以二字今補、月令正權槩、鄭高皆云、槩平斗斛者、槩本器名、用之平斗斛、亦曰槩、許鄭高皆云、其器也、凡平物曰杚、所以杚斗之義、爲節槩、感槩、梗槩、引伸之）

〔書言字考節用集七器財〕槩（トカキ）斗斛者、平（同）概（同上、）斗格（同）

〔倭訓栞中編十六〕とかき　倭名抄に斗槩をよめり、斗掻の義にや、今ますかきといへり、或はか。なら。し。といふ、掻平すの義なり、斗格も同じ、

〔書言字考節用集七器財〕概（マスカキ）出斗格（同）

〔倭訓栞中編二十四〕ますかき　斗格をいふ、かきは掻の義なり、

〔成形圖說農事十四〕麻須略○中

登加伎和名抄 量懸亦云量攪 梁亦弦の字を用、俗云渡金、量の角懸て亘したる鐵梁なり、芝田錄に沒梁斗と見えたり、

概寸法　一斗量の概八二寸六分　七升八二寸三分　五升八二寸二分　一升八一寸二分、或云概元

定式なし、量より外へ兩方手の掛るだけ長く作る、此云寸法は、概の木口の徑をいふ、凡斗量は槠材にて作る、一升より下は兩端を執て押に及ず、故に杉竹等にて作るべし、凡俗間、己には概を輕くあて、他には壯くあて、平ならざるを、量懸取と云、盜を以て充り、

〔令義解九關市〕凡、略○中用斛者皆以概、概者、量所以平斗斛也、

〔類聚三代格八〕太政官符

應諸國雜物以斗斛檢納者令綱丁正身量進事

右得伊勢國解偁、諸郡司解偁、例進雜米、其數猥多、未進相尋、連年不絕、是故國吏、未免沒公廨之責、郡司常苦奪職田之發、人民彫弊、鄕邑淪亡、何者貢進之家、如法舂㨍、監領之吏、依數辨納、仍卽運漕、依例貢備、而檢收之所、既是違法、貪猾人夫、掌其量納、遂使斗概之間、方術多端、鐘石之外、增加不少、綱丁等目見奸口不敢言、欠費所積、還倍本數、因玆綱領之輩、合門弊亡、規避之徒、擧族逃遁、吏民之煩、莫甚於斯、望請被早言上、年料雜米、令彼綱丁、自親量進者、國司覆審、所陳合理、望請下知所司、依件施行、然則欠失之費莫聞、未進之責自絕、謹請官裁者、右大臣宣、依請、諸國所進、宜亦准此、

齊衡二年十一月十五日

〔古文零聚八〕金剛山報恩禪寺至德三年丙寅歲內檢帳

秋月鄕四反　定使大圓

一反烏羽門今ノ名鹽供田　石代イ八斗五升、內七斗九升納、　藤八先生入道

右イ八斗五升、外交分二升數席アリ、納斗斗カキ、略○中

一反井垣略○中　石代イ八斗五升、皆納、　彥九郞先生

右イ八斗五升、外変分二升数席アリ、納斗カキ、

〔地方落穗集〕斗掻太サの事

一壹升枡より壹合枡まで、斗掻の太サハ、升の底ニしるす燒印の差渡しを用るなり、五升枡壹斗枡、右の割に准ず、

〔甲斐國志二國法〕枡屋

慶長八年六月八日、小笠原秀政、信州ニテ出セル掟書ニ、口籾之儀、壹石ニ付可ㇾ爲二貳升宛一候、竹とかきにて百姓可ㇾ計二渡一候、但新京升五斗入之事ト見ユ、

〔日本永代藏六〕智惠をはかる八十八の升掻

愛に京の北山の里、かくれもなき三夫婦とて、人のうらやむ人あり、〇中略此親仁八十八、〇中略八十八歲の年のはじめに、誰かいひ出して升掻をきらせけるに、すなほなる竹のはやしも切絶るばかり、京都の諸商人是をのぞみけるに、商賣に仕合あつて、いよ〳〵もてはやして、三夫婦の升かきとて、俵物はかるにこぼれざいわひあり、上京の長者、此升かきにて白銀をはかりわけて、三人の子どもにわたしけるとなり、

〔古文零聚八〕金剛山報恩禪寺至德三年丙寅歲內檢帳

大田鄉二町小納斗內中ハ畠　手ハカリニテ口ノ米アリ

大田鄉千住　定三斗五升代手ハカリ枚斗

〔好古日錄〕古斗

神戸氏傳ヘシ民部省廚升、受ル所山科升ト同實ニ古制ノ考フベキ者也、寶永ノ火ニ燒失ス、惜ベシ、又古升ニ宣字烙印ノ者アリ、疑ハ所ㇾ謂宣旨升ナラム、又古斗深一寸五分、徑二寸八分五厘者有リ、用ル所ノ烙印、太孝齋ノ三字ナリ、年世後考ヲ俟、

沿革

又

二十年前、一大斗ヲミル、二升四合許ヲ受ク、蓋山科斗ノ三升斗ナラム、年世ノ考フベキナシ、惜ベシ、又長和元年壬子造ル所ノ斗アリ、一升六合許ヲ受ク、蓋山科斗ノ二升斗ナラム、皆當時ノ大斗也、底板ニ長和壬子□□月ノ數字ヲ鐫ル、又四面ニ納世實ノ三字及〻ヲ墨書ス、長和中ノ書ニハ非ルベシ、〻何ノ意ヲシラズ、後ノ考ヲ俟、

〔甲斐國志（二國法）〕枡屋

府中工町（タクミマチ）ニ、枡屋傳之丞ト云者アリ、造枡燒印ヲ押、彼先祖小倉總次郎トテ、武田家ノ印書ヲ持傳フ、

升ノ内ニ四方ト當（ソコ）五所ニ、此燒印ヲ押セリ、同外ノ方ニ押之、（燒印略之）

〔扶桑略記（四舒明）〕十二年庚子、始定斗升斤兩、（○又見二一代要記一）

○按ズルニ、斗升ノ制ノ史冊ニ見エタルハ、是ヲ以テ始メトス、

〔續日本紀（二文武）〕大寶二年三月乙亥、始頒度量于天下諸國、

○按ズルニ、大寶元年制定セル樣式ヲ頒下セシナリ、

〔政事要略（五十三）〕勘田租束積事

右被右辨官宣偁、慶雲三年九月廿日格曰、取令前束、擬令內把、令條段租、其實猶益、宜田一町十五束令輸者、未知令前束、令內把格、爭各其積幾、損益之數、何而可會、又令與格孰後孰前者、檢舊說令前租法、熟田五十代、租稻一束五把、以大方六尺為步、步內得米一升、（此升稱大升也）二百五十步為五十代、慶雲三年格曰、准令以大方五尺為步、步內得米一升、（此升減大升）三百六十步為段者、今案五十代與令段步積一同、即所得米、其數亦同、然則段內得米三百六十升、實此大二百五十升也、因步多少積增減、是以准量令前束與令內把、非无增減、計算其積、令內十四把三分之二、當令前一束、稱量一同、其令有新古、惟格新

之前古之後也、

弘仁十二年十一月五日　　明法博士額田國造今足

私案、件勘文、〈○中略〉米升法難得其意、仍勘算術、以注左、〈○中略〉升法、置十合升米三百六十升、以十二合升米二百五十升除、得一升二百五十升之百十、卽通分内子、得三百六十升也、置二百五十升、更置一升二合、加二合四勺、並得一升四合四勺、乘上積、得三百六十升也、

〔伊呂波字類抄 止雜物〕斗〈慶雲元年、始賜諸國斗升、〉

〔帝王編年記 十文武〕慶雲二年八月、賜諸國斗升合等、

〔一代要記 文武〕慶雲四年丁未二月〈○二月一本作六月〉十五日、此時給斗升于諸國、

〔續日本紀 六元明〕和銅六年二月壬子、始制度量調庸義倉等類五條事、四月戊申、頒下新格幷權衡度量於天下諸國、

〔交替式〕天平六年七道檢稅使算計法

東海道以二千七百寸爲斛法

東山道以二千八百寸爲斛法

北陸道以二千八百寸爲斛法

山陰道以三千二百寸爲斛法

山陽道以二千七百寸爲斛法

西海道以三千二百寸爲斛法

南海道以二千八百寸爲斛法

寶龜七年畿內幷七道檢稅使算計法

委穀經二十年已上者、以二千七百寸一爲二斛法一、

糒并新委不レ經二年者、以二千八百寸一爲二斛法一、

粟穀者、以二千九百寸一爲二斛法一、

今案天平六年使、七道異レ率、寶龜七年使、共是一例、主稅寮亦同二此法一、然則前使所レ算、更不レ可レ改、猶依二先計一、可レ待二物盡一、但天下一法、不レ可二參差一、自レ今以後、所レ委粟穀可レ依二寶龜七年例一、

○按ズルニ、此斛法ヲ東大寺所藏ナル天平尺(一尺ハ今ノ曲尺ノ九寸七分八釐ニ當ル)ヲ以テ計ルニ、立方積二千七百寸ハ、今ノ二千五百二十五寸六分九釐一六五〇四ニシテ、其一升ハ今ノ三合八勺九才餘ナリ、(現行量一升ノ積ハ、六四八二七〇ナリ、)二千八百寸ハ、今ノ二千六百十九寸二分三釐五七八五六ニシテ、今ノ四合〇四才餘ナリ、三千二百寸ハ今ノ二千九百九十三寸一分二釐三二六四ニシテ、今ノ四合六勺一才餘ナリ、

宣旨升

(扶桑略記 二十九 後三條)延久四年九月廿九日、斗升法、可レ據二用長保例一之由下知、

○按ズルニ、此時ノ法ハ、一條天皇ノ長保ノ制ニ據ルベキコトヲ示サレタルニ過ギズシテ、新ニ制ヲ立テラレタルニアラザルヤ明瞭ナリ、然レドモ其ノ長保ノ制ト云フモノハ傳ハラザルナリ、

(東寺長者補任 一)延久四年(今年斗升寸法被レ定レ之)

(愚管抄 四)後三條院の位の御時、延久の宣旨斗と云ものさだまりて、今まで其を本にして用ゐらる丶、斗まで御沙汰ありて、斗めしてまゐりたれば、淸涼殿の庭にて、沙子を入てためされけるなんどをば、こはいみじきことかなと、めであふぐ人もありけり、

(東齋隨筆 政道)延久(○後三條)善政には、先器物を作られけり、貢仲卿藏人頭にて、これを奉行せり、升を召よせて、どり〳〵御覽じて、簾を折て寸法などさ丶せ給けり、米をば穀倉院より召寄て、殿上小

庭にて、貫首以下藏人出納など檢知して、小舍人玉たすきして量けり、本米をば紙屋紙に裹て持參りたりければ、叡覽有て、勅封を加へられてぞ、御持僧の許などへつかはされける、斛器は方なる槽を差す、石をくゝり下ておもしにして、二またの木に懸て、穀倉院にして、國々の米をば納られけり、仍何石とは、石の字を用也、件器石等、于今穀倉院に有といへり、

〔伊呂波字類抄〕〈止雜物〉斗〈延久宣旨云、方一尺六分、高三寸六分、〉

○按ズルニ、此積四百〇四寸四分九六ナレバ、之ヲ京升ニ比スルニ、延久宣旨升ノ一斗ハ、其六升二合六勺五才餘トナルベシ、

〔濶背上〕疑問曰、斗升積事、假令一合者、米何粒定哉、又宣。旨。升。何合定哉云々、

答云、斗升之量、隨代沿革不一、其原本起自黃鐘之筒、爲律度量衡之備、律定音聲、分呂律、度定尺寸度長短、量定斗升量多少、衡定銖兩衡輕重、天下之用大備、今就斗升言之、寛治年中、被定量器云、合、方二寸、深八分、積三寸二分云々、積筭術云、方二寸、得二十分、爲長廣又二十分、二十者有二十、爲四百、〈方一分者爲有四百〉以深八分乘之、云乘之者四百者有八、四八而爲三千二百、是當三寸二分也、如何爲當、謂方一寸、〈十分爲百分也〉深又十分爲一千分、此有二千分、是爲廣深各十分者有三也、又方十分爲百分、深二分即二百分也、是爲一合積也、升、世俗多作𠦃、又作外音叔、並皆誤也、是以漢書律暦志、讀升爲勝、未聞叔音、寛治宣旨曰、升方四寸、深二寸、積三〈○三下恐脫二十字〉二寸云々、云方四寸者、長廣各一寸者有四、四々而得十六、以深二寸累之、得三十二寸、謂方六面各一寸、其積有千分、故一升積三萬二千分也、斗、寛治宣旨云、斗方一尺、深三寸二分、積三百二十寸云々、方一尺、是長廣十寸也、呼十々百、得百寸、以深三十二分呼之、得三百二十寸、〈寸也〉爲斗積、若以分言之、三十二萬分、爲一斗積也、斛、寛治宣旨、斛、方二尺、深八寸、積三千二百寸、爲斛積云々、謂方二尺、二尺爲二百分、長廣二百、呼二々四、得四萬分、以深八寸、〈八十分也〉呼四八卅二、爲三千二百寸、若以分言之、三百二十萬分、一斛積也、若欲半斛斗者、口徑各一尺六

寸、底方四寸、深一尺六寸、是爲五斗量也、問曰、半斛量如何知之、答曰、半減術曰、口方一尺六寸、底方四寸、相並得二尺、半之得一尺斛、一尺爲十寸、十々相呼得百寸、以深一尺六寸、(十六寸也)相呼得千六百寸、爲半石積也、

次假令一合者、米何粒哉云々、此條升合既以分寸定之、米粒依田地沃瘠、米粒難定、若好事人欲辨知者、作一合之量方二寸深八分、以其米以秤權之、得一合米定數、十分之一爲一勺數、百分之一爲一撮數、置一合數、以十々相累、以爲升數、爲斗數、爲斛數、爲半斛數、有何疑乎、　次宣旨升事、寛治宣旨載上解了、

〔吾妻鏡　四十二〕建長四年三月十九日癸卯、三品親王(宗尊)關東御下向也、○中略午剋著御于野路驛、○中略

御雜事

米卅石、白米二石、(宣旨斗定)大豆三石、(同斗○中略)贄殿入物、(上白米三斗、宣旨斗、○中略)

御雜事

能米卅石、白米二石、(宣旨斗定)

〔厨事類記　一御膳〕春宮御方

(裏書)春宮御方御折櫃

朝餉御菜二ヶ度、日別一斗七升、(宣旨斗○中略)

后宮御方

(裏書)皇后宮御方御相折帳

朝餉御菜二ヶ度、日別一斗七升、(宣旨斗○中略)

諸女院御方

召₂供御₁御菜八種、日別五斗、宣旨斗

〔古今要覽 器財〕行₂造伊勢豐受大神宮₁事所

可₃早令₂進₁濟工役夫作料米₁事、攝津國賀島庄貳佰廿七町分、米參拾捌石伍斗玖升、段別一升七合、宣旨升、右件米者、朝家無雙之重事、庄々平均之課役也、早令₂進濟₁、可₃取₂進造宮所返抄₁之狀如₁件、

元亨二年八月日　右官掌紀在判　左史生中原在判　右大史安倍

〔醍醐寺雜事記 九〕一執行職事

於₂守護口₁者京人立₂之云々、其山手、人別米一升大升出₂之、

〔外宮子良館祭奠式 下〕大升。量₂御饌₁米升也

内長一尺三分　廣八寸九分　深四寸九分

〔古今要覽 器財〕伊勢大升

伊勢子良館にて用ゆる大升あり、御饌米をはかる料の升なり、その大さ長一尺三分、廣八寸九分、深四寸九分、その積五百六十六寸九分三、今の量法六四五々を以て除き、八升七合八勺二撮八有奇をうる、是を十合とすれば、この一合今の六合九勺五撮八六八三にあたる、

〔外宮子良館祭奠式 下〕十二月例

晦日　從₂御母良₁受取米如₁左

御饌米一日分大升。二升宛以₂宮館大升₁量₂之、一旬分二十升也、於₂小盡之月₁者、減₂一日分二升₁、下旬者十八升取₂之、

〔好古小錄 下〕法隆寺大斗。寺ニテ太子升ト稱ス、徑方九寸五分、深三寸七分强、受₂京升五升三合₁、

○按ズルニ、此大斗、京升ノ五升三合ヲ受クト云ヘレドモ、今之ヲ算勘スルニ、五升一合七勺貳才餘トナル、

〔外宮子良館祭奠式 下〕小升。一合升也

内長二寸四分半　廣同　深一寸四分

〔東寺執行日記〕文明五年六月十八日蓮花會行之、八斗之内國方ニ半分取之、殘之内又一獻分引之、定殘下行二斗三升二合也、〇中略

自大炊方請取定

二斗三升二合　減一升三合　支具一升三合 已上二升六合引也

殘二斗六合 十二人中各一斗宛、一升六合、其後斗。ノ。一。斗。ヲ。升。ニ。テ。見。バ。九。升。有。之、仍各一升五合宛、

文明五年六月十八日　奉行寶俊

六年十月十五日、四石三斗五升、南田三反分渡之、〇中略

二斗一升　十合　彦五郎かり

三斗三升　斗。升。サノキかり

七年十一月十五日放生會行之、〇中略

四斗六升二合 斗。升。

七年六月十八日蓮花會行之、去年下行米、二斗五升二合、内二斗四升八合渡之、減分成之、

大。斗。ニ二斗四升八合　同升ニ二斗二升八合

除一升三合御支具　一升二合四勺減分

殘二斗二合六勺

〔成形圖説〕十四農事 麻須〇中略

江戸増上寺御靈屋領代官の方に。一。斗。量(マス)あり、縁に鐶(カン)あり、中に梁あり、下の四方に手掛の切かけあり、是をば京量(マス)と稱す、又一斗一升入の大量(マス)あり、又九升入もあり、俵は四斗二升入にして、收納の時、一斗一升入にて三つ量、九升入にて一つ量なり、

〔東寺御領庄園斗升增減〕東寺御領庄園斗升增減之事

一十三合一斗事

下行　二斗五升四合八勺　坊用　二斗七升九合　佛性　三斗四升九合四勺○中略

康正元年乙亥十二月十五日

〔古今要覽稿器財〕十三合升

延德の比の十合といふものは、式の十合をさすか、長保官升の十合をさすか、しるべからず、たゞし長保の升の十三合ならば、今の壹升二合六勺一撮にあたる、この升の九斗は、今の壹石一斗三升四合九勺許にあたる、是壹段の地の年貢なり、その比の壹段は、今の三百六十步にあたれば、是を今の收納の法に比するに、上田三百六十步にては、大抵一石八斗、中田は一石一二斗、下田は八九斗にいたるべし、是によれば延德の時の一石一斗は、今の中田と相比して相應といふべし、然ればこの十三合升は、長保官升の十三合升なる事うたがひなく、併てこの比の十合といふもの、長保官升を用ひし事しるべし、

請申御下地下作職事

合壹段者御本所眞光院殿

右件御下地者、望申ニ付候て、あづけ被下處也、仍御本所之御年貢、并御公事物已下、類地のごとくたるべく候、名主作職之御年貢者、勘右衛門方の十三合の升にて九斗(名主分六斗、作分三斗、)宛、無干水損可納候、いづれも若無沙汰仕候はゞ、相當分何の下地にても候へ、可被押取候、就中下作事不得御意を、別人ニ契約仕事候はゞ、堅御ざいくわにあづかり可申候、又何時にても候へ、御下地を被收上候はゞ、他人に被仰付候とも、是非一言に及べからず候、仍爲後日請文狀如件、

延德四年四月二日　彌三郎判

名主作職方、御年貢納御升、追而久我升ニ延而、御治定あるべき由心得べく候、　彌三郎

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

二段（字京終山形）（十一合五勺、歲末ト年請料トニ錢五百文、六月ニ錢二百文、他所公事無之、）　本地子二石五斗（一石二斗五升ノ代）　作乙次郎（板今辻子）

二段（サウメ）（十一合三勺、但定地子也、不可毛見、）　本地子三斗（一斗五升代）　作得壽

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段（下笠間）（十一合、所當內他所公事無之、但此田本七斗代也、而近年押上大輔殿、一石ニヲリアゲテ三斗ヲトラル、若損亡之年ハ、三斗以下ナラバ、七斗內不可有免、）　本地子七斗　作宗光（笠間）

一段（邑地）（十一合、歲末破木一荷、所當內他所公事無之、但近年公事在シ由百姓申之、委可尋之、）　本地子五斗六升　作又二郎

在大和國添上郡邑地村（字上津和迫）

〔多聞院日記〕天正五年六月十一日

一シヲ二駄買之、麥一斗二升ニ、シヲ一斗ヅヽ也、シヲ合三石一斗、（十一合ノ斗升ニ）麥三石七斗二升、斗升ニテ遣之、米一斗ニ、シヲ一斗六升ヅヽニアタル也、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段（字河上中津河）（大十一合、歲末炭六籠、他所公事無之、）　本地子一石二斗　作

在河上古田、從河北邊、

一段鳥羽（大十一合、歳末堅木一荷、但所當內東南院湯錢五十文出之、） 本地子六斗六升 作河內北山宿

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段字辰市ナカレ（小。十。一。合。作人持來、歳末米四升、所當內一斗ハ請料也、地子內長暑之一升ハ、ナシハラヘ出シ、但トリニ使者手タル也、） 本地子一石一斗 作宗七

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段切山（十。合。五。勺。、但山城升ニテ五斗一升納之、夏リヤウホウ仟荷、破木二束、所當之內ヲモテ、他所公事無之、〇中略） 本地子五斗 作聖忍房切山

一段字下ハレタ松田（十合五勺、歳末七尺鏟一枚、他所公事無之、） 本地子八斗 作圓佛

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

二段字夕崎平田（十。合。三。勺。、作人持來、近年他所公事六升米在シ由百姓申之、仍寄進狀ヲ見ニ、公事無之由明白也、） 本地子一石八斗 九斗代 作禪林房後家ヒヤウフ

在大和國城下郡十三條三里卅一坪內、自東一二段目之內半ハ畠、〇中略

一段カラコ（十合三勺） 本地子五斗 作七郎

〔醍醐寺雜事記九〕一執行職事〇中略

立山賣木之山手者十。合。升。米一升出之、不然樵者、橫斗升ニ米一升出之、是深沙口之山手也、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段賀茂 本地子八斗（此內二斗、尼公辨之、） 作彌四郎刀禰

十合、識末破木一荷、所當內他所公事ニ錢六十出之、〇中略

一段河上　本地子七斗　作堂童子二郎

十合、同上他所公事無之、

一段河上　本地子七斗　作堂童子三郎

十合、同上他所公事無之、

一段牛墓　本地子四斗二升　作彌平次野田

十合、但作人持ニ來之、他所公事無之、

在大和國添上郡東大寺以東牛墓西北邊〇中略

三段西田字ヤナイ田　本地子二石一斗七斗代　作松王太郎坂今辻

十合、作人持來、他所公事無之、但近年公事在之由百姓申、可尋之、

在添上郡左京二條三坊八坪自東三段〇中略

一段カミハレタ　本地子八斗　作五郎

十合、守正院ヨリ百姓トシテ來、他所公事無之、

〔好古小錄下〕二月堂拾合升。受ニ今升八合六勺。

〔東寺執行日記〕文明六年四月廿六日、二石五斗、十合中坊升定。斗別五升宛可加之由申定、

十月十四日、二石五斗、十合升　本米中坊へ返之、和米ハ重而可返之、

十五日、四石三斗五升　南田三反分渡之

二斗一升　十合　彥五郎かり

〔東寺文書〕永代寄進申田地之事

合一段者〇中略

右件田地者、私領相傳無相違下地也、雖然依有志子細、東寺寶輪院殿江、永代寄進申所實正明白也、於年貢米者、以十合升二石四斗、每年可有御寺納、但爲本所分、淸淨庵江五斗納之、爲名主分、玉藏分江參斗五升納之、此外諸公事物一切無之、若於此下地違亂煩在之者、罷出可致其明者也、仍永代寄進狀如件、

天正九辛巳年十二月廿八日　　堤三介久次判

三十良判

〔古今要覽稿 財〕天正十合升

東寺文書に、天正九年の十合升といふものみゆ、是多聞院日記に所謂十合とおなじきものなるべし、但し一段の地にて、此升二石四斗を得といふによれば、一歩の地にて六合六勺有奇をうべし、この升の六合六勺は、今京升の五合四勺有奇にあたる卽是を今の田賦の制に比するに、一段一石六斗二升にあたれば、所謂十六二分之盛にして、上々田といふべし、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段字郡山エレノ松 本地子六斗 作乳次
大十合、作人持來、歳末七尺鐘一枚、他所公事無之、〇中略

一段萬歳 本地子一石 作虎法師
大十合、作人持來、歳末鐘一枚、瓜十、常麻寺御油一升、無之、但所當外百姓役也、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段字染田ノタマタ 本地子五斗五升 作與三
小十合、作人持來、歳末鐘二、籠、他所公事無之、〇中略

一段九條 本地子一石 作藤內

小十合、作人持來、歲末米二升、但所當內五斗ト歲末トハ、大佛殿美乃公之方へ出之、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

二段河上　本地子一石三斗六斗五升代　作堂童子一郎

十合、金臥也、但穗寺在之歟、仍近年ナ○ラ○十○合○ニテ納之、他所公事無之、○中略

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段夕崎　本地子七斗　作宜傳ヒヤウフ

ナ○ラ○十○合、歲末七尺蓆一枚、他所公事無之、

在大和國城下郡西鄕十一條三里七坪自南五六段目

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段江堤　本地子五斗　作佛行

九○合○五○勺○、作人持來、他所公事無之、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段半超昇寺　本地子六斗　作敎願超昇寺

九○合○、百姓持來、歲末炭一籠、他所公事無之、

在右京一條二坊四坪南大路半四坪東大路一段

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

三段賀茂字高田　本地子一石二斗四斗代　作長順房西小田原花嚴院

八○合○、他所公事無之、一石二斗無相違可辨之由、重請文在之、

在山城國相樂郡賀茂鄕大柿御庄大茅原里卅四坪○中略

一段宮子字アウチ田　本地子七斗　作圓明

八合、儀末七尺筵一枚、近年佐保殿領タルヨシ百姓中、委可尋之、但貢所公事等ハ、七年之內ニカクリタル事全無之、定、可致其沙汰也、

〔安東郡專當沙汰文〕一宮中御倉納御籾俵五斗俵也斗量定以彼一俵者、八合。升。定、米四斗三升搯出之云々、但有未進之時、以代錢沙汰之時、以彼勘

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段小字伊賀井口タチ　本地子一石　作權次郎
伊賀。八合。儀末淺合、五合所當內三斗七升三合、學生供力ヘ出之、

在伊賀國名張郡夏見條略○中

一段伊賀字ヤマソイ　本地子三斗四升　作慶妙房
伊賀八合、儀末白米二升淺合、所當內他所公事無之、○中略

一段伊賀　本地子四斗八升　作善定房
升ハ作人持來、伊賀八合ニスロシ大也、所當內他所公事無之、

一段伊賀字峠坂本　本地子八斗　作正善
伊賀八合、儀末伊賀斛一籠、学一襄、但依爲迫地、近年定地子、三斗ニ定了、不可毛見、又學生供米ハ、三斗之外百姓辨之、

在伊賀國名張郡里田庄矢川條出作正重名

一段伊賀字鹿臥　本地子四斗四升又小麥五升　作覺順房學生
伊賀八合、儀末淺合五合、供米ハ所當之外百姓役也、

在伊賀國名張郡矢川條一切

〔外宮子良館祭奠式下〕十二月例

晦日　從御母良受取米如左○中略

案內米一合宛以當館一合。升。量之、計神事之案內、隨其數取之、

貫爲名

〔成形圖説 農事十四〕麻須（凡俗米を料(ハカル)に、一より十まで、一つ一つの名を數へ呼べり、）小量(コマス)（即合なり、口二寸三分、深一寸二分二厘餘、小量に三あり、一合量は漢の龠に當れり、龠は半合の名にて即一勻、本邦の量法五抄三撮强なり、）小半量(コナカラマス)（即二合五勻量なり、或は之を合一ッと云、口三寸八厘七毛、深一寸七分一毛なり、或は口三寸五厘、深一寸八分とする者は非也、）半量(ナカラマス)（即五合量なり、一升の半故に云、口四寸、深二寸六厘なり、或は深二寸八厘とするは非也、）升(マス)（即十合なり、口四寸九分、深二寸七分、）五升量(マス)（口八寸三分四厘、深四寸六分六厘、按に今の時に、東稲春得米五升と見えし、其五升米を一料(ヒトハカリ)にせしものゝ遺なるべし、）七升量（口九寸四分七厘、深五寸六厘、）十量(トマス)（即十升なり、方一尺五分、深五寸八分八厘、〇中略、）斗(ト)桶(オケ)（桶もて作る、一斗を容、）

〔好古小錄 下〕法隆寺銅斗(ツ)（寺ニテツリ升ト云、受二京升六斗四升、口圓徑二尺二寸五分、圍リ七尺八寸三分、深一尺四分、重三貫三百目餘、銘曰、量大廿六斤、受二一石四斗、）

〔古今要覽 器財〕銅升

永仁年中、大山庄地頭年貢注進の内に、銅升の定といふこと見えたり、この銅升、かの法隆寺に傳はる銅升の類のものにや、たゞしは趙宋の銅升にや、

大山庄地頭請所御年貢支配事

合貳佰斛内定銅升

〔古量考〕木升（同上(法隆寺所藏)木もて造る、おひざしの箱にて、ふちに竹打てあり、これも太子の時のものなりといふ、）

方玖寸漆分、深參寸漆分、今の升にて伍升參合漆勻零壹撮入ル、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段　狛(コマ)　本地子六斗　作松太郎

（桝升、識末破木一荷、但興福寺別當領之内也、仍六斗之外、庄役百姓勤レ之、損亡年、三作半シテ一分取レ之、二分ヲモテ庄役ヲ勤テ、殘ヲ百姓取レ之、〇中略）

一段　鳥羽　本地子六斗五升　作小法師宜（北御門）

（桝升、識末堅木一荷、他所公事無レ之、但於二東南院所役一者、寄二進本主僧觀慶一、申二賜御免狀一畢、〇中略）

一段　アチマ　本地子七斗　作權太郎

（桝升ニ本升チヽメスニ、一斗ニ二合ノ口分アリ、仍七斗一升ニ四合納レ之、識・末小豆二升四合、他所公事無レ之、）

形狀爲名

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事
一段畠今ハ田也賀茂　本地子七斗　作與三左衛門殿
檜。升。、歳末破木一荷、柴一荷、他所公事無之、〇中略
一段賀茂　本地子六斗　作彌六大夫
檜升、歳末破木一荷、他所公事無之、
一段南田　本地子八斗　作覺圓房カサトヤ
檜升ニテ、ハカリテ八斗、内二升、百姓ニ返之、本升小間、此升タ■レバ二升アマル也、他所公事無之、歳末堅木一荷、八斗内一斗ハ請料也、

〔雍州府志七土産〕斗量　凡盛米穀一升之方器、是直謂升、其式四方内、自一隅至一隅、上横鐵準、量米穀時、滿其準爲限、是謂弦。掛。升。、鐵準之横升上也、似施弓弦之謂也、洛下伊豆倉屋幷鍛冶屋淸水某、斯兩家造之、貼鐵印而賣之、

〔度量雜記〕難波家古升、弦掛升也裏書云、方面五寸、堅深二寸五分、立積六十二分半、以養老大尺量、長保新製官升寸法立積全同、此升慶長新製之京升以前、天下諸國通用、

〔日本永代藏五〕世渡りには淀鯉のはたらき
萬の賣掛する共、其人と次第に念比にならぬやうに常住の心入、商人のひみつ也、〇中略有時西陣の絹織屋へ俵米賣初、置替の約束も年々かさみて、算用はあひながら、その銀ふさがりて手まはしなりがたく、後は碓の音たえて鉤。掛。升。のみ殘れり、掛商ひには分別有べし、

〔西鶴織留一〕所は近江蚊屋女才覺
扇子屋といふ人、むかしはすこしの酒片見せに米商賣しけるが、内義才覺にて、手づから鉤。かけ。枡。を持て米酒にかぎらず、わづか一升買する程の貧者には、利徳かまはず斗よくして、手ひろふ見せける、

地名爲名

〔成形圖説 十四 農事〕酒量サカマス一名桝ヒ附量フクマス、參伐星の形是に似たり、故に酒量サカマス星の名あり、此器酒醋油等を斟み出たる時に、今の斗量マスに兩枘フンノツあるも稍相似たるなり、俗に量一つを一杯と云は、盃酒量より出たる言にて、今一杯量と云は、一升五合入なり、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段 字狛レメカケ　本地子三斗　作淨明神童子
山城升、歲末破木一荷、他所公事無之、但損亡年作半也、
在山城國相樂郡上狛郷内東山邊○中略

一畠段 字狛イモハタケ　本地子一石　作土佐北山宿
山城升、西大寺〔加地子、〕油一升、小公事等有之、但所當之外百姓役也、
在山城國嵯峨中郡相樂○上狛郷内下巳波里、

一畠段 字狛イモハタケ　本地子一石　作良實
山城升、西大寺役同上、
條里同上○中略

一段 土師ハシ　本地子八斗　作源士殿
山城升、歲末破木一荷、年來所當之内、他所公事無之處、當年始領家方所當在之由、百姓申之、遂符進狀ヲ見ニ、八斗之外、領家へ三斗百姓辨之云々、
在山城國相樂郡土師郷人見里廿四坪○中略

一段 鳥羽　本地子七斗　作土佐北山宿
山城升、但七斗内二斗ハ東南院夫役料也、但五月ヨリ八月マデ、其間ニ三四度之程勤之、又湯錢廿九文出之、此外別公事無之、○中略

二段 字井上堂内田　本地子一石六斗八斗代　作善心房
山城升ニテ、一石六斗六合四勺納之、本主ノ升ニタムレバ、六合四勺ノ口分アリ、歲末白米四升、瓜廿、他所公事無之、但近年公事在シ由申之、委可尋之、
在大和國山邊郡十一條三里卅六坪内東南角、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

二段 相樂サカナカ　本地子八斗 四斗代　作致願房

相。樂。升。歲末破木一荷、ホレタノカイコメ一俵、白米二升也八斗ノ外、領家方所當百姓役也、

在山城國相樂郡相樂庄內

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一大佛殿履田一段事　本地子六斗　作成佛房後家今里

。ア。ラ。マ。キ。升、歲末白米一升、瓜十、他所加地子所當之外、一斗百姓辨之、

一段 伊賀　本地子五斗五升　作順覺房

アラマキ升、數米トルマシ、歲末伊賀炭一籠、所當內他所公事無之、

一段 字片岡エノマヘ　本地子五斗八升　作藤三郎

アリマキノ升、歲末米一升、他所公事無之、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

二段 字河上イヽモリ　本地子四斗 二斗代　作了忍房北御門

飯。モ。リ。升、歲末柴一荷、元ハ高斗代也、但近年河成在之間、任現地之面、只四斗ニ定之、

在大和國東大寺河上飯守前〔中略〕○

一段 マツカサ　本地子七斗五升　作長命

イヽモリ升、歲末炭二籠、他所公事無之、

在大和國添下郡七條一里廿坪

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

三段 字伊賀門田　本地子一石九斗二升 六斗四升代　作彌五郎大夫

門。田。升。歳末伊賀炭三籠、代百卅文、他所公事無之、但本地子二石田。七升。斗也、其内七斗八升除之、今ハ一石九斗二升辨之也、

在伊賀國名張郡矢川條出作之内

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

二段清涌又ハヤクチ云々　本地子二斗一斗代　庄〇升〇作人持來、所當內公事無之、　作西法

一段清涌　本地子一斗二升　庄升、作人持來、歳末籠一枚、瓜二、所當內他所公事無之、　作六郎

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

二段字尻田押工　本地子一石二斗六斗代　山〇內〇ノ〇庄〇升〇十合■作人持來、但所當內段別一斗一升四合、并枚米二升、都合二斗六升八合出之、　作安主

在大和國山邊郡都介鄉水涌庄內

二段字尻橋押　本地子八斗四斗代　庄升、同上、但所當內段別一斗一升四合出之、　作覺賢房

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

三段ムヤマ　本地子內八斗一段七斗一段六斗一段　ム〇ヤ〇マ〇升〇、但所當內段別一斗一升四合、加地子方ハ出之、又段別一斗、領家方へ出之、其外公事無之、　作後藤次

一段宮ノ森亦ハサビ　本地子一石三斗近年一石一斗辨之　ムヤマ升、歳末白米二升、所當內一斗彼所ノ宮へ出之、　作行法

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段伊賀ノヤナセ　本地子一石　作權追

〇〇〇所當内二斗六升ハ學生供ニ出之、又一斗六升ハ檜注ミフ之、持升、余田ヲ被ニ破出之間、其分ニ除之、定米五斗八升納之、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

二段字夕崎尻江田　本地子二石二斗　一石一斗代　作春(スン)松

當〇堂〇升〇所當内殿淨米段別二升出之、所當外請料歳末之分ハ、名主取之、但ヤトモスレバ毛見之時ハ、彼請料歳末之分ヲアテガイテ、其殘ヲモテ毛見スベキヨシ百姓申、不可有其儀、依爲能田面々百姓得分内ヲ以辨之也〇中略

一段椎木(シイキ)　本地子八斗　作春若殿

當堂升、歳末七尺筵一枚、七月十五日ニ瓜茄子淺合一合長器米等、他所公事無之、

在大和國平群郡汲東漆條三里十九坪五六段目

〔古文零聚八〕金剛山報恩禪寺至德三年丙寅歳内檢帳

斗次第三色

〇塩〇地〇斗(シホヂノマス)　十三合四勺塩地斗ヲ納斗ニ延方、一升ニ三合四勺、〇中略

塩地斗ノ百姓ノ二升ハ、時料三升ニ延、〇中略

井〇田〇斗〇ノ一升ハ、時料一升一合ニ延、

内原郷〇中略

能刀　孫五郎大夫　横山守給　一反七斗代、堤(ツツミ)寛(ノ)免(ヒ)、シヲヂ斗合三石云々

〔日吉社幷叡山行幸記〕同二年〇慶長には、新院御治世わたらせ給ひて、大宮幷神輿造替の御沙汰あり、神殿の料足は、戸〇津〇升〇米、神輿の功程は京都の土藏にかけられけり、

〔多聞院日記〕天正十四年十月十二日、和州一國遣升、京〇番〇ニ被相定、於中坊十五日以前ニ升判ヲ可取之、判賃二斗ヅヽ、當升ニテ可取之ニ市十合ニ合同云々、地家ハ毎家一ツヽト可取之、萬一古升用之者ハ、可及成敗旨嚴相觸了、寺門ハ毎坊ニ成共、又ハ一坊ニ一也共ト云々、沈思々々、則克細工番匠ニ板ヲ

遣テ、代二升ニテ誂之、判賃ハ寺納以後ト被申云々、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一大工、大鋸引、檜物師、鍛冶、銀屋、钏、塗師、紺掻、革細工、瓦師、檜皮師、かべぬり、疊指、具足細工等、右諸職人賃、一日ニ上手者京。升。籾七升、中者京升籾五升、下手者京升籾三升、職人上中下之事者、其奉行人可相尋事、付舟番匠之賃者、京升籾可爲壹斗事、○中略

慶長貳年三月廿四日

〔律原發揮〕本邦京升造以曲尺

口内方四寸九分、底亦同、下倣此、深二寸七分、於口内斜有鐵弦、實積算法置口四寸九分、自乘得二十四寸零一釐、以深二寸七分乘之、得六十四寸八分二釐七毫、庸俗升法直用之、内減鐵弦之積、凡三分弱、餘得六十四寸五分半、是爲京升一升實積、本邦以算術鳴世者不爲不多、皆作書述諸術、然至升法未有減鐵弦之積者、此不委試之所致也、一升之所差也、雖至微、積至一斛則差幾五合許、不可不辨也、

〔諸品寸法往來〕京枡、大サハ壹合枡、貳寸貳分七厘四方、深サ壹寸貳分五厘、五合枡、三寸八分八厘四方、深サ貳寸壹分六厘、壹升枡、四寸九分四方、深サ貳寸七分、壹斗枡、壹尺五寸四方、深サ五寸八分八厘、

〔甲斐國志二國法〕京枡ハ、天正廿年伊豆山舊記ニ、壹貫文ニ付米壹石四升安。藤。判。升、本升トモ云フ、此のべ米壹石六斗八升壹才、京。升。或。京。判。トモ云トアリ、按ニ安藤某、北條家ノ司枡者ナリ、又謂榛。原。升。慶長八年六月八日、小笠原秀政、信州ニテ出セル掟書ニ、口籾之儀、壹石ニ付可爲貳升宛候、竹とかきにて百姓可計渡候、但新京升五斗入之事ト見ユ、此比ヨリ被用シニヤ、

〔度量雜記〕伏。見。升。徑五寸、深二寸五分弱、慶長新製、

○按ズルニ、此積六十二寸五分ナレバ、京升ノ九合六勺入才一二五トナル、卽チ九六ノ量ナリ、

〔水戸本北條五代記〕關東にて、升に大小あり、伊豆相模には、は。い。原。升。とて、京升に少大なる升をつ

かふ、武藏よりひがしの國は、大升とて、升のすみに手かけをつけ、一俵に三升入、五升入、一斗入の升あり、國々在々所々にて升かはる、然所に氏康時氏に至て、關八州の升、一升にあらためらるべき旨ふれらるゝ、所に、百姓共、先規のごとくさしおかるべき趣、訴訟申に付て相止らるゝ、武藏上總は、大かたはい原升也、件の升、北條氏直時代まで、安藤豐前守と云者作り出す、故に安藤升共名付、伊北彌五右衛門と云者、安藤升の大小を作る、其科に依て、天正十二年十月、小田原蘆子河原に、はたものにかけられたり、

〔毛吹草四〕近江

武佐升

〔善庵隨筆一〕今俗間に用ふる武佐升といふは、方四寸六分五厘、深さ二寸三分九厘八毛にて、寸積五十一寸八分六厘餘になるなり、赤松某云、そのかみ佐々木氏、江州を領する時、其國八十萬石を以、強ひて百萬石に當てんがため枡八合の升を用ひ、江州武佐の驛に倉廩を建て、米の事を司らせしより此名あり、今濃州今須驛、三輪治左衛門の家に、此升を藏せりと云々、

〔甲斐國志二國法〕枡屋

ムサ判ト云枡アリ、枡屋極印ナク、小民ノ樸枡ニ所造ニテ、無造作ト云名ナルベシ、鐵判枡ニ比スルニ、稍重テ定規慥カナラズ、（武佐トハ、江州地名、天文十三年佐々木家制升、號之武佐升ト云、與是不同、）

〔成形圖說十四農事〕麻須（中略）

武佐判量は近江武佐より出す、八合入なり、故に八合量とも唱ふ、（武佐は近江の地名なり、兼良公の關の藤川記に、近江の武佐といふ所にやどる、武士のゆがけはたてぞなびくなるうべこそ無佐の名は殘りける、）天文十三年、佐々木義賢、百姓の租を納に、二合を減じて收が爲に、近江武佐の倉にて造る所、是百姓を存恤の志にして、末代の惡政と稱せり、（中略）然を俗に或は之を石田量とも唱へて、石田三成、八萬石の地を十萬石に料んとて、八合入を用ひしな

ざいふは怠なる説なり〇中略又一說に柴田勝家の製る所なり、後世小量と印烙なきものを、漫にむさばんと呼ぶは、元無判と云ことの訛也と見えたり、武佐判量寸法、方四寸六分半、深二寸三分八厘半強、

〔算法地方大成〕二諸國俵入の事

一甲斐國の年貢、前々ハ籾納俵入、甲州升二斗二升入なり、甲州枡ハ、武田時代よりの遺法にて、今の京枡三升にて、甲州枡一升なり、當時も皆三升枡を用ふ、尤京枡も用ふれども、稀の事なり、都て何斗何升と、枡目ばかり唱ふるときハ甲州枡なり、又京枡を用ふるときハ、京枡何斗何升と、京の字を添て斷る事なり、甲州枡ハ、官許の枡座、甲府にありて、江戸枡座を用ひず、但し京枡ハ、江戸枡座を用ふ、甲州枡五合を半(なから)と唱へ、京枡壹升五合にあたる二合五勺を小半(こなから)と唱ふ、京枡七合五勺にあたる諸式商賣等にも、半ら小半らと呼て、升目をいはず、右籾貳斗貳升入ハ、京枡にて六斗六升なり、五分摺にして米三斗三升になるべきを、米性宜しきゆゑ、六斗六升の籾を摺て、米三斗六升と立たるものとみえ、甲州米一俵ハ、三斗六升入なり、此割合にて、一升の籾を摺て、五合四勺五才餘に當る、往古籾納ハ、日本一統といへども、甲州ハ世上米納になりたる以後迄も、籾納にいたしたるよし今ハ米納なり、

〔甲斐國志國法二〕枡屋

一本州ノ枡ハ、方七寸五分ニ、深三寸四分五厘七毫四四、但京枡三升入爲之壹升、即甲州枡トモ鐵判(カナハン)トモ三升枡トモ云、又都留郡ハ以貳升五合爲壹升、異其制ナリ、　はたご、壹升ノ四半ナリ、是ヲ壹配ト云、一日壹人ノ賄料トス、但京升七合五勺入方四寸五分、深貳寸四分零一、又四ツ入トモ名ヅク、　なから、即チ半(ナカラ)ト云義ニテ、端子(ハゴ)ノ半分ナリ、壹升ニハ八分ノ一ニ當ル、但京升貳合七勺五才入又此枡ヲせんじトモ呼ベリ、方三寸六分、深壹寸八分七厘五毫ナリ、　小半(コナカラ)、なからノ半分ナリ、是ヲ小せんじト云、方貳寸八分、深壹寸五分五厘餘、但京升壹合八勺七才五入即チ壹升十六分ノ壹ニシテ、中人以上ノ食ニ充ツ、其次ハ壹升

ヲ拾人ニテ食ス、勞力者ハ八人飯ト云、京枡七合五勺ヲ二度ニ食ス、大抵米壹俵（京升三斗六升入）百人シテ食ス、大積也ト、蓋舊說也、 府中工町ニ枡屋傳之丞ト云者アリ、造枡燒印ヲ押、彼先祖小倉總次郎トテ、武田家ノ印書ヲ持傳フ、（府中諸職人部ニモ出セリ○中略）

又傳之丞家藏ニ陣米京枡壹升アリ、傳ヘ云フ、大久保石見守國奉行ノ時、平岡岡右衛門ヨリ被渡由ニテ、岩波七郎右衛門、於役所請取之、卽チ京枡壹升入、同五合入、同貳合五勺入、三品造ラセラル、其御樣シ米ナリ、以故京枡ヲモ造リ來ルトナリ、按ニ是ハ慶長十二年以後、御料ノ頃ナルベシ、日向半兵衛奉行ノ時、同名五兵衛ノ印書ヲモ併セ藏ム、

籾斗桶ハ、甲州枡三升六合六勺六才六六入、（但京升壹斗壹升入）六桶ヲ爲壹俵、卽貳斗貳升入ナリ、圓徑內法、口ニテ壹尺、深壹尺、外ノ總高壹尺貳寸ニ造ル、

米斗桶ハ、京枡壹斗貳升入、（但甲州升ニハ四升）三桶ニテ三斗六升ヲ爲壹俵、當時御收納米ニ用之、圓徑內法、口ニテ壹尺貳寸、深壹尺貳寸、外ノ總高壹尺三寸ナリ、

右兩品桶屋町ノ彌五右衛門ト云者造之、彼ガ先祖ハ勝村清兵衛ト云、武田家以來ノ印書ヲ藏ス、有故更氏細井、因テ今細字ヲ燒印ニ用テ、桶ノ外ヘ押ス、鐵具ハ鍛冶町ノ源次右衛門ト云者造之、桶ノ內ヘ齋字ノ燒印ヲ押ス、是モ齋木助三郎トテ、武田家ノ印章ヲ藏ム、職人部ニ委シ、

古人云、昔時本州ハ皆籾納ニシテ、壹俵貳斗入リ六桶ニ積リ、壹桶ハ三升三合三勺三撮ナリ、慶長年中、國民黨結シテ、大久保石見守、積年私曲アル事ヲ訴于駿府、中郡筋極樂寺村ノ鄕士新屋將監ガ魁首トシテ、筋々ヨリ蟻ノ如ニ集ル、時ニ石見守疾ク知テ自殺スト雖モ、奸謀愈發覺シ、遂ニ三族ヲ夷セラル、下吏繋獄者多シ、然シテ國法事一ニ歸シ、諸民安堵シテ盡ク恩ヲ拜ス、其頃神祖論シ示シタマフニハ、本州ノ籾壹俵六斗入ヲ以テ換米三斗六升、古來六合摺ノ名アレ共、其實ニ相當リ難シ、自今壹斗ニ壹升宛減籾ヲ加ヘテ、六斗六升ヲ壹俵ト定ムベシ、卽甲州升貳斗貳升入

所用爲名

ナリ、且又武田ノ時ハ、國限リノ收納ナレバ、口米ノ沙汰ニ及バズ、以來ハ他國遲延ノ事可有ナレバ、自餘ノ國ニ准據シ、甲州ハ籾壹俵ニ甲州枡一升宛出スベシト云々國民承服、無敢違戾者、永世以爲法、自是五合四勺五才四五餘ノ摺ニ、當今ノ斗桶ヲ造ル所ナリ、尙租稅ノ條下ニ詳ニス、〇中略都留郡ノ枡ハ、甲州枡八合三勺三才三ヲ爲壹升、京枡貳升五合ナリ、小山田氏ノ所定ト云、勝山神主ガ所藏、天文十一年、米八百文ニ、今枡四升ト見ユ、其比ニ始リシ事ニヤ、

〔並山日記〕六三日、〇嘉永三年四月けふもまたつれ〳〵なりしに、ある人ふるき升どもをもて來てくれたり、抑當國〇甲斐所用の升はつねの京升とはいたくことなり、まづ一升といふは三升をさむ、次を一はいとて、貳合五勺、京升の七合五勺なり、其つぎをなからといふ、一合二勺五抄いりにて、京升の三合七勺五抄なり、其次をこなから小半といふ、六勺一抄五撮いる、京升一合八勺二抄五撮なり、このよつのます通用して、府中升座の燒印あり、またむさますとて、判なきもおほし、よろづのたなつものには、この升をもちゐ、酒あぶらやうの物には、京升をもちゐるとぞ、たゞしこは山梨八代巨麻の三郡のみ通用するおきてにして、都留郡はかはりめありとぞ、〇此間有上文甲斐國志一節一升を一配ともいふとあるは、我〇黑川春村きくところとひとしからず、かさねてまたたづねてむ、たゞし帝字の燒印につきては、國人奇異なる說をいへど、うけがたければ、こゝにはもらしつ、

〔地方新書〕寬文九年十一月廿九日に、江戶升不同有之に付而、京升分量に今度改之、樽屋藤右衞門所に、新升有之候、相求向後可被用候、以上、

〔寬文新編塵劫記〕二板當代の一升は、ひろさ四寸九分、ふかさ二寸七分也、

むかし升の法の事

一升ひろさ五寸四方也、ふかさ二寸五分、

〔延喜式〕三十七典藥寮家儲物　藥斗一口、藥升一口、

〔權量撥亂〕傷寒論藥升　按仲景氏方、凡云水幾斗幾升幾合者、皆以漢時常量言之、其云藥物幾升幾合者、皆以藥升言之、猶常用米量之外別有粟量及菽荅麻麥之量、○中略證類本草引名醫別錄曰、○中略藥升方作、上徑一寸、下徑六分、深八分、內散藥勿按抑之、正爾微動、令平調爾、今人分藥、不復用此、又曰、半夏一升、秤五兩爲正、此說雖始出於別錄、然觀其言今人分藥不復用此、則其爲漢世古法不容疑矣、此量雖名升、其實則一合、而非一升之制、故承上文十勺爲一合、直言其分寸、其非升斗之升可知也、○中略今以算法求一升寸度、上徑二寸一分五厘四毫四絲有奇、（當今尺一寸七分九厘五毫三絲三忽有奇、）下徑一寸二分九厘二毫六絲有奇、（當今尺一寸〇七厘七毫一絲六忽有奇、）深一寸七分二厘三毫五絲有奇、（當今尺一寸四分三厘六毫二絲五忽有奇、）乃知藥升一升、當今四勺六抄六撮有奇、因試以半夏驗之、○中略實比漢五兩、合若符契、可見別錄所載之藥升、果爲仲景氏分藥之量矣、

〔本朝醫談〕內裏の藥殿は安福殿の內にあり、侍醫藥生等候と拾芥抄に見えたり、ふるき藥升は此所にありしなり、福田方云、本朝藥升の定法、大升者九合の升なり、公家の藥殿に用之、經年序畢、天平寶字年中、遣唐使常式所用ハ、一大升を以て爲小四升、侍醫出雲宿禰廣貞が勘申所なり、典藥寮の御銚子は、九合升の三升納なり、湯藥方に常に所用者大升なり、小升者散藥等に用之、又小升者上徑一寸、下徑六分、深八分是なり、一說云、方圓二寸なり、又先所謂以大升爲小升四升者、所勘者九合升の二合五勺を小一升にあつるなり、延喜式民部省諸國貢蘇、大一升小一升あり、上文によりて考るに、大升は九合、小升は二合二勺五才、

〔安東郡專當沙汰文〕一滿熟歲宮中奉納之時淸酒支配之次第○中略已上宮中ノ分、壹斗九升三合也、（私記宮中酒升、依爲升大器、近代以代錢、全次郎荷用下行之、奉成事、嘉曆二年ニハ、三百七十二文下行之、元亨二年ニハ、四百五十八文下行之、又被全次郎荷用、大餅一枚志之、以代錢沙汰者、爲專當ニハ莫大ノ利潤也、可得其心之者也、以酒沙汰之時、酒屋升定二斗五升斗入也、）

〔古文零聚　八〕金剛山報恩禪寺至德三年丙寅歲內檢帳

斗次第三色

納斗(オサメノマス)　十合勺、納斗ヲ時料ニ延分、一升ニ一合六勺、コノ内一勺ハ増分ナリ、○中略

庄ノ納斗ノ百姓ノ一升ハ、時料一升一合六勺ニ延、

〔安東郡專當沙汰文〕一在池御倉付之時御。粈。納。之。升。勢寸法事

弘六寸、深二寸五分也、鐵尺定、中寸法也　高納在之升上居程ニナクヲ爲限、

○按ズルニ、此積九十寸ナレバ、其ノ一升ハ、京升ノ十三合九勺四才餘トナルベシ、

〔古今要覽稿器財〕春日目代米。納。升。

春日目代米納斗は、長一尺三寸、横一尺二寸五分、深二寸八分、この積四百五十五寸あり、そのいり目、京升の七升〇四勺八撮有奇にあたる、その銘に米納斗とあれば、斗升なるべし、しかれば、一升は京升の七合〇四撮有奇にあたる、

〔甲斐國志圖法二〕奉使小錄ニ云、慶長四年、勢州ノ古田兵部請取書ニ、米壹石拾ゟトアリ、信州安曇郡ニテハ、元和ノ比六ゟナリ、元和二辰年ノ印書一章ヲ載ス

元辰之納舛場野平上職御算用之事

高四拾九石三升七合者

右之拂方

一貳拾六石八斗五升

殘而貳拾貳石壹斗八升七合

此外合九斗貳升

〆貳拾三石壹斗七合ハ　拂。升。也

小左衞門印

印
庫

鹽平橋午時奥小使請
口にて納る分に引

〔續草廬雜談〕米價
先年慶長四年ノ古田兵部ノ請取ヲミシニ、米ノ價アリテ、後ノ考ヘニモナルベケレバ、コヽニ記ス、〇中略
　請取銀子ノ事
　　合百文目者　但十文目ニ付一石カヘ也
右ノ米拾石、ハライ升ヲ以請取所實正也、如件、
　慶長四年卯月十五日　　　　　　兵部判
　　　　　　　　　　　　　　使馬場千左衞門

官衙升

〔安東郡專當沙汰文〕一御粎俵二十四俵ニテ量之、但此内廿二俵ニテ、正供用五斛五斗并口粎一石一斗量之、(年々無相違、此廿二俵ニテ奉量之、)更殘二俵内、是家用升ニ一斗貳升殘之、

〔好古小錄下〕民部省廚斗(事本存)

〔集古圖四〕内侍所古斗(方一尺五寸、深三寸、板厚五分強、以檜作之、)

神社升

〔安東郡專當沙汰文〕一宮中(伊勢神宮)供用之御粎奉量之斗與在郡御倉付奉納之升高下量立事
合(以在地納俵一俵、宮中斗三斗ニ令量合也、在地納俵者、一俵別三斗五升宛入也、以彼俵加宮中數粎之定三斗量合也、)

〔安東郡專當沙汰文〕一長御館納粎量之次第
正納粎九斗、(宮中(伊勢神宮)斗定也)口粎一斗八升、彼是一斛八升量之、但御粎俵四俵之内、是家用升(八合升也)ニ二斗殘之、殘三俵餘ニテ、正納粎口粎、皆量滿之、年々此分無相違、

〔外宮子良館祭奠式下〕供用升
内長四寸八分　廣同　深二寸三分

〔古今要覽器財〕供用升

子良館の供用升、方四寸八分、深二寸三分、この積五十二寸九九二あり、今の京升　て、八合二勺○九四五有奇をいる、この供用升の小升といふものあり、方二寸四分、深一寸四分、この積八千○六十四分あり、今の京升にて、一合二勺四撮九二六四有奇をうる、

〔外宮子良館祭奠式上〕正月例

十四日　御竈木削（中略）

米（未精者也、後做此、）一斗六升（用一禰宜家供用升量之）

十九日　遣當館下部告物忌父等、以可有明朝參著之由也、

米　八升（以一禰宜家供用升量之）　自一禰宜取之

精米八升（同上）　同上（中略）

米　八升（以供用升量之）　自御母良取之

精米八升（同上）　同上

二月例

上子日　今晩　精米一升（以當館供用升量之）

三月例

朔日　糯米四斗八升（以一禰宜家供用升量之）　自一禰宜取之

二日　米粉一斗二升（以當館供用升量之）　自御母良取之

五月例

三日　糯米六斗四升（以一禰宜家供用升量之）　自一禰宜取之

〔外宮子良館祭奠式下〕六月例

十一日　粢米四斗、（以一禰宜家供用升量之）　自一禰宜取之

〔外宮子良館祭奠式下〕黑升。

內長五寸二分半　廣同　深三寸

〔古今要覽稿器財〕黑升

子良館に、黑升といふもの二あり、その大さ長五寸二分半、廣さもおなじ、深三寸、この積八十二寸六分八厘七五あり、今の京升にて一升二合八勺〇九有奇にあたる、一は長五寸一分半、廣さもおなじ、深二寸六分、この積六十七寸九分一八五あり、今の京升にて、一升〇五勺二一八有奇をいる、

〔外宮子良館祭奠式上〕正月例

元日　饗膳　九前　自政所取之

右神事已前、自政所持參當館、此饗膳、在任副物忌等分配之、若爲饗代取米、則以當館黑升量之、一斗二升取之、是亦副物忌等分配之、

〔外宮子良館祭奠式下〕六月例

十一日　米三升號鎭米、以當館黑升量之、

十二月例

晦日　從御母良受取米如左中略○

散供米一旬分、黑升一升宛、以當館黑升量之、一月分三升取之、

〔外宮子良館祭奠式下〕九月例

十一日　米一斛以當館供。用。升。量之　自瓶子館取之

此米中舞米八升、以白升。量之、授子一膳、又舞米四升、授子副物忌等、

〔外宮子良館祭奠式下〕斛升。

內長五寸一分半　廣同　深二寸六分

〔外宮子良館祭奠式上〕正月例

十四日　御竈木削〇中略

精米一升以當館例升量之　自番副物忌取之

五月例

晦日　氷餅一升研氷餅以當館例升量之　自御母良取之

〔外宮子良館祭奠式下〕九月例

十一日　米一斗八升以當館例升量之　自瓶子館取之

〔外宮子良館祭奠式下〕於。麻。加。利。升。

内長四寸四分　廣同　深二寸

同升一合升也

内長二寸二分　廣同　深八分　二倶同

〔古今要覽器財〕於麻加利升　小升

子良館の於麻加利升、方四寸四分、深二寸あり、此積三十八寸七二あり、今升にて、五合九勺九撮八四五有奇をうる、この升の小合、方二寸二分、深さ八分、この積三寸八分七二あり、今升にて、五勺九撮九八四五をうる、

〔外宮子良館祭奠式上〕二月例

上亥日　今夜於麻加利一升以當館於麻加利升量之也

〔外宮子良館祭奠式下〕十二月例

晦日　每日於麻加利下行如左

四升六合宛以當館於麻加利升量之　每日授役人當番〇中略

寺院升

五合宛〈上升同〉　毎日授〈上荷用〉
五合宛〈上升同〉　毎日授〈下荷用〉
五合宛〈上升同〉　毎日授〈壹番役人〉
五合〈上升同〉　朔日十一日廿一日、此三箇日授〈人長〉
右皆來〈于〉當館〈受〉之

〔古今要覽 器財〕春日社神供升

春日社神供升あり、銘によれば弘治年のものなり、その摺本に付て考ふるに、方四寸五分五釐、深二寸一分、積四十三寸四分七釐有奇あり、そのいりめ京升の六合七勺三撮有奇にあたる、此社の目代、米納の一斗升と三勺有奇少さく、玉水の驛岩崎氏所藏の長合升より二勺有奇強し、是等みな伊勢安東郡の十合升〈京升の六合一勺有奇のものなり〉といさゝかの違ひあれども、その原づく處はおなじかるべきなり、

〔甲斐國誌 二 國法〕枡屋

二宮神社ニ所用、宮枡ト稱スル者アリ、甲州枡七合五勺爲壹升、京枡ニハ貳升貳合五勺ナリ、其始詳ナラズ、

〔古今要覽 器財〕山門升　三井寺升　大津升

山門所領にて、年貢を納るに用ふる升は、方四寸八分五厘、深二寸三分弱、京升の八合三勺をいるるなり、是即天正十四年十月、京番にあらためらるゝまで行はれし十合なり、山門三井寺領なるがゆゑに、もとの如く用ひきたりて、今にいたるなるべし、

〔好古小錄 下〕反錢升〈南部藥師寺所傳、天文十五年所造、受今升八合五勺、〉

〔古今要覽 器財〕藥師寺反錢升

南都藥師寺に、天正六年の銘ある反錢升といふものあり、その徑四寸六分弱、深二寸五分有奇あり、この積五十二寸有奇、そのいりめ、京升の八合〇五撮有奇にあたる、

〔古今要覽稿 器財〕正傳寺升

正傳寺は、何の國といふことをしらず、その寺の寺料の文書に、升の寸方をのせたり、それに付てはかれば、方四寸、深さ二寸の升なり、この分積三萬二千分あり、今升に比するに、四合九勺五撮七抄有奇にあたる、伊勢安東郡の八合升といふものとはなはだちかし、

正傳寺衆僧等謹言上

右子細者、雲門庵領、就厳嶋年貢升之不審、先度證文出帶之間令披見之處、升之寸分明鏡也、仍不及異儀落居畢、然間彼升有出來者、年貢可渡進之由領掌之處、于今不渡賜而、結句年貢難澁云々、言語道斷之次第也、所詮任證文之旨、竪二寸、横四寸之升有出來者、無相違年貢可渡進者也、仍粗謹言上如件、

文明拾參年三月日

長講斗

長講斗といへるものは、新藥師寺康永年の升の刻識に、中院講方とあるの類にして、長講の供米をはかる料の升をいふなるべし、されば其の寺社によつて相違あるべし、

進上

能米貳拾石者 長講斗定

右件米者、事成熟之後、不日可令進上之狀如件、

建久捌年四月三日　神宮預祐口

〔大乘院寺社雜事記〕文正元年六月七日、光明皇后〇聖武后御忌日、於講堂修之、〇中略件料所者四十八町、

(中略)在二鎧田尻一十三石七斗內支配、
壹石政所　八斗橘政所　七斗法師　六斗僧都　五斗已講　四斗成業　一斗講師加分　一斗問者加分　二斗算生　一斗堂達　一斗上分
會所斗定、座納七石餘ハ、延十石五斗云々、會所斗ハ、長講九升也、

〔東寺執行日記〕雜々記
去永享年中ヨリ、田中町之內水口十丈分、被レ成ニ屋敷年貢加地子、公文所兩納所、毎年取立、此方へ出也、但イツモ水口十丈分立用シテ、殘當坊ノ升ニテ、三斗三升三合、毎年此方ノ往來ニ付、數十年渡處、納所乘慶圓秀、御所前居屋敷年貢不レ出、(中略)水口十丈分執行坊斗ニテ四石七斗七合、納所ヨリ毎年渡申處ニ、一石ニツキ九升ヅヽ裝束畢、已上四斗二升三合餘存候儀、是コソ南田ノ裝束分ニテ候へ、殊升ノ延ト申、四斗四升ニアタリ、執行方ヨリ無レ紛出候也、然ラバ悉左樣之儀立用シテ、殘リ毎年執行方斗ニテ、三斗三升三合、御倉ニテ執行へ渡者也、

〔東寺執行日記〕文明六年十月十四日、先日三石(坊斗)渡レ之、(十月七日)本斗ニ一石五斗ト有レ之、十五日渡レ之、(坊用)廿日、二石(坊斗定)國方衆中渡レ之、廿二日、二石(坊用)國方へ渡レ之、廿六日、田屋方へ、又一石渡レ之、(坊用)同中間ニ百文、定使(彥三郎)五百文、已上坊用斗ニ五石ト六百文トニテ百姓職分道行也、百文別ニ十合升九升宛(中坊升)賣之、十二月十八日、九升(坊升ニサノキカス)

〔東寺執行日記〕文明五年八月十五日、放生會行レ之、(中略)御供七前ニ、各飯一升九合宛(御供升ニ、ウキトハカリ)テ也、

〔東寺御領庄薗斗升增減〕東寺御領庄薗斗升增減之事
下行一斗事(中略)佛性一斗三升五合

〔東寺雜文書〕送進北面御油已下事

雜升

合
壹貫五百三十文　御油八升五合代一合別十八文宛
四百貳十五文　具足用途
三十文　筵料足
　已上壹貫九百八十五文
佛。性。斗。四石內
　分米二石八斗七升六合二勺二才下。行。斗。ニハ壹石八斗八升五合宛
　殘現納一石一斗二升三合七勺八才
右所ㇾ送ㇾ進之狀如ㇾ件
　應永廿三年十二月八日　公文所華押

〔東寺執行日記〕雜々記
天文八年十月比より、雨納所乘慶圓秀、總寺訴訟申儀は、南田四段より新寄進田方へ、佛。餉。升。ニテ四石四斗、執行方より每年出ㇾ之、○中略
　文明六年十月八日、御子分三斗一升七合之內、○中略七斗三升一合之內、佛。餉。升。請取之內事、○下略

〔長門本平家物語五〕白米こそすこし候へと申、いか程と御尋あり、本。器。の五升と申、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事
一付二御油一庄自二御目代方一油六斗、本。器。定。可ㇾ有二御沙汰一事、
　但近年一向無二其儀一、令者爲二維寺御計一、任二先例一可ㇾ被二沙汰付一者也、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事
一段ハウツノ森　本地子四斗　作良仙房

長器、歳末菓子荷、他所公事無之、

在山城國相樂郡祝園庄內中四里卅九坪〇自東二段目中略

一段　本地子四斗　作河內入道テカイ

長器、他所公事無之〇中略

一段　字長市ナカレ　本地子一石一斗　作宗七

小十一合、作人持來、歳末米四升、所當內一斗ハ請料也、地子內長器之一升ハ、ナシハラヘ出レ、但トリニ使者手タル也、

在大和國添上郡左京七條二坊一坪〇中略

一段　字ホケシ多々羅部　本地子一石二斗　作藏介

富堂升、歳末七尺筵一枚、瓜十、菩提院大御堂、一油七合、長器定、自是沙汰之、其外他所公事無之、

在大和國城下郡東鄕十五條二里八坪東畔本

〔執政所抄上正月〕十五日春季日吉大宮大般若御讀經七箇日事

佛供僧供米九石五斗六升　大津御厩地子　五斗六升　僧供承仕料　九石　請僧六口

料石口別一五斗

油壹升五合　大津御厩地子〇中略

大津御厩沙汰人、以御所斗可下行之由下知之、

〔東大寺大佛殿御常燈料田畠記錄〕田數所當等事

一段　字三輪久里　本地子八斗　作藤三郎

本斗、尼公ガ升也、他所公事無之、

在大和國城上郡廿條五里六坪〇中略

一段　字十市箱森　本地子八斗五升　作宗次郎

升量比較

升、尼公ガ私升也、識末米二升五合、茄子卅、他所公事准之、
在大和國十市郡東郷廿一條一里十五坪〔自西三段目〕

〔古今要覽稿 器財〕南氏升

南氏升は、何國にて用ひし古升といふことをしらず、その摺本に付て考ふるに、方四寸七分許、深二寸二分許あり、此積四十八寸五分九厘許あり、京升の七合五勺有奇をいるべし、即甲斐國用ふる所の宣旨升とおなじ、

〔好古小錄 下〕按民部省厨斗、十合升、山科升、近江升、東大寺常十合升、其名同ジカラザレドモ、受ル所ハ十合ノ八合升ニシテ、雜令ニ所謂十合ヲ升トスト云、一升ノマス也、此三升ヲ大升ノ一升トス、三八二升四合也、此ヲ半分ガ減大升ノ一升ニシテ、古升ノ一升二合、即時行ノ升ニテ九合六勺、賀茂社ニ所謂九六升也、此ニ四勺足シテ、今ノ一升マストス、

〔東大寺大佛殿燈油田文書 古量圖叢所引〕注進

大佛殿御油納所雜々事

合

一納升十一內

椙升大十一合　一斗　長器　延定一斗〔此下闕〕

檜升十一合　一斗　延定一斗五升三合四勺

飯守升十合四勺　一斗　延定一斗四升八合五勺

富堂升十合四勺　一斗　延定一斗四升五合

山城升十合三勺　一斗　延定一斗四升三合八勺

六山升十合二勺　一斗　延定一斗四升三合

荒蒔升大十合　一斗　延定一斗四升
相樂升　一斗　延定一斗四升二合八勺
忌部升　一斗　延定一斗三升五勺
門田升　一斗　延定一斗二升七合
伊賀八合　一斗　延定一斗一升八合五勺
已上
右大概記錄如件
永仁貳年三月日　御燈聖信性

〔東寺御領庄薗斗升増減〕東寺御領庄薗斗升増減之事
一下行一斗事
坊用　一斗一升　佛性　一斗三升五合
十三合　三升七合　上久世庄　八升一合
下久世庄　五升八合　上野庄　八升六合五勺
拜師庄　七升三合　植松庄　四升九合
女御田　六升八合　大山庄　六升七合五勺
矢野庄公田　七升一合一勺　太良庄領家　八升六合五勺
平野庄　七升二合　教冷院　三升六合
大山寺家斗　一斗一合九勺　買屋針小路猪熊　八升九合
一坊用一斗事
下行　九升一合　佛性　一斗二升三合

十三合	三升四合五勺	上久世庄	一斗二升三合
下久世庄	五升三合	上野庄	八升
拜師庄	六升五合五勺	植松庄	四升五合
女御田	六升二合	大山庄斗	六升八勺
矢野庄	七升三勺	太良庄	八升
平野庄	六升四合五勺	敎冷院	三升三合五勺
大山寺家斗	九升三合	買屋	八升一合
一佛性一斗事			
下行	七升一合	坊用	七升八合八勺
十三合	二升八合五勺	上久世庄	五升九合五勺
下久世庄	四升二合五勺	上野庄	六升三合五勺
拜師庄	五升二合五勺	植松庄	三升六合
女御田	五升	大山庄斗	四升九合
矢野庄	五升一合	太良庄	六升三合五勺
平野庄	五升一合五勺	敎冷院	二升六合
大山寺家斗	七升三合	買屋	六升四合五勺
一十三合一斗事			
下行	二斗五升四合八勺	坊用	二斗七升九合
佛性	三斗四升九合四勺	上久世庄	二斗一升五合
下久世庄	一斗五升一合五勺	上野庄	二斗二升五合

拜師庄　一斗八升八合　植松庄　一斗二升五合
女御田　一斗八升二合五勺　大山庄　一斗七升四合
矢野庄　二斗　太良庄　二斗二升五合
平野庄　一斗八升七合　教冷院　九升四合五勺
大山寺家斗　二斗六升二合　買屋　二斗二升七合
一上久世庄一斗事
下行　一斗一升六合　坊用　一斗一升七合
佛性　一斗五升六合　十三合　四升五合
下久世庄　六升九合　上野庄　一斗五勺
拜師庄　八升五合五勺　植松庄　五升八合
女御田　八升二合　大山庄斗　七升九合五勺
矢野庄　八升二合六勺　太良庄　一斗五勺
平野庄　八升四合五勺　教冷院　四升三合
大山庄家斗　一斗一升七合　買屋　一斗一合五勺○中略

康正元年乙亥十二月十五日　納所乘珍法橋判○以下七人署名略

〔東寺御領庄薗斗升増減〕私斗升増減事
一總寺下行斗一斗ハ　同斗子一斗三合二勺退
　總寺坊用斗子一斗八合アリ
一同下行斗一斗ハ　同坊用斗一斗一升アリ
一同下行斗子一斗ハ　同坊用斗子一斗四合八勺アリ

嵯峨

一總坊用斗子一斗ハ　同下行斗子九升五合五勺アリ
一同坊用斗一斗ハ　同斗子九升八合五勺アリ
已上
一總坊用斗一斗ハ　同斗一斗一合五勺アリ
一同下行斗一斗ハ　私坊用一斗一升三合四勺アリ
一私坊用一斗二合ハ　總坊用斗一斗アリ
一總坊用斗一斗　私坊用一斗三合四勺アリ
一總下行斗子一斗ハ　私坊用一斗一升アリ、
一總坊用斗子一斗ハ　私坊用一斗五合アリ
長祿三年己卯十一月廿八日　門指頭五郎四郎是ヲタメメ
坊用同小升トノタメ十二月十九日
坊用五升ハ　小升一斗五升三合三勺アリ
三合三勺ノ餘分也本法ナラバ一斗五升アルベシ
小升二斗ハ　坊用ニ六升三合三勺アリ
四合三勺不足也、本法ナラバ六升七合アルベシ、所詮小升、ナイサキナリ
正覺院石原十合一斗ヘ、下行一斗九升五勺、

〔延喜式 内膳 三十九〕凡量二年中所レ供雜菜一、停二斗用一レ稱、其斗斛所レ准、本司與二受レ物所司一、相共量定、

〔法隆寺資財帳〕合度量貳拾衡 鍮量四衡 福量四衡 倭量四衡 斗四口 升四口

〔江談抄 三 雜事〕嵯峨天皇御時落書多々事

「弖ロ月八三、中トホス小斗一、市中用二

〔空穗物語藤原の君〕ますをしろきいたゞきのうへにすゑ奉りて、いたゞきにいたゞき奉らんといひて、あやとむら、せに廿貫とらす、

〔執政所抄上正月〕上午日宮咩奠事略○中
八節竹五木　砥一束　斗一
已上上旬出納進之

〔經濟錄四律曆〕日本ノ量、古代ハ如何ナル制ニテ、斗斛ノ大小幾許ナリシト云事詳ナラズ、近世マデハ曲尺ニテ方五寸、深サ二寸五分ヲ升トセシヲ、當代改メテ方四寸九分、深サ二寸七分トセリ、方ニテ一分ヲ損シ、深サニテ二分ヲ增タルニヨリテ、內實舊量ヨリモ多シ、舊量ハ一升ノ內實六十二寸五ナリシニ、今ノ新量ハ六十四寸八二七ナリ、是新量ハ舊量ヨリ大ナリ、此新量ヲ今升ト稱シテ行フニヨリテ、舊量ヲバ古升ト稱シテ用ヒズ、國家既ニ新量ヲ制セラレテヨリ、部下ニ官局ヲ立テ、大小ノ量器ヲ作ラシム、其制鐵ヲ以テ外ヲ固メ、口ニハ斜ニ鐵弦ヲ施シテ、姦猾ノ者モ輙ク削小スルコトヲ防ギ、底ニ烙印ヲ打シテ制度ヲ明ニス、世俗コレヲツルカケマスト云フ、此法量ヲ天下ニ行ヒテヨリ、民間ニテ私ニ量器ヲ作ルコトヲ禁ズ、是誠ニ律度量衡ヲ同クストイヘルニ合ヘル故ナリ、然レドモ如何ナル故ニヤ、民間ニテ私量ヲ作リ用ルコト、今ニ至ルマデ止マズ、略○中又甲州ニハ武田氏ノ制トテ、二升五合ヲ一升トスル量アリ、江州ニハ佐々木氏ノ制トテ、八合ヲ一升トスル量アリ、コレヲ武者升ト云フ、武者ハ地ノ名ナリ、江州ノ內ハ今モ此量ヲ用ユ、豫州勢州ニハ、六合ヲ一升トスル量アリ、封建ノ世ハ、諸侯國別ニ制度ヲ立テ、其風俗ニ從テ治ムルハ固ヨリノ事ナレドモ、度量衡ノ三ツハ、天下通用スル法度ノ器ニテ、一統ノ制ヲ守ルベキ義ナル故ニ、唐虞ノ世ノ政ニ、同律度量衡トイヘリ、孔子ノ言ニ、謹權量審法度トノタマヘル、スナハチ此義ナリ、

〔度量衡考 度〕明營造尺

按明三種尺、〇中略太祖建國初、造鈔量田之際、親審其度、時値草昧、萬事苟且、吏之所裏、尺有不齊、太祖一時、隨裏隨定、不復用意、其尺各官守之、後世遂謂有三種尺矣、其實明尺、惟營造曲尺一已、如吾邦西京、大津、大坂、高槻等處升法各別、皆當時隨下所裏爲定、使更不爲姦僞、各處乃由一繹上定、遂奉爲制升、亦猶如此、

〔勘者御伽雙紙 中〕たとへば八升ますを、深さ五寸四分にして、面何程と問、

答云、九寸八分、

法曰、升法六十四寸八二七を置て、八升をかけて、深さ五寸四分にて割ば九十六寸〇四となるを、曲尺平方にして答へを得る也、

〔日本靈異記 下〕强非理以徵債取多倍而現得惡死報緣第廿六

田中眞人廣忠女者、讃岐國美貴郡大領外從六位上小屋縣主宮手之妻也、產生八子、富貴多寶、有馬牛奴婢稻錢田畠等、天年無道心、慳貪無給與、酒加水多沽取多直、貸日與小升、償日受大升、〇中略斗升斤兩種用之、與他時用七目、乞徵時用十二目而收、

〔太平將士美談 眞寶 抄所引 將遺 集〕成瀨隼人正、領分の町人、米屋八郎兵衞といふもの親より富めり、隼人正領分になりたる後、政事正しく、人歸服しければ、自分親より二つ升をつかひ候て、此の如く富有になり候、此の如く御政事正しくなり候ては、大に耻恐て候、一日も早く白狀に及び、御裁判を請たき由訴へけり、隼人正大に感歎せられ、親よりの無道を申し出、非を改め候に免じ、罪は申つけざる間、當年より七年の間、又穀類に二升をつかひ、自出す處は多く、人より取る處は少くいたし、外に呉服諸品類商賣いたし候樣にと申付らる、富める者なれば大に歡びて領掌しぬ、このこと他領迄かくれなく、此の店にて穀類を賣買ふもの多く、呉服諸品も調ければ、却りて前々よりも

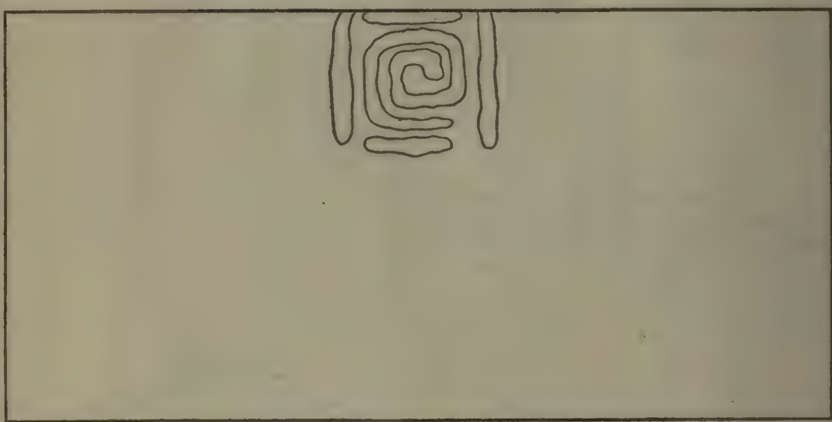
利倍多くなりてますます富たりとなり、

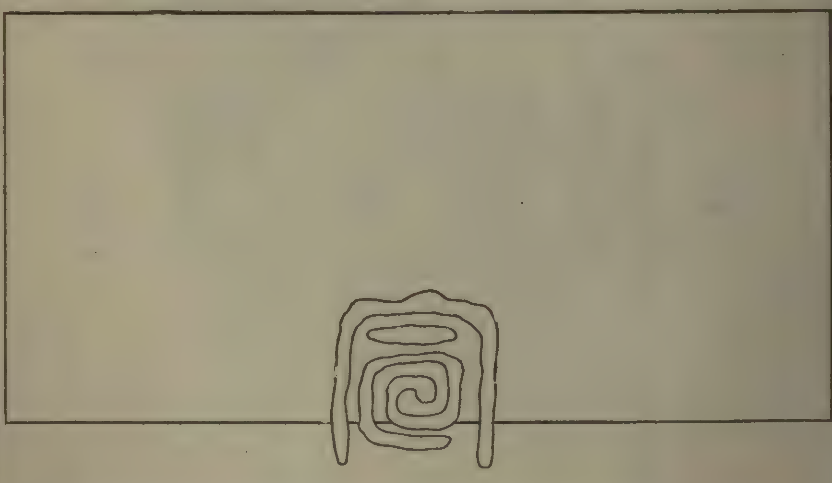
〔集古圖〕

宣旨升



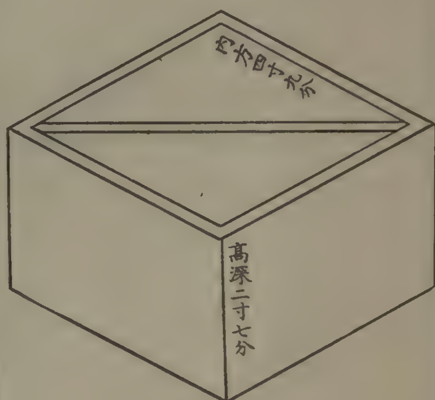
量





〔律原發揮〕

京升圖



〔人倫訓蒙圖彙〕



古事類苑

稱量部三

權衡

古事類苑

稱量部 三

權衡

權衡ハ物ノ輕重ヲ量ルノ謂ニテ、其器ヲ名ヅケテ、ハカリト云フ、此器ハ何ノ時ニ起リシニカ詳ナラズ、其史ニ見エタルハ、崇峻天皇ノ代ニ、久比ト云フ者ノ、呉國ノ權ヲ獻ジタルヲ以テ始トス、其後舒明天皇ノ代ニ、斤兩ヲ定ムルコト有レドモ、其制詳ナラズ、文武天皇ノ大寶制令ニ至リ、斤兩ニ大小兩種アリテ、二十四銖ヲ一兩トシ、十六兩ヲ一斤トシ、小兩ノ三兩ヲ以テ、大兩ノ一兩ト爲シテ、銀銅等ヲ量ルニノミ大ヲ用ヰ、餘ハ皆小ヲ用ヰシム、而シテ官私竝ニ、大藏省及ビ國司ノ題印ヲ請クルコト、度量ノ二器ニ同ジ、然ルニ桓武天皇ノ延暦ノ頃ニ至リテハ、大小ノ用法、及ビ其器ノ製作モ漸ク濫レテ、題印ヲ請クルコトモ行ハレザリシカバ、勅シテ令制ニ從フベキコトヲ令セラレタリ、而シテ延喜式ノ制ニ、湯藥ヲ調合スルニノミ小ヲ用ヰ、餘ハ皆大ヲ用ヰシメタルハ、恐ラクハ和銅六年、改制ノ時ノ定ナラン、降テ德川幕府ニ至リテ、秤座ヲ江戸ト京都トノ二所ニ設ケ、江戸ハ守隨彥太郎ヲシテ之ヲ管掌セシメ、東三十三國之ニ從ハシメ、京都ハ神善四郎ヲシテ之ヲ管掌セシメ、西三十五國之ニ從ハシム、而シテ其僞濫ヲ防グガ爲ニ檢定スルコトヲモ、亦秤座ニ委任セリ、

按ズルニ、二十四銖ヲ一兩トシ、十六兩ヲ一斤トスルハ、古來ノ定ナレドモ、後世匁ノ名起ルニ至リ、銖兩ノ名ハ、大ニ其用ヲ減ゼリ、例ヘバ何貫何百何十何匁何分何厘何毛何糸ト云フ

ガ如シ、此ㇳ云フハ、開元錢一文ノ重ヨリ起リタルモノニテ、ㇳハ即チ錢ノ字ナリ、而シテ斤兩ニ京目田舍目ノ區別、ㇳニ唐目、大和目等ノ區別アリ、

名稱

〔新撰姓氏錄左京皇別下〕商長首　吳權、〇中略其名云波賀理、

〔倭名類聚抄稱量十四〕權衡　兼名苑云、銓(音全)一名衡稱也、楊氏漢語抄云、權衡(加良波可利)

〔易林本節用集波〕權衡(ハカリ)

〔書言字考節用集器財七〕秤(ハカリ)(正二斤兩一者)稱(ハカリ)(音偁、通作稱、)銓(廣雅、稱謂之銓、)等子(同)

〔塵添壒囊抄五〕秤(ハカリ)事(附權衡門事)

ハカリハ何ノ字ゾ、秤稱(又稱)權衡皆ハカリトヨム也、魁本對相四言雜字ト云物ニ、ハカリノ繪圖ノソバニ秤字出ス、玉篇ニハ無之、三寶字類ニハ、秤ヲ俗字ト注シテ、稱ヲ本ニ出ス、又玉篇ニ秤字ヲ載スル本アリ、字注三寶ニ同ジ、韻會ニハ秤與稱同ジトシテ、至下權衡之稱ト云云、仍權衡ヲモハカリニ用也、權衡ハ、ハカリノ形歟、常ニ左右(モロ)折戸(テリト)ト云門ヲ權衡門ト云也、唐稱ニ似タルガ故也、㪷(ハン)ヲモハカルトヨム、五斗ヲ㪷ト云也、

〔成形圖說農事十四〕秤(ハカリ)(延喜式、蓋大小に通ずるの名なり、日本寄語に等子波介但と譯す、今俗に秤盤等を波加利と云、大抵二百以上の物をはかる、又天平と云、即秤なり、)加良波加利(漢語抄に權衡を訓めり、按に姓氏錄云、商長首上毛野、同氏多寄波世三世孫久比、崇峻御世被遣吳國、雜寶物爲交易、其中有吳權、其名云波賀理、久比奏曰、吳國以懸定萬之云、其名を波世賀理と云は、此間の人名づくる所、是即加良波加利なるべし、)知仗利(即小秤なり、關東にては仗を濁音に呼べり、等秤は宋太宗淳和中初て製すところ也と云、)

斤兩

〔日本書紀推古二十二〕十三年四月、是時高麗國大興王、聞日本國天皇造佛像、貢上黃金三百兩(ミホコ)、

〔日本書紀齊明二十六〕五年、〇中略是歲高麗使人、持羆皮一枚、稱其價(アタヒハカリテ)曰、綿六十斤、

〔日本書紀天智二十七〕元年正月丁巳、賜百濟佐平鬼室福信、矢十萬隻、絲五百斤、綿一千斤(ハカリ)、布一千端、

〔續日本紀聖武十三〕天平十一年四月乙亥、令天下諸國、改馱馬一匹所負之重大二百斤、以百五十斤爲限、

〔東大寺獻物帳〕

御鏡貳拾面全淺香一村重大卅四斤　寺權秤定卅三斤五兩

八角鏡一面重大卅八斤八兩徑二尺一寸七分緋纏帶八角榻匣盛鳥獸花背

圓鏡一面重大卅三斤八兩徑一尺五寸八分緋纏帶八角榻匣盛鳥花背

〔萬葉集五雜歌〕筑前國怡土郡深江村子負原、臨海丘上有二石、大者長一尺二寸六分、圍一尺八寸六分、重十八斤五兩、小者長一尺一寸、圍一尺八寸、重十六斤十兩、並皆楕圓狀如鷄子、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中三節祭時供給儲備幷勞作雜器事

九月例

縣稅稻一千四百卅七束

半斤、細稅二百廿束、以一把號一束、大半斤百八十束、以五把號一束、大斤千卅七束、

度會郡九百廿束　多氣郡廿束　神麻續百束、大半斤細稅百束、神服織八十束、大半斤細稅八十束、飯野

神戶十一束、大半斤十束、細稅十把、

〔止由氣宮儀式帳〕一新宮奉造時行事幷用物事

次取吉日、山口神祭用物幷行事如左、○中略

木綿二斤小　麻二斤小

〔延喜式五齋宮〕造備雜物

鵤小一斤、白鵤大四兩、鍊金小十一兩一分二銖、銀大五斤十一兩、水銀小五斤三兩、

〔薰集類抄〕黑方

六朱を一分とす、四分を壹兩とす、十六兩を小の一斤とす、卅八兩を大の一斤とす、小の三兩を大の一兩とす、小の三分を大の一分とす、もし少しあはせんと思はゞ、これらをつもりてあはすべきなり、

〔古今要覽 器財〕延久宣旨秤

延久に宣旨秤といふものを作られたるよし抄曁書いへど、それより九十年許のゝち、長寛の頃、刑部卿範兼卿のかゝれし、薰集類抄にしるされし權衡、大寶令延喜式の大小兩とたがふことなければ、延久の度には、新に法を設けられしにはあらざるか、

〔伊呂波字類抄 波員數〕斤 ハカリ 稱 同知輕重也、俗作秤、正斤兩也、稱之所起、起於黍、十黍爲絫、十絫爲一銖、六銖爲一分、四分爲兩、十六兩爲斤、卅斤爲鈞、四鈞爲石、

〔拾芥抄 下末物充〕物充 斤目有大小、所謂胡粉、白鑞、銅、鐵、絲、綿、紅、蘇芳、已上爲小目、大目、金銀、水精、青木香、金青、綠青、陶砂、已上爲大目、

六銖爲一分、四分爲一兩、十二兩爲一屯、十六兩爲一斤、十一斤也、三斤爲大一斤、四十八兩也、大十斤爲稻一束、一束一斗米舂五升、十撮爲勺、十勺爲合、十合爲升、十升爲斗、十斗爲石、十釐爲毫、十毫爲分、十分爲把、十把爲束、今案世俗誦曰、六銖一分、四分爲一兩、十六兩爲小一斤、四十八兩爲大一斤、是近俗耳

○按ズルニ、十釐爲毫、十毫爲分トアルハ、十毫爲釐、十釐爲分ノ誤ナリ、蓋シ小數ノ准位ハ、分釐毫絲忽微纖沙塵埃ナレバナリ、

〔書言字考節用集 十數量〕一貫 イックワン 千錢目也、其重猶錢十貫、文之義、活法十百爲十貫、一文 イチモン 則一錢也、十分之量、重如錢十文、故支那俗、借象制爲字、自呼爲錢音、

〔梅園日記 五〕夊字

月堂夜話に、銀何夊ト書、正字ハ文目ヲヤツシタル者ナリ、一說ニ夂ノ字ノ内ヘ、片假字ノメノ字ヲ入タルナリ、此說數學夜話、亦あり、按ずるに此說非なり、夊字は錢字なり、もろこしの書に出たるをこゝの人も記しおけり、〇中略、清の畢沅ガ中州金石記、宋の慶曆三年、淮源廟錢鐘識に、下列拾錢拾夊人名、錢字作夊見于此、或云、泉字草書、〇中略、畢沅ガ或云といへるは、明の趙宧光ガ說文長箋に、泉草作夊とあるをさせるなるべし、

○按ズルニ、泉貨鑑ニ、明ノ崇禎通寶ノ背文ヲ擧ゲテ一夊トアリ、亦一錢ナルベシ、

〔金石萃編金一百五十七〕圓覺禪院鐘欵

按圓覺禪院、今名圓覺寺、在韓城縣北門外、○中略此鐘〇金承安四年所鑄、周刻僧名及助緣男女姓名二百餘人、今俱不錄、○中略又有書钅氏者二人、钅當卽錢字、俗書省文已見於此、併識之、

〔南浦文集上〕修葺石體宮文

正八幡大菩薩靈廟、艮方有石體、石體有四句刻文、○中略妙文出現之後、營一社於石體上、○中略然而歷數十星霜、風雨壞篠隙矣、是可忍乎、今執行大宮司助長、行以扣村々民家之門、欲受溢米半錢之樂施、以修葺篠隙矣、有司奏之於龍伯○島津義久尊君、尊君平日瞻之仰之者不爲淺矣、況復感執行助長之志也、施數萬糸、以爲助緣、

〔大內家壁書〕金銀兩目御定法之事

こがねしろかねの兩目之事は、京都の大法として、何れも一兩四文半錢にて、二兩九文目たる處、こがねをば一兩五糸にうりかふ事、そのいはれなし、殊に御分國中如此云々、代はたかくもやすくも、其身々々のはからひたるべし、兩目の事は京都の法をまもるべし、若此旨を背やからあらば、經上裁罪科有べし、自然又此沙汰を破輩を聞出事あらば、償遂糺明、其科不遁者重科にをこなはるべし、仍下知如件、

文明十六年五月日　參河守重行判

〔元祿板新編塵劫記三〕第十二金銀千枚を開立にしてつもる事

金千枚のおもさ四十四貫目有、是を百七十五糸にてわれば、一寸四方の坪二百五十一坪四分二厘八毛五絲七忽一となる、

〔早算法〕くり綿、金壹分ニ付何程と問、定法の六九七五を實として、拾駄の代金を以割ば、何百何十目と知る、

〔元祿板新編塵劫記〕一見一掛算

あるひは銀六。匁二。分五。厘。ヅヽ十六あはすれば、百目になる也、

〔元祿板新編塵劫記〕一見九圖

あるひは銀二百卅七貫五百八十三匁五分を、九千五十石八斗にわれば二十六匁二分五厘ヅヽ也、

〔元祿板新編塵劫記〕一見八圖

あるひは銀八十四貫九百八十二匁九分八釐を八千六百五にわれば、九。匁。八。分。七。厘。六。毛。ヅヽ也、

〔甲斐國志〕二國法秤子

古へ秤ニ京。目。田。舍。目。ト云事アリ、斤兩ノ數今未ㇾ詳、淺野左京、文祿五年正月廿八日、與ㇾ野中新兵衞ㇾ印書（野中金座ナリ、甲金條下ニ委シ、）金壹兩者京目、（五十枚出目）金四兩貳分壹朱、爲中目、（貳百枚之出目）合五兩貳分貳朱壹厘五ナリハ爲中目、延引請取候也トアリ、按ㇾ之京目方強シト知ベシ、但是ハ本州ニ限タル名ニハ非ズ、

昆陽漫錄ニ載スル所、

北條陸奧守平氏照內
由木左衞門尉景盛

天正六年戊寅三月拾七日

拜遣高野山（內龍光院之宗忍坊）

二親爲ㇾ成佛、高野山月牌奉ㇾ納之、但黃金貳兩京目、國宗刀長二尺三寸、

今本州ニ所ㇾ用斤兩ハ、凡物百六拾目ヲ爲ㇾ壹斤ㇾ通例ナレドモ、藥種類產ㇾ本州ㇾ者、貳百目或貳百三拾目ヲ爲ㇾ山。目。壹斤、龍王村ヨリ出ス煙草モ貳百目壹斤ナリ、謂ㇾ之ㇾ西。目。重。目。又龍。王。目。其餘煙草ハ皆百六十目ナリ、木綿ノ實アルヲ粒モメント云、六百目ヲ爲ㇾ壹斤、貳拾斤ヲ爲ㇾ壹本ㇾ藥俵ニ入、繰綿壹斤ハ三百目ナリ、貳斤ヲ爲ㇾ壹玉ㇾ拾玉ヲ謂ㇾ壹本ㇾ六貫目ナリ、直江ハ甲金壹兩ニ木綿ハ何斤、（又云く、何把）り綿ハ何貫何百目替ヘト云、（土地ニヨリ木綿壹斤ニ、くり綿百五六拾目アリ、貳百目チ得ルナリ、直ニモ自ラ高下アリ、）

〔金銀圖錄一正用品〕一水戶藥王院、天正年間古文書ノ內、此書年號チ失ストイヘドモ信長ヘ兩度音信トアレバ、天正年間ノ書ナリ、

僧正口宣之爲御禮、禁裏樣ヘ黃金三兩、田舍目、御門跡樣ヘ同貳分、院家ヘ同貳分、御進上候、

一同文書ニ

　來春早々可被調進御禮物書立

金壹枚京目、　禁裏樣

同五兩同　親王樣中略

同壹兩　御あちや〳〵樣

同壹枚　御門跡樣

同三兩此內貳兩、京目、　同民部丞

同壹分　伊勢丞

　以上六枚九兩三分歟

右之外、三兩一分一朱、信長ヘ兩度御音信、鳥羽小路失墜仕候、此方ヘ可被相渡分如斯候、

〔地方新書〕今量一升は十合なり三匁の重を十二錢とす、其十二分の一を一分とす、一錢十分を大一兩とす、十錢十六兩を大一斤とす、百六十錢也俗に唐目、又黑目と稱す、今普通に用ゐる所のもの是なり、是一種の衡法也、

〔地方新書〕一種藥舖にて、大和目と云あり、百八十匁を以て斤とす、地黃當歸等、此斤を用ゐる也、凡九六量大一斤の目なり、是穗井田忠友の目擊せしと云、法隆寺東大寺等の、古器の斤兩と符合す、大和と云は日本ヤマトと云義にて、百六十匁を唐目と云に對へし名ならんか、山椒は六十匁を一斤とすと云へば、こは大和目の小斤の名殘なるべし、自餘二百錢を一斤とするあり、之を口目と云、又二百十匁を一斤とするあり、之を沈香目と云、又

二百三十錢を一斤とするあり、之を白目、又輪目と云、藥舖にて專ら之を用ゐる也、又二百五十錢を一斤とするあり、之を山目と云、諸國より大坂に輸送する藥品の類、多くこれを用ゐるなり、紅花は百匁を一斤とし、五倍子は百三十匁を一斤とす、木綿に平野目、煙草砂糖に、大坂西國備後等の目あり、茶に宇治目（二百目斤也）山目、里目等あり、此外も猶多かるべし、其異同の來由もあるべけれど、畢竟商賈の私に稱するものは、徵とはしがたし、（今漢土産物をはかるに、四錢を一兩とし、白銀に四匁三分を一兩とす、）

〔雍州府志六土産〕茶　凡本朝貴茶也舊矣、（中略）凡宇治中十一家茶師、納公方家之茶於壺而獻之、其餘各所製之茶、或一袋、或二袋、納十一家所詰之壺內、是謂御通、倭俗不能獨立、而遂隊連屬、是謂通、周密納物曰詰、至茶特密、極茶十錢目、納小紙袋、壹雙謂壹袋、故袋壹箇稱半、凡小袋二十、則約壹斤、而其重二百目也、極極品之謂也、

○按ズルニ、此ニ云ヘル二百目一斤ハ、所謂宇治目ナリ、

〔經濟錄四律曆〕日本ノ古ノ秤ハ、如何ナル制ナリシト云コト詳ナラズ、（中略）異國ニテハ十錢ノ重サヲ一兩トシ、十六兩ヲ一斤トス、一斤ハ百六十錢也、斤ヨリ以上ハ幾斤ト數ヘ、斤ノ下ハ幾兩幾錢幾分ト數フルコト、金銀藥物糸綿□□何ニテモ輕重ヲ以テ數フルモノハ皆此類ヲ用フ、日本ニテハ物ニ隨テ斤兩同カラズ、黃金ハ四錢八分ヲ一兩トス、銀子ハ四錢三分ヲ一兩トシ、餘ノ諸物ハ大抵四錢ヲ一兩トス、或ハ五錢ヲ一兩トスル物モアリ、斤ニ至テハ百六十錢ヲ一斤トスルハ通法ニテ、二百錢ヲ一斤トスル物モアリ、二百三十錢、或ハ二百五十錢、或ハ三百錢ヲ一斤トスル物モアリ、尋常ノ粗大ノ物ハ斤ヲ以テ數ヘズ、只十匁百匁ト數ヘテ、千匁ニ至レバ一貫目ト數ヘテ、其上ハ百千萬貫匁ト云フ、貫ハスナハチ錢一千文ナリ、匁ハスナハチ錢ノ字ナリ、カクノ如ク幾匁ト數ヘテ上ルハマギラハシキ事ナシ、斤兩ニテ數フルモノハ、上ノ如ク斤兩ニ不同アル故ニ、常ノ人惑ヒヤスク、姦猾ノ民、欺詐ヲナシヤスシ、異國ノ如クニ、斤兩ヲバ一同ニ定メラレンコ

ト、政事ノ便利ナルベシ、

〔令義解 十雜〕凡（中略）權衡、廿四銖爲兩、（謂、以秬黍中者百黍重爲銖、廿四銖爲兩、）三兩爲大兩一兩、十六兩爲斤、

〔唐律疏議 二十六雜律〕雜令、（中略）秤權衡、以秬黍中者百黍之重爲銖、二十四銖爲兩、三兩爲大兩一兩、十六兩爲斤、

〔本朝度量權衡考 權衡〕本朝令ニ、權衡廿四銖爲兩、（本注、三兩爲大一兩、）十六兩爲斤、義解ニ、謂以秬黍中者百黍重爲銖、廿四銖爲兩トアリ、是モ唐令ニ、秤權衡以秬黍中者百黍之重爲銖、二十四銖爲兩、三兩爲大兩一兩、十六兩爲斤、ト云ヒシニ因リ給ヒシナリ、古器ノ權衡ノ證トスベキ者今存セズト云ヘドモ、（好古小錄ニ、天平以來ノ器ニ斤兩ヲ題シタルハ、皆今ト同ジト云ヒタルハ、サモ有ルベキコトナガラ、如何ナル器ヲ見タリシカオボツカナシ、）（中略）通典ニ武德四年廢五銖錢、（漢ノ五銖錢ナリ）鑄開元通寶、每十錢重一兩、計一千重六斤四兩、二十四銖、則一錢重二銖半以下ト云ヒ、舊唐書ニ、開元通寶錢、重二銖四絫、積十文重一兩、一千文重六斤四兩ト云ヘバ、（イヅレモ大稱ニテ計リシナリ）開元錢ニヨリテ唐稱ヲ起スベシ、（中略）然ラバ、今ノ一匁ハ、唐ノ大稱ノ二銖四絫ニシテ、卽宋以後ノ一錢ナリ、（宋ノ時、二銖四絫ヲ一錢トシ、二絫四黍ヲ一分トセシヨリ、錢ノ名遂ニ廢シタリ、附錄ニ詳ニス、）故ニ今一匁ヲ二銖四絫トシテ權衡ヲ起セバ、

銖（三百黍）今四分一釐六毫六絲六忽不盡、（釐或ハ氂字ヲ借用フ、俗書ニ厘ニ作ル、集韻ニ見ユ、又毫字ヲモ書テ厘ニ作ル、千祿字書ニ、厘ハ上通下正トアルヲ、湯玄操ガ音義ニ、音釐又音毫ト云ヒシハ、此厘字ヲ定メカネタルナリ、今俗毫ヲ毛ト云フ、豪字ヲ俗ニ毫ニ作ル故、ソレヲ書キシ者ナルベシ、今俗一毫ヲ一拂ト云フ、此名何ヨリ出タルニカ詳ナラズ、或人ノ云ヒケルハ、拂ハ忽ノ訛音ニテ、ソレヲ誤リテ、毫ヲ十分シタル數ノ名トセシナリト云ヘリ、錢ノ內ヲ分釐毫絲忽ト稱ルコトハ、度ノ小數ノ名ヲ稱ノ小數ノ名ニ借リタルナレバ、上件ノ事ドモ度考ニ云フベキヲ、今俗稱ノ名ニ尊用フル故、コヽニ如此ハ云ヘルナリ、）

兩（七千二百黍）今ノ十匁（通典ニ、每十錢重サ一兩ト云ヒシハ、卽是ナリ、按ズルニ、說文ニ、兩二十四銖爲一兩ト云ヒ、兩再也トアリテ、二字同ジカラズ、後世ハ皆兩ニ作リテ、兩字ハ廢レタリ、）

斤（一萬一千五百二十黍）今ノ百六十匁（後世ハ銖絫ヲ廢シ、錢分ヲ以テ諸物ヲ稱レドモ、斤ト兩トハ、唐ノ稱法ヲ變ズルコト無シ、）

是雜令ニ三兩爲大一兩ト云ヒ、量銀銅穀者、皆用大ト云ヒシ大稱ニテ、六典延喜式等ニ藥ヲ合スル外ハ、悉大ナル者ヲ用フト云ヒシモ此稱ナリ、小稱ハコノ三分ノ一ナレバ、

銖（百黍）今一分三釐八毫八絲八忽不盡

兩（二千四百黍）今三匁三分三釐三毫三絲三忽不盡

斤（三萬八千四百黍）今五十三匁三分三釐三毫三絲三忽不盡

〔古今要覽 器財〕令大兩　小兩

大寶令の權衡は、黍二千四百粒の重さを壹兩とし、十六兩を壹斤とし、四十八兩を大壹斤とすることゝ、唐の權衡とおなじ、是を量に比するに、壹合の黍は、十籥一萬二千粒にして、小五兩の重さなり、（雜令）是を今黍に考ふるに、大寶小壹合、今の壹勺四撮五有奇にあたる、壹勺四撮五有奇の黍の重さ、今秤五錢八分有奇にあたり、五錢八分有奇に三を乘じて、十七錢四分有奇にあたる、是大一合の重さなり、此を五分して小壹兩をもとむれば、今の三錢四分八釐有奇にあたる、此黍二千四百粒の重さなり、（黍の大さ百粒にして、横黍尺壹尺にあたるものをさる、普通の黍は百粒曲尺の七寸二三分に過ず、用ゆるにたへず、）是を小壹兩として三を乘じ、大壹兩をもとむるに、十錢〇四分四厘有奇にあたる、また是を度にもとむるに、方壹寸に分積一千あり、即黍千粒に比すべし、千粒は十銖なり、よつて横黍百粒尺（即今の小尺、今の曲尺の八寸三分三釐有奇、）の方寸を大尺（即今曲尺）にもとむれば、方八分三釐有奇にして、分積五百七十八分〇〇九五有奇にあたる、即小尺の千分なり、水を以て準とし、この方寸の重さをこゝろみるに、四錢四分六釐有奇なり、是を十銖として一銖をもとむるに、今の四分四釐六毫有奇にあたる、二十四を乘じて十錢〇七分〇四毫有奇をうる、是黍にもとめたる十錢〇四分四釐有奇と、僅に二分六厘を差ふ、是共に唐秤を求むる法にして、六典及び皇朝雜令と相同じ、（法隆寺に現存せる銅升に、大廿六斤の銘あり、今秤に校するに、三貫三百目あり、二十六歸して一斤をもとむるに、今秤の百貳拾六匁九分二釐三毫有奇にあたり、大壹兩七錢九分三釐二毛有奇にあたる、けだし鑞落の底破れ

たれば、この斤兩證とするにたらず、

〔令義解 雜十〕凡度地量銀銅穀者、○中略皆用大、此外官私悉用小者、

〔延喜式 雜五十〕凡度量權衡者、官私悉用大、但測晷景、合湯藥、則用小者、

〔令義解 雜十〕凡用度量權官司、謂大藏省、及諸國司之類、皆給樣、其樣皆銅爲之、

〔令義解 關市九〕凡官私權衡度量、每年二月、詣大藏省平校、○中略不在京者、詣所在國司平校、然後聽用、○義解文見度量篇、

〔類聚國史 政理八十〕延曆十七年十月乙未、勅、○中略權衡先有定製、平校行用、亦具令條、然所司怠慢、曾不遵行、大小任意、輕重由人、收納多濫、蠹害尤甚、自今以後、宜改此弊、○中略就大藏省依法平校、永絕奸源、若違此制、□寘嚴科、

〔守隨家文書 古今要覽所引〕分國中以守隨秤黃金可令商賣、若或用私之秤子、或於拵直雚者、可被所罪科者也、仍如件、

天正十一年十月五日　榊原小兵衛尉奉之

守隨彥太郎殿

〔守隨家文書 古今要覽所引〕關東中秤目事、任天正十一癸未年十月五日先御判旨、如年來彌全可令沙汰之趣所被仰下也、仍執達如件、

慶長十九年　對馬守　大炊助

守隨兵三郎殿

〔御定書百箇條〕似せ秤、○中略拵候もの御仕置之事、

寬保二年極

一似せ秤拵候もの　引廻之上獄門

但掛目違無之においては中追放

〔享保集成絲綸錄三十四〕承應二巳年閏六月

一守隨善四郎二人之秤目、無相違被仰付候上ハ、六十六ヶ國に而用之遣可申事、

一東三十三ヶ國は守隨秤、西三拾三ヶ國は善四郎秤、直段無高下賣可申事、

附守隨秤、西三拾三ヶ國ニ而賣セ申間敷候、

善四郎秤、東三拾三ヶ國ニ而賣セ申間敷候、

若相違之釐有之候而賣候者於有之は、相定之通、守隨善四郎互可改之事、

此趣今度被仰付候間、自今以後當御地之儀は不及申、東三拾三ヶ國之者共、此旨可相守、今迄持來候諸人秤守隨改、秤目不同之惡敷分ハ取上候、秤目能分ハ守隨ニ印を爲致、其儘遣可申候、印賃ハ秤一挺ニ付一分ヅヽ守隨ニとらせ候、是又左樣ニ可相心得、善四郎秤遣度ものは、守隨ニ印を爲致可遣もの也、

閏六月

明暦元未年八月

一以前茂度々相觸候得共、町中ニ古秤隱置申由被聞召上、彌此度被仰付候間、此旨堅可相守候事、

一ちぎ、わた秤、皿秤、れいてんぐ、其外萬之古秤、于今於有之は、其町々ニ而吟味致、當月中ニ守隨方江月行事持參仕、改させ遣可申候、勿論守隨秤之外つかひ申間敷事、

一旅人古秤之儀も右同前

右之通、町中家持之儀は不及申、借家棚かり下々迄念を入爲申聞、向後萬之古秤隱置申間敷候、若相背候者、急度曲事可申付事、

八月

萬治二亥年六月

町中ニ而、爲之秤、手前ニ而さを幷おもりを取替、其上取結をも手前にて取替候由相聞へ候、向後左樣成儀、手前ニ而仕間敷候、附古秤遣申間敷候、自然緒切レ候歟、又は秤惡敷成候はゞ、御定之通守隨所江遣可申候、少茂相背候はゞ、曲事に可申付候、

六月

元祿元辰年十月

覺

一町中ニ惡敷秤有之由相聞、不屆ニ候、縱守隨方より仕出し候秤にても、後に拵直し、惡敷秤遣候もの有之候はゞ、穿鑿之上、急度可申付候間、此旨相心得、惡敷秤堅遣申間敷候、以上、

十月

〔牧民金鑑十六〕享保六年四月晦日御書付

諸秤千木、新古ニ不限、修覆糸付等內々にて拵用候儀、堅仕間敷候、此段向々へ可被相觸候、以上、

丑四月

寛保三年六月日御書付

金銀掛合候分銅、寛文年中、改以前之古分銅、兩替仲間にて遣候由相聞候ニ付、京大坂堺近江之分潰等迄、外にて賣買不致、潰直段を以、後藤四郎兵衛方へ買受させ、目輕き古分銅、內々にて賣買致間敷旨度々相觸候處、今以西國幷長崎筋にてハ、古分銅、多賣買いたし用候由相聞候、此已後內々にて賣買いたし候儀ハ勿論、不隱置四郎兵衛方へ可相渡候、尤四郎兵衛より、分銅改役人相廻り、紛敷分銅ハ取上候筈ニ候、其趣急度可相守者也、

寛保三年八月九日御書付

諸秤之儀、古來より守隨彥太郎役人相廻改候處、近年ハ私事之樣ニ心得候哉、諸秤數多致所持候

者も秤少々出し見せ、不宜秤ハ隱置、或ハ秤所持不致旨申、改不請者も有之候樣相聞候、前以相觸候通、守隨方より役人相廻改候節、諸秤不隱置、不殘出し、改請候樣可致候、尤紛敷秤ハ、取上候筈ニ候、此旨急度可相守者也、

右之趣、東海道東山道北陸道幷丹波丹後但馬、都合三十三ヶ國、御料ハ御代官、私領ハ地頭より可被相觸候、

寛保四年二月十四日御書付

神善四郎秤相用候國々へ、善四郎方より役人相廻秤改候節、秤數多所持之者も不隱置、不殘出し見せ、改請候樣可致候、尤紛敷秤は、取上候筈ニ候、此旨急度可相守者也、

右之趣、五畿內山陽道南海道西海道山陰道之內、因幡伯耆出雲石見隱岐、幷壹岐對馬、都合三十五ヶ國、御料ハ御代官、私領ハ地頭より可被相觸候、

寛保四年二月日御書付

神善四郎名代之者、爲秤改西三十三國へ相廻り候ニ付、傳馬之儀、寺社奉行證文相渡遣候間、無滯可差出旨申渡候樣可被致候、右國々之儀ハ、寺社奉行可被承合候、

二月

延享五年五月十八日御書付

守隨彥太郎手代共秤改國々へ相廻り候節、所々に於てかさ高成仕形、如何成儀共相聞候、以來右體之儀有之候ハヽ、彥太郎儀、急度御咎可申付候、相愼入念申付候樣、可被申渡候、

右之通、御細工頭へ申渡候間、爲心得可被達候、尤所々におゐて、かさ高成仕形、如何成儀共有之候ハヽ、領主より可申出候段、向々へ可被達置候、

五月

秤座

寶暦二年八月十一日御書付

諸秤之儀古來より、守隨彦太郎役人相廻改候處、近年ハ私事之様ニ心得候哉、諸秤數多致所持候者も、秤少々出し見せ、不宜秤ハ隱置、或ハ秤所持不致旨申、改不請者も有之候様相聞候、前以相觸候通り、守隨方より役人相廻改候節、諸秤不隱置不殘出し、改請候様可致候、尤紛敷秤ハ、取上候筈ニ候、此旨急度可相守者也、

右之通、先年相觸候處、可取上秤も、守隨方へ不相渡場所有之、猥に秤賣買いたし、緒等も手前にて取替、懸目不同之秤、遣候者も有之趣相聞不屆に候、前々相觸候通、守隨方役人相廻改候節、諸秤不殘改を請、西三十三ヶ國の秤、東三十三ヶ國にて通用無之、取上に相成候筋の秤、守隨方へ可相渡候、諸秤新古に不限、守隨方の外にて賣買致間敷、手前にて衡幷錘緒等取替申間敷候、若諸秤隱置改不請、猥に賣買致、或ハ手前にて衡幷錘緒等取替候者有之候ハヽ、急度咎可申付候、

右之通、先達て相觸候向々へ、猶又可被相觸候、

〔三貨圖彙一〕京秤座、神ノ家ハ、本國ハ勢州ニテ、京室町家ニ仕官シ、秤座免許セラレ、夫ヨリ代々京住也、慶長年ニ、大權現、二條ノ城ヘ登御ノ砌リ、先祖豐後掾被召出、御目見ノ上、不相變京秤座免許ヲ蒙リ、御用被仰付、其後元和元卯年三月、駿府ヘ被召出、秤ノ義御赦免ニテ、善四郎一人ニ被仰付、○中略向後別人ノ秤用ヒ間敷旨、御代官衆ヘ被仰渡、其節諸秤可相渡旨蒙仰、依テ悉ク諸秤、御代官ヘ相渡候、嚴有院様御代、明暦元未年、江戸表ヘ被召出、甲州金秤被仰付候古例モ有之ニ付、守隨彦太郎ヨリ相願、東國通用秤ノ義相願候ニ免許セラレ、此後東國西國、守隨神兩家ヨリ、秤ノ義ハ支配仕候様被仰付、此以後ヨリ、兩家ニテ秤座相勤ル、

但シ東三十三ヶ國　守隨彦太郎
西三十三ヶ國　神善四郎

其後寬文八戊年、秤ノ御證文、右兩人ヘ被下置、其節屋舖地拜領ス、右御證文ハ、御代々被下置候、

〔國花萬葉記 一上 山城〕秤　神善四郎 二條玉屋町

〔華洛羽津根 一〕秤座

夷川西洞院東　神善四郎

〔雍州府志 七 土產〕權衡　權衡斗量寸尺、天下所通用、而有少違、則大誤人、故近世被定其人、關西洛下善四郎所作權衡用之、關東江戶守隨所製用之、

〔甲斐國志 二 國法〕秤子

一江。戶。秤。座。守隨彥太郎代、甲府八日町ニ居住シテ、坂本淸九郎ト云、本ト皆武田ノ秤子ナリ、神祖御入國ノ後、守隨ハ江戶ニ召サル、文書ノ寫五通、淸九郎藏之、但淸九郎原氏ハ長坂ナリ、後有故改今氏ト云、國ノ內秤杜秤等淸九郎改之、

定

令在府御細工之奉公相勤候條、町棚壹間宛、商賣之諸役有御免許之由被仰出者也、依如件、

天正二甲戌閏十一月廿四日朱印　山縣三郎右兵衛尉奉之

守隨　鈴木淸三郎

同與治郎　長坂善七郎

又一章ハ、天正四丙子年二月廿二日勝賴印書、同文言ナリ、

但シ釣閑齋奉之

守隨作吉川彥太郎、三人名ハ同ジ、

朱印 ◯ 定

一町棚壹間宛諸商賣役之事

一利倍役之事
一宿次之諸役之事附人足之事
右三ヶ條之役、御細工之奉公相勤之間、一切被ㇾ成二御赦免一之由被二仰出一者也、仍如ㇾ件、
天正八年庚辰八月十六日
釣閑齋 奉ㇾ之
吉河彥太郎
鈴木清三郎
同與治郎
長坂十左衛門尉

甲州秤子之事如二前候一、不ㇾ可ㇾ有二相違一者也、依如ㇾ件、
天正十一年十一月廿六日御朱印
榊原小兵衛
神谷彌五助 奉ㇾ之
守隨彥太郎殿

分國中、以二守隨秤一、黃金可ㇾ令二商買一、若或用二私之秤子一、或於二搉甞糴一者、可ㇾ被ㇾ處二罪科一者也、仍如ㇾ件、
天正十一年十月五日
榊原小右兵衛尉 奉ㇾ之
守隨彥太郎殿

〔三河後風土記 二十八〕三浦三崎番附守隨町年寄之事
同年〇天正十八年九月十二日、〇中略其頃甲州にて秤商賣せし守隨兵三郎といへる者、關東御入國と聞、早速甲州より江戶に來り、多門傳八郞にゆかりあれば、傳八郞を賴み、井伊直政へ願ひ、關八州權衡を掌らん事を申出る、神君彼はる〴〵甲州より早速參たるを御稱美にて、直に願の通御免有て、御朱章をぞ下されける、

自今以後、御分國、以守隨秤、可令黄金諸色商賣者也、仍如件、

天正十八年月日御朱印　守隨彥太郎日本橋南四丁目

〔國花萬葉記七上武藏〕秤

〔寶曆十四年大成武鑑三〕御秤所　十後二人ふち京橋具足丁　守隨彥太郎

〔慶應二年大成武鑑三〕御秤所御細工所頭支配　十後二人フチ日本橋はくや丁　守隨彥太郎

〔經濟錄四律曆〕日本ノ古ノ秤ハ、如何ナル制ナリシト云コト詳ナラズ、當代ハ京都ト東都ト兩處ニ官局ヲ立テ、京都ハ神氏、東都ハ守隨氏ニ命ジテ大小ノ秤ヲ作ラシメラル、東國ハ守隨ノ秤ヲ用ヒ、西國ハ神氏ノ秤ヲ用フ、民間ニテ私ニ秤ヲ作ルコトヲ　ズ、秤ヲ作ルコトヲ得ザルノミナラズ、秤ノ少ニテモ損ジタルヲ私ニ修補スルコトヲモ許サズ、又神氏ノ秤ヲ東國ニテ用ヒ、守隨氏ノ秤ヲ西國ニ用ルコトヲモ許サズ、若此法ヲ犯スモノアレバ、兩局ノ徒、見ツクルニ隨テ、其秤ヲ奪取テ、衡ヲ折テ棄ル、是國家ノ法令ニテ、制禁甚嚴ナリ、度量衡ノ三ツノ中ニテ、只此法ノミ至テ嚴密ナリ、秤ハ微細ナル物ニテ姦ヲナシヤスキ故ナルベシ、誠ニ謹權量ヲトノタマヘル孔子ノ聖語ニ合テ、目出度法令ナリ、

〔倭名類聚抄十四稱量具〕權衡　廣雅云、錘音垂謂之權、和名、波加利乃於毛之、

〔伊呂波字類抄波數〕錘ハカリノオモシ八稱曰錘、又謂之權稱、

〔節用集波〕錘カリノヲモリ

〔書言字考節用集七器財〕權ハカリノヲモリ廣雅、錘謂之權、稱錘同

〔藻鹽草十七調度〕秤　秤の石かけいれのはかりの石のおもくさもこさしは民のうれへあらじな

〔東齋隨筆政道〕延久三〇後三條善政には、先器物を作られけり、〇中略斛器は方なる槽を差す、石をくゝり下ておもしにして、二またの木に懸て、穀倉院にして、國々の米をば納られけり、

〔商人職人懷日記 二〕信州に涌出る金のべ澤の金山最中の時分、賑はしきに目とまり、萬見めぐるに、○中略 葉たばこは賣て、きざみ賣なきゆゑか、鬧しき中に手々に染切にして、あたら貲砦を粉灰にするを、是はと思ひ寄、合口斗殘りしを賣て、うすば一丁、たばこ壹斤求めて、竹のはかり、石のおもりして、小屋々々を賣あるく、

〔書言字考節用集 七器財〕分銅(フンドウ)又作二一等一、本名法馬、

〔古今要覽 器財〕天平

天平は、江戸に六百四十餘あり、是兩替屋の法器にして、私ならぬものなれば、他に用ゆることをゆるさず、その法は、卽明の天平を張介賓類經用ゆるなり、法馬は五百匁より三百匁二百匁百匁にいたり、五十匁より四十匁三十匁二十匁十匁まで、五匁より四匁三匁二匁一匁まで、五分より四分三分二分一分迄、合せて廿一あり、この法馬は後藤の製する所にして、盤と針口とは中堀與十郎といふもの、製する所なり、

張介賓類經　秤有大小、擬古天平法馬數、則蓋天平之始尙矣、天平今云針口法馬今云分銅卽權錘之本也、衡之左右設盤、而法馬與物、相秤輕重、針口平均不齟齬爲準、見法馬數知幾等目、

〔三貨圖彙 一〕今ノ秤ノ目、一文目ハ、開元錢一文ノ量目ナリ、十文目ヲ一兩トスル事、唐ノ制ニシテ、則開元錢ヲ法トス、今後藤家ニテ造ル分銅、十匁ハ、銘ニ一兩トアリ、兩目ハ十兩、五百目ハ五十兩トアリ、皆唐ノ制ニヨル歟、右分銅ノ制、何レノ世ヨリ起ルト云コトヲ不知、○中略 令義解ニ凡用度量權衡官司、謂大藏省、及諸國司之類、皆給樣、其樣皆銅爲之トアリ、今ノ分銅ノ形ノ物ナルヤ、右樣ノ分銅秤ハ世ニ存セズ、仍テ其形ヲ不知、今造ル所ノ分銅秤ハ、慶長年中、神祖ノ命有テ、今ノ座方ノ祖ニ造ル事ヲ免許セラル、分銅ノ形、如今表ニ兩銘アリテ鶴龜ノ模樣毛彫アリ、裏ニ後藤家極印有ト云、按ニ慶長時代ノ秤ニ、寶盡シ、或ハ秋ノ野ニ蝶ナドノ模樣有之秤アリ、コレ等ハ諸侯ノ好ム處歟、右ノ

分銅モ此類ナラン、併シ慶長以前ノコトハ不知、元和以來寛永ノ頃ノ分銅ハ如今ナレドモ、美銅ニシテ彫銘モ正シク、黃唐銅ト云ガ如シ、今用ユルトハ制至テ精シ、○中略此分銅、大坂ニテハ十人兩替ノ者、寛文年以來所持シ仲間ノ新分銅、是ニ合セテ輕重ヲ量リ、於會所月々立會改之、是ヲ樣見セ新分銅ト云、元文年中、後藤家ヨリ、諸國分銅改ノ時、是ヲ取上ゲ潰シトス、仍テ今其古物世ニ存セズ、秤ハ猶古物世ニ殘リテ、今モ座方ノ改ヲ請テ用ユルコトヲ免ス、○中略今海內用ユル所ノ分銅、是又後藤家ヨリ造リ出ス、併シ元和年前後、一統ナラザル時代ハ、右分銅モ民間ニ數ナク、依テ士民私ニ分銅ヲ造リ、極印ナクシテ是ヲ用ヒシナリ、漸ク治世ニ及ビ寛文五年、始テ公ノ制令アリテ是ヲ改メラル、其時右極印ノ分銅ハ、其儘目方相改メ、於無相違ハ、後藤家ヨリ極印ヲ打、印料ヲトリ、其儘ニ通用セシトナリ、

〔古今要覽器財〕權の形

令に載する權の形、定かに傳へたるものなし、職人盡歌合にみえたるものは、全く今の秤のおなじ、守隨彥太郞云、慶長の比は、未極。印。を用ひず、その、ち代々實名の極印を打たりしゆゑに、先代の錘をあらたむる時は、實名の一字、或は歸納の字を以て、小圓印として、打添る事となりたり、四代目の彥太郞正得以來、實名の極印をあらたむることなし、谷文晁家藏、慶長九年の月日を記せし錘あり、二代目彥太郞の錘なるよしいへり、

又秤に天下一と銘せし秤あり、その極印正得の字あり、是を守隨に質すに、四代目彥太郞正得が時、元祿のはじめ、私に天下一の號は、けやけきことなりとて改めたりといへども、公より停められたるにはあらざれば、今もたま〳〵天下一の秤をもちきたる事あれども、直しつかはずといへり、

〔日本永代藏五〕朝の塩籠夕の油桶

權衡用法

町人は算用こまかに、針口の違はぬやうに、手まめに當座帳付べしと金の有德人の、あまたの子どもに申わたされける、

〔好色一代男四〕火神鳴の雲がくれ

奥ふかなる家にて、天秤はり口の響き、さもしくも耳に入て、(下略)

〔三貨圖彙一〕御本丸又西ノ御丸ヘハ、毎年拜禮ニ罷出、御目見ノ節、御香具秤ト云ヲ獻ズルヲ例トス、(中略)皿、オモリトモ銀、

〔藻鹽草十七調度〕秤　一さほともよめり

〔書言字考節用集七器財〕權衡(ハカリノサナ)

〔令義解九關市〕凡用稱者、皆懸於格、(謂、稱者稱輕重也、格者横木所以懸稱也、)

〔勸者御伽雙紙中〕はかりの錘の重さをかけずしてしる事

はかりのさほばかりをみて、其をりの重さをしるは、末のこり緒より皿緒までの寸を取て、其寸をむだ目より末の方へくらべて、其あたる所よりむだ目迄の目、卽錘のおもさ也、又中の取緒より皿緒までの寸をとりて、前目にあてヽしるも、本の取緒にてとりて、向目にあてヽしるも同事也、さりながら中と本の取緒は寸みじかくして、少しのちがひみえず、故に末の取緒にて考べし、

〔令義解九關市〕凡用稱者、皆懸於格、用斛者皆以概、(謂、稱者稱輕重也、格者横木所以懸稱也、概者量所以平斗斛也、)粉麪則稱之、

〔類聚三代格八〕太政官符

應諸司納米用秤事

右出納明察、載在法令、而頃年廩院大炊納米之日、未必概量、下用之時、量欠稍多、斯則因檢納諸司不存覆量也、宜自今以後、本司先毎俵概量、已知無行濫、然後史官收之、但諸司檢納之時、不更概量、輙用權衡、若有行濫及量欠、必令本司備償、不曾寬宥、

沿革

承和十一年十一月二日

〔新撰姓氏錄 左京皇別下〕商長首　上毛野同氏、多奇波世君之後也、三世孫久比、泊瀨部天皇諡崇峻御世、被遣吳國、□雜寶物等獻於天皇、其中有吳權、天皇勅此物也、久比奏曰、吳國以懸定萬物、分爲交易、其名云波賀理、天皇勅之、勿令他人用、久比男宗麻呂、舒明天皇御代、負商長姓也、日本紀漏、

〔扶桑略記 四舒明〕十二年庚子、始定斗升斤兩、

〔續日本紀 二文武〕大寶二年三月乙亥、始頒度量于天下諸國、

〔續日本紀 六元明〕和銅六年四月戊申、頒下新格幷權衡度量於天下諸國、

秤有數種

〔書言字考節用集 七器財〕盤秤サラバカリ（又云銀秤）

〔書言字考節用集 七器財〕合秤ガフバカリ（奴隸分食所用）

〔類聚名物考 調度二〕秤　はかり　ちぎ　俗言れいてんぐ

杠秤チギは大秤なり、鍵の付たるを云なり、れいてんぐとは、銀秤の事にて、釐等具の轉語にして、釐だめともいへり、毫釐を正すのはかりなり、

〔雍州府志 七土產〕權衡（中略）權衡倭俗稱禮伊氏牟具、中華人今謂釐釐等具、倭俗禮伊氏牟具、誤釐釐等具者乎、

〔守隨家文書 古今要覽所引〕甲州金秤子之事、如前々不可有相違者也、仍如件、

天正十年十一月廿六日　榊原小兵衞
神谷彌五助奉之

守隨彥太郎殿

〔書言字考節用集 七器財〕天平テンビン（唐音所呼）

〔雍州府志 七土產〕天秤　泉南針口屋製之、其餘流今在洛下賣之、法馬後藤家製之、俗所謂分銅也、

〔人倫訓蒙圖彙六〕天秤(てんびん)　堺よりいづるを上とす、代十一匁、又は十二匁なり、針口(はりくち)京兩替町堺(さかいや)與三兵衞、御池通與十郎、松原室町與三左衞門、大坂今橋筋にあり、代九匁、又は十匁、分銅法馬と號す、小川通舟橋後藤四郎兵衞、江戶白銀町三丁目にあり、大坂本町一丁目新左衞門、一組代廿五匁也、五百目分銅壹ツにて代十五匁なり、

〔川角太閤記五〕一牢人ばら、卽時に相集候と伺候へば、人數に應じ銀子を渡せよとて相渡候、其樣子を如水(黑田)○被レ及レ見候に、座敷にて天秤二丁三丁にて掛渡候處に、奉行抔を呼付、我ははや老後に及候間、箇樣成事は、我代には重て有間敷候、

〔日本永代藏二〕怪我の冬神鳴

大津の町に、醬油屋の喜平次といふ者有ける、○中略客の遊興、晝夜のかぎりもなく、天秤のひゞきわたり、金銀も有所には瓦石のごとし、

〔享保集成絲綸錄三十四〕正德元卯年十二月

覺

一秤之直段貳匁相增、向後壹挺ニ付五匁五分宛賣渡、修復之直段は不レ相增一候間、此旨町中不レ殘可レ觸二知一者也、

十二月

正德四午年正月

秤增直段之覺

一れ。い。て。ん。ぐ。　壹挺　壹挺ニ付昔直段三匁五分、卯年ゟ直段五匁五分、張紙ニ增直段ニ不レ及候

一蘯。直。秤。　壹挺　壹挺ニ付昔直段五匁、卯年ゟ直段七匁、右同斷

一小。直。秤。　壹挺　壹挺ニ付昔直段三匁、卯年ゟ直段五匁、右同斷

一綿。秤。　壹挺　壹挺ニ付、昔直段六匁、卯年ゟ直段八匁、八匁七分

一大。引。通。綿。秤。　壹挺　壹挺ニ付昔直段九匁、卯年ゟ拾壹匁、拾三匁

一大。皿。秤。　壹挺　壹挺ニ付昔直段八匁、卯年ゟ直段拾匁、拾壹匁六分

一中。皿。秤。　壹挺　壹挺ニ付昔直段六匁五分、卯年ゟ直段八匁六分、九匁五分

一小。皿。秤。　壹挺　壹挺ニ付昔直段五匁、卯年ゟ直段七匁、増直段ニ不ㇾ及候

一千。木。三。拾。貳。貫。目。掛。　一挺　壹挺ニ付昔直段三拾匁、卯年ゟ三拾貳匁、四拾三匁

一千。木。貳。拾。六。貫。目。掛。　一挺　壹挺ニ付昔直段貳拾五匁、卯年ゟ直段貳拾七匁、三拾六匁

一千。木。拾。六。貫。目。掛。　一挺　壹挺ニ付昔直段拾五匁、卯年ゟ直段拾七匁、貳拾壹匁

一千。木。拾。壹。貫。目。掛。　一挺　壹挺ニ付昔直段拾貳匁、卯年ゟ直段拾四匁、拾七匁五分

一千。木。六。貫。目。掛。　一挺　壹挺ニ付昔直段七匁、卯年ゟ直段九匁、拾匁

一千。木。三。貫。五。百。目。掛。　一挺　壹挺ニ付昔直段四匁五分、卯年ゟ直段六匁五分、増直段ニ不ㇾ及

一千。木。貳。貫。目。掛。　一挺　壹挺ニ付昔直段三匁五分、卯年ゟ直段五匁五分、右同断

秤直段之儀、向後右張紙之通相成候間、此旨町中可₂相觸₁者也、

〔古今要覽 器財〕今所ㇾ用秤

黑。銀。秤。

元目積出ㇾ五拾目ゟ　中緒拾匁ゟ　上目壹分ゟ

角。銀。秤。

同上

纏。銀。秤。

同上

大○直○小○秤○
元目四文目ゟ　上目壹分ゟ

長○厘○直○秤○
元目壹文目ゟ　上目壹匁ゟ

小○匁○直○秤○
元目五分ゟ　上目壹分ゟ

拾○兩○掛○秤○引通精
元目壹分ゟ　上目壹兩ゟ

小○直○秤○
壹分ゟ四文目迄

同○目○無○秤○
壹分ゟ壹兩迄

貳○分○掛○秤○
二分銀二兩二分迄

大○皿○秤○
元目五百目　中緒百目　上目壹糸

中○皿○秤○
元目百目　中緒五十糸　上目壹糸

小○皿○秤○
元目百目　中緒十糸　上目壹糸

綿秤

元目五百目　中緒百目　上目壹匁

大引通秤

同上

小引通秤

綿秤同

三拾二貫秤

元目十貫目　上目百目

貳拾六貫秤

元目五貫目　上目百目

拾六貫秤

同上

拾貫秤

元目貳貫目　上目五十目

六貫秤

元目壹貫目　上目二十目

三貫五百目秤

元目壹貫目　上目十匁

貳貫秤

元目五百目　上目十匁

壹。貫。六。百。秤。
元目五百目　　上目十匁
壹。貫。秤。
元目貳百目　　上目貳匁
中。直。秤。
二。重。秤。
入。子。秤。

〔三貨圖彙 一〕御本丸、又西ノ御丸ヘハ、毎年拜禮ニ罷出、御目見ノ節、御。香。具。秤。ト云ヲ献ズルヲ例トス、此秤、

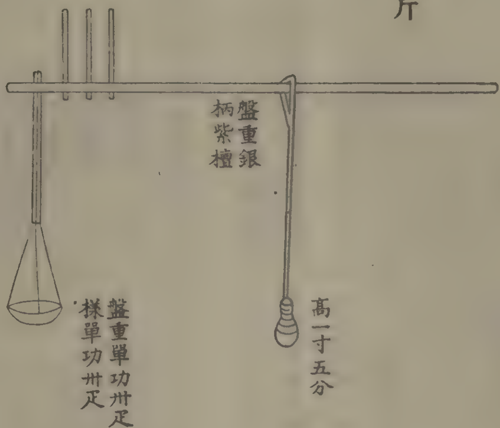
一上目十五匁掛ムタメ有リ但星一ツ一分ヅヽ
一前目五十目掛ヅヽ掛廿匁但星一ツ二分ヅヽ
前ノ上目四十四匁十兩掛ムタメ有但星一ツ二分七厘五毛ヅヽ
一向目百六十目掛ヅヽ掛五十目但星一ツ一匁ヅヽ
但皿オモリトモ銀

右ノ節、御時服拜領ス、元祿十七申年ヨリ、隔年拜禮、又禁裏御所ヘモ、年頭八朔ニ御禮相勤、御香具秤ヲ献ズ、此時御所ヨリ、靑銅二貫文ヲ例トシテ被下置、此香具秤ト云ハ、

一上目五十目掛ムタメ有但星一ツ二分ヅヽ
上ノ前目四十四匁十兩掛ムタメ有但星一ツ二分七厘五毛ヅヽ
一前目百六十目ヅヽ掛五十目但星一ツ一匁ヅヽ
一向目五十目ヅヽ掛百目但星一ツ十匁ヅヽ

〔類聚雜要抄〕

斤

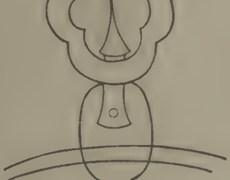


〔古今要覽 器財〕

法馬の圖

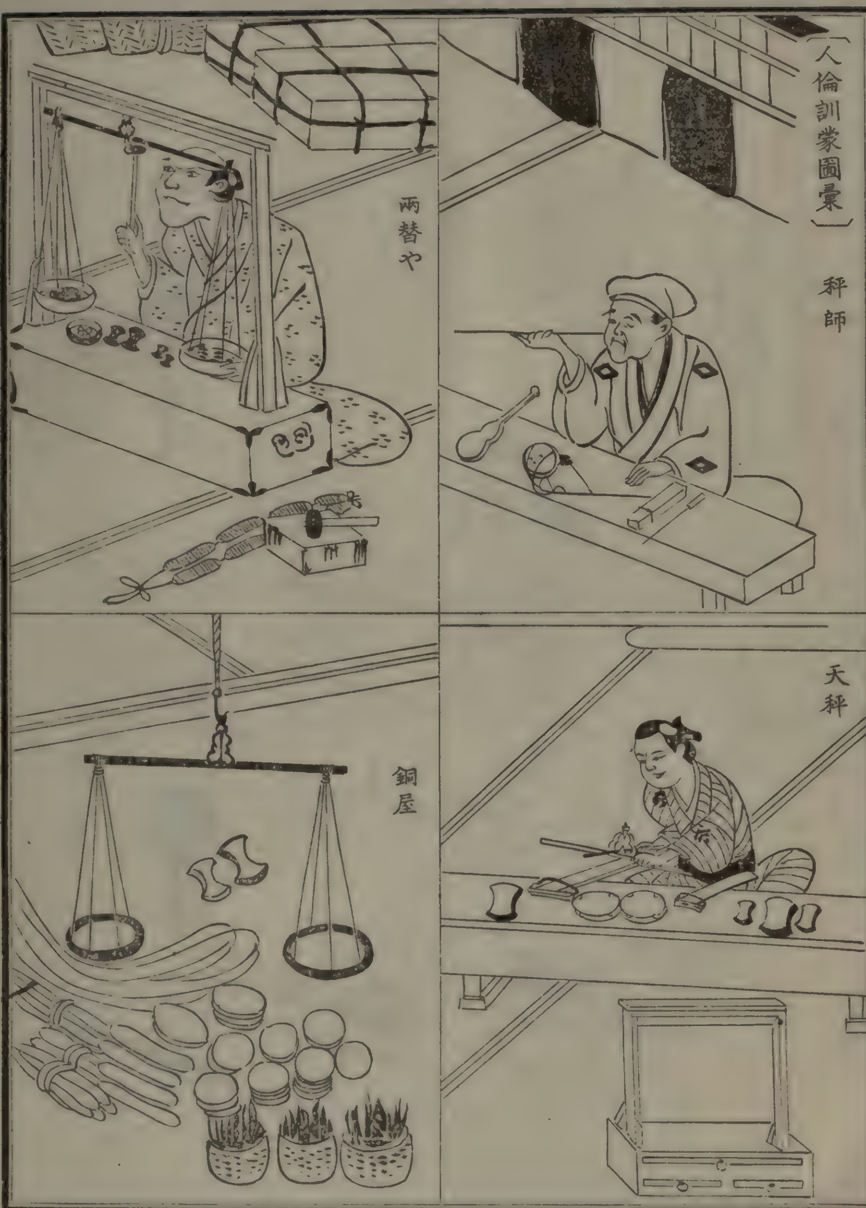


針口の圖



〔七十一番歌合〕




人倫訓蒙圖彙
兩替や
秤師
銅屋
天秤

〔延喜式 三十七典藥〕寮家儲物 稱一箇

〔延喜式 三十九内膳〕凡量年中所供雜菜、停斗用稱、其斗斛所准、本司與受物所司相共量定、

〔日本靈異記 下〕重斤取人物又寫法華經以現得善惡報緣第廿二
他田舍人蝦夷者、信濃國小縣郡跡目里人也、○中略寶龜四年癸丑夏四月下旬、蝦夷忽率而死、○中略死經七日而甦告言、○中略于時僧言校札之者、實如汝曰、敬寫三部法華大乘也、雖寫大乘而作重罪、所以者何、汝用斤二、出擧之時用於輕斤、徵納之日用於重斤、故召汝耳、○下略

〔台記〕久安六年九月廿六日己亥、禪閤○藤原忠實曰、攝政○忠實子忠通長於我不孝、我心深怨、而年來忍之無報、今媚諂暗可讓攝政之由數度、十許度云々非唯無許諾、亦有不義之報命、是以將絕父子之義、攝政者天子所授、我不得奪之、氏長者我所讓、無有勅宣、然則取長者官、授爾何有所怖憚矣、余○忠實次子賴長且諫且辭、禪閤不聽、即召仲行、賴賢、仲賢等、仰可取出長者官、渡庄劵、朱器臺盤權。衡。等之由、○中略戌時有成朝臣持來朱器等、授祿謝之、

〔宇治拾遺物語 二〕今はむかし、七條に薄うちあり、みたけまうでしけり、まゐりてかなくづれをゆいてみれば、まことに金の樣にてありけり、うれしく思て、件の金を取て、そでにつゝみて家にかへりぬ、おろしてみければ、きら〳〵としてまことの金なりければ、ふしぎの事なり、此金とれば、神なりぢしん雨ふりなどして、すこしもえとらざんなるに、これはさる事もなし、この後も此金をとりて、世中をすぐべしとうれしくて、は。か。り。に。か。け。てみれば、十八兩ぞ有ける、これをはくにうつに、七八千枚にうちつ、○下略

〔古今和歌六帖 五〕はかり
かけつれば千々のこがねもかずしりぬなぞ我戀のあふはかりなき
今こんといひしはかりにかけられて人のつらさの數はしりにき

〔後撰和歌集十四戀〕心ざしをばあはれと思へど、人めになんつゝむといひて侍ければ、

よみ人しらず

あふはかりなくてのみふる我こひを人めにかくることのわびしさ

〔新撰和歌六帖五〕はかり

民のとに秋をさめするいなはかりとしあるみ代をかけてしるらし

〔赤染衛門集二〕地ごくゑに、はかりに人をかけたるをみて、

つみはよにおもきものぞときゝしかどいとかはかりはおもはざりしを

〔源順集〕同年〇應和二年十二月、前朱雀院の姫宮の御もきのひのれうに、御屏風調せさせたまふ、人々

歌たてまつらせ玉ふ歌、青柳、

露をおもみたえぬはかりの青柳はいくめかけたるこがねなるらん

編修總裁　正三位　細川潤次郎

編修　正七位文學博士　佐藤誠實

副編修　松本愛重

助修　石井小太郎

助修　加藤才次郎

助修　山本信哉

助修　馬瀨長松

助修　和田信二郎

顧問　從四位文學博士　黑川眞賴

顧問　正五位　本居豐穎

顧問　從五位　木村正辭

顧問兼校正　井上賴囶

明治三十二年七月十二日印刷
明治三十二年七月十七日發行

神宮司廳

（白石製本所 製本）

昭和七年十二月一日印刷
昭和七年十二月五日發行

（普及版古事類苑 全六十冊）

發行者 後藤亮一

發行者 川俣馨一

東京市芝區金杉新濱町十二番地
印刷者 和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京 八九六〇番
電話小石川(85) 一一〇五四番
三二六九番

單式印刷株式會社印刷